グッラブ! 3

中川 健司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
グッラブ！　３

【Ｎコード】
Ｎ０１２９Ｊ

【作者名】
中川　健司

【あらすじ】
山の麓にある田舎町の神乃崎に住む、高校生の山中健斗（やまなかけんと）。ある日健斗の元に大森麗奈（おおもりれいな）が居候することになって、健斗のＧｏｏｄＬｏｖｅ（グッラブ）な生活が始まる……新たなる決意、そして早川との恋の結末……さらに、ついに訪れる麗奈との別れ……？グッラブ！シリーズの３巻目！
☆ＰＶアクセス数　１５万人を突破いたしました。ありがとうございますっ！☆

第9話　新たなる決意（前書き）

こんにちは。

ついに始まりましたグッラブ！3

みなさんの多大なる支持とご要望に感謝いたします

あらすじ

夏が終わり、新学期が始まる

サッカーをやりたい、でもその決意が未だに固まらない。そんな健斗の元に、サッカー部員から勧誘が……

だが本当にサッカーをやっていけるのか、健斗は不安に思っていた

そのときに健斗の元にある人物が訪れる……

「お前に……後を任せたい」

登場人物紹介

山中健斗……本編の主人公。意地っ張りで少し無愛想なとこがあるが、本当は優しい。中学のとき、“白魔導士（ホワイトマジシャン）”の異名がつく天才サッカープレイヤーだった。麗奈に告白されて、戸惑っているのだが……？

大森麗奈……本編のヒロイン。脳天気な猫型娘。美少女だが性格に問題あり……健斗のことが好き……なのだが……

真中ヒロ……健斗の幼なじみ。麗奈に惚れてたが、諦める。健斗と同じく、再びサッカーに対して熱が入る

早川結衣……健斗の意中の女の子。中学のときに恋した翔のことが忘れられずにいるが……

佐藤愛美……健斗の友達。活発な女の子。だが、実は女の子らしい部分も？

松本絢斗……神乃高で知らぬ人のいない、元サッカー部主将。健斗に再び接触を求める

小山明信（こやまあきのぶ）……Ｕ－１８のエーススストライカー。健斗とは面識がある、尚健斗のことを一役買っている

第9話　新たなる決意

「あっという間だったなぁ」

「え？」

まだ秋風とは言えない、温い風を浴びながら山中健斗は呟くようにそう言った。学校の昼休み、健斗は真中ヒロと共に独占している屋上で黄昏ていた

「夏休みだよ。あっという間に終わっちゃった」

「そう？」

「そう感じない？」

「いや、分かんねー……でもなんとなく分かるかも」

ヒロはそう言うと大きく欠伸をして、床にゴロンと寝転んだ。健斗はそんなヒロをじっと見る

夏休みは終わり、学校では新学期が始まっていた。神乃高は三期制で、夏休みが終わってから二学期が始まる。

一学期の成績は決していいものではなかった。特に健斗は数学が苦手なためか、テストでも赤点をとってしまったため親には見せられない成績がついてしまった。

だがヒロは違う。理系の頭を持ったヒロはきっと成績なんて余裕だ

ろう。だからこんな風に悠長にいられるのだ

「まぁ、楽しかったじゃん。初めての高校の夏」

「んー……楽しかったっていうより、大変だったな」

と健斗は苦笑してそう言った。確かに今年の夏のは色々なことがあった

七夕祭で麗奈から告白を受ける。そしてその後夏休みに入って、麗奈の帰省事件

だが、一番忘れてはいけないのが、松本事件だろう。あれは本当に大変だった

「言えてる。お前、今年の夏は結構忙しかったな」

とヒロが笑いながらそう言ってきた。健斗は顔をしかめてヒロを睨みつけるように見下ろした

「茶化すなよ。つーかさ、お前本当に辞めたの？」

「何が？」

「何がって……ハンド部だよ」

「あぁ～……うん。辞めたよ？夏休みが終わる直前に」

ヒロはハンド部を辞めた

健斗がその話を受けたのは、夏休み中のときである。麗奈の誕生日という行事があって、そのためにプレゼントを買いに隣町まで出かけていた

そしてそこで喫茶店でお茶をしているときに、ヒロはふとそう口にしたのである

結構流すような感じで言ってたので、あまり気にはしてなかったのだが、どうやら彼は本気だったらしい

「でも部活止めたら暇だよなぁ～……毎日毎日、何してんだろ」

「さぁ。俺はバイトとかあのバカの送り迎えとか……」

「バイトかぁ……俺もバイトやろっかなぁ」

「あ、何ならウチ来る？」

「バイト募集してんの？」

「……多分……してない。でも俺から頼んでみようか？」

健斗の頼みであれば店長なら真剣に取り合ってくれるだろう。だが、あまり期待しない方がいいように思えた

商店街の小洒落た小さな喫茶店、ＲＹＵだが、実際バイトを雇う必要性はないように思えた

店長でありマスターである竜平さん一人で、何でも出来てしまうからだ

オーダーを取ったり、掃除をしたり、コーヒーを入れたり、それを平行して出来るからだ

というのは、神乃崎という比較的人口の少ない田舎町だからというのが主な理由だろう

詰まるところ、普段は忙しいと言えるほど客の出入りは激しくないのである

だが、そんなゆったりとした風潮も神乃崎のいいところである

時に旅行者がＲＹＵに訪れたとき、落ち着いていて和むと評判だった

「ん～……いいよ。別に。まだやるかどうかも分かんねーし」

「そっか」

ヒロは呑気に大あくびをして、眠そうに目を擦った。健斗はそんなヒロを見ながらちょっとだけ笑う

「けど大変だな」

「何が？」

「ハンド部だよ。お前がいなくなったら大損害じゃないの」

「あぁ……まぁ、そーかもな」

まるで他人事のようにヒロは呟いた

「先輩たちも引退したし。これから大変だと思うぜ？ハンド部」

「引退……ね」

健斗はその言葉を聞いて、少しやるせない気持ちになった

「三年はもうとっくに引退してんだよな」

「夏にな。どこだってそうだろ？」

そう言ってから、ヒロはあっと声を上げて健斗を見て、にやりと口元に笑みを作った

「一つだけ。サッカー部は秋まで」

「選手権だろ？でも、今年は駄目だったんだよな？」

「んあぁ。運悪く、強豪とあたっちまったんだと」

「……松本絢斗がいても？」

健斗がそう言うとヒロは顔をしかめた。その名前をあまり聞くのはよろしくないらしい。健斗はすぐに口を噤んで、わざと目をそらして空を見上げた

松本絢斗……それは今からちょうど二カ月前に遡る。早川の好きだった、元サッカー部主将の松本絢斗と健斗は勝負をした

松本絢斗が問題を起こしたということでほぼ全校生徒が注目した松

本事件は……健斗やその周りにも深い爪痕を残した

けど健斗はそれを乗り越えることが出来た。それから、健斗にはある思いがめぐるようになっていた

「……なぁ、今年の選手権はどこが県代表になると思う？」

健斗はヒロにそう聞かれた。健斗はさぁっと素っ気なく答えを返した

「見当ぐらいつくんじゃねーの？」

「お前は？」

「お前に聞いてんだよ」

健斗はしばらく黙り込んだ。見当……それは違う。ほぼ間違いなく、そこが勝ち抜くだろうと健斗は考えていた

「……立川高校……」

健斗がそう呟くと、ヒロは納得するように大きく頷いた

「“小山”さんがいるもんな」

「それもあるけど……」

健斗は口を閉じて、ある人物を思い出していた

中学のときに……彼と出会ったあの日のことを……

第9話　新たなる決意　P．2

そのとき、屋上から校内に通じる扉が勢い良く開けられた。健斗はその開けられた音に驚き、我に返って扉の方を見た

ヒロも驚いて跳ね起きた。するとその扉には見慣れた顔がいて、少し憤然とした表情で真っ直ぐ健斗を見ていた

大森麗奈（おおもりれいな）は健斗の存在を確認すると、ゆっくりと歩み出した

「やっぱりここにいたんだ。もうっ！探したんだよ？」

長い髪をツインテールにまとめて、その挑発的な瞳で健斗に詰め寄る。普通に見れば、誰もが目を惹く美少女。だが健斗は怯むことなく大あくび

「電話すればいいじゃん」

「電話したって出ないでしょ」

「んなことねーよ。ちゃんと気づいたら出るし」

「鈍感な健斗くんは気づかないもん」

「お前が言うな」

健斗はその頭に水平空手チョップを食らわした。麗奈はその衝撃でカクンと首が揺れ、叩かれた部位を手で抑えて健斗を睨みつけた

だが健斗は気にすることなく、背筋を伸ばした

「で、何の用？」

健斗が聞くと、麗奈は表情を緩めた

「うん。ねぇ、ちょっといっしょに来て」

「何で？」

「いっしょにやってもらいたいことがあるから」

「却下。面倒くさい」

健斗がそう言うと麗奈はむっとして、さらに詰め寄った

「健斗くんの力が必要なの。お願いっ！手伝って！」

「何だよそれ」

健斗はため息を吐いた。何だかこいつに利用されるというのは気にくわないのだ。しかしいつまでも口論していては時間の無駄である。健斗は大人しく麗奈の言うことに従うことにした

「ヒロ。俺ちょっと行ってくるわ」

健斗がそう言うと、ヒロはニヤリと笑みを見せた。なんとなくヒロの意向が読み取れた

「おう。俺しばらくここで寝るから」

「起こしに来ないぞ」

「構わん」

ヒロはそう言うと再び床に伏せた。健斗もよくこの屋上を使って眠ることがある。だがコンクリートの上で寝るというのは中々大変で、起きたときは必ず首が痛くなる

それに慣れてしまえば何てことはないのだが

「じゃあ行くか」

健斗がそう言うと、麗奈は大きく頷いて笑顔を見せた

屋上を出て、階段を降り、一階まで行くと渡り廊下を渡って右を曲がり奥の通路へと進む。そこには図書室があって、この学校の生徒が度々利用している

健斗はその図書室の前の【図書室書庫】と明記された教室の中に入った。その中は埃臭く、幾つかのダンボール箱が並べられていた

「何？これ」

健斗が麗奈に聞くと、麗奈は照れくさそうに笑った

「今日先生に書庫の整理を頼まれてね」

「図書委員じゃないのに？」

「うん。ほら、現文の先生って吹奏楽の顧問だから」

なるほど、と健斗は納得した

「つまり、何とかここまでは片付いたんだけど、最後のこれらがどうにもならないってわけだな」

「うん。これら棚の上に置かなきゃいけないんだけど……すごく重くてさぁ」

「ふーん。そゆことね」

「手伝ってくれる？」

「後払い。プリンね」

健斗がそう言うと、麗奈は信じられないっと言いたそうな顔をした

「家族なんだからもっと頼れって言ったくせに？」

「言ったっけ？そんなこと」

「……もういいっ！」

どうやら本気で怒ってしまった麗奈は少し涙目でダンボール箱に手

をかける。健斗はそんな麗奈の仕草が可笑しくって笑った

「無理すんなよ」

「どうぞご心配なくっ！赤の他人さんっ！」

「冗談だよ。これら上に運べばいいんだな」

健斗はよっとかけ声を上げると、ダンボール箱を両手で持つ。確かに中々の重量で、女の子一人で持ち上げるのは難しいと思えた。

健斗は幾つかのダンボール箱をゆっくりと持ち上げて、棚の上に置いていった

麗奈はそんな健斗の後ろ姿を見つめる。結局何だかんだ言って、手伝ってくれる、そんな無愛想な仕草に優しさを感じてしまう

どうしてこう簡単に許してしまうのだろうか？

惚れた者の弱み……

でも何だか悔しいから、麗奈は健斗の足をちょっと蹴ってやった

するとだった。健斗は思いの他、バランスを崩してしまって、両手で持っていたダンボール箱を落としてしまった

「どわぁぁぁっ！」

「きゃあっ！」

そのダンボール箱はひっくり返って、本や何やらと散らばってしまった。健斗はそれを見てから麗奈をジロッと睨みつけた

「何なのお前？手伝って欲しいの？それとも邪魔したいの？」

「そ、そんなに怒んないでよ。ちょっとしたスキンシップじゃん」

麗奈は苦笑を浮かべて見たが、どうやら健斗の機嫌を損ねてしまったみたいで、健斗はふんっと鼻を鳴らすと散らばった本やら何やらを片付け始めた

麗奈も慌ててその散らばった本やら何やらを片し始める

するとだった

「あれ？」

健斗が何かを見て、不思議そうに声を上げた。麗奈は片付ける手を止めて健斗を見る

「どしたの？」

「これ……見てみろよ」

健斗から受け取った物を見てみると、それは古いアルバムだった。１９８０年第十一期生と書いてある

「三十年前のやつ？」

「正確には二十八年前のやつだけどな」

「これがどうかしたの？」

麗奈が訊ねると健斗は面白そうに笑い声を上げた

「二十八年前のって言えば、多分それ父さんたちのやつだぜ？」

「えっ？」

麗奈は驚いてもう一度アルバムを見る。そして計算してみると、確かに年が合う。ということは……

健斗は麗奈の近くに寄って、アルバムに手を添える

「見てみようぜ」

「うんっ！」

麗奈も興味津々の様子だった。古いアルバムを開くというのは何だかドキドキする。麗奈はゆっくりとアルバムを開いた

第9話　新たなる決意　P．2（後書き）

最初は普段の日常から描いて行こうと思います

何だか健斗が前より意地悪になってますね（笑）

第9話　新たなる決意　P．3

「うわっ！この時代男子みんな坊主頭だったんだ」

健斗は古びたアルバムに写っている男たちの写真を見てそういう。
どうやら制服は昔から変わっていないみたいだが、頭髪や身嗜みについてはかなり厳しかったらしい

今ではすっかりそんな面影など残ってはいない。時代の流れというのは恐ろしい

「女の子はお下げをしてるね。今時の子とは全然違う」

麗奈が静かにそう口にする

確かに、この時代に茶髪やら金髪やらにしてる方が何だか可笑しい

完全に浮いた存在になるよな、と健斗は想像して見てちょっと笑う

「どしたの？」

「いや、別に」

「言っておくけど、私のは地毛だからね。元々こういう髪の色なんだから」

と言いながら、栗色の柔らかい髪を示してくる。ふんわりと甘い香りが漂った

「誰も聞いてねぇよ」

と健斗が素っ気なく答えると、一つの写真が目に飛び込んできた

「……あっ！これ、父さんだ」

「え？」

健斗はそう言いながら指を指して示す。そこに写っている男の写真は、堀が深く、髪型はオールバックにして学ランの制服を全部開け、中にはＹシャツではなく、赤いシャツ。かなり厳つい表情をしているが、確かにその顔は若き父の顔だった

麗奈は驚いて口を開け、それを手で覆い隠した

「これお父さんっ？」

「父さん、昔はヤンキーだったらしいぜ。笑っちゃうな。これがあのオヤジだぜ？」

健斗は声を立てて笑った。今ではまったく感じ取ることの出来ない昔の父さんと今とのギャップが激し過ぎて、健斗は堪らなくなって腹を抱えて笑った。隣で麗奈も可笑しそうに笑う

「あ、ねぇ。これお母さんだよ」

笑いながら麗奈はまた一つの写真を指し示した。そこには何人かの友達と共に写る女の写真があって、確かにその中の一人には見覚えのある顔があった

紛れもなく母さんだった

「ふ～ん。これが母さんね」

「美人だね」

「そうか？」

「今もだけどね」

「あのなぁ、そうやってお世辞言うからああやって調子に乗るんだぞ」

健斗がそう言うと、麗奈は口をとがらせて言った

「別に本当のこと言ってるだけだもん」

「あっそう」

健斗が投げ捨てるように言う。麗奈も早川も、何故あんなおばさんを褒めるのか、まったく理解が出来ない

親の心、子知らず……少し違うな。この場合だと親の心、他人知らずになる

「……あ……」

健斗がそんなことを考えていると、麗奈がアルバムを捲る手を止めて小さく声を上げた。そんな麗奈を見て、健斗は不思議そうに顔を

覗き込む

「どした？」

しかし麗奈はまったく反応示さず、一つの写真を見つめる。健斗はその視線の先にある写真を見る。麗奈が今開いているページはクラス写真のようだ。一人一人の顔写真と、下には名前が乗っている

そして健斗は気づいた。そこにある写真。眼鏡をかけて、厳かな表情で写っている人。健斗はそれを以前、麗奈の部屋にある三人の家族写真で見たことがある

下には大森達也と書いてあった

「これお前の父さんじゃん」

「うん……顔知ってるの？」

「いや、下に名前書いてあるし……あと、前見してくれたじゃん。家族写真」

「そっか」

健斗はもう一度若き日の大森達也を見た。厳かな雰囲気は以前見た写真とまったく変わらなかった。そうか、そういえばかなり前に父さんが言っていた

父さんと達也は高校までいっしょだったけど、達也の方が東京の大学へと行ってしまったと……この神乃崎は達也の故郷でもあるのだ

健斗は先ほどのヤンキー親父と達也を比較してみる。この二人がもし、仲良さげにしていたらそれこそ異様な光景だったろう

明らかに不釣り合いなのが、時代を経てもよく分かる。健斗はまた可笑しくなって笑った

「お前の父さん、すっげーな。何か、如何にも優等生みたいって感じ」

しかし健斗がそう言っても、麗奈は笑わなかった。ただ達也の写真を見つめるだけ

健斗はそんな麗奈の横顔を見ながら、ふとあのことを思い出した

夏休みに入って、すぐ麗奈は遠縁の親戚の葬式に出るために一時東京に戻らなければならないときがあった

だが、麗奈はそれを拒んだ。理由は東京には帰りたくないという麗奈の強い拒否意識があったから

大好きな母親との思い出がいっぱい詰まった場所、だからこそそれを思い出してしまうのが果てしなく辛い

当時十歳かそこらの女の子の心に忌まわしい傷をつけてしまったのだ

だが、それだけではなく……これは健斗も知らないのだが、麗奈が自ら言う「嫌なこと」というのが多いに関係しているように思える

その「嫌なこと」とは何か。想像してみるだけ無駄なのだが、恐らく今になっても、それが麗奈の心に闇を作り出す原因となっている

のだ

やはり麗奈は自分の父親のことをあまり良く思っていないのだろうか。と健斗は考えた

だとしたら、やっぱり悲しい

誰よりも家族の暖かさを知っている。誰よりも家族の大切さを知っている

そんな麗奈がたった一人の家族を……その家族の大切さを見失っている。そんな気がした

だから健斗は言った。自分だって家族だと。自分だけじゃない。父さんや母さん、ゴンタ。いっしょに住んでいる家族……みんな家族だと

そしてお前を心配してくれている仲間たちも、みんなお前の大切な存在なんだと

お前が……大切なんだ

心配なんだ

だから、お前の笑顔を俺は守りたい

健斗はそのときそう思った。その気持ちは今でも色褪せることなく……胸の中に生きている

「麗奈」

「ん？」

「大丈夫か？」

健斗が優しげな口調で訊ねた。すると麗奈はきょとんと目を丸くしたあと、可笑しそうに笑った

「大丈夫。この間のことで、私分かったんだから。別に何とも思ってないよ。ただ、お父さん今も昔も変わんないなぁって思ってただけ」

「そっか……」

「そうだよ。もう、そんな辛気臭い顔しないでよ」

麗奈が笑いながらアルバムを閉じると同時に、学校に昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。正確には予鈴だが、健斗と麗奈はその予鈴により一気に現実に引き戻された

「やっべっ！次体育じゃんっ！早く片付けなきゃ！」

健斗は一気に散らばった本やら何やらをかき集め段ボール箱にしまう。そして棚の上に置くと、息を吐いた

「早く行こうぜ」

健斗がそう言って、部屋を後にしようとしたときだった。麗奈が健斗の服を掴んだ。健斗はすぐに後ろを振り向いた

「何だよ？」

健斗が苛ただしく訊ねる。すると麗奈は少し伏し目がちな目をゆっくりと上げた

「ねぇ。一つ聞いていい？」

「え？」

「健斗くんの中で、私ってただの思い出になるのかなぁ？」

「は？」

意味が分からなかった。こいつは突然訳の分からないことを言い出す

「自転車に乗って、毎日いっしょに学校に行くことも。いっしょに暮らしていることも。こうやって笑ってアルバムを眺めたのも……全部ただの思い出になるのかな？」

「……ちょっ……待てよ。全然意味分かんない。急に何？」

健斗は本当に困ったような顔でそう言った。しかし麗奈の瞳は揺らぐことなく、健斗の返答を待っているようだった

すべてが思い出になる

この温もりも

その存在も

すべてが　ただの　思い出となる

急に麗奈がにこっと微笑んだ

「ごめん。やっぱ何でもない」

「え？」

麗奈は服を離し、健斗を通り越して部屋を出る。そして振り返ると、怪訝そうな顔を浮かべた

「こら～、何やってんの？鍵かけちゃうよ」

「え……あ、あぁ……」

健斗は少し慌てて部屋を出た。麗奈はドアを閉めて鍵をしっかりと閉める。それから健斗の方を向き直して、もう一度ゆっくりと笑った

「私、鍵返してくるから。先教室に戻っててよ」

「あ……うん。分かった」

「ほら、分かったんなら。ダッシュダッシュ。体育に遅れるよ」

麗奈はにこっと微笑んで健斗から離れて行き、職員室へと向かうため廊下を走っていった

健斗はその後ろ姿を見つめながら、しばらく動けないでいた

最近の麗奈……何だか変だと思う

この感じ……前もどこかで感じたことがあった

分かりかけていたのに、また急に分からなくなる

近づいていたのに、あいつはこうやってまた俺を置いていく

「……何なんだよ……」

健斗は苛ただしい口調でそう呟いた

しばらくすると、本鈴のチャイムが鳴った

第9話　新たなる決意　P．4

「健斗～。帰ろうぜ」

午後の授業を終え、健斗は帰る支度をしていると、ヒロが笑いながら健斗にそう言ってきた。健斗はきょとんとしてヒロを見る。そんな健斗の反応を見て、ヒロは可笑しそうに笑って見せた

「何、忘れた？俺も帰宅部だぜ？」

「あ……そっか」

健斗は苦笑した。今まではずっとヒロは部活があったため、こんな風に声をかけられたことがなかった。慣れない変化に健斗は戸惑ってしまった

「なーに？あんた本当に辞めたんだぁ」

健斗がそんな風に思っているところに、佐藤愛美（さとうまなみ）が呆れ顔で健斗とヒロのところへ歩み寄ってきた。佐藤愛美、通称マナと呼ばれている彼女は実に男勝りで、大きい声では言えないがヒロと良いコンビだと健斗は思っていた

「うるせぇな、ゴリラ女。早く部活行けよ」

「誰がゴリラ女よっ！このインテリエロメガネッ！」

ドスッと低いうねりのような音を立てて、ヒロの腹に佐藤のキック

が的中した。ヒロは悲鳴を上げて、その場にうずくまった

ほら……やっぱり良いコンビだ……

「てっ……めぇ……」

「ヒロ。佐藤には勝てないぞ」

健斗はヒロを宥めるように背中を叩いた。ヒロは悔しそうに唸るが、佐藤は物ともせずヒロを見下す

「残念だけど、今日あたし部活オフなんだよねぇ」

「弓道部？定休だっけ？」

「ううん。今日は弓具の点検の日なの」

なるほど、と健斗は妙に納得した。古い弓矢の道具類の点検は欠かせないものだろう

「じゃあ、三人でどっか行く？」

めったにこうして休みが被らないわけだから、健斗は思いつきでそう言ってみた。ヒロが苦悶な表情を浮かべるのは無視をしよう

「それいいね。よし、行こうっ！」

「あの、私も行っていい？」

突然違う声が聞こえた。その声に健斗は胸を高鳴らせて、ゆっくり

と振り向いた

そこにいたのは、早川結衣（はやかわゆい）だ。短めの長さ、綺麗な艶を光らす黒い髪。整った小顔に、肌の肌理。健斗の意中の女の子がそこにいた

「早川」

「ダメ？」

「いや、もちろんいいけど……早川部活は？」

健斗がそう聞いてから、すぐにパッと思い出した。今日はテニス部は定休の日だった

「そっか。今日定休だもんね」

健斗の考えを読み取るように佐藤がそう口にした。早川はにこっと微笑みながらゆっくりと頷いた

「やったぁ。じゃあ結衣もいっしょに行こう！」

「うんっ！あ、あと麗奈ちゃんも。今日麗奈ちゃんも部活休みだって言ってたから」

それはまったく聞いてなかった、と健斗は心の中で呟いた。麗奈は吹奏楽部に所属している。しかし今日は定休日ではないはずだが……

「へぇ～！みんなの休みが被るなんて珍しいね。じゃあみんなで行こうよ」

「うんっ」

「でも……その麗奈は？」

健斗が訪ねると早川は少し考えるような素振りを見せた

「えっと……多分、ロッカーじゃない？教科書とか持ってたから」

この神乃高にはそれぞれ各自のロッカーが存在する。二、三年のロッカーは教室を出てすぐ目の前にあるのだが、一年のロッカーだけ教室から少し離れたとこにある。健斗は軽くため息を吐いた

「そっか。じゃあ俺呼んでくるから。先、行ってて」

健斗は自らそう言うと、教室を後にした。残されたヒロ、早川、佐藤は歩いていく健斗の後ろ姿を見つめる

「じゃあ行こうか」

早川が二人にそう促すと、佐藤は大きく頷いた

「うんっ！って、あんたはいつまで苦しんでるのよっ！」

佐藤の下でうずくまっているヒロの頭をパチンと気持ちのいい音を立てて叩いた

麗奈は自分のロッカーの前でしゃがみこんでいた。手には手紙を持って……

――もしお前がいいのなら、また父さんといっしょに暮らさないか？

この手紙の文面を読んで、麗奈はため息をつく。麗奈の誕生日の日、父、達也から贈られてきた手紙。それを麗奈は持ち歩くようにしていた

達也からの手紙、というのが嬉しいという気持ちもあるが、理由はそこではない。健斗に見られたくないからだ

恐らく健斗の父さんと母さんには達也の方から話を聞くのだろう。と麗奈は考えていた

だが、健斗にはまだ話したくはなかった。今はまだ話せない……自分の気持ちに整理がついてないから

達也ともう一度いっしょに暮らす。それは麗奈にとって本当に思いがけない提案で、だからこそ嬉しかった。あの達也が自分のことを気にかけてくれているのだから……

だから嬉しいし、達也ともう一度いっしょに暮らしたいという娘の気持ちがあった

それに反発しているのは、我が儘でどうしょうもない女の子の気持ち

この町を離れたくない

大好きな友達や、地域の人、そしてもう一つの家族がこの町にはいる

幾度か引っ越しを繰り返し、色々な地域を転々とした

だが、これほどまでに居心地の良い町は初めてだった

だから余計に思い入れが強くなる。ずっと、いや、せめて高校の三年間の間だけでもこの町にいたいという気持ちがある

そんなんじゃないんだろうなぁ――と麗奈は軽く笑った

もう一つの気持ち、それは恋する女の子の気持ち

目を閉じれば思い浮かぶ、あの人の顔

何度も自分を助けてくれた。何度も自分を支えてくれた

大切で、大切で、純粋に好きという気持ちが強くて、どんな形でもいいから、ずっと傍にいたいと思える人がこの町にはいる

その人と別れたくない

声を笑顔を吐息を……その人の一番近くで聞いていたい、見ていたい、感じていたい……

だから、本当は話すべきなのだ。この手紙のことを……それこそ、この間の帰省事件の二の舞になってしまう

もう二度と、家族に対して想いを隠すようなことはしない。そう誓ったではないか――

「……」

ふと肩に誰かが触れた感覚を感じた。麗奈は驚いてパッと振り向いた。そこには健斗がいて、不思議そうな顔を浮かべていた

「何してんだ？」

「え……」

「何度も名前呼んだんだぞ。でも全然気づかないから……」

不安気な顔へと変わる。麗奈はそんな健斗に申し訳なく思い、わざと笑顔を作った

「あ……何でもないよ。ちょっと考え事してただけ」

「考え事？」

「うん」

「……その読んでたもんと関係あんの？」

健斗が麗奈が手に持ってる物を指差してそう言った。麗奈は手紙を後ろに回して隠す

「これは――」

「これは？」

「これは……その……ラブレター的なやつかな？」

と言って、麗奈は笑った。健斗はそれを聞くと表情を緩めて呆れたような顔を浮かべた

「ラブレター？」

「そう」

「ふ～ん……人の声がまったく届かなくなるほど見入るってことは……相当な人からのラブレターなんだろーな」

健斗が皮肉を込めてそう言うので麗奈はすぐに首を横に振った

「そんなんじゃないよ。もしかして嫉妬してる？」

「嫉妬？誰が？」

「健斗くんが」

「誰に？」

「もちろん私♪」

「冗談はほどほどにしとけよ」

健斗がニヤリと笑みを浮かべた。麗奈はむっと頬を膨らませた

「もうっ！素直じゃないんだから」

「俺は充分素直だよ」

「あっそうですかっ」

何で私はこんな人を好きになってしまったんだろうかっ！

「で、何か用だった？」

話を変えるように麗奈がそう言うと、健斗はあぁっと思い出すように言った

「今日部活休みなんだって？」

「そーだよ。何で？」

「これからいつもの五人でどこか行こう的な話になってんだけど行く？」

麗奈はその話を聞いて、すぐに行きたい衝動に駆られた。だが、それが胸の奥を締め付けるのは何故だろうか……

「どうすんだよ」

低い声で返答を求めてくる。麗奈は小さく頷くと、健斗は肩の荷が降ろすようにため息をついた

「じゃ、行くぞ。みんなを待たせてるから」

健斗はそう言うと踵を返して、みんなの待っている外へと向かおうとした。だが、途中で麗奈が近くにいないことに気がつき、後ろを振り返る。すると麗奈はその場をまったく動いてない

健斗は顔をしかめて、麗奈の元に歩み寄る

「お前何してんだよ。みんなを待たせてるって言ってる――」

健斗は途中で言葉を止めた。麗奈の瞳に光る雫があって、それが頬を伝っているから。肩が微かに震えている

「れい……な？」

泣いている

小さな涙が確かに目から流れていた

「おい……何だよ。どうした？」

泣いている麗奈の肩にそっと手を添えた。麗奈は伝う涙を拭った。弱々しい瞳で健斗を見る

「何か……あったのか？」

優しげな口調でそう問うてみる。しばらく無言の調子が続いた。そして麗奈は何かを言おうとして、また口を閉じた

「何だよ」

「……なの……」

「え？」

するとだった

突然麗奈が健斗の足を蹴った。あまりの突然のことに、そして痛みに健斗は驚きながら飛び退いた

「いってぇっ！」

麗奈は健斗を蹴ってから、濡れた涙を拭った

「ふんっだっ！健斗くんに最近言われっ放しだから、そのお返しよっ！」

「てっめぇっ！」

「女の子の涙に騙されるようじゃ、健斗くんはまだまだだねぇ♪」

「このやろうっ！」

「キャアッ！」

健斗が追いかけると麗奈は疾風のごとく逃げ去っていく。意外と麗奈は逃げ足だけは早いのだ

第9話　新たなる決意　P．４（後書き）

……麗奈が流した涙のわけ

あれは果たしてどう意味だったのでしょうか……

皆さんには分かりますか？

第9話　新たなる決意　P．5（前書き）

更新めっちゃ遅くなりました！

第9話　新たなる決意　P．5

「遅いっ！」

第一声がそれだった。健斗と麗奈は走って校門で待っている三人の元へ行った。するとヒロが健斗たちの姿を見るなりにそう言ってきたのだ。何だか少し機嫌が悪いようだった

「わ、ワリィワリィ。そんな怒んなって」

健斗が苦笑しながらそう言ってもヒロは表情を緩ますことはなかった。怒りの矛の先は健斗たちに向けられたものではない。恐らく佐藤に向けられているのだろう

「……で、結局どこ行く？」

健斗が話を変えるように言うと、佐藤が大きく頷いた

「それなんだけどね。三人で協議した結果……健斗のバイト先に行くことにしましたぁっ！」

「……は？」

バイト先……ってことは……健斗の脳内でピースが当てはまれていく

「えっ？Ｒｙｕに行くのっ？」

「だって、何だかんだ言ってあそこすごっく楽しかったしさ♪」

佐藤とヒロは一度麗奈の誕生日の日にＲｙｕに来たことがある。その日確かに相当楽しい日になったし、佐藤に至ってはあの店の独特の雰囲気にはまっているようだった

「いいねっ！私もＲｙｕ行きたいっ！竜平さんに最近会ってないしぃ♪」

麗奈も気乗りでそう言ってきた。健斗は小さくため息を吐いて、後頭部を掻いた

「……まぁ、いいけどさ……」

「でしょっ！じゃあはいっ。決定っ！」

佐藤が手を叩いてそう言うことで、その提案は完全に決まった

「どーでもいいけど……何でお前そんなテンション高いわけ？」

ヒロが細めた目つきでそう言うと、佐藤は悪戯気に笑った

健斗は少し複雑な気分だった。すんなり了承はしてしまったけど、自分のバイト先に友達が連れて行くなんて少し気恥ずかしい気持ちがある。確かにあの日は麗奈の誕生日だったからそんなに気にはならなかったが……

いや……それよりも以前のことを考えれば、こんな流れなんて起こり得なかっただろう

そう考えると、一歩踏み出した自分がとてつもなく大きな存在に思

えた

その一歩は小さいが、確かに大きな大きな一歩だったのだ

言っていることが矛盾してるな、と健斗は苦笑した

「俺、チャリ取ってくるわ」

健斗はそう言うと、鍵を持って自転車置き場へと向かった

三台の自転車が並んで道なりを走っていた。ヒロと健斗と佐藤の自転車である。麗奈は元々自転車に乗れないし、早川は……

「恥ずかしいんだけど……最近ちょっと痩せなきゃって思ってさぁ。学校まで歩くようにしてるんだ」

佐藤の後ろに乗りながら、早川は照れ臭そうにそう言った。恥じらいを持って話す早川は本当に可愛い……

「え～っ？結衣ちゃん、細いから大丈夫だよ」

麗奈が意外そうに叫んでそう言った

「そーかなぁ？でもこの間体重計ってみてびっくりしちゃったよ。やっぱこの間のプリンがいけなかったかなぁ……」

「早川は甘党だもんな」

「健斗くんもでしょ？」

早川にそう言われて、健斗は苦笑いを浮かべた。確かに健斗自身も無粋の甘党主義者である

談笑しながら、しばらくすると神乃崎商店街が姿を見せてきた。戦前の頃とその風景を変えることのない和やかなその商店街はいつ来ても賑やかである

商店街の中を歩いていく。すると、少し小洒落た喫茶店がある。カフェレストランＲｙｕこそが健斗のバイト先である

健斗たちは自転車を止める、そのドアを開けた。中に入ると、ベルの音がしてそれは客が店の中に入ってきたのを知らせるものだった

「おや？」

健斗たちが入ると、低い大人しげの声が不思議に呟いた。カウンターに、この店のマスターの竜平（りゅうへい）さんが新聞を手に取りながらこちらの様子を窺った

「ども。こんにちはっす」

健斗が挨拶すると、竜平はにこっと相変わらずの笑顔を浮かべた

「こんにちは♪お久しぶりです」

麗奈もいつものように元気な態度で竜平に挨拶をした

「やぁ。平日に来るなんて珍しいこともあるもんだ」

そう言って竜平は少し不思議そうな顔をした

「今日は非番だろ？」

そう言いながら竜平は健斗の後ろに並んで立っている高校生四人を見て、表情を緩めた

「この前来た子たちだな。」

「はい。連れて来ちゃいました」

健斗が照れくさそうに笑った。竜平はカウンターから立って健斗たちに近づいてきた。ヒロと佐藤は一度会ったことがあるから、軽く会釈をしただけだったが、早川は初対面のためか表情が強張っていた。どうやら緊張しているみたいだ。

「こんにちは。確かヒロくんとマナちゃんだったね？また来てくれて嬉しいよ。」

と言って笑って自慢の髭を撫でるような仕草を見せた。すると佐藤はにっこりと微笑んでまた会釈をする

「はい♪この前はごちそう様でした。」

「いやいや。楽しんでもらえた分、こっちも嬉しいさ。そうか……もう夏休みが終わったんだな。えっと……こちらのお嬢さんは……」

竜平は早川の方を見てにっこりと微笑んだ。早川は目が合い、びっくりするように「はいっ！」とまるで先生に授業中突然指されたような声を上げたので、みんなが笑った。

竜平は穏やかな表情でにっこりと微笑みかけた。

「こんにちは。ここの主人の大林竜平（おおばやしりゅうへい）です。」

「は、初めまして……えっと早川結衣（はやかわゆい）です。」

「早川さん……あっ！君が早川さんだね。」

竜平は大きく納得するように頷いた。早川は何故自分のことを知っているのか理解出来ないようでいたが、それをいち早く察した健斗と麗奈が顔を少し赤らめて言った。

「て、店長っ……」

「竜平さん、ダメですよ。」

早川は不思議そうに健斗と麗奈を交互に見る。ヒロはおそらく察したのか可笑しそうに後ろで笑っていたが、佐藤も早川と同じで事情が飲み込めず不思議そうな顔をしていた。

竜平には早川のことをよく話すことがあった。特に健斗は麗奈の告白を受けたことを話したときにぶっちゃけてしまった。おそらく麗奈も同じような話をしたのかもしれない。

それを分かってて、竜平はちょっとした悪戯心でそういう反応を示したのだろう。

すると竜平は小さく声を立てて笑ってゆっくりと頭を下げた。

「健斗の友達なら歓迎だよ。席についてくれ。今お茶を出すから」

竜平はそう言うと、再びカウンターの方へと戻った。健斗は緊張している早川を気遣いながら、四人用席へと案内する。四人用でも五人ならちょうどよく席につけるようになっている

どうやら早川は未だに挙動不審で辺りをやたらキョロキョロと見回している。優雅な環境になれていないからだろう。

「すっごいお洒落……私、こういうお店初めてだよ。」

「気に入らなかった?」

健斗が苦笑いを浮かべてそう聞くと早川は笑顔を浮かべて首を横に振った。

「ううん、その逆。いい雰囲気で、素敵♪私こういうの憧れてたの。」

早川がうっとりした感じでそう言ってきた。どうやらこの店の雰囲気に慣れてきたようだった。健斗は小さく笑って見せた。この店に初めて来た人は大抵同じことを言う。それを聞く度健斗はまるで自分のことのように嬉しく感じる

「小さいときから、馴染みの店なんだ。母さんによく連れて来られてさ」

「へぇ～」

「ここのミルクティー、スッゴく美味しいんだよ？」

麗奈が早川にそう言った。麗奈はここのミルクティーを本当に気に入っている。もう何度もこの店を訪れているこいつだが、いつも決まってミルクティーを注文するのだ

「あとナポリタンはマジ最高だから」

竜平のナポリタンは健斗の大好物なのだ

「麗奈ちゃんはいつものやつでいいんだよな。他はどうする？」

竜平がカウンターでカップを並べながら聞いてきた。麗奈はミルクティーで、早川もぜひそれを飲んでみたいと言った

健斗はカフェラテにした。ヒロと佐藤はアイスレモンティーを注文した

しばらくすると、それらが竜平の手によって運ばれてきた。健斗が運ぼうとしたのだが、今日のお前はスタッフじゃなく客として来てるんだから座ってろ、だなんて言われた

「わぁ～♪いい匂い～」

早川がミルクティーを見ながらそう言った。竜平はそれを聞いて嬉しそうに笑った

「ありがとう。本当は色々してあげたいところだけど……すまない

が今から仕込みの時間なんだ。健斗、私は裏方にいるから何かあったら呼んでくれ」

竜平はそう言うと、三人に笑顔を見せて、裏の方へと歩いていった

「いい人だね。竜平さん」

早川がミルクティーを飲みながら健斗にそう言った

「まだ会ったばかりだけど、すごく分かる」

早川がそう言ってくれるのが嬉しく、健斗は笑みを作った

「どんな人なの？竜平さんって」

早川にそう聞かれて健斗は返答に戸惑った。どんな人か……

「どんな人……」

健斗は少し思案してみることにした。竜平さんという人間を語る言葉はたくさんある。だが多すぎて逆に混乱してしまう

するとだった

「竜平さんは……健斗くんが今飲んでる、カフェラテみたいな人だよ」

麗奈が横からそう口を挟んだ

麗奈の言葉を聞いて、健斗は不思議に思いカップを口から離した。

早川も不思議に思ったみたいで、麗奈のことを目を丸くして見た

「カフェラテ？」

「何だよ、それ」

健斗がおかしそうに言うと麗奈はきょとんとした様子で「え、だってそうじゃない？」と聞いてきた

「何だか竜平さんって、カフェラテみたいじゃない。ちょっぴり苦くて、でもほのかな甘味があって、柔らかい味がして……」

それから麗奈はクスッと小さく笑った

「それに白いお髭も、カフェラテの白い泡みたいだし」

健斗と早川は一旦目を見合わせた。それからお互いに可笑しく感じて、吹き出して笑った。麗奈は何で笑ってるのが分からないようで、笑ってる二人を不思議そうに見つめた

健斗は笑いながら麗奈を見た

「アッハハハハハハ。お前、本当に変なやつだな。何かそれが再認識出来た」

「えぇっ？」

「カフェラテみたいって……まぁ、でもお前の言うことは一理あるよ」

そう、麗奈の言うことは一理ある。大林竜平はカフェラテのように、少し苦味を含めたほのかな甘味があり、柔らかな舌触りがある。そんな人なのだ

だから健斗も救われた。そんな人だったから……

翔を自分のせいで亡くしたと自分を自分で追い詰めていた時期があった、そんなとき健斗はこのＲｙｕを訪れた

竜平は健斗から話を聞き出そうともせず、カウンター席に一人ポツンと座る健斗に出してくれたのは、このカフェラテだった

「飲みなさい。少しは気が晴れるかもしれない」

健斗は今も忘れていない。あのときの優しい口調。何も語ることのない竜平の言葉。それから閉店になるまで、目の前に出されたカフェラテがすっかり出された頃に竜平は健斗の横に座った

「話は聞いたよ」

竜平はすべてを知っていた。健斗が語らず共、健斗の身に何が起きたのか……恐らく、交流の深い健斗の母から話を聞いたのだ

「友達のことは非常に残念だった」

健斗は何も答えず、下を俯いたままだった。竜平は小さくため息をついた

「お前は自分のせいだと責めるだろうが……それは違うよ。あれは事故だったんだ。ただ不幸な事故が――」

「止めてください」

低く唸るような声で健斗は静かにそう言った。早川も同じようなことを言った

健斗のせいじゃないって……

あの言葉が、そして必死に叫ぶ早川の様子が今でも脳裏に浮かぶ。だが、今健斗が欲しいのはそんな慰めの言葉じゃない

逆だ

自分をもっと汚して欲しい。自分の心を崩壊させて欲しい

お前のせいだ

お前が悪い

お前が死ねば良かったのに

お前が……

そう言って誰か自分の心を壊して欲しい

「……サッカーを辞めるというのは……本当か？」

竜平はやけに低めの声で健斗にそう聞いた。健斗は答えず無言で返した

「友達を亡くした。それは辛い。だが、それで全て投げやりにするのか？自分のことも……」

「投げやりにするわけじゃありません」

「いいや。それは投げやりって言うんだ」

健斗はこのとき頭に血が逆流するような気持ちになった。そして、酷く怒りを覚えた。だが、それはすぐにまるで残り火のように消えた

健斗は立ち上がった

「帰ります。長い時間お邪魔しました」

そう言って、健斗はドアの方へと歩きだした。竜平は止めようともせず、歩き去っていく健斗の後ろ姿を見つめていた

それから健斗は退部届を出して、サッカー部を辞めた。そしてしばらくしたある日、突然健斗の家に竜平から電話がかかってきた

呼び出しを食らって、何のつもりだろうと思いながら、健斗は再びＲｙｕを訪れた

すると竜平は待ってましたと言わんばかりの笑顔になった。そしてこう言った

「うちでバイトしないか？」

「えっ？」

突然の提案に健斗は驚きを隠せず唖然とした。それから小さく苦笑いを浮かべた

「いや……俺まだ中学生ですよ？」

「そんなの構わないよ。バイトと言っても、最初は店の手伝いみたいなもんでいい。もちろん、給料は出すけどな」

「でも……」

「遊び感覚でいいんだ。そうだな……最初は時給５００円ってところから。やってみないか？」

今思えば、どうして竜平が健斗にそんなことを言ってきたのか、少しわかる気がした

竜平は健斗に居場所を与えてくれたのだ。ただの居場所じゃない。心の居場所だ

深く傷ついた心をここに持ってくればいい

実際、ここには色々な人がやってくる。そう言った人たちの色々な顔を見ることができる

すなわち、色々な感情と触れ合うことができるのだ

それらが健斗の心を徐々に癒やしてくれたのだ

それに気づくことが出来たのは、自分にその感覚を自覚しはじめたときだった

だから健斗にとって大林竜平は感謝してもしきれない恩人なのだ

「本当……カフェラテみたいな人なんだよな」

健斗は一人でに呟くと早川と麗奈が不思議そうな顔を浮かべた

「な、何でもない」

ちょっぴり照れながらカップを口に運んだ

昔と変わることのない、ほのかな甘味と苦さが口の中に広がった

第9話　新たなる決意　P．6

この店に入ってしばらく経って、会話が弾んでいるところだった
早川がふと聞いてきた
「そういえばヒロくん、部活辞めたって本当？」
そう聞かれたヒロは早川を見て、口元でそっと笑みを作った
「あれ？知らなかった？」
「うん……本当なんだ」
早川が少し残念そうに呟いた。そんな早川の様子を見ると、健斗は何だか妙に胸が切なくなった。ヒロは早川がそんな風に言ってくるのが可笑しく思えたみたいで、軽く笑った
「まぁな。ハンドは何つーかさ、俺には合わなかったみたいなんだよね」
「そうなの？あんなに頑張ってたから、てっきりハンドにはまってるのかなって思った」
早川の言葉にヒロは返す言葉が見つからないのか、伏し目がちで黙り込んだ。健斗は何となく、ヒロが何故ハンド部を辞めたのか分かっていた。分かっていたが、それをあえて口にしようとは思わなかった

思わなかったというより、出来なかったのだ。ヒロを悩ます原因は、そう、自分にあるように思えたからだ

「そこそこな。そこそこ楽しかったよ。うん。まぁでも、三年間続けようとは思えねーな」

「ふーん。そっかぁ。これからハンド部大変だろうね。長浜くんが言ってたよ。ヒロくんが辞めたことで戦力が一気に落ちたって」

「マジ？俺ってやっぱそんなに頼りにされてたんだぁ。なぁ聞いた？俺頼りにされてたんだぜ？」

ヒロが浮かれた気分で健斗に言ってくる。健斗は半ば呆れながらため息をついた。こいつ、本当は何も考えずに辞めたんじゃないだろうか？

「他の部活には入らないの？」

さっきまで雰囲気に圧倒されていた佐藤がヒロにそう言った。ヒロは佐藤を見て首を傾げた

「他の部活？」

「だって、他にも色々部活あるじゃない？」

「ん～……今更別のとこ入るってのもなぁ。つーかやりたいこととかないし」

「でもさ。やっぱりもったいないよ。まだ一年だよ？これが二年とかなら分かるけどさぁ。まだまだやれることいっぱいあんじゃん」

今日の佐藤はやけに真剣に話してきた。空気がだんだんと深刻さを増してきた。さっきまで調子に乗っていたヒロも目つきが真剣になった

「そうだよね。本当にやりたいこととか何もないの？」

早川も念を押すようにもう一度尋ねてみた。ヒロはうーんと考える素振りを見せている

「バイトとかは？」

早川のその提案にヒロは苦笑を浮かべた

「うん。それも考えてみたけどさ、バイトはちょっと……だるそうだし」

「そっかぁ。まぁ、この辺バイト出来る場所なんて限られてるもんね」

早川の言う通りである。この辺にある店は言うなれば、ほとんどが自営業なのだ。自営のため、バイトを雇う必要性がほとんどないし、おそらくそんな余裕もないだろう

元々都会と違ってここは田舎なのだから、人の出入りも少ない。つまり、猫の手を借りたいほど忙しいと言えるほど実際はそんなに忙しいことがないのである

ここＲｙｕもそうである。実際今、平日の夕方過ぎであるが客としているのは健斗たちだけである。これが健斗は平日にあまり入らな

い理由の一つでもあるし、閉店時間が早いというのもそのためだ

だが利点も当然ある。人の出入りが少ないということは忙しいということがない。つまり今のようにゆったりとした雰囲気を楽しむことが出来る。市内の喫茶店と違う点がこういうとこである

話を戻すと、だからそんなにバイトを募集しているとこはないということだ。あったとしても日雇いとかそんなものだろう。もしバイトをしたいのなら市内に出るか、隣町に行くしかないだろう。だがここから日に本数がほとんどない電車を使って行かなければならないため、それは大変なことになる

健斗はそんな中を黙って聞いていた。すると真剣な目つきでヒロが健斗の方を見てきて、目が合った。その瞳の奥にはある迷いが潜んでいるように思えた

言い出そうか迷っている。そんな意志が見える。しかしヒロはすぐに目をそらして大きく欠伸をした

「俺はいいんだよ。一年っていったって気がつけばすぐに受験期になるって」

「じゃあずっと勉強するつもり？」

「そういうわけじゃないよ。そりゃ遊んだり、彼女作ってデートしたり……とにかく何かしら部活に入ったりバイトをしたりしなきゃ、良い高校生活を送れないってわけでもないってこと」

「あんたに彼女が出来るかどうか疑問だけどね」

「うるせぇ」

ヒロが吐き捨てるようにそう呟いた。しかし佐藤は未だに納得がいかないみたいで、さらにヒロに詰め寄った

「本当はやりたいことあるんでしょ？」

「ないよ」

「嘘つき。だってサッカーがあるじゃない」

佐藤の言葉にヒロだけではなく健斗も反応してしまった。その言葉を聞いたとき健斗の心臓がトクンと一つ高鳴ったのが分かった

「サッカーがあるじゃない」

「お前ねぇ。サッカーは辞めたの。もう二年前の話だぜ？今や素人同然」

「そんなことないでしょ。だって健斗すごかったじゃん。松本さんとの勝負のとき」

佐藤がそういうと、ヒロはプッと吹き出して笑った

「俺と健斗をいっしょにするなよ」

そう言ってヒロは健斗を指差した

「いい？こいつは中学……いや小学生のときから周りから注目され続けてきた。他のやつとはレベルが一つ二つ、いつも上をいってた

からな。しかも中二のときにはU-15のスカウトが来たんだぜ？分かる？その凄さ」

「いや、あれは違うだろ。あれは小山さんが……」

「小山さん？」

麗奈が健斗にその名前を復唱して聞いてきた。健斗は一旦麗奈を見て、それから続けて言った

「それに俺結局落ちたし」

「バカ。あれはお前が……」

ヒロはそこまで言って急に決まりが悪くなったのか、大きくため息をついた。後ろ頭をかきむしって、苦虫を噛み締めたような表情で言った

「とにかく俺は健斗と違って、何の取り柄のないただのサッカー少年だったんだぜ？そんな俺が今更サッカーを始めてどうすんの？」

「だったらまた頑張ればいいじゃない。中学のときまで、それなりに頑張ってきたんでしょ？」

佐藤がそう言うとヒロはぐっと口を閉じた。その言葉は健斗自身にも問われてるような気がした。

今でも思い出すことがある。ふと目を閉じれば、汗の匂い、風の音……あのときに感じていた感覚を……

「それに、出来ない出来るじゃない。やりたいかやりたくないの問題でしょ？」

佐藤はそれからさらに続けて言った

「もったいないよっ！あたし、あのとき辞めた理由だって聞いたよ？確かにつらいかもしれない……でも、ヒロと健斗自身は――」

「おいっ！」

ヒロが声を荒げて怒鳴った。急なことだったので全員がびっくりしてヒロを見つめる。ヒロの目は怒りに満ちていた

「もうその話はすんじゃねぇよっ！つーかさっきから何なんだよお前。別にお前には関係ねぇだろ」

ヒロが感情を露わにして佐藤に激昂をぶつけた。その異様な状態に早川も麗奈も驚いて目を見張っていた。健斗も久しぶりにヒロのこんな姿を見た

「か、関係ないかもしれないけど。けどあたしはただ……」

「関係ねーだろっ！俺はこのままで言いつってんだよ。そーいうのなぁ、お節介っていうんだよ！」

「おいヒロッ！」

健斗も声を荒げた。佐藤は衝撃を受けたみたいに呆然とした。健斗はそんな佐藤の様子を気にしながら調子を沈める

「言い過ぎだよ。止めろよ、もう……」

「……」

しばらく沈黙が続いた。誰も言葉を発さず、只沈黙が続いた。

すると突然佐藤が立ち上がった。表情から怒りの感情が読み取れた。

唇を震わせ、目には涙が溜まっている

「あたし……帰る」

それからヒロを睨みつけて続けて言った

「お節介で悪かったわねっ！勝手にすれば！」

そう言って、ヒロにフォークを投げつけた。フォークはヒロの胸に

当たり、跳ね返って床に金属音を奏でながら落ちた

それから佐藤は鞄を持って走って店を出て行った。すると早川が慌

てて立ち上がった

「ちょっ……ちょっとマナっ！」

早川も立ち上がって鞄を持ち、佐藤の後を追いかけた。二人が店を

出て行ったあと、重たい空気がずっしりと乗っかってきた

しばらく三人共、黙り込んでいた。麗奈は佐藤の様子が気になるの

か、外の方をチラッと見ていたが健斗とヒロのこともほってけない

からかそこに止まっていた

すると麗奈は健斗の手をキュッと握った。健斗はゆっくりと麗奈を見る。不安気な表情で健斗を見ていた。どうすればいいのか、分からないと健斗に訴えている

正直健斗も答えることが出来ない。健斗もどうすればいいのか分からないのだ

「……お前……さ……」

「え？」

ヒロが小さく呟くように何かを言ってきた。だが小さすぎて健斗は聞き取ることが出来なかった。ヒロはチッと舌打ちをした

「何でもねぇ。俺も帰るわ」

「あ……」

ヒロは立ち上がって鞄を持ち、さっさと店を出て行ってしまった。健斗は何か声をかけてやろうと思ったのだが、何て言えばいいのか分からず黙り込んでしまった。残されたのは健斗と麗奈だけだった

「……みんな、行っちゃったね」

麗奈が寂しげにそう呟いた。健斗は小さくため息をついた

「あぁ……」

店の中は静寂としていた。テーブルの上には5人分の食器。今はそれが妙に寂しさを漂わせていた

第9話　新たなる決意　P．7

健斗は残された食器たちを片付けていた。五人分のティーカップ、シルバー類や皿をキッチンの方へと持っていった。これらの食器類は全てカウンターの下に設置されている自動洗浄機へと入れる

麗奈はテーブルの上を綺麗にダスターで拭いていた

「テーブル拭き終わった？」

健斗が声をかけると、麗奈が小さく頷いた。麗奈からダスターを受け取って、水道で丁寧に洗うと、それをいつもの定位置に戻しておいた

そこで裏から足音が聞こえた。やれやれとため息をつきながら、竜平が戻ってきた。健斗を見ると、苦笑いを浮かべた

「片付けてくれたのか。そのままでよかったのに」

「いえ。一応長く使わせてもらったので」

「真面目だね。お前は。ありがとうな」

麗奈ちゃんもありがとう

と竜平はにこっといつもの調子で笑った。麗奈もにこっと笑顔で返した。すると竜平はおや？と不思議そうな顔をし、辺りを見回してみた

「友達は帰ったのか？」

竜平にそう聞かれて健斗は麗奈と目を合わした。それから苦笑いを浮かべた

「えぇ。もう遅いからって」

時刻は六時近くになっていた。いつの間にか二時間近くここに滞在していたのだ。竜平は納得するように頷いた

「そうか。あまり相手してやれなくって悪かったなぁ」

「いえ。仕込みの方は順調ですか？」

「まぁまぁだな。良い豆を厳選するのは骨が折れるよ」

竜平はそう言いながら朗らかに笑った。健斗も薄く笑ってみたが、何だか自分でぎこちない笑い方をしているな、と自覚出来た

「じゃあ俺らも帰るか」

と麗奈に言うと、麗奈も大きく頷いた

「そうだね。じゃあ、お邪魔しました」

麗奈は笑顔で竜平にそう言うと竜平もにっこりと笑顔で返してくれた

「あぁ。またいつでもおいで。……あぁ、そうだ」

すると竜平は何か思い出すようにカウンターの方へと向かい、棚から何かを取り出した

「麗奈ちゃん、これを持っていきなさい」

と言って渡してきたのは、麗奈のお気に入りの竜平オリジナルブレンドのティーパックの詰め合わせだった。麗奈は喜んでそれを受け取った

「わぁっ♪ありがとうございます～」

「どういたしまして」

竜平は麗奈の喜んだ顔が好きだという。こういうことをするのも麗奈のこういう顔がみたいからだろう。健斗はふと頬を緩めた

「じゃあ帰ります。何かお邪魔しました」

「お邪魔しました」

「あぁ。またいつでもおいで」

竜平に笑顔で見送られながら、健斗と麗奈は店を後にした。

外を出ると、少し寒気がした。昼間は暑いが夜は少し冷え込む。空も暗くなりかけていた

健斗は鞄を籠に入れて、自転車の鍵を取り出した。するとだった

「……竜平さんに、さっきのこと言わなくてよかったの？」

麗奈がそう言ってきて、健斗は一旦動きを止めて麗奈を見つめた。
そして、深くため息をついた

「言っても仕方ねぇだろ。俺らの問題なんだから」

「俺ら？」

「あぁ。俺ら、のな」

その夜、健斗は家で机に向かって勉強をしていた。もうすぐ期末テストがあるため、今の内にその準備をしておこうと考えたのだ

そのとき数学の勉強をしているときだった。健斗の部屋のドアがコンコンと二回音を鳴らしてノックされた。そう思ったら、カチャっと少しだけドアが開いて麗奈が顔を覗かせた

「健斗くーん」

「ん？」

「ちょっといい？」

「いいけど……どした？」

健斗が聞くと麗奈はゆっくりと部屋に入ってきた。そして健斗に歩み寄った

「あれ？何してんの？」

「見ての通りの勉強。もうすぐ期末試験だろ」

「もうやってるんだ。早いね」

「まぁな。中間試験はサボったけど、今回はちゃんとやらなきゃって思って」

「健斗くん、頭いいんだからちゃんと勉強すればいいのに」

「受験期になったらちゃんとやるよ。それより何？何か用なの？」

健斗が聞くと、麗奈はうんっと小さく頷いた

「用ってほどのことじゃないんだけど……」

「……もしかして今日のことか？」

健斗が聞くと、麗奈は戸惑いながらゆっくりと頷いた。健斗はやっぱりかと小さくため息をついた。健斗のその反応を見て、麗奈は拗ねるように頬を膨らませた

「だって……気になるじゃない」

「そんなに気にかけることねぇだろ。ただの言い合いの喧嘩で……」

「でも……あんな風に怒った二人初めて見たもん。メールしてみたけど、返事返ってこないし……」

「だから大丈夫だって。二人ともガキじゃねぇんだから。ただの喧嘩だろ。すぐ仲直りするさ。俺とお前みたいに」

「……」

健斗がそう言って見るも、麗奈は納得したような表情は見せなかった。健斗は面倒くさそうにまたため息をついた

「そんなに気になるなら会いに行けば？ヒロん家も佐藤ん家もすぐそこだし……」

「違うよ。今はそっちじゃないの」

「え？」

健斗が聞き返すと麗奈はまた戸惑うような素振りを見せた

「私、サッカーのことが知りたいの」

「は？何を？」

「今日言ってたじゃない。小山さん……だっけ？そのこととか……聞きたいなぁって」

「あぁ……」

健斗はその名前を聞いて、ゆっくりとため息を吐いた。そういうことか、と心の中で納得した

「そうだな……えぇっと……ちょっと待って」

健斗はそれを聞いて、また小さくため息を吐いた。しばらくしてから立ち上がって、押し入れの方へと向かう。埃臭い押し入れの中から何かをガサゴソと取り出した。埃被った古びた雑誌だった

「座れよ」

健斗は麗奈をベッドの上に腰かけるように座らすと、自分もベッドの上に腰掛けた

健斗が手に持っている雑誌は高校サッカーの情報雑誌だった。どうやら去年に発売された雑誌のようだ

それからペラペラとページを捲っていく

「……あった。ほら、これ」

そう言いながら、麗奈にその雑誌の見開きを見せた。麗奈は不思議そうにその雑誌を見た

立川高校エーススストライカー小山明信（こやまあきのぶ）（１６）。Ｕ－１８の強化合宿に参加。そのセンスを見せつける

その見出しと共にボールを蹴っている男の人の写真が写っていた。顔立ちがよく、凛々しい目に堂々とした雰囲気。短髪で背がかなり大きいように見える。高校生には見えない

でもこの人が……

「この人が……小山さん？」

「そう」

「……Ｕ－１８の強化合宿に参加。そのセンスを見せつける……」

「すげーだろ？１６歳でＵ－１８の合宿に参加してんだぜ？普通ありえねーよな」

健斗は笑いながら、まるで誇らしげにそう言った。サッカーをよく知らない麗奈だが、なんとなくその凄さが分かる

「サッカー上手なの？」

麗奈がさりげなく聞いてみた。すると健斗はまた笑った

「上手いなんてもんじゃねぇよ……あれほど洗練された人はいないってくらい」

「……健斗くんよりも？」

「そりゃ……な」

麗奈はそれを聞いてさらに驚いた。この写真の男はこの健斗よりもサッカーが上手なのだ

あの松本事件で思わず見とれるような華麗なボールテクニックを見

せつけた健斗よりも……

「健斗くんとはどういう関係なの？」

麗奈の問いかけに、健斗は少し考える素振りを見せた

「どういう関係……かぁ……一言で言えば憧れの先輩ってやつかな？歳が一つ上でさ。小学校と、サッカークラブがいっしょだったんだ。中学に名門私立に行ったんだけどな……」

「へぇ～……」

「小学校で別れてから……中二の5月の大会でさ……偶然再会したんだよね。そのときこの人、すでにＵ－１５で活躍してて、たまたま合宿の場所が近かったらしくてさ」

「へぇ～……」

麗奈は感心したように頷いた

「俺、Ｕ－１５にスカウトされたって話ししただろ？」

「うん」

「あれ、小山さんのおかげなんだ」

「え？」

どういうこと？と次に麗奈が言う前に、健斗は答えた

「大会で俺のプレーを見ていた小山さんが、Ｕ－１５の監督にかけ

合ってくれたんだよ。何て言うかなぁ……多分俺のプレーを見て欲しいって、そんな感じでさ」

「そうなんだ」

「それで何か見てくれたんだって。その監督の人が……で、気に入られちゃったみたいで、ぜひ夏のＵ－１５の合宿に参加して欲しいって大会が終わったあとに直接電話かかってきたんだ」

「すごいじゃない！じゃあ、それで健斗くんはＵ－１５に……」

「行ってないよ」

麗奈が言う前に、健斗はそれを笑って否定した。麗奈は驚いたように目を丸くした

「えっ……何で？だってせっかく……」

「うん……最初は俺もすげー嬉しかったよ。Ｕ－１５の強化合宿に参加できるんだから……でもな……」

健斗は苦笑いを浮かべた。あまり言いたくないことだったから……

「夏休み前に、翔が死んだんだ……」

「あ……」

健斗がそう言うと、麗奈はぐっと黙り込んだ。翔が死んだときの話はすでに麗奈にしてある

「翔が死んで……俺はサッカーを辞めたんだ。だから夏のU－15の強化合宿も断った……」

「そう……なんだ……」

「色々な人に非難されたよ。ヒロにだって……もったいないって。でももったいないなんて、俺は思わなかった。続けることが俺にとって苦痛になってたんだ、あのとき……」

健斗がサッカーを好きな理由はただ一つ。楽しいからだ。心の底から、楽しいと思えるからである。例え下手くそでもいい、あのボールを追いかけ、自由に駆け回る感覚が好きなのだ

翔が死んでしまったことにより、罪悪感に苛まれた健斗はその感覚を失ってしまった

それどころか、グランドに立つと、やけに心拍数が上がり、呼吸が苦しくなる。そこにいることであの無惨な光景を思い返す

つい最近までそうだったのだ。あの松本事件のときまで……

第9話　新たなる決意　P．8

松本事件の過程で、健斗は精神的な問題を克服出来たかのように思えた。だが実際のところはわからない……

あのときは守りたいものがあったし、何より卑劣な相手に負けたくないという従来の正義感と負けず嫌いがあのとき染み付いた恐怖を抑え込んだだけなのかもしれない

「そうだったんだぁ……今考えてみれば本当に残念だね」

「うん……でもやっぱ後悔はしてないよ」

健斗は雑誌をパタンと閉じると苦笑いを浮かべていた

「あのまま続けてたら、俺は逆にそっちの方を後悔してたような気がする」

「……そう」

「分かんないけどな。さっ、話はこれでおしまい。もう遅いぞ。明日も学校なんだから、寝坊しても知らねーぞ」

健斗がそう言うと麗奈は小さく頷いた

「うん……」

何だかその様子からまだ何か気にかけているようだった

「何だよ。まだ何か気になることでもあんの？」

「気になるっていうかさぁ……健斗くん、やっぱりサッカー大好きなんだなぁーって」

「へ？」

麗奈が薄く笑みを浮かべながら、健斗にそう言ってきた。健斗はいまいち意味を理解することができなかった。そんな健斗の意図を汲み取ったのか、麗奈はクスクスと笑った

「だって、昔の話をするときの健斗くん、何だか楽しそうなんだもん。それにそれ、去年買ったんでしょ？」

といって雑誌を指差してくる

「きっと健斗くんはサッカー辞めてからも、心のどこかでサッカーを忘れずにいたんじゃない？」

健斗はそう言われて、しばらく考えてみた。そして小さく笑って見せた

「……あぁ……かもな」

麗奈の言うとおり、自分はサッカーを辞めてサッカーから離れても、心のどっかでずっとサッカーを忘れられないでいたのだ

翔のスパイクだけ捨てないでいたのも、翔のことを忘れないためだけではなく、おそらくサッカーのことも捨て切れないでいたのだろう

それが最近になって、ようやく素直になったのだ

「きっと……ヒロくんも同じなんだろうね」

「……」

答える代わりに健斗は沈黙で返した。しばらく呆然とした。何も考えてないわけではない。ヒロのこと、そして自分の今の気持ちを振り返る。そして麗奈を見て、また笑った

「お前って、何か何でもお見通しだよな」

「うん？」

「何でもねー。ほら、早く自分の部屋に戻って寝ろよ。もう十二時回ってんぞ」

健斗はまた麗奈にそう促した。麗奈は今度はゆっくりと笑った。納得したような表情だった

「うん。おやすみー」

「おやすみ」

麗奈は立ち上がってドアの方まで行くと、この部屋を後にした。麗奈が去ったあと、健斗は深いため息をついてベッドに寝そべった

そして目を閉じた

遠くの方から、声が聞こえるような気がした

第9話　新たなる決意　P．9

次の日、健斗が学校に来てまず目に入ったのはヒロの姿だった。というより、教室に入って早々ヒロが健斗に近づいてきたのだ

「おっす。健くん♪」

「はぁ？」

普段絶対にないであろう呼び方をしてくるヒロ。いつもに増して明らかに気持ち悪くなっている。ニタニタで奇妙な笑みを浮かべて、健斗に迫ってくる

「あのさぁ、ちょっと話があるんだわ。ちょっと付き合えよ」

「話？つーか今から？ホームルーム終わってからでいいだろ……」

「んなもん、サボっちまえばいいんだって。いいから行くぞ」

ヒロはそう言って健斗を無理矢理引っ張って行く。腕力の強いヒロは健斗の体を引きずろうとする。健斗は体勢が可笑しなまま、ヒロに連れて行かれた

「おまっ！ちょっ……離せよっ！遅刻になるだろ！」

「いいじゃーん。一日くらいさぁ」

そんなやり取りをしていると、後から遅れて来た麗奈が廊下を走っ

てきた。健斗とヒロの様子を見て、少し驚いたような表情を見せていた

が、ヒロは麗奈を見るとヘラヘラと笑った

「おはよう、麗奈ちゃん」

「お、おはよう……」

「俺と健斗、ちょっと用があるから。遅刻扱いでいいからー」

「え……うん」

「ちょっと！ふざけんなって！麗奈！お前も見てないでどうにかしろよっ！」

健斗は暴れて教室に戻ろうとするが、ヒロには力ではかなわない。がっしりと掴まれる

「だーめー。行くよ、健くん♪」

「うわぁ……」

ついに諦めたか、健斗は全身の力を抜き、だらんとした状態になった。文字通り、健斗はヒロに引きずられていってしまった

状況がよく飲み込めない麗奈は唖然として遠ざかっていく二人を見つめていた

健斗の言う通りだったのかもしれない

麗奈は心の中でそう呟いた。昨日、あんなことがあったのだから…

…少し不安だったのだ。ヒロとマナのことが……

けど、それは健斗の言う通り大した問題じゃなかったのだ。互いの意見が食い違うよくある口喧嘩に過ぎないのだ

何だか心の中の氷が溶けていくようだ

麗奈はほっとため息を吐いて、教室の中に入った

「おはようー♪」

真っ先に結衣のところへ行き、声をかけた。結衣は座りながら麗奈に笑顔で答えた

「おはよう。今日も元気いいね」

「そう？」

昨日まで抱えていた不安が一気になくなったおかげかもしれない

「昨日は途中で帰ってごめんね？」

結衣が申し訳なさそうに麗奈に謝ってきた。あのあと結衣から電話がかかってきて、心配だからマナを送っていったと言っていた

「ううん。大丈夫だよ。私も心配だったから……」

「うん……そっか」

「あの……マナは？」

麗奈がそう言うと、結衣は苦笑いを浮かべて目でその先を示した。
麗奈はその目線を追う。そこには自分の席に座って、健斗とヒロがいなくなった教室の入り口を見つめていた

寂しそうな横顔が麗奈の胸を痛めた

すると結衣が麗奈に耳打ちするような声で言ってきた

「マナもね、本当は仲直りしたいって思ってるんだよ」

「うん……」

「お互い素直じゃないからね。元通りになるのは、ちょっと時間がかかりそう」

「……私たちに何か出来ないかなぁ？」

麗奈が何気なく結衣にそう言ってみた。結衣はそんな麗奈を見て、クスッと小さく笑った

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ」

「え？」

「ただの口喧嘩だもん。それにあの二人なんだから。ね？」

結衣は笑顔でそう言ってきた。きっと麗奈を安心させるためだ。麗奈も小さく笑った

――健斗と同じことを言ってる

結衣も健斗も、まるでお互いが通じてるみたいに同じことを言っている

健斗にお似合いなのはやっぱり結衣なんだろうな……

私じゃ……

そう心の中で呟いていることに気づいて麗奈はその考えを振り払った。何を考えているのだろう

これじゃ前と同じだ

健斗がどんなに結衣のことを好きでも、頑張るって決めたのだ

それに今はそんなこと考えるときではない。

今自分がヒロとマナのために出来ることは、健斗と結衣の言う通二人を見守ることなのだ

第9話　新たなる決意　P．１０（前書き）

半年間放置してしまい、もうしわけございませんでした！

ずっと更新しようと思っていたのですが、何故だか出来ない日々が続いていました。

とりあえず！このグッラブ！3を再スタートいたします！

第9話　新たなる決意　P．10

「お前、後で絶対恨んでやるからな」

「あーん？」

ヒロは聞こえない振りをして、ニタニタと笑っていた。健斗はそんなヒロに引きずられていく

健斗が遅刻をしたくない理由は、別に優等生振りたいからとか、人間性の問題として時間にルーズなやつになりたくないからとか、そう言ったものではない

理由は我が母親にある。小さい頃から母さんは時間にうるさい人だった。小学校のときだって、ちょっと遅刻になりそうになったくらいでかなり叱られたのを覚えている

時間を守るのは人間として当然でしょっ！

親として子の人間性を真っ当にしたいからだというのが分かるが、健斗の性格上その全てを受け入れることは出来ない

だが学校に遅刻をしないというのは守ろうと考えていた。あのときみたいに叱られるのは嫌だからだ

しかしそんな健斗の概念もこの男によって全て崩された

ヒロはどこに向かうのかと思えば、やはり屋上であった。そういえば夏休み明けから、屋上を開放すると学校は方針を変えたらしい。理由は定かではないが、健斗がこの場所を独占出来ることはなくなった

半年間紛失ということになっていた屋上の鍵は、こっそり職員室の中の適当な先生の机の下に投げ入れておいた

見つかるのも時間の問題であろう

屋上に着くとヒロは健斗を放した。今日は風が穏やかで、寒くもなく暖かくもない風が少し心地よい

「で、話って何だよ」

健斗は早速話に入ろうとした。そのときホームルームの始まりを告げる鐘の音がなった。完全に遅刻扱いとなったわけだ

これで大したことのない話だったらぶん殴ってやる

本気でそう考えていたので、健斗は次第と手に力がこもっていた

「うん。それなんだけどさ、俺、昨日帰ってちょっと考えてみたわけよ」

「何を？」

「昨日お前らに言われたこと。冷静に考えてみて、ちょっと一理あ

るなぁって……」

健斗は握りしめていた拳をふっと緩めた。どうやら真剣な話みたいだから、ちゃんと聞いてやろうと思った

「そう思うなら、佐藤と仲直りしたのかよ」

「それは……まだ」

ヒロはばつが悪そうにため息をついた

「昨日ちょっとあいつに言い過ぎたかも……俺のこと真剣に考えてたのにな」

「そうだな。あれは一方的にお前が悪い」

「はっきり言うね。お前」

「自覚してんだろ？」

健斗はやけに頼りなく見えるヒロの背中を見て健斗はため息をついた

「で、話ってのは、佐藤との仲直りの方法について？」

ヒロは黙り込んで、健斗から視線を外した。爽やかな風が二人の間に流れた。

健斗は少し違和感を感じながらヒロを見つめた。何かを言おうとしているのだが、言葉が詰まっているようだ。

ヒロはしばらくしてから柵の方に歩み寄った。そして遠くを眺めて真剣な表情を浮かべている。

いつものヒロらしくない。

健斗はそう思った。そしてそれがさっきから感じていた違和感そのものだった。

「ヒロ？」

「お前覚えてる？」

「え？」

ヒロは遠くを眺めたまま健斗にそう言った。

「中学の時さ、お前倦怠期だって言ってたときあったじゃん？確か一年のとき」

「……覚えてるよ。」

「そんときの翔が言ったことも、覚えてるよな？」

健斗は少し黙り込んで、そのときの言葉を頭の中で反芻した。

翔のあの言葉があったから、またサッカーを楽しめるようになったのだ。

「当たり前だろ……忘れるわけねーよ。」

「うん……」

また沈黙が続いた。健斗はなんとなくヒロの言いたいことが分かっていた。そして、何故ヒロがハンド部を辞め、苛立ちを抑え切れず、佐藤とあんな風に喧嘩をしたのか……その理由が分かったような気がした。

「ヒロ。お前さ……サッカーやりたいんだろ？」

健斗の一言がヒロの胸に突き刺さった。

第9話　新たなる決意　P．11

ヒロは健斗を見つめ直した。健斗の言葉がヒロの気持ちをそのまま映し出しているようだった。

そしてそれが今まで冷静を保っていたヒロの気持ちを高ぶらせた。

「サッカーやりたいんだろ？」

健斗はもう一度そう尋ねた。ヒロは健斗から視線を外すために、わざと俯いてみせた。

「……そうだよ。お前には悪いけど……」

そして一呼吸置いてから、健斗と向き合った。

「俺、またサッカーやろうと思うんだ。」

ヒロの真っ直ぐな瞳を健斗は受け止めていた。そしてその奥にある決意も、「健斗だから」感じ取っていたのだ。

健斗とヒロがサッカーを辞めるとき、二人はただ気まぐれにサッカーを辞めたわけではない。

色々な人に反対された。チームメイトには泣きつかれた。辞めないでくれ、と。

ただでさえ、人数が少なかった神乃中サッカー部。翔が死んだ日、

サッカー部員全員一言も口を開くことがなかった。健斗とヒロも含めて、現実としては受け止めきれず、しかし確かな喪失感を感じ取っていたのだ。

そこに健斗とヒロの退部。残された部員たちに加わる衝撃的な出来事……

今、詳しく語ることは出来ない。しかし間違いなく、神乃中サッカー部を「崩壊」させたのは……健斗とヒロであった。

だから二人はサッカーをやることを拒んでいた。二人がサッカーをまた始めることは無責任にもほどがあり、勝手すぎると思われても仕方がないことで……

そしておそらく……

サッカーをまた始めればこれから先、健斗たちには何らかの「罪悪感」がつきまとうことになるだろう。

「……ヒロ……分かってるよな？」

健斗は静かにそう尋ねた。ヒロは何も言わず、俯き加減で健斗の言葉に耳を傾けた。

「俺たちがサッカーを辞めた後、神乃中サッカー部は新人戦に出れなくて“不戦敗”……それから引退するまで、あいつらはろくな公式試合に出れずに終わった。俺らは……俺らはそうなることが分かってて、それでも退部したんだぞ。」

「分かってるよ……」

「本当に分かってんのかよ？お前がまたサッカーをやるってことは……ただの身勝手だぜ？散々意地を突き通して、色々な人に迷惑かけて……結局高校入ってから気が変わって、またサッカー始めるって……無責任にもほどがある……」

ヒロは何も言わなかった。健斗の言うことは何一つ間違ってることはないのだ。

「“ノブ”や“リュウタ”のことも考えてみろよ。あいつらだって俺たちと同じくらいサッカーが好きだった。今でも……だから、この町を離れて違う高校に行ったんだ。中学のとき、サッカーらしいサッカーも出来ずに……それでも高校じゃ本格的なサッカーをやりたいからって……」

健斗は言葉を切って、ヒロを見つめた。これ以上何を言えばいいのか、正直分からなかったのだ。ヒロだってバカじゃない。今、健斗が何を言いたいのかちゃんと分かってるはずだった。

健斗は大きく深呼吸をした。

「だから……俺も迷ってんだよ。」

「え？」

ヒロは思わず声をあげた。目を丸くして、意外なことに驚いたようだった。

「俺も……あの松本さんと勝負したときから……ずっと……ずっと……サッカーがやりたいって思ってたんだ。」

「お前……」

「あのとき、思い出したから……すげー楽しかったから……俺、ずっと考えてた。サッカーをやろうかどうか。」

麗奈にも話したことがあった。松本事件をきっかけにサッカーに対する熱意が芽生えている自分に気がついた。

そしてそれをずっと悩み続けていた。

“まだ麗奈にも言ってないこと”があるのだが……大部分のことは話したつもりでいた。

母さんや父さんのこと、竜平さんや、ヒロのこと……そして、翔のことも……

しかし麗奈は結局は自分次第だと言ってくれた。自分が後悔しないような選択をすればいいって、そう言ってくれたのだ。

「お前はまだいいけど、俺は色々と問題あんだろ？松本さんとのこともあるし……そんな……簡単じゃねーんだよ。」

健斗はそう言うと、何だか急にむしゃくしゃした気持ちを感じた。ヒロに対してではなく、自分に対する気持ちだった。苛々して自分を自分で殴ってやりたいと思った。悔しくてたまらなかった。

健斗はヒロの下から離れて、屋上のドアへと向かった。そしてドアを開けてヒロの下から姿を消した。

一人残されたヒロは去っていく健斗の後ろ姿をただ見つめていた。
するとそこでとても奇妙なものを感じた。
何だか妙にその健斗の後ろ姿が、懐かしかったのだ。
一人になったヒロが今聞こえるのは、爽やかな風の音だけだった。

教室のドアを開けると、一斉にみんなが健斗の方を向いた。既に一時間目の授業が始まっていたみたいだった。国語総合の教師であり、吹奏楽部の波高(なみたか)先生が不思議そうな顔を浮かべた。

「あら山中くん。どこ行ってたの?」

「ちょっと保健室に……すみません。」

「大丈夫なの?」

「……はい。」

健斗は無愛想に返事をして自分の席へと向かった。

「健斗、どこ行ってたんだよ?」

健斗が自分の席に座ると後ろの席である林寛太(はやしかんた)がちゃかすように言

ってきた。寛太は健斗と小学校の頃からの友達だった。

小学校のときからいたずら好きで、現在でもたまに被害を被るときがある。短めの髪が特徴的で、細い目つきが何故だかむかつく。

「別に。今何ページ？」

波高はすでに授業を再開していた。健斗は机の中から教科書を取り出した。

「９３ページ。つーかヒロは？お前ら二人で教室から出てったじゃん？」

健斗は答えずに、教科書をめくっていった。

「黙秘かよ。小学生の頃からの仲だって言うのによぉ……」

「何行目？」

「え？えっと……あ、ねぇ今何行目？」

寛太はあまり授業を聞くようなやつじゃない。隣の女子に健斗と同じ質問をした。

健斗は小さくため息を吐いた。すると……麗奈がこっちを見ていることに気がついた。

変わらない表情で健斗を見つめている。健斗は少しも目を合わすことが出来ず、わざと教科書の文体に視線を向けた。

そしてその視線は麗奈だけではなく早川も同じように健斗を見ていた。

そして……佐藤もだった。

第9話　新たなる決意　P．11（後書き）

健斗がヒロに向けて語っている内容。おそらく読者のみなさまには急過ぎてよく分からないと思います。

久しぶりだと思ったら急に登場人物が増えた！とか。

徐々に解明していきますのでご安心ください。

あ、実は健斗の周りの人物を少しずつ出していこうと思います。

今回のサブキャラは林寛太くんでした。皆さん覚えてねー（笑）

第9話　新たなる決意　P．12

それから数日が経った。

健斗はなるべく一人でいるようにしていた。

今、誰かと話す気分にはとてもじゃないがなれなかったのだ。

昼休みの時間になると、教室から出る。なんとなく騒がしい教室にはいたくない。

屋上で話をしてから、健斗はヒロと口を聞いてなかった。別にお互い、喧嘩をしたつもりはない。ただ、二人の間には気まずい雰囲気があった。

今はヒロと距離を置こうと、健斗はそう考えていた。ヒロだって、一人で色々と考えたいことだってある。あの話をしてヒロがどういう決断をするのかを待つつもりだった。

ヒロがまたサッカーを始めても、健斗は怒るつもりはなかった。ただ、これは自分にも言えることなのだが、本当にそれでいいのか？という疑問が浮かぶのだった。

健斗が教室を去った後、麗奈はその後ろ姿をじっと見つめていた。

「健斗くん……最近元気ないね。」

麗奈の後ろで結衣がポツリとそう口にした。結衣も最近の健斗の様子を気にしているようだ。

「この間の時からずっとだよね。何か言ってなかった？」

「う～ん……」

実のところ、麗奈にもよく分からなかった。結衣の言うように、ここ最近の健斗はどこか様子がおかしい。

学校でも家でも、ほとんど口を聞かず、最近どうやら一人になろうとしているみたいだった。その冷たい感じは……そう。麗奈がこの町にやって来て、出会ったばかりの健斗みたいだった。

誰かと話をするのを避けて、自ら一人になろうとしている。

そして様子がおかしいのは健斗だけではない。ヒロも同じような感じだった。麗奈はヒロとマナが喧嘩をしたことが原因で、ヒロも元気がないのだろうと思っていたのだが……どうやらそれだけではないらしい。

明らかに健斗とヒロの間に何かが起こったのだろう。そしてそれは結衣が言うように、あの日、健斗とヒロが揃って教室から出て行ったときに違いない。

「健斗くん、家でもほとんど話さないの。何か、話しかけづらいって感じ。」

「そうなんだ……」

するとだった。

「結衣、麗奈ちゃん！お弁当食べよ！」

そのさらに後ろからマナがお弁当を持ってきてそう言ってきた。

麗奈と結衣は突然のことに少し驚いてマナを見た。

「あれ？二人ともどうしたの？」

マナは麗奈の机とその傍にある適当な机を繋げて、三人座れるように作った。マナは先早く、椅子に座り、鼻歌を交えながらお弁当の袋を開いた。

結衣も椅子に座り、そしてマナの方を見た。

「ねぇ、マナ。」

「ん～？」

「ヒロくんと仲直りはしたの？」

結衣がそう問いかけると、マナはお弁当の袋を開ける手を止めて結衣を見た。

「……してないよ。」

「もうっ。いい加減意地張るの止めなよ。仲直りしたいんでしょ？」

「……別にっ。」

「マナッ……」

結衣は悲しそうな表情を浮かべてマナを見つめた。麗奈はその二人の様子を見て、心が痛んだ。

「あたし、あんなやつと仲直りする気なんてないもんっ。」

そんなことを言うマナを見て、結衣と麗奈は顔を見合わせて小さくため息を吐いた。そして麗奈はヒロの方を見てみると……

ヒロは、誰とも話さず腕を組んで座っていた。そして何かを考えてるように、窓の外をじっと見つめていた。その雰囲気は、健斗と同じだった。

「ヒロくんも、何だか元気ないよね……」

麗奈がポツリと口にすると、少しだけマナが眉を潜めた。

「もしかしたら、ヒロくん、マナと仲直り出来なくって落ち込んでるんじゃない？」

麗奈がそそのかすような言い方をすると、マナの顔が微かに赤くなったのが分かった。そしてチラッとヒロの方を見て、少し物寂しそうな表情を浮かべた。その一連を見た麗奈は口元で小さく笑った。

「“マナも”仲直りしたいのにね？」

「そ、そんなことないもんっ！あんなやつ、どうだっていいしっ！」

マナは顔を真っ赤にしてそう言って、ヒロから視線を逸らした。麗奈と結衣はマナのそんな仕草を見て、可笑しそうに笑い合った。

「……～～っ…あたし、ちょっとトイレに行ってくるね。」

ばつが悪いマナはまるでこの場から逃げるように立ち上がり、教室から出て行った。

麗奈と結衣は可笑しそうに笑って、去っていくマナを見つめていた。

「結衣、大丈夫だよ。」

「え？」

「マナだって、ちょっと素直になれてないだけ。すぐに仲直りするよ。」

麗奈がそう言うと、結衣は嬉しそうに大きく笑った。

「そうだね。あの調子だもん。すぐに仲直り出来そう。」

麗奈も結衣の笑顔を見て安心したように小さく笑った。大好きな結衣には笑って欲しかった。先ほどのような悲しそうな顔なんかして欲しくない。

結衣の笑顔を見ると、麗奈も何だか嬉しかった。

「さっ！私たちもお弁当食べよー。」

「うんっ！」

麗奈は鞄の中から自分で作ったお弁当を取り出して、机の上に広げた。

今日はお母さんが朝からパートのため、お弁当は麗奈が作った。もちろん健斗のもいっしょに。

マナとヒロのことは時間の問題だ。あの二人なら……特にマナの方からアクションを起こすだろう。

後は……健斗がどうしたのかというところだが、今のところ麗奈には何も話して来ない。麗奈は自分から聞こうとは思わなかった。

というより、触れてはいけない領域のような気がしているのだ。

だからいずれ……健斗が話してくれるのを待とうと、麗奈はそう考えていた。

第9話　新たなる決意　P．１２（後書き）

え～……おそらく気がついてる方もいるとは思うのですが……

この第9話……かなりの長編になりそうですっ！！

この第9話で明らかにしたいことがいくつかありまして、それを考えるとあのめちゃくちゃ長かった第7話に相当するかも……

ご了承くださぁい……

さて、自分で書いていて気がついたのですが……何だかマナとヒロの関係が少し変わりつつありますね……さてどうなるのか……

それと感想と評価の方を待ってます！

長い間放置していたので、読者の方がかなり減ってしまったとは思うのですが……

それでも待ってます！

第9話　新たなる決意　P．13

愛美は少し憂鬱な心地で廊下を歩いていた。

昼休みになると、当然廊下はたくさんの人が行き交いしている。廊下に立って話をしている人もいれば、ただ愛美のように廊下を通っている人もいる。

でもその中にはまだ知らない人が多い。というのは、愛美は中学まで神乃崎の隣町に住んでいた。隣町の高校はどれも偏差値が高い。そのため愛美の学力、偏差値的に簡単に入れそうなこの神乃高を選んだのだ。

つまり、苦労をしたくないけど私立には行きたくないという一般的な理由に過ぎなかった。

しかし盲点があった。この神乃高に来る人の多くが神乃崎の地元の人ばかりだったのだ。それもそうだろうと愛美はここに入学してから気づいた。

大して偏差値も高くない、こんな田舎の高校にわざわざ来る理由なんて本来ならない。わざわざ他のところからやってくる理由なんて、愛美と同じような理由くらいだろう。

だから最初の頃、ほとんどの人が初対面だった。しかし、従来から明るい性格の持ち主である愛美は友達を作るのにほとんど困ることはなかった。

知らない人と仲良くなることを前々から苦だと思ったことがない。

だからある程度の人はすでに顔や名前も知っている。

「マナ、おはようー！」

「おはようー。」

こんな風に違うクラスの子にもちゃんと友達だっている。未開の地に飛び込んだことを後悔したことは一度もない。

と、そんなことを考えながら、愛美は小さくため息を吐いた。その憂鬱さの原因は一体何にあるのだろう、と愛美は少し考えた。

……言われるまでもなく、ヒロと喧嘩をしていることだった。

確かに自分もしつこい面があったのかもしれない。所詮他人なんだから、あまり顔を突っ込むのもよくないことだって言うのは分かっている。

しかし……愛美には気持ちを抑えることが出来なかったのだ。ヒロの本当の気持ちを知りたかっただけなのだ。何を考えているのか、何を思っているのか、ただそれを知りたかった。

先ほどのヒロの物思いにふけている顔を思い出す。本当に自分のことを考えてくれているのだろうか……

「……だったら、何か言ってくれればいいのに……バカ……」

愛美はそう呟いてみた。と、するとだった。窓から中庭が見えるところを通りかかったとき、愛美が憂鬱さを込めて窓の景色を見てみたときにふと気がついた。

中庭のベンチに誰かが一人で座っていることに気がついた。そしてそれは、愛美のよく知っている人物だった。

健斗は中庭のベンチに一人座って、じっと考え込んでいた。両手に缶ジュースを持ち、別に焦点を合わしていない何かをじっと見つめていた。

最近、こうすることが多くなった。自ら一人になりたいという欲求が絶えず起こるようになった。当人だから分かる。その感覚は、健斗がまだ麗奈と出会う前の頃に日々抱いてたものだ。

ヒロだけじゃない。健斗も同じだった。今すぐにでもサッカーをやりたい。あのときの気持ちがすでに健斗の心を満たしている。しかし、それをどう対処することもなく夏を過ごしてしまった。

ヒロがハンド部を辞めると言い出したのは、麗奈の誕生日の日だった。佐藤と健斗とヒロで、隣町のショッピングモールで買い物をし、コーヒーチェーン店でお茶をしていたときに、ヒロがそれを打ち明けた。

もしかしたら、健斗はあのときからすでにこのことに気づいていたのかもしれない。

ヒロがバンド部を辞めると言い出した理由がそこにあると。それは

ヒロの中で健斗と同じように、もう一度サッカーをしたいという気持ちが芽生えたことではないか……

それが分かったときおそらく健斗はこうなるだろうと予測していた。そしてそれが今まさに現実となっている。

複雑な心境だった。

ヒロがサッカーをやりたいというのは、本当だったら嬉しいことなのに……

けどそれを勧めてやることは出来ないのだ。特に責任というものを重んじる健斗には、またサッカーを始めることを苦痛に感じてしまうだろうし、ヒロだけまた始めたら、健斗はヒロを蔑み、今の関係が本当に壊れてしまうかもしれない。

難しい問題だ。

こうなろうとは思わなかった。中二の夏、またサッカーをやりたいだなんて絶対に思わないと思っていた。だからすぐに決意したのだ。そしてヒロも同じだったのだろう。

あのときの浅はかな決断が、今の自分を戒めているように感じた。

「どうしたもんかな……」

「何が？」

自分の世界に誰かが入り込んだ。健斗は驚いて、前に焦点を合わせると……

そこには佐藤が立っていた。こういうとき、たいてい立ち現れてくるのは麗奈だったのだが……まさか佐藤が来るとは思わなかった。

「何してるの？こんなとこで。」

佐藤が微笑みながら健斗にそう言ってきた。

「ん～……人間って創造主なのか破壊主なのかを考えているところ。」

「何それ……そんなのダメダメ！考えちゃ。無駄な時間を過ごしてるよ？」

佐藤は笑いながらそう言って、健斗に「隣いい？」と聞いてから、そのまま隣に座った。

「健斗って、たまに難しいこと考えるよねー？」

「そう？」

「うん。なんかたまに何考えてんだろ？って思う。」

健斗は少し黙り込んだ。佐藤の言うとおり、どうやら自分にはそういうところがあるみたいだ。今考えていることも、多分他の人に話しても難しいと言われるかもしれない。

「ほら。またそうやって黙り込むんだもん。クールなのはいいけど、ちょっと怖いよ？それ。」

佐藤にそんなことを言われて健斗はきょとんとする。そして小さく笑った。

「……そういや最近話してなかったな。」

「え？あ……まぁ、そうだね。そうかも。」

「ヒロと仲直りしたの？」

健斗がそう言うと、佐藤は少し顔を赤らめて、健斗から目をそらした。どうやらまだみたいだ。

「ったく。二人とも意地っ張りだなぁ。さっさと仲直りすりゃあいいじゃん。仲直りしたいんだろ？」

「べ、別にっ！どうだっていいし……麗奈ちゃんと同じこと言わないで。」

麗奈も同じように言ったということは、やっぱりそうなんじゃないか。と健斗は心の中でそう呟いて、笑った。

「ふ～ん……でもヒロはどうだろーな？」

「え？」

健斗はニヤリと小さく笑みを浮かべた。

「あいつ言ってたぜ？“俺が言い過ぎた。どうやって仲直りしよう？”ってさ。」

ちょっとだけ盛ったが、別に構わないだろうと健斗は思った。案の

定、佐藤は目を見開いて俯いた。口元で笑みを浮かべているのが見えた。

「……嬉しそう。」

ボソッとそう言うと、瞬時に佐藤の顔が真っ赤になった。

「う、嬉しくなんかないしっ！やめてよっ！」

「顔赤いけど……？」

「〜〜〜っ！」

声にならない声を上げて佐藤が健斗の肩を叩いてきた。佐藤は女の子ならずのパワーを持っているため、普段麗奈に叩かれているのに慣れていても少し痛かった。

「いって！何だよ？何ムキになってんの？」

「それ以上言ったら今度は本気で殴るよ？」

佐藤が怖い目つきで睨んでくるので健斗は苦笑して、それ以上からかうのを止めた。

けど普段佐藤が見せない女の子らしいとこが見れたような気がして、普段と違うギャップに健斗は可笑しさを感じて思いっきり笑った。

久しぶりに笑って、何だか安心感を感じた。

第9話　新たなる決意　P．14

「……で、本当は何を考えてたの？」

落ち着きを取り戻した佐藤が健斗にそう尋ねてきた。

別に話したくないわけじゃない。だが、どう説明すればいいのか分からなかった。健斗はあえて、佐藤と目を合わせるのを拒んだ。

「……考え事。上手くは言えないけど……」

「……サッカーのことでしょ？」

再び佐藤がそう聞いてきて、健斗は図星を突かれて黙り込んでしまった。すると佐藤はズバリ言い当てたことが分かると、小さくため息を吐いた。

「分かるよ。健斗もヒロも、最近そのことで悩んでるんだって。」

「……うん。」

「やっぱり、そうなんでしょ？ヒロがバンド部辞めた理由もきっとそれ。じゃなきゃ変だもん。」

「……そうだよ。」

健斗が答えると、佐藤は不満気な表情を浮かべた。

「だったら言ってくれればいいのに……どうして二人とも隠すのよ

？」

健斗は少し黙って佐藤を見つめた。佐藤は不満気に納得いかなそうな表情で健斗を見つめ返している。

「何で二人とも、何も言ってくれないの？」

健斗はその言葉を聞いて、しばらく言い返せなかった。健斗とヒロと佐藤で買い物に行ったとき、佐藤は同じようなことを健斗に問いかけてきた。

何故何も教えてくれないのか。友達なのに、どうして何も言ってくれないのか。

佐藤の誠実な心に触れたような気がして、あの時大部分のことを話した。しかし……今回のことまでは話せる気にはなれなかった。

「……俺とヒロが今悩んでることは、俺ら自身の問題なんだ。」

「……だからって何にも教えてくれないの？」

「そういうわけじゃないよ。俺だって、佐藤はすげー良い友達だって思ってる。……でも……」

健斗は一呼吸置いてから続けて言った。

「今悩んでることは、佐藤も麗奈も……多分早川も知らない、ずっと前からの問題なんだ。だから、上手く話せないんだよ。誰かに説明することが出来ないんだ。」

健斗は小さく笑った。佐藤を安心させるために、小さく笑った。

「だから……今はほっといて欲しい。ヒロも多分同じ気持ちなんだ。だからあいつ、ついカッとなっちゃったんだよ。……分かって……くれるか？」

佐藤はしばらく健斗を見つめ返した。やがて、ふっと表情を緩めると小さくため息を吐いた。

「……分かった。じゃあもう何も聞かないっ！」

佐藤はそう言うとベンチから立ち上がって、健斗と向き直した。

「一人で考えたいときってあるもんねっ。だからあたしもう聞かないよ。」

「……ゴメン。」

「謝らないでよ。……ただね。」

佐藤は真剣な表情で健斗と向き合って続けて言った。

「あたし、確かにまだ健斗やヒロの知らないことがいっぱいあると思う。でも……あたしはちゃんと知りたいっ！友達として、ちゃんと知っておきたい。気が向いたらでいいから……いつか、ちゃんと教えてね？」

健斗は佐藤の言葉を聞きながら、顔を上げて佐藤の真剣な眼差しを受け止めた。彼女の眼は澄んでいて、濁りなど一切なかった。心の底から、健斗とヒロを心配しているんだということが痛いほどよく

分かった。

こんなに真っ直ぐ、誠実な子はそうそういないだろうな、と健斗は考えていた。

「……ありがとな。」

健斗は小さく笑ってそう言った。そして佐藤は安心するように真剣な表情を緩めて穏やかに笑った。

「じゃあ～……あたし行くね？お弁当食べたいし。」

「あ、うん。ワリィな……ありがとう。」

佐藤は一度振り返って笑って手を振ると、再び背中を向けて健斗の元から離れていった。

健斗はその後ろ姿を見つめながら、何だかしばらく忘れていた穏やかな気持ちを思い出していた。友達なんて別にいらないと思っていた昔の自分が嘘みたいだな、と健斗は思った。

そして空を見上げた。今日は青空の見える秋晴れだった。

第9話　新たなる決意　P．15

ヒロは誰とも話すことなく、ただ机に座って窓の景色を眺めていた。今日はとても良い天気のようで、こっから見るだけでも青空が広がっているのが分かった。

けどそれと相反して、ヒロの心の中は曇っていた。もちろん、ヒロもサッカーのことで悩んでいるのだった。

健斗と屋上で話して以来、あいつとは口を聞いていない。別に喧嘩をしているつもりはない。ただ、言葉で言えない距離というものをヒロは感じていた。

今は健斗と距離を置く必要があるのかもしれない。一人でゆっくり考える必要がある。

健斗は何も間違ったことは言ってない。いや、むしろ健斗が全て正しいのだ。

もしこれからサッカーを始めるのなら、それはまず許されないことだろうということは分かっていた。

無責任にもほどがある。そして、ただの身勝手である。

神乃中サッカー部が崩壊すると分かっていながらも、ヒロは健斗と共にサッカー部を退部した。残された部員たちは、ろくな公式試合に出れなくなったと後から聞いた。

そしてその代は崩壊した。それは健斗とヒロに原因があったのだ。

そのことを放置したまま、サッカーをまた始めるというのは……どう考えても身勝手で無責任だ。よっぽど人間が腐っていないと、出来ないことだろう。

健斗はそれを言いたかったのだ。だからあいつもずっと悩んでいるのだ。

おそらく健斗はサッカーを始めることは出来ないだろう。人一倍、“責任”というものを重んじているあいつの性格から考えると、その考えにつながる。

――健斗がサッカーを始めなきゃ……意味ねーんだよ。

ヒロはそうとも思っていた。ヒロの中で最も望んでいること、それは――健斗ともう一度サッカーを楽しむことだった。

松本事件のあの日、ヒロは正直健斗は勝てないだろうと考えた。もちろん、本来の実力が出せれば間違いなく勝てる。しかし、精神的にも傷を負っている健斗には難しい問題だろうと思った。

そう思っていた。あいつはそんなヒロの考えとは反対に、昔のトラウマを克服し、全盛期の動きを取り戻したかのように鮮やかに勝った。

そのときサッカーに対する情熱を取り戻したのは健斗だけじゃない。ヒロも……ハンドボールでは決して味わえない、あの熱い気持ちを感じたのだ。

翔と健斗とヒロの三人で、いつも感じていたあの気持ちを思い出したのだ……

ヒロは大きくため息を吐いた。佐藤には申し訳ないことをしたな、と後悔していた。

佐藤はおそらくヒロが何を考えているのか、薄々分かっているのだろう。だからそれを心配してくれて、ヒロに色々聞いてきたのだ。

佐藤は何も悪くない。悪いのは全部自分だった。

そしてヒロはふと、佐藤と健斗といっしょに買い物に行ったときのことを思い出し始めた。

「かっこ悪い。」

「え？」

佐藤の言葉に健斗が思わず聞き返した。佐藤はげんなりとした表情で健斗とヒロを交互に見てきた。

「そんなのかっこ悪いよ。子供のわがままみたい。」

健斗とヒロは何も言い返せず、ただ佐藤を見つめていた。ヒロ自身、大きく驚いていた。今までこんなことを言ってくるやつなんていなかったのだ。

「だってそうでしょ？友達が自分のせいで死んじゃって、それが本当に辛いっていうのは分かるけど……でもだからってすぐに辞めちゃったの？楽しくないからって？そんなの……おかしいわよ。」

佐藤は呆れるように大きくため息をつくと、ヒロをまるで蔑むような目で見てきた。

「あんたなんて一番酷くない？ただ健斗に流されただけって聞こえる……」

ヒロは全身の血が上りあがってくるのを感じた。健斗とヒロの中ではそんな単純な話ではない。何も知らないくせにでしゃばってヘラヘラと軽い口を叩いてるようにしか聞こえなかった。

「お前っ……」

ヒロが怒鳴り声を上げる寸前、健斗が手のひらをヒロの目の前に持っていき、それを抑止した。「黙って聞け。」と無言で言っているのが分かった。

「きっと所詮、健斗とヒロはサッカーをあんまり好きじゃなかったんじゃない？ただ約束とか友情とか言って勝手に盛り上がってただけ……幼稚な気持ちに動かされてただけなんじゃない？」

ヒロの怒りが有頂天に達した。目の前のこいつが心底憎いと感じた。

「てめぇ……それ以上言ったら……」

「だって違う？悪いけど少なくともあたしにはそう聞こえたよ？」

「このっ……！」

「辞めろよ、ヒロ。」

健斗の落ち着きを払った声調がヒロの怒りを抑止した。ヒロは健斗を見ると、驚いたことに健斗は笑っていた。

「お前っ！むかつかねーのかよ！何も知らねー他人にここまで言われてんだぞっ！」

と言ってから、ヒロは佐藤を睨み付けた。佐藤は一瞬ビクッとしたが、負けずに強い目つきで睨み返してきた。

「あんまり大きな声上げんなよ。他の人に迷惑だぞ？」

「お前……っ、何なの？少しはむかつけよっ！」

「いや……俺は佐藤の言う通りだって思うから。」

「……はっ？」

健斗は小さく笑っていた。その笑みは確かに佐藤の言葉を全て受け入れていた。

「俺が佐藤だったら、多分同じようなことを言うと思うし……佐藤がそう聞こえるのももっともだと思う。」

「でも……」

「それに……」

健斗はヒロを見ると、また薄く笑った。ヒロはそのときの健斗の表情に寂しさや悲しさを込めた笑みに見えた。

「それに、“同じこと”言われたじゃん。辞めるときに……だから、佐藤の言うことは間違ってはないだろ？」

健斗のその言葉にヒロは一気に冷静さを取り戻した。そして一気に蘇った、あのときの記憶……今の状況よりもっと酷かった。

健斗は最初からそれを感じていたのだろう。だからこんなにも落ち着いていられたのだ。ヒロはゆっくりと座って、健斗を見ると穏やかな表情を浮かべた。

「……そうだな。お前の言う通りだ。ワリィ、佐藤……怒鳴ったりして。」

「え……？」

ヒロの急な変わりように佐藤は驚いたような表情を浮かべた。

「う、ううん。っていうかあたしの方こそゴメン……ちょっと出しゃばっちゃったよね。」

「いや……いいんだ。佐藤は何も悪くないよ。……つーか、どっちが正しいとか悪いとかないし。」

健斗は佐藤に笑いかけてそう言った。ヒロも健斗の言葉と共に頷いて見せた。佐藤は少し不思議そうな表情を浮かべたままだった。しかし、それを敢えて聞いてこようとはして来なかった……

健斗はもしかしたら、あのときから……いや、それよりもずっと前から分かっていたのかもしれない。

いずれ健斗とヒロがサッカーに対する気持ちが芽生えてしまったとき、色々な問題にぶつかると言うことを……

だから敢えて佐藤にあのとき話してみたのだ。そして佐藤の反応はあいつの予想通りだったに違いない。

あいつは昔からそういうところがある。食えないところがあるのは本当に昔から変わらない……

あいつは今、ゆっくり答えを探しているはずだ。当然、中学の時のことを思えば簡単に済まされる問題ではないのだから。

それならばヒロ自身も今一度自分を見つめ直す必要があるように思えた。健斗もそうしているように……ヒロも答えを探す時間を要さなければならなかったのだ。

第9話　新たなる決意　P．15（後書き）

ふ～……（≧ε≦）

ここまで書いてみましたがいかがでしょうか？

おそらく、「一体そんなに何を悩んでるんだろう？」とか、「やりたいならさっさとやればいいのに。」とか、「長ったらしい」とか思うかもしれません……汗

ですがっ！実はかなり複雑な問題を今健斗とヒロは抱えているのです。

え～……第9話に入ってから突然シリアスな話になってしまってることをお許しください。

あ、感想や評価をもう本当に待ってます！みなさんのご意見やご要望が僕のエネルギーにもなりますので、ぜひお願いします！

第9話　新たなる決意　P．16

帰りのＨＲが終わると、一斉に生徒たちは帰る支度を始めた。健斗もそれと同様で、鞄に荷物を入れていた。早く帰りたいのだが、そういうわけにはいかない。

「健斗くん。」

健斗が鞄に荷物を詰めていると、麗奈が近づいてきた。相変わらず、無頓着な笑顔で健斗を見てくる。

「今日部活あるんだけど……」

「知ってるよ。何時まで？」

「えっとねぇ～……多分七時くらいかなぁ？」

健斗は時計をチラリと見た。今日は授業が最後まであったためか、時計の針は四時ちょっと過ぎを差していた。七時まで三時間近くある。いつものことだが、気が滅入る。

「……分かった。待ってるよ。」

「本当っ？」

麗奈は嬉しそうに笑った。麗奈の笑顔を見たのは久しぶりのような気がして、なんとなく安心感を感じた自分がいた。

何だか気恥ずかしい思いになって、麗奈から目をそらした。

「あれ？何か顔赤いよ？どうかした？」

麗奈にそう聞かれて健斗は少し慌てて答えた。

「べ、別に何でもねぇよ。」

「……あっそ。じゃあ私行くね？」

「おう。」

「部活終わったらメールするから。」

「はいはい。」

「“はい”は一回っ！」

「はぁい……ってお前は母さんかっ！」

健斗がすかさず突っ込むと、麗奈はクスッと可笑しそうに笑った。

「うそうそ。じゃあ行ってきまーす。」

そんなこと言い置き、麗奈は健斗から離れて行き、教室から姿を消した。健斗は麗奈が去った後に小さくため息をついた。今、気分は沈んでいるのに……麗奈と話すとペースに引き込まれてしまう。

まぁ、それがあいつの良いところでもあるのだが……と健斗は思って軽く笑った。

そんなことを考えていると、ふと目の前を早川が通りかかろうとするのに気がついて、すぐに目が合った。すると早川はにこっと微笑んできて、健斗はその笑顔に胸が高鳴るのが分かった。

「健斗くん、今日も麗奈ちゃん待ち？」

「あ、うん……そうなるみたい。早川はこれから部活？」

「うんっ。」

「そっか。頑張ってな。」

「うん……」

早川は少し寂しそうな表情を浮かべて健斗を見つめてきた。潤んだ瞳を健斗に向けてきて、健斗は少し首を傾げた。

「どした？」

「……健斗くん、大丈夫？」

「え……？」

健斗が思わず聞き返すと、早川は一歩健斗に近づいて声のトーンを少し下げた。

「ほら、最近何だか元気ないから……私、心配だったの。」

「……元気……ないように見える？」

健斗が苦笑いを浮かべて、早川にそう言うと、早川は小さく頷いた。

「うん……休み時間もどこかに行っちゃうし……何だか、ずっと一人でいるみたいだから。ヒロくんとも、最近話してないでしょ？」

「……うん……まぁ……」

健斗は上手く答えることが出来なくって、笑って誤魔化した。早川はそんな健斗を見て、表情をふと緩めた。

「私……健斗くんが何を悩んでるのか知らない……何も知らないけど……」

「うん……」

「けど私、健斗くんの力になりたいから……」

「早川……」

健斗は高鳴る胸の音を感じながら早川を見つめていた。早川は顔を赤らめて、健斗から視線を外す。

「だからもし、気持ちの整理がついたら、遠慮なく言ってね？こんな私だから力になれるか……分からないけど……」

健斗はしっかりと早川を見て、しばらく黙っていた。本当に、何だか、くすぐったい気持ちを感じていた。暖かいような柔らかいような嬉しくて、甘酸っぱい気持ち……

やっぱり……俺は……

「……ありがとう、早川……」

健斗は小さく笑って早川に気持ちを込めてそう言った。本当に感謝していた。健斗の気持ちを汲んで今は何も聞いてこない。けれど健斗のことを気にかけてくれている。それだけで嬉しかった。

「うん。」

早川もにっこりと微笑んでそう返した。そしてしばらく見つめ合った後、早川がクスッと笑った。

「えっと……じゃあ私行くね？また明日。」

「あ、うん……また明日。」

早川は微笑み、手を振りながら健斗の元から離れて行った。健斗は早川が教室から去っていくその後ろ姿をただ見つめていた。

改めて、早川に対する気持ちを確認した。そうだ。健斗が好きなのは、早川のこういうところだった。

翔の葬式の日、もしかしたら健斗よりも辛い思いを抱いてたのかもしれないのに……健斗のことを気にかけてくれた。

そういう優しくて強いところを持つ早川を好きになったのだ。

そして健斗はふと決意した。

そろそろけじめをつける必要がある。自分の気持ちに……そして二年間の時に……

早川に告白する。

そのために、今の自分の問題を解決する必要がある。

だから……

「お前って意外にモテんだな。」

「え？」

今度は健斗の後ろから声がして、すぐに振り向くと……そこには寛太がニヤニヤしながら立っていた。

「寛太っ……！」

「“私、何も知らないけど……だけど健斗くんの力になりたいから……”“早川……”」

健斗の目の前で寛太が憎たらしい顔をして先ほどの場面を再現してきやがった。

「だって。か～っ！見せつけるね～！」

「お前っ……見てたのか？」

「ずっと見てました～！何なら全部再現しましょうか？」

ニヤニヤしながらそう言ってくる寛太をぶん殴ってやろうかと思っ

たが、健斗は何とかこらえた。ここで手を出したら、何とか負けのような気がする。

「何の用だよ……部活は？お前野球部だろ？」

寛太は小学校のときから野球一筋のやつで地元の野球チームにも入っていた。それから中学、そしてこの高校でも野球部に入っている。

しかし寛太は基本スポーツは何でも好きらしい。運動神経もよくて、体育でもかなり目立つ方だ。

「今日は定休日。」

「あっ……そうだっけ？」

「んでさ、どう？たまにはいっしょに帰ろーぜ？ヒロも誘って飯でも食いに行かね？」

「ん～……」

健斗は少し考えた。これから麗奈を待たなきゃいけないのだが、別に学校にいる必要はない。三時間もあるのだから、その間学校の外で過ごすのが得策だろうと思った。

それにたまには寛太の相手をしてやらないと、拗ねてしまうかもしれない。

しかし……問題はヒロだった。別に喧嘩をしているわけじゃなかったのだが……何となく気まずかった。

「……どうしよ……」

「え～っ！？いやなの～？つれないなぁ～……健くんは～……たまにはさぁ……いいじゃあん？ねぇ～っ？」

くねくねしながら寛太が健斗に迫ってきた。案の定、寛太の禁断症状が出て、健斗は苦笑しながら言った。

「わ、分かった。分かったからくっつくなって！」

「ほんとっ！やったぁ～！お～いヒロ～！」

寛太はすぐに健斗から離れて、ヒロの方へと向かった。ヒロはずっと席に座ったままだった。そして寛太の声でこっちを向いて……

そのとき、ヒロと目が合った。

第9話　新たなる決意　P．17

「いや～？小学校からの知り合い同志だから何か照れくさいなぁ～」

「あぁ……」

「そだな。」

寛太を挟んで、健斗とヒロは揃って廊下を歩いていた。確かに中々揃わない面子だろうと健斗も感じていたのだが、重要なのはそこではなかった。

「しかしさぁ、この町って本当に狭いよなぁ～？普通高校に入ったら、周り知らない人ばかりじゃん？なのにここはほとんど知ってるやつだし。まったく、ここじゃあグローバルな視点が持てないっつーかさぁ～……」

健斗とヒロは寛太の話を半分だけ聞きながら、互いに二人のことを意識していた。寛太は二人を見比べて、ばつが悪そうに頭を掻いた。

階段を下って昇降口に着いたときだった。突然寛太が「あっ！」と声を上げた。

「ワリィッ！ちょっと部室に忘れもんしたわっ！」

「はぁっ？お前今日部室行ってねーだろ。」

ヒロがそう言うと寛太はニヤリと笑った。

「いや、めっちゃ大事なもん忘れたんだっ！俺取ってくるから、ちょっと待ってて！」

寛太は全く有無を言わさず、健斗とヒロを置いて部室の方へと走っていった。健斗とヒロは寛太が走っていた後、互いを見て小さくため息をついた。

「仕方ねぇ……校門で待ってようぜ。」

「……あぁ。」

そう言って、健斗とヒロは下駄箱から靴を取り、それを履くと昇降口から出た。そしてそのまま校門を向かって行く。その途中、ネット越しからグランドが見えた。「そういやもうすぐテストだな。勉強してる？」

「ぼちぼち。勉強なんて受験期に入ってからでいいし。」

「え……お前大学行くの？」

「当たり前じゃん。お前行かないの？」

健斗がそう聞くとヒロは少し考えるような仕草を見せた。

「どうなんだろうなぁ……」

ヒロは他人事のように聞き返してきた。まだ一年だし、大学のことまでは考えていないようだ。

「別に大学行ってまでやりたいことなんてなさそうだし。」

「逆じゃね？普通やりたいこと探しに大学行くんだろ。」

「そんなもんなのかねぇ……」

ヒロはそうぼやきながら突然立ち止まってグランドの奥を見つめた。健斗もつられるようにグランドの奥をネット越しに見てみると、そこにはサッカー部が何人か集まっていた。

ヒロと健斗はしばらく黙り込んでサッカー部を見ていた。何人か集まって体操をしているみたいだ。

「お前知ってる？」

「え？」

ヒロが突然口を開いてそう聞いてきた。何のことか分からず、すぐに聞き返した。

「サッカー部、三年が引退してから人数が一気に減ったらしいよ。」

「……そうなの？人数足りてない？」

「そこまでじゃないだろうけど……ギリギリ大会に出れるくらい。」

「そっか……考えてみれば、俺らの代が少ないのか……」

健斗はそう呟いて、グランドの奥にいるサッカー部を見つめていた。

「……あれから色々考えてた。」

「……」

「お前に言われたこと。……間違ってないよ。間違ってない……」

健斗は答えずに、グランドを見つめながらヒロの言葉を聞いていた。

「だけど……やっぱりまたサッカーをやりたい気持ちもある。だから、どうすりゃいいのか……わかんねぇよ。」

「……ヒロ。お前勘違いしてない？」

「え？」

健斗はヒロにそう言うと、ヒロは一体何のことだか分からないという顔をした。

「俺、別にお前がまたサッカーを始めることを悪いことだとは思ってないよ。」

健斗のその言葉にヒロは本当に意外そうな顔をして、小さく笑みすら浮かべた。

「そうなの。てっきり反対してんのかと思った。」

「んなわけねぇだろ。むしろ逆。お前がまたサッカーをやりたいって思うようになって、嬉しいよ。……けど……」

健斗はまたグランドの奥を見て、小さくため息を吐いた。

「……けどさ、やっぱり……あの時のことをうやむやにしたままじゃ駄目だと思うんだ。」

あの時とはもちろん、健斗とヒロがサッカーを辞めた時のことだろうとヒロは思った。

「あの時のことを無視してまたサッカーを始めたって、また辛くなるって……少なくとも俺はそう思う。」

「……うん。」

「でも、だからと言って今更どうにかなるわけじゃない。過去は……変えられないんだから……」

健斗のその言葉がヒロの胸に突き刺さる。過去は変えられない。だから……どうしようもないのか……本当に……？

「俺らがサッカーをまた始めるのには、何か……色々とすげー覚悟がなきゃ駄目だ。じゃないと、またすぐ辞めることになる……って俺は思う。」

「うん……そうだな。そうだよな。」

ヒロは大きく頷いた。健斗の言っていること全てが正しいように思った。しかしそれがヒロにとって苦しく、自分の気持ちを抑えなければならない壁になっている。

ヒロは大きく息を吸って、それをそのままため息として吐いた。

「はぁ～……過去は変えられないかぁ～……」

ヒロは頭を下げたかと思うと、ふっと健斗を見た。

「俺タイムマシンがあったら、あんときに戻ってさ、ぶん殴ってでもお前がサッカー辞めるの止めるわ。」

ヒロのそんな言葉に健斗は眉をひそめて言い返した。

「お前なぁ～……そうやって後悔してるよ発言止めろよな。」

「冗談だって。たださ、俺……」

ヒロは健斗と向き直して、小さく笑った。

「お前がサッカーをやらない限り、俺もやらないよ。」

「はぁ？」

健斗は呆れたような声を出して、小さくため息をついた。

「馬鹿じゃねぇの？俺なんかに構うなよ。やりたきゃやれよ。自分次第だろ？」

「いや、確かにお前の言う通りの部分もある。けどそれ以前に……お前もいっしょに俺とサッカー始めんだよ。」

「ヒロ……」

「俺がどうにかしてそうさせる。お前も絶対サッカーやらせるから

な。」

健斗はヒロの目を見つめた。そこにはヒロにとって何らかの深い決意が読み取れた。自分のことをそこまで考えてくれているとは思わなかったし、何よりそれが一番嬉しく感じた。

健斗はふっと表情を緩めた。

「……馬鹿じゃねぇの、マジで。」

「馬鹿で結構コケコッコウ♪」

「古っ……！」

健斗が笑うとヒロも笑った。そして互いの拳を差し出して、コツンと当てる。子供の頃からずっといっしょにいる。

やっぱり、こいつは俺の親友だ。心の底から何でも分かり合えるような存在。

それを改めて確認したような気がした。

第9話　新たなる決意　P．18

「あ～！疲れたぁ！」

麗奈の横でフルートを吹いていた北村円（きたむらまどか）が突然声を上げた。それの影響で驚いた麗奈は音を外してしまった。

「ちょっと～……急に大声出さないでよ。びっくりするでしょ？」

麗奈がそう言うと、円はおかしそうに笑いながら「ゴメン、ゴメン。」と言って謝ってきた。

今麗奈は部活中で同じパートである円といっしょに、曲の練習をしていた。実は１０月の半ばにある文化祭に向けての曲を練習しているのだった。

吹奏楽部は全体練習の日にちが定まっていて、大体披露する日の二週間前から全体練習を開始する。

しかし当然今はまだ9月の序盤。文化祭まではまだまだ時間があるため、各パートでの練習時間が多く取られる。

その中で麗奈はフルートを使っている。ニューヨークから送られてきたお父さんのお金を使って、市内に出て買った大切なフルート。まだ使い始めてそこまで日にちが経っていないため、綺麗のままだった。

麗奈と円は麗奈のクラスである、一年Ａ組で練習をしていた。

「ねぇ～？ちょっと休憩しない？かれこれ二時間はやってるよ？」

円がそう言ってくるので、麗奈は時計をチラリと見た。確かにすでに6時近くになっている。

健斗と帰る約束は7時。あと一時間だ。それまでに今日の課題が終わるか、少し心配だった。

「……う～ん……ま、そうだね。休憩しよっか？」

とは言っても円はすでに集中力が切れているし、正直麗奈も切れかかっていた。少し休憩をして、ラストスパートをかければ大丈夫だろう。……ちょっとくらい時間過ぎても、健斗は許してくれるだろうし。多分、愚痴は言われるけど……

円は縁の部分をタオルで吹き始めた。フルートはこうやってタオルで吹かないと、唾が溜まって汚い。その辺はリコーダーと同じ原理なんだけど、当然音を出す複雑さはフルートが勝っている。

事実、麗奈は最初は全く吹けなかった。

それはそうと……

麗奈は少し気になっていた。というのは健斗の姿が全く見あたらなかった。てっきりこの教室で暇を潰してるのかな、と思って来たのだが、いなかった。一体どこに言ってるのだろうか？

麗奈は鞄からケータイを取り出して、メールのボタンを押した。

本文：

健斗くん、今どこにいるの？

送信っと……健斗はあんまりケータイを見ない。いつもマナーモードにしてるし、もしかしたら返事が遅いかも。

「けど、麗奈ちゃん本当に上手になったよね？三カ月前が嘘みたい。」

円が麗奈にそう言ってきて、それを聞いて少し嬉しそうに笑った。

「えへへ♪そうかなぁ？」

「そうだよ。本当に高校で初めてなの？」

「うんっ。でも、小さいときお母さんからピアノを教えてもらってたから……」

「ピアノと吹奏楽とじゃ全然違うよ！絶対音感ってやつだね。」

「そんな大袈裟なものじゃないよぉ。」

と言いながら、実は自分でも凄いなぁっと思ってたりする。夏奈からピアノを教えてもらったのは、確か麗奈が小学校二年生のときだった。

家にあったグランドピアノ……お母さんが趣味で色々な曲を弾いて、麗奈に聞かせてくれた。それを見た麗奈が何となく興味本意でやってみたいと思った。

確か……「ネコふんじゃった。」を教えてもらったのが最初だった。

「うちなんか中学のときから吹奏楽やってるんだけど、何かもう追いつかれそうって感じ。」

「そんなことないよ。円ちゃんがリードしてくれてるからだよ。」

「本当？まぁ……フルートだからリードも何もないんだけどね。」

「まぁね。」

と、冗談を言いながら笑い合っていると、麗奈のケータイが鳴った。麗奈は少し驚いてケータイを開いてみると……意外にも健斗からだった。

件名：お疲れ様。

本文：
今、ちょっとファミレスにいる。部活終わったのか？

ファミレス？

ということは、健斗は学校に今いないということだ。この辺のファミレスと言えば商店街を抜けたとこにあるやつくらいしかないから、きっとそこにいるんだろう……けど、一体誰といるんだろう？

件名：Ｒｅ．ありがとう♪

本文：
まだ終わってないよ。
ファミレス？誰と？

送信してケータイを閉じる。するとほとんど間髪を入れずにまた麗奈のケータイが鳴った。

件名：Ｒｅ．Ｒｅ．ありがとう♪

本文：
あっそ。
誰とでもいいだろ。部活中にケータイいじっててていいのかよ？（笑）

麗奈はちょっとむっとしてすぐにメールを打ち返した。

件名：Ｒｅ．Ｒｅ．Ｒｅ．ありがとう♪

本文：
ムッキー（≧≦）
学校にいないから心配してやったのに……何てやつだっ！

「誰とメールしてんの？」

麗奈がメールの文章を書いていると円がそう聞いてきた。麗奈は送信ボタンを押してケータイを閉じた。

「あ、ゴメン。ちょっとね？」

「もしかして、彼氏～？」

「えっ？そ、そんなんじゃないって。健斗くんだよ、健斗くん。」

「あっ……山中くんかぁ……」

円はシュンとして大人しくなり、麗奈を見つめた。

「もしかして、今日も山中くんと帰る約束してるの？」

「え？」

円がそんなことを聞いてくるのが珍しいと思って、麗奈は思わず聞き返してしまった。

「うん……そうだけど……」

「……そっ……かぁ……」

円がちょっと物憂げな顔をしたのを麗奈は見逃さなかった。何だか寂しそうな顔を浮かべてる。

「えっと……ほら、私自転車乗れないからさ。健斗くんがいないと帰れないし。」

「ふ～ん……」

円は再びタオルで縁の部分を拭き始めた。下を俯いて何かを考えて

いるようだった。

すると再び麗奈のケータイが鳴った。麗奈はすぐにケータイを開くと、やはり健斗からのメールだった。

件名：Ｒｅ．Ｒｅ．Ｒｅ．Ｒｅ．ありがとう♪

本文：
ハイハイ（「∀｀）
終わったらメールしろよ。迎えに行くから。じゃあな～。

麗奈はケータイを閉じて、ふぅっと息を吐いた。何だか大人な対応をされた気がした。

「……あのさ、麗奈ちゃんさぁ。」

「うん？」

麗奈がケータイから目を放して円を見ると、円は何だかもじもじした様子で麗奈をチラチラ見ていた。顔を少し赤らめて、何かを言いたげな様子だった。

「麗奈ちゃんってさ、その……山中くんと付き合ってるんだよ……ね？」

「えっ？」

麗奈は声を上げて驚いてしまった。円がそんなことを聞いてくると

は思わなかったので、何だか不意を突かれたような気がしてびっくりしていた。

すると急激に恥ずかしくなり、心臓が高鳴るのが分かった。

「つ、付き合ってないよ。別に、健斗くんとは何でもないよ？」

「……でも、スッゴく仲いいでしょ？いつもいっしょだし……」

「えっと……それはほら、健斗くんは家族だから……必然的にそうなるというかぁ～……」

「そう……」

寒気が体中から上がってくるのを感じた。この胸の高鳴りは何を意味しているのだろう……何だか嫌な予感がした。女の子だから分かる、確かな予感だった。

円は縁の部分をただひたすら拭いてた。同じ動作を繰り返し繰り返し、ただひたすら繰り返している。

「あの……円ちゃんさ……」

「うん？」

「その……もしかして……」

麗奈が言いかけたその瞬間だった。突然教室のドアが開いて、誰かが入ってきた。麗奈と円はドアが開く音に驚いて、揃ってドアの方を見ると、そこには同じ部員の高木奈津紀（たかぎなつき）がいた。

「二人ともお疲れ様。今休憩中？」

そう言ってくる奈津紀に対して、麗奈は少し慌てた様子で返事を返した。

「あ、えっと、うん。少しね。どうかしたの？」

奈津紀は麗奈や円と違って、トロンボーンを扱っている。普段パート練で奈津紀といっしょに練習することはなかった。

「うん。あのね、今、先生が急用で学校にいなくなるから、各パートで切りのいいところで終わりにして帰っていいって。」

「あ、そうなんだ。じゃあ……どうしよっか？」

「う～ん……」

円にそう聞くと、円は目の前にある楽譜をペラペラとめくり始めた。

「ここと……ここのテンポがちょっとずれるんだよね。」

「あ～……そっか。じゃあここやって終わりにしよっか？」

「そうだね。なっちゃん、ちょっと見てくれる？」

「うん。分かった。」

奈津紀は麗奈と円の近くに座り、二人の演奏を聞くことにした。

奈津紀が座ったのを確認すると、麗奈は円と目を合わせて再び練習を開始した。

第9話　新たなる決意　P．19

「だからっ……ここはこうだって。つーかスペル間違えてるし。」

「え？あれ……ｉｍｐｐｏｓｓｂｌｅじゃなかったっけ？」

「ちげーよ。ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅだろ？……ったく。」

健斗は寛太にもうすぐある試験に備えて、英語を教えているところだった。

健斗は比較的英語は得意な方で、このように人に教えるくらいまで理解はしている。

今、健斗とヒロ、そして寛太の三人で商店街を抜けたところにあるファミレスでドリンクバーを頼み、寛太のために試験教科を教えているところである。

するとヒロが寛太のノートを見ながら深い溜め息を吐いた。

「こりゃひでぇな。和訳になってない。」

どうやら寛太は英語が特に苦手ならしく、健斗とヒロがつきっきりで英語を教えているのだが、寛太の英語の出来なさは想像を遥かに越えていた。

今回の英語の範囲は不定詞と呼ばれる部分で、健斗もヒロも何の問題はない。しかしこの坊主頭はてんでダメなのだ。

「不定詞の意味上の主語を表すときは、基本はｆｏｒを使うだろ？」

「そうなのっ？」

「……」

「例えば、この“Ｉｔ　ｉｓ　ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ　ｆｏｒ　ｙｏｕ　ｔｏ　ｄｅｆｅａｔ　ｈｉｍ.”だったら、“ｆｏｒ　ｙｏｕ”がこの文の意味上の主語になる。」

ヒロが教科書の例文を指で指し示しながらそう言った。

「でも、補語の部分が人の性質のときは、“ｆｏｒ”は使わずに“ｏｆ”を使う。例えばｋｉｎｄ、ｃａｒｅｌｅｓｓとか。」

「う～ん……何でよ？」

寛太が頭を悩ませながらそう言ったのだが、ヒロと健斗は返答に困った。ヒロと健斗もただ文法の問題集や学校の授業でそう習っただけなので、何故そうなるのかは分からない。

だが、文法のルール上そうしなければならないというのは知っていた。

「そんなこと聞かれてもな……」

健斗とヒロが互いに顔を見合わせると、目の前の坊主頭が呆れた顔で言ってきた。

「なんだぁ。お前ら大したことないんだな。」

「お前ね……そんなこと言うんだったらもう教えねーぞ。」

「あぁんっ！ウソウソ！お前らすげーよっ！天才っ！尊敬しちゃう。」

寛太は大声をあげて健斗のご機嫌をとろうと必死になった。健斗はそんな寛太を見て、小さく溜め息を吐き、テーブルに広げていた問題集のページを寛太の方へと動かした。

「とりあえず、この三問やってみ？三分以内に。」

「ひぃ～っ……」

寛太は健斗の言われたとおりに問題を解き始めた。健斗はそれを見ながら一息ついて、そばに置いてあるドリンクバーを少し飲んで乾いた喉を潤した。

かれこれ三時間近く、このファミレスで寛太に英語を教えている。というか、珍しく健斗とヒロを誘ったのにはこのことが狙い目にあったのだ。

つまり健斗とヒロは寛太に良いように使われている。別に構わないのだが、何となく気にくわない。

そんなことを考えていると、ポケットの中に入れてあるケータイのバイブに気がついて、ケータイを取り出してすぐに開いた。

一時間前に麗奈からメールが来た。

部活が早めに終わったのだろうかと思ったのだが、どうやらそうではないみたいだった。

ただ健斗の姿が学校で見えないから、心配したのだろう。

それからメールが途絶えて一時間経った今、ちょうど約束の時間になった。ケータイのバイブの正体はメールだったようで、それは麗奈からだった。

件名：終わったぁ！

本文：
お待たせ！部活終わったよ（＾Ｏ＾）

健斗は飲んでる途中のドリンクバーを一気に吸い込み、それを飲み干した。時刻は七時ぴったりである。ここから自転車で行けば、約十分かかる。

「麗奈ちゃんから？」

ヒロが片手にドリンクバーを持ち、そう聞いてきた。健斗はケータイをパチンと音を立てて閉める。

「あぁ。部活終わったみたい。迎えに行かなくちゃ。」

「え？何？誰を迎えに行くって？」

問題を解いている最中の寛太が身を乗り出してそう聞いてきた。健斗が答える代わりにヒロがちょっとにやけながら答えた。

「麗奈ちゃん。」

「麗奈ちゃん?あぁっ、大森ね。何だよお前。早川がいるくせに大森にも手出してんのかよぅ。」

「はぁっ?」

寛太にそんなことを言われて健斗は不愉快に感じ、溜め息と共に声が出た。するとそれにヒロが反応してきて、健斗の脇腹を突っつきながら笑った。

「え?何?早川と上手く行ってんの?え?この、この。」

「バカッ!止めろよそういうの。別に何もねーよ。ただ……」

「ただ?」

ヒロが健斗に顔を近づけてくる。鋭い目つきに加え、眼鏡がキラッと光ったのは気のせいだろうか。健斗は思わず顔を背けて言葉を返すことが出来なかった。

「私……健斗くんの力になりたいから……」

寛太の言葉が健斗の胸の中を熱くした。寛太を見ると、寛太はニヤニヤしながら健斗を見つめていた。帰りのＨＲのときの早川の物真似だ。

申し訳ないが、ものすごく腹立だしい。

「寛太……お前、ぶん殴られたいの？それともぶっ飛ばされたいの？」

「どっちもイヤァ！」

「いいなぁ、健斗ばっかり。なんなら麗奈ちゃんを俺たちに分けろよ～。なぁ？寛太。」

「そうだ、そうだ。独り占めしてんじゃねーよ！こんにゃろ！」

隣と目の前が非常にうるさく腹立たしい。唇を尖らせて、ブーイングをかましてくる坊主頭とエロメガネ。

――こんなやつらを相手にするだけ無駄。

健斗はそう悟り、席を立つ。財布からドリンクバーの代金を置いて、鞄と自転車のキーを持った。

「とにかくっ！俺はもう行くからなっ！勝手にブーブー言ってろ！」

そう吐き捨てて、店を出ようとする健斗を面白そうに見る寛太とちょっと苦笑しているヒロ。

「ありゃ。拗ねちゃった。」

ヒロはそう呟くと、小さく溜め息を吐いた。そして鞄を持ち、健斗と同じようにドリンクバーの代金を置いて席を立つと、今にも店を出ようとしている健斗の後ろ姿を追いかけた。

後ろから寛太の慌てた声が聞こえた。

第9話　新たなる決意　P．20

風が少し強い。

道端に生えている草が風で靡き、しなれている。

秋になると昼は暑くても夜は少し肌寒く感じる。健斗は身を縮めながら自転車を漕いで学校へと向かった。

外はすっかり闇に包まれている。こんな暗い中麗奈一人で帰らせるわけにはいかない。

「で、何でお前がついてくるわけ？」

寛太を店に置いてきて、自転車を漕いで学校へ向かい始めると、後ろからヒロが同じように自転車で追いかけてきた。

彼の短い髪が風によって靡くのを見ながら、健斗は後ろを振り向いてそう言った。するとヒロは小さく口元で笑みを作りながら言った。

「いや、暇だしさ。それに麗奈ちゃんといっしょに帰りたいじゃん？」

「麗奈のこと諦めたんじゃなかったっけ？」

「別にそうだとしても、可愛い子とはなるべくいっしょにいたいじゃん？」

結局ヒロはそこにたどり着くのだ。可愛いければ誰だっていいのだろうか？十何年間こいつといるのだが、そこだけがどうもよく分からない。

「……っていうかさ、佐藤と仲直り早くしろよな。」

健斗がボソッとそういうと、ヒロは「うっ」と声を漏らした。顔を少し赤らめて、決まりの悪そうな顔を浮かべている。

二人は未だに仲直りをしていないということを、今日の昼休みに佐藤から聞いていた。早く仲直りをすればいいのに、と思うのだが、お互い意地っ張りなためそう上手くはいかないのだろう。

「麗奈のことなんかより、大好きな佐藤のことを気にしてやれよ。」

「はぁっ？誰があんな暴力女を……そのうち謝るよっ！」

「あっそ。」

健斗はまったく振り向きもせず、まるで興味がないかのように振る舞った。

「お前って、そんな意地悪だったっけ？」

ヒロが愚痴を零すようにそう言った。

「さっきの仕返しだよ。」

と、笑ってすかさず返した。

学校はまだ明かりがついているところがいくつかあった。校門もまだしまってないところを見ると、まだ学校に残っている生徒がいるのだろう。

時間は七時十分。麗奈はどこにいるのだろうか。

健斗とヒロは自転車を校門の前に置くと、ゆっくりと学校の敷地内に足を踏み入れた。

「なぁ、夜の学校ってさぁ、何かこう……ゾクゾクしない？」

「子供か、お前は。いいから早く行くぞ。」

健斗はアホなことを言ってるヒロを気にも留めず、とりあえず昇降口へと向かった。昇降口から何人かの女子生徒が出てくる。おそらく、吹奏楽部の人だろう。

健斗は下駄箱で上履きに履き替えて、階段を上り、何となく一年の教室へと向かった。

何となくだが、麗奈はそこにいるような気がした。

一年の教室の階に着いた。教室に続く廊下は真っ暗で、非常口を示す緑色の光がやけに不気味だった。ヒロの言うとおり、なんかこう

……ぞくぞくする。

A組の教室の明かりがついている。B組、C組は電気が消えている。

ということはA組に人がいるのだろう。

「A組に誰かいるな？」

後ろでぴったりとくっついてるヒロがそう言った。

「うん……ってかお前くっつき過ぎ。」

「やんっ♪健ちゃん守って～♪」

「イ・ヤ・だ。」

健斗はきっぱりとそう言い切り、さらに歩調を速めてA組へと向かった。

「……本当に冗談が通じねーなぁ。」

ヒロは後ろ姿の健斗に向かって、不満そうにそう言った。

A組の前に来て、ゆっくりと覗く。話し声がさっきからして、どうやら複数の人間がいるらしい。

そこには健斗の読み通り、麗奈がいた。麗奈の傍に女子が二人いる。その二人は小学校の頃から健斗もよく知っている、北村円と高木奈津紀だった。

北村円は麗奈と同じくらいの身長で、佐藤と同じようにポニーテールが良く似合う子だ。高木奈津紀は背が高く、軽く茶色のかかったショートヘアーが特徴的だ。小学校のときにチビチビ言われた記憶がある。

どちらもB組に属していてクラスが違うため、高校に入ってからはあまり会話をしていない。

健斗は少し照れくささを感じながら教室に入る。するとその音に気がついた麗奈と高木と北村は一斉に健斗の方を見てきた。

「あ、来た♪」

屈託のない笑顔を見せて麗奈はそう言った。健斗はそんな笑顔を見ながら溜め息をついた。

「来た、じゃねぇよ。どこにいるかくらい言えよな。」

「でも早かったじゃない。私がここにいるって分かったんでしょ？」

「……まぁ、そうだけど。何となく。」

麗奈は妙に鋭いところがある。そうなると、健斗は言い返す言葉がいつも見つからなくなるのだ。

そう、それは翔を相手にしてるのと同じように。

「山中久しぶりじゃん。元気してた？」

健斗が三人に歩み寄ると、高木が声をかけてきた。確かに高木と会

話をするのは中学以来のような気がする。

「そうだな。とりあえず元気してた。あ、北村この前は迷惑かけてごめんな？」

健斗は麗奈の隣に座っている北村を見て小さく笑いかけた。相変わらずポニーテールのよく似合っていて、人形みたいな子だと思う。

「あ……ううん。迷惑だったなんて思ってないよ。気にしないで。」

「…そっか。」

「うん。」

健斗はまた小さく北村に笑いかけると、北村も小さく笑いかけてくれた。二人のそんなやり取りを麗奈は少し黙って見つめていた。ちょっとだけモヤモヤした思いが胸に滲み出た。

「麗奈ちゃんお待たせ～！ヒロくんが来たよ～！」

何故か先ほどからテンションが高いヒロが少し遅れて教室に入ってきた。いきなりのことだったので麗奈も、そしてもちろん北村や高木も驚いて目を見張った。

ヒロは三人の姿を確認すると少し意外そうな顔を浮かべた。

「あれ？何か結構懐かしい奴らがいんな。」

もちろんヒロにとっても、高木や北村は顔馴染みであった。

「真中うるさーい。相変わらず何も変わってないね？」

高木がちょっと呆れ顔で、それでも久しぶりに会ったのが少し嬉しいのか笑って冗談を言うようにヒロにそう言った。

「高木と北村も何も変わってねーな。組ちげーから全然会ってないけど……元気だったか？」

「うん。それなりにね。ねっ？」

「うん。あ、真中くんハンド部辞めたんだって？高橋くんが言ってたよ。」

北村がヒロにそう言うと、ヒロは苦笑して「まぁな。」と答えた。その辞めたことに関して複雑な心境を抱いているということをこの二人は知る由もないだろう。

健斗はそんなことを考えながら、健斗自身も苦笑した。するとだった。麗奈が驚いた顔のまま、健斗の服を引っ張った。その抵抗を感じ麗奈を見ると、麗奈は心配気な顔をして健斗を見ていた。

「ヒロくんと……仲直りしたの？」

「え……」

囁くような声で麗奈が健斗にそう聞いてきた。

健斗は返答に困って思わず聞き返してしまう。確かに今日の今日までヒロと会話を交わしていなかったけど……それを麗奈が喧嘩をしていたと捉えていたことに戸惑いを感じた。

確かに二人の間に気まずい空気があった。でも別に喧嘩をしているつもりなんてなかった。

なんてことを今ここで麗奈に話しても上手く話せないだろうし、正直面倒臭さがつきまとったため健斗は小さく笑って「あぁ。」と答えた。すると麗奈は嬉しそうに、そして安心したような笑顔を見せた。

その笑顔が何だか久しぶりのような気がした。

そんなことを考えていると、高木が突然立ち上がって言った。

「それじゃ、うちら楽器の点検してから帰るから。麗奈ちゃん先帰っていいよ。」

「えっ？うそっ？私も手伝うよ。」

麗奈が申し訳ないと言わんばかりに進んで申し出たが、それを高木が笑顔で断った。

「ううん、大丈夫。せっかく迎えに来てくれたんだから。」

そう言われた麗奈は健斗の方をチラリと見た。健斗自身、別にどうでもよかったのだが、確かになるべく早く帰りたいという気持ちもある。今日はメガネと坊主の相手をして疲れたのだ。

麗奈は健斗から視線を帰ると高木と北村に向け、感謝と詫びの気持ちを込めて苦笑した。

「じゃあそうさせてもらうね。本当にごめんね？」

「ううん。また明日ね。山中と真中も。」

「おう。」

「またね。」

そうして健斗とヒロと麗奈は高木と北村に向かって手を振り、教室を後にした。

第9話　新たなる決意　P．21

健斗たちは昇降口で靴を履き替えて、校舎から出て、自転車が止めてある校門へと向かっていた。

「つーか毎日大変だな。こんなに真っ暗になるまで残ってんだもんな。」

健斗が歩きながら麗奈にそういうと、その後を懸命に追いかけながら麗奈はいつものように能天気な笑顔を見せた。

「えへへ～♪偉いでしょ？」

「まぁな。」

「今吹奏楽部何やっての？」

健斗も同じことを思った。今の時期、吹奏楽部はコンクールとかそういうのはないと聞いている。夏のコンクールが終わり、今度コンクールがあるのは冬だ。（と、麗奈から聞いていた。）

「今は文化祭に向けての練習だよ。」

「文化祭？へぇー、発表とか？」

「それもあるし、前夜祭や後夜祭でも色々とあるの。今全部で六曲練習してるんだ。」

「六曲も？何やんの？」

「それは内緒。発表見に来てね。」

と言いながら、麗奈は健斗とヒロにウインクをする。どうやら内緒にしときたいらしい。それほど頑張っている、ということなのだろうか。麗奈の意図を汲んで、健斗はそれ以上深入りせず「あぁ。」と答えた。

「文化祭かぁ……うちのクラスは何やんだろーな？」

「さぁ……今度決めるんじゃね？」

「お前何か考えてる？」

「いや……さっぱり。」

「委員とかどうするんだろうな？」

「お前やれば？」

「無理無理。麗奈ちゃんは？」

「う～ん……面白そうだからやってみようかなぁ。」

「お前が委員のクラスは崩壊するだろ……」

「はぁ～？それってどういう意味～？」

「どういうも何も言葉通り……」

グランドの前を通り抜けるときだった。

健斗は言いかけの言葉を飲み込み、少し離れた距離から健斗たちを真っ直ぐ見つめて歩いてくる人物を見た。

健斗はそれが誰だか確認すると、冷や汗が身体中をかけめぐる感覚がした。健斗の横で騒いでる麗奈も、健斗の様子が変わったことに気づき、きょとんとした様子で健斗を見上げる。

「どうしたの？」

そう言ってからヒロの方を見ると、ヒロも同じように前を見つめて固まっていた。そして麗奈は二人が見ている人物を、二人に向かって歩いてくる人物を見る。

知らない顔だった。長袖のスポーツウェアにハーフパンツとソックス。髪は短めで、背は麗奈よりちょっと大きいくらい、そして頬がふっくらとしてるのが印象的だった。外見からして、サッカー部らしき人間だ。

その人物は健斗とヒロの前で立ち止まった。穏やかな顔をしているが、彼もまた健斗たちと同じように困惑の色を見せていた。

「……久しぶり。のんちゃん。」

「久しぶり。」

健斗とヒロがその“のんちゃん”という人にぎこちない笑顔で挨拶をした。

「……うん。久しぶり。元気……だった？」

「うん……まぁ。」

健斗・ヒロ、そして“のんちゃん”との間にはどこかぎこちない空気があった。お互い気まずそうに作り笑いを浮かべている。

「部活終わったの？」

健斗がそう聞くと、のんちゃんは小さく頷いた。

「そっか……」

「この間……」

「え？」

「この間……夏休み前のとき。松本先輩と……」

「あ……」

健斗は決まり悪そうな表情を浮かべている。のんちゃんはそんな健斗を真っ直ぐ見つめながら、ポツリとつぶやいた。

「すごかった。さすが健斗だな、って思ったよ。」

「……たまたまだよ。でも、サンキュー。」

「うん……じゃあ、僕行くよ。」

「おう。またな……」

のんちゃんは鼻をすすり、小さく頷いて健斗たちを過ぎ去ろうとした。ところが不意に振り返って健斗たちを見た。

「そういえばヒロ、ハンド部辞めたんだって？」

ヒロはのんちゃんの方へと向き直した。そして決まり悪そうに後ろ頭をガリガリと掻きながら「うん。」と一言だけ答えた。

のんちゃんはそれを聞くと少し寂しそうな表情で「そっか……」と呟いた。

「それじゃ……またね。」

それだけを言い残し、今度は本当に健斗とヒロの元から遠ざかっていく。麗奈はその後ろ姿を見つめていた。そしてその姿が見えなくなると、今度は二人の顔を見上げる。

その表情は強張っていた。先ほどの和やかな雰囲気など全く感じさせないものだった。そして麗奈は瞬時に察した。

麗奈は二人がただたんに喧嘩をしたのだと思っていたのだが、そうじゃない。

麗奈はそのとき、ホタル池を見ながら健斗と話したことを思い出していた。

第9話　新たなる決意　P．22

真っ暗な帰り道で健斗たちはゆっくりと自転車を漕いで家へと向かっていた。その間誰も口を開こうとはしなかった。

健斗とヒロは何かを考え込んでいるようだった。麗奈はそれを分かっていて、しかし返ってそれが麗奈を困惑させていた。

おそらく、さっきの“のんちゃん”という人と何か揉め事があったのだろう。そしてその揉め事が、恐らく健斗たちの過去に遡るということに麗奈は気づいていた。

過去に遡るということはすなわち、神乃中サッカー部のこと。それを容易に聞いていいのか、麗奈は分からず、困惑していた。

それからしばらくして家の明かりが見えてきた。健斗の家とヒロの家の明かりだった。健斗とヒロの家は隣同士だ。

「なぁ健斗。」

「ん？」

久しぶりに口を開いたヒロの呼びかけに健斗は穏やかな口調で答える。自転車のスピードをさらに緩めて、ヒロと健斗は停止した。

「お前、家来いよ。」

「え？」

「いいだろ？」

健斗とヒロはしばらく見つめ合っていた。その会話からすればなんてことない幼なじみの会話である。だが、それが真意のカモフラージュだということを麗奈は気づいていた。

健斗はしばらく考えてから、ふっと表情を緩めた。

「そうだな。久しぶりに行こうかな。」

健斗がそう言うと再び自転車を発進させた。そして健斗の家の前に着くと、再び自転車を停める。麗奈は後ろから降りて、自転車の支えを下ろす健斗を見上げた。

「ヒロ先家帰ってろよ。すぐ行くから。」

健斗がヒロにそう言うと、ヒロは何のためらいもなく即座に頷いた。

「オッケー。じゃあ、麗奈ちゃん、また明日な。」

「あ、うん。……バイバイ。」

麗奈が軽く手を振るとヒロはニコッと微笑んで自分の家へと帰っていった。

そして健斗の方にもう一度視線を向ける。健斗は呑気に欠伸をして、自転車を庭まで運んでいく。

麗奈は家の前で呆然と立っていた。微かに庭の方から会話が聞こえた。健斗とお母さんが話しているのだろう。ゴンタの吠える声も聞

こえた。

しばらくすると健斗が帰ってきて、麗奈の姿を確認すると不思議そうな表情で麗奈を見た。

「何やってんの、お前。俺、ヒロん家行くから。中入んないの？」

「……」

麗奈は答えなかった。答えず、健斗の目を見つめた。健斗はきょとんとして首を傾げる。

「どうした？」

「……どうして隠すの？」

やっと言えた言葉がそれだった。今まで溜まっていた思いがこぼれるようだった。

しかし健斗はさらに麗奈を変なものを見るような目で見た。

「何を？」

何だか惨めな思いがした。待ってたのに、ずっと待ってたのに健斗は何も話そうとしない。分かってるのに、麗奈には何も話さないのだ。

麗奈の目の前であんなことが起こったのに、健斗は隠そうとする。そしてヒロと二人だけで解決しようとする。

腹が立った。それと同時に泣きそうなくらいに惨めな思いになった。

自分は健斗にとって特別な存在なんだ、という思いがどこかにあったのかもしれない。その思いは結局麗奈一人の独りよがりだった。健斗にとって麗奈はただの家族同然。そして自分の抱えている問題なんて絶対に言おうとなんてしない。

「……もういい。知らない。」

麗奈が諦めるように言い捨てて、家の中に入ろうとした。するとその手を健斗が握って引き止めた。

「何だよ。何急に怒ってんの？」

「怒ってないよ。」

「怒ってんじゃん。」

「怒ってないってばっ！」

思わず声を荒げてしまう。健斗はきょとんとして麗奈の顔を見つめる。そしてするっと紐が解けるように麗奈の手を放した。麗奈と健斗の間に、少しの間沈黙が続いた。

どうしてこんなに苛々してるのか自分でも分からなくなるほどだった。

「……さっきの人。」

「え？」

健斗の顔色が瞬時にして変わった。その様子が麗奈の確信を強めた。

「健斗くんたちがさっき話してた人……中学のときのサッカー部の友達なんでしょ？」

「……」

答えない健斗を麗奈は真っ直ぐ見つめる。答えたくないという意識が伝わる。それが麗奈をさらに苦しい気持ちにさせた。

「健斗くん、サッカーのことで悩んでるんでしょ？ずっと……きっとヒロくんとマナが喧嘩したときからずっと……ずっと考えてたんでしょ？私に小山さんの話をしたときも、ずっと考えてたんでしょ？」

麗奈の問いかけに全く答えてくれない。ただ麗奈の目を真剣な眼差しで見つめていた。

「最近の健斗くん……何だか変だったもん。ずっと何かを考え込んでるみたいで。思い悩んでた。でも私、何も言わなかったよ。健斗くんが私に話してくれるのを待ってたから。私に話してくれるのを信じてたの。」

何も言おうとしない健斗を気に留めず、麗奈は胸の内にある思いを吐き出してしまおうと思った。

「信じてたのに……まだ隠すの？どうして自分一人で解決しようとするの？私は健斗くんの……何なの？」

ただの家族？それともただの同級生？

本当にそうなのだろうか？健斗が麗奈に対して何の思いを抱いてないとしても、それ以上の関係だと麗奈は感じていた。

胸が苦しくなった。今まで……それは夏祭りの日から今にかけて溜まりに溜まり続けた、健斗に対する全ての思いのような気がした。

「私は……私……誰よりも先に……誰よりも大きく……健斗の力になりたいの。健斗を支えたいの。なのに……健斗は……」

それ以上言葉が続かなかった。溜まり続けた思いを吐き出したはずなのに、より辛い思いが麗奈を取り巻いていた。

健斗には届いただろうか？麗奈の気持ち……

届いてないかもしれない。もしかしたら、うざがられているかもしれない。家の前で、何を言ってるんだお前は、といつもの調子で言ってくるかもしれない。

何だかどうでもよくなってきた。涙が頬を伝う。最近涙脆くなっている。強くなろうと決めたのに、健斗の前だと感情が抑え切れない。

これ以上健斗の前にいると自分が惨めなだけだった。諦めるように健斗の元から消えようと決意した。

すると……麗奈の柔らかい髪に健斗の手が触れた。それに驚いた麗奈は健斗を見上げる。

健斗は今まで麗奈に見せた表情の中で一番優しい表情で麗奈を見て

いた。慈愛に満ちた目で麗奈を見つめていた。

「ごめんな。」

久しぶりに口を開いた一言目がそれだった。その言葉が麗奈の緊張していた体をふっと緩めた。

「お前の言う通りだ。お前には……ちゃんと話さなきゃな。」

そう言って麗奈の肩に触れる。体中に電気が走ったように、麗奈の体が一瞬ピクッとした。

鈴虫の鳴き声が聞こえた。綺麗な音色が麗奈の耳の中に響いていた。

第9話　新たなる決意　P．23

ヒロは窓の外を呆然と眺めていた。ここからスキの草が見えるということはもうすっかり秋を表しているということだった。

風は寒くもなく暑くもなくちょうど涼しい温度だった。

最近ぼ～っと物思いに耽ることが多くなったと思う。色々な思いが交差しながら、深い暗闇を歩き続ける。

のんちゃんと会うのは久しぶりだった。健斗もヒロもとても仲が良かった。ふっくらとした頬は相変わらず食べちゃいたいと思うくらい柔らかそうだった。そして温厚な性格も、それに似合わないゴツい体格も、短い足も、何も変わってなかった。

のんちゃんにとってはきっと自分の生活なんて何も変わっていないのだろう。変わったのは、自分たちの方なのだ。少しの間忘れていた思いが蘇ってしまった。

健斗を呼んだのは別に大した理由なんてない。ただ少し……話がしたかっただけだ。これからどうするべきか、なんて話を掘り返すようなことは言うつもりはなかった。

健斗と話すことで何かが変わるわけではないなんて分かってる。

ヒロはチラッと机に置いてある写真を見た。中二の春に撮った写真だ。神乃中サッカー部、春の地区大会優勝したときの写真……

そこにはサッカー部のメンバーと……健斗と翔、そして自分が嬉しさを全力で表した表情で写っている。

あのとき……いつものような日常だったら今頃健斗ももっと違う道を歩んでいたのにな……

今頃、Ｕ－１６で大活躍でもしている。俺はそれを、遠くから見ているんだ。

そんなことを考えていると、ヒロの部屋のドアがノックされる音が聞こえた。ヒロはその音にはっと我に返り、ドアの方を向いた。

健斗が来たのだろうと思って待ち構えていると、驚いたことに中に入ってきたのは一人じゃなかった。健斗の後ろに麗奈がくっついていた。意外な展開にヒロは健斗に目を向けた。

健斗はヒロの視線を受け、苦笑いを浮かべた。

「お前、いいの？」

ヒロが尋ねると、健斗はほとんど間髪を入れずに小さく頷いた。

「うん。麗奈には……ちゃんと話しておこうって思ってさ。」

健斗の言葉を受け、麗奈ははにかんで笑い、恥ずかしそうに下を俯いた。

正直ヒロは驚きを隠せなかった。健斗が自分の悩んでいる問題を人に話そうとするやつではなかったからだ。いつもこいつは自分一人で問題を解決しようとする。それが正しかろうと悪い結果だろうと

他人の意見を取り入れようとはしない。

今回もそうなると思っていた。だが違った。健斗は自分から麗奈に“聞いてもらいたい”と言ってる。それが大きな変化だってことを、長い付き合いであるヒロが一番感じ取っていた。

同時にやっぱりなという気持ちもあった。健斗が気づいていないだけで、麗奈は健斗の中で……

「ごめんな。麗奈ちゃんが来るとは思ってなかったから……あ、今お茶持ってくるから適当に座ってて。」

女の子を部屋に上げた以上、何ももてなさないわけにはいかない。ヒロは立ち上がって麗奈にそう言った。

「あ、別にいいよ。そんなに気を遣わなくっても。」

「いいから。ちょっと待ってて」

ヒロはそう言うと、部屋を後にした。

健斗と二人で残された麗奈は少しもどかしい思いをしながら、ふぅっとため息をついた。そしてチラリと健斗を見る。健斗は退屈そうな顔で猫みたいに欠伸をしている。

何だか少し気恥ずかしい気がして、麗奈は慌てて目を逸らした。そ

してそれを紛らわすように、ヒロの部屋の中を見渡す。飾り気のない普通の部屋だ。が、机には参考書などがたくさんある。

健斗の部屋に似ていた。

「何キョロキョロしてんだよ。」

健斗にそう言われて麗奈ははっと健斗を見た。健斗はにやけて麗奈を見ていた。

「男の子の部屋に入ってるから、緊張してんの？」

「べ、別にそういうわけじゃないよ。」

といいつも、少しはそういう気持ちもあった。健斗の部屋に入るのは慣れていたけど、他の男の子の部屋に入るというのは何だか変な感じがする。

「あいつも相当テンパってるみたいだぜ？お互いうぶいな。」

「健斗くんに言われたくないんだけど……」

「俺は早川を家に入れたことあるもんね。」

「嘘っ？いつっ？」

「さぁ？いつだったかなぁ？」

麗奈の記憶が正しければ……健斗が松本絢斗に暴行を受けた日と麗奈が風邪をひいた日だ。そのことを言っているのだろうか？

だが健斗は知らないふりをしてまた欠伸をしている。すると健斗は突然立ち上がったと思うと、ベッドの上に寝転んだ。

「勝手に人のベッドに寝転んでいいの？」

「いいだろ別に。こいつん家の枕が最高に気持ちいいんだ。」

というと、サッカーボール型の枕を取ってそれを頭の下に敷いた。やっぱり幼なじみだということがあって、健斗はヒロの家に慣れているみたいだ。

そんなことよりも麗奈は少し気にかかっていることがあった。

「……ねぇ。」

「ん？」

「いいの？」

健斗はそれを聞くとうんざりしたような顔つきで麗奈に言った。

「さっきもそうだったけど、お前の言うことには目的語が抜けてる。」

そう馬鹿にした言い方をして、健斗はふんっと鼻で笑った。

まったく……皮肉を言わせたら世界一かもしれない。だがそんなことに構ってる場合ではないので麗奈は無視することにした。

「健斗くんたちの話のこと。本当に私が聞いてもいいの？」

「いいも何も、お前が知りたいって言ったんだろ？本当に貧相な記憶力だな。同情するよ。自分で言ったことをすぐ忘れるなんて。」

――むかっ！

「あのねっ！私は真面目に聞いてるのっ！」

「俺も真面目に言ってるよ。お前の可哀想な記憶力について。」

もうダメだ。一旦皮肉を言い出したらこれだ。下手に何かを言えば言い返される。今は健斗のペースだ。

麗奈は諦めて疲れからか大きくため息をついた。当の本人はベッドの近くに置いてある漫画を手に持って読みこんでいる。

何だか怒るのも馬鹿らしくなる。

しばらく沈黙が続いた。するとだった。

「……お前には……話しておきたいっつーかさ。」

「え？」

突然の言葉に麗奈は自分の耳を疑った。健斗は漫画に目を落としながら、しかし意識ははっきりと麗奈に向けて言ってきた。

「お前には、その……色々と世話になってるし。ただ……話しておくべきかなって思ったんだよ……ただそれだけ。」

――素直じゃない。

それでも嬉しかった。健斗が麗奈のことを少なくとも家族以上の気持ちで見ていてくれたことが。麗奈の独りよがりではないことが分かって、全身が喜びで震えた。

でもそれを言葉には出さない。何だか負けた気がして悔しい。でも……健斗に対する気持ちがさらに強まったような気がする。

――「話したい」って素直に言え！バカッ！

心でそう叫んでみる。　でもそういう自分も素直じゃない。

「ありがとう」の一言が素直に言えないのだから。

健斗は決まりが悪くなったのか、パタンと漫画を閉じて「ったく、つまんね。」と言いながら投げるようにして漫画を置いた。

「もうっ。人のなんだからもっと丁寧に扱いなよ。」

「いんだよ。俺これ何度も読んでるし。」

「どういう理屈だよ。」

麗奈が言おうとした言葉が後ろから聞こえた。振り返るとそこにはヒロがお膳に飲み物を乗せて立っていた。

健斗はビクッと体を跳ねさせ、乱暴に置いた漫画を元の場所に丁寧にしまった。

そんな健斗の仕草を麗奈はおかしそうにクスクスっと笑った。ヒロは呆れるようにため息を吐く。

「ったく人ん家で好き勝手すんなよな。」

「いいじゃん。昔からの付き合いだろ？ヒーくん♪」

「ヒーくん？」

麗奈がその呼び方に反射的に反応した。

「幼稚園のときのあだ名だよ。今じゃばぁちゃんくらいにしか呼ばれてないけど……あとお前、次その呼び名使ったらぶん殴るかんな。」

健斗はそう言われるとひきつった笑顔を見せた。麗奈は二人のやり取りを見ておかしそうに笑った。やっぱり二人は長い付き合いなんだなと思う。たまに羨ましく思う。

「ごめんな。何にもなくてさ。麦茶でいい？」

と言って、麗奈の前に麦茶が入ったコップを置いた。麗奈は「ありがとう」と言って、その麦茶を受け取った。ヒロは健斗にも麦茶を渡すと、自分は椅子に座りふぅっと息を吐いた。

「さて……何？お前麗奈ちゃんに全部話す気？」

「うん。」

ほとんど間髪を入れずに健斗は麦茶を少し飲みながらそう答えた。
それを聞くと麗奈は何だか妙に身構えてしまい、姿勢をよくした。

「どっから話すかなぁ……」

ヒロはガリガリと困ったように後ろ頭を掻いた。三人ともまったく口を開かず、しばらく沈黙が続いた。

「……前さ、お前に話したよな？」

「え？」

「縁側で、お前に俺の悩んでること。サッカーが今、やりたいんだって。」

「あ、うん……」

確かにその話なら聞いた。健斗はサッカーが今やりたいんだって。でもそれには色々と責任がつきまとうって言っていた。お母さんやお父さんにも迷惑がかかるだろう。お金だってかかる。竜平さんにも迷惑がかかる。

人に迷惑をかけてまで自分のやりたいことをやっていいのか？

健斗はそれを悩んでるようだった。

「それだけじゃないんだ。」

「それだけじゃない？」

「うん。やりたいからやるっていう簡単な話じゃないんだよ。もっ

と……ちょっと複雑な事情が俺らにはあってさ……」

「……事情？」

「うん。何て言えばいいかな……今日会った、のんちゃんの話にもなるんだけど……」

健斗が苦笑しながらそう呟いた。するとそれをフォローするようにヒロが口を開く。

「俺が説明しよっか？要は、翔が死んだ後の日のことを話せばいいんだろ？」

「うん……そうだな。」

何だか本題に入るみたいだ。

翔……それは健斗とヒロのもう一人の親友。

健斗が心に深い傷を抱いてた。その理由は自分のせいで翔を亡くしてしまったと思い込んでいたからだ。その悲しみは計り知れない。

ただ……そのこと自体の話は聞いたけど、そのあとの話を聞いていない。ということはそのあとに何かがあったということだろうか？

とにかく話を聞こう。麗奈は真っ直ぐヒロの顔を見た。

「……あれはそうだな……中二の夏だった。夏休みに入る、少し前だったかな？」

「健斗っ！出てこいよっ！いつまで引きこもってんだよっ！」

翔の葬式から三日経った。ヒロは健斗の鍵のかかっているドアを叩きながらそう叫んだ。だが返事はなかった。健斗はもう葬式の日からずっと学校に来ていない。健斗のお母さんの話によると、ろくな食事も取らず、中で引きこもっているらしい。

翔が死んだのは誰のせいでもない。お前のせいじゃない。だから気に病むな。

そう言ったはずなのに、健斗は自分を責めている。罪悪感という苦しみから離れることが出来ないでいる。

「話したくないんだ。」

弱々しい声が部屋からした。いつもの調子ではなく、完全に精神的な疲労を表していた。

「いいから開けろっ！いつまでそうしてるつもりだよっ！」

ヒロがそう言っても健斗は一向にドアを開けようとはしなかった。しかし弱々しい声が返ってきた。

「もう、外に行きたくない……翔がいない世界が……怖い……」

完全に精神が崩壊している。罪悪感という重い物体に押しつぶされている。しかしそれがヒロの怒りに火をつけた。

「てめぇっっ!!いい加減にしろっっ!!お前一人が悲しいんじゃねぇんだよっっ!!開けねーつぅんなら、このドアふち破るぞっ!!!」

声を張って、健斗にそう言った。隣で見ている健斗のお母さんがハラハラしているのが見なくても分かった。

これでも開けないんだったら、本気でぶち破ってやるっ!!

そう心に決めていると、ガチャンと鍵が外れる音がした。するとずっと開かなかったドアがゆっくりと開いた。そこから健斗の顔が見えた。だが、それを見たときヒロの背筋が凍った。

ヒロの知らない健斗の顔だった。

頬はくぼみ、目の下には隅が出来、唇はカサカサに枯れ、髪はボサボサだった。

光のない虚ろな瞳をヒロに向けた。

目頭が熱くなった。こんな健斗は見たことがなかった……それでも逸らすわけにはいかなかった。

自分が強くいなければならない。翔の死を乗り越え、健斗を支えな

ければならない。

そう心に決めた。

第9話　新たなる決意　P．24

夕暮れは完全に沈もうとしていた。ヒロはサッカーボールを片手に持ち、健斗の手を引っ張る。

「いいから来い！」

ヒロは強引に健斗を外に連れ出した。そして健斗の手を引いて、公園へと目指す。健斗は最初のうちは抵抗していたのだが、すぐに観念してヒロのなされるままになっていた。

お互い一言も話さず着いた公園でヒロは健斗から距離を取って互いに向き合うような姿勢を取った。

そして困惑している健斗に手に持っていたサッカーボールを転がす。健斗はそれを受け取ると、ヒロの方を悲しそうな目で見た。

「何のつもりだよ……？」

何のつもりなのか、自分でもよく分からなかった。こんなことをして、何を試すのか分からない。だが、何となくやらなければならない、ヒロは妙な使命感に寄っていたのかもしれない。

家に帰ろうとしてる子供たちが小さな坂の上から自分たちを見下ろして、「勝負してるっ！カッケー！」と言っているのが聞こえた。だが、そんな子供たちの歓声も一瞬で風にかき消される。

「いいからっ！行くぞっ！」

雄叫びをあげながら、ヒロは健斗に突っ込んでいく。ヒロの専門分野はキーパーだったのだが、ディフェンスにもかなり自信はあった。並大抵のやつらになら負けないという自負もあった。

しかしそんなヒロを健斗は鮮やかなテクニックでかわしてくれるに違いない。そう思っていた。しかも何の捻りのない突っ込むだけの力まかせのディフェンスだ。健斗にとってこんなに恰好なやつはいない。

そう思っていたのだが、現実は違った。健斗はその場から一歩も動かず、ヒロにボールを取られてしまう。ヒロは奪ったボールなんて気にも留めず、振り返って健斗を見た。

健斗は酷く息を荒らし、大量の汗を流していた。そしてみるみるうちに顔が青ざめていき、その場に唸りながらうずくまる。

ヒロは驚いて健斗の元にすぐに駆け寄った。

「おい、健斗っ！大丈夫か？」

ヒロが健斗の肩に触れようとすると、健斗自身の手がそれを制した。

「触るな。」

低くうねるような声で健斗はそう言った。ヒロはビクッと体を震わせて、健斗の言うとおりにした。

酷くリズムがバラバラの呼吸も次第に落ち着きを見せ始めたときだった。

「……ダメなんだ。」

「え？」

呟くように健斗はそう言った。そして泣き出しそうな声で続けて言った。

「ダメなんだ！もう……ボールに触るだけで、翔の顔が思い浮かぶ。あいつの……あいつ……あいつがハネられた時のことが……俺……俺の中で……」

途切れ途切れの言葉だった。それでも健斗の言うことは、なんとなく理解した。罪悪感と喪失感が健斗の心に深く根付いてしまっている。自分には、どうしてあげることも出来ない。

惨めで無力な自分が悔しかった。気がつくと、頬に涙が伝っていた。それを手で拭う。しかし溢れ出してくるみたいに、目から涙が止まらなかった。

「……クソッ……クソッ……」

時間が戻ればいいと思った。翔のいる世界に帰りたいと思った。

今いる世界が……憎くてたまらなかった。

それでもヒロは健斗に学校に来るよう説得をし続けた。その甲斐あってか、健斗は一週間振りに学校に顔を出した。

健斗はヒロと共に教室に入ると、クラス中の人が健斗に向けて視線を向けた。健斗の変わりようにはっと息を呑むやつもいれば、健斗が学校に来たこと自体に驚いてるやつもいる。突然この世の全てが止まったかのように、音がピタリと止んだ。

だが健斗はその世界に目も暮れず、下を俯いたまま自分の席に座った。

ヒロもそれにつられるように自分の席に座る。そしてしばらくすると、

「健斗、大丈夫か？」

クラスの内の一人が健斗の席の前に来て声をかける。それが発端となり、次から次へと、気がつけばクラス中の人が健斗を囲むように健斗の周りに集まっていた。

「きっと辛いだろうけど元気出して？」

「健斗のせいじゃないって。ただの事故じゃん、事故。」

「仕方ないよ。」

「自分を責めるなよ。」

「山中くんは悪くないよ。だから気を落とさないで……」

クラスのみんなが健斗に激励の言葉をかける。そしてそれぞれの言葉に「うん、そうだよ。」「そうそう。」などと同調する声も上がる。

みんな健斗のことを本気で心配して、健斗を励まそうとしてくれたのだろう。一人のクラスメートとして、何かをしてあげたかったんだと思う。

健斗にもその気持ちは届いてるはずだった。

「山中っ！落ち込むなって。ほら何だけ？あの……“みっかぁ～と経てば、元どお～り～”ってやつ。」

「言えてるっ！」

健斗の周りで笑いが起こった。和やかな雰囲気を作ろうと健斗のためを思って冗談を言ったのだ。

みんな健斗のことを心配していた。

「……っさい……」

「えっ？」

健斗はボソッと呟くとギロッと周りにいる人たちを睨みつけた。怒りを込めた表情で、彼らを睨みつけた。健斗が今まで見せなかった、普段と違う剣幕に誰もが息を呑んだ。

「うるさい。目障りだ。消えろ……」

「え……？」

「あ……」

健斗は低く唸るような声で一度だけそう呟き後は全員睨みつけるだけだった。クラスの人たちは、突然のことに当惑していた。どうして健斗が怒ったのか、分からないと言った表情だった。

いち早くそれを察したヒロは健斗とクラスのみんなの間に割って入った。

「わ、悪いみんな。こいつ相当ショック受けてるからさ……ちょっとそっとしといてあげて。」

ヒロの言葉にクラスのみんなは動揺を隠せないと言うようにざわめき始めた。そしてみんなヒロの言うことに従うことにした。それぞれ健斗の周りから去っていく。

健斗の周りに人がいなくなるとヒロは安心するようにほっとため息をついた。

そして健斗の方に視線を落とした。健斗はヒロを睨みつけていた。

――余計なことするな。

ヒロにそう心で訴えている。健斗の足元で作っている握り拳に目を向けた。力を込め過ぎていたのか、ワナワナと震えていた。

「許せなかったんだ。」

健斗はポツリと呟くように言った。それを聞いて麗奈はヒロから健斗へと視線を変えた。健斗は苦笑いを浮かべていた。自分の失敗を悔い改めているような表情だった。

「許せなかったんだ。みんな、翔が死んだことなんてこれっぽっちも気にしていない。そう思えてめちゃくちゃ腹が立って……あのときヒロが止めてなかったら、俺……多分近くのやつ殴り飛ばしてた。」

そんなこと……ないのにな。

健斗はそう呟いて視線を窓の外へと向けた。ヒロの部屋からススキが一辺に渡って見える。その中から鈴虫の音色が風に流れて聞こえた。

「それに……あのときは慰めの言葉なんていらなかった。その逆。責めて欲しかったんだ。お前のせいだ。お前が翔を殺したんだって。……何にも知らないやつが綺麗事を抜かしてる……そうとしか……思えなかったんだ。」

健斗は目を細めて遠くの何かを見つめていた。麗奈はそんな健斗の表情を見て、胸が苦しくなるのを感じた。

あのときと同じだ。

健斗と大喧嘩をし、仲直りをした夜のときと同じ表情だ。過去に戻りたい。健斗はそう口にした。麗奈は、それがたまらなく嫌だった。怖かった。健斗がどこかへ行ってしまうような気がして、すごく怖かったのだ。

今も同じ。健斗はどこか遠くへ行こうとしてる気がした。どうしてそういう風に思うのか、麗奈はやっと分かった気がした。

健斗の心は、その日に置いてきたままだったのだ。ずっと健斗の中には心がなくなっていた。今も……麗奈が知らないだけで、今の健斗は本当の健斗ではないのかもしれない。翔が死んでしまったその日から、健斗の中の時間は止まったままなのかもしれない。

麗奈にはそんな気がしてならなかった。だから全てを知りたい。健斗の、ヒロの過去を。健斗の苦しみを……全てを知りたいと思った。

「……それで、どうしたの？」

麗奈が先を促すように聞くと、ヒロは頷いてからまた話し始めた。

「……それから昼休みになった。そしたらさ、サッカー部のやつらが俺らのクラスに来たんだ。」

ヒロはそう言いながらそのときの記憶を明確に思い出していた。

第9話　新たなる決意　P．25

授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。それとほぼ同時に、クラス中のみんながざわめき始めた。これから昼休みに入るため、それぞれ色々と思うことがあるのだろう。

翔がいない世界は悲しいくらいにいつも通りだった。一番前の一番右の席。そこが翔の席だった。どんなに端っこであっても存在を強く印象づけていた翔。本人がいなくなるとその席は輝きを失ったかのようにひっそりと、孤独をかみしめているようだった。

ヒロはチラリと健斗の方を見た。健斗は変わらず、そこに座ったままただ一点を見つめていた。何を見つめているのだろう。聞いてみてもどうせ「別に。」と返ってくるに決まっている。

ヒロは小さくため息をついた。いつもなら弁当を片手に健斗と翔と共に中庭に行き昼練をするときだった。だが、その翔がいない。もういないのだ。

健斗はどうするつもりなんだろう?これからのこと。サッカー部のこと。深い悲しみと罪悪感、そして喪失感が健斗の心に根付いている。この間のことを思い出した。

健斗はもう……サッカーが永遠に出来ないんじゃないか。そう考えると背筋に寒気が走った。

「きゃっ」

クラスの女子が小さな悲鳴を上げた。それだけではなく必要以上のざわめきがクラスの中で起こった。何だろう?と思って、ヒロは前を見た。するとはっと息を呑んだ。

そこには神乃中サッカー部が全員集まって、クラスの前にいた。全員ぞろぞろとこのクラスの中に入ってくる。

神乃中サッカー部は部員数が健斗とヒロを含めて12人しかいなかった。上の代がいなくなったため極端に数が減ったのだ。そのうち二年生が七人で一年生が五人だった。

クラスに来たのは二年生の五人だった。五人は健斗の前に立つと誰も口を開かずただ健斗を見つめている。ヒロは立ち上がって、五人のもとに歩み寄った。

「ノブ、リュウタ、のんちゃん、佐久、琢磨……」

ノブは相変わらず長い前髪をかき揚げてヒロを睨みつけた。リュウタも睨みをきかした目でヒロを見る。のんちゃんはおどおどした様子で、ノブたちを見る。佐久や琢磨は健斗のことを見ているが何を言えばいいのか分からないと言った様子だった。

そんなことよりも、ヒロは五人……特にノブとリュウタを宥めるように言った。

「ここじゃまずいって。移動しようぜ。健斗も……いいだろ?」

「当然だよ。」

ノブが刺々しい感じでそう言うと、突然ずっと黙っていた健斗が立

ち上がり、飄々として教室を後にした。どこへ向かったのか分かっていたけど、ヒロたちはその後を追いかけるようにして教室から出て行った。

かねてから、その話があった。

健斗はいつになったら学校に来るんだと。五人からずっと問いつめられていた。

「お前も分かってんだろ？」

健斗のいない部活が終わったあと、部室内でノブの怒声が響いた。いつも笑い声に満ちていた部室はそこにはなく、ぴんっと空気が張り詰めたような緊張が部室内に流れていて、誰もが息を呑んだ。

「もうすぐ大会があるんだぞ！なのに何で健斗は出て来ないんだよ。」

「そうだよ。このままじゃ一年にも示しがつかねーし、何より健斗がいなくてどう勝ち進むんだよっ？」

ノブとリュウタの言っていることは、ヒロにもよく理解していた。

部室でその話をした二週間後には、泣いても県大会へと向けた大会が開催される。神乃中サッカー部はその二週間後に一回戦がある。健斗に何が何でもとりあえず学校に来いと理由はそのことも含んで

いた。

「分かってるよ。今必死で説得してる。ただ……もう少し待ってよ。あいつの気持ち、考えてくれよ。」

「辛いのはあいつ一人じゃねぇんだよっ！」

ロッカーを力いっぱい殴る音が部室内に響いた。琢磨がその音に驚き、「ひぇっ」と声をあげた。

「辛いのはみんないっしょなんだよっ！今でも信じられねーっ！翔が死んだなんてこと……あいつが……あいつがもういないなんてこと……でも仕方ねぇだろっ！」

ノブはそう言い捨てると、くるっと背中をヒロに見せた。微かに体が震えているのが分かった。

佐久やのんちゃんがノブに寄り添って背中をさする。それを見るだけで心が疼いた。

そのとおりだ。辛いのはみんないっしょ。健斗一人じゃない。

翔の葬式の日、サッカー部全員声をあげて泣いた。悲しくて悔しくて、突きつけられた現実がどうしても信じられなくって……でもどうすればいいのか分からず、ただ泣くことしか出来ない。

だが今自分たちにできることは、目の前に迎える大会を勝ち進み、県大会に出場すること。今回の大会を心の底から楽しみにしていた翔のためにもそれが必要だった。

だがヒロは一方でそれを上手く主張することが出来ないでいた。健

斗のあんな姿を思い出すと、言葉が出て来ないのだ。

「……今日、俺らも健斗の家に行くよ。」

佐久がそう言った。みんなで健斗の家に行き、部活に出てくれるように頼もうと思ったのだろう。しかしヒロはそれに対して素早く反応した。

「それはダメだっ！」

ヒロの勢いにそれを言った本人の佐久が驚いた顔を見せた。

「どうして？」

リュウタが冷静な態度で聞き返す。その答えをヒロは口に出すことなく呑み込んだ。

今あいつのところに大勢で押しかけたら、あいつの心は本当に崩壊してしまう。

確証などない。だが直感的に……特にあの日の健斗を見たヒロは少なくともそうとしか感じられなかった。

今あいつを説得できるのは自分しかいない。それが、誰よりも長い付き合いである自分の使命だとヒロは思っていた。

「とにかく……もうちょっとだけ待ってくれ。少なくとも大会の一週間前までには、あいつを連れてくるから。」

ヒロはリュウタや佐久の目を見て力強い口調でそう言った。リュウ

タや佐久、そして琢磨ものんちゃんも何も言い返してこなかった。

すると背中を向けていたノブがごしごしと目をこすってヒロと向き直した。

「絶対だぞ。もし連れて来なかったら、今度は俺らがあいつん家に押しかけるからな。」

そこには強い覚悟を感じた。ヒロはしばらく間を置いてから、ゆっくりと頷いた。

それから一週間が経って、健斗は説得の甲斐あって学校に来た。そしてそれを聞きつけたノブたちが昼休みになるとすぐに健斗の元に押しかけたのである。

ヒロたちはサッカー部の部室の中に集まっていた。全員それぞれ配置について、みな重たい口を開かないでいた。健斗もただ長椅子に腰掛けて、虚ろな目で何かを一点見つめていた。

「……どういうつもりだよ?」

口を開いたのはノブだった。刺々しい言い方で健斗にそう言った。

健斗はゆっくりと顔をあげてノブをみる。それからまた俯いて、歯がゆそうな顔をして「ごめん……」と一言呟いた。

しかしその態度が気に食わなかったのか、ノブはさらに健斗に詰め

寄った。

「ごめん、じゃなくてっ！どういうつもりなのか聞いてんだよっ！」

「ノブ。ちょっと落ち着けよ。」

それを制したのは意外にもリュウタだった。リュウタは驚くほどに冷静な顔つきで、健斗を見下ろした。健斗は一瞬だけリュウタと目を合わせたのだが、すぐに決まりが悪そうに目をそらした。

「健斗……夏の大会がもうすぐだってこと、知ってるよな？」

健斗は頷かなかったけど、リュウタは構わず続けて言った。

「正直、お前がいてくれないとダメなんだよ。部活内の士気も高まらないし、翔がいない上にお前までいなかったら戦力的にかなり厳しくなる。お前はいなかったから知らないだろうけど、俺らは翔のためにも県大会に出場するって決めたんだ。だから……部活だけでもいいから出て来いよ。」

リュウタが健斗を諭すようにそう言った。その言葉はリュウタだけではなく、ここにいる六人全員の気持ちだった。健斗にその思いは届いたのだろうか？

健斗はただ下を俯いて唇をかみしめていた。

「……ダメなんだ。」

「え？」

リュウタが思わず聞き返した。全員が健斗の言葉に耳を傾けた。

「……翔が言ってる……何で……何でお前が生きてるんだって……お前のせいで……」

「翔はそんなこと言わない。」

それを言ったのはヒロだった。ヒロが翔のことをよく知っていた。健斗と同じ幼なじみの翔が健斗にそんなこと言うはずなかった。しかし健斗は大きく首を振った。

「違う。言ってるんだ。あいつは俺を恨んでる。あいつは……だって俺……あいつと……」

健斗はその先を言えなかった。口を閉じて、さらなる罪悪感に押しつぶされそうになっていた。さっきまで感情を露わにしていたノブですら今の健斗の様子をただ黙って見ていた。

「……じゃあ、どうするつもりなの？」

それを口にしたのはのんちゃんだった。いつものちょっと調子が高い声で健斗にそう聞いた。

「健斗は……どうしたいの？」

健斗は黙り込んでいた。何も言い返すことが出来ないで、下を俯いて唇をかみしめていた。しばらくの間沈黙が続いた。重い空気が部室内に流れている。

「……ちまえよ……」

誰がボソッと口にした。それを口にしたのは、他でもない……ノブだった。ノブは健斗を見下すように睨みつけて、もう我慢の限界だと言わんばかりに健斗の胸ぐらをつかむ。そして誰かが止める暇もなく、健斗を思いっきり殴り飛ばした。

突然殴られた健斗はそのままの反動でロッカーに体が当たり、頭を垂れて床に座り込んだ。頬は赤く腫れ、口元から血が滲み出ていた。

ノブの突然の行動に誰もが動揺を隠せないでいた。しかしノブは息を荒らし、健斗を怒鳴りつけた。

「辞めちまえよ、お前っ！迷惑なんだよっ！」

「ノブ……っ」

「こっちはな、翔のためにも県大会に出なくちゃなんねぇんだっ！それを何だよお前。ダメなんだって……自分勝手も大概にしろよっ！お前みたいなやつは、このチームにいらねぇっ！邪魔なだけだっ！」

ノブは言いたいことを全て吐き出したかのように、息を切らしていた。健斗は何も反論しなかった。ただ……頭を垂れて無反応だった。体をピクリとも動かさず、まるで死んでいるようにそこに座り込んでいた。

ノブは舌打ちをして、苛々をぶちまけるように、その辺にあった椅子を蹴っ飛ばした。そしてそのまま部室を乱暴に出て行った。さらに重い空気が部室内を流れた。

すると今度はリュウタが何も言わず、健斗に背を向け、部室を後にした。そしてまるでそれに続くように、のんちゃん、佐久、琢磨の順に部室を後にした。

部室の中に残ったのはヒロと健斗だけだった。ヒロは体中の緊張が緩むかのようにその場に座り込んだ。そして思い切ってため息をついた。しばらく呼吸を忘れていたかのように妙に息苦しく感じた。

「……健斗……」

ヒロは健斗の名前を呟くように呼んだ。だが健斗は無反応だった。本当に死んでしまったのではないか。そう思えるほどだった。

そこからだった。神乃中サッカー部の崩壊のカウントダウンが少しずつ時を刻んでいたのだ。

第9話　新たなる決意　P．26

「はい。これでいいわよ。」

殴られた後の腫れが思ったよりもひどかったので健斗はヒロに連れられて保健室に行っていた。

健斗は無言のまま養護教諭である南莉子（みなみりこ）先生――通称南ちゃんは去年赴任したばかりの新しい先生で、一応一児の母でもある。そのわりには若く見えるが、実際の年は誰もしらない。――に手当てを施してもらい、肩をパンッとたたかれた。

「喧嘩をするのはいいけど、ほどほどにしなきゃダメよー？じゃなきゃあたしの仕事が増えるんだから。」

と冗談を交えながら笑って、調査書に記入し始める。健斗はそっと自分の頬に触れる。

「……もっと殴られたかった。」

健斗はポツリと呟いた。突然の言い草に南ちゃんも思わず口を開けてポトンと鉛筆を落とした。

「山中くん。人の趣味は否定しないけど……殴られたいっていうのはどうかと思うよ？」

「あのね南ちゃん。今そういう話じゃないでしょ？」

ヒロが思わずつっこみを入れる。南ちゃんは何が可笑しいのか「そりゃそっか。」と笑った。しかし健斗はそんな冗談にも全く笑いをこぼさず、ただしょんぼりとしていた。そんな健斗の様子に、南ちゃんは「う～ん……」と呟く。

「おい少年。いつまでしょんぼりしてるんだっ？らしくないぞっ？」

おどけた様子で健斗の頭を撫でる。普通なら健斗は嫌がるのだが、南ちゃん相手では頭が上がらない様子である。そういう気分ではないという理由が一番かもしれないが……

「……翔くんのことで思い悩んでるのね？」

急に真剣な赴きで南ちゃんはそう言った。ヒロはその名前を聞くと急にピンッと背筋が張るような思いになった。健斗は何も反応せず、ただ黙り込んでいた。

「……詳しくは知らないけど、翔くんはトラックに跳ねられそうになったあなたを助けて、身代わりになった。あなたはそれを自分のせいだって思ってるんでしょ？」

沈黙が答えを出していた。

南ちゃんはそれからふっと表情を緩めた。

「でもね、山中くん。翔くんが亡くなったのはあなたのせいじゃない。ただの事故だったの。」

「違う……俺のせいなんだ。俺があいつを……殺した。」

健斗は重い口を開いて重い口調でそう言った。

「だからあいつは……俺を恨んでる。聞こえるんだ……あいつの……あいつの声が。」

「じゃあ、もしあなたが逆の立場だったらどうなの？」

南ちゃんの問いかけに、健斗はゆっくりと顔を上げた。健斗は南ちゃんの目を真っ直ぐ見つめていた。

「もしあなたが翔くんを助けて、その代わりにあなたが死んだ。それを……あなたは翔くんのせいで自分は死んだって、翔くんを恨んだりする？」

南ちゃんの鋭い問いかけに健斗はどう答えていいか分からないという顔で下を俯いた。

「……分からない。」

健斗はポツリとそう呟いた。そして、頭を抱え込みまた深く思い悩み始めた。

「分からない……だって俺……俺あいつに……」

ヒロはその健斗の様子を見て、少し違和感を感じた。はっきりとは言えないが、健斗はまだ誰にも言っていないことがある。その苦しみに悩まされている。

それを恐らく南ちゃんは気づいたのだろう。上手くそれを聞き出そうと誘導していることが分かった。

「……翔くんに、何か酷いことを言ったのね？」

南ちゃんがそう問いかける。すると健斗はゆっくりと顔をあげて小さく頷いた。酷いこと……？何のことなのだろうか？

ヒロはただ黙ってそれを聞いていた。

「……俺、あいつに裏切られたって思ったんだ。部活に出ないで、委員会ばかりやって……女といちゃついて……それを見て俺すげーむかついて……お前なんか、もう友達でも何でもないって。そう言った。あいつにそう言ったんだ……俺は……」

胸が締め付けられるような思いがヒロを取り巻いた。そうか……そういうことだったのか……

事故に遭う前、確かにずっと翔は部活に出る回数が減っていた。それは委員会の仕事が忙しかったからという理由だった。健斗はそれを愚痴にしていた。

しかし、そう、翔が事故に遭った日、あいつはヒロの元に突然やってきた。

「健斗いる？」

教室に入ってきた翔はヒロに突然そう聞いてきた。ヒロはそのとき今日は部活がないため、帰りの学活が終わるとすぐに帰っていった

健斗の後ろ姿を思い出していた。

「あぁ……何かもう帰ったよ？急いでるみたいでさ。」

「マジッ？ったく連れないよなぁ。じゃあ追いかけるわ。」

「あれ？お前委員会は？」

走り去ろうとする翔を呼び止めてヒロはそう聞いた。翔は足を止め、くるりとヒロに向き直した。

「おう。委員会の仕事なら今日の昼休みで終わりっ！明日からは部活に出られるから。」

それを聞いてヒロは妙に安心した。

「あっそ。ちゃんと健斗に説明しとけよ。あいつお子ちゃまだからかなり怒ってるぜ？」

「分かってるっ。じゃあ～なっ！」

「おう。」

走り去る翔の後ろ姿をヒロは見えなくなるまで見つめていた。それが翔と交わした、最後の言葉になろうとはこのときは思いもしてなかった。

何だ……じゃあ翔が死んだ原因は自分にもあるじゃないか。

自分が翔に健斗が帰ったことを言わなければ、こんなことにはならなかったかもしれない。

いやそれよりも前に、健斗といっしょに帰ってればこの運命は避けられたかもしれないのだ。

自分が……

そう考えていると、はっと気がついた。健斗もそうなのだ。この思いに悩んでいる。この複雑な思いのカオスで正確な判断が出来ないでいるのだ。

誰のせいで翔は死んだなんて、そんなの決められるわけがない。答えのない答えを追い求めている。

健斗の気持ちに初めて触れたような気がした。

「翔くんと喧嘩したまま……ってことね。」

健斗はその言葉を聞いてゆっくりと頷いた。

「俺がいけないんだ。俺がもっと……大人だったら……あいつのことをちゃんと理解していれば……あいつを許してたら……あんなことには……ならなかったのに。」

違う。

健斗のせいじゃない。

俺にも責任がある。俺も……お前とあいつを引き合わせた超本人なんだ。

心の中でそう叫んだ。言葉にすることはできなかったけど、そう叫んだ。頭がおかしくなりそうだった。

「……じゃあ、ずっと後悔しながら生きていくつもり？」

その言葉はヒロにも向けられたもののような気がして、思わず身構えてしまった。健斗はまた思い悩むかのように深く頭を抱え込んだ。

「あのね、山中くん。こうしてたら、ああしてたら。そんなことを考えて、悩んで、あなたは人生を無駄にする気なの？過去にとらわれたまま、せっかく助かった命をあなたは無駄にするつもりなの？それこそ、翔くんに申し訳ないって思わない？違う？」

珍しく口調が荒くなった南ちゃんは健斗を真っ直ぐ捉えていた。健斗はしばらく黙り込んでいた。すると、突然立ち上がって南ちゃんに背を向けた。

「……帰ります。手当て、ありがとうございました。」

南ちゃんは何も言わなかった。深くため息をついて、「そう……」と呟いた。健斗は黙ったまま歩き出して、そのまま保健室を後にした。

ヒロも立ち上がって、南ちゃんにお辞儀をした。そして保健室のドアノブに手を触れたとき「真中くん。」と呼ばれた。

ヒロは振り返って南ちゃんを見ると、南ちゃんは穏やかな表情でヒロを見つめていた。

「……あなたも同じよ。自分を責めたりしないでね。」

ドクンッと胸が高鳴った。まるで心が見透かされているようだと思った。ヒロはしばらくためらってから、顔をあげて苦笑いを浮かべた。

「……はい。」

それだけ答えると、ヒロは軽くお辞儀をして、ドアノブを捻り、保健室を後にした。

第9話　新たなる決意　P．27

ヒロは保健室を出たあと、健斗を探し始めた。教室には戻ってないだろう。もしかしたら、もう家に帰ったかもしれない。そんなことが頭によぎっていた。

――いた。

中庭のベンチに腰掛けている健斗を見つけた。ヒロはゆっくりと健斗に歩み寄った。健斗はヒロが来ても無反応で、ただ目の前を見つめていた。それでもヒロは健斗から目をそらさずじっと見つめていた。

「……南ちゃんの言う通りかもな。」

「え？」

健斗は久しぶりに穏やかな表情をしていた。生気を失っていた顔は肌色を取り戻していた。何かが見えだした、とヒロは思っていた。

「俺は……翔に助けられたんだよな。翔に生かされた。」

「うん。」

「あいつは俺のことを恨んでるかもしれない。それでも俺は……今生きてる。」

「うん……」

「ただ……もう俺は……」

健斗はそれだけ呟くと、そっと瞳を閉じた。さらさらと風の流れる音が聞こえた。

ヒロは覚悟した。自分にも責任があると分かった以上、健斗をこのまま放っとくわけにはいかない。健斗がどんな道を選ぼうとも、同じ道についていく。健斗を独りにはさせない。自分が健斗を支えなければ、支えてくれる者がいなければ……今の健斗はダメなのだ。

健斗はすっと立ち上がって、ヒロを見た。笑ってもない悲しそうにもしてない。無表情だけど、どこか穏やかなそんな表情をしていた。

「……今日は……帰る。明日になったら、全部決める。」

健斗はそう言うと、ヒロに背を向けて歩き出していった。ヒロはそれを追いかけることはしなかった。どんな結果になろうとは言え、健斗はようやく次の道を見つけたのだ。それを……自分が止められるわけがない。

「健斗。」

去っていく健斗に声をかけると、健斗は足を止めてゆっくりと振り返った。ヒロは大きく息を吸い込んだ。そしてゆっくりと吸い込んだ息を吐いて、健斗を見る。

「……お前がそういうつもりなら、俺もそうする。」

健斗はその言葉を聞くと、驚いたような顔を見せた。それでもヒロ

はひるまなかった。

「お前を独りにはさせない。絶対に。」

健斗はサッカーを辞めるつもりだ。その時点でヒロは確信していた。そして健斗は自ら孤独になる道を歩むことを決意するはずだった。

誰にも頼らない。誰かを好きになることなく、誰かと笑うことなく、こいつは生きることを決める。

それが翔に対する償いのつもりなのだろう。そうすることで自分の心は救われると思っているのだろう。

しかしそんなことはさせない。今はいい。時間をかければいい。いつかまた健斗が心を取り戻し、閉じこもろうとしている殻を破り、本当の意味で心を開くことの出来る翔のような人物に出会えるまで、自分は健斗のそばで見守る。

それがヒロの、健斗や翔に対する償いでもあり、自分の心を救う方法でもあった。

健斗は何かを言いたげな様子だったが、何も言い返してこなかった。決まり悪そうに口を噤んで、またくるりとヒロに背中を見せた。

その寂しげな後ろ姿を、ヒロはただ黙って見ていることしかできなかった。

次の日の放課後、ノブたち五人を集めて、健斗とヒロは自分の思いを告げた。

「嘘だろ？」

リュウタが微かに笑った。目は笑っていなかったが、相手にしたくないというように笑い飛ばそうとした。ヒロはその問いかけにゆっくりと首を振った。

「……何でヒロまで……」

リュウタはそれ以上言葉を出すことが出来ず、下を俯いた。みんな言葉が上手く出せない状況だった。その中で健斗がゆっくりと顔をあげた。

「ごめん……みんな……俺、もう……そうするしかダメなんだ。もう……嫌なんだ。」

「ダメだよ。」

のんちゃんがそう言った。目には涙を浮かべて必死でこらえていた。けどそれが崩れ去ったとき、のんちゃんは健斗の服の胸部分を掴んだ。ギュッと力を込めて、健斗の胸を叩いた。

「健斗やヒロまでいなくなっちゃダメだよっ！何で……僕たちこれからどうすればいいんだよっ！ねぇっ！答えろよっ！」

健斗は答えることができなかった。それは健斗自身も分かっていたからだ。今健斗とヒロが抜ければ、神乃中サッカー部は１０人にな

る。そうなれば残された人たちはどうすればいいのだろうか。

その後のことを分かっていた。だけど……健斗は決めたのだ。もう、翔のいないサッカーはしない……と。その決断が、みんなを悲しませ、サッカー部を崩壊することになるって分かっていても……

「健斗、ヒロ……お願いだから……辞めないでよ。辞めないでくれよっ！僕……嫌だよ。」

「のんちゃん……」

琢磨も佐久も、そしてリュウタものんちゃんに便乗するように涙を流し始めた。リュウタは「クソッ……」とつぶやきながら溢れる涙を拭ろうとしていた。琢磨や佐久も、ヒロの服を掴んで「お願いだ！辞めないでくれ。」と頼み続けてきた。

ヒロ自身の決意も変わらなかった。健斗の決意も変えられなかった。ここにいる五人は、一体どういう思いでいるのだろう。辞めることを止められない……己の無力さ。無責任に辞めていこうとする腹立だしさ。そして……一人、また一人といなくなっていく寂しさに予感させる崩壊への絶望……色々な思いが交差しているはずだ。

その原因は他でもない。自分たち自身にある。ヒロも健斗もその思いを噛み締めていた。

するとだった。みんなより一歩引いて話を聞いていたノブが健斗とヒロの前に立ちはだかった。

「……本気なんだな。お前ら……本気で辞めるつもりなんだな。」

その問いかけに健斗とヒロは答えることはできなかった。

「……分かった。ただ……俺はお前たちを許さないからな。」

ノブは二人を睨みつけてそう言った。その言葉がどれだけ冷たく残酷なものか、健斗とヒロが一番感じていた。

「お前らを許さない。俺は……俺はお前らがいなくたって……絶対……絶対県大会に行くんだっ！！」

そう言って健斗を突き飛ばした。健斗は抵抗出来ずに、少しよろめたが何とか踏ん張りをきかせてそれに耐えることが出来た。

「もう出てけっ！お前らの顔なんか見たくないっ！！どっか行けよっ！消えてくれっ！！」

ノブは叫ぶように健斗とヒロにそう言った。その後ろ姿はかすかに震えているのが見えて、ヒロは心が痛むのを感じた。

「……行こう。」

健斗は呟くようにヒロにそう言うと、踵を返してみんなに背を向けた。ヒロはくっついて離れようとしない佐久や琢磨を制して同じように踵を返して部室を去ろうとした。

「ヒロが一番かっこ悪いよっ！」

のんちゃんのそう叫ぶ声がした。

「結局ヒロは健斗に流されてるだけだろっ！健斗だけが大事なのかよっ！」

ヒロはばっと振り返ってのんちゃんを見る。全員がヒロに敵意を見せているのが分かった。ヒロは五人を見渡しながら、ギュッと唇を噛み締めた。

「そんなんじゃない……俺は……」

言葉が途切れてヒロはそれ以上耐えきれなくなって五人に背を向けた。そして健斗と共に五人の元から遠ざかっていく。

「許さないからなっ！」

最後までノブの泣き叫ぶ声が頭に響いた。

「後悔させてやるからなっ！！この、バカヤローッ！！」

ノブたちの泣き叫ぶ声が聞こえなくなった。健斗とヒロは互いに口を開くことなく、呆然と歩いていた。

「これで……良かったんだ……」

健斗が呟いた。そこにどんな決意が秘められているのか、ヒロには分からなかった。最後ののんちゃんの言葉が耳に残っていた。

自分は何をしているのか……分からなくなった。

それから夏休みに入る直前の日に、ヒロはリュウタに呼び出されたため中庭へと向かった。リュウタがベンチに腰掛けていてヒロの姿を確認すると、強張った表情になった。

「……一応言っておく。」

「うん。」

「俺ら、大会は辞退したから。」

「……」

そうなるかもしれないと、予想はしていた。１０人で大会に出るというのはあまりにも無謀なことだ。それに１０人で大会を出るなんて、相手の学校にも失礼な話である。学校自体の信頼を損ねる問題だった。

だから、あえて「辞退」をすることで、問題を公にすることを隠したのだろう。

「……健斗は、どうしてる?」

リュウタがそれを聞くと、ヒロは苦笑いを浮かべた。

「学校には来てるよ。ただ……ずっと机に座ってるだけ……」

その頃の健斗は誰とも連もうとはせず、ただ孤独な日々を過ごして

いた。その態度は周りにも影響して、次第に健斗に話しかける者は少なくなっていった。

「そっか……分かった。それじゃ。」

リュウタは踵を返してヒロから離れていった。

その後ろ姿から滲み出る寂しさは、神乃中サッカー部の崩壊を表していた。一寸先は闇。その先もずっと闇……何をすればいいのか分からない。

そのような状態にしてしまったのは、他でもない、健斗とヒロなのだ。自分たちは簡単には許されない大きな罪を犯してしまったかのように、これから先大きな責任を背負って生きていかなければならないのだ。

ヒロは空を見上げた。悲しくなるほどの青空だった。青空が好きだった翔は、今どこにいるんだろう?

これで……良かったのだ。

ヒロは一人でそう呟いたつもりだったけど……誰かに問いかけた気持ちになっていた。

第9話　新たなる決意　P．28

麗奈は全ての話を聞き終えた後、何を言えばいいのか分からなかった。自分が想像しているよりも二人には複雑な過去が存在していた。

何も知らなかった。

麗奈は改めてそう思った。健斗のことを知ってるようで何も知らなかった。どうして健斗がサッカーを辞めることになったのか、何故やりたいことをやることが出来ないのか……

何も知らなかった。知っている気を持っていただけだ。

「……ノブやリュウタは、俺と同じだったんだ。」

健斗がポツリとそう言った。麗奈はそれに反応するように顔を上げて健斗を見た。健斗は歯がゆそうな顔をしていた。

「あいつらは誰よりもサッカーが大好きだった。もしかしたら俺以上に……サッカーが好きだったんだ。気が合わないところもあったけど……俺はそんなあいつらが大好きでさ。」

「……その人たちは、今どうしてるの？」

麗奈が聞くと健斗は顔をあげて小さく笑った。

「うん。あいつら、県外の高校に通ってる。そっちの寮で暮らしてるよ。私立の名門校で、スポーツ推薦で受かったんだ。すげーよな、

本当。」

何だか誇らしく思っているみたいに健斗は笑ってそう言った。

健斗はその日以来あの二人とは会話を一度も交わすことなく、卒業を迎えた。

もう話すことも出来ない。謝ることも出来ない。ただ歯がゆい気持ちだけが、健斗の中には残っているのだ。

「他の人は?その、琢磨と佐久っていう人。」

「あいつらは隣町の学校に行ってるよ。別に家が離れてるわけじゃないけど……もう全然会わないな。」

ヒロがそう答えた。麗奈は「そっか。」と呟くと、ため息を吐き出した。何だか緊張していた体が徐々にほぐれていった。健斗たちの話はそれくらい麗奈にとっては衝撃的だった。

麗奈はチラリと健斗を見た。健斗は窓の外を眺めたまま動かない。きっと色んなことを思い出しているのだろう。こういうときの健斗はいつもそうなのだ。

「……健斗くんたちの言うとおりかもしれないね。」

「ん?」

健斗は麗奈の言葉に反応するように視線を麗奈に移した。麗奈は少

ししょんぼりした気持ちで呟くように言った。

「何か……私が口を出しちゃいけない問題なんだなって。自分たちで考えなきゃいけない。だから何も話さなかったんだね、今まで。」

それを自分は健斗を困らせるような言い方をしてしまった。何も知らないくせに、どのようなものなのかも知らないくせに……ただ知りたい。その気持ちが強く働いて、わざわざ聞かせてもらったはいいが、結局麗奈にはどうすることも出来ない。

「私……バカだなぁ……ごめんね。何も出来なくって。」

健斗とヒロは自分のことをどう思ってるんだろう?迷惑な女だって思ったのだろう。所詮自分には何も出来ないというのは分かっていたのに、ただのわがままに付き合わさせてしまったような気がする。何だか自分がとても小さな人間に思えた。

すると健斗が微かに笑ったのが分かった。

「何でお前が謝んだよ。」

「だって……」

「謝る必要なんてないんだよ。さっきも言っただろ?俺は、“お前に”聞いて欲しかったんだよ。別にどうこうして欲しいなんて、言ってないだろ?」

「……健斗くん……」

麗奈は顔をあげて健斗を見る。健斗は穏やかな表情で麗奈を見つめ

ていた。本当に……何だか……胸が疼くのは何故だろう。

「そういうわけだから。ありがとうな。長い話聞いてくれて。そろそろ帰るか。」

健斗がそう言ったので麗奈は慌てて時計を見た。いつの間にか時刻は１０時を過ぎていた。健斗やヒロは慣れているみたいだったが、麗奈にとって他人の家にこんな遅くまでいるのは初めてだった。

「そうだな。明日も学校あるし。っていうかお前らずっと制服だぞ。」

「お前もだろ？」

「俺はいいの。ここ自分ん家だから。」

「あっそ。その前にちょっとトイレ借りるわ。」

「ああ。そこ降りて……」

「知ってるよ。」

そんなやり取りを交わして健斗は立ち上がり、大きく欠伸をしながら部屋を後にした。ドアが閉まる音と同時に麗奈も何だか急に疲れが押し寄せてきた。

そういえば部活をやって、そのままこっちに来たんだった。疲れるのも当然だった。緊張が緩んだためか眠気も出てきて、麗奈は小さく欠伸をした。

「麗奈ちゃん、さっき俺が言ったこと覚えてる？」

「ほぇ？」

突然ヒロにそう聞かれて麗奈は欠伸を交えて返事をした。

「俺は健斗を見守る義務があるって話。」

「あ……うん。」

「でもな、あれはもう終わったんだ。俺の役目は終わった。」

「どういうこと？」

ヒロはやけに遠回しに言う。にっと笑って、麗奈に少し近づいた。

「健斗には、もう本当の意味で心が開ける人がいる。翔と同じように……健斗にとって翔と同じくらい……いやそれ以上に自分の心の穴を埋めてくれる人が出来たからな。」

「それって……結衣ちゃんとか？」

何だかそれを言われると悲しかった。確かにこんな自分よりも、結衣のように可愛くて優しい結衣が健斗の心の穴を埋めてくれているのかもしれない……何だか……悔しいと思った。

だが麗奈の予想とは違って、ヒロはぷっと吹き出し笑った。

「違うよ。麗奈ちゃん気づいてないの？」

「え？」

結衣じゃなければ誰なんだろう？マナとか……それともさっき言った南先生なのだろうか？

ヒロは肩で笑うと、一人で納得するように頷いた。

「うん、そうか。それでいいよな。麗奈ちゃんたちは、それでいいんだよ。」

“たち”……？

それを聞いて、麗奈は顔が熱くなるのを感じた。

健斗の心の穴を埋めてくれる人物ってもしかして……私？

顔が赤い麗奈を見てヒロはニヤリと笑った。

「あいつも素直じゃないからなぁ。本当は分かってるくせにな。自分の本当の気持ち。」

「え？……えっ？」

あまりのことに麗奈は動揺が隠せなかった。それって一体どういうことなのだろう？健斗が……まさか……

「まっ。俺は黙って見守ってるよ。あいつ不器用だけどさ、よろしく頼むよ。」

「ちょ……ちょっと待って！……えっと……それってさ、つまり…

…」

「何話してんの？」

健斗が部屋に入ってきて不思議そうに尋ねた。麗奈はびっくりして思わず飛び跳ねそうになってしまった。

「な、何でもないっ！」

「え……何？急に。」

「うるさいっ！知らないっ！」

「はぁっ？」

麗奈は顔を真っ赤にしたまま健斗から顔を逸らす。とてもじゃないが、健斗の顔を見ることが出来なかった。健斗は困ったように後ろ頭を掻いてヒロを見た。

ヒロは腹を抱えて笑っていた。何だかからかわれたみたいで、余計に恥ずかしかった。

そしてヒロの家を出て、健斗と麗奈はすぐ隣の健斗の家に帰って行った。たった三十メートルくらいの距離だ。本当に近いんだなと思った。

それよりも麗奈の心はざわざわしていた。理由はもちろん、ヒロがあんなことを言うからだ。多分今でも顔が赤いだろ。こんな気持ちになるの、健斗に告白をする前以来だ。

実際健斗が自分のことをそんな風に見てくれているなら……嬉しいに決まっている。あのヒロがそう言うんだから……そうなのかもしれないが……いまいちピンと来ない。

麗奈の目の前にいる健斗は全くそんな素振りを見せていないからだ。

「……何？」

健斗は麗奈の視線に気づいて鋭い視線を返してそう聞いてきた。麗奈は思わず顔をそらした。

「べ、別にっ！」

「……麗奈……俺さ……ずっと思ってたことがあんだけどさ……」

「えっ？」

胸がドキッと高鳴った。すると突然健斗が足を止めて、麗奈の顔を覗き込んだ。

「な、何？」

「うん……あのさ。お前さ……」

「うん……」

胸の高鳴りがさらに激しくなる。その次の言葉を聞きたい。聞きたい……

「お前さ……実はツンデレだろ？」

「う、うんっ！んっ？」

思わず頷いてしまったが何かがおかしいと気づいて麗奈はすぐに聞き返した。すると健斗は納得するように大きく頷いて笑った。

「あ、やっぱそうか。何だかな～……そうなんじゃないかって思ってた。」

「え？何？何て言ったの？」

「え……だからお前、実はツンデレなんだろ？」

「はぁぁっ？」

自分がツンデレ？ツンデレってあの……「何とかなんだからねっ！」とかいう、あれだろうか？

「いやさ、今も“別にっ！”とか言ってツンッてするからもしかして……って思ったけどやっぱそうなんだな。今はデレてるし。」

「ちょっ……そんなわけないでしょ？別にツンッともデレッともしてませんっ！」

「いや、しとるし。ツンデレかぁ～……確かに最近のキャラ定着としては一番かもしんないけど、あんまりやりすぎるとあれだぜ？飽きられちゃうぜ？」

ダメだ……この男……

完全に麗奈がツンデレだと思い込んでいる。麗奈は大きく息を吐いた。

やっぱりヒロのは気のせいだ。健斗が自分のことを好きだなんて……あるはずがない。期待して舞い上がった自分がちょっと惨めだった。

「あれ……怒った？」

「別にっ。怒ってない。」

怒ってる。麗奈はふんっと鼻を鳴らしてそっぽを向いた。何かもう、全てがバカみたいだ。

健斗と麗奈は家の前に着くと、健斗が突然笑って麗奈に言ってきた。

「怒んなよ。俺はそんなお前がいいんだから。」

「えっ……？」

胸がときめいて思わず健斗の方を見た。が……それは健斗の思惑だった。

「あ、ほら。またデレた。ツンデレって面白れー。」

健斗はケラケラ笑いながら家の中に入っていた。麗奈は唖然としてそれから一気に顔が熱くなるのを感じた。

本当にこのおとこは……

「もうっ！！健斗のバカァ！！」

麗奈は家の前でそう叫んだ。麗奈の怒鳴り声に驚いたのだろうか？ゴンタが吠える声が聞こえた。

第9話　新たなる決意　P．28（後書き）

さて……ここまで一気に書いてみましたがどうでしょうか？
おそらく今回の話を書こうと思った理由は、ここにあったような気がします。

どうして健斗はサッカーをまたやることに、ここまでの抵抗を感じているのか……今までそれをうやむやにしていたような気がしてました。

今回の話でそれがはっきりして良かったです。

健斗とヒロが辞めることで中学の部活を崩壊させてしまったこと……昔の仲間が、自分たちのことを恨んでいるということ。

それに対する大きな責任が健斗やヒロを悩ませているということ。

その苦悩している気持ちを大切にしたいと思い、あえて読者のみなさまの想像に任せてみましたが、伝わったでしょうか？

それにしてもヒロは本当に良い奴だなぁと、自分で書いてて思いました。

あと最後の麗奈のまさかのツンデレ疑惑。あれはシリアスが続いたため、ちょっと雰囲気を和ませたいなぁと思って考えたギャグです（笑）

実際ツンデレってどうなんですかね？気が強いけど、可愛い一面も見せてくれるような女性……思えばこれが男にとっての理想像のような気もしますが、みなさまはどうでしょうか？

さて、次回からは後編になります。一気に事態は急展開を迎えます。作者も暖かい目で彼らの成り行きを見守っていきたいと思ってます。

これからもよろしくお願いしまーす。

第9話　新たなる決意　P．29

「あぁっ！もうやべーよ……マジでヤバいよ……」

健斗の後ろの席で寛太が頭を抱えてそう唸っていた。健斗はわざと聞かないふりをして、毎週借りている週刊の漫画雑誌を読んでいた。

「……ヤバいよ～……ヤバいよ～……」

「……ぷっ……クハハハハハッ」

「ヤバいってばよ。マジで。螺旋丸並みだってばよ。」

「うるさいなぁっ！俺は今違うやつ読んでんの。」

健斗はうんざりするように言い、漫画雑誌をパタンと閉じた。ようやく健斗が反応してくれたのが嬉しかったのか寛太はニヤリと笑った。

「だってお前が無視するんだもん♪」

「聞こえてるよ。無視はしてるけど。」

「ほらぁっ！ねぇ？お前はヤバくないの？」

「俺はお前みたいにならないようにベンキョーしましたし。」

「そうやってさ、裏切るんだ？赤点常習同盟組んだのに……」

「そんなクソ同盟に入った覚えはねーし、俺が赤点を取ったのは前回のテストだけですぅ。」

「今回は？数学どうだった？」

「……」

正直出来はよくないかもしれない。健斗は数学が苦手だった。前回も数学の点数がヤバすぎて今回で挽回しようとしたつもりだったが、もしかしたら挽回の「ば」の字も行ってないかもしれない。

「黙ってるってことはぁ～？」

「余裕だっつーの。マジ問い五とか出来たし。」

「え……答え、何にした？」

「……－３……かな？」

実際は自信がなかった。計算式が複雑過ぎて、どこかで計算ミスをしたような気がするのだ。だが意外なことに寛太がパンッと手を叩いた。

「俺も－３にした！」

「マジッ？」

同じ答えになるやつがいるとこれほど心強いやつはいない。健斗は安堵感が胸の中に溢れるのを感じた。挽回の「ば」の字は行けるか

もしれない……が……

「答え、あれ - 8だぞ。」

ヒロが健斗たちの席に近づいてそう言った。さっきまでの安堵感が見事に崩れ落ちて行った。ヒロが言うなら間違いがなかった。こいつはいつも成績優秀者として名を馳せる。

元々寛太と答えが同じでも意味がない。出来ないもの同士で盛り上がっても……それがしかも寛太だ。

「お前っ。俺に一瞬だけの幸福感を与えんなよ。」

健斗はそう言って寛太の坊主頭を漫画雑誌で叩いた。「イテッ」と寛太は言って頭を抑えて陽気に笑った。

「残念だったな健斗。諦めて追試を受けに行こうぜ?」

「うわぁ……」

健斗は諦めたように頭を抱え込んだ。英語や国語なら得意なのに……数学だけはダメだった。理科や社会なども平均ぐらいならとれるのに……

神乃高は今週からテスト週間に入った。今日から一週間、午前中を使って二学期の中間テストがあるのだ。前期の数学の成績がヤバかったため、今回は一生懸命勉強したのに……ヤバいかもしれない。螺旋丸並みに……

「俺は赤点常習同盟なんかに入りたくねぇっ！」

「うへへぇ～。こっちに来いよぉ～。」

「逆に寛太は清々しいな……」

ヒロが苦笑いを浮かべてそう呟いた。

「まっ！でも明日は英語だけじゃん？それなら楽勝だろ。」

「おうっ！マジ満点狙うよ、俺。」

健斗は親指を立ててそう言った。自分で言うのも何だが、英語だけは得意科目だ。しかも今回は得意である不定詞が範囲。満点も夢じゃないと思った。

「ふ～ん……じゃあ勝負する？」

ヒロがニヤリと笑って健斗にそう言った。ヒロも英語は相当得意だと言う。だがそれでも、負ける気はしなくもなくなくない。

「いいよ。負けた方は？」

健斗は揺るぎない自信を持って答えた。ヒロは負けた方に対する罰ゲームを考え始めた。

「……寛太の坊主頭をリスペクト。」

「はぁっ？それはヤバいだろっ！」

「嫌ならいいんだぜ？まぁどうせ俺勝つからいいんだけど……」

そう言われると健斗の負けず嫌いに火がついた。たまにはこの眼鏡ヤローの鼻を折ってやるのも悪くはない。そしてみんなの前で恥をかかせてやろう。

「分かったよ。俺やんよ。やってやんよ。言っとくけど、三ミリだかんな。こいつと同じで。」

「じょーとだしっ！勝ったやつが負けた方の頭をバリカンで剃る。はい、決定！」

こうしてわけのわからない意地の張り合いで負けた方は剃髪ということ決まってしまった。だが健斗は何よりもプライドにかけて負けるわけにはいかなかった。ここまで言った以上、バリカンで剃ってやるのは自分だと士気を高めた。

「お前ら……人の頭を罰ゲームにするなんて……」

寛太は悲しそうに涙ぐんで自分の頭をさすった。しかし健斗たちはそんなことを全く気にしない。

こんなことしてられないっ！さっさと帰って勉強をしなくてはならない。

健斗は鞄に荷物を詰め始めた。が……それを制したのは寛太だった。

「あぁんっ！待って！帰らないでっ！」

寛太は泣きながら健斗の腕を掴んできた。

「な、何だよ？いきなり。」

「ねぇっ！お願い！俺にもう一回英語教えてっ！」

「はぁっ？」

非常に迷惑な話だ。今のやり取りを聞いてなかったのだろうか。健斗は今それどころではない。

「あのなぁ寛太。この前教えたことが全部。それに、俺には剃髪がかかってんだよ。お前に構ってる暇はないの。」

「そんなこと言わずにさぁ～っ。このままじゃ俺、また赤点だよぉ。」

「し、知るか。そんなもんっ！離せってば。」

「同盟国を裏切んのかよぉ。」

「人を勝手にお前の同盟に入れるなっ！」

「そんなこと言わずに教えてやれよ。」

ヒロがニヤニヤと笑いながら健斗にそう言ってきた。無責任な物言いに健斗はカチンと来た。

「てめっ……他人事だと思いやがって。」

「ねぇ健たぁ～ん。お願ぁ～い……」

デレデレとしてさらに距離を詰め寄ってくる寛太。もうダメだ……健斗は心が折れて、呆れるように大きくため息を吐いた。

「分かった……分かったからくっつくな。その坊主頭を見るだけでイライラする。」

「ひゃほ～いっ！」

調子のいい寛太は歓喜の声を上げると、飛び跳ねるようにして健斗から離れた。それと対称に憂鬱な心持ちの健斗はがっくしと肩を落とした。

「まっ、頑張ってくれたまえよ。剃髪くん。それじゃ。」

すでに勝ち誇った顔をしているヒロはそのまま笑って帰ろうとした。が……健斗はガシッとヒロの肩を掴んだ。突然のことに驚いて振り返った。

「な、何？」

「……あのね？ヒロくん。彼に英語を教えるのには、僕一人では力不足なんだよ。」

「や、やだよ。頼まれたのはお前だろ？俺は関係ない。」

「……寛太くん。」

「ハァーイ♪」

寛太はノリがいい。すぐに空気を察してテンションに合わせてきた。

「寛太くんは僕とヒロくんのどっちの方が分かりやすかったなぁ？」

「えっとぉ～……健斗くんの教え方も上手だったけどぉ～、ヒロきゅんもいてくれると助かりまぁ～す♪」

「だってさ。ヒロきゅん♪」

ヒロは引きつった笑いを見せて、健斗と寛太を交互に見た。……とても逃げられる様子ではない……観念したのかヒロはさっきの健斗と同じようにガックシと肩を落とした。

観念したヒロを余所に健斗は寛太とハイタッチをした。こんな辛い目に合うのに、ヒロだけ良い思いをさせるわけにはいかない。ヒロを巻き込んだことで心持ちがかなり楽になった。

寛太は本物のバカだから理解するのに手間がかかる。それには膨大な時間もかかる上に、一人では気が萎える。

「うっしゃ！仕方ねぇっ！パパっと終わらせて、パパっと自分の勉強すんぞっ！」

ヒロは顔を上げてガッツポーズをした。目が久しく燃えているのが分かる。当然、健斗も同意見だった。こんな面倒なことはパパっと終わらせるのに限る。

そうと分かればすぐに行動。健斗たちは揃っていつものファミレスに行くことに決めた。

第9話　新たなる決意　P．30

自転車に乗って猛スピードで商店街を抜けた道路の向こうにあるファミリーレストランに向かう。

今は昼時のためか、結構混んでいる様子だ。駐車場にいくつか車が止まっている。健斗たちはそこで自転車を止めて、すぐに店の中に足を運んだ。

「いらっしゃいませ。三名様ですね？」

中年の女性店員が健斗たちのとこに来てすぐに対応をした。健斗は「はい。」と軽く返事をすると、禁煙席の場所まで案内される。

窓側の席に座り腰を落ち着かせた。とりあえず三人はすぐにドリンクバーを店員に注文した。ここのドリンクバーはセルフサービスで自分で好きなドリンクを入れることが出来る。

「俺何か入れて来るよ。何がいい？」

「コーラ。」

「オレンジジュース。」

健斗は了解すると、そのままドリンクバーの場所に向かった。店内を見渡すと、結構混んでいると思った。昼時はここも混雑するんだなぁっとちょっと新鮮な気持ちでそう思った。というのは、健斗は普段はあまり夕方にしか来たことがないからだ。

昼は大抵学校や家で済ます。あまりこっちまで来ること自体が少なかった。寛太のおかげで最近は頻度が増えたが……

とりあえず頼まれた分のドリンクを入れようとした。コップを手に取ってドリンクバーにセットをしようとした。

するとだった。他の別の小さな手が健斗と重なった。健斗はびっくりして手をすぐに引っ込めた。

「あ、すみません。」

「ごめんなさい。」

それは綺麗な若い女性の人だった。肩にかかるくらいの髪にふわっとした柔らかい香りを漂わせている。

大学生くらいの人だろうか?あまりこの辺では見かけない人だ。

「あ、お先にどうぞ。」

健斗は小さく笑って譲ろうとした。女の人はにっこりと微笑んで健斗に小さくお辞儀をした。そしてドリンクバーにコップをセットし、ボタンを押した。

本当に綺麗な人だ。どこか大人の女性という雰囲気を漂わせている。首もとが妙にセクシーだし、スラッと伸びる足も白い肌を際出させて綺麗だと思った。

どこかの町から来た人だろうか?神乃崎の人ではないように思った。だが、何だろう。どことなく知っている面影があった。

ドリンクを入れ終えた女性はコップを手に取ると健斗に笑いかけた。

「ありがとうございます。」

「あ、いえ。」

その可愛らしい笑顔に健斗はドキンッと胸を高鳴らせた。照れを隠すために苦笑いを浮かべて小さく会釈をする。そして、スタンバイしていたコップをドリンクバーにセットしてボタンを押した。

その女性はすぐに行ってしまうだろうと思った。だが、女性はドリンクを手に持ったままじっと健斗を見つめていた。何だろう……自分の顔に何か着いているのだろうか？

健斗は一つ目のドリンクを手に持ってチラリとその女性を見た。目が合って、女性ははっと我に帰ったような表情を見せた。ちょっと困っているようだった。どうしたのだろうか。

健斗は二つ目のコップをセットして再びボタンを押した。

「……あ、もしかしてまだ使うとか？」

健斗は何気なく聞いてみると、女性は少し慌てて首を横に振った。

「あ、いえ。そういうわけじゃないんです。ただ……神乃高の人なんだなって。」

「え……？」

「制服。そうですよね？」

「あ……まぁ。そうですけど……」

神乃高のことを知っている。ということはもしかすると地元の人なのだろうか。健斗は少し警戒心を見せた。

「地元の人ですか？」

健斗が三つ目のコップをセットして、ボタンを押すときにそう聞いた。すると女性は小さく笑って頷いてきた。

「はい。私も神乃高に通ってたんです。」

「へぇ～……」

この神乃崎にこんなに綺麗な女性がいるとは知らなかった。一体どの辺に住んでいるんだろうと思って健斗は少し興味が湧いた。

ドリンクを入れてコップを手で取ったときだった。

「あの……」

「はい？」

「もしかして……山中……健斗くんですか？」

「えっ？」

健斗は驚いてその女性を見張った。どうして自分の名前を知っているのだろう。健斗はこの女性とは面識がない。なのに、あっちは自分のことを知っている。全く心当たりがなかった。

「そう……ですけど。」

「やっぱりっ！」

女性は歓喜の声をあげた。手に持っているドリンクが揺れて、少し零れるのを健斗は見た。だが、そんなことよりも何故自分のことを知っているのだろう？

「えっと……どこかで会ったことありましたっけ？」

健斗が気まずそうな恐る恐るそう尋ねてみた。あっちはこっちの名前を覚えてくれているみたいだが、正直こっちは名前も顔も覚えていなかった。すると女性はにっこりと微笑んで頭を下げた。

「いえ。多分私が一方的に知ってるだけです。あの……高野信彦（たかののぶひこ）のこと覚えてますか？」

「――っっ！」

その名前が出たことも健斗は驚きを隠せずにいた。高野信彦――ノブの顔がぱっと思い浮かんだのだ。どうしてノブのことを知っているのだろう……もしかして……

「私、信彦の姉なんです。」

呆然としていた健斗は全身の力が抜けるような感覚になった。するりとコップが手から床に落ちた。

パリンッ！と割れる音と女性の「きゃっ！」という悲鳴で健斗はす

ぐに我に返った。

「うわっ！」

「大丈夫ですか？」

ガラスの割れた音に店内にいた客が健斗たちを見てきた。それとほぼ同時にそばにいた店員が健斗たちの元に駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか？すぐお片付けいたします。」

「す、すみません……」

健斗は謝りながら、その女性を見た。女性は手に持ってたコップをそばに置いて片付けを手伝おうとしている。

そうだ。

どこか見たことのあるような顔……それは、ノブとイメージが重なっているからだった。

第9話　新たなる決意　P．31

後片付けを店員に任し、健斗とその女性は一旦外に出ることにした。
ヒロも連れて来るべきかと思ったのだが、今は自分一人で話を聞きたかった。

ノブの姉だという女性はこのファミリーレストランに高校時代の友人と食事に来ていると言った。
健斗はノブの姉だという女性に動揺を隠せないまま言った。

「本当に……ノブの？」

「はい。突然ごめんなさい。私もちょっと驚いてるんです。まさかこんなところで山中くんに会えるなんて……」

彼女は嬉しそうに目を細くして微笑んだ。健斗はどう反応すればいいのか困り「はぁ…」とため息混じりに答えた。
動悸が激しく何を訊けばいいのか分からなかった。健斗だって充分驚いていたのだ。こんな偶然があっていいのだろうか……

「えっと……俺のことはノブから？」

「はい。色々と聞いてました。あの子、あなたに強く影響されてた部分があって、昔あなたの話をよく聞きました。」

「そう……なんですか。」

意外だった。ノブが自分のことをそんな風に見ていてくれたことを。いつも意見とかが食い違い、言い合いばかりしていたのに……だから余計に裏切ってしまったことを激しく後悔した。

「それに……私自身もあなたを見たことがあって……」

「えっ？」

「二年前……五月の地区大会の決勝戦の日です。」

健斗は心の中だけで納得した。中二の五月の地区大会……優勝を決めた大会であり、それが健斗の最後の大会でもあった。神乃中サッカー部がまだ崩壊する前の話だ。

「私も応援で見に行ったんです。そこであなたを見ました。サッカーのことなんて全然知らないけど……あなたのプレーはよく覚えてます。すごかったです。それくらい魅力的で、印象的でした。」

確かにあの頃の健斗はまさに全盛期だった。あの地区大会中に、まるで魔法のようにボールを扱う白いユニフォームを着た選手……“白魔術師”通称“ホワイト・マジシャン”の名前がスポーツ新聞で特集をされてたのを健斗は覚えていた。

だが、その話も……今では過去のものとなっていた。

「……えっとお姉さんは……」

「佐奈です。」

佐奈はにこっと笑ってそう言った。健斗は苦笑いを浮かべた。

「……佐奈さんはノブが今どうしてるか知ってますか？」

それが一番聞きたかった。何よりも……ノブが元気でやってるかどうかが気になった。

健斗が部活を止めた日以来、ノブとは一言も口を聞いていなかった。ノブだけではなく、リュウタも琢磨も、佐久とも口を聞いていない。その状態のままで二年が過ぎた。

ノブとリュウタは元気でやってるだろうか？サッカーを頑張っているのだろうか？それが知りたかった。

佐奈は小さく微笑んでゆっくりと頷いた。

「はい。今あの子といっしょに暮らしてるから。」

「あ、そうなんですか？俺は寮生活って聞いてたんですけど……」

健斗がそう言うと、佐奈は困ったように苦笑いを浮かべた。

「最初はそうだったんです。でも……ほら、あの子あんな性格してるから、寮内で結構揉め事を起こして……七月から私のアパートで二人暮らしを……」

「あぁ……」

健斗は大きく納得した。確かにノブは自分の気にくわないことにはとことん反発する。そこが健斗との言い合いが多かった理由でもあ

った。

寮生活というのは言わば共同生活のようなものだ。その中では争いや言い合いが頻繁にあることだろう。佐奈が言う理由も納得のいく話である。

「でも部活はすっごい頑張ってます。というか、あの子その話しかしないんですよ。“今日俺二点も決めて大活躍した！”とか言って……子供みたいでしょ？」

と言いながら、佐奈は恥ずかしそうにクスクスと笑った。健斗もつられて小さく笑った。確かに相変わらずだ。試合の度に自分の活躍をアピールするやつだった。

「そっかぁ……頑張ってんだ、あいつ……」

健斗は穏やかな表情でほっとため息をついた。自分のせいで不甲斐ない中学校生活を送らせてしまった。だが、今は高校で楽しく元気にやっている。これほど嬉しいことはなかった。

「……山中くんは……今はもうサッカーを辞めたって……」

佐奈が言葉を濁らせながら恐る恐るそう訊いてきた。健斗は恥ずかしそうに苦笑いを浮かべて、小さく頷いた。

「あ、はい……ちょっと色々あって……中学二年の夏に……」

「そう……ですか。」

「だから、ノブには本当に悪いことをしたなって……すごく後悔し

てて……今すぐにでもあいつに会って謝りたいとは思うんですけど……あいつの連絡先とか知らないし……」

そう言うと、健斗は顔を上げてにこっと笑った。

「だから……話が聞けてよかったです。あいつは今、楽しくやってる……それが聞けて……充分です。」

「……」

「あ、すみません。何か暗い話しちゃって。」

「いえ。私もあの子から色々聞いてましたから。お友達のこと……本当に残念です。」

健斗は軽く笑いながら頷いた。さすがに姉となれば、そのへんの事情を聞いているのだろう。

「えっと……佐奈さんは今何をなさってるんですか？」

健斗は決まりが悪くなるのを避けるように、話題を変えてみた。すると佐奈はちょっと意外そうな顔をしてすぐにクスッと笑って答えた。

「私は今年で大学の四年です。あ、あの子が通ってる附属高校の大学で……」

「あ、じゃあいっしょなんですね。」

「まぁ校舎は違いますけど。でもバスで二駅くらいの距離だから、

よく試合の応援とかに行くんです。」

「今日は……どうしてこっちに？」

「大学はまだ夏休みなんです。就活で忙しかったのもあって、ここんとこずっとこっちに戻ってなかったから……たまには帰らなきゃなって。」

「親孝行なんですね。」

「そんな。息抜きみたいなもんですよ。大それたもんじゃないです。明日の始発には帰りますし。」

と言って佐奈はクスクスと小さく笑った。笑顔が綺麗な女性だ。きっと大学でも彼女に近づく男がたくさんいたはずだ。そんなことノブが聞いたら怒りそうだな……と健斗は想像してみて可笑しさを感じクスッと笑った。

「……何だか、想像と違ってちょっと驚いてます。」

「えっ？」

佐奈にそんなことを言われて健斗はちょっと戸惑いを見せた。佐奈はそんな健斗の様子を見て、またクスッと笑った。

「すごく大人びていらっしゃるんですね。ノブとは大違い。今、高校一年生ですよね？」

「あ……まぁ、一応。そんな……俺なんてまだまだガキんちょです。」

と健斗は照れるように笑った。大人と言われて気持ちが高ぶるのはまだまだ子供だという証拠みたいなものだ。

しかし佐奈は首を横に振った。

「いえ。頼もしい人だなって……ノブがあなたに憧れていたのもよく分かります。」

「ノブが……」

「はい。あの子は今でも、あなたに憧れていますよ。」

「そんな……俺に？」

信じられなかった。自分はノブを裏切った人間だ。恨まれているなら分かるが、それを憧れているなんて誰が思うだろう。しかし佐奈はにっこりと微笑んだ。

「はい。今でもよく言うんです。“見返したいやつがいるんだ。中学のときは何も出来なかったけど、高校ですげーことして後悔させてやりたいやつがいるっ！目を覚まさせてやるんだ、俺がっ！”って……」

「ノブ……っ」

健斗は顔を逸らして唇をギュッと噛み締めた。信じられないくらいに嬉しさが健斗を包んだ。

あんなに自分を憎んでいるだろうと思ったノブが……

裏切ってしまったことを今でも許していないと思っていたノブが……

今でも自分を気にかけてくれている。今じゃ自分なんかよりも遠くに行ってしまったあいつが……嬉しかった。

健斗は目に涙が溜まるのを感じた。

「大丈夫ですか？」

佐奈が心配するように健斗に言った。健斗ははっと我に返って顔をあげて、溜まった涙を拭った。鼻を啜り、誤魔化すように笑った。

「すみません。感激しちゃって……そっか……ノブが……」

「……あの子はあなたのことを今でも誇りに思ってます。あなたのことを、恨んだりなんかしてませんよ。」

佐奈が穏やかな口調でそう言った。健斗は鼻を啜りながら小さく頷いた。

心の中の闇に一筋の光が差し込んだような、そんな感覚を覚えた。

佐奈と共に店内に入り、健斗はヒロたちが待つ席へと向かった。佐奈は「それじゃ」と軽くお辞儀をしたので、健斗もすぐにお辞儀を返した。

健斗がヒロたちの待つ席に戻ると、ヒロが健斗が帰ってきたことに気がついて憤慨したような口調で言ってきた。

「何やってたんだよっ。ドリンクバー取りに言ってたんじゃなかったの？」

「ワリィワリィ。ちょっとな。」

そう言って、健斗はヒロの隣に腰掛けた。ヒロたちはどうやら自分でドリンクを取りに行ったらしい。そして寛太は「う～ん」と頭を抱えながら目の前のプリントと戦っていた。

健斗はチラッと前を見ると、佐奈と他の二人の女性が会計を済ましていた。佐奈が振り返り健斗の視線に気がつくと、小さく微笑んで会釈をした。健斗も笑って会釈を返した。

「誰？知ってる人？」

ヒロがその女性に気がつき健斗にそう聞いてきた。健斗は話すかどうか一瞬悩んだが、今この場で話すべきではないと思って「ちょっとな」と言ってごまかした。

そしてドリンクを少し飲み、心を落ち着かせた。

ようやく道が見えてきた。

そんな気がした。

第9話　新たなる決意　P．32

家に帰ったのは時刻は夜の八時を過ぎていた。そこで夜ご飯を済ますころにようやく寛太に勉強を教えるのを終わった。寛太は艶々した表情で元気だったが、健斗とヒロは精も根も尽き果てていた。

とてもじゃないが……自分の勉強なんてする体力は残っていない。とにかく疲れていた。健斗は自転車を置くため、庭に足を運んだ。

「おかえりー。」

自転車を置こうとすると声が聞こえた。縁側で麗奈がアイスを食べながらゴンタとじゃれている。ゴンタは健斗が帰ってきたのに気がつくと、麗奈の元から離れて健斗に駆け寄ってきた。尻尾を大きく振りながら健斗に甘えてきた。

健斗はゴンタの頭を撫でながら自転車を元の定位置に戻した。

「ただいま。」

「遅かったね。ご飯食べちゃったよ?」

「知ってる。食ってきたし。」

「テスト期間なのに遊んでもいいの?」

「遊んでたわけじゃねぇよ。それにそういうことは寛太に言えよな。」

健斗が憤慨したように言うと、麗奈は理由を悟って苦笑いを浮かべた。

「また勉強教えてーって頼まれたんだ。」

「そうだよ。……まぁ別に明日英語だからいいんだけど……よくはないか。」

剃髪がかかってるしな。

「何？」

「何でもない。ほらゴンタ邪魔だぞ。」

健斗は甘えてくるゴンタをたしなめて、縁側から家の中に上がった。麗奈の横で靴を脱ごうとすると、麗奈が健斗の前に何かを差し出してきた。

「お疲れ様。アイス、食べる？」

「マジ？サンキュー。」

健斗は笑って麗奈からアイスを受け取ると、麗奈の横にゆっくりと座った。袋を開けてアイスをパクッと一口食べた。冷たさとほどよい甘さが頭の中に広がる。疲れが一気に吹き飛ぶようだった。

「そろそろ帰ってくるかな、って思って用意してたんだよ。」

麗奈が笑って健斗にそう言った。健斗は「ふ～ん」と呟いてペロッ

と舐めた。

「つーかお前本当にここ好きだな。」

「えへへ♪まぁね。」

「でももう寒くなるから、ここは使えなくなるぞ。」

「神乃崎の冬は寒いの？」

「あぁ。めっちゃ寒い。一月になったら軽く気温が一桁とか……雪なんて四月になるまで降るんだぜ？」

「ふ～ん……そっか。」

「東京の冬はどんな感じ？」

「う～ん……雪はあんまり降んないかな？逆に降ったら珍しいって感じ。でもすっごく寒いよ？」

「ふ～ん。」

健斗はまたアイスをペロリと舐めた。ほどよい甘さが口の中に広がる。全く、アイスクリームを発明した人物には敬意を払いたい。一体どんな人なんだろう？アイス……という名前だろうか？

「今日の数学のテスト出来たの？」

健斗はギクッとして苦笑いを浮かべた。その反応を見た麗奈は呆れるようにため息を吐いた。

「ダメだったんだね。」

「……うるせー。」

「健斗くんは理系に向いてなさそうだね。」

「かもなー。まぁ文系の方が色々と楽そうだから別にいいや。」

「あれ？大学受験するの？」

麗奈は意外そうな顔をして、健斗にそう言った。ヒロも同じことを聞いてきた。正直はっきりとは分からないが、一応そのつもりでいた。

「多分な。まだ分からないけど……お前は？」

「私？私は受験するよ？もちろん。」

「へぇ……すげーな。そんなはっきり決めてるなんて。……え、何？何かやりたいこととかあんの？」

そう言えば麗奈とそういう将来のこととか話したことがない。良い機会だからこの際色々と聞きたかった。麗奈は健斗の問いかけに笑って頷いた。

「うん。一応ね。」

「マジ？何々？」

「え～？恥ずかしいよぉ。」

「隠すような話じゃないじゃん。いいから教えろよ。」

健斗が催促すると恥ずかしそうにしていた麗奈がじっと健斗を見つめた。

「……一応ね、医学部を受験しよっかなって考えてる。」

「医学部っ？」

スケールのでかい話だった。まさか医学部を受けようとしてるとは想わなかった。あれは相当の学力がないと受かるようなものじゃない……ということくらい健斗も知っていた。

「すげーなお前。へぇ～……医学部かぁ。」

「一応だよ？でも……行きたいなぁってずっと思ってるんだ。」

「何で？医者になりたいから？」

健斗が端的にそう訊いてみると、麗奈はクスッと可笑しそうに笑った。

「そんな端的な理由じゃないけど……一番の理由は……お母さんかな？」

「お母さんって……お前の？」

健斗が一応訊いてみると、麗奈は膝を抱えて恥ずかしそうに頷いた。なんとなく理由が見えてきたような気がした。

「お母さんは心臓の病気で死んじゃったから。何だかそれを治せないことがすごく悔しくって……でもお母さんと同じような病気を抱えてる人がいて、同じように苦しんでる人がいるんだって思うと……何だか悲しいから……」

「お前が医者になって、その人たちを救いたいって？」

健斗が麗奈の気持ちを代弁していうと、麗奈は顔を赤らめて恥ずかしそうにまた頷いた。はにかんで笑い健斗をチラリと見る。

「子供みたいでしょ？でも……ずっとずっとそう思ってきたから……だから医学部を受験するつもりなの。」

健斗はそう呟くように言う麗奈を見つめた。

そういう気持ちを持つことは、親を亡くし、深い悲しみを背負った麗奈にとっては当たり前のことなのだろう。

自分と同じような悲しみを味わせたくない。親がいなくなる辛さを誰にも味わせたくないという気持ちが……麗奈を医学部に行くという強い決意の源になっているのだろう。

健斗はその気持ちを十分理解して、ふっと笑った。

「そんなことねーよ。すげーよお前。ちょっと見直した。」

「そうかなぁ……？誰にも言わないでね？こんなこと言うの……健斗くんだけなんだから。」

そう呟く麗奈が、何だか可愛らしく思えた。健斗はクスッと笑うと「あぁ。」と言って、猫みたいな麗奈の頭をくしゃと撫でた。

「頑張れよ。応援してるから。」

「……うんっ。」

麗奈は嬉しそうに目を細くして笑った。麗奈の笑顔を見て安心した健斗はそっと麗奈の頭から手を放した。

「健斗くんは？やりたいこととかないの？」

「ん～……俺はまだないなぁ。まだ自分が何をしたいのか、何をするべきなのかも分からないし……」

でも今はそれでいいと思ってる。やりたいこと、やるべきことなんてこれから先見つければいい。そのために大学に行き、自分の生きる道を探す。健斗はそう考えて、大学受験という道を歩もうとしているのだ。

それに……今は目の前の問題を一つずつ越えていきたいと思っている。

それに対する答えが一つ、今日見つかったような気がする。これから健斗が何をすればいいのか……何をするべきなのか……何をしたいのか。

佐奈と話し、ノブの気持ちが分かった今、健斗の気持ちは今までが嘘のように晴れやかだった。一つの決意が決まろうとしていた。

だが……今はそれを話すことじゃないな。

「……ねぇ。」

「ん？」

「私たちって……将来どうなってると思う？」

麗奈が健斗の顔を覗き込むようにしてそう訊いてきた。健斗は突然の問いかけにドキッと胸を高鳴らせた。

「どうなってるって……何が？」

「だから～……その……こんな風に、縁側でアイスを食べながら、健斗くんとお喋りする……ずっとこんな風なのかな？それとも……時間が経てば違っちゃうのかな？」

「……高校を卒業して、大学に入った……その先ってこと？」

健斗が聞き返すと、麗奈は小さく頷いた。健斗はゆっくりと前を見た。小さな池の水面が風で揺れていた。

それについては、健斗も考えたことがあった。自分たちはこの先もずっと……このままでいられるのだろうかと。

麗奈はこの家にずっといて、また夏が来たら、こんな風に縁側で麗奈と色んな話をすることが出来るのだろうか、と。

それを考えている自分に気がついたとき、健斗はあることが分かった。

自分は、今の生活が好きなんだと。今の生活に幸せを見いだしている。麗奈がこの家にいる状況を欲している。麗奈がこの町にいる……今の世界が好きなんだ、と。

麗奈がいなくなるなんて……考えられない、考えたくなかった。

「……ずっと……こうだといいんだろうな。」

「え？」

「けど……こんな風に話が出来るのは……少なくとも今だけだと思う。永遠じゃない。」

「……」

麗奈は寂しそうな表情を浮かべた。そして膝を抱え込んだ。残酷な話だが、健斗も悲しいくらい辛いが……人は日々成長していくもの。その中で価値観も変わっていくし、状況も状態も……全てが変わっていくものだ。

いつまでもこのままというわけには……いかないのだ。

「……ずっとこのままがいい……」

麗奈が呟くようにそう言った。寂しそうな表情が間から見えた。

「健斗くんと……ずっと……」

「……」

――麗奈……

自分はどうすればいいのだろう。麗奈に対する思い……自分にも分からなくなっていた。

それに気がついたのは……やはりあのときだ。麗奈の誕生日の日、麗奈のために光り橋を見せてあげた。

ホタルを捕まえている間、夢中だったから何も思わなかったが……ふと今思うと、どうしてあんなに頑張ったのだろう？

なぜ麗奈のために、そこまでしてあげようと思ったのだろう？

そして橋の上で麗奈に抱きつかれたとき、死ぬほど胸が高鳴った。その胸の高鳴りは明らかに今までとは違った。いつも馬鹿にされてると思っていたが、そうじゃない。

目を閉じたとき……自分は何をしようとしたのだろう？以前、麗奈にされたときはあんなにむかついて、あんなに怒ったのに……そのとき自分は自ら麗奈を欲した。

そして、麗奈が家の前で自分に言った。

――私は健斗くんの……何なの？

その言葉を聞いたとき、健斗の心が強く痛んだ。麗奈は自分にとって何なんだろう？

ただの家族？それとも同級生？

違う。

少なくとも麗奈は自分の中で一番特別で、一番大きな存在となっている。

恋心を抱いてたはずの早川よりも、自分の心の中で麗奈の存在が大きくなっていた。

だから話したいと思った。話さなきゃダメだと思った。

自分がこんなんだから……麗奈を悲しませている。麗奈を苦しませている。

そんなのダメだ。自分は決めたはずだ。

麗奈の笑顔を……守るんだって……

……

……

……

もしかすると……俺はもう……

「あら？あんた帰ってたの？」

後ろから声がして健斗と麗奈は同時に振り返ると、そこには母さん

が洗濯物を持って立っていた。

「あ、うん。ただいま。」

「ご飯は？」

「食ってきたからいらない。」

「あっそう。っていうかあんたたち、明日もテストなんでしょ？いつまでも遊んでないで勉強しなさい。」

そう言って母さんは奥の方へと消えてしまった。健斗はほっとため息を吐いた。そしてまた振り向いて麗奈を見た。驚いたことに麗奈は涙を目に溜めていた。

健斗の心が疼く。

あぁ……もうっ……

「バカ。何泣いてんだよ。」

「別に……泣いてなんか……」

麗奈は強がるように涙を拭った。

でも健斗は正直嬉しかった。

麗奈にとっても今の時間はとても大切で、失うのが怖いくらい、健斗を思ってくれているのだ。

ちょっとさっきのは意地悪だったかもしれない。

「今先のことなんて考えても仕方ないだろう？俺たちは“変わる”かもしれないけど……今がある。それに……」

健斗はそう呟いて慌てて口を閉ざした。その異変に気がついて麗奈は不思議そうに首を傾げた。

「それに？」

「な、何でもない。とにかく話はおしまい。部屋に戻って勉強しろよ。俺は風呂に入るから。」

麗奈は納得のいかない表情を浮かべたまま、ゆっくりと頷いた。

「アイスのゴミ。片付けておくよ。」

健斗がそう言うと、麗奈はまたと頷いてアイスのゴミを健斗に渡した。そしてゆっくりとした足取りで自分の部屋へと戻っていく。

何だかいつも以上に、思い詰めているようだった。何かあったのだろうか？未来を予感させる何かが……

それよりも、健斗は自分が言おうとしていた言葉を思い出していた。危なかった。思わず口を零すところだった。

何を考えてるんだ……俺は。健斗は自嘲気味にそう呟いて、洗面台へと向かった。

第9話　新たなる決意　P．33

今朝の冷え込みは例年よりもきつかった。はぁっと息を吐くと、それは白濁色へと色を変えた。

まだ秋の真っ最中なのに、早朝のこの寒さ。さすが神乃崎だ。どこの都市よりも寒く感じる。

それに長い間帰っていなかったため、この寒さをすっかり忘れていたというのもあるかもしれない。

佐奈は暖かい缶コーヒーを片手に始発の電車を待っていた。後十分くらいで電車が来る。それから一時間乗り、そこからバスに乗り換えて三十分乗っていくと、ようやく市内に出れる。市内からは特急電車があるから、それに乗っていけば三十分もあれば県外に出れるだろう。

恐らくあっちに着くのは朝の八時くらいになりそうだ。時間はたっぷりある。

そんなことを考えながらコーヒーを飲み、冷えた体を温めていた。

するとだった。後方から、ざっざっと足音が聞こえた。佐奈はその足音に気づき、ゆっくりと振り返ると……そこには意外な人物が立っていた。

山中健斗だった。紺色のPコートを身に纏い、マフラーに顔を埋めながらゆっくりと佐奈に近づいてくる。次第に距離を縮めるに連れ、佐奈に笑顔を見せてきた。

佐奈もまさか来てくれるとは思ってなかったので、驚きと共に何だか少し嬉しい気持ちで健斗に微笑んだ。

「おはようございます。」

「おはよう。見送りに来てくれたの？」

佐奈がそう言うと、健斗は照れくさそうに赤い鼻をポリポリと掻いた。

「……せっかくですから。昨日は色々とありがとうございました。」

そう言いながら、健斗はゆっくりと佐奈に頭を下げた。佐奈はその姿を見てゆっくり首を振った。

「ううん。別にいいのよ。私もあなたと話が出来て、本当に良かったって思ってる。あなたの気持ちを、信彦に伝えることが出来るもの。」

信彦がこっちにやってきたとき、いつもより野心に満ちているのが分かった。元々少し気の強い子だったが、彼の目には何か強い覚悟が混じっているのを佐奈は感じていた。

母から信彦の聞いたときは驚いた。中学でサッカーを満足に出来なかったこと。部活が崩壊し、ろくな試合に出れなく、いつも悔し涙を流していたということ。

そしてその原因には、信彦と同年代の子が三人、サッカー部を辞めてしまったということ。

一人は事故で亡くなり、もう二人はそのショックからか自分から身を引いたという。

そしてその二人の中に、山中健斗の名前を聞いた。佐奈はその名前を聞き、すぐに誰なのかを思い出すことが出来た。

二年前の五月、佐奈は久しぶりに神乃崎に戻っていた。ちょうどそのとき、信彦の試合があるから家族で応援しに行くと言われ、サッカー自体をあまり知らない佐奈は軽い気持ちでついていった。

そしてそこでとても素晴らしい状況に出会った。ピッチの中で一際輝く少年を見つけた。

まるでボールを魔法のように操り、何点もの得点をあげた少年。鮮やかなドリブル、パス、シュート。どれもが完璧で、とても中学生とは思えなかった。

サッカーを知らない佐奈ですら、彼のプレーには魅力されたのだ。

その少年の名前が、山中健斗。まるで魔法を使ってるように鮮やかなテクニックでボールを扱う白いユニフォームの少年と、スポーツ人物で特集されてるのを読んでから佐奈はその名前と顔を忘れられないでいた。

そして信彦自身、よく健斗の話をしていた。

健斗はすごいやつだ。俺もいつかあいつのようにすごい選手になってみせる、と。

プライドの高い信彦が誰かをそんな風に褒め称えるのは珍しいこと

だったので、佐奈は思わず口にしていたものを喉に詰まらせてしまいそうになった。

そんな子が、サッカーを辞めてしまったということを聞いたときは佐奈自身もショックだったし……何より信彦の気持ちを推し量った。きっと信彦が彼に裏切られたと思っているのだろう。彼を恨んでいるのかもしれない。

だが本当は違った。信彦は今でも健斗のことを慕っているということが分かった。

「俺はあいつを超えるんだ。中学では何も出来なかったけど……高校でめちゃくちゃ活躍して、すげー選手になって、あいつを見返してやる。後悔させてやる。目を、覚まさせてやるんだ！」

少ないチャンスの中、佐奈の通っている大学の附属高校が信彦に目をつけたのは不幸中の幸いだったのかもしれない。現に今、信彦は大好きなサッカーを思う存分やれている。その気持ちの余裕からか、自己を冷静に見つめ直せることが出来たのだろう。

そして今度はいつか……健斗が信彦のことを、そして今どう感じているのか聞いてみたいとも思っていた。

そしてその願望が今回の帰省で叶うことになろうとは佐奈は予想だにしていなかった。

ファミリーレストランで久しぶりに高校時代の同級生と食事をし、ドリンクバーでドリンクを入れようとしたそのときに、偶然にも彼と出くわしたのだ。

最初は確信がなかった。本当にあの山中健斗なのだろうか、と。何せ二年も経っているのだから、風貌が変わっていても可笑しくなかった。実際、今の健斗は以前見たよりも随分と身長が伸びていた。

そしてそこで健斗の今の気持ちを聞くことが出来た。

信彦には悪いことをしたと申し訳なく思っている。後悔しているということ。そして、無責任かもしれないが……もう一度サッカーをやりたい……その気持ちが芽生えているということ。

すぐに帰って、信彦に報告したかった。信彦が望んでいる通りになっていたのだ。

「……一つお願いがあります。」

健斗が静かにそう言ってきた。佐奈は不思議そうに首を傾げた。

「何かしら？」

「……ノブに……俺とヒロがまたサッカーをやりたいって思っているということを……黙ってて欲しいんです。」

予想外のお願いに佐奈は驚いたような顔を見せた。冷たい風が健斗の前髪を揺らしていた。

「あいつ……あいつらには、俺自身の口で言いたいんです。」

健斗は続けてそう言った。その言葉には強い決意が込められていた。

「俺自身であいつらに言いたい。そして、あいつらから直接許しを得たいんです。」

佐奈は言葉を出すことが出来なかった。健斗がどれだけ信彦たちに対して遺憾の念を抱いてるのか、はっきり分かったような気がしたからだ。

「近い内に、あいつらに会いに行きます。だから……それまで待ってもらえないでしょうか？お願いします。」

健斗は深々と頭を下げた。何て素晴らしい子なんだろう……佐奈は年下である健斗に敬意を払いたい気持ちになった。

自分がしたことを深く悔やみ、そして背負っている責任をしっかり果たそうとしている。曖昧にはせず、しっかりと……自分の責任を背負っているのだ。

佐奈の答えは決まっていた。

「……分かった。信彦には、あなたに会って話をしたっていうことだけを話すわ。」

健斗はそれを聞くとすぐに顔をあげて、嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとうございます。いつになるかは分からないけど……近い内に絶対に会いに行きます。他にもやること……全部終わってから……あいつらに。」

「分かった。私もそれまで待ってるわ。……山中くん、頑張ってね。

」

「……はい。」

健斗が小さく笑った。佐奈も嬉しそうに微笑んだ。

すると、遠くから電車が近づいてくる音が聞こえた。そろそろ行かなくてはならない。

佐奈は鞄からメモ帳とボールペンを取り出し、そこに番号を書きつけた。そしてメモ帳からメモを切り取り、ぎゅっと握って健斗にむかってそれを差し出した。

「これ、私の携帯の番号を渡しておくね。ここでやるべきことが全部終わったら、連絡してちょうだい。私も信彦と会えるように取り計らうから。」

健斗は差し出されたメモを静かに受け取り、じっと番号を見つめた。そしてそっとそれをポケットにしまうとゆっくりと頭を下げた。

「本当に、ありがとうございます。」

「ううん。これは……私のためでもあるの。だから、お礼なんかいらないわ。」

そう言うのと同時に、電車が駅に到着した。空気が抜けるような音を出しながら電車の出入り口が開いた。佐奈はそれに素早く乗り込むと、健斗の方に向き直した。

「頑張ってね。」

「はい。」

その会話を最後に電車の出入り口はしまった。そしてゆっくりと電車は動き出し、やがて彼の姿はどんどん小さいものとなり、ついには見えなくなってしまった。

佐奈はしばらく窓の外を見ていたが、やがてくるりと踵を返してほっとため息をついた。

自分のやるべきことはやった。後は健斗と……信彦の問題だ。

佐奈はどこか晴れやかな心持ちで、県外へ出る旅に気持ちが向き始めていた。

第9話　新たなる決意　P．34

「鍵閉めたか？」

健斗が振り返って麗奈にそう尋ねた。麗奈は指でオッケーサインを作ってにっこりと笑った。

「もう完璧っ！安いっ！早いっ！安全っ！鍵のことなら麗奈ちゃんにお任せあれっ！」

「……行くぞ。」

麗奈のボケをスルーして健斗を自転車のサドルに跨った。麗奈はむっとした表情でその見事なスルーに対して不平を言ってきた。

「ちょっと～？無視しないでよ。」

「お前のわけ分かんねぇボケに付き合えるテンションじゃねーんだよ。」

健斗は冷たくそうあしらって麗奈が自転車の後ろに乗ったのを確認すると、ゆっくりと学校に向けて自転車を発進させた。自転車を漕ぎながら、健斗は大きく欠伸をした。

「そういえば今日は珍しく早起きだったね？」

「そうでもないよ。」

「嘘。いつも三十分前まで寝てるくせに。」

「何かあんまり寝付けなかったんだよ。……剃髪のことを考えたらな……」

「剃髪？」

「いや、何でもない。」

健斗は誤魔化すようにそう言い、麗奈にそれ以上追求させないように自転車のスピードを上げた。

時間を刻む音だけが鳴り響く教室の中、英語のテストが行われていた。健斗はそのとき、襲ってくる眠気と闘いながら英語の問題を解いていた。

――まずい……集中出来ん……

襲ってくる眠気に負けないように健斗はわざと目をかっと見開いてみたり、ほっぺをつまんでみたりするが全く効果がなかった。頭の中に問題が入って来ないため、出来ているかどうかも判断が出来ない。

健斗は目を擦りながら、チラッとヒロの方を見た。ヒロはにやけながらスラスラとペンで書く手を進めている。好調のようだ。

――剃髪くん。

そんなことがあってたまるかっ！健斗は自分に気合いを入れ直すようにして、自分のほっぺたを叩いた。

負けられない戦いがそこにはある……

健斗は最後の問題を全精力を込めて取りかかった。

テスト終了のチャイムが鳴った。それと同時に監督の先生が手を叩きながら声を張り上げた。

「はい、やめぇ～！全員鉛筆置いて。こら山本っ！無駄な抵抗するなっ。」

クラス中に笑いが起きた。しかし健斗は笑えず、ポトンと鉛筆を落とした。絶望が健斗を襲った。

――手応えが……ない。

眠気と闘っていた健斗はどの程度出来ているのか見当がついていなかった。いつもならめちゃくちゃ出来たという感覚があるのだが、今回に限ってはそういう感覚が分からなかった。出来ているのか出来ていないのかが分からない。何せ自分がどう解いたか覚えてないからだ。

冷や汗が流れる。まさか……負ける？

健斗は自分がヒロに剃髪される姿を想像した。ヒロがバリカンを持って健斗の髪の毛を剃ろうとしている。高らかに笑い声を上げて、少しずつ……少しずつ健斗の髪の毛に……

「いやだぁぁぁっっ！！」

健斗は思わず泣き叫ぶような声で立ち上がった。はっと気がつくと、周りの人が全員健斗に視線を注いでいた。

早川も佐藤も、麗奈も寛太も、ヒロまで……みんなが驚いた顔をして健斗を見る。

「あ……すみません……」

健斗が恐縮するようにして静かに座ると、誰かがぷっと吹き出したと同時にクラス中が笑いに包まれた。健斗は恥ずかしくなってゆっくりと頭を下げた。

すると監督の先生が呆れるようにため息をつきながら、「静かにしろぉ。」と手を叩いて言うが、笑いはしばらく納まらなかった。

解答用紙を回収し終わると、寛太が健斗の背中を叩いてきた。

「何だよさっきの？面白過ぎだろ。出来なかったの？」

寛太に笑われながらそう言われた。健斗は何かどす黒い気持ちを感じながら寛太の剥げ頭を手のひらで掴んだ。

「……寛太……お前今すぐ髪伸ばせ。」

「はいっ？」

「育毛剤でも何でもいい。今すぐ伸ばせっ。すぐ伸ばせっ！俺と同じ髪型にしろっ！」

「そ、そんなむちゃくちゃなぁ！」

「ハッハッハッハッ！おやおや健斗くん、どうしたのかね？」

ヒロが高らかに笑いながら健斗に近づいてきた。その笑い声を聞いたとき背筋が凍りついた。作り笑いをしようと思ったが、それが出来ないくらい追い込まれた気持ちになった。

「おや？もしかすると……出来なかったのかね？」

「いや……そういうわけじゃないんだけど……」

実際そうなのだ。別に出来なかったという感覚はない。しかし、出来たという感覚もなかった。

ヒロと英語で張り合うということは、一問、二問のミスで勝敗が大きく変わってしまう。ヒロに勝つためには全問正解を取りに行く感覚でないとダメなのだ。

しかし、全問正解なんて全然ダメなような気がした。眠気のせいで自分がどれくらい出来たのかよく分からない。

ヒロは大きく頷いてハッハッハッとまた高らかに笑って健斗の肩を叩いた。

「いやいやいや、いいんだよ。気にしなくてもー。始めから僕に適うわけがなかったのだからね。」

「くっ……」

「いやでもね?ルールはルールですから?剃髪は覚悟してもらわないと……ねっ?」

「いやっ!あ、あのさぁっ!」

「お~いっ!諸君たち聞いてくれぇっ!」

ヒロが声を張り上げてクラスの全員に向かってそう言った。帰ろうとしている人も足を止めて、みんな一斉にヒロの方を見た。

ヒロはそれを確認するとにこやかな笑顔で続けて言った。

「実はだねぇっ!何と、この山中くんがっ、剃髪するらしいですよぉっ!!」

「バッ!!お前っ!!」

あまりの衝撃の事実に全員が「えっ?」という空気になった。そして男子はともかく女子の皆さんまでその発表に大きな関心を持ち始めた。

「えっ?マジっ?健斗がっ?何で急に?」

「いや何でもねぇ？彼が僕に“しょーーぶーー”を持ちかけてねぇ？英語のテストで負けた方は“ていはーーつーー”ということを決めてましてぇっ！」

「ヒロッ！！お前マジでそれ以上はぁっ！」

健斗はヒロの口を塞ごうと必死でもがいたが、それを寛太が制してきた。寛太はこういう空気が大好きなため、ヒロに力を貸してきやがったのだ。

「しかし皆さんのご存知のとおぉぉぅりっ！こいつはどうやら、へまをしたらしくてね？まっ、僕に勝つという可能性はほぼゼロに近いという状況になりましてね？ハッハッハッハッ！ルネッサーンッ！！」

ヒロは高らかに笑いながら寛太と大きくハイタッチをした。

あぁ……もうダメだ……

「しか～～しっ！！この山中くんは無謀と分かりながらも、この僕に挑戦をした、その勇気っ！！その勇気は賞賛に値するものではありませんかぁっ！！皆さん、ぜひ大きな拍手を彼に送ってくださいっ！！」

ヒロがそう言うのと共に、全ての事情を飲み込んだクラスの全員……特にこういう馬鹿騒ぎが大好きな男子が健斗に向けて大きな拍手をしてきた。笛を鳴らしてはやしたてるものがあれば、笑いながら健斗が剃髪することに期待の感を抱いてるものもいる。

「いいぞ～！健斗～！」

「お前サイコーッ！！」

「坊主になったら見せてねぇーっ！！」

笑いと拍手と歓声に包まれる。だがもちろん健斗にはその笑いと拍手と歓声が全て絶望に移り変わる。

もう……逃げることも許されない。

呆然としている健斗にヒロがパンッと肩を叩いてきて、その衝撃ではっと我に返った。ヒロを見ると、ヒロは慈愛に満ちた優しい表情で健斗に笑いかけていた。

「おめでとう、山中くん。勇気ある君にはこれを進呈しよう。」

そう言って健斗に渡してきたのは一冊の雑誌。しかもそれは、坊主専門の髪型のカタログ雑誌だった。こんなものまで用意していたなんて……本当にこいつは一ミリも自分が負けることを想像していなかったらしい。

「まっ。来週までにこの中からお望みの形を決めてくれよ。全部同じようなもんだけど。」

そう言ってヒロはまた健斗の肩を何回も叩きながら高らかに笑った。しばらくその笑い声と歓声と拍手が――健斗にとっては悪魔の誘いだったが――鳴り止むことはなかった。

「……はは……」

健斗の頬にはホロリと伝う涙を感じた。

第9話　新たなる決意　P．３４（後書き）

シリアスが続くと、どうしてもギャグを入れたくなるのが僕のくせです（笑）。

これ実は僕の高校時代のときの実話で、負けた方はバリカンで剃るという勝負をしたことがあるんです……結果は……皆さんの想像にお任せします（泣）

いやー……皆さん健斗が坊主になったとしても、見捨てないであげてくださいねっ？お願いっ！（＜д＞；）ﾚ。。。，．。。，

第9話　新たなる決意　P．35

騒ぎが落ち着いた頃に麗奈が健斗のところに駆け寄ってきた。

「健斗くんっ！さっきの話、本当？」

麗奈は少し興奮気味で健斗にそう訊いてくる。どちらかというと、他の人と同様面白がっているみたいだ。健斗はヒロにもらった坊主専門カタログに目を通しながら小さく頷いた。

「健斗くんが坊主かぁ～……何だかなぁ？」

麗奈はしっくり来ないと言うように首を傾げる。そんな風に言ってくる麗奈を見て健斗はむっとした表情になった。

「何がだよ？」

「いや……健斗くんが坊主にするんでしょ？何だかなぁ……坊主って林くんみたいな人なら似合うだろうけどさぁ、健斗くんは絶対似合わないよね？まったく本当にバカなんだから。」

麗奈がそう言うので健斗は寛太をチラリと見た。寛太は麗奈にそう言われたのが嬉しかったのか「ふふん。」と得意気な顔をしていた。妙にむかつくのは何故だろう。

「うるせぇ～！まだやってみないと分かんないだろっ？どうせなら、めちゃくちゃカッケー坊主頭になってやるっ！」

と言って健斗はまたカタログに目を通し始めた。その横でヒロはずっと高らかに笑っている。本当に……どうしてこんなことになったのだろうか……

「……健斗くん、大変だね。」

健斗を哀れむように言ってきたのは早川だった。鞄を持って、健斗たちに近づいてきたのだ。

「でも……坊主頭も素敵だと思うよ?」

「早川だけが味方だよ……」

健斗は泣きそうな声でそう呟いた。そんな健斗を見て、早川は困ったように苦笑した。健斗はカタログを見ていると、ふとここに佐藤がいないことに気がついた。

「あれ、佐藤は?」

「マナならもう帰っちゃったよ?何かあんまりテストの出来が良くないから焦ってるみたい。」

早川が小さく笑ってそう言った。佐藤の気持ちがわかる。昨日の健斗の数学状態である。すぐに家に帰って残りの教科で挽回しようと思うのだ。

健斗は恐らくヒロには負けてるだろうけど英語の点数はかなり良いはずだと思った。だから数学のカバーを英語で補っているから、佐藤ほど焦る必要はない。

早川はきっと今回も成績が良いんだろうなぁ……

「……あれ？そういやお前佐藤と仲直りしたの？」

健斗がカタログから目を離してヒロにそう尋ねた。その瞬時、ヒロの高らかな笑い声が止まり、それは引きつった笑顔へと変わる。

聞いてはいけない質問だったらしい。

だが健斗は心の底から呆れていた。一体いつまで喧嘩をしているのだろう？自分と麗奈ですら、こんなに長続きはしない。

Ｒｙｕでヒロと佐藤が喧嘩をしてからすでに二週間以上は経過していた。

「いつまで喧嘩してんだよっ？」

「うるせーっ！！本当にどうすればいいのか分かんねーんだよっ！！完全にタイミングを見失った。」

ヒロは開き直るようにしてそう叫んだ。するとそれに興味を持った寛太が「何々？」と言いながら健斗たちに距離を詰める。

「え？ヒロ、佐藤と喧嘩中？」

「何でお前嬉しそうなんだよ。」

「いや～、何かそういうのって気になんない？」

「知るか。どうでもいいけど、タイミングなんか関係ねぇだろ？あ

れはお前が一方的に悪いんだから……」

健斗がそう言うと、ヒロは「うぅっ……」と唸って頭を抱えた。実際こういう状況に陥ったことがないヒロはどうすればいいのか本当に分からないみたいだ。

「そういえば、ヒロくんはどうしてあんなに怒ったの？」

唸っているヒロに早川がそう尋ねた。そのとき健斗は「しまったっ！」と心の中で叫んだ。そう言えば早川には何も話してなかった。中々タイミングがなくって、早川に話すことを忘れてしまっていた。この前あんなに健斗を心配して話しかけてきてくれたのだから、その好意に報わないわけにはいかなかった。

ちょうど良い機会だからちゃんと説明しよう、と健斗が思っていると……健斗が口を開く前に麗奈が早川に言った。

「あのね。健斗くんとヒロくんは、もう一度サッカーをやりたいんだって。」

麗奈が端的にそう言うと、早川が驚いた顔をして健斗を見た。しかも早川だけではなく、寛太までも「えっ？」と驚きの声をあげて健斗を見た。健斗は早川と目を合わせると、照れくさそうに小さく笑った。

「……本当に？」

早川が小さな声で健斗にそう尋ねた。

早川は健斗が何故サッカーを辞めてしまったのかをちゃんと知っているはずだった。というより、健斗と中学が一緒である人間は健斗の身に何が起こったのかを知っている。

だから早川や寛太にとっては健斗がまたサッカーをやりたいと思い始めたことは驚くべきことだった。特に……早川はそれをどんな気持ちで今聞いたんだろうと健斗は心の中で呟いた。

健斗は照れくさそうな表情を浮かべながら、チラリと二人を見た。

「……まぁ……まだ考えてる途中……だけど。」

「え～！健斗がまたサッカーやるなんてなぁっ。つーかあんな大きな騒ぎ出しといてサッカー部に入れんの？」

こいつは痛いとこをついてきた。確かに……神乃高のサッカー部員は健斗のことをあまりよく思っていないかもしれない。きっと入りたいと言っても、歓迎はしてくれないだろう。

弱った……

「今も言っただろ？まだ考え中なの。そんなことよりも、ヒロだよヒロ。お前はさっさと佐藤と――」

「健斗、ヒロ。」

違う声が健斗を呼ぶ。健斗はその声に聞き覚えがあった。まるで条件反射のように健斗はばっと振り返ると……教室のドアの近くに思いがけない人物が立っていた。

のんちゃんだった。のんちゃんがドアの近くで立って、その視線は健斗とヒロのことを真っ直ぐ捉えていた。

「のんちゃん。」

健斗は驚いたような声を上げた。するとのんちゃんは小さく微笑んで教室の中に入ってきた。そして、ゆっくりと健斗たちに近づいてくる。

「良かった。もう帰っちゃったかなって思ったんだけど、話し声が聞こえたからもしかしてって……」

「あ、うん。ちょっと色々と話してさ。」

健斗はそう言いながらヒロをチラリと見た。ヒロはのんちゃんを見ながら小さな苦笑いを浮かべている。健斗も同じような心境だった。神乃高に入学して以来、のんちゃんがこうやって健斗たちを訪ねてくるのは初めてのことだったのだ。

健斗は少々戸惑いを隠せないまま、なるべく笑顔を作ろうと努めた。

「えっと……何か用？何か……のんちゃんがこっちのクラスに来るのって珍しいね。」

健斗は自然に振る舞い笑ってそう言った。するとのんちゃんは小さくはにかんで「うん。」と言って頷いた。

「用……っていうか、少し話したいことがあるんだ。」

「話したいこと？」

「うん。いいかな？ちょっと……」

健斗はチラリとヒロをまた見た。すると今度はヒロと目が合い、ヒロはさっきのおちゃらけた感じとは打って代わって真剣な目つきで小さく頷いた。

健斗はもう一度のんちゃんの方を見ると、自然な笑顔で頷いた。

「うん、いいよ。全然大丈夫。」

健斗がそう言うと、のんちゃんはほっと安心するようにため息をついた。そこまでして話したいことって……何なんだろう？

「私たち、席を外した方がいいよね。」

そう言ってきたのは麗奈だった。麗奈は健斗に微笑みかけて「ねっ？」と言ってくる。全てを理解している麗奈は気を遣おうとしているのだ。

健斗ははにかんで笑い「ワリィな。」と一言だけ言った。

「……結衣、林くん。……行こう。」

麗奈が他の二人にそう言った。寛太はいまいち状況が飲み込めず不思議そうな顔を浮かべていたが、いつもと違う雰囲気だということは分かっているようだった。

早川は頷きつつも健斗をチラチラ見て来る。その切なそうな視線を受けながら、健斗は安心させるように軽く微笑んだ。

「うん……じゃあ私たち帰るね。また明日ね。」

早川は健斗たちにそう言う。ヒロと健斗は互いに「おう。」「またね。」と早川に言った。そして麗奈や寛太とともに教室を後にした。

人が一気にいなくなると、残るのは静寂のみだった。時計の針が時間を刻む音が耳に入る。まるで試験中みたいな緊張した雰囲気だ。

話が出来る空間が出来たのはいいが……三人とも話すきっかけが見つけられなかった。

しばらく沈黙が流れる。

健斗は……じんっと胸が熱くなるのを感じた。それは神乃中サッカー部を辞めるとき、今目の前にいるのんちゃんに何度も叩かれた感触と似ている。

「それ、何？」

のんちゃんが健斗が手に持っていたカタログを指してそう訊いてきた。健斗は今までそれを手に持っていたことを忘れていたかのように思い出して、苦笑を浮かべた。

「あぁ。坊主専門の……カタログ？」

「えっ？何でそんなもの持ってるの？」

「いや……その……」

「罰ゲームだよ。」

ヒロが笑いながら健斗を指さしながらそう言った。

「こいつさぁ、俺と英語のテストで勝負してんだ。」

「勝負？」

「そっ。負けた方はバリカンで剃られるっていうルールで。」

「おまっ！！のんちゃんにまで言うなよっ！！」

「マジッ？」

のんちゃんが心底驚いた顔をしたので、ヒロはまた可笑しそうに笑って続けて言った。

「でさ、こいつ結局今日へましたらしくてさ。まっ、奇跡が起こらない限り俺に勝つのは不可能ってなって……」

「こいつにこんなカタログを渡されたんだよ……ちくしょう。」

健斗が愚痴を零すようにそう呟いた。本当に……どうしてこんな風になってしまったのだろう？

眠気に負けた自分が腹立たしい。しかも今はすっかり目が冷めているし……健斗はため息をつきながらカタログの表紙を飾っている坊主頭の青年を見た。どや顔が妙にむかつく。

するとしばらく呆然としていたのんちゃんがぷっと吹き出した。そ

れからまるで今まで我慢し続けたのが一気に爆発するかのように腹を抱えて大きく笑った。

「アッハッハッハッ！け、健斗が坊主になるなんて、想像できないよっ！」

「だろっ？もう俺も来週が楽しみで楽しみで仕方なくてさぁ。」

「ふざけんなよっ！こっちはお前のせいで高校生活がパーになりそうなんだぞ。それを……」

と、むきになっている自分に健斗ははっとなって気がついた。この感じ……何だか妙に懐かしく感じた。

こんな風にバカなことをして笑い合った。部室でも、学校でも、グラウンドでも……こんな風にみんなで笑い合ったっけ？

いつの間にか緊張していた空気なんて消えていた。そこには朗らかな笑い声が満ちている。穏やかな空気が流れていた。

「……っとに、ざけんなよなっ！」

健斗はそう言いつつも、二人につられるようにして声を立てて笑い始めた。

何がおかしいのか分かんないけど、でもすごく愉快だった。

第9話　新たなる決意　P．36

雰囲気が和やかになり、健斗とヒロとのんちゃんは向き合うような配置についた。

健斗とヒロは机に寄りかかるようにして座り、のんちゃんはきちんと椅子に座っている。

「……最近、サッカー部どうなの？」

ヒロがのんちゃんにそう尋ねた。健斗もそのことはすごく気になっていた。あの松本絢斗が率いる三年生が引退をしてから、人数が極端に減ってしまったという。

試合が出来ないほどではないが、結構ギリギリの人数だとヒロは言っていた。

そのことは聞いていたが、最近の調子や戦績などはまったく耳にしていない。聞きたかったが、聞けるやつが一人もいなかったのだ。

するとのんちゃんは「うん。」と言って小さく頷いた。

「そこそこ……かな。この間練習試合があって、負けちゃったんだけどね。」

「のんちゃんはもう試合出てるの？」

「一応ね。うちの学校って、あんまり経験者がいないんだ。三年生

は松本さんとかすごい人がいっぱいいたけど……夏の大会を最後に引退してから、一気に戦力が落ちちゃって。」

そうなんだ……と健斗は意外なことに驚いた。この学校に経験者があまりいないという事実は知らなかった。だが確かに、健斗が知る限りのメンバー――佐久や琢磨、そしてノブやリュウタは違う学校に通っている。

ノブやリュウタのようにサッカーが本気でやりたいのなら、こんな田舎高校よりも実績のある都市部の高校に行くのだろう。

松本だけは違った。あの人は健斗自身直接対決したことがあるから分かるが、ものすごいプレイヤーだった。簡単には抜かせてもらえない、プレッシャーのかかったディフェンス。

正直、健斗にとってはその他のやつは大したことないと思った。だが、松本だけは……隙のない手ごわい選手だった。

さすが、この県で五本指に入る屈指のディフェンスだと健斗は感じた。

もしかしたらあのとき勝てたのは相当運が良かったのかもしれない……いや、何よりも松本には迷いがあった。それが彼の敗因と言えるか……

雑念を抱いて健斗に勝つことなんて出来ない。健斗はそう自負していた。

ともかく、そんなすごい選手が他の人のように都市部の学校に行かなかったのは、サッカー自体にあまり興味がなかったからかもしれ

ない。健斗はそれを聞いてみた。

どうしてあんたみたいなすごい人が、真面目にやらないんだっ！サッカーが好きなんじゃないのか、と。

しかし彼は冷めた目で……そうではないと答えた。好きでも何でもない。ただ自分に向いていて、なおかつ女にもてるからやっているだけだと。

別にその考えを否定する気はなかった。昔の健斗なら真っ向から否定してたかもしれないが、今は違う。

ただ……あの人とやる勝負は楽しくなかった。楽しいと感じるようになったのは後半部分からだ。松本が痛めている健斗の腹を狙わず、正々堂々と勝負に持ち込んでから。

「二年生は二、三人が経験者だったんだけど……一年生は僕以外はみんな初心者なんだ。だからなかなか勝てなくってさ。」

「そうなんだ……」

「……」

「負けるだけならいいよ。僕は元々、二人とは違ってサッカーをやること自体が楽しいんだ。だから……負けても、試合が出来るならそれでいいんだ。僕は……」

「そっか……」

のんちゃんの考えは健斗もよく分かる。健斗だって元は同じだ。サ

ッカーが本当に好きだから、勝ちたいって思った。上手くなりたいって思った。だからがむしゃらになったし、負けたときは悔しくってその苛々をチームメイトにぶつけてしまったこともある。

のんちゃんはただサッカーがやりたい。サッカーが好きだから……どんなに弱いチームでも、そこで試合が出来るならそれでいいと考えている。だからのんちゃんは神乃高に進学することを決めたのだ。

「……負けるだけならってどういうことだ？」

ヒロがのんちゃんにそう尋ねた。突然ヒロが真剣な目つきでのんちゃんにそう言ったので健斗は驚いてヒロを見た。

するとその言葉を聞いたのんちゃんは明らかにさっきの穏やかな表情とは違い、苦悶の表情を浮かべた。そこに、何か隠れた真実があるということに健斗は一瞬で気がついた。

「……のんちゃん？」

「……うっ……」

すると苦悶の表情を浮かべていたのんちゃんの目から溢れるように涙が零れ落ちた。必死で流れ落ちる涙を止めようとするが、感情がそれを抑えることが出来ないでいるようだった。

健斗とヒロは敢えて何も言わなかった。何故のんちゃんが突然泣き始めたのか、そこには何か深い理由がある。それを話すのを健斗たちは待っていた。

「……負けるだけならまだいいのに……うっ……ダメなんだ。もう

……どうしようもなくて……」

「……どういうこと？」

健斗が静かにのんちゃんの肩に手を乗せる。そのがっしりとした肩は昔よりも洗練されていた。きっとたくさん筋力トレーニングをしていたのだろう。努力の色が伺われた。

「……神乃高サッカー部は……ヒック……次の試合に勝たなきゃ、廃部だって……」

「――っ！」

あまりの驚きの事実に、健斗は言葉が出なかった。まさか……サッカー部が廃部なんて聞いたことがない。

「そんな……廃部だなんて……」

一体何故？どうして？

健斗は驚きと混乱で目の前でただ泣いているのんちゃんに何も言えなかった。

すると後ろで大きなため息が聞こえた。後ろ振り返ると、ヒロが苦悶の表情を浮かべて後ろ頭を掻いていた。本当に困ったと思うときヒロのやる癖だった。

「……やっぱりか……」

「やっぱり？やっぱりってどういうことだよ。お前知ってたの？」

ヒロのその言い草に健斗はつい強い口調になってしまいヒロに詰め寄った。ヒロは苦悶の表情を浮かべたまま、小さく首を横に振った。

「いや……でももしかしたらって思ってた。」

「何でっ？サッカー部が何をしたって言うんだよっ！」

「経費の問題だよ。」

ヒロは冷静にそう言った。健斗はそれがよく分からなかった。経費って……何の経費？

「部活っていうのは学校の下で成り立ってるだろ？つまり、部活を経営してるのは学校なんだ。」

「どういうこと？」

「部活があるって言ってもただじゃない。設備や用具や品物、部費や生徒の保険。色々なものにお金をかけている。大会があればそれの運営費だって出してるんだ。」

「……だから……どういうことなんだよっ？」

ヒロの説明はよく分からない。確かにお金が色々とかかるのは分かるけど、それがどう廃部と繋がるのかが分からなかった。

ヒロは面倒くさそうな顔をして小さくため息をついた。

「学校にも金が無限にあるわけじゃない。うちは公立だから県から

資金は給付されてるけど、それは予算の元に成り立っている。だからコストをどんどん削減していかないと、学校自体の経営に関わってくるんだ。」

「……つまり、今サッカー部は学校自体の負担になってるってことか？」

健斗がそう尋ねると、ヒロは小さく頷いた。

「要は部活のリストラみたいなもんだよ。実績のないもんに掛けられるほど金には余裕なんてないし、そういう学校全体の荷物になるものは切り捨てる。学校自体を存続させていくためにな。珍しい話じゃない。だから、毎年それぞれの部活は予算案を生徒会に提出しないといけないんだ。」

「そんな……」

健斗は言葉が出なかった。学校側にそんな裏事情があるなんてこれっぽっちも考えたことがなかったからだ。ただ……ヒロの言うことは合理的だった。

負担になる会社員をリストラするように、部活を廃部にしてコストを軽減しなければならない。

サッカー部がそこまで追い込まれてるなんて知らなかった。健斗はチラッとのんちゃんを見た。

未だに涙は止まらず嗚咽を漏らしていた。それを見ていると胸が痛んだ。ここでも壁が立ちはだかるのだろうか。のんちゃんのサッカーがやりたいという純粋な気持ちを、現実が邪魔するのだろうか。

そんなことがあって……いいのだろうか？

「……みんなは何て言ってるんだ？」

ヒロが静かにのんちゃんにそう尋ねた。するとのんちゃんは泣きながら必死でヒロの問いに答える。

「みんなは……もう……諦めてる。先輩は……どうせすぐ引退するからって……それが早まっただけだって。一年生も……それなら仕方ないって……」

信じられなかった。

廃部にならないよう頑張ろうとするやつが一人もいないのか？本当にそれでいいのか？

だが、それが現状なのかもしれない。所詮田舎の弱小校だ。無くなったところで誰も気づかないし、誰も困らない。ただ、透明になって消えて行くだけだ。

歯がゆい気持ちが……とてつもない悔しさが健斗を取り巻いた。

「……何とか……ならないのかな。」

「……無理だろうな。勝ちでもしない限り……条件にそぐわないなら……」

「何でそんな簡単に言えるんだよ。お前は悔しくねぇの？」

健斗はずっと冷静なヒロに腹が立った。こういうときこそ冷静な分析がいるのかもしれないが、それでもあまりに飄々としている態度がむかついた。昔のチームメイトがこんなにも苦しんでいるって言うのに……

しかしヒロは今までと違った威圧のある目で健斗を睨み返してきた。

「……はっきり言うけど……原因はお前にもあるんだぞ。」

「え……？」

突然のことに健斗は言葉が出なかった。しかしヒロは健斗の反応なんか構わず続けて言った。

「松本事件のことだよ。お前……まさかあれが何の問題にもならなかったなんて思ってないよな？」

健斗はそれを聞いて背筋が凍るような思いになった。松本事件……あれが今回のことに大きく関わっている。

「昼休みが終わっても、生徒のほとんど教室に戻らないでお前らの勝負に没頭した。そのせいで本来予定していた授業が進まず学校側はその後の対処で必死。クレームの電話とかも来たらしいぜ？多分、どっかのくそまじめなやつが親に報告したんだろうな。」

聞きたくない話が残酷にもどんどんと健斗を覆っていく。健斗は深い闇に沈みそうになっていた。

「その結果、学校はその事件の責任はどこにかけると思う？もちろん……サッカー部だよな？」

ヒロの言葉に健斗は何も言い返せなかった。そのとおりだった。形式上、あれはサッカー部が起こした事件だ。当然責任はサッカー部にかかる。

「実績もない。面倒事は起こす。そんな部活、あるだけ迷惑なだけだろ？だから……」

「もういいっ！」

健斗はヒロにそう叫ぶようにしてそう言った。ヒロはその言葉を受けて今まで開いていた言葉を閉ざした。

胸が嫌になるほど高鳴った。のんちゃんが今どんな風なのか見ることが出来ない。

自分は今……同じ過ちを犯してしまっている。

同じ過ちを、同じ失敗を犯してしまった。またのんちゃんの邪魔をしてしまった。

何てことをしてしまったのだろう。何て愚かなことをしてしまったのだろう……

自分が原因でまた、一つの部活を崩壊させてしまおうとしている……自分のせいで……自分のせいで……

目の前が真っ暗になりかけた。何も見えない……自分は何をしているのだろう。

するとだった。健斗の肩に何かが触れた。ヒロの手だった。ヒロの

大きな手が健斗の肩に触れている。ヒロはさっきまでと違い慈愛に満ちた目で健斗を見ていた。

健斗がまた後悔の波に呑まれようとしているのを察知したらしかった。だが健斗はヒロの顔をまともに見ることが出来ないでいた。

「……のんちゃんが話したいことって、それが全部？」

ヒロがそうのんちゃんに尋ねた。のんちゃんはようやく止まらなかった涙を止めて、強い目で健斗たちを見た。健斗は今、その強い目を真っ直ぐ受け入れることが出来ないでいた。

「僕は……僕はサッカー部を廃部にしたくない。みんながどう思おうと、僕は諦めたくないんだ。だから……」

のんちゃんはそう言いかけてから、しばらく躊躇ったが、すぐに強い決意を目に秘めて健斗たちに言った。

「だから……健斗とヒロに、力を貸して欲しいんだ。」

その言葉が脳内に響いた。力を貸して欲しい……すなわちそれは……

「試合に、出て欲しいんだ。」

ビュウッと強い風が窓越しに吹き抜けた。健斗はその言葉を聞いて、激しくうねる感情を抑えきれないでいた。

第9話　新たなる決意　P．37

時計の針の時間を刻む音が響いていた。麗奈は居間の茶ぶ台の前に座って、暖かいお茶を飲みながら小さくため息を吐いた。

もう待ち続けて何時間が経過したのか分からない。まだ夕方付近だが、ものすごく長い時間のように感じた。

今日一日少し肌寒かった。健斗の言う通り、これからどんどん寒くなるのだろう。あそこの縁側を使えるのも昨日が最後だったのかもしれない。

――早く帰って来ないかなぁ……

麗奈は健斗が帰ってくるのをただ待っていた。一体どんな話をしているのだろう。のんちゃんが健斗たちをわざわざ訪ねるということはそれなりの理由があるはずだった。

三人の間に走った亀裂。それは未だに修繕されてはいない。

少し不安だった。何かとんでもないことが起きそう……そんな予感をさせていた。健斗とヒロは薄々そのことに気づいたのかもしれない。

麗奈はもう一度チラッと時計を見た。時刻は四時を過ぎていた。健斗は依然として帰ってくる気配がない。ここにいれば、扉が開く音ですぐに気づくからだ。

「……早く帰ってこい……バカ……」

そう呟いて、麗奈は体中の力を抜くようにして茶ぶ台の上に伏せた。
何だか少し眠い。意識が徐々に薄れていくのを感じた……

「――な……」

頭がぼ～っとしている。重たい瞼をゆっくりと開き、それと同時に襲ってくる眠気に対抗しようとする。

――あれ……いつの間に寝てたのかな……

自分が眠っていたことを自覚し、麗奈は少し顔を上げた。

「麗奈。」

はっきりと声が聞こえた。そばで自分を揺すっている。麗奈はゆっくりと顔を上げると、すぐ傍に制服姿のままの健斗がいた。呆れたような顔を浮かべて、麗奈を見つめていた。

「こんなとこで寝てると風邪引くぞ。」

「え……あっ！」

麗奈に今までの記憶がフィードバックした。そうだ。自分は健斗が帰ってくるのを待ってて、いつの間にか寝てしまったのだ。

麗奈ははっきりとした意識で時計を見た。驚いたことに、ついさっきまで四の数字を指していたはずなのに、今は六時を指していた。

二時間近くも寝ていたなんて……自覚がなかった。だが、無理な体勢で長時間眠っていた事実は、体中の痛みが示していた。

健斗は麗奈が起きるのを確認するとため息を吐いて、キッチンの方に向かった。そこで何やらガサゴソしている。と、思っているとまた居間の方に帰ってきて手には麦茶が入ったコップを持っていた。

「いつ帰ってきたの？」

何気なく聞くと、健斗は片手に持った麦茶を飲みながら言った。

「たった今。」

「……長かったね。」

「まぁな。」

思ったよりも飄々とした態度だった。何ていうか……麗奈が予想していたのはもっと思い詰めているような健斗の姿だった。もしかすると、麗奈が勝手に想像してただけでそんな大した話じゃなかったのかもしれない。

「……あ、今日母さん帰ってくるの遅いんだって。夕飯どうする？」

「え……何それ。作れってこと？」

「インスタントでもいいなら何も言わないけど？」

健斗はやれやれと言った感じで腰を落ち着かせた。本当にいつも通りだ。何だか心配していたのが馬鹿らしくなる。

「話……どうだったの？」

「話？」

「惚けないでよ。のんちゃんとの話のこと。」

別に内容まで深く聞こうとはしなかった。麗奈が聞いたところで何も出来ない。何も出来ないくせにでしゃばって、健斗を困らせるようなことはしたくない。

だが本当は全て知りたいという気持ちが一番だった。それを口にはしないけど、一体どんな話をしたのか……何か進展があったのか、そういう類の話を聞きたい。

健斗は黙って麦茶を啜っている。麗奈はただそれを見ているだけだった。

「……サッカー部がさ……廃部になるんだって。」

「えっ？」

突然の言い草に麗奈は唖然としてしまった。サッカー部が……廃部？

そんな話聞いたことがなかった。

「正確には、廃部になるかもしれないっていう話。」

「……ど、どうして？」

「……それを話すと長くなるからあれだけど……きっかけは松本事件だって。」

「えっ？」

麗奈はまた驚きの声を上げてしまった。健斗の口から再びその単語が出てくるとは思わなかったのである。

今でも鮮明に思い出すことが出来る。というより、ほんのついこの前の話でもある。

松本絢斗……彼が麗奈に近づいてきたことがきっかけでそれは起こった。

俺と付き合えよ。

自信満々の彼は下品な笑みで麗奈にそう言ってきた。麗奈はそれを言われたとき、吐き気と共に何かぐるぐるした思いが麗奈の胸の中で巻き起こった。

そんな麗奈を守るために健斗は松本と勝負をすることになった。健斗は麗奈のためというよりも、結衣や……何より自分のために戦うことを決心した。

そして……あの事件を経て、麗奈は健斗のことが好きだと自覚した。

「あれさ、やっぱり思ったよりも結構大事になってたみたい。まぁ……それが全部じゃないんだけどさ。きっかけはそうだって言える。」

「そんな……」

「実績もない。面倒事は起こす。そんな部活にお金を掛けられるほど余裕はないって……だから……」

麗奈は言葉が出なかった。それはあののんちゃんのことを思うとだった。

大好きなサッカーを高校でなら思う存分やれるはずだったのに。また現実という厳しい壁が彼の思いを邪魔する。そんな彼の今の状況を見ると……悲しかった。

「……また……俺のせいなんだよな。」

健斗が呟くようにそう言った。その言葉に麗奈はすぐに顔を上げた。健斗は苦笑いを浮かべて、下を俯いていた。

「俺のせいで……またのんちゃんの邪魔をしたんだ。俺は……」

「そんなことないよ。だって……そしたら私にも責任がある。」

健斗は麗奈の言葉に驚いたのかゆっくりと顔を上げた。

健斗のせいじゃない。あの松本事件は自分が起こしてしまったこと

なのだ。

「私が松本さんに……はっきりと断ってれば、あんな風にはならなかったもん。私が松本さんと会ったりしなきゃ……あんなことには……」

迫り来る後悔の波が麗奈を襲った。そうだ……どうしてあのときはっきり言えなかったのだろう。

あなたとは付き合えない。

麗奈がそう言えば良かったのじゃないだろうか？

中庭で松本と話をしていたとき、彼から受けた告白を麗奈がはっきりとそう言っていれば、松本もそう大胆な行動を取っていなかったかもしれない。

どうしてあのとき返事を躊躇ってしまったのだろう……麗奈はそう思うと胸が苦しくなった。

するとだった。暖かい手のひらが麗奈の頭を撫でた。顔を上げると健斗が優しい表情で麗奈に微笑んでいる。

「……ありがとう、麗奈。」

「え……」

「そうだよな。自分のせいだって後悔したって……結局埒があかない。今のお前を見てそう思った。」

「……健斗くん。」

健斗はさっきまでの苦悶の表情とは打って変わって穏やかな表情をしていた。

「お前が気に病むことじゃないよ。お前は何も悪くない。だから……そんな顔しないで。」

そう言ってくしゃっと頭を撫でてくる。最近、健斗はよく麗奈の頭を撫でてくれる。それは何よりも麗奈に対する優しさを示してくれていた。健斗の優しさが暖かい手のひらを通して伝わり、次第に麗奈に安堵感が宿り始めていた。

健斗はそっと手のひらを離して「なっ？」と言って笑った。麗奈はその表情を見て、少し頬を赤らめて「うん。」と言って小さく頷いた。

しばらく沈黙が続いた。時計の針が時間を刻む音がしばらくの間麗奈の耳に聞こえていた。

「……廃部はもう、決定なの？」

麗奈が恐る恐るそう聞いてみた。すると健斗はゆっくりと首を横に振った。

「いや、学校側の条件ではとりあえず次の練習試合に勝つこと。そうすれば廃部は考え直すらしい。」

「そう……なんだ。」

麗奈は微かに希望が見えたような気がした。まだどうしようもないわけではない。チャンスがゼロでない限り、諦めるのはまだ早い。

「……それで、健斗くんはどうするつもりなの？」

麗奈はまた恐る恐るそう尋ねてみた。健斗がそれを黙ってほっておくわけがないように感じたからだ。健斗はしばらく何も言わず、黙っていた。麗奈は健斗が次に言うことをしばらく待っていた。

「……のんちゃんが、俺とヒロに……力を貸して欲しいって。」

「えっ？」

「試合に出てくれって。今日、そう頼まれた。」

健斗とヒロが……

確かに二人が試合に出れば、次の試合に勝つ可能性は大きく上がるだろう。健斗とヒロが試合に出れば流れは大きく変わり、サッカー部の廃部を免れる。麗奈はそう確信した。

そう思うと自分も何だか救われるような気がした。

「じゃあ――」

「今は断ったけどな。」

健斗は麗奈に言葉を続けさせず端的にそう言った。しばらくしてからでないと健斗が何を言ったのか意味を理解出来ず、思わず息が止まってしまった。

「……断ったの？」

「うん。」

「どうして？どうして断ったのっ？」

つい口調が荒くなってしまうほど、健斗が出した答えは意外だった。昔のチームメイトが助けを欲しがっているのに、健斗はそれを見捨てるつもりなのだろうか。

健斗はチラッと麗奈を見て決まり悪そうに小さくため息をついた。

「……まだ迷ってんだ……」

健斗は呟くようにそう言った。

「実のところ、のんちゃん以外の人はもうほとんど諦めてるって。」

「そんな……」

「俺も驚いた。でも仕方ないのかもしれないなって思う。そんな中に、こっちの勝手の都合で罪滅ぼしみたいに試合に出て、でしゃばって、サッカー部を存続させる。それに何か意味があるのかなって思った。ただの……責任逃れなんじゃないかって。」

健斗の言いたいことは麗奈にもなんとなくだが分かる。確かにその通りだ。

健斗が今衝動的に試合に出ると決心するとする。しかし、その決心の源はどこにあるのだろう。それはやはり、どんなに否定をしても……根底には過去を清算したい。友達に対して罪滅ぼしをしたい。

その気持ちが必然的に強くなる。

だが……今の人はどうなのだろう。別に廃部になってもいいと思っている人たちにとっては良い迷惑になるのではないだろうか。

そんな疑心が生まれるのも当然だった。周りから見れば正しいことのように思えるかもしれないが、そう思わず余計なことをしてくれたと思う人も中にはいるかもしれない。

だから分からなくなる。

「それにさ……」

「ん？」

健斗は言葉を詰まらせて戸惑っていた。何か言いにくそうなことを口にしようとしている。

「それに……俺がその場しのぎみたいなことをしても、その後に同じなことが起こる。逆にそれも責任を逃れてるだけだ。もし俺たちが力を貸すなら、俺たちは必然的にサッカー部に入らなきゃいけないことになる。」

「……」

「だけど俺には……まだその決心が……ないんだ。」

健斗は悔しそうに呟いた。そうか……それもあった。

健斗にはまだ、過去のこともやり残していることがたくさんある。

やり残してることがたくさんあるのに、ここで了承なんかしたら、結局一番無責任な形で終わってしまう。

だから健斗は……断らなければならなかったのだ。

麗奈は何も言えなかった。やっぱり聞くんじゃなかったと後悔した。

結局聞いても自分にはどうすることも出来ない。こんな風に健斗を悩ませるだけだった。

こんなんなら……いつもみたいに「お帰り。遅かったね。ご飯作っておくから、先お風呂に入ってきなよ。」と、笑ってそう言えばよかった。

後先を何も考えないのが自分の悪い癖だ……本当に嫌になる。

またしばらく沈黙が続いた。お互い口を開くことがなかった。

が、その沈黙を破ったのは健斗の方だった。

「……お前は、どうすればいいと思う?」

麗奈はその言葉に耳を疑った。そしてすぐに顔を上げると健斗は小さく笑って麗奈にそう言った。

「俺は……どうすればいいと思う?」

「……どうすればって?」

「何でもいいよ。お前が思った通りに話してくれれば。お前の考えが……聞きたい。」

健斗がこんな風に意見を聞いてくるなんて初めてのことだった。いつも健斗は他人に意見なんか聞かず、自分で決断を下す。

自分で判断し自分の決断に揺るぎない自信を抱く。

それなのに今回は麗奈に意見を求めてきた。それくらい思い悩んでいるのだろうか？

それとも……

麗奈は健斗の目を見つめた。何だか違和感があった。そこには何か、何か違った思いが秘めている。

麗奈は少しの間が考えた。私が思うこと……それは……

「……前も話したじゃん。健斗くんと縁側で。」

「うん？」

「健斗くんがサッカーをやりたいって話してくれた日……そこで私、後悔しない選択をして欲しいって言ったの覚えてる？」

健斗は頷かなかったが、真っ直ぐと自分を見つめてくる。ちゃんと覚えてる。健斗は目でそう言っていた。麗奈は大きく息を吸って、ゆっくりと吐いた。

「今回も……やっぱり同じかな。のんちゃんの頼みを受け入れるか受け入れないかは、健斗くんが決めることだもん。どっちも正しいし、どっちも悪くない。ただ……そのあと、やっぱりこうしておけば良かったって後悔しないで欲しい。」

麗奈は一呼吸おいて、また顔を上げた。健斗は真っ直ぐ麗奈を見つめている。

「だって、もし後悔するような選択をしちゃったら……それこそ、同じことを繰り返すことになる。今の健斗くんがノブくんやリュウタくんたちに対して思っているように……だから……」

気がつくと、麗奈は頬に伝う何かを感じた。そっと触れてみると、自分はいつの間にか涙を流していた。

それに気がつくと余計に溢れ出てきて、止まらなかった。

「だから……ごめん……上手く言えない……けど……私……私……もう健斗くんが……後悔するとこを見たくない……思い悩んで欲しくない……悲しそうな健斗くんの……顔を……見たくないの……だから……」

結局それが一番強い思いだった。健斗にもうこれ以上苦しんで欲しくなかった。

もうこれ以上思い悩んで欲しくない。健斗はもう、もう充分過ぎるほど苦しんできた。色々な思いに振り回され、それを一人で戦ってきた。

翔のこと、神乃中サッカー部のこと、松本事件のこと、ノブやリュ

ウタや他の人たちのこと……

その度に苦しくって辛くって、でも何も言わず健斗は頑張ってきた。

もういい……

頑張らないで欲しい。そのうねり狂う思いから解放してやりたい。

ずっと笑って、笑って過ごして欲しい。

なのに健斗は戦うことを止めない。そして時折悲しそうな表情を浮かべる。それを誰よりも一番近くで見てきた。

それが麗奈には自分のことのように辛かった。

「……もう……もう……頑張らないでよ……もういいから……だから……」

涙が止まらない。言葉が途切れ途切れで上手く伝わってるか分からない。必死に涙を止めてちゃんと伝えようとした。

するとだった……暖かな温もりが今度は麗奈の体全体を包んだ。健斗の匂いがした。

顔を上げると、健斗の胸がすぐ目の前にあった。そこで初めて自分の体は今、健斗に委ねられていることが分かった。

健斗は麗奈の背中に腕を回して、ギュッと優しく抱きしめてくれた。

微かに震えている。

「……健斗くん？」

「……少しだけ……」

「え？」

「少しだけ……このままでいさせて……」

健斗の顔は見えなかったが、弱々しい声で麗奈にそう言った。健斗はさらに力を込めて麗奈を抱きしめる。胸がドキドキした。今まで健斗に抱きついたことはあったけど、健斗から抱きしめてもらったことは一度もなかった。

麗奈はゆっくりと健斗の胸に顔をうずめてそっと瞼を閉じた。心臓の音が聞こえる。トクン、トクンと一定のリズムを刻んでいる。

生きているんだなぁっとそう思った。

「……お前、反則……」

「え？」

健斗は抱きしめたまま麗奈にそう言った。

「そんなこと言われたの初めてだ。俺……どうすればいいか分かんねーよ。」

顔が見えないからよく分からないが……

もしかして、照れてる？

麗奈はそう思うと、何だか健斗が可愛いく思えてクスッと笑った。

「……ありがとう……」

健斗は呟くようにそう言った。その言葉が麗奈の心に深く染み渡っていく。とてつもない快さと安堵感と嬉しさが麗奈を包んでいく。

「……うん。」

麗奈はクスッと笑ってそう言うと、また健斗の胸に顔を埋めた。

健斗が傍にいる。何だかいつも近くにいたはずなのに、このとき初めて心の底からそう思った。

いつまでもこうしてたいと、そう思った。

それから、健斗はゆっくりと立ち上がって麗奈を見下ろした。麗奈はその表情に少しドキッとした。

微かに健斗の目下が濡れているの見逃さなかった。

「俺……やっと決められた。」

「……」

「ようやく……ようやく前に進めそうな気がする。」

「……うん。」

健斗のその表情は今までで一番穏やかな表情だった。さっきまで抱いていた迷いがなくなっていた。健斗の中で一つの決意が固まったようだった。

健斗はゆっくりと背伸びをすると、ふぅっと息を吐いた。

「うしっ！俺着替えてくるわ。あ、で、どうする？夕飯。」

話が突然代わり、健斗はそう麗奈に聞いてきた。麗奈はチラッと時計を見るとすでに7時過ぎだった。

確かにそろそろお腹が空いてきた。

「だからぁっ。ようは作れってことなんでしょ？」

「ん～……まぁ、そうなるかな？何なら俺が作ろっか？この前店長に新しいレシピ教えてもらったんだ。」

それを聞いて麗奈は背筋が凍るような気がした。

「……いい。もう健斗くんが作った炭なんて食べたくないもん。」

「炭じゃねぇよっ！ナポリタンだっつーの。」

「ハイハイ。とにかく私が作るから。早く着替えてきなよ。」

「ハイハイ。」

「ハイは一回！」

「ハァイ……ってお前もだろっ！」

麗奈はクスッと笑うと、健斗も可笑しそうに笑いながら「ったく。」と呟いて居間を後にした。

居間で一人になった麗奈は疲れを吹き飛ばすように深くため息をついた。

健斗はどんな決心をしたのだろう。

気になるけど……今は聞かないでおこう。

それよりも麗奈の胸の高鳴りはまだ納まらなかった。

健斗が自分から抱きしめてくるなんて……

麗奈はギュッと手を握りしめて、恥ずかしそうにはにかんで笑った。

そして夕飯を作るために、立ち上がってキッチンの方へ歩き出した。

第9話　新たなる決意　P．38

「よ〜し！終わった終わった。」

今日の分のテストを終えて、クラスの皆はそれぞれ帰路についていく。健斗もその一人で筆箱や何やらを鞄の中に詰めていた。

今日は教科が二個あったため、すでに時間は昼前になっていた。

「終わった。終わった。もうばっちしだなぁっ！明日でこの地獄の期間から抜けるわけですよ。」

「寛太うるせー。独り言なら心の中で言え。」

「そんな冷たいこと言うなよぉ？あ、もしかしてまた出来なかったとか？」

「お前といっしょにすんなっつーの。」

「あっそ。で、今日何でヒロ休んでるわけ？」

寛太は空席であるヒロの席を指差してそう言ってきた。それを聞いて健斗は一瞬手を止めてチラッとヒロの席を見た。

ヒロは今日一日学校に来ていない。健斗自身、その理由ははっきり知らないが、何となく想像はついた。まさか風邪やそう言った類の理由ではないことは明らかだった。

健斗はわざと肩をすくめるようにして言った。

「さぁね。あいつ成績余裕だから受けるのが面倒だったんじゃない？」

「そんなことってある？急に？」

「俺が知るわけねーだろ。」

「でも昨日一番最後までヒロといたのはお前じゃん。」

「寛太。何が言いたいわけ？」

健斗はじれったくなって寛太を睨みを効かした目つきで見てそう尋ねた。寛太はその目つきを全く気にしないように、飄々とした態度でさらに健斗に言ってきた。

「いやさ。昨日あの後何があったのかなぁーって……」

「……お前には関係ない。」

健斗はぷいっと顔を逸らしてそう言った。しかしその態度は寛太の予想をさらに確信へと強める結果になった。

「俺、初耳だったよ。健斗とヒロがまたサッカーをやるつもりだなんて。てっきり二度とやることはないんだろうなぁって思ってた。」

「……俺もつい最近までそう思ってた。」

「ノブやリュウタたちとすげーもめたんでしょ？辞めるときも。」

「……まぁな。」

「そんなことあったのに、のんちゃんがお前たちをわざわざ訪ねてきた。まさかお話をしに来ただけじゃないっしょ？」

「……」

「……サッカー部が廃部になる話と何か関係してたりして……」

寛太がぼそっと呟くのを健斗は聞き逃さなかった。すぐに寛太の方を見て驚いた顔をつくる。寛太はそんな健斗の反応が思い描いてたのと同じだったようで面白そうに二ヤッと笑った。

「お前……知ってたの？」

「俺、一応野球部ですから？そういう話、流れてくるんだ。」

なるほど……運動部ならではの情報の入手方法だ。それにサッカー部と野球部と言えば、その間にあるつながりも深いものなのだろう。

健斗は舌打ちするように寛太から顔を背けた。

「……それを知ってんなら。もうわかんだろ？」

「うんっ？のんちゃんに、助っ人を頼まれたとか？」

分かってんじゃねぇか。健斗は心の中でそう呟いてまた舌打ちをした。寛太に隠す必要はなくなったに等しかった。

「……そうだよ。」

「でも断ったんでしょ？」

「何で分かんのっ？」

「あんだけのことしといて簡単に受け入れる方が変だと思うけど……」

知らなかった。寛太がこんなに推理力があるなんて……その分の頭を勉強の方に使えばいいのに。と健斗は悔しさを感じながらそう心の中で呟いた。

「……正直迷ったんだよ。どうすればいいのか……そのまま受け入れるのも……何か違うって思ってさ。」

「ふ～ん。まっ、確かに俺だったらふざけんなって思うけどね。散々こっちに迷惑かけといて、高校に入ってから結局それかよっ！みたいな？」

「……」

「でもまぁ、俺がお前の立場だったらそんなこと関係ねぇっとも思うけど。でも、お前無責任なこと嫌いだもんね。健斗らしいっちゃ、健斗らしいけどさ。」

「……うん。」

「で、結局どうするわけ？サッカー部の助っ人するの、しないの？」

寛太の直接的な質問に健斗はしばらく黙り込んだ。今はそれを口にしたくなかった。

だから代わりに顔を上げて真っ直ぐ寛太の目を見た。健斗の決意を、寛太に伝えようとした。すると寛太は小さく笑った。

「あっそ。」

「……昨日早川何か言ってた?」

健斗が恐る恐る訊きながら、早川の方をチラッと見る。早川も健斗と同じように筆箱や何やらを鞄にしまい帰る準備をしていた。健斗の方を全く見ようとしない。何となくだが、あえて見ないようにしている色が見える。

「何で早川が関係するわけ?」

逆に寛太が健斗にそう問いかけてきた。寛太は健斗の事情はよく知っているが、早川のことは知らない。知るよしがなかった。

だって早川は翔のこと……

「いや……別に。ただ……」

「……別に何も言ってなかったぜ?俺昨日帰りにさ、健斗がまさかサッカーをまたやるなんてなっ!って言ったら、“本当だよね。ちょっと驚き。”ってそんくらい。」

「……本当に?」

「嘘ついてどうすんのよ。」

まぁ……それもそうか。と思いながらもう一度早川を見た。早川は帰る支度が済んだようでゆっくりと立ち上がった。すると友達が早川に声をかけてきた。何やら話をして、早川は笑いながらそのまま友達と教室を後にした。

何てことなさそうだ。早川にとっては……もうすっかり過去のことになってるのかもしれない。そういえば松本事件の日以来、お互い過去のことを言うことなんてなかった。

ただ、早川はその日確かに言った。まだ翔のことが忘れられないって……

「……とにかく忙がなきゃ。時間がねぇんだ。」

健斗も立ち上がって鞄を背負う。すると寛太がさらに健斗に問いつめてきた。

「どうするつもりなの？」

「……ノブとリュウタに会いに行く。」

健斗がそう言うと、寛太が驚いたような声を上げた。

「これからっ？」

「まさか。まだ会えねーよ。あいつらだって忙しいんだし……ただ、近い内に会いに行く。そんで……今の気持ちを伝える。」

「……本気？」

「本気の本気。」

「あいつら怒るぜ？」

「かもな。でも……黙ってる方がもっと悪い。」

健斗の決心は変わらなかった。寛太は疲れるようにため息を深く吐いた。

「何て言うか……お前って本当にバカなのね。」

「お前ほどじゃねぇよ。」

そう言って健斗は軽く笑った。寛太もつられるようにして小さく笑う。

「そりゃそっか。でもテストとかどうすんの？試合は今週の日曜なんだよな？」

健斗は小さく頷いてから決まり悪そうに顔をしかめた。

「後の教科は今回諦めるよ。ヒロと昨日決めたんだ。やるべきことを全部やる。あと五日以内にどこまで出来るか分からないけど、今までのことを清算するっ！」

寛太はふぅーんっと言ってまた小さく笑った。

「そうっすか。まっ、俺も何か協力出来ることがあったら何でもす

るよ。」

「……サンキュ。」

「気にすんなよ。小学生の頃からの付き合いじゃん？俺は……そうですねぇ……サッカー部の一年全員に俺の方から概ねのことを話すわ。俺、全員友達なんだ。」

寛太はそう言ってニカッと笑った。その笑顔を見て、健斗はふっと表情を緩める。

「マジでサンキュー。恩に着る。」

「あれな？勉強教えてもらった恩返しってやつ。俺って誠実でしょ？」

「調子乗んな。じゃあ、俺も行くわ。」

「うん。じゃあまたな。」

「おう。」

健斗はそう言うと、急ぎ足で教室を後にした。寛太に背を向けて歩きだすとき、「頑張れよ。」っと声がした。

教室を出ると健斗は胸を張って、廊下を走っていった。

第9話　新たなる決意　P．39

階段を降りて、革靴に履き替えると健斗は小さく息を吐いて昇降口を出た。これから行くところはすでに決まっていた。

それはまず誰よりも先に、そして一番話したい人のところだった。ゆっくりとした足取りを次第に止めて、健斗は空を見上げた。

最近天気が良い日が続いている。太陽が上から健斗を見下ろしていた。健斗は眩しそうに手を翳した。

――何て言うんだろう。

健斗はそれを話したときの反応が気になっていた。失意に落ちていた自分に居場所を与えてくれた人。心から尊敬する人で、健斗にとって第二の父親のような存在。

いつも健斗の力になってくれて、自分の苦労を顧みず、健斗を励ましてくれる人だった。最近テストが続いていたため、全然行ってなかったが……

あの人――竜平さんには何よりもまず伝えたい。健斗の今の気持ちを……

健斗は踵を返して自転車置き場へと足を運んだ。そして自分の自転車を見つけると、それに跨りゆっくりとＲｙｕへと向かった。

商店街を通り、あっという間に目的地に到達した。健斗は自転車から降りて、その誇らしい看板を見上げた。

約二年半……健斗はここで働くようになった。中学のときは感覚的にはお手伝いだった。竜平から指示されたコーヒーとかを運ぶだけ……あとは適当に店の掃除か何か。

最初は戸惑ったのを覚えている。今までサッカーしかやってこなかった自分が、何でこんなことをしてるんだろうと思った。ただこき使われているようにしか思えなくて、ある日馬鹿馬鹿しくなり辞めようと考えたときもあった。

けどいつからだろう……健斗はいつの間にか、本当に気がつかないうちにここでの仕事にやりがいを感じるようになっていた。

この店には色々な人が来た。この町の人、そうではない遠くから来た人……色々な人と出会い、触れ合い、そして自分の世界を広げることが出来る。そんな不思議な場所のように感じた。

この店に色々な悩みを抱えてくる人が来る。

家族のこと、友人のこと、恋人のこと、自分のこと、将来のこと。本当に色々な悩みを抱えた人がこの店にやってきて、健斗はそこで話を聞いたりした。

健斗がその中でも特に鮮烈に覚えているのは、まだ中三でようやく仕事に慣れ始めたころだった。

その日は例年通りに寒く、そろそろ店が閉まる時間帯で健斗は店の窓から外を眺めていた。

「外……寒そうだな。」

「もうすっかり冬だからな。」

カウンターで食器を片付けている竜平が健斗の言葉に便乗してそう言った。健斗は両手で箒を持って小さくため息をついた。

「世間はもうすぐクリスマス……かぁ。」

「何親父臭いことを言ってるんだ。」

竜平が肩で笑って健斗にそう言った。健斗は照れくさそうにつられて笑って見せる。

「いや、なんとなくそう呟いてみたかっただけです。」

「可笑しなやつだな。というか、お前今年はクリスマスとか言ってられないだろ？」

竜平が健斗にそう皮肉めいた感じで言ってくる。しかし健斗はそんな皮肉を小さく笑って返した。

「別にそんなことないですよ。俺、どうせ行くとしたら神乃高だし、

あそこなら今のままでも充分合格するんで。」

「ふ～ん。そっか……じゃあクリスマスは彼女と過ごせばいいじゃないか。」

「店長。俺、彼女なんていません。」

「じゃあ好きな女の子といっしょに過ごすなんてのはどうだ?」

竜平にそんなことを言われて、健斗はドキッと胸を高鳴らせた。確かに健斗には彼女はいないが、思いを寄せている子はいる。

健斗は瞬時に早川の顔を思い浮かべた。早川といっしょにクリスマス過ごせたら……どんなに幸せなことなんだろうか。

早川といっしょにクリスマスツリーを見に行ったり、手をつないで街を歩いたり……そういうことをしてみたい。

なんて妄想にふけってみても意味がなかった。第一、早川とほとんど会話をしたことがない今の状況ではそんなこと万が一にもないだろう。

むなしくなるだけだった。

「好きな子もいません。俺は今年も独り寂しくテレビを見て過ごすんです。」

「若いもんが情けないなぁ……暇だったら店手伝いに来てくれよ。」

「それも嫌です。っていうか店長、クリスマスは家族と過ごすんで

しょ？」

「まぁな。夜に家族と、食事に行くつもり。」

「へぇ。店長が？めっずらしい。」

「たまには家族サービスをしてあげないと子供が拗ねるんだよ。」

「お子さん今いくつなんでしたっけ？」

「末っ子は今年で四歳だな。一番上はもう高校生だけど。」

「じゃあ一番甘えたい年頃ですね。」

「かもな。最近は忙しさに負けて相手してやれてないからなぁ……パパの仕事もちゃんとやらないとなぁ。お前も気をつけろよ？パパになったら色々と大変だから。」

「俺にはまだ分かんないです。」

健斗は首を傾げて小さく笑った。竜平も髭を揺らして「そりゃそうか。」と言って笑った。そんなことを話して、健斗は再び掃除に取りかかろうとした。

「……クリスマスって誰もが幸せだと思うか？」

「え？」

竜平が食器を片して、次の仕事に取りかかろうとしながら健斗にそう言ってきた。健斗は思わず手を止めて竜平の方を見る。白髪が混

じった長い髪を束ねている後ろ頭が見えた。

「世間ではクリスマスの日は幸せだと誰もが思ってる。でもそうじゃない人も中にはいるんだ。」

「はぁ……」

健斗は竜平の言っていることがいまいち理解することが出来なかった。竜平はたまに難しい話をする。倫理的というか道徳的というか、とにかく奥が深い話をたまにする。

でも健斗はそんな話が嫌いじゃなかった。逆に聞いてみたいという気持ちが強かった。

「そんな人のために、自分は何が出来るんだろう？そう考えて、ここを開いたっていうのもある。」

「へぇ……そういえば、俺……店長の昔の話全然知らないです。」

健斗が何気なくそう言ってみた。健斗が幼いときにはもうすでにこの店は存在した。一体いつからあるのかなんて知らない。気がついたら、ここは健斗のお馴染みの場所となっていた。

母さんによく連れて来られ、竜平を交えて色々な話をしたのを覚えている。初めて食べたナポリタンが本当に美味しくって、それから健斗はこの場所に来ると決まってナポリタン、そしてホットミルクを頼むようになっていた。

少し成長するとホットミルクがカフェラテに変わったりと、健斗が頼む飲み物のバリエーションも増えた。

そんなだから健斗は少し竜平の過去が気になっていた。一体どうしてこの店を始めようと思ったのだろうか。

竜平は「うん？」と髭を撫でながら小さく笑った。

「そうだな。健斗が小さいときには、もうこの店はあったか。」

「はい。だからちょっと気になります。何でこの店を始めたんですか？」

健斗がそう聞くと、竜平はふむ……と言って、仕事の手を止めた。

「そうだな。この店を始めたのは……今から、二十年以上前くらいかなぁ？」

「そんなに昔っ？」

健斗は意外な歴史の深さに驚いたような顔をした。健斗は辺りを見渡してみる。二十年の古さなんて見せつけない小綺麗な店だった。

「あぁ、そうさ。私がまだ三十代のときだったな。勤めてた会社でクビを切られてな。」

「えっ？店長……サラリーマンだったんだ……」

健斗が唖然としてそう呟くと、竜平は可笑しそうに声を立てて笑った。

「最初の頃はそうだったさ。市内の証券会社に勤めてた。……ちょ

うどバブルが崩壊して、社会全体が不景気になった時期でさ、失業者の数もどんどん増えていった。私はそのうちの一人だった。」

竜平は昔を懐かしむようにしてそう言った。健斗はそれを黙って聞くことにした。その頃の時期のことなんて健斗には全然分からなかったけど、社会全体が歪み始めたんだなということだけ分かった。

「お金はない。仕事もない。そのときは毎日がつらかった。途方に暮れて、一体この先何をどうすればいいのか分からず……町をさ迷った。」

今の竜平からは想像もつかない話だ。いつも笑顔で穏やかな竜平が、希望を持てず途方に暮れている姿なんて……健斗は見たことがない。

「そんなある日……行く当てもなく流れついたのが……この町だった。」

「神乃崎に？」

「あぁ。何でこの町に着いたのか何て分からない。ただぼ～っとして、本当に気がついたらこの町にいたんだ。巡り合わせって不思議なものだよな。」

竜平は可笑しそうに笑った。健斗もつられて笑って見せた。

「そしてこの商店街に来た。すごかったなぁ……うん。第一印象がそれだった。自分よりもずっと年上の人たちが、活気に溢れている。そう思った。」

その気持ちは健斗にも分からないものではなかった。この商店街は

不思議なもので、みんなが活気に満ちている。八百屋のおばちゃんや、肉屋のおっちゃん、魚屋のおっちゃんやおばちゃんもみんな健斗の顔馴染みである。

いつまで経っても元気で一生懸命今を生きている。

健斗もその影響を少なからず受けていた。現に商店街の住人の顔を見ると何だか妙に安心する。

「うん……懐かしいんだよ。この感じの商店街は。」

「懐かしい？」

「あぁ。私が子供の頃は、こういう商店街はよくあったもんだ。このようにみんなが活気に満ち溢れていて、地域全体がまとまっている。今では滅法少なくなってしまったが……」

その話は以前も聞いたことがあった。年を追う事に日本列島は都市化が進み、昔のような雰囲気とは大きく異なってしまったという。

列島改造計画を経て、開拓されていなかった地域も開拓され、都市化が進み、結果的にそれが好景気を生み出したのも事実だが……果たしてそれが良いことだったのだろうか？と、竜平が言ったのを健斗は覚えていた。

現にその好景気の反動が今を生み出している。なのに人々を物を消費することに限界を決めず、それどころかその限界をさらに超えるために生産性を高めようと努力する。結果的に今日本は不景気のスパイラルにはまっている。

健斗にはよく分からない話だった。経済の仕組みをよく知らないというのもあるが、それよりもこの町を出たことがないから、竜平が言うような感覚が見えて来ないのだった。

「この町の懐かしさが、私の初心を思い出させてくれたんだ。」

「初心……ですか？」

「あぁ。学生の頃、自分の喫茶店を開くことを夢見ていた。それをふと思い出したんだ。」

竜平の年代の青春時代の頃は今とはかなり違う部分があるらしい。彼らにとって今で言うデートスポットは、ここのような喫茶店だったと竜平は言う。

「そんな夢を忘れて市内の証券会社に勤めていた。……いや、そうせざるを得なかったんだな。しかしその夢を、この町は思い出させてくれたんだ。」

「だから……この町に喫茶店を開いたんですね。この店を……」

健斗がそう言うと、竜平は笑って頷いて見せた。

「ここは良い。色んな人がここを訪れ、多くのことを教えてくれる。自分がちっぽけな存在だっていうことを教えてくれるんだな。」

「……本当ですね。」

健斗は箒を片手にふっと表情を緩めた。

「……ここで働く前俺、翔のこととかですげー落ち込んでました。自分だけどうしてこんな辛い目に合わなきゃいけないんだろう。何か悪いことをしたのかって……でも」

健斗はそう呟いてゆっくりと目を閉じた。その刹那に思い出すのは、翔の事故現場……それとここを訪れた人々の笑顔だった。

「ここには、俺以上に、それ以上に思い悩んだ人が来て、それが分かって……俺、何か悲劇に酔って自分を可哀想な人間に陥れようとしてただけなんだなってそう思えるようになりました。」

「……そうか。」

「はい。まだやっぱり辛いです。あいつが死んだことは俺のせい……俺のせいだって今でも思ってます。でも……それを受け入れて今生きようとしてるのは、ここで働いてるからなんです。こんな俺でも……誰かのために何かしてやれる。逆に俺自身も何かしてもらってるし……それに――」

健斗はそう言って、はっと我に返るように竜平の方を見た。

「あ、すみません。俺、何か調子こいて変なこと言っちゃって……」

「何言ってんだ。素晴らしいことだよ。」

竜平は目を閉じて口元で笑みを浮かべながら、カップの水気を丁寧にタオルで拭き取っていた。

「……良い顔になった。最初のときと比べてな。」

「……そうですか？」

「あぁ。本当に……」

竜平はそれ以上何も言わなかった。健斗もあえてその先を聞こうとしない。何を言いたいのか、健斗も分かっていたからだ。

健斗はまた窓の外を眺めた。そう……ここで健斗は力をもらっている。色々な罪を背負う覚悟をした。

翔のこと、神乃中サッカー部のこと……

本当にこれでいいのだろうか？迷うことも多々あったが、迷っても仕方ないんだって思う。戦わなきゃいけないんだ。過去と、そしてこの先訪れる未来と、今と……

健斗にとってここは心の寄りどころ……疲れた心を苦いカフェラテで癒やしてあげる場所なのだ。

健斗はそんなことを思い出していた。本当にこの場所があったから今まで戦ってこれたし、今胸に抱いている決心をすることが出来たのだ。

この場所に……竜平には感謝しきれないくらいの大恩がある。

健斗はそんなこと考えながらゆっくりと店の扉を開けた。客が入って来たことが分かるように、ドアに取り付けられている小さな鐘が鳴った。

カウンターに見慣れた姿があった。鼻の下に生えている白い髭、柔らかなカフェラテみたいな雰囲気で優しい笑顔……竜平はいつものように健斗が来ると笑顔で迎えてくれた。

「おう。」

「どうも。……あれ？」

健斗はカウンター席に誰かが座っているのに気がついた。しかもその後ろ姿は健斗もよく知っているものだった。

長い髪を後ろに束ねたポニーテールで、小さい体だがその中には揺るがない負けん気が備わっている。

しかし振り返った表情はその負けん気がどこかに消えていた。

佐藤が健斗の方を見ると一瞬だけ驚いた表情を見せたがすぐに表情を変え、カウンターの方に向き直った。

「佐藤？」

健斗は佐藤に呼びかけるが、佐藤は返事をしなかった。どうして佐藤がいるのか理由が分からなかった。

竜平と目が合い、目配せをしてくるのを健斗はじっと見つめた。

第9話　新たなる決意　P．40

健斗は佐藤の隣に座り、竜平からカフェラテを出してもらった。それを静かに飲むと、ほのかな甘さと苦さが口の中に広がった。

「……佐藤、最近見ないと思ったらここに来てたんだな。」

健斗が笑ってそう言うと、佐藤は俯いたまま静かに頷いた。どうしてそのような態度なのか、いまいち理解出来ず竜平の方を見た。

「……友達と喧嘩したそうなんだ。未だに仲直り出来ないことを気に病んでいるらしい。」

佐藤の気持ちを代弁するかの如く、竜平がそう静かに言った。健斗はそれを聞いて、可笑しさを交えながら呆れるようにため息を吐いた。

「そのことか……」

「……」

健斗は黙っている佐藤を見つめていた。一向に佐藤は顔を上げようとしない。相当今の状況を思い悩んでいるのだろう。

するとだった。竜平が表情を緩めて健斗に言ってきた。

「私は奥にいるよ。客が来たら呼んでくれ。すぐに行くから。」

竜平はそう言ってすぐに店の奥へと消えていった。おそらく気を遣ってくれたのだろう。竜平らしい気持ちの配慮だった。健斗は奥へと消えて行く竜平を見ると再び佐藤の方へと視線を向けた。

「ヒロとのことでしょ？」

「……うん。」

佐藤はまた頷いてそう言った。健斗はその様子が何だか可笑しく感じた。

「仲直りのきっかけが掴めないんだよな。……ヒロも同じこと言ってたよ？」

「……本当に？」

「あぁ。謝ろうと思ってても中々タイミングが掴めないんだって。でも……やっぱりあいつ一方的に自分が悪いって思ってる。だから――」

「違うよ。」

健斗が言いかけているところで、それを遮るように佐藤がそう言った。

「ヒロは何も悪くないの。悪いのは……あたしなの。」

「……佐藤……」

「あたしがお節介だから、余計なこと言っちゃって……何も分かっ

てないのに……」

その姿は少し麗奈と被るところがあった。自分は何も知らなかった。何も知らないくせに、余計なことを言って健斗たちを困らせている、と。

「三人で買い物に行ったときもそうだったでしょ？あたし……いつもそうなんだよね。自分の見方でしか物が言えないの。それが相手をどんなに傷つけてるかも知らずに……ヒロがあたしを嫌うのも、当然だよね……」

なるほど……

健斗はそう心の中で呟いた。佐藤が思い悩んでいるのは仲直りのきっかけが掴めないだけじゃない……ヒロに嫌われたと思い込んでいるのだ。

実際はそんなことない。もう最初からヒロは佐藤に罪悪感を抱いていた。嫌うなんてもっての他だった。

だが、佐藤は自分の悪い部分だけしか見えていない。だからそういう心理が働いてしまうんだと健斗は悟った。

健斗は小さく口元で笑みを作りながらため息をついた。

「佐藤のそういう性格が良いのか悪いのかは知らないけど……俺は佐藤のそういうところに救われてる部分もあるよ？」

健斗がそう言うと、佐藤はゆっくりと健斗を見上げた。健斗は安心させるように笑顔を浮かべた。

「買い物に行ったときも佐藤の言うことはマジで正しいって思った。ここで言ったことだって、ヒロのことを本当に心配してんだなって思ったし……中庭でだって、佐藤の心配してくれる気持ちがすげー嬉しかった。」

「……本当に？」

「マジで。だから他の人はどうかは分からないけど……俺は佐藤みたいな性格は好きだよ。ちょっと気が強くて困る部分もあるけどな。」

健斗がそう言うと佐藤は嬉しそうに、そして照れくさそうに笑顔を浮かべた。しかしその笑顔は徐々に気まずそうな苦笑いへと変わった。

「健斗はそう思っても……ヒロはそうだと限らないでしょ？」

「……どうだろうな？でも……めったに怒らないあいつがどうして怒ったか分かる？」

「……どうして？」

佐藤が首を傾げて健斗に尋ねた。健斗はふっと表情を緩めて続けて言った。

「佐藤の言ったことは正しいからだよ。あいつも分かってたんだ。やりたいことがあるくせに、それを認めようとしない。というより、認めたくなかったんだ。認めちゃえば、自分が惨めになるだけだから……だから必死になって否定したんだ。ただちょっと感情的にな

ったただけ……あいつすぐに頭冷やして、自分が悪いんだってすぐに思ったらしいよ？そんな佐藤を……嫌う理由なんてある？」

健斗がそう言うと佐藤はまた俯いて何も言わなかった。健斗はまたため息を吐いて、佐藤の頭に手を乗せる。柔らかいポニーテールのお下げの部分が揺れた。

「だから何も心配することないよ。あいつは佐藤のこと嫌ってない。今仲直り出来ないのは……ちょっと色々あって……」

健斗は言葉を詰まらせて、佐藤から視線を逸らした。そう言えば……佐藤にも話しておく必要があるかもしれない。健斗たちのことをこんなに心配してくれているからこそ、今ここで話すべきなのだ。

「色々って？」

「……うん。今日はそれを話しにここに来たんだ。」

健斗はそう言って店の奥を見つめた。すると、まるでタイミングを見計らったかのように店の奥からすっと竜平が姿を表した。

カウンターの方に戻り、いつものように優しい笑顔を向けた。

「話は終わったか？」

「……まぁ、一応。」

「そうか……で、お前が今日ここに来た理由は他にもあるんだろ？」

さすがだ、と健斗は思った。竜平は健斗の心を見透かしているように核心をついてきた。健斗は真っ直ぐその澄んだ瞳を受け入れ、ゆ

っくりと頷き返した。もしかしたら、竜平はもう気づいているのかもしれない。

すると佐藤が困ったように健斗と竜平を交互に見た。

「えっとあの……あたしは帰った方がいいよね？それじゃあ――」

「いや……」

「え……」

健斗は帰ろうとする佐藤を見つめた。佐藤は少し驚いた顔を見せる。

「佐藤も聞いて欲しいんだ。俺とヒロが、今考えてること。」

健斗が静かにそう言うと佐藤はゆっくりと頷いて再び席に座り直した。それを確認すると健斗はもう一度竜平の方に向き直した。竜平はただ黙って健斗の目を見てくる。

健斗に躊躇いはなかった。すぐに言いたいと思った。

「店長……俺、もう一度サッカーをやろうと思ってます。」

健斗がそう言うと、竜平の目の奥で微かに何かが揺れるのに気がついた。健斗はその何かをただじっと見つめていた。

第9話　新たなる決意　P．41

電車に揺られること、三十分。電車の窓から見える景色をぼんやりと眺めていた。

こんな風に電車に乗るのは久しぶりのような気がする。いや、佐藤と健斗と共に買い物に出かけたときに乗ったが……そのときは気持ち的に何かが違った。

胸がざわつく。もしかすると、自分は緊張しているのかもしれないな。とヒロは窓の外を眺めながら小さく笑った。

あと数分もしたら隣町の駅に着く。そしたら、あいつらに会って話をしなければならない。

するとヒロはのんちゃんと話をしたときのことを静かに思い出していた。

「試合に出て欲しいんだ。」

のんちゃんからそう言われたとき、ヒロの中に芽生えたのはどうしようもない複雑な気持ちだった。

正直、のんちゃんがそう言ってくるのは分かっていた。だが、やはりいざとなるとこういう気持ちになってしまう。

ヒロは激しく動揺しているであろう健斗をチラリと見た。思った通り健斗の表情は酷く困惑していた。

三人とも口を開こうとはせず、お互いに見つめ合っていた。健斗は罪悪感に苛まれるように下を俯いた。

「……のんちゃんは、俺たちのこと憎んでないの？」

「えっ？」

健斗が静かにそう言うのを、のんちゃんはきょとんとして聞き返した。健斗は唇を噛みしめてもう一度のんちゃんに言った。

「俺は、俺たちは……神乃中サッカー部を崩壊させた張本人だ。そんな俺たちを……憎んでないのか？」

健斗の視線をのんちゃんはしっかりと受け止める。しばらく健斗とのんちゃんの視線が交錯して、ヒロはそれを黙って見ていた。

するとのんちゃんはふっと表情を緩めて、健斗から視線を逸らし別の方へと視線を向けた。

「分からない……憎んでるというか……でも怒ってないって言ったら嘘になると思う。」

「……」

「……」

「健斗たちは勝手だよ。自分だけ辛い目をしてるって思い込んでさ、僕たちのことなんてどうでもよかった。僕たちがその後、どうなったって関係ない。健斗たちはそう思ってるって考えてた。」

そのとおりだ。

まさにそれが健斗とヒロが背負った責任の核心部分だった。自分だけ辛い思いから抜け出そうとしている。残された者のことなんて考えずに、自分の都合だけ考えて辞めて行った。

そう思われるのも当然だと思ってたし、やっぱりそうやって思われていたということを知ると、やっぱり胸が痛んだ。

「……でもね、やっぱりダメなんだ。」

「ダメ？」

「うん。少なくとも僕はだけど……健斗たちを嫌いになることなんて出来なかったよ……」

のんちゃんは照れくさそうにそう呟いた。健斗とヒロはお互い黙って、のんちゃんの言葉を聞き入っていた。

「そう……僕の中で、健斗たちを嫌おうとするよりも……もう一度健斗たちとどんな形でもいいから、サッカーをやりたい。ううん、やって欲しいっていう気持ちが強かった。だから本当は高校に入ってすぐに二人を誘おうとしたんだ。でも……出来なかった。」

ヒロはハンド部に入り、健斗はバイトを始めていると聞いたときに気持ちが踏み出せなかったとのんちゃんは言った。もう二人は自分の知らないところで違う道を歩もうとしている。それを自分が引き戻そうとするなんて出来ない。

のんちゃんはそう呟くように言った。

「でもヒロがハンド部を辞めたって聞いて、いけないことかもしれないけど……僕は嬉しかった。もしかしたらヒロだけでも、サッカー部に戻ってきてくれるかもしれないって。」

「のんちゃん……」

「だから……今お願いしているのは、神乃高サッカー部のこともあるんだけど……でもそれ以上に、もう一度健斗たちとサッカーをやりたい。やって欲しいんだ。それが僕の、本当のお願いごとで――」

のんちゃんはそう言ってはっと我に返るように苦虫を噛み潰した表情になった。

「――ってごめん。こんなこと言っても、都合の良いようにしか聞こえいよね。今更、何言ってるんだろう……ごめんね。」

のんちゃんはそう呟くように言った。謝ってもらう必要なんてなかった。ただ嬉しかった。のんちゃんがそのように思っていてくれたことに、喜びを感じた。罪悪感が消えたわけではなかったけど、心が救われた気持ちになった。

のんちゃんの健斗とヒロに対する気持ちがしっかりと伝わった。

それを踏まえて健斗はどう決断するのだろうか。ヒロはのんちゃんから視線を逸らし再び健斗を見た。健斗はじっとのんちゃんを見つめたまま動かない。

微かに目が揺らいでいるのを、ヒロは見逃さなかった。

「……ごめん。」

健斗が呟くように口を開いた。その言葉にのんちゃんもはっと顔を上げる。健斗は下を俯き、唇を噛み締めていた。

「のんちゃんの気持ちはよく分かった。すげー嬉しいし……力になってあげたい。でも……」

健斗は迷いながらもゆっくりと顔を上げた。

「でも……ごめん。俺、昔のことを有耶無耶にしたままサッカーをまた始めることは出来ない。だから……」

「そっか。」

のんちゃんはふっと表情を緩めて健斗の言いたいことを理解したみたいに小さく頷いた。

「そうだよね。健斗はそういう奴だもん。それぐらいの覚悟を持って、サッカーを辞めたんだ。……僕の方こそ、ごめんね。」

健斗は何も言わなかった。ヒロは健斗から視線を外し、今度はのんちゃんの方を見る。のんちゃんは小さく笑っていたが、その目は最後の希望が途絶えてしまったかのように光を失っていた。

「健斗たちに頼らないで、何とかしてみるよ。本当にごめん……変なこと頼もうとしちゃって。」

「……のんちゃん。」

「ごめん……僕、もう行くね。それじゃ――」

のんちゃんは踵を返して健斗とヒロに背を向けると、素早い速度で健斗たちの元から離れて教室を後にした。

健斗とヒロはしばらくその後ろ姿が見えなくなるまで、じっと見つめていた。そしてヒロは健斗を見ると、健斗は寂しそうな表情を浮かべていた。

それは健斗が神乃中サッカー部を辞める際に見せていた表情とまったく同じものだった。

「……帰ろう。」

健斗は鞄を持ってヒロにそう呟くようにそう言った。ヒロの先を歩いて行く。ヒロは健斗から一歩離れて後ろを歩いて行った。教室を出て、廊下を歩いているところでヒロが健斗に言った。

「……これでよかったのか？」

ヒロが健斗の背中に向けてそう言った。すると健斗は足を止めて、ヒロの方を向くことなく佇んだ。ヒロもそれを見て足を止めて、健斗の後ろ姿を見つめる。

「本当に……黙ってこのまま見捨てるつもりか？」

「誰もそんなこと言ってないだろ。」

「じゃあどうすんだよ。あんな中途半端なこと言って……やらないならやらないって、何ではっきり言わなかったんだよ。」

そう。ヒロには健斗の思惑は通用しなかった。健斗は一度も「やらない」とは言わず、「ごめん。」そして「今は」と口にした。そんな中途半端な言い方、健斗らしくないとヒロは思っていた。

しかしのんちゃんはそれを拒否とみなした。当然と言えば当然だが……健斗の言い方にはどこか迷いがあった。

健斗はヒロの言葉を受けゆっくりと振り返る。その表情はやはり迷いを感じていた。

「……分からない。確かにあのまま受け入れるのもよかったかもしれないけど……でも、まだ何も終わってない。」

「……」

「それに、のんちゃんも言ってた。のんちゃん以外のみんなはもう諦めてるって。それなのに、俺らがでしゃばって……何か意味あんのかよ。」

健斗はそう言うとまた背中を向けてゆっくりと歩き出した。

「周りとかじゃなくって……お前自身はどうなんだよっ！」

どんどん遠ざかろうとする健斗に向けて、ヒロはつい荒い口調でそう言った。

「周りとか今は関係ない。お前自身、このままサッカー部が潰れていいのかって聞いてんだよっ！」

「いいわけないだろっ！」

健斗は振り返ってヒロにそう叫んだ。そして完全にヒロと向き合い、悔しそうに唇を噛み締めた。

「いいわけないだろ……そんなの……」

「……」

「なんでまた……こうなるんだ。俺は……俺はまた……のんちゃんの邪魔をしちまってる。もう二度とそうならないようにしてたのに……何で俺……」

健斗は以前と同じように後悔の波に襲われていた。ヒロはその様子をじっと見つめる。その姿は以前と同じようなものだった。

「……そうやって同じこと繰り返すつもりか？」

「え？」

「南ちゃんも言ってたろ。そうやって後悔して、時間を無駄にする。それよりもやれることの方がいっぱいあるだろ？……もしこのまま、何もしないで終わるんだったらそれこそ、お前は同じことを繰り返すことになるんだぞ。」

ヒロが一番恐れていること。それは健斗が今のまま後悔の波に押し潰されて、また同じことを繰り返すことだった。それこそ、一番避けなければならないことだ。

健斗は黙ってヒロの言うことを聞いていた。また健斗の目が微かに揺れるのが分かった。

そしてその晩のことだった。健斗から電車がかかってきた。

どうやら……ようやく決意が固まったらしい。

「麗奈も、お前と同じようなことを言ったよ。」

「……そっか。」

「でさ、俺……やれるとこまでやろうと思うんだ。今までのこと、全部清算するつもりで。どこまでやれるか分からないけどさ。」

「……分かった。じゃあさ俺、明日佐久と琢磨に会ってくる。」

電話の奥で健斗の驚く声が聞こえた。

「テストはどうすんの？」

「んなもんどうだっていいよ。後で何とかなるだろ。言っておくけど、時間ないんだからな。すぐに行動に移せることはやるつもりで行かないと。」

「……そっか。そうだな。分かった。」

そう言って健斗は電話を切った。ヒロは切れた電話を置いてふぅっと息を吐いた。ようやくだ。ようやく前へと進むことが出来る。

そんな気がした。

電車は目的の駅に到着した。ヒロはゆっくりと電車から降りて、ため息をはいた。やっぱり心なしか緊張しているようだ。ふとヒロの横を老人が通り過ぎるのに気がついて、ヒロはゆっくりと改札の方へと歩き出した。

第9話　新たなる決意　P．42

ヒロは改札を抜けて、ゆっくりと空を仰ぐようにして見上げた。さすが、神乃崎と違って都市化が随分進んでいる。

建物がたくさん建っているし、目の前のショッピングモールは神乃高の人間もよく利用するし、そこは健斗と佐藤といっしょに買い物に来た場所でもあった。

と、考えている場合ではない。ヒロはチラッと腕にしてある時計を見た。時刻は十時を回っている。約束の時間に間に合うように行かなくてはならない。ヒロは少し急ぎ足で、佐久と琢磨が通っている“桜山高校”へと向かっていった。

会ってからどんな話をしようか。何を言おうか、そんなこと全く考えていなかった。本当に久しぶりに会う二人だからこそ、用意してきた言葉ではなくその場で抱いた気持ちに任せようと考えていた。

ヒロは息を切らしながら桜山高校の校門の前に着いた。ガードレールの敷かれた歩道の前にあるその校門から見える校舎は、神乃高の数倍は綺麗な校舎だった。

校門からはそこの生徒が帰路に着くため、校門から次々と出て行く。

桜山高校も神乃高と同じく、テスト期間らしい。昨日そういう事情

を聞いた。午前中に学校が終わり、尚且つ部活もテスト休みである今の期間だからこそ都合が合うのだった。

その中、一人制服が違うヒロに何人かの人が気づいて視線を送ってくるものもいた。

桜山高校の人は神乃高の制服を知っているはずだ。だから、ヒロが神乃高でどうしてこんなとこにいるんだろうって思っているのだろう。

ヒロはそんな視線にわざと気にも留めず、二人が出て来るのを待っていた。ふぅっとため息をつきながらガードレールに寄りかかる。

そして桜山高校の名所である、校門を覆う大きな桜の木を見上げた。今では葉が散ってしまっているが、春になると見事な桜の花を咲かす。桜山高校の人気の一つでもあった。

今頃神乃高ではテストが行われているだろう。今日は二科目だから、昼前に終わるのだ。まだ十時半だから、二科目目の真っ最中だ。

テストをサボることは初めての経験ではなかった。中学時代にも面倒と思い、ちょこちょこサボった。いつも成績が良いヒロは、別に少しくらいテストを受けなくても何の問題はなかった。

気持ちがそれを勝っていたのだ。一刻でも早く二人に会い、話をしたいと思っていた。

そんな風に考えていると……

「ヒロッ！」

自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。ヒロはゆっくりと前を見つめた。校舎の方から男子生徒が二人、ヒロに向かって走ってくるのが見えた。

その二人の顔はとても懐かしいものだった。神乃中サッカー部を辞めてからほとんど会話を交わしてなかったし、中学を卒業してからは全く会わなかった。

感覚的には二年半振りだった。桜山高校の制服を着た前田佐久と横内琢磨の二人が、徐々に速度を緩めてヒロに歩み寄ってくる。ヒロはにっこりと微笑んで、立ち上がると自分からも二人に歩み寄った。

「よっ！久しぶりっ！」

気さくな態度で二人にそう言った。佐久と琢磨は息を切らしてヒロをじっと見つめていた。

「……まさか本当にここに来るなんて。」

「冗談で言うわけないだろ。」

「別に神乃崎でもよかったのに。うちらそんなに家離れてないべ？」

琢磨がそう言うとヒロは苦笑いを浮かべた。

「うん……そうなんだけど、一刻でも早く二人と話がしたくってさ。つい、来ちゃった。」

ヒロが気さくに笑ってそう言うと、佐久と琢磨は呆れたような顔を

して互いに見合った。

「今日学校どうしたの？」

「ふけた。どうせテストだし。」

「大丈夫なの？」

「当たり前じゃん。俺を誰だと思ってんだよ。」

ヒロがそう言うと佐久と琢磨は初めて笑みを浮かべた。「まったく……」と呆れ返っているみたいだった。

「相変わらずだな。ヒロ……」

琢磨が笑ってそう言った。佐久もそれにつられるようにして笑った。ヒロは照れくさそうに笑って、「まぁな。」と言って答えた。

「佐久と琢磨も……元気だった？どう？ここは。」

ヒロがそう尋ねると、佐久と琢磨はお互いに見合って首を傾げた。そして小さく声を立てて笑って佐久が答えた。

「どうだろうね。でも結構いいとこだよ、ここ。」

「ヒロもここ受ければ良かったのに。ヒロの学力なら、ここだって余裕だったでしょ？」

琢磨がヒロにそう尋ねると、ヒロは苦笑いを浮かべて肩をすくめるようにして答えた。

「どうだろうな。まっ、どっちにしたって俺には問題児が着いてるからな。」

「問題児って……まぁ、そうかもな。」

「それに神乃高もそんなに悪くないぜ？むしろ面白いことが結構ある。」

そんなことを話していると佐久がふと周りに視線を送った。ヒロはその様子に気づいて、同じように視線を周りに送ると、校門から出て来る桜山高校の生徒がヒロたちを物珍しそうに見ていることに気がついた。

そうか。自分の学校の者が違う学校のやつと話をしている。それはめったに見れる光景ではないから、彼らにとって興味の対象に値するのだろう。何人かの生徒が、ヒロたちを指差してコソコソと話をしている。

「ここじゃちょっと……向こうに行こうか。」

佐久が気を効かしてそう言った。ヒロはその提案を素直に受け入れ、佐久や琢磨の後について行った。

佐久と琢磨がヒロを連れてきたのは、駅前のチェーン店のカフェだった。そこは健斗と佐藤といっしょに買い物に行ったときに利用したとこと同じ場所だった。ヒロたちは適当に飲み物を頼み、三人は互いに向き合うようにして座った。

「……のんちゃんから、ある程度の事情は聞いてるよ。」

早速本題に入るように、琢磨がそう呟くように言った。ヒロと佐久は急に表情を強ばらせる。

琢磨の前髪が風に靡かれて揺れる。中学のときよりも大分伸びている前髪を鬱陶しそうにかき分けた。

「そっちのサッカー部が廃部になるんだって。正直驚いた。」

「……うん。」

「でもそれ以上に驚いたのは、健斗とヒロがまたサッカーを始めようとしてるって……それって本当？」

ヒロは昨日、唯一連絡の取れた佐久にそれを話していた。佐久の親とヒロの親は比較的繋がりが深く、そのためお互い連絡先を知っていた。

とは言っても連絡を取り合うことは本当に久しぶりだった。佐久に電話をして、概ねのことを話し、話したいことがあるから会って欲しいと頼んだのだ。

急なことだったが佐久はすぐに了承して、こうして佐久、琢磨、ヒロの三人で話せる機会を作ってくれた。

ヒロは琢磨の問いかけにしばらく間を置いてからゆっくりと頷いた。

「……そっか。」

琢磨がそう呟いてからしばらく沈黙が続いた。琢磨だけではなく佐久の方も神妙な赴きで下を俯いていた。

ヒロはその二人の複雑な心境に気づいていた。

「俺がここに来た理由は二つあるんだ。まず、二人に何よりも謝りたかった。ずっと……ずっとそのことが気にかかっててさ。」

ヒロは頭を下げてそう言うと、二人は黙って小さく頷いた。

「俺と健斗が原因で神乃中サッカー部は崩壊した。そして二人には、本当に謝っても謝り切れないくらい大きな迷惑をかけちゃって……今更かもしれないけど……本当にごめん。あのときは俺らが……」

「……もう、いいよ。ヒロ。そこまで言わなくっても……」

佐久がヒロにそう言った。深く頭を下げて謝ってくるヒロを見てられないと言った感じだった。

「ヒロたちの気持ち、分からなくないもん。小学校のときからずっと……三人はいっしょだったんだもん。だから……健斗やヒロだけが悪いわけじゃないよ。」

「……」

佐久は全く気にしてないと、ヒロに言ってくる。いや、そうではな

い。それよりも二人の気持ちには「今更……」という気持ちが強いのだろう。今更謝られたところで何かが変わるわけではない。

だから謝ってくれなくても、もう何とも思わない。そう思ってしまっているのだろう。そう考えると自分が今ここにいることが正しいのかどうか分からなくなる。

「でも、ヒロがわざわざ僕らに会いに来て、こうやって謝るってことは……やっぱりのんちゃんの頼み事を受け入れるってことなんだよね。」

佐久がヒロにそう尋ねてみる。まさにその通りだった。だからヒロはここにいる。ヒロはゆっくりと顔を上げて、小さく頷いてみせた。

「うん……それが俺がここに来た二つ目の目的。二人に謝って、許してもらおうって思って……じゃないと前に進めない気がしてさ。」

「健斗が……そう言ったんだよな?」

琢磨がそう聞いてきた。琢磨の目の奥に光るものがあった。ヒロは琢磨の視線を受け入れて、もう一度小さく頷いた。すると琢磨は思った通りだと言わんばかりに口元で小さく笑みを浮かべた。

「やっぱり……健斗の考えそうなことだもんな。バカだなぁ……俺らのことなんか気にしなくたっていいのに。」

琢磨は腕組みをしながら呆れるようにそう言って、同意を求めるように「なっ?」と佐久に言った。佐久も小さく笑って頷き返した。

「うん、琢磨の言うとおりだよ。僕らはもう何も気にしてないよ?

だから、何も考えないでのんちゃんの力になってあげて――」

「本当にいいの？」

ヒロが佐久の言葉を遮るようにしてそう言った。顔を上げて二人の目を交互に見つめた。突然の言い草に、佐久と琢磨は思わず驚いた顔を浮かべて口を閉ざした。

本当にいいのだろうか？ヒロはその疑問が頭の中を巡っていた。

「本当に……佐久と琢磨は、何とも思ってないのか？もう何も気にしてないのか？」

ヒロの蒸し返すような問いかけに二人は答えずただ黙り込んでいた。

「今二人の気持ちにはきっと……のんちゃんのことが絡んでるからだと思う。でも、それを差し引いて考えて欲しいんだ。俺と健斗があんなことをしといて、結局高校に入ったらサッカーを始める。……虫が良すぎるってそう思わないか？」

ヒロはそこのところの二人の気持ちが聞きたかった。のんちゃんの事情で同情心が芽生えてしまい、許す気持ちが生まれているのなら、ヒロは今日ここに来た意味がなくなる。

そうではない。ヒロと健斗が自分の都合でサッカー部を辞め、その後今目の前にいる二人の中学校生活をめちゃくちゃにしてしまった。まともな試合も出来ず、苦しい部活生活に仕立て上げたのは紛れもなくヒロと健斗なのだ。

そこに対する責任は当然大きい。だからヒロは今ここにいる。自分

の責任を果たすため、二人に会い、二人の本当の気持ちを確かめ、二人に許しを求めたい。

それなのにのんちゃんのことを入れられてしまうと、それはまた話が違ってくる。そうではなく……二人自身が自分らのことをどう思っているかを聞きたかったのである。

佐久と琢磨は何か言いたげだったが困惑するように口を閉ざしていた。ヒロはそんな二人を真っ直ぐ見つめて、二人の本当の気持ちを聞くのを待っていた。

すると店員がヒロたちが注文した飲み物を運んできた。三人それぞれの目の前に飲み物を置いていく。ヒロは軽く会釈をすると、店員は忙しそうに身を引いていった。

しばらく沈黙が続く。車の音が近くで聞こえて、そのとき初めてヒロはここは神乃崎ではないことを思い出した。神乃崎と違い、車の数も多く、たった数駅違うだけでこんなにも町の雰囲気が変わるんだな、とヒロは少し考えていた。

そして目の前にある注文したコーヒーカップに手を伸ばしたときだった。

「確かにそうかもな。」

琢磨が重い口を開くようにしてそう言った。厳しい表情でヒロを見る。ヒロはその表情を見て、背筋が凍るのを感じた。その表情は明らかにヒロに対する敵意を表していた。それはヒロが辞める際、振り返って全員を見渡したときの表情と同じだった。

「……確かに……虫が良すぎるよ。あんだけ俺らは止めた。辞めないでくれって。なのに……二人は俺らの意見に耳を貸さないで辞めて行った。その後俺らがどれだけ……どれだけ大変な思いをしたか、ヒロには分からないだろ。なのに、高校入ってまたサッカーをやりたくなったって？都合が良すぎるよ。」

琢磨の一言一言がヒロを追い詰めるようだった。琢磨、そして佐久の思いの根底にあったのは……やっぱりヒロと健斗の身勝手さだった。

「都合が良すぎる……でも、もうそれをどうしてもらおうとも思わない。今俺と佐久はここの高校で新しい生活を始めてるし……今更謝って許しを求められても、正直俺はもう……」

琢磨の言葉にヒロは何も言い返せなかった。やっぱりここに来るべきではなかったかもしれないな、とヒロは次第にそう思うようになっていた。

二年半前の出来事を、終わった出来事を……こういう形でしか償えない。償うことが出来ない自分に苛立ちを覚えた。そう、健斗はおそらくこうなるってことが分かっていた。だからずっと……ずっと思い悩んでいたのだろう。

終わった事を蒸し返すなんて、それこそ佐久や琢磨に申し訳ないことだ。二人にはもうヒロの知らない新しい生活を送っている。それをわざわざ邪魔するようなことをして、一体誰が得をするのだろうか。

ヒロはカップに入っているコーヒーの水面を見つめた。自分の顔が写っていて、その顔は酷く情けない顔をしていた。

「ただ、一つだけ聞いてもいいかな？」

琢磨がヒロにそう問いかける。ヒロはそう言われて無言のまま顔を上げてゆっくりと頷いた。琢磨はしばらく間を置いてから、ゆっくりとした口調で言った。

「健斗が辞めて行ったのはある程度理解出来る……でも、ヒロは何で辞めようと思ったの？それだけ……聞きたい。」

ヒロはその言葉を聞いたとき再びのんちゃんが最後に言った言葉を思い出していた。

――ヒロが一番かっこ悪いよ！ヒロは結局、健斗に流されてるだけだろっ？健斗だけが大切なのかよっ！

その言葉を聞いたとき、胸の中にざわつき抑えきれないものを感じた。思わず振り返って、「違うっ！」と思いっ切り否定しようと思った。

でも出来なかった。何故？その理由は……

「……分からない。正直、自分はどうして辞めようと思ったのか……上手く思い出せないってのが正直な気持ち。」

ヒロの言葉に琢磨と佐久は残念そうな表情を浮かべた。その表情からはヒロに対して改めて落胆したという気持ちが表れているようだった。

結局……自分は健斗に流されただけなのかもしれないな。と自分で

もそう思った。

「……実はさ、翔が事故に遭う前……健斗、翔に酷いことを言ったらしいんだ。」

「酷い事？」

佐久が不思議そうに聞き返した。ヒロはゆっくりと頷いて見せた。

「うん。ほらあの時翔さ、委員会のこととかで結構忙しそうにしてたじゃん？そのせいで、あまり部活に出れなくって……そのことを健斗が不満に思っててさ。」

その話は当然の如く、佐久や琢磨も知っていた。部室で小言を言う健斗の姿をこの二人も見ていたからだ。

「それで健斗の後を追いかけてきた翔に、健斗は“お前なんかもう友達でも何でもないっ！”って……翔にそう言ったんだって。その後、健斗の身代わりに翔が……」

「……それって本当の話？」

琢磨が信じられないと言った表情でヒロに聞いてきた。二人とも言葉が浮かばないようだった。その話を聞くのはおそらく初だったのだろう。そして、健斗の悲しみと罪悪感の根底に潜んでいた何かに触れたのだとヒロはそう思った。ヒロは頷きながら続けて言った。

「……そういう風に仕向けちゃったのって、実は俺なんだ。」

「えっ？」

「……」

「帰りの学活が終わった後さ、翔が俺のとこに来たんだ。健斗の場所を訊きに……俺、それを教えたんだよ。今帰ったばかりだから、追いかければまだ間に合うって……だからあいつは……」

息が苦しくなるのを感じた。このことはまだ健斗にも言っていない。自分の中にずっと閉じ込めていたヒロが犯してしまった罪だった。自分の罪を今目の前の二人に話している。

呼吸が乱れて、ヒロは目の前がぼんやりとしてきた。そして脳裏に最後に見せた翔の笑顔が浮かんだ。

「俺が翔に教えなければ、何も言わなければ……翔は死ぬことなんてなかった。いや、俺が健斗と帰ってればあんなことにはならなかった。だから……俺……」

「ヒロ、もういいよ。」

琢磨が哀れむような声でヒロにそう言ってくる。しかしヒロは首を横に振って話を続けた。

「健斗は自分のせいだって悔やんでた。でも本当は違うんだ。俺の責任なんだ。二人を巡り合わせたのは俺……全部俺が……俺が翔を殺し――」

「違うよっ！！」

佐久が金切り声を上げるように立ち上がってそう叫んだ。その突然

の出来事に、店内にいた人々が一斉にこちらの方を見てくる。ヒロはその声ではっと我に返った。そして立ち上がってる佐久を見る。

佐久もヒロと同じように息を切らしていた。すると、肩で呼吸をしながら佐久の目から一粒の涙が落ちた。そしてそれから佐久の目から涙が零れ落ちる。

佐久はそれを一生懸命拭おうとして制服の袖で顔を隠した。

「ごめんっ！ヒロッ！」

「え？」

佐久は泣きながら叫ぶようにしてヒロにそう言ってきた。顔を隠して、止められない涙を必死に拭おうとする。

「僕、何も知らなかった……そんなことがあったなんて知らずに……なのに僕はヒロと健斗のことを……ごめん……本当にごめん……最低だ僕……うっ……ごめん……」

「佐久……」

ヒロは泣きたい気持ちを抑えながら佐久を見つめた。泣き続ける佐久の肩にそっと手を乗せて宥めたのは琢磨で、佐久をゆっくりと座らせる。佐久は手のひらで顔を覆い隠し、嗚咽を漏らしながらひたすら泣き続けた。

すると琢磨は佐久からヒロへと視線を変えて、ヒロを見つめる。すると琢磨はこのときに初めて穏やかな表情を浮かべてくれた。

「分かったよヒロ。」

「……琢磨。」

「今日会えて良かった……本当に良かった……」

琢磨はそう言って何度も何度も頷いた。その瞳から微かに涙が零れ落ちるのをヒロは見逃さなかった。

ヒロの心にずっと抱き続けてきたわだかまりが暖かな温もりによって溶けていく。そんな感覚を覚えながらヒロはただ二人を見つめた。

第9話　新たなる決意　P．43

定時刻に時計の鐘が鳴る。重く低い音が響く頃に、健斗は全てのことを竜平と佐藤に話し終えていた。

もう一度サッカーがやりたいという気持ちが芽生えたこと、そしてのんちゃんに助けを求められたこと、それをするために今健斗がしようとしていること。

竜平はそれを黙って頷いて聞いてくれた。だから健斗も思いの他聞きやすくって、すらすらと自分の胸の中にある気持ちを言うことが出来た。

「そうか。また、サッカーを始めるか。」

竜平は呟くようにそう言った。健斗は照れくさそうに小さく頷いて見せた。

「はい。ようやく……決心することが出来ました。」

「そうか。それじゃあもう……安心だな。」

竜平はそう言うと静かに目を閉じて、何かを考えるような仕草を見せた。一体何を考えているのだろうか。健斗には推し量ることが出来ない。ただ、きっと竜平の中にも色々な思いが巡っているのだろう。

健斗がサッカーを辞めた日から今にかけて、ずっと健斗を支えてき

てくれたもう一人の父親のような存在。今日に至るまでの様々な思い出を思い返しているのだろうか。

健斗はそんな竜平を見ながら、肩をすくめて見せた。

「……それで、申し訳ないんですけど……もし俺がサッカーを始めるなら、もう今までのようにここで働くことは……出来なくなるんです。だからそれを、謝ろうっていうか……その……」

「あぁ。それは分かっている。その点については何も心配するな。思い悩む必要はない……それに……」

竜平はそう言いかけてから、少し遠くを見つめた。

「……お前に言ってなかったが……ここは閉めることにした。」

「えっ？」

健斗は竜平の突然の言い草に自分の耳を疑って思わず聞き返した。隣に座っている佐藤も心底驚いた顔をしている。

だがその中でも健斗の動揺が一番激しかった。

この店がなくなる……？

「ど、どうしてですかっ？何で……」

あまりの動悸に健斗は言葉を詰まらせた。心臓が激しく脈を打つのを感じる。幼いときから健斗のどこか心の寄り所になっていたこの店がなくなるなんて信じたくなかった。

すると竜平は口元で笑みを浮かべながら、小さく頷いた。

「うん……まぁ、正確に言えば移転かな。ここを閉めて市内の方で店を開いて営業しようと思ってるんだ。」

「市内で？」

「あぁ。ずっと考えてたことなんだけどな……」

と言って竜平はすっと目を閉じた。その穏やかで冷静な雰囲気に健斗は次第に呑まれていく。

「……以前話したことあるだろ。この店を開く前、私は市内の証券会社で働いてたこと。」

健斗はそのことを思い出しながら小さく頷いた。佐藤は意外そうな顔をしている。確かに今の竜平から見ると、昔会社員だったなんてあまり信じがたい話でもある。

「ここで店を開いた当初から、ずっとそのことを考えていた。いつかもう一度市内で、今度は自分の力で、挑戦しようってな。」

佐藤はいまいち何のことを言っているのか分からないような表情をしていたが、健斗はその意味がちゃんと分かっていた。

バブル崩壊後、その反動で失業者の割合が急増していったその時代。竜平もその時代の波に巻き込まれた犠牲者だった。

おそらく相当悔しい思いをしたのだろう。そしてその失意の最中、たどり着いたのがこの町だった。

「本当はもっと早く移るつもりだったんだ。ただ、一つここで気がかりなことがあった。」

「気がかりなこと？」

「あぁ。」

竜平は目を開いて健斗を見つめた。その目は慈愛に満ちていて、まるで自分の息子を見つめるようだった。

「……お前のことだ。」

「俺……？」

「あぁ。この場所で唯一気がかりだったのが、お前だった。二年半前、あのときのお前をあのまま見放しておくわけにはいかなかった。」

健斗は言葉が出ず、胸の中に何か熱い物が沸き起こるのを感じた。そう。だからこそあのとき竜平は健斗をこの場所へ誘ったのだ。自分の傍に置き、健斗がいつの日か心を取り戻すまで見守ろうと決意した。

「お前が本当の意味で前に進める日が来るとき、私自身も同じように前に進もうと。だけど……もう大丈夫だな。」

「店長……」

「お前はまたサッカーを始める決意が出来た。それは……過去を乗

り越えることの出来た何よりの証だ。もう私の役割は終わった……それに……」

健斗は自分の瞳から涙が流れるのに気づいた。一粒一粒、健斗の目元から涙が流れる。だがそんなこと気にもせず、健斗は黙って竜平の言葉に耳を傾け穏やかな表情で語る竜平の顔を見つめた。

「それに、またお前が挫けそうなときになったら、頼れる人が周りにたくさんいる。麗奈ちゃんやここにいるマナちゃんもうそう。このまえ来た友達も……お前はもう独りじゃない。」

「店長……」

健斗は流れる涙を抑えきれなくなり、思わず下を俯いた。自分のことをここまで考えてくれているとは知らなかった。何も知らずに健斗はここで働くようになっていた。自分は気づかない内にたくさんの人に支えられていた。

隣で話を聞いている佐藤も薄ら涙を目に浮かべながら健斗を微笑みながら見つめていた。健斗はもうそれ以上言葉が出ず、ただ泣き続けた。

甘くてほろ苦いカフェラテの香りがした。健斗の大好きなカフェラテの香りだった。

第9話　新たなる決意　P．44

帰る頃には日が落ち掛ける時間帯だった。遠くの方でオレンジ色に焼ける夕日が光っている。

帰り道の途中で佐藤と別れ、健斗は独りどこかぼんやりとした心地でゆっくりと帰り道を自転車で漕いで行く。その気持ちはどことなく清々しさがあった。

竜平がこの町からいなくなるのは来週だと言っていた。急なことだから他の人には挨拶が出来ないかもしれないから、よろしく言っておいて欲しいと健斗は言われた。

来週にはあの店もなくなり、竜平はこの町から去っていく。どうしても寂しい気持ちがあったが、健斗はなるべく前向きに考えることにした。

そうじゃないと今まで支えてくれた竜平に申し訳ない。

そんなことを考えていると、ふと目の前に誰かが歩いているのが見えてきた。その後ろ姿は健斗のよく知っているものだった。

「おーい。」

健斗が笑いながらその後ろ姿に声をかけると、その人はゆっくりと後ろを振り返る。麗奈が健斗を見て笑顔になった。

「健斗くん。」

「今帰りか？」

「うん。今日部活のことで遅くなっちゃった。」

「そっか。そういや言ってたもんな。後ろ乗れよ。」

健斗が自転車の後ろに乗るように促すと、麗奈は嬉しそうに笑顔になって鞄を籠の中に入れて、ゆっくりと後ろの荷台に座る。それを確認すると健斗は再び自転車を家に向けて発進した。

「ごめんな。最近お前ずっとこうやって歩いて帰ってんだよな。」

健斗はテスト期間中麗奈と帰ることがなかった。というのは健斗にも色々なことがあったため、麗奈と時間が合わなかったのだ。麗奈は首を横に振って、目の前で少しずつ沈んでいく夕日を眺めながら言った。

「ううん。この辺の景色見ながら帰るの好きだから、大丈夫だよ。」

「そっか。」

「……竜平さん、どうだった？」

麗奈が気になるようにそう言ってきた。健斗はしばらく黙ってから小さく頷いた。

「うん……喜んでくれた。もう安心だなって。」

「……そっか。」

「俺、改めて分かったんだ。」

「何を？」

麗奈がそう尋ねてくる。健斗は少し間を置いてから、ゆっくりとした口調で呟くように言った。

「俺には……俺は色々な人に支えられてるんだなぁって。」

「……」

「自分は独りだ。誰も自分のことなんて考えてないって思ってた時もあった。でも本当は違う。俺は色んな人に心配されて、色んな人に支えられてる。俺は独りじゃないんだって。」

「……健斗くん。」

「だから……その……何て言えばいいかな……」

健斗は言葉が上手く浮かばなく、言葉を詰まらせた。すると後ろで麗奈が可笑しそうにクスッと笑うのが聞こえた。そして、自分の背中に麗奈が寄り添うようにしてくっつくのが分かった。体を傾けて健斗の背中に寄り添う。そして小さくつぶやくように穏やかな口調で言った。

「……分かってるよ。」

健斗は自分の胸がトクンと一つ高鳴るのを感じた。麗奈もその一人だった。健斗の傍にいて健斗を大きく支えてくれる人。健斗は何だ

か照れくさくなって、それ以上言葉を出そうとはしなかった。

だんだん家が見えてくる。どうやら日が完全に暮れるまでには家に着きそうだった。

「ねぇ、健斗くん。」

「ん？」

「健斗くんも同じだよ？」

「え？」

健斗が後ろを向いて聞き返すと、麗奈は寄り添ったまま顔を健斗の方に向けた。

「健斗くんも支えてもらってるのと同時に、色んな人を支えてるんだよ？」

「……俺が？」

「うん。少なくとも、私は健斗くんにいっぱい支えられてる。」

そう言って、麗奈は健斗から顔を逸らしゆっくりと目を閉じた。

「私がこの町に来た理由を話したときとか、誕生日の日とか……他にも色々。健斗くんのおかげで、私変われたような気がするの。」

「……」

「だから……ねっ？」

麗奈はまた健斗を見てにっこりと微笑んだ。しばらく見つめ合って健斗は小さく笑ってまた前を見た。

「……あぁ。」

しばらく二人何も話さず、家までの道のりを帰っていった。だけど健斗の気持ちはどこか暖かい感覚に包まれている。心地よい沈黙だった。

家に着くときだった。健斗の家の前に誰かが立っていることに気がついて、健斗は目を細めるようにしてそれを見る。

それはヒロだった。ヒロが健斗に気づくと笑って大きく手を振ってくるのが見えた。健斗はゆっくりと自転車のスピードを緩めて、ヒロの目の前で停止した。

「よっ。」

ヒロはにこやかに笑っていた。その表情は何だか迷いがすっかり消え去っていて、健斗と同じように清々しい表情をしている。その表情を見ただけで健斗は大体のことを悟った。

「……上手く行ったんだな。」

「まぁな。」

ヒロは照れくさそうに笑ってそう言った。

「二人とも、ちゃんと分かってくれたよ。俺らの今の気持ち……会いに行って良かった。」

それを聞くだけで充分だった。健斗の気持ちはさらに清々しさを増し、自分は間違ってなかったという確信が強まった。

するとヒロはう～んっと腰を伸ばして欠伸をした。

「そんだけ知らせたかった。じゃあ帰るな。」

「あ、飯食ってく？」

健斗が自分の家を指差してそう言った。すでに母さんが帰っているようで、家の明かりがついている。しかしヒロはゆっくりと首を横に振った。

「いんやぁ、今日はいいや。ちょっと疲れてるし。また今度な。」

「そっ？じゃあ、また明日な。」

「おう。麗奈ちゃんも、また明日な。」

「うん♪バイバーイ。」

ヒロは手を振りながらゆっくりとした足取りで自分の家に帰っていった。健斗と麗奈はその後ろ姿を見えなくなるまでその場に佇んでいた。

そして健斗は自転車をいつものように庭の方へと運んで行く。ゴン

タがいつものように健斗が帰ってきたことに気がつくと、健斗に甘えるように寄り添ってきた。すると着いてきたのはゴンタだけではなく、麗奈もだった。

健斗が自転車をしっかりといつもの場所に置くのを見ながら笑って言ってきた。

「……よかったね？」

「あぁ。本当によかった。」

今はまだ会えないけど、健斗も近い内に二人に会うつもりだった。事が上手く進んでいる。健斗はそれを感じていた。

自転車をいつもの場所に置いて、健斗と麗奈は再び家の戸の方へと向かった。引き戸を開けて、玄関に入った。

「ただいま。」

「ただいま～！」

健斗と麗奈がほとんどハモるようにして言うと、居間の方からエプロン姿の母さんの顔が見えた。

「おかえりー。今日も随分と遅かったわね。」

「うん、まぁね。」

「ご飯作ってるから、先に済ましてちょうだい。」

「はいはい。」

「“はい”は一回っ！」

母さんにそう言われると健斗は眉をピクッと動かして、嫌そうな目で母さんを見た。そのセリフ、ここ最近よく聞くような気がした。というより、何だか元祖からそのセリフを聞くと妙に嫌な気分になる。

麗奈もその事情を察したのか、プッと吹き出してクスクスと口元を押さえて笑っていた。母さんは不思議そうな顔を浮かべて、居間の方へと姿を消していった。

健斗は軽くため息を吐きながら、麗奈と共に階段を上っていった。

「お前のせいで何か変な感じに聞こえたぞ。あのセリフ。」

「そうだね。私も変に聞こえた。」

と言って楽しそうに言ってくる。そして健斗は自分の部屋に、麗奈は麗奈の部屋に戻っていった。

部屋で家着に着替えて階段を下りていく。そしてテレビの音が居間から流れているのを聞きながら、居間を覗くと、そこには父さんがちゃぶ台の前に座っていた。すでに缶ビールを一本、つまみと共にありついているようだった。

父さんは健斗に気がつくと、ビールを口にしながら「よっ。」と言ってきた。

「あれ？今日早いんだね。」

健斗は父さんの隣に座りながらそう言った。

「あぁ。たまにはな。」

「ふ～ん。珍しいね。」

「そうか？っていうか見てみろよ、これ。今どきこんなのが流行ってるんだな。」

と言って父さんがテレビを指差してきた。健斗はそれに従うようにテレビの方に視線を向けた。その番組は年代ごとに流行った物を特集していくバラエティー番組で、今ちょうど現代の流行り物が映っている。

「あぁ。これ？ファッション雑誌の付録についてるやつでしょ？女子高生の間で流行ってるみたい。麗奈もいくつか持ってるよ。」

「へぇ。鞄が付録ってすごい時代になったもんだな。」

「確かにそうかも。」

しかもこういうバッグはブランド物を扱う会社が作っていると聞いた。そのため柄も良いし、なおかつファッション雑誌の金額でそれが手に入ると考えれば、相当安上がりなんじゃないだろうか。

「ブランド物って何が良いか知ってるか？」

父さんがそう尋ねてきて、健斗は最初何を言っているのかよく分からず首を傾げた。

「え……高級感あるとかそういう感じ？」

「違う。ブランド物っていうのは、丈夫で長持ちする上に壊れたらそれを完璧に修理してくれるとこに利点があんだぞ。」

「どういうこと？」

健斗がよく分からないというように、首を傾げると父さんはビールを口に進めながら説明してきた。

「例えばブランド物の時計とかあるだろ？それは他の時計よりずっと丈夫なんだ。」

「それって当たり前じゃない？高いやつは丈夫なもんでしょ？」

「いや、その上に万が一壊れたとしても完璧に修理してくれるんだぞ？それってすごくないか？」

やっぱりどういうことかよく分からなかった。健斗はまた首を傾げて見せた。父さんは小さくため息をついた。

「いいか？例えばそうだな、五万円のブランドの時計を買うのと安くて三千円程度の時計を買うのとじゃ結果的にどっちの方が安く上がると思う？」

「三千円？」

「あのな……結果的に、だって言ってんだろ。壊れやすくて直せない三千円の時計を何度も買うより、丈夫で何度でも直せる五万円の時計の方が一生に渡ったら安上がりになるだろ。」

「あっ！あ、そういうこと？」

健斗は全てを納得したように大きく頷いた。なる程、ブランド物というのにはそういう利点があるのかということが改めて分かった。確かに、三千円の時計を何度も買い直すよりも一生物のものを買った方が結局安く上がるということだ。

「ん？でもさ、何でブランド物のやつは完璧に直せるわけ？」

「それはだな、ブランドを扱っている会社っていうのは全部歴史が深いのは知ってるな？例えばヴィトンとかエルメスとか……」

「ん～……まぁ、なんとなく。」

「そういう会社の本社には昔の部品が保存されているんだ。だから百年前の時計でも本社に持っていけば直せる。部品が揃ってるし、図面だってあるからな。だから一度買えば一生使っていけるんだ。ブランドっていうのはそもそもそういう買い方が正しいんだぞ？」

「へぇ……意外な知識。じゃあその辺の金持ちがブランド物どんどん買うっていうのはめちゃくちゃ金の無駄遣いなんだね。」

父さんはその健斗の言葉に大きく納得をするように頷いて見せた。するとちらっと母さんの方を見た。母さんはキッチンの方で鼻歌を歌いながら料理をしている。どうやら安全確認のようだ。そして健

斗の耳元に顔を近づける。

「だからな……母さん、しょっちゅうブランド物買うだろ？財布とか鞄とか……しかも黙ってこっそり。」

「あ、じゃああれも……やっぱり無駄遣い？」

「そうだよ。父さんが母さんと付き合ってたときに、すっごい高い財布をプレゼントしたんだ。八万ぐらいしたやつ。今ではもう古いから使ってないって言って新しいの買ったみたいだけど……」

健斗はそれを聞いて小さく吹き出した。

「何それ？父さんプレゼントした意味ないじゃん。」

「そもそも金を入れるための物にそこまで金賭けるって矛盾してると思わんか？本当に女の考えてることって――」

「何か言ったぁっ！？」

父さんはギャッと軽く悲鳴を上げて自分の頭を痛そうに押さえた。その後ろに母さんが包丁を持って仁王立ちしている。どうやら包丁の峯の部分で父さんの頭を叩いたらしい。

父さんは痛そうに頭を押さえながらすぐに振り返った。

「おまっ！包丁は危ないだろっ！」

「何なら今度は刃の部分でやってあげましょうか……？」

と母さんは言いながら包丁を父さんに見せつけてきた。刃の部分が光に反射して光っている。父さんは引きつった笑いで首を横に振った。

健斗は冷や汗を垂らしながら逃げるように視線をテレビへと向けていた。今夜母さんに逆らったらマジで殺される……

「大体ねぇっ！あたしはそんなにブランドなんて買ってませんっ！あ～んたの方だって何よっ？この前高そうなスーツ買ってたでしょ？」

「お、俺の方は仕事のためだろっ？サラリーマンたりとも、身嗜みは大切なんだよっ！」

「そんなこと言って全然出世しないくせに。」

「何だとぉっ！」

「何よっ！」

父さんはいきり立って立ち上がって母さんに向かっていった。どうやら男のプライドというものがあるらしい。

また始まった……と健斗はため息を吐いた。母さんと父さんの些細なことからの口喧嘩。どうせ結果は目に見えているのに……母さんには逆らわない方が身のためなのだ。

するとだった。麗奈が家着姿――健斗と同じようにパーカー姿――で居間の方に入ってきた。鼻歌を歌いながら居間に入ると、ギャーギャー騒いでる父さんと母さんを見てギョッと驚いたように目を見

張った。

「な、何これ?どうしたの?」

「いつもと同じ。飯もうちょっとかかるみたいだからとりあえず座っとけよ。」

健斗がそう暢気に言うと麗奈は戸惑いながらゆっくりと健斗の隣に座った。

「オラオラオラァッ!」

「痛いっ!ア〝〜〜ッ!!健斗ぉっ!!助けろっ!!ア〝〜〜っ!!」

いつもの結果。父さんは手が早い母さんのプロレス技にハマり始めた。健斗は興味なさそうに、そして退屈そうに大きく欠伸をしてテレビを眺めていた。麗奈はその様子を可笑しそうに眺める。

しばらく家の中で父さんの悲鳴が響き渡った。

第9話　新たなる決意　P．４４（後書き）

もしかすると久しぶりの山中家の風景かもしれません（笑）

久しぶりに健斗パパが出てきましたねぇ。相変わらず女房の尻にしかれているようです。

このブランドの話は大学のマーケティングの講義の中で先生が少しだけ話していたのを思い出して取り入れてみました。

みなさんもブランド物を買う時は、何度も買い換えるのではなく、一生物を買いましょうね（笑）。

第9話　新たなる決意　P．45

今夜の夕飯は最近の季節に見合った寄せ鍋だった。卓袱台の真ん中にガスコンロが置かれ、その上に土鍋が置かれた。

九月の下旬に入って残暑も過ぎ、例年通り寒い季節が始まってくる。昼間はそこそこまだ暖かく過ごしやすい気温だが、特に早朝と深夜になると身に沁みるほど寒くなっていた。

今日の夜も少しひんやりしていた。健斗は豆腐を摘まんで口に運ぶ。柔らかい食感といっしょに暖かい温もりが体中にじんわり広がっていく。

「そういえば今テスト期間なんだって？」

父さんが食べながら健斗と麗奈にそう言ってきた。健斗はその単語を聞くと思わずギクッとしたが、麗奈は至って普通の反応を示した。

「はい。明日で終わりですけど。」

「どうだ？出来は。」

「ん～……まぁ、いつも通りかなぁ？」

――いつも通りってどんな感じだよ。

健斗は心の中でそう突っ込んでみる。

すると母さんがまるで誇らしいことかのように言ってきた。

「麗奈ちゃんって勉強出来るのよ。この間全国模試あったでしょ？成績すごい良かったわよね？」

「まぁ、そこそこですよ。そんなに自慢出来るほどよくはないです。」

「もう謙遜しちゃって。全国で十位よ？十位。充分すごいわよ。鼻が高いわぁ～。」

と我が子のように母さんは喜ばしくそう言った。麗奈は嬉しそうに、けれどどこか照れくさそうに笑った。

全国十位……この成績には誰もが驚いた。

この全国模試というのは名前の通り、全国の学力水準を測るために行われたもので、実は夏休みに入る前に一度行われていた。

その結果が返ってきたときのはつい最近の出来事で、健斗の順位は……確か万の位だったような気がする。とても誇れるような順位ではなかった。

数学が特に全然ダメで、下から数えた方が早いように思われる順位だった。逆に、英語はそうとう良かった。順位でいうと十五位。何と英語だけは麗奈に勝っていたのである。

自分でもびっくりしたが、これは自分の中の秘密にしている。総合すると決して良い結果ではないからだ。

ちなみにそれから麗奈は頭良いキャラが定着するようになった。学

校側も、全国十位のやつがいると誇らしいものだろう。

だから麗奈が医学部受験というのは大いに納得出来る。麗奈の学力なら全然行けるだろう。

でも麗奈はどこか謙遜するところがあるから、自分に自信がないため、そんなことを人に言うのが恥ずかしいのだろう。

――こんなこと言うの、健斗くんだけなんだからね……

ドキッと胸が高鳴った。麗奈にああいう風に言われると、やはり気恥ずかしいというか、何だかドキドキする……健斗はチラッと麗奈を見ると、麗奈はそんな健斗の視線に気づかず、母さんや父さんと談笑している。

健斗は小さくため息をついた。

「麗奈ちゃんが頭が良いのは、達也と夏奈さんの血筋だな。」

「あら、そんなことないわよ。麗奈ちゃん自身の能力よねぇ？」

「う～ん？どうなんでしょうね？」

健斗はそんな三人を余所に、一人黙々と箸を進めていた。

「で、あんたはどうなの？」

「ほぇっ？」

豆腐を口にしながら健斗は変な声を上げてしまった。母さんが呆れ

るように健斗を見る。

「ちゃんと勉強してんの？」

「し、してるよ。別に、今回はそんな全体的には悪くねーし。」

数学はヤバいかもしれないけど……

「でも健斗くん、剃髪するんでしょ？」

「剃髪っ！？」

母さんが金切り声で驚いたようにそう叫んだ。健斗はうるさいものを聞くように、わざとらしく耳を両手で塞ぐ。

「お前、余計なこと言うなよ。」

「何？あんた出家でもするのっ？」

「アホか。ちげーよ。ヒロと英語のテストで勝負してんだけど……勝てそうにないから。」

健斗が呟くようにそう言うと、母さんは呆れ返るようにして深くため息を吐いた。どうやら言葉も出ないらしい。しかし父さんはどうやら面白そうに笑っていた。

「いいじゃないか。父さん、ずっとお前の髪長いなぁって思ってたんだぞ？」

「まだ決まったわけじゃないけど……でもマジやだなぁ……」

「情けないわねー。もっとちゃんと勉強してればこんなことにはならなかったでしょ？」

健斗はそれを言われて言葉が返せなかった。確かに、英語だけではないが今回のテストは比較的勉強量が足りないかもしれない。

「仕方ないじゃん。俺にだって色々あるんだよ。」

健斗は不機嫌そうに白菜を口に運ぶ。すると母さんが顔をしかめて呆れるように言ってきた。

「何よ色々って。どうせ大したことないんでしょ？」

健斗はそれを言われて黙っていた。大したことない……か……確かにそうかもしれないな、と健斗は少し考えた。

健斗が妙な事を考えなければ、今頃こんなに大変なことにはなってないだろう。リュウタやノブだってもう昔のことなんか何とも思ってないかもしれないのだ。

健斗はふと麗奈がチラチラと見てくるのに気がついた。その目は何かを促しているみたいだった。

――そうか。今ならちょうど良い機会かもしれない。

「……ねぇ母さん。」

「はい？」

母さんが鍋にある白菜や豆腐を取りながら返事をした。健斗のことを全く見ていない。まぁいい。

「……翔のお母さんやお父さんの連絡先って分かる？」

「……えっ？」

健斗の言葉に母さんは驚きの声を上げた。目を見張って健斗の方を見る。父さんも同じように驚いたのか、口にしていたものが喉につっかえてむせていた。正直予想通りの反応だった。

「翔って……あの翔くんよね？」

「それ以外に誰がいんだよ。」

「どうして急に？」

確かに健斗は今まで翔の名前をこの二人の前に出さなかった。それはもう、暗黙の了解というか、タブーの分類に入っていた。忌々しい過去を掘り下げないためにも……その名前を出すのはよそう。それがいつの日か暗黙の了解になっていた。

だがその名前を健斗から口にしてきた。二人にとっては予想だにしなかった意外な出来事だったのだ。

健斗は決まりが悪そうに顔をしかめた。何故を聞かれたら、どうすればいいか……やっぱり全てを話す必要があるらしい。

「俺さ、その……もう一度やろうって思ってるんだよね。」

「もう一度やるって、何？もしかして、サッカー？」

母さんが驚いた様子でそう尋ねてくる。健斗は顔をしかめたまま、小さく頷いて見せた。

「えーっ！何よ急に？どういう心境の変化？あんた、散々サッカーはもうやらないって言ってたじゃない？」

「俺もつい最近までそう思ってたんだけど……」

寛太に言われたときと同じような科白を返した。やっぱり周りの人から見ると、健斗がサッカーをやるということは相当驚きのことなのだろうか。

「お前、本気なのか？」

父さんも真剣な表情で健斗にそう言ってきた。低い声で諭すように言ってくる。その感じは以前……健斗がサッカーを辞めると言ったときと同じ雰囲気だった。

健斗はまた小さく頷いた。健斗の決意はもう揺るがないものとなっている。

「……え、で何？それが翔くんのお母さんたちとどう関係があるの。」

母さんが不思議そうにそう言ってきた。そんなことを言われると、返答に困った。どう関係あるとかそういう問題じゃない。ただ、健斗がこれから前に進むためにはそうしなければならないとどこかで感じていた。

翔の両親は翔が死んだその数週間後に、この神乃崎の町を離れていった。理由はこの町にいることがどうしようもなく耐えきれないからだった。

悲惨な事故で我が子を失った、その両親の悲しみは健斗よりも深いのかもしれない。いや、どっちにしろ健斗の身代わりとなって命を落とした翔。言い換えれば、健斗が翔の家族の崩壊の一因でもある。

それを考えると胸が痛む。翔を亡くしたことでサッカーを辞めてしまったなら、またサッカーを始めるためにはちゃんとそのことを翔の母親と父親に告げたいと思ったのだ。

だが、そんなことを母さんや父さんに話しても理解をしてくれないと思う。自分だって、もしかしたら妙な使命感に酔っているだけかもしれないからだ。

「何でもなにもないよ。会いたいって思ったから会いに行くだけ。連絡先とか知ってるでしょ？」

母さんはきょとんとして、少し困ったように言った。

「そりゃ知ってるは知ってるけど。何、会いに行くわけ？」

「うん。」

「いつ？」

「……出来れば今週の土曜日。」

健斗は少し苛立ちを感じながらぶっきらぼうにそう言った。それを聞いた母さんは唸るように考え始めた。

「……本当に急よね。相当遠いわよ？」

「電車で行けるかな？」

「行けるは行けるけど。相当時間かかるわね。」

時間がかかるなんてどうでも良い。とにかく行くとしたら土曜日だった。土曜日なら、ある程度の社会人も休みである確率は高い。翔の母親は確か専業主婦で、父親は父さんと同じ会社員だった。

今はどうかは知らないけど……でも少しでもいいから会ってくれないだろうか？

「まぁ、いいじゃないか。」

そんなことを考えていると、父さんがいつもの調子に戻ってそう言ってきた。一斉に父さんの方を見ると、父さんはほんのり顔が赤かったが、はきはきした口調で言った。

「健斗がサッカーをやるって言ってるんだ。そして櫻井（さくらい）さんに会って、自分の思いを告げようとしてる。立派なことじゃないか。」

「なっ？」と言いながら父さんは健斗を見て微笑みかけてくる。健斗は少し驚いた気持ちで父さんを見つめ返した。どうやら父さんは健斗の気持ちを理解しているみたいだ。健斗が何故、翔の両親に会おうとしているのかその根底にある気持ちをなんとなく分かってくれているようだった。

健斗はゆっくりと顔を上げて父さんを見た。

「ようやく前に進む決意が出来たんだな？」

健斗の目を真っ直ぐ見つめたまま、父さんは健斗に真剣な目つきでそう言った。健斗はしばらく間を置いてからゆっくりと力強く頷いて見せた。すると父さんはふっと表情を緩めた。

「そうか。それじゃあ思いっ切りやれ。今度は迷わず、お前の全部をかけてサッカーをやれ。そしたら父さんも母さんも、全力でお前を支えるから。」

健斗は言葉が出なかった。父さんの気持ちが嬉しくて感激していたのだ。ふと、この刹那に健斗は幼い頃の記憶を思い出していた。

サッカーを初めてやるきっかけを作ってくれたのは、父さんだった。サッカーに興味が惹かれ始めている幼い健斗に、初心者のためのサッカーマニュアル本を買ってきてくれた。

サッカーを何も知らない父さんもそれを読んで勉強して、健斗の練習に遅くまで付き合ってくれた。

サッカーを辞めると言ったとき、実は一番悲しそうにしたのは父さんだということを健斗は知っていた。止めはしなかった。しかし健斗が自分の部屋に戻るとき、父さんは健斗の背中に向けて一言だけ言ったことを覚えてる。

『本当に……それでいいんだな。』

やけに弱々しい口調で健斗に言ってきた。そしてその表情を見ると心の底から残念がっていることも分かっていた。

そしてその父さんが今、改めて再スタートを切ろうとしている健斗を全力で応援すると言ってくれている。その心強さに健斗は大きな安心感を抱いた。自分は迷っている暇はない。自分のやろうとしていることに自信を持たなければならないのだ。

「……サンキュ、父さん……」

健斗は照れくさうに笑ってそう呟いた。するとその様子を見ていた母さんがため息をついて、そして表情を緩めた。

「まっ、確かにそうね。健康的になるだけマシね。」

母さんもそう言って認めてくれた。やっぱり話しておいて良かった、と健斗は感じていた。

「そうだ。どうせなら車で連れて行ってやろうか？俺たちもたまには櫻井さんに顔を見せんとな。」

父さんと母さんも長い間翔の両親に会っていないらしい。健斗が幼い頃から付き合いのある同士だ。その絆は翔が死んでいたって切れることはない。

そういうことで話はまとまった。母さんは明日にでも翔の両親に電話を入れるらしい。後は母さんたちに任せる方が得策だった。

夕飯を済ませて、健斗は自分の部屋に戻ろうとして居間を後にして階段を上っていった。するとだった。後ろから麗奈がついてくるのが分かった。

「良かったね？お父さんたち分かってくれて。」

「うん。話しておいて正解だった。翔の両親にも会えるしな。」

階段を上りきって、健斗は自分の部屋に入ろうとしたところでゆっくり振り返った。

「……お前も来る？土曜日。」

「え？」

健斗がそう聞くと麗奈は立ち止まって健斗を見つめた。何となく麗奈も連れて行った方がいいとそう感じて、提案してみた。だが麗奈は苦笑を浮かべただけだった。

「行きたいけど……ごめんね？私その日お昼から部活あるから。」

「あ、そっか。なら、いいや。」

別に強制してるわけではない。何となく麗奈も連れて行って翔の両親に紹介しとこうか考えただけだった。それに麗奈には……全てを知っておいて欲しいという気持ちもあった。

――あとで泣かれたら困るからな……

でも部活なら仕方ない。健斗はもう用はないというように部屋の中に入ろうとする。

「……ねぇ。」

後ろからまた声をかけられて健斗はゆっくりと振り返った。

「ん？」

「……私に、何か手伝えることない？」

「え……」

麗奈はちょっと健斗の部屋に入ってきて真剣な表情でそう言った。

「何でもいいの。少しでも健斗くんの役に立ちたくって……何か私に出来ることないかな？」

健斗は真剣な眼差しで見てくる麗奈を見つめてふっと表情を緩めた。その気持ちで十分だった。自分のために必死になろうとしていることに健斗は嬉しさを感じた。

「大丈夫だよ。何も心配すんな。ちゃんと何をやるつもりなのかは教えるからさ……」

「……でも……」

そのときだった。健斗はそう言ってからあることを思い出した。そうだ。麗奈に手伝ってもらうことが一つあった。

健斗はしばらく考えた。時間的なことを考えると、麗奈に任せた方が効率がいいかもしれない。

「じゃあさ、一つだけお願いしてもいいか？」

健斗がそう訊くと、麗奈は目に力を込めて大きく頷いた。健斗はそんな麗奈を見て、可笑しそうに小さく笑って見せた。

第9話　新たなる決意　P．46

そして次の日になった。ようやくテスト週間も終えて、いつも通りの日々に戻る。だが、健斗はそんな余韻に浸っているときではなかった。

健斗はヒロと共に学校の屋上にいた。柵に寄りかかるようにして、そこから見える景色を眺めていた。今日も相変わらずの良い天気だったが、昨日と比べると風が少し冷たかった。だがそんなに苦しいほどではない。

その景色からグラウンドを眺めることが出来た。今日でテスト週間も終わりなため、学校中の部活が再始動をする。サッカー部もそのうちの一つで、グラウンドの真ん中に集まっているのが見える。

その反面には野球部がいて、声を出しながらキャッチボールをしている。

少し懐かしい風景だった。中学の頃、サッカー部の隣であんな風に野球部がキャッチボールをしたりノック練をしたりしていて、健斗たちサッカー部は基礎練に加えて、パスの練習やシュートの練習……一日の練習の終わりにはゴールを設置して、3チームから4チームに分けてミニゲームをした。

そんなことを思い出しながら、健斗は昨日のことをヒロに話した。ヒロからも昨日佐久と琢磨に会い、どんな話をしたかを隈無く話してくれた。

「……そっか。もうおばさんとおじさんに言ったんだな。」

ヒロも同じようにグラウンドを眺めながらそう言った。

「あぁ。早めに言っておいて良かったよ。母さんのおかげで翔の両親に会えることになったしな。」

「……」

「お前も行くだろ？翔のおばさんとおじさんに会いに……」

ヒロは頷かなかったが、その沈黙は了承の意味を込めていた。　健斗はそれ以上何も言わず小さくため息を吐いた。もう少しで全てをやり切ることが出来る。いや、これから始まるのだ。

「……琢磨たちさ……」

「うん？」

ヒロが呟くように言った。健斗はヒロの方を見ずに、しかし意識はヒロの方へはっきり向けていた。

「琢磨たちさ、最初は何か今更みたいな感じだったんだ。」

「……そりゃそうだろな。」

「お前もそれが分かってたんだろ？」

ヒロにそう訊かれて健斗は躊躇わずに小さく頷いた。そのとおりだ。だから健斗は迷っていた。

昔のことをそんな風に掘り返してもいいのだろうか？と健斗は疑問を抱いていたのだ。

ノブとリュウタも、佐久や琢磨も……もう健斗の知らない所で健斗の知らない生活を送っている。みんなそれぞれ未来に向けて、そして現在のために新しい生活を送っているのだ。

未だに先を踏み出せていない、過去に囚われてるのは健斗だけなのだ。そんな健斗が新たな生活を送っている人たちの邪魔をするようなことをしていいのか、と健斗は考えあぐねていたのだ。

現に佐久と琢磨は今はもうサッカー部に入っていないという。佐久は子供の頃から趣味だった囲碁を本格的にやるため囲碁部に所属し、琢磨は新たに興味を抱いていたバドミントン部に入っているらしい。なのに今更……健斗たちの都合で昔のことを持ち上げるなんて、相手を困らせるだけだと思ったのだ。

それは今回のことだってある。翔の両親も新たな生活を始めているのだ。二年半前の悲劇を思い返すようなことをしてしまって、本当にそれでいいのか健斗には分からなかった。だが父さんは迷うなと言った。

そして麗奈も言ってくれた。もう迷わないで欲しいと……

だからもう迷わない。自分の気の思うまま、とことんやろうと決めたのだ。

居心地のいい風が健斗の前髪を靡く。健斗は鬱陶しそうに前髪を横にかき分けた。

「でもさ、ちゃんと聞いたんだ。本当の気持ち……そしたら、やっぱり自分勝手だって言われてさ。」

「分かってるよ。」

「それを言われるために行ったようなもんなのにさ、はっきりそう言われたら正直……ちょっとゾクッとした。」

「……うん。」

「……きっとノブやリュウタにも同じようなこと言われるんだろうな。」

健斗はそれを聞いて少しの間黙り込んだ。佐久や琢磨には「今更」という気持ちがある分、健斗とヒロに対して許しを与えてくれた。しかし今でもサッカーに携わるノブやリュウタはなんて言うんだろう。

健斗はそれを考えると少し気が引けたが、そんな思いを振り払うかのように言った。

「仕方ないよ。そうなるって覚悟しとかなきゃ。例え許されることがなくっても、やるべきことはきちんとやる。そう決めたんだから……」

「……お前、何か変わったな?」

「え?」

ヒロが健斗に視線を向けてそう言った。再び風が吹いて、健斗は目を細めてヒロを見つめた。

「いや……何か昔に戻ったって感じ。この間までお前色んなことを投げやりにしてたじゃん？」

「そ、そうかな？」

「そうだよ。少なくとも、これまでサッカーをやろうなんて言わなかっただろ。毎日退屈そうにしててさ、それでもいいって感じだったじゃん。」

「また遠回しに言う……何が言いたいんだよ。」

健斗は高鳴る胸に気づきながらヒロにそう言った。するとヒロはニヤリと小さく悪戯気に笑った。

「気づいてるくせに。」

「……何をだよ。」

「隠すなよ。俺が一番驚いたのは、お前が全部を麗奈ちゃんに話すって言ったときだった。」

健斗は図星をつかれたような心地で決まり悪さを感じ慌ててヒロから目をそらした。

「今までのお前だったら、絶対そういうこと人に言うやつじゃなかっただろ？珍しいことするなーって思ったさ。」

ヒロの言う通りだった。今までの健斗だったら、こういうこと……特に昔の自分に関わるようなことは他人に言うような真似はしなかった。

別に話を聞いてもらってどうこうしてもらおうと思わないからでもあるし、中途半端に物を言って中途半端なことを言われるのが健斗はたまらなく嫌だったからだ。

自分のことは自分で解決する。他人なんかいらない。それが健斗のポリシーというか、今まで他人を頼るようなことをしてこなかった。

だが麗奈は違う。具体的に何が違うのか分からないが……

「……麗奈に言われたんだよ。」

健斗は呟くようにそう言った。多分今自分の顔は赤いんだろうと自覚しながら続けて言った。

「“私は健斗くんの……何なの？”って、そう言われたんだ。」

「へぇ……」

ヒロは何も言わなかった。黙って景色を眺めて、健斗の言葉に耳を傾けていた。

「お前も言ったじゃん？麗奈の誕生日の日さ……麗奈の気持ち、そろそろ真剣に考えろって。」

「……あぁ、言ったな。」

ヒロも呟くようにそう言った。健斗は気持ちを静かに落ち着かせて、目を閉じた。

「……それからずっと考えてたよ。麗奈の気持ち……麗奈は俺にとって、どういうやつなのか……」

今でもはっきりと思い出すことが出来る。麗奈がこの町にやってきた日のこと……麗奈がこの町にやってくる一週間前に父さんと母さんからそう話を聞かされ、有り得ないくらいに驚いた上に激しい嫌悪感に見舞われた。

そしてそんな健斗の気持ちなんて全く関係なしに、麗奈はこの町に、そして健斗の家にやってきた。

最初の第一印象は最悪だった。

妙に馴れ馴れしく、人のことを小馬鹿にしてくる。かと言ってかなり魅力的でそれを逆に健斗をさらにイライラさせた。

人の話は聞かない、自分勝手、その上に文句は多いし、自分を可愛いと思って調子に乗っている。周りに甘えれば自分を助けてくれると思い込んでいる……本当に健斗が一番嫌いとする女の典型的なやつだと思った。

だが決定的にそんなイメージが変わったのはやはりあのときだった。健斗が毎朝麗奈を自転車に乗せて学校に行かなければならない。そんなことに健斗は常に文句を言うようになった。

すると麗奈を怒らせてしまった……かと思えば、麗奈は健斗の考えてたことと全く違った行動を取り始めた。

誰にも言わず、ボロボロになりながらも苦手な自転車を懸命になって練習する麗奈を見て、健斗は驚きと共に大きな視点の変化を見いだした。麗奈は健斗の考えてるようなやつじゃないということが分かったのだ。

本当は思慮深く、負けん気と根性も備わっていた。

それから時を経て、麗奈と大喧嘩をしてしまったときがあった。……キス事件だ。突然されたキスを、女の子と初めてしたキスをあんな形でしてしまうとは誰が予想しただろう。

それと同時に激しい怒りを麗奈に抱いた。やっぱり誰にでもこういうことをするようなやつなのかと、健斗は落胆と共に麗奈に対して激しい怒りを覚え、関わりを完全に絶とうとした……

しかしそれは出来なかった。時間が経つにつれ、麗奈のことが気になりだしている自分がいた。最終的にはキスされたことなんてどうでもよくなっていた。

そしてその夜、麗奈に少しだけ自分の過去のことを話した。どうしてか自分でも分からなかった。麗奈と喧嘩している間、翔のことをずっと思い出していたのだ。

そしてそれを話したとき麗奈は健斗に言ってくれた。過去に戻りたいなんて言うな、と。

その言葉が健斗にとってどれだけ嬉しかったのか、おそらく麗奈は知らない。でもその日から麗奈は健斗の中で少しずつ大きな存在へとなりつつあったのだ。

松本事件のときも麗奈は自分を支えてくれた。どうすればいいのか分からない。サッカーをやることに怯えを感じていた。こんなに苦しいことに何故立ち向かわなければならないのか……？だが麗奈は諭すように健斗に言った。

変わるために必要なのは、勇気……だと。その言葉のおかげで健斗はほんの少しだけ変わるための一歩を踏み出すことが出来たのだ。

そして夏祭りの日、花火を見るためにみんなが待つ場所へ向かっていた。そんなとき麗奈が健斗の背中を掴んで消えるような声で言ってきた。

――健斗くんのことが……好きだよ……？

好きという言葉が信じられなかった。こんな自分を好きになってくれる人がいるなんて思いもしなかった。しかしそのことに動揺を感じた。

麗奈は家族なのだ……それ以上でもなければそれ以下でもない。

でも麗奈は健斗を今のように心の底から思ってくれている。そのことに居心地良さを感じたのも、また事実だった。

そしてそれから夏休みに入り、あの帰省事件が起こった。初めて知った麗奈の苦悩と事情。あの元気のいい笑顔の裏に秘めていた、悲しい過去……それを話してくれなかった麗奈、そして何よりも今までそれに気づけなかった自分に激しい怒りを覚えた。

それと同時にある思いが生まれた。

麗奈の笑顔を守りたい……守ってやりたいと、そう思ったのだ。

それから色んなことがあった。目を閉じれば全てを思い出せる。

楽しかったこと、嬉しかったこと、悲しかったこと、辛いこと……その全てに、健斗の一番近くにいて支えてくれていたのは麗奈だった。麗奈は健斗にとって、何よりもかけがえのない存在へとなっていた。

健斗はゆっくりと目を開けた。そして目の前の景色を見ながら呟くように言った。

「麗奈は……いつも俺を助けてくれた。今だってそうだ……挫けそうになったときや、辛いって思ったとき……そんなときはいつもあいつが傍にいて、支えてくれて……」

麗奈の笑顔があったから今まで来れた。麗奈がこの町に来てくれたから、健斗は変わることが出来た。

「俺はいつの間にか……本当にいつの間にか……あいつが誰よりも、何よりも大切だって思うようになってた。だからあいつに全部話したい。あいつに知って欲しいってそう思ったんだ。」

「……そっか。」

ヒロはゆっくりと頷いた。ヒロはきっとすでに、いやもっと前から

……健斗の本当の気持ちに気づいていたのかもしれない。健斗は景色を眺めながら、遠い地平線に向けて言うように言った。

「多分俺は……俺は麗奈のこと……好きなんだと思う。誰よりも、一番麗奈のことが……好きだ。」

健斗がそう言うと、また風が吹いた。健斗はまた目を細めて地平線の彼方を見つめた。目の前に大きな野鳥が飛んでいる。

その野鳥は翼を羽ばたかせ、青い空へと消えて行った。健斗は何故かそれを目で追っていた。

第9話　新たなる決意　P．４６（後書き）

健斗の気持ちはいつの間にか、麗奈の方へと向いていたようです。

実は今回のお話、「新たなる決意」というのはこういう意味も含んでいました。

新たな麗奈への気持ちをはっきりさせる。今回そういう伏線も張らせていただきました。

ずっと麗奈は健斗のことを思い続け、健斗の苦悩をいっしょになって考え、健斗を支えてきました。

健斗もそのことに気づき、麗奈に対して徐々に、着実に気持ちが傾いていたのです。

さて、では皆さんが恐らく疑問に思ったのは当然結衣のことだと思います。ですがここではまだその内容がどうなるのかは言えません。

新年を迎えると同時に健斗の気持ちもすっきりさせたいなぁと思って、今回のお話でようやくカミングアウトさせていただきました。

以前健斗と結衣にくっついて欲しいという感想やメッセージをいただいたのですが、結衣派の人ごめんなさい！

でもこれから健斗と麗奈の関係がどう変わっていくのか、ぜひ着目して読んでいって欲しいと思います。もちろん、結衣のことも。

では続きをお楽しみください。

健斗がそう言い、チラッとヒロを見た。するとだった。ヒロは健斗に視線を向けてかなり引いた表情で健斗を見ていた。健斗はそんな表情にぎょっとなって驚き、自分が言っていることが急激に恥ずかしいように思えた。

「え……お前急に何告ってんだよ？鳥？鳥に告ってんのかぁ？」

ヒロが茶化すような言い方で健斗にそう言ってきた。健斗は急激に恥ずかしくなり、不愉快と共にヒロから慌てて目をそらした。

「う……うっさいっ！お前がそんな風に言うからっ！」

本当に自分は何を言っているのだろう。と健斗は自分を戒めるように心の中でそう言った。つい、自分の今の本当の気持ちが出てしまった。

自分でも本当に最近気がついたことだったのだ。それは縁側で麗奈と将来のこととかを話した日に、健斗は麗奈のことが好きだという気持ちに気づいたのだ。

――好きになってもらえるように頑張るからっ……

その言葉が現実のものとなってしまった。そう自嘲気味に健斗は小さく笑った。

「……あー、今麗奈ちゃんのこと考えてるだろ？」

「はぁっ？」

ヒロが茶化すようにまたそう言ってきた。いつものようなおどけた口調で健斗を見て小さく笑ってくる。

「顔がにやけてるぜ。分かりやすいやつだなぁっ？」

「お前っ……もういいっ！」

茶化すように言ってくるヒロに憤りを感じながら、健斗はその場を立ち去ろうとした。だがそれを慌てて制してきたのはヒロで、健斗の腕を掴んできた。

「だぁ～っ！分かった分かった。俺が悪かったってぇっ！」

「……」

健斗は振り返ってヒロを睨みつけるようにして見た。ヒロは苦笑いを浮かべながら反省するような表情を浮かべている。

分かったならいい。健斗はゆっくりと振り返ってまた元の位置に戻った。

「……翔の墓参りに行った日さ……」

「え？」

ヒロが突然また真剣な表情で健斗にそう言ってきた。健斗はそれを聞いて思わず聞き返し、ヒロの言葉に耳を傾けた。

「この間翔の墓参りに行ったとき、俺訊いただろ？早川のこと、本

当に好きなのかって。」

「あ……」

健斗はそれを言われてその時の記憶が頭の中に浮かぶのが分かった。確かにヒロにそう言われた。

本当に久しぶりの翔の墓参りの日、ヒロは翔の墓石を見つめながら健斗に言ってきたのだ。

健斗が早川に対して恋心を抱いている。それはもしかしたら、翔に対する罪悪感のようなものから生まれた思いなんじゃないのかって。

「あの時から俺、薄々気づいてた。お前は麗奈ちゃんに惹かれ始めてるんだってこと。」

「……」

そうだったのかもしれない。あのときはまだ麗奈に対してそういう気持ちを抱いてはなかった。だがヒロはその奥底に秘めていた健斗の気持ちに気づいていたのだ。だからあんな言い方をしてきた。

「普通ありえないだろ？見ず知らずの人が突然自分の家に来て、いっしょに暮らす。俺だったら、お前みたいにすぐに受け入れるのは難しいと思うし……誰だってそうだよ？普通だったらな。でもお前は違った。」

健斗は何も言えず、少し黙り込んでいた。そのとおりだ。どうして自分はあんなに警戒心を抱いて麗奈を、いつの間にか受け入れるようになっていたのだろう。もし麗奈じゃなくって、他の人だったら

どうなのだろう。健斗はそんなことを考えていた。

「それはきっと、お前が麗奈ちゃんに惹かれ始めてるからだって俺は確信した。だから訊いたんだよ。本当に早川のことが好きなのかって……」

「……」

「実際のところ、どうだったんだ？」

その気持ちは健斗にしか分からない。だからヒロはそれを聞いてきたのだ。健斗はしばらく黙り込んで、またヒロから視線を外して遠い景色を見つめた。

早川……早川は今でももしかしたら翔のことを引きずっているのかもしれない。それなのに、健気に笑って明るく振る舞う。今でもそうだ。

それなのに早川は翔の葬式の日、早川だけが健斗に優しい言葉をかけてくれた。自分だって辛いのに、それを押し殺して健斗を心配してくれた。その優しさに惹かれた。

でも分からないのが一つ……健斗は翔に対する罪悪感から、早川を守りたいという勝手な使命感に酔いしれていたのではないか、という疑問があった。それはヒロにも言われたことで普通ならそんなわけがないと否定しなければならなかった。

だけど出来なかった。何故？自分でも分からなかったからだ。絶対そんなことはないと言い切ることが出来なかった。それくらい翔に対する罪悪感は確かに健斗の中で渦巻いていたし、かと言って早川

に対するあのドキドキ感も間違いなかった。

松本事件の後早川と二人きりで帰った日のことや、夏祭りで早川と楽しげに話したこと、そして何より夏休み中に早川とデートをしたときも……あのときの気持ちは間違いなく、早川のことが好きだから……楽しくてドキドキとした気持ちを感じていた。

早川を思わず抱きしめてしまったときの温もりは今でも覚えている。だから……

「そう言われるとあれだけど……でも俺はやっぱり早川が好きだったよ。」

「……そっか。」

「うん。それが翔に対する罪悪感もあったのかもしれない。でもそれ以上に、俺は早川自体を好きになってたんだ。早川っていう人間を好きになってた。」

ヒロは何も言わなかった。でも健斗は間違いなくそれは言えた。確かにヒロの言うとおり、翔に対する罪悪感から生まれた部分もあるかもしれないが……でもそれ以上に健斗は早川という人間を好きになったのだ。

「でもな、今は違うんだ。」

「麗奈ちゃんがいるからだろ?」

ヒロは健斗の気持ちを推し量るようにしてそう言ってきた。健斗は躊躇わずにゆっくり頷いた。

「いつの間にか俺の中で早川よりも、麗奈の方が大事になってた。麗奈のことが好きになってたんだ。いつからか分からないけど……」

早川のことは確かに好きだった。でも今はそれ以上に、麗奈に対する気持ちの方が強い。それはやっぱり、麗奈がいつの時でも健斗の傍にいてくれたから。健斗を励まし、勇気づけてくれる大切な存在だから。

健斗はそんなことを考えながら、ふと自嘲気味に笑ってヒロを見た。

「……やっぱり俺って、節操なしなのかなぁ。好きな人がいたくせに、他の人を好きになるなんて。」

そう捉えられても可笑しくはなかった。周りの人から見ればそういう風に見えるだろ。健斗がその結果に至るまでのプロセスに関係なく、気持ちをコロッと変えた自分はどこかそのように思えた。

するとヒロは小さく笑って首を横に振った。

「いや、そんなことねぇよ。人の気持ちなんてそんなもんだろ?季節が移り変わるように、人の気持ちもまた移り変わる。それだったら、みんながみんな節操なしだよ。」

どこかの和歌修辞の評論家の言いそうな表現だった。

「俺はただ、お前は早川に対して何らかの罪悪感を持ってるのかって思ってた。それだったら最低だし、許せねーって思ったけど……そうじゃないんなら、俺はそれでいいと思うよ。」

「そっか……そうだよな。」

一々迷う必要はない。人の気持ちの推移は激しいもの。季節が春から夏、夏から秋、秋から冬へと変わるように人の気持ちも変化を富んでいくものだ。

以前は早川のことが好きだった。

でも今は麗奈のことが好きだ。

それでいいじゃないか。それでいいのだ。

ヒロはそう言うと可笑しそうに声を立てて笑った。

「いや～っ、でも俺の言った通りだったなぁ。お前の恋愛ってこれからどんどん面白くなりそうだな。一体どうなるんでしょうねぇ～？」

「人の気持ちを暇つぶしみたいな感じで言うなよ……それに人のこと言えねーだろ？」

「……どういう意味？」

「佐藤のことだよ。」

健斗がその名前を出すと、ヒロの表情はまた固まった。健斗はニヤリと笑って、攻守逆転だなと思った。

「大好きな佐藤とこのままでいいのかなぁ～？」

「だ、だから俺は別にあんなやつのこと何とも思ってねぇよ。」

「お前はそうだとしても、あっちはどうなんだろうな？」

「はぁっ？ちょ、ちょっと待て！お前それってどういう意味？あいつと何か話したの？」

「何度も言ってるだろ。」

「聞いてねぇよっ！詳しく聞かせろっ！」

ヒロが健斗に飛びかかろうとしたそのときだった。

屋上のドアが音を立てて開いた。突然のことに健斗とヒロは驚いてドアの方を見る。それを見て、健斗は瞬時に顔が凍りついた。

「え……？」

「あ……」

健斗とヒロは声にならない声を上げた。屋上に来たのは健斗たちと大きく関わりのある人物だった。

柔らかな髪が風に靡いて、鋭い目つきで健斗たちを見つめている。ポケットに手を入れながら、健斗たちへゆっくり歩み寄ってきた。

松本絢斗だった。

健斗たちに近づいて、二、三メートル距離を置いたところで足を止めた。

「……久しぶりだな、山中。」

落ち着いた口調で松本はそう言ってきた。健斗は頷くことも出来ずただ呆然としていた。

第9話　新たなる決意　P．48

「松本さん……？」

健斗は小さな消える声で松本にそう言った。松本は名前を呼ばれて小さく笑みを浮かべた。その表情を以前のような冷徹な微笑みではなく、穏やかで人間味のあるものだった。

以前会ったときよりも髪が伸びていて、なんとなく全体の雰囲気が変わっている。雰囲気が変わったのは髪のせいだけじゃない。上手くは言えないが、全体的に纏っている雰囲気が変わったのだ。

「久しぶりだな……山中。」

「……どうも。」

健斗は小さく会釈をした。雰囲気が変わったとはいえ、警戒心を緩めることは出来なかった。

健斗の腹に違和感を感じた。ゆっくりとさすって見せる。あの日、松本とその仲間に暴行を受けたことが今でも忘れられない。それにサッカー勝負のときの瞬間も健斗は鮮明に思い出していた。

何故松本がここにやって来たのだろうか？偶然じゃない。明らかに、はっきりとした意図を持ってこの場所にやってきたのだ。

松本はゆっくりと健斗との距離を縮めた。

「少し話したいことがあるんだ……色々と。ちょっといいか？」

穏やかな口調で健斗にそう言ってきた。話したいこと……？健斗は何となくその内容が予測できたため小さく頷いて見せた。

すると松本は健斗の横に来て、健斗と同じように柵に寄りかかった。ドキッとして健斗は松本を見上げる。思ったよりも近い距離で話すんだなと健斗は警戒心を持ちつつ松本を見ていた。

「……まず、最初に言っておきたいことがある。」

「……何ですか？」

「あのときは……すまなかった。」

健斗は驚きのあまりに声を出せず、思わずヒロの方を見た。ヒロも同じように驚いた顔をしていた。まさかあの松本が健斗たちに対して謝ってくるなんて思わなかったのである。

松本は景色に視線を向けたまま、さらに続けて言った。

「お前には色々と酷いことをした。酷いことを言った。今なら分かる……自分がどれだけ周りの人を苦しめてきたかを……本当に悪かった。」

そう言って、松本は健斗たちに体を向けて深々と頭を下げてきた。突然のことに健斗はどうしていいか分からず、松本の後ろ頭を見つめていた。するとヒロが健斗の背中をつついてきた。ちゃんと対処しろ、と健斗に促しているようだった。

「あ……あの、いえ。元はと言えば、俺が松本さんに生意気なこと言ったからで……だから……その、顔上げてください。」

すると松本はゆっくりと頭を上げて健斗を見つめた。何か裏で考えていることがあるのだろうか？以前の松本とは驚くほどに違っていた。

以前の傲慢さは消え、穏やかで誠実な態度を取っている。健斗はそんな変化にどうしていいか分からず、言葉が出なかった。すると松本は健斗からその後ろのヒロへと視線を向けた。

「お前も悪かったな。殴ったりして……えっと……名前は……」

「あ、真中です。」

ヒロはゆっくりと頭を下げながら、　自分の名前を言った。すると松本はふっと表情を緩めた。

「そっか。真中……悪かったな……」

「あ、いえ……もう全然。」

ヒロはおどけた態度で小さく笑みを浮かべながら軽く頭を下げた。本当のところ、ヒロ自身もこの変化にどう対応すればいいのか分からないのだろう。

「あの……話したいことって、それのことですか？」

健斗は松本にゆっくりとした口調で尋ねてみた。もしそれが本題なら、一体何故このタイミングで、何故今頃、という疑問が拭えなか

ったが、どうやら違ったらしい。

「いや、本題はもっと別のことなんだ。」

松本はそう言うと健斗たちから視線を逸らして再び景色を眺め始めた。

その視線の先にはサッカー部が写っている。やっぱりその話か、と健斗は思った。

「……野村（のむら）から聞いただろ。サッカー部廃部の話。」

健斗は松本にそう言われてゆっくりと頷いて見せた。すると松本はさらに続けて言った。

「その原因も……」

「一応……本人の口からじゃなくって、自分でそうかなって思ってて……」

松本はゆっくりと健斗に視線を向けて悲しそうな表情を浮かべた。

「そうだ。サッカー部の廃部の話が持ち上がったのは、俺の責任なんだ。」

そんな風に言う松本の口調はやけに寂しげに、そして悲しそうだった。後悔と罪悪感に苛まれている。この間の健斗と同じだった。

「俺が部長として身勝手なことをしたばかりに……あいつらにも迷惑をかけてしまっている。俺のせいで……」

「……」

「俺はその話を聞いて、すぐに校長室に行った。サッカー部の廃部の件を考え直して欲しいと……たが……」

結果は軽くあしらわれたらしい。校長は松本の話を全く聞かず、決定事項だからと念を押されたらしい。健斗はそのことに対して風の噂で聞いたことなのだが、どうやら理事会の息がかかっているというのだ。つまりもう決定事項。

サッカー部は次の練習試合に勝たなければ廃部。その条件は絶対的だった。

そればかりか、松本は校長に余計な真似をするなと脅されたという。来年受験を控えている身の上、松本は大学の推薦も関わっている。下手な真似をするなと言われた、と言った。

健斗はそのことにある種の腹立たしさを感じていた。穢れているとそう思った。

「もう俺にはどうすることも出来ない。俺にはもう……力がないんだ。」

酷く弱り切った消えるような口調でそう呟いた。健斗はそんな松本をただ黙って見つめることしか出来なかった。

歯がゆさを感じている。そして同様に己の無力を噛み締めていた。自分の責任でサッカー部を廃部の危機にさらし、その上自分はどうすることも出来ないと嘆いていた。

「……そんなとき、野村と色々話をした。そしたら、野村はお前たちの名前を上げてきたんだ。」

「のんちゃんが……」

「あぁ。お前たちなら何とかしてくれるかもしれない。自分が頼んでみる。あいつはそう言ってた。」

そうしてのんちゃんは言った通り、健斗たちの元を訪れた。だがそのときの健斗はまだ迷いがあったため、その頼みを受け入れることが出来なかった。そして今に至るわけだ。

「野村はお前たちに断られて……もう仕方ないってそう言ってたよ。」

松本は再び視線をグラウンドの方に向けた。サッカー部はいつもの通り、基礎練習に入っていた。そして悔しそうに下唇を噛み締めながら言ってきた。

「あいつらはもう、日に日に迫る最後の日を覚悟しながら練習している。あんなに活気に満ち溢れていたのに……今ではもう見る影もない。それが悔しくってたまらないんだ。」

確かに今のサッカー部は覇気がなかった。練習風景を見ていても声を出している者が一人もいない。野球部の声しか聞こえない。その風景はどこか神乃中サッカー部と同じだった。

あぁ……そうか。この人は俺と同じなんだな。

健斗はそう心の中で呟いた。

「俺にはもうどうすることも出来ない。だから、お前たちに頼みたいんだ。」

松本は真剣な表情で健斗たちを見た。健斗は何も言わずにその視線を真っ直ぐ受け止めた。松本の目に光る物が見えた。

「……お前たちに……後を任せたい。」

その言葉が健斗の胸の中に響いた。色々な思いが健斗の胸の中に巻き起こっていた。決意がさらに固まっていくような感覚だった。

健斗は真っ直ぐ見つめてくる松本を見つめ返して、それからふっと表情を緩めた。

「……分かってます。俺らに任せてください。」

「山中……」

健斗は自信に満ちた表情、そして自信に満ちた口調ではっきりと言った。健斗は松本の真っ直ぐな気持ちを素直に受け止めることが出来たのだ。

「俺たちが何とかします。ここのサッカー部は廃部にさせない。もう二度と……同じことを繰り返したくないんです。だから……」

健斗はそう言い切って口を閉ざした。松本は健斗を見つめたまま動かない。しばらくすると下を俯いた。そして顔を逸らして大きく空を見上げる。肩が震えているのが分かったが、健斗もヒロも何も言

わなかった。

新たな決意が、ようやく確実なものへと固まろうとしていた。

第9話　新たなる決意　P．49

それから少し話をした後、松本は健斗たちの元から去っていった。健斗たちの意志を聞けて安心するような表情をしていた。

松本も健斗と同じような人間だった。自分のしたことに責任を感じ、なんとかしてその責任を果たそうとする。その思いはいっしょだった。以前とはまるで別人だった。

「ちょっと驚きだよな。」

ヒロは屋上へと続く階段を降りながら健斗にそう言ってきた。先を歩いていた健斗はゆっくりと振り返ってヒロを見る。ヒロは戸惑いながら苦笑いを浮かべていた。

「あの松本さんが、あんな風に言ってくるなんて。」

確かにその通りだ。あんなにプライドの高い人がわざわざ健斗たちの元を訪れて頭を下げにくるなんてめったにない。だがそれをしてきたということは、やはりそれくらい思いが強いということなのだ。

「あの人も、俺たちといっしょなんだよ。」

「……そうなのかね？」

「そうだよ。つーか、俺はそう信じたい。」

健斗はそれ以上何も言わなかった。あの人が過去がどうであったに

しろ、今はもう違う。それでいいと思った。優しき心を取り戻した穏やかな人物になったのだ。

ヒロもそれを感じ取ったのかそれ以上健斗に何も言って来なかった。健斗たちはゆっくりとした足取りで昇降口まで階段を降りて行った。

昇降口に降りて革靴に履き替えると、健斗とヒロは揃って歩き出し自転車置き場へと自転車を取りに向かった。

「しかしお前も大きく出たよな。」

「何が？」

「俺たちに任せろって。随分自信あり気だよな。」

ヒロにそう言われて健斗は少し照れくさそうに笑った。確かに普段の自分らしくない言動のように思えた。

「まぁ……あんな風に頼まれたらああいうしかないだろ。」

「お前知ってる？その例の対戦相手。」

自転車置き場から自分の自転車を運び、校門の方に向かっているとヒロがそう言ってきた。当然健斗は知る由もなく、小さく首を傾げた。

「いや……どこ？」

「洗目（せんま）……」

「洗目？洗目ってあの洗目高校か。」

「あぁ。うちがこの間の夏の大会で負けたところ。」

「そこって確か……」

「うん。この間決勝まで行ったってよ。相当強いらしい。立川には負けたけど……」

洗目（せんま）高校は神乃高から隣町の駅からさらに離れた町にある高校で、スポーツが強いということで県内でも有名な高校だった。

松本がまだ現役だったときに運悪く当たった学校がそこだ。しかし決勝まで言ったが、やはり……あの立川高校に敗れて二次大会まで行くことは出来なかった。

立川高校……小山明信がいる高校だった。もっとも、小山さんはほとんどＵ－１８（１８歳以下な日本代表選抜チーム）の方に行っているから、その高校の選手として試合をすることは少ない。

そのときの試合も小山さんは出ていないことを健斗は知っていた。

だが立川高校はこの辺の地域では公立でありながら最も強い強豪高である。

その立川高校との差多少あるだろうが、洗目は間違いなく実力のある高校だ。

だが何故だか健斗は恐ろしさというよりも、どこかくすぐったい気持ちを感じていた。胸の中に熱い感覚が沸き起こる。ざわざわと身が震えてくすぐったかった。

この感覚はものすごく懐かしいものだった。幼い頃、健斗が抱いていたものと同じだ。

健斗は握り拳に汗が滲むのを感じながら、小さく口元で笑みを浮かべた。

するとだった。ヒロが突然足を止めて、呆然として校門の方を見た。

「おい。あれ……早川じゃない？」

「え？」

健斗はヒロにそんなことを言われて慌てて校門の方を見た。校門に寄りかかるようにして、早川が立っているのが分かった。寂しそうな表情で下を俯き加減でいた。一体何をしているのだろう。

「早川。」

健斗は歩み寄りながら早川に声をかけた。すると健斗の声に素早く反応するように早川は顔を上げて健斗たちの方を見た。

健斗たちの姿を確認すると早川はちゃんと健斗たちと向き直る。健斗とヒロはその様子に戸惑いを感じながら、早川と徐々に距離をつめていった。

早川の目の前まで来たところで健斗はゆっくりと微笑んでみせた。

「どうしたの？こんなところで。」

「……うん……」

早川は表情を緩めないまま俯き加減で健斗たちの前に向き直っていた。少し寂しそうな表情は何なのだろう。

するて早川は突然顔を上げて小さく消えるような声で言った。

「……あのね。待ってたの。いっしょに帰ろうと思って……」

「えっ？」

健斗は胸がドキッと高鳴って早川を見つめた。早川からそんな風に言ってくることは珍しかった。まして、校門の前て待っていたまで健斗と帰ろうと思った理由って……？健斗の頭の中で色んな疑問が浮かんでいると、急にヒロが陽気な調子で言った。

「あ、じゃあ俺先帰るわ。ちょっと用事思い出したし。」

「うえェッ？ちょ、おい、ヒロッ！」

健斗は驚きの声を上げてヒロを見た。ヒロは歩き出そうとする際に健斗だけに聞こえるよう小さな声で言ってきた。

「……早川にちゃんと話しておいた方がいいんじゃねーの？色々と……」

「あ……」

ヒロはそう言うと健斗から視線を早川に向けた。そして人懐っこい笑顔で言った。

「じゃあ早川、また来週な。」

「う、うん。またね……」

ヒロはそう言うと自転車に跨って一気に漕いで行き、気がついた時にはもうすでに見えなくなっていた。

戸惑いを隠し切れない健斗はチラッと早川を見た。早川は何も言わず、健斗の視線を見つめ返した。

「じゃ、じゃああの……帰ろっか？」

「……うん。」

健斗はそう言って早川と共に校門を出て行った。後方から野球部の声が聞こえた。

第9話　新たなる決意　P．50

風が吹き、道端のススキたちが擦り合うような音を奏でていた。家へと続く一本道を健斗は自転車を押しながら、早川と並んで歩いていた。

早川は視線を下に落としたまま一言も話さなかった。健斗もその普段と違う雰囲気に呑まれながら、内心そわそわしつつ、平然をどうにか保とうとしていた。

こんな風に早川と並んで歩くのは、夏休みのとき、早川と二人でデートをしに行った以来である。とても楽しかった思い出だが、健斗が気になるのはやはり最後の場面であった。

早川が健斗にお礼を言った後の一言に健斗は心を奪われてしまった。

『……私も……健斗くんみたいな人を……好きになれたらいいのになぁ……』

嬉しさと恥ずかしさを入り混じえた感情が健斗を大胆な行動へと走らせた。健斗はそのとき思わず早川を引き寄せ、あろうことか抱き留めてしまったのである。

そしてその後、健斗は意を決して早川に自分の思いを告げようとしたのだが……それは無惨にも電話のコールによって阻止された。

だけど結果的には良かった。もしあのまま告白をしていたらどうなっていたのだろう。健斗は想像すると可笑しくなりそうだった。

やっぱり自分は最低の人間なのかもしれない。あんなに早川のことが好きだったのに……いつの間にか今は麗奈に対する思いの方が強い。

だから健斗はこうして二人で歩くことを予想だにしていなかったし、ましてこういう状況の最中ではもうそのことしか考えられなかった。

あれからそのことについてお互い触れてはいない……が、いつかはちゃんと話さなければならないような気がする。しかし今は上手い言葉が見つからなかった。

――それにしても気まずい。

どうしてこんなに沈黙が続いてるのだろうか？ついこの間まで普通に話していたではないか。二人きりで帰宅という、妙に甘酸っぱい状況が健斗を戸惑わせているに違いない。

しっかりしろ山中健斗っ！お前は本当に節操なしなのか？お前の今の気持ちは、麗奈にあるんだから……早川と帰っていることを意識してどうする。

よし……と心の中で呟いた。ここまで自分に言い聞かせればもう大丈夫だ。何か話題がないのなら、自分から振ればいい。そう。今日でテスト週間が終わったのだから、その話をすればいいじゃないか。

よし、こうだ。早川。テストどうだった？うんっ！これで行こうっ！

「……健斗くん、あの……」

「テストさぁ、どうだったっ！？」

健斗はやけに張り上げた声でそう言ってしまい、早川はぎょっとした目で健斗を見た。健斗はその言葉を聞いた瞬時、「ヤバいっ」と感じた。今早川が何か言いかけていた。

「あ……え……テ、テスト？」

早川が戸惑うように聞き返してきたので健斗は慌てて首を横に振った。

「あ、いや、ううん。何でもない。えっと……何か言いかけてた？」

健斗が改めてそう聞くと、早川はまた寂しそうな表情を浮かべて小さく頷いた。

「うん……あのね……」

「う、うん？」

「……松本さんが……健斗くんたちのとこに訪ねて来なかった？」

「えっ？」

健斗は神妙な顔向きになって早川を見つめた。心臓が早く高鳴るのが分かった。まさか早川からその名前が出るとは思わなかったし、何故早川がそのことを知っているのだろう。

「あ、あぁ……来たよ。少し話したけど……え、何で早川知ってるの？」

「……松本さんも私のとこに来たの。」

健斗はそれを聞いて瞬時に頭を回転させた。ある一つの仮定が頭の中に浮かんだ。

「松本さんが私のとこに来て……まず、あのときのことを謝ってきたの。」

早川によれば松本は以前とは全く違う、穏やかな雰囲気で早川に謝ってきたらしい。自分は早川の気持ちを踏みにじるようなことをしてしまった。本当にすまなかったと……

松本は本当に以前と変わったのだな、と健斗はその話を聞きながら改めて思った。何がそんなに彼を変えたのだろうか？

「それでねその後……健斗くんの場所を知ってるか？って聞いてきたから……多分屋上に行ったんじゃないかって教えたの。」

やっぱり。健斗が立てた仮定は正しかった。あの時やはり偶然ではなく、松本は健斗たちのいる場所を知っていたのだ。

「そっか。早川が松本さんに場所を教えたんだな……よく俺らが屋上にいるって分かったな？」

「うん。ヒロくんと話しているの聞こえてたから。屋上で話をしようって。」

「あぁ……なるほどね。」

健斗は照れくさそうに鼻の頭をポリポリと掻いた。早川に話を聞か

れていたとは思ってなかった。

「それで……私、帰ろうと思ったんだけど……その……松本さんとのことが気になって……」

「あぁ……うん。」

「もしかして……健斗くんがまたサッカーを始めることと、何か関係あるのかなって……それで……」

そうか。だから早川はあの場所で健斗のことを待っていたのか。理由があったことに健斗は心なしかどこか安心をしていた。突然「いっしょに帰りたい」なんて言われると、誰だって違う想像をしてしまう。健斗が考えていたような感じではどうやらないらしい。

こうやって早川と二人きりで歩いて帰っていることに健斗はどこか罪悪感のようなものを感じていたのだ。その罪悪感に向けていたのは……あいつになんだけど。

「どうかした？」

早川が健斗を心配そうな表情でそう言ってきたので、健斗は慌てて首を横に振った。

「あ、いや。大丈夫。えっと……そうだなぁ……どこから話せばいいんだろう……」

健斗は少しの間思案した。早川にはすでに健斗がサッカーをやろうとしていることは話しているし、それにはどんなことが付いて廻るのかも分かっているはず。

でもちょうど良い機会だと健斗は思った。近い内に早川にはちゃんと話そうと思っていた。翔のこともあるし……

「あの日さ、のんちゃんから聞いたんだ。」

「……野村くんが健斗くんたちのとこに来た日だよね？」

「うん。あの日に知ったんだけど……うちのサッカー部が廃部になるかもしれないって。」

「えっ！」

早川はそれを聞いてかなり驚いたような表情を見せた。やはり早川も知らなかったらしい。そういえば昨日話した佐藤もそのことを知らなかったし、それより前に麗奈も知らないと言っていた。

健斗はそれから時間をかけて今までのことを早川に全てを説明した。

早川は健斗からの話を聞くと、驚いたり悲しそうにしたり、とにかく知らないことだらけと言ったようだった。そして全ての話を聞くと、早川はしばらく黙り込んでいた。健斗も黙っていた。

次に早川が何を言うのか、しばらく待っていたのだ。すると早川は顔を上げて重い口を開いた。

「……そう。じゃあ健斗くんとヒロくんは、今度は高野くんと橋本（はしもと）くんに会うつもりなんだね。」

早川にそう言われて健斗は小さく苦笑いを浮かべながら頷いた。

「うん……まぁ一応そのつもり。まだ会うっていう約束はしてないんだけど、俺らはそうしようって思ってる。」

「そっか……」

「うん。でもその前に……会おうって思ってる人たちがいるんだ。」

健斗がそれを言うと早川は不思議そうに顔を上げ、健斗のことを見上げた。

「誰？」

「えっと……その……」

健斗は言いにくいことを言おうとしていた。口をモゴモゴさせ、何度もチラッと早川を見た。早川はどんな反応をするだろうか。おそらく悲しそうな表情を浮かべるに違いないが、言わないわけにはいかなかった。

「……翔の……両親に会いに行くんだ。」

その名前を聞いた瞬時、早川の顔から血の気が引いていった。早川は目を開いて、健斗から顔を逸らした。やはり健斗の予想通りでそんな早川を痛々しそうに健斗は見つめた。

長い間その話はしていなかった。今ここで、この道でその名前を出し、早川をこのように悲しませている。何だかとても……切ない気

持ちがした。やはり早川は未だに翔のことを引きずっているのだ。

「……大丈夫？」

健斗が恐る恐る聞いてみると、早川はゆっくりと顔を戻した。気がつくとその瞳は潤んでいた。

「うん……ごめんね。そっか……翔くんの……」

しばらく沈黙が続いた。お互い口が重く、何を話せばいいのか分からなかった。早川の前でこの話をするべきではなかったのかもしれないな……と健斗は次第に後悔していた。

「……ダメだね……私……」

「え？」

早川が呟くようにそう言った。早川は自分自身を情けなく思うように苦笑いを浮かべていた。

「もう、あれから二年半も経ってるのに……翔くんの名前を聞くと……まだ胸が苦しくなるんだよね……」

「……」

「もう忘れようって決めたのに……ダメだなぁ……私……」

早川は自分を戒めるようにそう言った。健斗はそんな早川を悲しい目で見つめる。自分の無力さに腹が立った。

きっと早川を心の底から笑わせることが出来るのは……自分ではない。自分にはどう頑張ってもそんなことはできないし、それどころか自分にはそのような資格すらない。

健斗はゆっくりと空を見上げた。オレンジ色に焼けた綺麗な空だった。

「……早川は……翔のどんなとこが好きになったの？」

「え？」

早川はちょっと驚くようにして健斗を見た。健斗は口元に小さな笑みを作って早川を見つめ返す。

「あいつのどんなとこを好きになったのかなって……」

「私は……」

早川はまた下を俯いた。しかしその視線はどこか遠くを見つめている。その感じは以前健斗が早川に同じような質問をしたときと同じだった。

早川は恥ずかしそうにはにかんで笑った。

「……恥ずかしいな……でも、聞いてくれる？」

「うん。」

「……私ね、翔くんのことを初めて知ったのって……小学校四年生のときだったの。」

「えっ？」

健斗は意外な事実に大きく驚いた。早川は小学校が第二だから……第一だった健斗や翔とは違う学校だった。なのに、早川はすでに小学校の時点で翔のことを知っていたのだという。

「ほら、四年生のとき……第一と第二で合同運動会があったの覚えてない？」

「え……あっ！あ、あった。」

早川の言うとおり。確かにそんなことがあった。

神乃崎にはお互い少し離れた距離に神乃崎第一小学校と第二小学校があるのだが、四年に一度の頻度で、それにあたった年の運動会が第一と第二を合わせた合同運動会という形で行われる行事があった。

健斗もよく覚えている。普段の運動会の倍の規模で、いつもと違う大人数で、広いグラウンドで行われていた。まるで小さなオリンピックのように健斗は感じていた。

「私……小さいとき運動会がすっごく憂鬱だったんだ。」

「そうなんだ……え、何で？」

「う～ん……私、あまり陸上競技が得意じゃなかったの。足とかすっごく遅くって……いつも駆けっことかビリでね。」

意外な事実だった。早川は球技とかを扱う体育ではいつも目に留ま

るくらいの活躍をしていた。スポーツ万能というイメージが少なくとも健斗の中ではあった。

「だからその日もスッゴく嫌だったんだ。ただでさえスッゴい嫌いだったのに、何でこんなに大勢の人がいるんだ〜って。」

「なるほどな。」

健斗は小さく笑うと、早川も照れくさそうに小さく笑った。

「かけっこが一番嫌いだったなぁ。ほらあれ、順位とかあるじゃない？一等は金のメダルもらえて、二等は銀のメダルで……私はいつもビリっけつで、紫色のメダルだったの……」

「アハハッ！そうか、そりゃ嫌だよな。」

早川には悪いが健斗はかけっこはかなり得意だった。というのも、足が健斗はとてつもなく速かったのだ。だからいつもかけっこでは一等で金メダルをもらっていた。

でもああいうのって早川みたいな人にとってはたまらなく憂鬱なものだったのかもしれないな……と健斗は今更ながらそう思った。

「それであのときもかけっこ、あったでしょ？私すごく緊張したの。あんなに大勢の人の前で恥をかきたくなかったから、せめてビリは避けようって思ってて。だから頑張ろうって思ったのよ？でも、気張り過ぎちゃったのか分からないんだけど……私、カーブのとこで転けちゃったの。」

「えっ？そうなの？」

健斗は可笑しさを感じながらも意外なことに驚きも感じていた。転ける人というのはそういないはずだから、記憶に残っていてもいいのだが健斗は思い出せなかった。

だけどそのときの早川の気持ちを考えたら少し可哀想だった。恥を避けようとした行動の最悪の結果だった。しかし早川は恥ずかしそうに笑って昔のことを懐かしむように続けて言った。

「他の人にはどんどん先を行かれちゃったし、たくさんの人たちの前では転ぶし……私、恥ずかしくって悔しくって、その場で泣いちゃったんだよね。」

「へぇ……」

「もうこんな苦しいの嫌だ。かけっこなんて速い人だけでやればいいじゃないってそう思った。でも……そんなときにね……」

『立てる?』

「声をかけてくれたの。知らない男の子……多分体育委員だったのかなぁ?泣いている私の所に駆け寄ってきて、手を差し伸べてくれて……」

「……もしかして、それが……翔?」

健斗は奥に眠っていた記憶を徐々に取り戻しながらそう言った。泣いている女の子……確かにいた。健斗はそれをヒロや他の友達と笑って見ていた記憶が確かにあった。

早川は恥ずかしそうに笑って頷いた。

「そう。そのときはまだ名前は知らなかったけど、翔くんが私に笑って手を差し伸べてくれたの。それで……」

『まだ走れるだろ？最後まで頑張ろうぜ？』

『……イヤ……もうイヤ……走りたくない……』

『諦めるなよ。今ここで途中で投げ出す方が、一番かっこ悪いって思わない？』

『……』

『俺もいっしょに走るから。なっ？立ち上がって、最後まで走ろうぜ。』

結衣は少し黙ってから小さく頷いた。そしてその知らない男の子の手を借りて、ゆっくりと立ち上がった。転んだときに擦りむいた膝や手のひらが痛かった。でも結衣はしっかりと前を向いて、ゴールまであと三十メートルの距離を、隣でいっしょに走ってくれている男の子と頑張って走った。

「それで、最後まで走ったの。そしたら周りの人がみんな、拍手をくれたの。さっきまで私のことを笑ってた人も……私に拍手をして、称えてくれて……恥ずかしさや悔しさよりも、嬉しいって思ったの。初めてのことだったの。かけっこが、こんなに気持ちいいものなんだって……」

『よく頑張ったなぁ。お前、今すげーかっこ良いよ！』

その男の子は結衣に笑いかけてそう言った。その言葉が本当に嬉しくって……結衣は涙を拭いながらにっこりと微笑んだ。

『うんっ！』

健斗は今それをはっきりと思い出した。確かにそんなことがあった。合同運動会の係りを勤めていた翔が転んで泣いてる女の子に素早く駆け寄り、一言二言会話を交わすと、その女の子といっしょにゴールへ向かって走っていた。

あの女の子……長い髪を二つに束ねた子……あれが、早川だったなんて健斗は全く気がつかなかった。その後ヒロたちと共に翔を茶化したのもよく覚えていた。

「そしたら、一応順位はビリだから……翔くんが他の係りの子からメダルをもらってきて、私にくれたの。」

「はいっ！これ。」

「……」

結衣はそのメダルを気に食わない様子でその男の子から受け取った。いつもと同じ……紫色のメダル。一番遅く、かっこ悪い者へと贈られるメダルだった。

「……これ、いらない。」

「え、何で？」

「お前はビリだって言われてるみたいなんだもん。カッコ悪いし……嫌い……」

「……」

「私だって一度くらい……一番綺麗な金メダル欲しいもん……だからこれ、いらない。」

結衣がそう言うと、その男の子は「う～ん」っと唸るようにして言った。係りの子なんだろうから……きっと渡さないわけにはいかないと困っているのだろう。それでも結衣はこの紫色のメダルが嫌だった。

「……よしっ！分かったっ！お前、ちょっと待ってろ。」

「え？」

その男の子は結衣にそう言うと、忙しそうに結衣の元から遠く離れて行った。彼が向かった先は、これから走る人が並ぶ列だった。

「翔くんはその列の方に行って、並び始めたの。多分、もうすぐ自分の番だったんだと思う。私はずっと彼を見てた。そして……彼の番になったの。」

健斗はその話を聞いてさらに昔の記憶が蘇った。そうだ……それって健斗も共有する記憶だった。

「おっ！来たなっ！」

健斗は健斗の横に並ぶ翔を見ながら笑ってそう言った。翔は健斗を見て、にかっと笑う。

「お前、何めちゃくちゃかっけーことしてんだよー。このやろー。」

「さすがは翔くんですねぇ～？ヒューヒューヒュー！」

その前に並んでいたヒロも翔を茶化すようにそう言った。するとそれがきっかけとなって周りの人が翔のことを茶化し始めた。

「やめろよっ。俺別にそんなんじゃないしっ！」

「え～？あの子結構可愛いし、もしかして両想いになるんじゃなぁい？」

健斗はヒロの茶化し具合が何とも面白くって腹を抱えて笑った。翔は顔を赤くして茶化し続けるヒロの頭を叩いた。

「うるさいっ！俺は、係りとしてあの子を助けただけだっつーのっ！」

「係りとしてっ！いよっ！さすがは翔さんっ！おっとこまぇっ！」

健斗がそう言うと今度は健斗が翔に頭を叩かれた。

「どこの親父だお前はっ！まったくっ！」

そんな風にじゃれあってると、ピストルの音の回数につれどんどん列は進み、いよいよヒロの前の番になった。ヒロは余裕そうな表情で周りを見渡していた。

「お前、一等じゃなかったら罰ゲームだかんな。」

翔が笑いながらヒロにそう言った。翔なりにプレッシャーをかけた

つもりだったんだろうが、生憎ヒロには効かなかった。

「あったりまえじゃん。それより、俺はお前ら二人の勝負が気になるンだけど。」

ヒロがそう言うと、健斗と翔は互いに見合って笑い合った。そう…その日の運動会におけるかけっこは、足が速い、遅いを考慮しながらのくじびきで決めていた。

すると何と奇跡的に健斗と翔が同じ列で走ることに決まったのだ。健斗と翔がこんな風に競うというのはめったになかった。

だが、健斗は同時に喜びを感じていた。ワクワク感が止まらない。一体どっちの方が速いんだろう。一般的なタイムはほんの少しだけ翔の方が速かったが、その差はほとんど変わらなかった。たった零点零コンマ数の差である。

朝から体がうずうずした。早く走りたい。走りたい。体がそう求めていた。絶対自分が勝つっと士気を高めていた。

そしてついにヒロの番になって、ピストルの音が鳴る寸前にこちらを振り返った。

「じゃ、お先行って待ってますわ。」

そういうとピストルの音が鳴り、みんな一斉に走り出す。ヒロは軽快な走りを見せた。周りの人など意に介さない。あっという間にゴールにつき、他の人とかなりの大差をつけて一等を取った。

「やっぱ速ぇーなぁ～……あいつ。」

翔はつまんなそうにそう言った。罰ゲームが出来ないのを残念がっているようだった。

「今度は俺らの番だぞ。」

健斗は満面の笑みで翔に言った。興奮が抑えられなかった。心臓が高鳴るのを感じた。武者震いのせいか体温が上がり、額から汗がしたたる。翔はそんな健斗の様子を見ながら呆れるようにため息をついた。

「あいっかわらずの勝負好きだよなぁ、お前。」

「まぁな。特にお前には絶対負けない。」

「ふ〜ん……」

翔はそう言いながらゆっくりと立ち上がった。そして体を曲げて体操を始める。

「……でも悪いけど……健斗。」

「うん？」

「今日は負けられないんだわ。負けられない理由が出来た。」

そう言う翔の目は光っていた。明らかに本気の翔だった。健斗はさらに気持ちが高揚するのを感じた。

――ヤバい……ゾクゾクする。

準備が整って、審判の先生が位置に着くようにみんなを促す。健斗は走る構えを取った。ただ前しか見つめない。八十メートル先にあるゴールが、とてつもなく長い距離のように見えた。何キロも先にあるようだ。

「いちについて～！」

審判の先生がピストルを掲げる。自然と体に力が入った。ざわざわしている観衆の声も聞こえなくなった。自分の呼吸音だけが聞こえた。

「……ヨーイ…ドンッ！！」

そのタイミングで健斗は地面を蹴った。最高のスタートダッシュだと健斗は感じていた。見なくてもわかる。他の人とはすでに大きな差がつき始めている。そして健斗はさらにどんどん、どんどん、自分の全身の力を使い加速をしていく。周りの景色が流れて、細い線状のように見えた。

だが、それについてくるものがいる。やはり翔だった。翔はほとんど健斗と変わらない速度で健斗の横を走っていた。

――コイツ！

健斗はさらに力を込めた。加速を加えたのだ。白色の線で描かれたレーンを沿うように走る。カーブを曲がると、あとは三十メートルくらいの一直線だった。

未だに翔との差は変わらない。ぴったりとお互い張り合い続けた。

呼吸をしない。いや、出来なかった。一呼吸でもすれば負ける。健斗はそう感じていた。

細く白い紐が徐々に近づいてくる。あとほんの数メートルだった。

――絶対に勝つっ！

健斗は最後の力を込めたそのときだった。

「うぇぁっ！！！」

声にならない声が隣で聞こえたと思ったら、翔の体が微かに前に出るのが見えた。

そして――――

ピストルの数発の音が聞こえた。それと同時に、周りから大きな歓声が聞こえた。健斗は気づいたらその場に倒れていた。呼吸が激しく、全身から大量の汗が吹き出た。

結果は？結果はどうなったのだ？

するとだった。健斗と同じように激しい呼吸をしながら、ゆっくりと健斗に歩み寄ってきた者がいた。汗だくの翔が笑いながら健斗を見下していた。手には日光で反射して光る金色のメダルを持っていて、健斗にわざと見せびらかすようにヒラヒラと動かした。

「俺の勝ちっ！」

翔は笑ってそう言うと健斗の元から遠ざかっていった。健斗はそれを聞いて全てを悟った。この歓声も、疲れもレースが終わったからなのだ。健斗はゆっくりと上半身だけを上げてゆっくりと呼吸を落ち着かせようとした。

「スゲーよお前らっ！」

ヒロが健斗の元に駆け寄ってきた。どうやら相当興奮しているようだった。

「いや〜？まさに名勝負だったぜ？みんな超興奮してる。劇的だったなぁ〜！あ、はい、これ。」

と言って渡してきたのは銀色に光るメダルだった。健斗はそれを受け取って、手作り感溢れる感触を感じながら大きくため息を吐いた。

負けた……ものすごく悔しかったが……それよりも大きな充実感を感じていた。

「え〜！それでは勝利者のインタビューをしたいと思います。今回のレースで見事一等を飾った櫻井翔さん？翔さん？あれ？翔さん？」

ヒロは茶番を始めたが、どうやら翔の姿が見えないらしくキョロキョロと探し始めた。健斗もそれに気づいて翔を探す。しかし翔の姿はどこにも見えなかった。

「すごかったなぁ～！あのとき。私、初めてかけっこってこんなにすごいんだって思ったの。本当よ？二人とももものすっごく速くって……翔くんもすごかったけど、その翔くんの相手の人もすごかった。顔はよく見えなかったんだけど……健斗くん、誰だか知ってる？」

早川がそのときのことを思い出しながら興奮して言ってきた。そのときのことを話す早川は本当に生き生きとしていた。

健斗はそのときの記憶を鮮明に思い出していた。そうか……翔があのとき言っていたことってこのことだったんだな……と思い、小さく笑った。

「いや、俺は知らないな。」

健斗はなんとなく今更それは自分だと言えなくってごまかすことにした。すると早川は意外そうな表情で健斗を見た。

「本当に？もう、本当にすごかったんだから。」

「うん……で、そのあと翔はどうしたの？」

健斗がそう聞くと、早川は「あっ！」と口を抑えて悪戯気に笑った。

「あ、うん。ごめんなさい。えっと……そのあとね、そのレースを見て圧倒していた私のとこに、彼が戻ってきたの。」

ものすごい勝負を見せつけられて、結衣は圧倒されていた。あんなに速い二人が自分の近くの学校にいるなんて……結衣が知る限り、第二でも彼らに勝てる者はいないように思えた。

そんなことを思うと自分がとてつもなく惨めな人間に思えた。自分もあの二人のようにあんな風に速ければどれだけいいんだろう。すると手に持っていた、自分の紫色のメダルがとても忌々しいものに見えた。そのときだった。

「おーいっ！」

あの男の子の声がした。結衣はすぐに顔を上げると、汗だくの彼が結衣の元に向かって駆け寄ってきた。大きく息を切らして、男の子は結衣の目の前に来ると身をかがめて大きく呼吸をした。

「おめでとうっ！すごかったねっ！」

「おうっ！」

男の子はにっこりと人懐っこい笑顔でピースサインをしたが、まだ呼吸が落ち着かないのが大きく深呼吸をしていた。結衣は男の子を見つめながら、ゆっくりと微笑んだ。

「……羨ましいな。」

「あん？」

「私もあなたのように足が速かったら、この運動会も楽しめるのに……羨ましい。」

「……それよりも……これ。」

「え？」

男の子は大きく顔を上げて結衣に彼の手に持っているものを差し出してきた。それは彼が苦労のすえに勝ち取った金色のメダルだった。

「ほら。これが欲しかったんだろ？やるよ。」

意外なことに結衣は驚きを隠せなかったが、やがて小さく笑った。

「……もらえないよ。」

「何で？」

「だってこれはあなたが頑張って勝ち取ったものだもん。こんな大事なもの……私には……」

結衣がそう言うと男の子はきょとんとした様子で結衣を見つめていた。

「……お前、何か勘違いしてない？」

「え？」

男の子がそう言ったので結衣は何のことか分からず不思議そうな顔を浮かべた。

「このメダル、金色だから一番綺麗な色っていうわけじゃないよ。」

「え……」

「そうじゃないよ。このメダルがこんなに綺麗に見えるのは、俺が足が速いからとか金色だからとか、そんなんじゃないんだよ。」

「どういう……こと？」

結衣がそう聞くと、男の子はにっこりと笑ってさらに続けて言った。

「このメダルが綺麗に見えるのって、一生懸命頑張ったからそう見えるんだよ。」

「え……」

「もし俺が手を抜いても当然のように一等になって、同じようにこのメダルをもらってさ。そしたらお前同じようなことがこのメダルに言える？」

「あ……」

結衣はこの男の子の言いたいことがなんとなくわかってきたような気がした。それを察したのか、男の子はまた笑顔になった。

「さっき俺と走ったやつ、俺のダチなんだけどさ。あいつもめちゃくちゃ速いんだ。しかもすっげー負けず嫌いでさ。だから俺も、あいつのおかげで一生懸命走ったし、そんであいつに勝ってこのメダルが貰えて、今すっげー嬉しいしさ。」

そう言ってから、男の子はふっと表情を緩めた。

「だから……お前のそのメダルも同じなんじゃないの？」

「え……」

結衣はゆっくりと自分のメダルを見つめた。紫色で全然綺麗とは思えなかったメダルだ。

「お前今日転けちゃってさ、結局結果はビリだったよ？でも……お前最後まで頑張ったじゃん。ちゃんとゴールしたじゃん。ゴールしたとき、気持ちよくなかった？」

その通りだ。結衣は初めてかけっこというものがこんなにも気持ちいいものだということを知った。

周りの人から拍手を贈られながら、結衣は最後まで一生懸命走った。ゴールをしたとき、いつもは何も感じなかったのがすごく嬉しいと感じるようになった。

結果はビリだった。でもただのビリじゃない。自分は一生懸命最後まで走ったビリだった。いつもは負けて当然だ。恥をかかないように走ろうと思って走っていたのに、今日だけ違った。

「分かったか？一番綺麗な色は金でも銀でもない。自分が本当に一生懸命頑張ってもらった色だって、俺はそう思ってる。」

そう言って男の子は結衣の持っている紫色のメダルを指差しながら笑っていった。

「だから俺から見ればこの紫色のメダル、すっげー綺麗な色に見えるし、これを取ったお前はすっげーかっこ良いって思う。」

結衣は言葉が出なかった。嬉しさと感激が結衣の胸を包んだ。今までそんな風に言ってくれる人はいなかった。金色のメダルを取った人はみんな自慢気にみんなに見せびらかせて、結衣は遠くからそれを眺めていた。

でもこの人は違う。この人は一等を取ることなんかに何の価値も置いていない。自分の力を振り絞って頑張ることに価値を置いているのだ。だからこの人が勝ち取ったメダルはこんなにも綺麗に輝いていて、このメダルを取った彼はとてもかっこ良いのだ。

結衣は涙で目の前が滲んだ。嬉しくって、涙が溢れそうになった。

「あ、あれ？お、俺何か変なこと言った？」

男の子は突然泣き出した結衣を見て、慌て出した。結衣は大きく首を横に振りながら目をゴシゴシと拭って涙を止めた。

「ううん……私、嬉しくって。」

「……そっか。良かった。」

「うん……だから……ありがとう。」

結衣は笑ってその男の子に言った。男の子はお礼を言われて気恥ずかしそうに鼻の頭をポリポリと掻いた。

「別にー。あ、でさ、これやっぱやるよ。お前のために取って来たんだから。」

と言って男の子は結衣に手に持ってた金メダルを渡してきた。結衣はそれを受け取ると、おそるおそる聞いてみた。

「……いいの？」

「いいって。俺、いらないしさ。」

男の子はそう言うと、結衣はそのメダルをギュッと胸に抱きしめた。どこか暖かい気持ちが胸を包んだ。

「ありがとうっ。」

結衣は目を細めて男の子に笑いかけた。嬉しかった。こんなにも素敵なメダルを貰えるなんて……

男の子はまた照れくさそうに笑うと、突然「あっ！」と何かを思い出すように声を上げた。

「やべっ。俺、行かなきゃ。ダチ待たせてんだ。お前、もう運動会はつまんないなんて言うなよ？」

結衣はそう言われて可笑しさを感じ、クスクスと笑った。

「うん。分かってる。」

「よしっ！じゃあ、またなっ！」

「あ、ねぇっ！」

結衣は去っていく男の子に向けて声をかけた。すると男の子はくるっと後ろを振り向いて結衣を見た。結衣は恥ずかしそうに頬を赤らめながら、小さな声で言った。

「あの……名前……教えてもらってもいいかな？」

「あ、名前？俺、櫻井翔。翔って呼んでくれればいいよ。」

「翔くん……」

「お前は？」

翔が逆に聞いてきたので、結衣はたどたどしく答えた。

「私は……結衣。早川結衣だよ。」

「早川……ね。よしっ！覚えた。またどっかで会おうな。」

「うんっ！」

翔はにっこりと笑ってそのままるで風のように駆けていった。結衣はその後ろ姿を見つめながら、呆然としていた。

「……翔くん……かぁ……」

結衣は胸の奥に何かくすぐったい気持ちを感じていた。初めて抱いた変な気持ち。くすぐったくって、どこか切ない。

――また会いたい……

結衣はそう思いながら、彼からもらった金色のメダルを見た。日光を跳ね返して本当に綺麗な色をしている。

太陽にかざして結衣は二つの色を見比べた。さっきまで雲泥の差に思えたのに、不思議と今はどちらも同じくらい綺麗な色に見えた。

第9話　新たなる決意　P．５０（後書き）

一気に二話分書いたのでページ数がめちゃくちゃ長くなりました汗

今回のエピソードは実は第５話を書いている際に思いついたものです。だから本当は第５話の終盤に入れようと思ったのですが、ここでいれるのは何か違うと思い、今回まで引っ張らせていただきましたが……いかがだったでしょうか？

もしかしたら時間列が複雑で読みにくかったかもしれません。ごめんなさい。

一番綺麗な色って何だろう？

一番光ってるものって何だろう？

多分読んでいて気づいた方もいると思いますが、今回のエピソードはあの曲を踏まえつつ考えたものです。

今回は合同運動会という場面でしたが、オリンピックなんてまさにそうですよね？

みんなが金メダルや銀メダルを狙って競技を行い、見事それを勝ち取った方は本当にすごいですしかっこ良いです。

でもそれに届かず、悔し涙を流す方にも作者は何か輝いた物を感じずにはいられません。

今回はきっと色んな人が経験したことのある“かけっこ”を中心にした話にしました。これは僕はまさに“小さなオリンピック”だと認識しています。

今回のお話を通じて作者からの、そして何よりもこの話の背景にある、あの曲を作ったミュージシャンからのメッセージを感じ取ってもらえると嬉しいです。

何か……今回のお話で結衣の人気が上昇しそうな予感がします。実際作者も書きながら結衣がかなり好きになりました（笑）

さて、この話を聞いた健斗の気持ち、そして今現在に揺れる結衣の気持ちは一体どうなるのか。

そこに注目してもらえると嬉しいです。

あ、感想や評価をいつでも受付しています。みなさんの気持ちがこの小説に反映しますので、ぜひどんどん書き込んでください。お待ちしています。

第9話　新たなる決意　P．51

早川の話を聞き終えてから健斗はなんとなく不思議な気持ち――暖かくて、どこか切ない、そんな気持ちを抱いていた。

早川は頬を赤らめていて、笑っていた。その記憶を懐かしむかのように……きっと早川にとっては本当に素晴らしい出来事だったのだろう。

その後早川はその二つのメダルを持ちつつ、両親の元に行くと……早川の予想に反して、両親は早川のことをすごく誉めてくれたらしい。一番綺麗な色は、両親にもちゃんと伝わっていたのだ。

「中学生になったとき、本当はすごくドキドキしてたの。翔くんに会えることがすごく楽しみで……」

「そっか。」

神乃中は、言っちゃえば第一と第二が合併するようなものだった。そのため児童数だって一気に増えるし、新しい出会いもたくさんある。

「一年生のとき、クラス違ったから話すことはなかったけど……でも二年生になってから、同じクラスになれて嬉しかった。もうそれから、四年も経ってるわけだから、あっちは覚えてないかもしれないけど……私は翔くんと色んな話をしたくって、だから翔くんと同じ委員会に立候補したんだ。」

「……確か、文化祭委員だったよな？」

「うん。」

健斗はそれを聞いて可笑しさを交えてクスッと笑った。

「あれさ、翔のやつ、ジャンケンに負けてあの委員会になったんだ。本当は体育祭委員をやりたかったんだけど、俺とジャンケンして負けたから仕方なくって……」

「うん、知ってるよ。翔くんから聞いたもん。でも……私は何だってよかったの。翔くんと同じ委員会なら……」

「……そっか。」

健斗は小さく笑って見せた。すると早川も同じように笑って、さらに話を続けた。

「五月……初めての委員会の仕事のとき……すごく緊張したのを覚えてる。どうしよう。何を話そうって……胸がすごくドキドキした。」

「……うん。」

「でもね、翔くん。私のことちゃんと覚えててくれたの。」

『早川だよな？』

『え？』

『俺、翔だけど……覚えてる？四年生のとき、合同運動会で――』

「すごく嬉しかった。私のことちゃんと覚えててくれてたんだって……その日から委員会じゃなくっても、結構話すようになって……た、たまにいっしょに帰ったりしたこともあって……」

早川はそのことを嬉しさ反面恥ずかしさを抱きながら顔を赤くして言った。健斗はその様子を見てクスッと笑いながら空を見上げた。

「そっかぁ。きっとあいつも……ずっと前から早川のこと気になってたんだろうな。」

「え……どうして？」

「うん？いや、ほら。あいつ、結構不器用でさ、そういう気持ちとか隠したがるやつなんだけど……五月くらいかな？翔、急に言ってきたんだよ。好きな人がいるって。」

「……それって、私……なんだよね？」

健斗は笑いながら小さく頷いた。そのことは以前早川に話したことがあった。早川は恥ずかしそうにしてたけど、健斗はまた可笑しさを感じ小さく笑った。

「あいつあのときさ、好きな人が“いる”って言ったんだ。“出来

た”とは言わなかった。だからもしかしたら……俺も早川も知らない、もっと前から早川のこと……好きになってたのかもしれない。」

少なくとも翔は中学に入ってから早川の存在に気づいてたはずだ。だが翔も早川と同じように、自分のことなんて覚えてないかもしれないという疑心があったのだろう。

だからあいつも簡単に早川に話しかけることが出来なかった。それが相互に偏って、時間をかけさせてしまったのだ。

と、あくまでも推測だが健斗はなんとなくそう考えた。

「……そうだったら……嬉しいな。」

早川は嬉しそうに小さくはにかんで笑って、下を俯いた。健斗はその様子を見て、また微笑んで笑った。

本当に好きだったんだな……翔のこと……

そう考えると、健斗は小さくため息をついた。

「……ごめんな。」

「え?」

健斗がそう言うと、早川は驚くように健斗を見上げた。健斗は苦笑いを浮かべながらまた空を見上げた。

「……俺のせいで、早川の気持ちを苦しめることになったんだもんな。俺があんな風にしてなければ、翔も死んでなかった。翔じゃな

くって、俺が事故に遭ってれば今頃二人は……」

「止めてよ。」

早川が悲しそうな口調で健斗にそう言ってきた。健斗ははっと我に返って早川を見つめる。すると早川は今にも泣き出しそうな表情をしていた。その顔は、麗奈に同じようなことを言ったときと、麗奈と同じ表情をしていた。

「そんなこと言わないで。私は翔くんじゃなくって、健斗くんが……って思ったことは一度もないよ?」

「早川……」

「もう違うの。」

早川は途端に足を止めた。健斗もそれに応じるように足を止めて早川を見つめる。……違うって、何が?早川は俯き加減で、力強い口調で健斗に言ってきた。

「もう今は違うの。健斗くんは私の中で……翔くんと同じくらい大切な人……すごく大切な人なの。だから……」

「は、早川……」

早川ははっと我に返って一気に顔を赤く染めた。健斗も胸が大きく高鳴っていて、顔に熱を感じた。

「あのっ……もちろん、友達っていう意味だよ?」

「あ……あぁ、うん。」

健斗は高鳴る胸を感じながらほっと安心するようにため息を吐いた。早川は恥ずかしそうに、顔を真っ赤に染めて俯いていた。健斗は気持ちを落ち着かせてゆっくりと早川を見て、小さく笑い「行こうか？」と言うと、早川は頷いてまたゆっくりと歩き出した。

少しの間沈黙が続いた。お互いどんな気持ちでこの沈黙の中にいるのだろうか。健斗は表情を緩めて、また空を見上げた。

「……翔のやつも同じこと言いそうだなぁ。」

「え？」

「今の早川が言ってくれたように。同じこと言ってくれそう。」

「……うん。」

すると早川はあっと声を上げて、恥ずかしそうに健斗を見上げた。

「あ、あの、ごめんね。何か、私ばっかりの話になっちゃって……」

「え？あ、いや、聞いたの俺だし……つーか、聞けて良かった。」

健斗がそう言うと早川は少し安心したのか、ほっとため息をついた。健斗はそんな早川を見ながら、呟くように言った。

「……俺も悩んでたんだよ。」

「え？」

「翔のこともある。神乃中サッカー部のこともある。そんな俺が……本当にまたサッカーを始めていいのかって思った。だから、最初は断ったんだ。のんちゃんからの頼み。」

「そう……なんだ。」

「うん……でも……」

健斗はゆっくりと目を閉じた。そこに浮かぶのは麗奈の泣いている顔だった。健斗に言った一言が今でも健斗の凍りついていた心を暖めてくれる。

「麗奈が言ってくれたんだ。もう迷わないで欲しい、苦しまないで欲しいって……だから俺も麗奈のおかげで……やっと決心することが出来たんだ。」

「……そっか。」

麗奈が健斗の決心を固めてくれた。麗奈自身、まったくそのつもりはなかったんだろうけど……でも逆にそれが嬉しかった。あいつの心から自分のことを思ってくれる気持ちが……健斗を変えてくれたのだ。

しばらく沈黙が続くと、ふと早川が俯いたまま言った。

「あの……一つ聞いてもいい？」

「うん？」

「……健斗くんは……麗奈ちゃんのこと、どう思ってるの？」

「え？」

一瞬胸が高鳴った。早川からそんなことを聞かれて健斗は驚いた。

早川はゆっくりと顔を上げて、健斗を見つめる。

「……夏休みのとき、麗奈ちゃんのことなんて何とも思ってないって言ったでしょ？」

「あ……うん。」

「でも……本当はどうなのかなって……」

それは麗奈が風邪を引いた日のことだ。確か見空鷹から早川は麗奈は健斗のことが好きだって聞いて、それを健斗に確認してきた。

だが健斗は別に麗奈のことなんて好きでも何でもないって言った。本当にそのときはそう思っていたのだ。何故なら健斗はまだそのとき、早川のことを想っていたのだから……

健斗はそんなことを考えながら小さく笑った。

「……確かにあんときは俺、本当に麗奈のことなんて何とも思ってなかったよ。お節介で生意気で、そのくせ脳天気なネコ型娘だって思ってた……でも……」

でも今は違う。健斗は確かにはっきりとした強い思いを胸に抱いている。

「でも今は……俺……麗奈のことが……好きなんだ。」

「……」

「いつからか分からないけど……いつの間にか俺はあいつのことが……」

「……そっか。そう……」

早川は小さく笑ってそう呟いた。健斗もそれ以上何も言わなかった。どうして早川は何も言わないのか、いやそれよりも……どうして早川は急にそんなことを聞いてきたのか……

健斗は疑問に思ったが、そのときは深く訊くことなんて出来なかった。

「じゃあ、私こっちだから。」

一本の道から別れ道がになったときに早川が振り返ってそう言った。健斗は戸惑いながらも小さく頷いた。

「今日はありがとう。」

早川は目を細めてにっこりと微笑んだ。眩しいくらいの笑顔で健斗は少しドキドキしてしまった。

「あ……いや、こっちこそありがとう。何か話聞いてもらったり聞かせてもらったり……」

早川は健斗がそう言うとゆっくりと首を横に振った。

「ううん。私も色んな話ができて良かった。……頑張ってね？」

「……おう……」

「うんっ！じゃあ……またねっ。」

「あ、うん。バイバイ。」

健斗は手を振りながら去っていく早川の後ろ姿を見つめていた。しばらく見えなくなるまでそこに佇んで、健斗は大きくため息を吐いた。

色んなことを話し、色んなことを聞いた。これで良かったのだろうか？

健斗は小さく一人で頷くと再び帰路へと歩き出した。気持ちは次第に、明日のことへと動き始めていた。

第9話　新たなる決意　P．52

そして土曜日となった。健斗は後部座席に乗り、窓の外を眺めていた。いつの間にか、もう健斗の全く知らない町を走っていた。健斗の隣にはヒロが座っていて、助手席には母さん、そして運転席には父さんがいた。

健斗は荷物を手に持ったまま、黙り込んでいた。流れゆく景色に心を奪われながら呆然と物思いにふけっていた。

ヒロも車に座っている最中、健斗に話しかけようとしなかった。同じように、ヒロもヒロで思うことがあるのだろう。

そしてその二人の気持ちを察しているのか、父さんと母さんは二人に話しかけようとはしなかった。二人の間だけで話はしていたが、健斗たちの方を向こうとはしない。

健斗の家を出発して一時間が過ぎた。コンビニやガソリンスタンド、そしてチェーン店のスーパーマーケットが多くなってきた。どうやら、この辺はすっかり都会らしい。翔の両親はこの辺に住んでいるという。

やがて、車は角を曲がったところに聳え立つ、小さな団地にたどり着いた。古びた建物で年季が入っているようだ。車はその団地の中に入り、やがてスピードを緩めて停止した。

「着いたぞ。」

父さんがそういうと、健斗はゆっくりその団地を見上げた。この場

所に……翔の両親が……

そんなことを考えながら、健斗はゆっくりと車を降りた。今日は少し風が強かった。厳しい風に吹かれながら、健斗は目を細めてその建物を見上げながらじっと見つめる。

神乃崎から随分と遠くに来たらしい。本当に見たこともないし、来たこともない町だった。

「何してるんだ？行くぞ。」

父さんを先頭に母さんとヒロがその団地の中に入っていこうとしているのが見えた。健斗は前を見つめて何も言わず、静かに足を踏み出した。

足音を響かせながらゆっくりと階段を上っていく。そして五階まで登ると、そこから各部屋に続く道を歩く。枝分かれになっていて、ややこしいが、どうやら父さんや母さんが正確な場所を知っているらしい。

「……緊張してる？」

ヒロが健斗に囁くように言ってきた。健斗はその言葉を聞いて、しばらく無表情でいたが、やがて小さく笑った。

「……ちょっとね。お前は？」

「もう、全然。」

それは嘘だ。ヒロは真逆なことを言う際に必ずそれを言う。ヒロも少なからず健斗と同様緊張しているらしい。健斗はそれを考えて可笑しさを感じながら、やがて足を止めた。

足を止めたその前の部屋がそれらしい。何の飾り気のない白濁色のドアがそうなのだ。標識には「櫻井」という名前がついている。

「……準備はいいか？」

父さんが振り返って二人に尋ねてきた。健斗は高鳴る胸を抑えようとしながらゆっくりと頷いた。ヒロも同様に頷いた。

父さんは表情を緩めるとくるっと前を向く。そしてインターフォンに手をかけて、ゆっくり押した。チャイム音がこちらにもはっきり聞こえた。

しばらく時間が流れた。すると、部屋の奥から足音が聞こえた。少し間が置かれてから、目の前のドアがゆっくりと開かれた。そこから母さんと同じくらいの年齢に見える女性が出てきた。

健斗にとっては懐かしい顔だった。二年半振りだった。

「いらっしゃい。」

その女性はにっこりと微笑んで健斗たちを見た。すると真っ先に言葉を発したのは母さんだった。

「櫻井さん、お久しぶりですぅ。お元気でした？」

母さんは感激するようにそう言った。母さんにとっても、あの事故以来久しぶりの再会だった。母さんの声が微かに震えているのが分

かった。

「お陰様で。元気にやってるわ。山中さんもお元気そうで何よりだわ。」

翔の母――櫻井房江（さくらいふさえ）さんは母さんとがっしり握手をした。以前と変わらない明るい表情。ほっそりとした体型に短い髪。そしてちょっと攻めの入った口調。何も変わらない。健斗の知っている人のままだった。

すると母さんが目を擦りながらさっと彼女が見えやすいように体をよけて、健斗たちを見た。

「ほら、あんたたちも挨拶なさい。」

母さんにそう言われて健斗はちょっと照れくさそうにして一歩前に出た。顔を上げると、房江と目が合った。健斗はゆっくりと微笑んだ。

「えっと……お久しぶりです。」

「お久しぶりっす……」

健斗とヒロが軽く頭を下げて不器用な挨拶をした。するとそれに満足そうに房江は大きく頷いてにっこりと微笑んだ。

「変わってないわね～？健斗とヒロッ！でも随分と背伸びたんじゃない？」

「えぇ……まぁ……」

「あのガキンチョだった健斗がね〜？すっかり男になっちゃって。」

と言って自ら前に出て、健斗の頭をシャカシャカと撫でてくる。それをされた瞬間、健斗は言い知れぬ感情が胸の中に巻き起こった。房江がよく健斗にやる行為だった。頭を撫でられることを嫌う健斗を知ってか、あえてやってくるのが南ちゃん、そしてもう一人が…房江だった。

懐かしさに胸が震えた。軽く泣きそうな思いだった。

「ヒロも大きくなったね？でも……ヒロは元々大きい方だったか？」

と言ってヒロの肩に房江は手を置いた。ヒロは照れくさそうに小さくはにかんで笑った。

「さっ！入って入って。何にもないところだけど……ゆっくりくつろいで行ってね。」

「お邪魔します。」

父さんが微笑みながらゆっくりと頭を下げた。健斗とヒロは顔を見合わせて可笑しそうに笑った。本当に相変わらずの元気よさに安心したのだ。

玄関に入り、そこで靴を脱いだ。狭い廊下を歩いていくと、やがて広いリビングに入った。

「あなたっ！山中さんたちが来たわよ。」

房江がそう言うと、リビングの奥にある和室から今度は父さんと同い年くらいの男性が健斗たちの前に現れた。黒縁の眼鏡に整った髭は変わらない醫が特徴的だった。

「おぉ～。来たかぁ来たかぁ。いやぁ～！アッハハハハハ。お久しぶりですなぁ～山中さぁん。」

男性は父さんや母さんの方に歩み寄ってきて固い握手を交わした。間延びした口調に少し掠れた声も変わらない。

「お久しぶりです。お元気でしたか？」

父さんが穏やかな表情で握手を交わしながら男性に言った。男性は大きく頷いて笑った。

「いや～、ハッハッハッ。お陰様で何とかやってますよぉ。」

「この間健康診断に引っかかっちゃってね？大変だったのよ。」

房江が呆れるようにそういうと、男性はまた高らかに笑った。

「何の何の。ちょっとばかし尿酸値が高くてね？酒の飲み過ぎが原因のようでしてぇ。いやぁ、しかし山中さんは昔と変わらず若々しいですなぁ？」

「いえいえ、私もすっかり時代遅れの爺ですよ。」

「そうですかぁ？おや……」

男性は奥にいた健斗たちを見つめて、より明るい笑顔になって健斗たちに歩み寄ってきた。

「健斗くんとヒロくんかぁ？うわぁ～！久しぶりだなぁ？元気してたかぁ？」

「おじさん、久しぶりっす。」

「お久しぶりです。」

健斗とヒロはそろって軽く頭を下げた。

翔の父親――櫻井勝則（さくらいかつのり）はニコニコと微笑んで健斗の肩を叩いてきた。

「いやぁ～？大きくなったなぁ？ついこの前までこんなに小さかったのになぁ？」

と言いながら、勝則は自分の腰くらいの当たりまで手を持っていった。健斗はそれを見て可笑しそうにぷっと吹き出した。

「おじさん、やり過ぎ。それいつの話だよ。」

「そぉか？おじさんにとっちゃ、こんくらいの気がしたんだけどなぁ。」

健斗はそれを見ながら、ふっと表情を緩めた。相変わらず何も変わっていない、櫻井夫婦に健斗は大きな安心感を感じていた。

気が少し強いが明るい口調でしっかりした翔の母親である房江。

楽観的でおちゃらけた雰囲気があり、どこか和ませる雰囲気のある翔の父親である勝則。

健斗もヒロもずっと幼い頃から深い親睦のある二人だった。これが櫻井家だった。懐かしい……本当に懐かしかった。

が……まさか健斗の予想を反したことがまさにこの瞬間起きた。

「……ほら、凛花（りんか）。こっちにおいで？」

「……へ？」

「……は？」

房江が手招きしながら和室の奥から誰かの名前を呼んだ。するとだった。小さな女の子がひょこっと顔を覗かせた。くりくりとした大きな目をして、恥ずかしそうにもじもじしている。

健斗は唖然として声が出なかった。ヒロも同じで二人同時にその場に固まっていた。

見たことのない女の子だった。

その女の子は房江に連れられてたどたどしく健斗とヒロの前に歩み寄った。

小さくて、房江と似ている髪型、手にはキティちゃんのぬいぐるみを持っている。可愛らしい女の子だ。

健斗たちが圧倒されていると、房江はゆっくりと微笑んで健斗たちに言った。

「こちらは凛花よ。一年前からうちの養子になった子なの。」

「よ、よよよ養子っ？」

ヒロが大きく声を上げて驚いた。健斗は何とか声を抑えたが、同じ気持ちだった。櫻井家に養子がいるなんて……全く考えなかった。すると房江はきょとんとするような様子で健斗たちを見つめた。

「そうよ。聞いてなかった？」

聞いてない。健斗はジロッと母さんを見つめた。母さんは健斗と目が合うと、決まり悪そうに、誤魔化すように口笛を吹きながら目を逸らした。

――アノヤロー……

すると圧倒されている健斗たちをよそに、房江が身を屈んで凛花の前で手で何かをし始めた。

手話だった。

「このお兄ちゃんたちは、ママと、パパの、昔からのお知り合い。ちゃんと挨拶なさい。」

慣れた手つきで手話を済ますと、凛花は小さく頷いて健斗たちの方を見た。

すると女の子も左手の上に右手を乗せて、ゆっくりと体といっしょに下げた。

「“こんにちわ”だって。」

房江が微笑みながらそう言った。健斗は戸惑いながら笑顔を作ろうと勉めて「こんにちは。」と言った。

健斗は凛花と同じ目線で、凛花のくりくりした目を見つめた。目がなんとなく……

「……翔に似てる……」

「でしょっ？」

健斗がそう口にすると、房江が嬉しそうにそう言った。健斗はそれを聞いてゆっくりと顔を上げた。

「目が似てるのよね……あの子に、なんとなく。不思議な縁よねー？」

「……この子……耳が？」

「あ、そうなの。生まれつきみたいなのよね。」

「そっか……」

すると凛花は房江の服を引っ張った。房江はそれに気がつくと、ゆっくり凛花に視線を向ける。

すると凛花はたどたどしい手話で大きく手を開いたり、顔に指をさしたりして見せた。健斗たちには何を意味しているのかは理解できなかったが、房江は小さく何度も頷いた。

すると房江は健斗たちの方を見て困ったように笑った。

「あなたたちが笑ってないから、少し怖がってるみたい。」

「えっ？」

「この子、耳が聞こえないからか分からないんだけど……人の表情を読み取るのよ。その上警戒心も強くてね。」

といいながら房江はゆっくりと凛花の頭を撫でた。凛花は気持ち良さそうに房江に甘えると、突然振り返って小さな足取りで走っていった。

彼女が走っていった先はソファーに座っている勝則の元だった。勝則は凛花を抱え、その目の前に座っている父さんと母さんに紹介させた。

健斗はゆっくりと立ち上がってその子を見つめた。

「手話が出来るなんてすごいですね。今いくつなんです？」

健斗と同じように並んで凛花を見つめていたヒロがそう言った。確かにあの年で手話を覚え、それを使いこなすなんてすごい。すると房江は大きく頷いた。

「でしょ？賢いわよね。今年で五歳なんだけど……三歳には手話が使えてたらしいの。」

ヒロは感嘆の声を上げた。三歳で手話を使えてたなんて驚きだ。ものすごく賢い子なんだろう……

もしかしたら手話をパズルか何かのように思ったのかもしれない。あの子にとって、手話は遊びと同じなのだ。

「……生まれて間もない頃に捨てられたの。」

「え……」

房江が腕を組みながら、凛花を見つめながら言った。凛花は母さんに抱かれて嬉しそうにしている。

「公園のベンチに捨てられていたの。五年前、暗い公園のベンチの上に捨てられているのを通りかかった人が発見してくれてね。」

「……どうして……」

「分からない……もしかしたら障害を持って生まれてきたことに、大きな理由があるのかもしれないけど……」

それから孤児院で四年間過ごして育ったのだという。そして櫻井夫妻は、彼女を一年前に養子に迎えいれたのだ。

健斗はもっと色々と話を聞きたかったが、それより先にやることがある。

「さっ！そんな話よりも、あの子とも会ってもらえるかしら?きっとあの子も今日っていう日を楽しみにしてたはずよ。」

房江にそう言われて健斗とヒロは見合ってゆっくりと頷いた。房江に連れられて、健斗とヒロは和室の方に向かった。

「突然ですみません……」

健斗は和室に入りながら房江にそう言った。櫻井夫妻を訪問することが決まったのはついこの間のことだったのだ。

なのに、房江や勝則は快く迎え入れてくれた。

「何言ってんのよ。あんたたちが来るっていうならいつだって歓迎するわ。小さい時からの付き合いなんだから。」

房江は座布団を二枚用意しながらそう言った。健斗はヒロと顔を見合わせて小さく笑った。

「さっ、どうぞ。中に入って?」

健斗たちは言われるまま、ゆっくりと和室の中に入った。中は結構広く、六畳半はあった。そして房江の座る目の前に、綺麗な仏壇があった。線香がすでに二本立っている。おそらく母さんたちによるものだった。房江も線香を立てると、鐘を叩いて静かに目を閉じる。健斗たちはそれを黙って見つめていた。

しばらくすると房江は顔を上げて、ゆっくりと健斗たちの方を振り向いた。

「さっ、どうぞ。」

健斗とヒロは言われるまま一歩前に進んで、ゆっくりとそこに座った。

健斗は顔を上げて綺麗な仏壇を見た。仏壇には色々備えられていた。翔が幼いころに遊びに使っていた玩具やゲーム機、小学校のときに

使っていた練習着や膿当てにランニングシューズ……そして……

健斗たちの記憶にある姿の、最後の笑顔で写っている翔の写真が飾られていた。

第9話　新たなる決意　P．53

どれくらい長い時間、仏壇の前で手を合わせていたのだろう。健斗は目を閉じて、手を合わせ、目の前にいる翔に自分の今の思いを告げていた。ヒロも健斗と同じように、ひたすら目を閉じて手を合わせていた。

その間房江は一言も発さず、二人を見つめていた。健斗たちの気持ちを推し量って、気の済むまでそうさせてくれたのだ

健斗は静かに幼い頃からの記憶を徐々に取り戻していくように、様々なことを思い出していた。不思議だった。今まで全く思い出せなかったことが色々と思い出せる。

堅かった引き出しが開くように健斗の頭の中に様々な思い出が飛び交った。

今まで封印していたのかもしれない。翔が死んだあの日を境に、健斗の古い記憶は閉ざされていたのだ。幼いときからあの日にかけて、閉ざされた記憶が今……健斗はすべてを取り戻したような心地だった。

ふと気がつくと、白い世界に自分は立っていた。何もない真っ白な世界。健斗は一人そこに立っていて、そして遠くにいる誰かと向き合っている。

中学校二年生のままの翔だった。今や健斗よりもずっと背が小さいけれど、確かな存在がそこにあった。

翔は何も言わなかった。その代わり、健斗の好きな、大好きなあの笑顔を見せてくれた。声は聞こえない。温もりも感じない。でもその笑顔は確かに健斗にはっきりと見えた。

笑顔で大きく手を振っている翔に、健斗は小さく呟いた。

――ありがとう……

翔は徐々に消えていた。笑顔を残して、徐々に真っ白な世界に吸い込まれていく。

やがて健斗はすっと目を開いて、再び前を見つめると、そこにはもう翔はいなかった。翔ではなく、仏壇があるだけだった。何となく寂しい気がした。けど……これでいいんだ。

気がつくとヒロも目を開いていた。健斗とほぼ同時だったらしい。健斗とヒロは顔を見合わせてまた可笑しそうに笑った。

「……終わったかしら？」

房江が表情を緩めながら健斗とヒロにそう言った。健斗とヒロはゆっくりと振り返った。健斗は小さく笑って、「はい。」と頷いた。すると房江も安心するように笑った。

「……あの子も幸せだったと思うの。」

房江は静かにそう言った。房江も同じように目を閉じて、翔がいたときの記憶を思い出していた。

「あの子は……翔は、たった十四年間しかこの世で生きることが出来なかった。けど、あなたたちと過ごせた時間は……あの子にとってものすごくかけがえのないものだった。」

そして房江はゆっくりと目を開けてにっこりと微笑んだ。

「だから翔もきっと満足してるわ。天国であなたたちに今でも笑いかけてる。私には……わかるの。」

健斗はその言葉を受けて何も言えず、小さく笑って黙って頷いた。今まさに、そうだったのかもしれない。健斗の中で翔は笑顔を見せてくれた。それだけで充分だった。

ずっと前に進めないでいた。ずっとずっと……自分が生きていることに苦痛を感じながら、たった今まで生きてきた。

でももう違う。

今、やっと整理が出来た。もう迷わない。自分はまた新しい道が拓かなければならない。翔のいないこの世界を、自分が自分自身で切り開いていかなければならない。

そうだ。新しい世界が始まるのだ。

健斗はすっと房江と向き直った。そして真剣な表情で小さく頭を下げた。

「……おばさん……俺……今までずっと……ずっとずっと悩んでたんだ。翔のいない世界がただ辛いだけで、こんな世界生きてるだけ無駄だって……ずっとずっとそう思ってた。」

房江は何も言わずに頷いた。健斗の気持ちをしっかりと受け止めてくれていたのだ。

「でも……もう違うんだ。俺は翔がいないこの世界を、自分自身で新しい世界に変えていく。そう決めたんだ。だから俺……もう一度サッカーを始めるよ。」

健斗は大きく息を吸い込んだ。目の前に新たな世界が広がっていた。

「翔はもういないけど……もう一度やりたいって、“俺”がそう思ったんだ。だから俺……」

「わかってる。もう大丈夫よ。」

房江は健斗の手を握った。薄らと目に涙を浮かべているのが分かった。健斗の新たな決意に感激しているようだった。

「私はいつでもあなたたちのことを応援してる。だから……思いっ切りやりなさい？あなたたちだって私からしたら、翔と同じくらい大切な息子と同然なんだから。」

「おばさん……」

「翔の分まで、あなたたちはしっかり生きるのよっ？それが、私からの約束。いい？」

健斗はそう言われて目を伏せて小さく頷いた。ヒロも小さく頷いていた。ヒロの肩が震えている。滅多に泣かないヒロが、涙を流しているのが分かった。健斗も泣きそうになったが、必死でこらえた。

今は笑っていたい。そう思ったのだ。

房江の手は暖かかった。その温もりは、どこか翔と似ていて……やっぱりこの人はずっとこの先も……翔の母親なんだなっと思った。

「……あ、そうだ。」

健斗は思い出すようにして、身を翻して手を伸ばし自分の持ってきた荷物を掴んだ。

「実は今日、これを返そうと思って……」

健斗はそう言いながら鞄の中から少し大きい箱を取り出した。房江はそれを見ただけでそれが何だか分かったみたいだった。健斗は箱を房江の前に置いて、ゆっくりと開けた。

それは翔が生前に使っていたスパイクだった。そのスパイクは松本事件のときにも使った大切なものだった。まだ新しいもので、翔が死んでからずっと健斗が持っていたものだった。

房江はそれを見ると、懐かしそうに笑った。

「これ……翔に買ってあげた最後のスパイクね。」

「……はい。」

「中二の夏の大会……すごく張り切ってた翔に、高いスパイクを買ってあげたんだったわ。あの子、スッゴい喜んで……」

房江は言葉を詰まらせ、目を逸らした。目から涙が零れていた。そ

れはそのときの翔の姿をはっきりと思い出していたからだった。房江にとっても、このスパイクは大切な思い出の品だった。

それを健斗は知っていた。何故なら、中二の夏の大会……健斗とヒロ、そして翔が出ることのなかった大会に向けて新調したスパイクだということを知っていたからだ。

翔は初めて高い良いスパイクを買ってもらったと言って、部活中ずっとはしゃいでいた。その時喜んでいた表情を健斗は今、鮮明に思い出すことが出来た。

そのわずか三週間後に、翔は亡くなった。残ったのは、恐らく毎晩、毎晩磨いて大切にしていた綺麗なスパイクだった。

だから健斗は今日、そんな大切なスパイクを房江に返そうと考えていたのだ。

房江は目を拭いながら、小さく笑って健斗たちの方を見た。

「……ごめんね？つい年を取ると……涙腺が緩んでるのね。」

フフッと笑って房江はそのスパイクを見つめた。健斗とヒロはまた顔を見合わせて表情を緩めた。

「じゃあこれ……」

健斗が房江の方に寄せようとすると、房江はそれを制するように健斗の手を止めた。

「いいえ。これはあなたにあげる。」

「えっ？でも……」

健斗が戸惑うように言うと、房江はゆっくりと微笑んだ。

「いいのよ。このスパイクだって、ただ飾っておくなんてもったいないわ。それに……翔だってきっとそれを望んでる。」

「……」

「だから……ねっ？」

「……はい。ありがとうございます。」

健斗は小さく笑って、それを受け取ることにした。翔との思い出が詰まった大切なスパイクだった。しっかりと大切に使わせてもらおう。

するとだった。

さっきまでリビングで談笑しているはずだった、凛花が和室の方にとことこと歩いてきた。そして母親である房江の前に座って、房江を見上げた。

凛花は不思議そうな顔をして房江の服を引っ張って自分に注意を引かせた。すると、またたどたどしい手話で何かを伝えていた。それは健斗が見ていても読み取れるものだった。

――ママ、どうしたの？

凛花は表情を読み取るのに優れていると房江が言っていた。きっと泣いている房江を心配してそう言ったのだろう。房江は微笑んで、「何でもないのよ。」と言って凛花の頭を撫でた。

健斗はその様子を微笑ましく見ていた。もしかしたら櫻井夫妻が自分の息子の死から立ち直ることが出来たのは、この凛花のおかげかもしれない。

健斗は凛花の肩をとんとんと叩いた。凛花はびっくりして健斗の方を見た。健斗は凛花ににっこりと微笑んで言った。

「……ありがとう、凛花ちゃん。」

きっと凛花にはその意味が伝わらないだろうし、何を言ったのか聞こえてもないだろう。それでも良かった。

凛花は案の定、不思議そうに首を傾げた。しかしすぐにその後、嬉しそうににっこりと微笑み返してくれた。

やはり、どことなく翔の笑顔と似ていた。

第9話　新たなる決意　P．54

麗奈は地図を頼りに、全く知らない道を歩いてた。部活が終わり、日が傾きかけていた。日が暮れるまでにはそこに着きたかった。

でもこの辺は麗奈は来たことがなかった。神乃高とは全く違う道で、麗奈は少し不安を感じながらも地図を読み取りながら先へ先へと進んでいた。

すると麗奈の左手に大きな坂が見えた。麗奈は少し小走りでその坂に前まで走って行った。

麗奈はその坂の前で立ち止まり、もう一度地図と見比べてみた。

この坂を上れば、神乃中だってこの地図には書いてある。少し不安だが、多分大丈夫だろう。麗奈は意を決してその坂を上り始めた。

緩やかな坂だったが結構長く、麗奈は息を切らしながら、長い坂を上っていった。ここまで来るのにかなり時間をかけてしまった。どうせだったら、元神乃中の人に案内してもらうんだった。それこそ、奈津紀とかに。

でも――

と考えていると、坂から子供たちが何人か下りてくるのが見えた。どうやらこの先に学校があるのは間違いないらしい。中学一年生くらいの四人組の男の子が麗奈を見ると、元気よく挨拶をしてきた。

「こんにちはー！」

「あ、こんにちは。」

麗奈は立ち止まってにっこりと微笑んで挨拶を返した。こうして挨拶をされると気持ちよいものだ。

「神乃高の人ですかぁ！？」

「バカッ！お前見れば分かるだろ。」

「うちの中学に何か用ですかぁっ？」

どうやらこの子たちは部活帰りらしい。何の部活かはちょっと分からないが……何しろ彼らは制服だった。麗奈はそう尋ねられて、微笑みながらゆっくりと頷いた。

「あ、うん。えっと……ここの先生に用があって……南先生っているかな？」

すると男の子たちは無邪気な笑顔を見せながら大きく頷いた。

「南ちゃん、いるよなぁ？」

「うん。どうせまた保健室でお茶でも飲んで暇してるんじゃない？」

「怪しい薬品作ってるかもっ！」

そう言って男の子たちは笑い合っていた。怪しい薬品って……一体どんな先生なのだろう。だが相当慕われている先生ではあるらしい。

ともかく学校にはいるということが分かった。

「そっか。この先行けば学校なんだよね？」

麗奈がもう一度聞くと、寛太みたいな坊主頭の男の子が大きく頷いた。

「そうっすよ。」

「そっかぁ。ありがとうね♪」

麗奈がにっこりと微笑んで笑うと、男の子たちは表情を強ばらせた。すると突然四人で罵り合い始めた。

「あ、お前顔赤くなってんぞ！」

「はぁっ？なってないしっ！お前の方こそ赤いぞっ！お姉さんが可愛いからってさ。」

「お姉さんにドキドキしてんのかよー。」

「そういうお前だってっ！」

「お、お姉さん今度僕らとお茶しませんか。」

麗奈はそんな四人の様子を見ながらクスクスと笑った。中学一年生と言っても立派な男の子なのだ。何だか可愛かった。お茶なんて、どこで覚えた口説き文句なのだろう。

「ごめんね？お姉さん、彼氏がいるから。ありがとう♪みんな気を

つけて帰ってね？」

麗奈はそう言いながら四人の男の子たちに手を振りながら歩いて行った。男の子たちは残念そうに唸りながら坂を下っていった。どうやら話題はすでに、明日のテレビ番組へと移っているみたいだ。

彼氏か……本当にそうなったらいいのにな。と麗奈は少し考えてみた。

だけどそんなこと起こり得ないだろう。何故なら健斗は麗奈のことをただの家族だと思ってるし、さらに健斗には結衣がいる。

麗奈は自嘲気味に笑った。それでもいいんだ。好きな人のために何かしてあげたいと思うのは当然だ。だから麗奈は今こうして神乃中に向かっているのだ。

坂を上り切ると、目の前に校門があって、それを通ると校庭と校舎が見えた。麗奈が予想していたのと違って、校庭は結構広々としていた。校舎からは生徒が出てきて、帰路についている。きっとあの男の子たちと同じ、部活か何かの帰りなのだろう。

麗奈は全体を見渡しながらゆっくりと学校の敷地内を歩いていた。すれ違う度、生徒から挨拶をされて麗奈もそれを笑顔で返していた。

――ここが健斗の通っていた中学か……

きっとこの中で楽しいこともあれば辛いこともいっぱいあったのだろう。

健斗にしたらそれがちょうど半々だったに違いない。

何だか健斗が持っている昔の世界を歩いているみたいで楽しかった。

どうやら校舎は小さな丘の上に立っているらしい。校庭からは見える景色は和やかで美しかった。自由な校風が感じられる。素敵な学校だ。

麗奈はそう感じながら校舎の中に入った。来賓用スリッパが置かれていて、麗奈はそれに履き替えるとふぅっと一息吐いた。さて……肝心な保健室はどこなのだろうか？

すぐ目の前に職員室があって、そこで聞こうと思ったのだがどうやら必要なしだった。

麗奈の横を挨拶しながら通り過ぎようとしていた女の子二人組に声をかけた。

「あの、ちょっといいかな？」

「はい？」

三つ編みで眼鏡をかけた女の子が振り返って麗奈を不思議そうに見上げた。少し戸惑っているようだ。麗奈は安心させるようににっこりと微笑んだ。

「保健室ってどこにあるのか教えてもらってもいいかな？」

「ほ、保健室ですか？保健室なら……そこの角を曲がったところです。」

麗奈はその指で指し示しめされた場所を見た。そして視線をゆっくりと戻してまたにっこりと微笑んだ。

「そっか。ありがとう♪気をつけて帰ってね？」

「は、はい。」

三つ編みの女の子とショートカットの女の子は麗奈に素早く頭を下げてきた。麗奈も微笑みながらお辞儀を仕返し、保健室へと向かった。

「綺麗な人だったね～？」「神乃高の人かなぁ……素敵な人。」というような会話が聞こえて麗奈はちょっと気恥ずかしい気がした。

少し歩いて女の子の言われた通り、角を曲がったところに、保健室と書かれた標識を発見した。麗奈はその教室の前まで行き、ドアに貼られてる物を見た。

先生がいるかどうかというものを示す表だったが、何だか変なイラストがついている上に少し勝手が違った。

・暇ーっ！！ただちに入ってこいっ！！

・お茶飲みたいんなら入れば？

・暇じゃないけど、別に入ってもいいよー。

・めちゃくちゃ忙しい！！出来れば来るなっ！！

・新しい薬品を開発中……死にたくなかったら入るべからず……

・いませーんっ！テヘッ☆

「な、何だろう……これ……」

あの男の子たちが言っていたことってこのことだったのか……

一応「・お茶飲みたいんなら入れば？」という表の横に緑色のマグネットが置かれていた。

「……入って……いいんだよね？」

麗奈は少々戸惑いながらドアを軽く二、三回ノックをした。しかし返事がなかった。なのでもう一度ノックをする。

しかしまた返事がない。いないのだろうか？

「……失礼しまーす……」

麗奈はおそるおそるドアを横に引いて開けて、中を覗いてみた。すると、神乃高の保健室とほとんど変わらない至って普通な保健室だったが、その中に白衣を来た女性が一人背中を向けているのが見えた。何かブツブツ言っている。

「……っし……っし……こだ……」

「あ、あのー……」

麗奈がおそるおそるその女性の背中に声をかけた。しかし女性は全く振り向きもしなかった。聞こえていないのだろうか？麗奈は戸惑いながら中に入ってからドアを閉め、ゆっくりと周りを見渡した。入ってから分かったが、少し薬品臭かった。

「……っし……よしっ！そうだっ！」

「ほぇっ？」

女性が突然歓喜の声を上げ始めたので麗奈は驚くようにしてその女性を見た。女性の耳からイヤホンが垂れているのが見えた。

「そうっ！！やったぁ！！きゃ～っ！！来たぁ～！！さっすがあたしのエンブレム！！そうよっ！そのまま突っ走りなさいっ！！……あら？」

女性が踊るように振り返ると、麗奈の存在に気づいたらしく目を丸くした。麗奈はポカーンと口を開けて唖然としていた。女性の手には古めいた黒のポータブルラジオがあって、そこから長い黒いコードが女性が耳にしているイヤホンまで伸びていた。

「……えっと……どちらさん？」

女性は首を傾げて麗奈に尋ねた。麗奈はしばらく驚きと戸惑いで言葉が出なかった。

第9話　新たなる決意　P．５４（後書き）

健斗やヒロの恩師である、南先生の登場です。

色々と個性溢れるキャラにしたくって前話までとは打って変わったギャグ要素満載に溢れさせていただきました。

それにしても、麗奈がここまで圧倒されるなんてなかなかない光景で書いてて自分でも笑っちゃいました（笑）

ちなみに南先生の言っていた「エンブレム」とは、「アースエンブレム（Ｅａｒｔｈ　Ｅｍｂｌｅｍ）」という実在する競走馬です。

別に何でも良かったのですが、名前がめちゃくちゃかっこいいので完全に作者好みで使わせてもらいました（笑）

競馬、全然知らないけど、アースエンブレム頑張れーっ！！

第9話　新たなる決意　P．55

「ア、アッハハハハ～……いや～、ごめんねぇ～？見苦しいとこ見せちゃって。」

陽気な女性は自分の失態を笑って誤魔化すように、ソファーの辺りを片付けていた。その辺には何やらビーカーなどの実験器具があって、その中に入っている液体から薬品臭い匂いが発せられている。

「まさかこの時間帯に人が来るなんて思ってなかったもんだから。この間買った馬券の結果が気になってね……あっ、どうぞ座って？」

「こ、こちらこそすみません。急にお邪魔しちゃって……」

「あら、いいのよ。ちょっと待ってて？すぐお茶出すから。」

麗奈は少々戸惑いながら綺麗に片付けられたソファーに座った。

「やっぱりお茶は静岡に限るわよねー♪」

鼻歌を歌いながらお茶を入れている女性。この人が……この間ヒロが話してくれた、南莉子先生。通称南ちゃんだ。

何ていうか、明るい人だなぁと麗奈は思った。ヒロが確かそんな風に話していたけど、まさにその通りである。一風変わった養護教諭だが、生徒からの信頼は厚いらしい。

結構若く見えるが、ヒロの話によれば一児の母だと言っていた。長い黒髪を一つに束ねている。肌も艶々していて、本当に若々しい。

南先生は麗奈の前にお茶を持ってきてくれた。熱いお茶が湯呑みから湯気を立てている。

「熱いから気をつけてね？」

「あ、はい。ありがとうございます。」

麗奈は恐縮しながら頭を下げた。南先生はにっこりと微笑んで、麗奈と対面するようにゆっくりと座り、自分で入れたお茶をゆっくりと呑んだ。

「えっとそれで？大森さん……だったかしら。神乃高の一年生って言ってたけど……あなた、ここの卒業生じゃないわね？」

「あ、はい。えっと訳あって……東京の方からこっちに来て……」

「へぇ、わざわざ東京からっ？」

南先生は少し驚いたような顔を見せた。麗奈は恐縮そうに小さく苦笑いを浮かべて肩をすくめた。

「で、そんな大森さんが私に何の用かしら？」

お茶を飲みながら、南先生は単刀直入にハキハキした口調でそう言った。麗奈は小さく頷いてみせた。

「はい、あの……先生は――」

「“南ちゃん”でいいわよ。みんなにそう呼ばれてるから。」

そう言われて麗奈は少し困ってしまった。そんなこと言われても、麗奈はこの人と初めて会ったばかりなのだ。別に人見知りをする方ではなかったが、そのように呼ぶのは少し抵抗があった。それを察したのか、南先生は表情を緩めた。

「まっ、いいや。続けて？」

「あ、はい。あの……山中健斗を覚えてますか？」

麗奈がその名前を口にすると、南先生は少し目を見開いて麗奈を見つめた。

「……山中くんのことかしら？」

「あ、そうです。」

「もちろん、覚えてるわよー。あの問題児でしょー？へぇ～……そっかぁ。山中くんのお知り合いなんだ。」

南先生は少し興奮気味でそう言った。問題児っていうところが麗奈にとって意外だった。昔の健斗は、そんなにやんちゃ坊主だったのだろうか。

「ま、まぁ、知り合いというか……友達というか……」

「……あ、もしかして……山中くんの彼女さんかしら？」

南先生がニヤリと笑いながら探るような言い方で麗奈にそう言ってきた。そんなことを言われて麗奈は顔を赤くして慌てて首を横に振

った。

「い、いえっ！そういうのじゃないんです。えっと何て言うか……訳あって今いっしょに暮らしてるというか……」

「いっしょにっ！？」

南先生はそのことが一番驚いたらしく、大きな声を上げた。ああ～もうっ！と麗奈は心の中で叫ぶ。何でもっと上手い言い方が出来ないのだろう？

「あ、あのいっしょに暮らすと言っても、私が一方的に健斗くんのお家でお世話になっているというか……そういう疚しい意味とかじゃなくって……」

「あら、そうなの。なぁ～んだ、残念。てっきりお付き合いを飛び越えて同棲してるのかと思っちゃった。」

南先生は可笑しそうに声を立ててケラケラと笑っていた。だが一方麗奈はすでに疲労のようなものを感じていた。何だかこの人相手だと、ペースが崩されるような気がしていた。

そして、南先生は健斗のことを懐かしむように笑っていた。

「そっか～……山中くんかぁ。元気にしてる？あの子。」

南先生は困ったように笑いながら麗奈にそう訊いてきた。そう、南先生も健斗の事情はよく知っているはずだった。それは恐らく麗奈よりもずっと深く知っていることだろう。

麗奈は表情を緩めて微笑みながら頷いた。

「はい♪毎日楽しそうにしてます。」

「本当にっ？あの子が？」

「はい。」

「そう……それなら良かった……」

南先生は安心するように小さく笑ってため息を吐いた。きっと健斗の状態をずっと気にしていたのだろう。翔が死んでから、健斗はまるで人が変わったように孤独の日々に陥っていったと言っていた。そしてそのまま、この神乃中を卒業したのだ。

南先生が心配するのも当然だった。南先生はゆっくりと窓の外を眺めていた。ここの窓の外からは広いグラウンドが見えていた。

「……あの子がここの一年生のときねー、私がまだこの学校に新任したばかりだったの。」

その話は聞いていた。今から約三年くらい前に南先生はここの学校に新任したばかりだったと。

「結構無茶する子でさー。部活中とかしょっちゅう怪我してはここに来て……本当に手のかかる子だったわ。」

「そうなんですか。」

麗奈はクスッと笑いながらそう言った。その話も麗奈は少しだけ聞

いたことがあった。健斗のお母さんからそのような話を聞いていた。

サッカーをやってたころは擦り傷や何やらをいっぱい作ってきて本当に大変で手のかかる子だったって。そこからも相当元気のいい子だったということが想像出来たのだが、やっぱりそうだったらしい。

今の健斗からは想像の出来ない姿だ。

南先生は視線を戻して、手の中の湯呑みをじっと見つめた。

「それがいつからかねー？急に笑わなくなって……あのときの元気良さが売りだったのになぁ～……」

「……」

「あ、ごめんね？ちょっと懐かしんじゃって。」

南先生が照れるようにそう言うと、麗奈はクスッと笑ってゆっくりと首を横に振った。

「いえ。私も先生の気持ち、なんとなくだけど分かります。」

「そう？」

まるで健斗のことを本当の我が子のように扱うような言い方だった。よっぽど健斗に思い入れが深いのだろう。

竜平は健斗にとって第二の父親のような存在なら、南先生は健斗にとって第二の母親のような存在だと麗奈はなんとなく考えていた。

「あ、それで用ってのは何だっけ？」

南先生は急に本題に入るようにそう言ってきたので、麗奈も表情を強ばらせた。

「あ、はい。実は健斗くんから頼まれたことがあって……」

「山中くんから？」

「はい。……えっと……」

麗奈はそう言いながら、鞄を開けてある物を探し始めた。そしてそれを見つけると麗奈は手に取って見せた。それは前夜、健斗から預かっていた手紙のようなものだった。

「これを健斗くんから預かりまして、先生に渡して欲しいって。」

「私に？……何かしら。」

南先生は少し戸惑いながらその手紙を受け取った。そしてその手紙を開いて、内容に目を通し始めた。

麗奈はその手紙の内容を知らなかった。もちろん、その中身を見ようとも思わなかった。それはエチケットというか、麗奈が見ることによって内容を汚したくないとなんとなくそういう気持ちが表れたからだった。

健斗は前夜、麗奈の部屋にやってきてそれを渡してきた。本当なら自分が直接行きたかったが、生憎都合が合わないからよろしく頼むと麗奈に頼んできたのだ。

今日は健斗はヒロたちといっしょに、翔の両親に会いに行く日だったからだ。

南先生に会いに行って欲しい、という頼み事自体は二日前に聞いていたけど、それが何のためなのかは麗奈は何も知らない。ここに来ればどうせ分かることだろうと思ったからだった。

しばらく黙って、南先生は真剣な表情で手紙と向き合っていた。やがて、南先生は手紙を閉じた。一息吐いてから、どこか嬉し気に笑った。

「……そっか……あの子ようやく……」

「……」

「……あ、ちょっと待っててね。」

南先生はそう言うと立ち上がって、机の方へと向かった。そしてその引き出しを開けて何かを手にし、するとゆっくりとソファーの方に戻ってきた。手には小さな可愛い柄の三つの紙袋が収まっていた。

麗奈はそれを不思議そうに見ると、紙袋の表面にはそれぞれ名前が書かれていた。健斗、ヒロ、翔と書かれている。南先生は紙袋から中身を取り出した。

すると机の上に並べられたのは、黒いリング状の物だった。ゴムのような素材で出来ていて、真ん中に赤い印が刻まれている。ブレスレットだろうか?どこかで見たことなあるやつだった。

「……これ、何ですか？」

麗奈が尋ねると、南先生はゆっくりと頷いた。

「スポーツブレスレットよ。」

「スポーツブレスレット？」

「そう。シリコン素材で出来たブレスレットなんだけどね、中にホログラムっていうのが内蔵されてて、そこから出す電磁ホログラムの効果でボディーバランスを上げるやつなんだけど……スポーツをやってる人とかがよく使ってるものよ。」

「へぇ～……」

なんとなくスポーツをやってる人がつけているのを確かに見たことがあった。デザイン性に優れていて、普通につけていてもカッコ良さそうだ。

でも……これが何なのだろう？

「……これ、山中くんたちの絆の証みたいなもんなのよ。」

「え？」

麗奈は顔を上げて南先生を見た。南先生は微笑みながらそのブレスレットを見つめていた。

「中学一年生になったときに三人で買いに行ったらしいの。三人でお揃いのやつをね……中学の大会で全国に行くんだってはり切って

たのよ。それはその願掛けみたいなもの。」

「そうなんですか……」

いかにも健斗らしいことだった。よっぽどその当時、やる気と気合いに満ちていたのだろう。健斗やヒロにとっては絆の証のようなもの。幼い頃から共にしてきた、大切な品物。

「……翔くんが亡くなってから、あの子がこれをゴミ箱に捨てようとしてね……」

「え？」

「私は何度もそれを拾って彼に返そうとしたの。でもあの子は……受け取ろうとしなかった。そんなものもういらないって。そう言って……」

「……」

「だから私は言ったの。これは私が預かっておく。あなたがいつの日か本当の意味で前に進むことが出来た日に、これを取りに来なさいって。」

そうか……だから健斗は南先生に会いに行く必要があったのだ。だから本当は自分が行きたかった。自分自身でこれを受け取りたかったのだ。

でも都合が合わないせいで、それを受け取っている時間がなかった。だから、麗奈に任せてきたのだ。

「あの子はもう……前に進もうとしてる。だから、これを返さなきゃね。」

手紙の内容はそのことだったんだな、と麗奈はようやく納得した。南先生も今健斗の身の周りに何が起ころうとしているのか、理解したようだった。

南先生はゆっくりと顔を上げて麗奈ににっこりと微笑んだ。

「悪いけど、これを山中くんに……お願いしてもいいかしら?」

南先生にそう尋ねられた。もちろん麗奈の答えは決まっていた。

「はいっ!ちゃんと健斗くんに、渡しておきます。」

麗奈がそう言うと、南先生も笑って頷いた。そしてそのブレスレットを元の紙袋にそれぞれ閉まって、麗奈に渡してきた。麗奈はそれをしっかりと受け取った。三人の絆の証は、何となくどこか重く感じた。

麗奈はそれを大切にしまうと、南先生がクスッと笑って言ってきた。

「……けど、まさかこれをあなたに任すなんてね。」

「え?」

南先生はクスクスと笑いながらそう言って、麗奈に言った。

「とっても信頼されてるのね?あの子に。」

「え……あ……」

麗奈はそう言われると顔が火のように熱く感じた。健斗に信頼されている。何だかそれを人に言われると、すごく恥ずかしいというようにに照れ臭かった。

「あの子って自分の気持ちを素直に表現出来ない子なのよ。」

「そ、そうなんですか。」

「そうよー。不器用で大変かもしれないけど……あの子のことよろしくね？大森さん♪」

南先生はそう言いながらウインクをしてきた。まるでヒロと同じことを言う、と麗奈は思った。

顔から火が出るほど恥ずかしかったが、それ以上に嬉しさを感じた。麗奈は大きく笑って「はいっ。」と言って頷いた。

南先生に校門の外まで送られて、麗奈は神乃中に続く坂をゆっくりと下っていった。日はほとんど沈んでいて、道は薄暗く少し寒かった。

時計を見ると、五時半を過ぎていた。早く家に帰ろう。

麗奈は心踊るような気持ちで坂を一気に下っていった。

坂を下り、さっき来た坂の前にたどり着いた。こっから確か、右に曲がっていけば知っている道に出るはずだった。でも少し不安だから地図を見ようと思い、鞄を開けようとした。そのときだった。

「遅いっ。」

「え？」

後ろ頭をこつかれて、麗奈は慌てて後ろを振り向いた。そこには麗奈の大好きな存在がいて、麗奈を見下ろしていた。

「健斗くんっ！」

健斗は眠そうな目つきで麗奈を見ていた。麗奈は突然の登場に思わず驚きの声を上げてしまった。まさか健斗がここにいるとは思わなかったのだ。

「もう帰って来てたの？」

麗奈が訊くと、健斗は眠そうに大きく欠伸をしながら言った。

「あぁ……結構前にな。」

「そっか……待っててくれたの？」

「まぁな。この辺、お前知らないだろ？」

麗奈は何となく嬉しかった。健斗がこんな風に麗奈のことを気遣ってくれることなんてあまりなかった。健斗は「元々頼んだの俺だしな。」とぼやきながら、照れくさそうに頭を掻いていた。

「それで、南ちゃんに会えたの？」

健斗にそう言われて、麗奈はにっこりと笑いながら頷いた。

「うん。ちゃんと会って話もしたよ。」

「そっか。相手にすんの大変だったろ？」

健斗は可笑しそうに笑いながらそう言った。麗奈もクスッと吹き出して笑った。あのドアの前の表や、競馬のことや、やけに薬臭かった実験器具など、確かに戸惑うことが多かった。

「うん、まぁ、少しね？でもすごく良い人だったよ。」

「ふ～ん……そっか。」

「うん。あっ！そうだ。」

麗奈は渡されたものを健斗に渡そうと思い、鞄を再び開けたが、健斗がそれを制してきた。

「帰ってからでいいよ。今日はありがとうな。もう暗くなるから、早く帰ろう。」

健斗はそう言いながらゆっくりと歩き出した。麗奈はそれを追いかけるようにして健斗の後について行った。

「ここまで来るんだったら会いに行けばいいのに。」

「……今日はやめとく。また日を改めてな……」

「照れてるんだ？」

麗奈がからかうように言うと健斗が少し頬を赤らめた。

「別に……照れてなんかねーよ。」

そんな風に言う健斗が可笑しくって、麗奈はクスクスッと笑った。健斗は不機嫌そうにぶすっとしている。本当に不器用な人だ。

何だかちょっと可愛い……あぁ～もうっ……何でこの人といるとこんなに居心地いいんだろう。

麗奈はそんなことを思いながら、健斗を見上げた。健斗が自分のことを、そんなに信頼してくれているのと同様に麗奈も健斗に対して絶大なる信頼を寄せている。

でもそんなこと今言っても健斗は戸惑うだけだし、この喜びは麗奈の心の中に閉まっておこう。

「あ、そういえばどうだった？翔くんのお母さんとお父さん……」

麗奈が訊いてみると健斗はゆっくりと笑って頷いた。

「あぁ……元気そうだったよ。昔と何も変わってなかった。」

「……そっか。」

「行って良かったよ。ようやく俺の中で、翔に対するわだかまりが消えたような気がする。もう……俺は大丈夫だ……」

「……本当に？」

麗奈がそう訊くと、健斗はすっと麗奈に視線を向けて微笑んだ。

「……あぁ。」

健斗の目は澄んでいて、清々しい表情をしていた。麗奈はそれを見ると心の底から安心するような気持ちを感じた。今まで健斗はずっと苦しんできた。その苦しみから今日、ようやく本当の意味で解放されたらしい。それは麗奈にとっても本当に喜ばしいものだった。

「おかげで色んなこと思い出したよ。昔のこと……ずっと小さいときのことも……お前と会ったときのこともな。」

「えっ？」

麗奈はびっくりして健斗を見上げた。健斗は微笑みながら麗奈を見つめていた。

「小さいとき……初めてお前と会った日のことだよ。はっきりとじゃないけど、俺なんとなく思い出したんだ。」

「そ、そっか。」

麗奈はちょっと気恥ずかしい気持ちがして目を逸らした。麗奈自身もはっきりと覚えてなかった。小学校に上がる前、達也や夏奈と共にこの神乃崎に遊びに来た。

そこで初めて健斗と出会い、滞在期間だった一週間、ずっといっしょにいた。そしてそのとき初めて、麗奈は健斗に対して小さな恋心を抱いていたのだ。

「……でもそれだけじゃないような気がすんだよな。」

「……何が？」

麗奈が訊くと、健斗はゆっくりと麗奈を見た。

「……小学校四年生くらいのときかな？」

「えっ？」

胸がドキッとした。

「何か……俺誰かの葬式に行くために、一度だけ東京に行ったことがあるんだ。」

健斗はじっと麗奈を見つめた。麗奈はその視線を逸らすことが出来ず、吸い込まれるようにして見つめていた。

「そこで俺……河原の近くで女の子に会った。あの歌を……“糸”を歌ってたんだ。泣きながら……」

「……」

「ちょっと上手く思い出せないんだけどさ……あれってもしかして……」

「さ、さぁ～？何のことかなぁっ？私何も知らないやぁっ！！」

麗奈はわざと声を大きくして健斗にそう言った。麗奈の突然の振る舞いに健斗は呆然と麗奈を見ていた。明らかに麗奈の振る舞いは不自然なものだった。

麗奈は高鳴る胸が押さえきれなく、健斗の顔を見ることが出来なかった。その記憶なら麗奈はよく覚えている。

夏奈の葬式の日、泣いている麗奈の元に一人の男の子が来た。その男の子のおかげで麗奈は少し元気が出せた。その男の子の名前は知らなかったが、今の麗奈はそれが誰だったのか知っている。

縁側で同じようなことを言ってくれたとき、間違いなくイメージが重なった。小学校四年生の健斗に、麗奈は励まされたことがあった。

だが、それを今ここで掘り返されることがとてつもなく恥ずかしかった。それは小学校に上がる前のときのことよりも、何だか恥ずかしかった。出来ればそのことを触れずにおきたい。だから麗奈は知らない振りをした。

健斗はそんな麗奈の気持ちに気づいたのかどうか分からない。だが、麗奈の後ろ姿を見て小さくため息を吐いた。

「……そっか。」

麗奈はその声にまたドキッとした。何かを悟ったような言い方だった。

家に着くと、健斗と麗奈は揃って玄関で靴を脱いだ。家の明かりはついていて、どうやらお母さんたちが帰って来ているようだった。

と、思ったら居間の方からお母さんの顔が出てきた。

「お帰りー。」

「ただいま。」

「ただいまー。」

「今ご飯作ってる最中なんだけど、先お風呂入る?」

お母さんにそう言われて、麗奈は健斗を見た。

「どうする?」

「俺は飯食ってからでいいや。お前先入れば?」

健斗はそう言いながら階段を上っていった。麗奈もその後をついていく。一応部屋に鞄をおいて着替えを持っていかないといけない。

「……ねぇ、そういえば明日だね。」

麗奈が健斗の後ろ姿に声をかけながらそう言った。健斗は何も言わず、黙って自分の部屋へと入っていく。麗奈は健斗の部屋の外から健斗を見つめていた。

「……試合は何時からなの？」

「……一時過ぎくらいかな。」

「……間に合う？」

麗奈がそう言うと、健斗は苦笑いを浮かべた。

「分かんない……でも何とか間に合わせるようにするよ。……ところで……あれ。」

「あ、うん。」

麗奈は健斗の部屋に入りながら、鞄を開けて例のものを取り出した。三つの可愛い柄の紙袋。それぞれ表面には名前が書かれていた。健斗はそれを黙って受け取ると、徐に中身を見つめた。しばらく見つめてから、ふっと表情を緩めてそれを丁寧に机の上に置いた。

「……今日はありがとうな。」

「え？あ、ううん。平気。これくらいしか役に立てないけど……」

麗奈は照れながらそう笑って言った。本当ならもっと色々と役に立ちたかったが、麗奈に出来ることは限られていた。

「そんなことねーよ。充分に力になってくれてる。」

「そ、そう？」

「うん。ほら、早く風呂入りに行けよ。飯出来ちゃうぞ。」

健斗にそう促されて、麗奈は小さく頷いて健斗の部屋を出た。部屋を出てから麗奈はチラッと振り返った。

すると健斗は片手に携帯電話を持ち、誰かに電話をかけようとしていた。ヒロだろうか？麗奈はそう考えながら、自分の部屋へと向かって言った。

健斗は電話を手に持って、ダイアルを押した。やるべきことは後一つだった。この時間にかけて、出てくれるか分からないが健斗はとりあえず電話を耳に当てた。

コール音が数回鳴った。するとコール音が鳴り止み、電話の奥から声がした。

「もしもし？」

電話の奥から聞こえたのは、間違いなく……佐奈の声だった。

第9話　新たなる決意　P．56

日曜日の早朝だった。健斗は支度を済ませて、ゆっくりと息を吐いた。外はまだ明けてすらないが、この時間に出ないと始発の電車には間に合わない。

健斗は鞄を持ち、ゆっくりとドアを開けた。家の中はシーンとしている。それも当然だ。今はまだ五時半なのだ。日もまだ明けていない時間。誰も起きていないことは分かっている。

が、健斗は下に行く前になんとなく麗奈のことが気になった。きっと麗奈は寝てるだろう。でもなんとなく出発する前に一目見て起きたかった。

健斗は麗奈の部屋の前まで行き、静かにドアを開けた。ほとんど音を立てず、ゆっくりと麗奈の部屋の中に入った。

部屋の中は暗く、微かに甘い香りがした。

麗奈は静かに寝息を立てて、窓の方向に体を向けて眠っていた。健斗はベッドの方に歩き、麗奈の寝顔を確認した。

よく寝てる……

そう心の中で呟き、健斗は表情を緩めた。本当に……可愛い面してるよなぁ……と健斗はぼんやりと思った。

ここまで頑張れたのも、全ては麗奈のおかげだ。後もう少しで健斗の新しい生活が始まる。それを色んな方向から支えてくれてた麗奈

に健斗は感謝以上のものを感じていた。

何だか不思議な気持ちだ。健斗はいつの間にか麗奈のことを本当に好きになっていた。でも早川のときのようにドキドキとはしない。ただ、安心するような……居心地の良い感覚。一緒にいて自然と暖かくなる気持ちだった。

「……変だよな……本当に……」

健斗は笑ってそう呟いた。するとだった。

「……ん……」

麗奈は寝返りを打つように体をこちらに向けた。このままでは起こしかねない。そろそろ行こう。健斗はそう思い、眠っている麗奈に囁くように言った。

「……ありがとうな……行ってきます……」

健斗はそれだけ言うと、ゆっくりと立ち上がり麗奈に背を向けて部屋を出て行った。そして音を立てないように静かにドアを閉めた。

外は凍えそうな寒さだった。佐奈の見送りに行ったときと同じくらい寒い。やはりこの時期になると、早朝はすっかり寒くなるんだな。健斗は白い息を吐きながら、庭の方へと向かった。

庭から自転車を運ぼうとすると、ゴンタが健斗の存在に気づいたらしく小屋から出てきた。ゴンタは健斗の傍に近寄って、甘えるような声で鳴きながら健斗を見上げてきた。

――どこ行くの？

そう言っているように見えた。健斗は軽く微笑んで見せた。

「……最後にやり残してることをやりに行くんだ。」

ゴンタは首を傾げながら鳴いた。ゴンタには何を言っているのか分からないらしい。いや、分からなくていいのだ。

ゴンタにもいっぱい支えてもらっている。松本事件の日、健斗が前に進むための一歩を踏み出すのを後押ししてくれたのは、間違いなくゴンタだった。

「ありがとうな、ゴンタ。行ってくるよ。」

健斗はゴンタの頭を撫でながら自転車を運んで行った。

自転車を運び出し、それに跨ろうとした。そのときだった。

「うい～すっ」

近くから声がした。健斗はその声のした方向を見ると、そこにはヒロが自転車を押しながら健斗に近づいてくるのが見えた。

ヒロは健斗の傍まで来ると、小さく笑った。

「……とうとう来たな……今日が。」

「……あぁ。」

健斗は小さく頷くと、自転車に跨った。それを見るとヒロも自転車に跨った。そして二人はゆっくりと駅に続く道へと漕ぎ始めた。

「試合さ、確か一時からだったよな?」

「あぁ。」

「……間に合うかな。」

健斗が心配そうにそう呟いた。ノブやリュウタがいるところは県外だ。電車を乗り継いでも三時間近くかかる。

往復を考えると六時間近く。会える時間も限られてるし……試合には間に合うように絶対に帰って来なければならない。

「ちょっと分かんないなぁ……大体、どういう風に会おうかとか決めてんの?」

ヒロがそう聞いてきた。健斗は困ったように頷いてみせた。

「うん。佐奈さんが……そこのところの段取りをしてくれるって言ってたんだけど……」

健斗はそう言いながら、ふと昨日のことを思い出していた。それは昨日帰った直後に佐奈と連絡を取ったときのことだった。

「もしもし？」

電話の奥から聞こえたのは間違いなく佐奈の声だった。健斗はその声を聞いてほっと安心するようなため息を吐いた。

よかった。通じた……

「もしもし？こんばんわ。山中です。」

「山中くんっ？」

佐奈は嬉しさを交えた驚きの声を上げた。健斗はふっと表情を緩めながら続けて言った。

「連絡遅くなってすみません。今、いいですか？」

「えぇ、大丈夫よ。良かった……ずっと待ってたの。あなたからの電話。」

「はい……思ったよりもずっと時間がかかっちゃって……それで――」

健斗はそう言いながら、佐奈にこれまでのことを全て説明した。佐奈は相槌を打ちながら、熱心に話を聞いてくれた。だから健斗も言葉を濁らせることなく、滑らかに話すことが出来た。

あれから起きた変化……神乃高サッカー部の廃部の件や佐久や琢磨のこと、そして……翔の両親とのことなど。

全てを隈無く話したところ、佐奈は自分の知らないところで大きな変化が起こっていたことに少し驚いたようだった。特に、神乃高サッカー部の廃部の件については電話の奥で息を呑む声が聞こえた。

「そう……色んなことがあったのね。」

「はい……それで、急で申し訳ないんですが、明日にでもノブたちに何とか会えないかなって……」

「明日かぁ……ちょっと待ってて。」

健斗はそういう佐奈の言う通り、少しの間待っていた。小さくため息をつきながら、ベッドにゆっくりと腰掛ける。それからしばらく経つと電話の奥に佐奈の声が戻ってきた。

「もしもし?ごめんね。今ノブのスケジュール表をこっそり見てきたんだけど、どうやら大丈夫みたいよ。」

「本当ですか?」

健斗は感嘆の声を上げた。まさか都合よく時間が合うなんて思ってなかった。何だか怖いくらい物事が上手くいく。

「えぇ、大丈夫よ。ただね……明日はちょっと変な時間に練習があるみたいなの。だからあまり時間は取れないかもしれないけど……それでもいいなら――」

「そうですか。少しでも会えるなら……それで大丈夫です。」

健斗がそう言うと、佐奈は安心するように電話の奥でため息を吐いた。

「じゃあ、そういうことで行きましょう。そうね……時間は――」

神乃崎の駅の辺りに健斗とヒロは自転車を止めた。時計を見ると、時間は六時前を指している。そろそろ電車が来る時間帯だった。

健斗とヒロは券売機で切符を買って、すでに働いている駅員に切符を渡し、そのままホームに立った。しばらくすると遠くから電車が来るのが見えて、電車は健斗たちのほぼ目の前で停車した。

健斗たちは素早くそれに乗り込み、他の乗客と同様に席に座った。するとそれとほぼ同時に電車は再び発進しだした。

「まぁ、とりあえず市内まで出るのに時間かかるし。のんびり行こうぜ。」

ヒロがそんなお気楽な調子で健斗に言ってきたが、健斗も同じような意見だった。小さく笑って頷き

「あぁ、そうだな。」

と言うと、健斗は視線を窓の方に向けた。これから訪れる旅に思いを馳せていたのだ。

第9話　新たなる決意　P．57

それから電車に乗ること二時間近くが経った。電車に揺られながら健斗はじっと窓の外を見つめていた。もう日はすっかり明けていた。それもそのはずで、今は午前八時だ。

隣に座っているヒロは眠りこけている。静かに寝息を立てて目を閉じていた。朝早く起きて今にいたるのだから、いかしかたないだろう。健斗は不思議とまったく眠れるような気配がなかった。

むしろその逆。目が完全に冷めていて、気持ちが高ぶっていた。もうすぐ……あの二人に会うことができる。ノブとリュウタに会って、今までのことを……清算しにいくときなのだ。

二人はどんな風に言うだろうか……健斗は少し怯えも感じていた。佐奈からある程度のことを聞いているとはいえ、二人には本当に申し訳ないことをしたのだ。

――早く着いて欲しい……

健斗は過ぎ行く景色を眺めながら、ただそう思っていた。

それからさらに時間が経った。町並みはすっかり神乃崎と変わり建物や何やらがたくさん立っている。市内から電車を乗り換え、着いた町がここだった。健斗はチラッとケータイの時計を見た。神乃崎

を出発してから三時間近く経っている。

次の駅で降りるのだ。そろそろ隣で熟睡してるやつを起こしてやらねば。

「ヒロ、起きろ。もう着くぞ。」

「……ん～……？」

健斗がヒロの体を揺さぶりながらそう言うとヒロは眠そうにしながらゆっくりと目を開けた。大きく体を伸ばして、周り素早く見渡した。

「あ、着いたの？」

「あぁ。次で降りるぞ。」

そうこうしている内に電車は目的の駅にたどり着いた。電車の乗車口から開くと健斗とヒロはゆっくりと電車から降りる。駅のホームは日曜なのにも関わらずたくさんの人で溢れかえっていた。

「うわぁ～……すげー人だなぁ。」

「まぁな。でも市内とあんま変わんなくない？」

「それはそうだけど……うわ、何か自己嫌悪だわ……俺ってやっぱり相当の田舎者なんだなぁ……」

「何言ってんだよ。」

健斗は吹き出して笑いながら改札口に続く階段をゆっくりと降りて行った。周りには忙しそうに駆け降りていく人や、トロトロと降りる人がいて様々だった。確かに色んな人がいる。

特に女子高生が目に映った。神乃高にはいそうにない、いわゆるギャル系の女子高生だ。メイクをし髪は金髪に染めて、すごい爪をしている。ケータイをいじりながら健斗たちと同じように階段を降りている。

「……確かにすごいな……」

健斗は小さく笑いながらそう呟いた。

階段を下ると広い場所に出た。どうやら改札口があるらしいのだが、枝分かれていてややこしかった。健斗とヒロは標識を頼りにしながらゆっくりとした足取りで改札へと向かう。

二、三分歩くと改札口が見えた。健斗とヒロは切符を取り出して改札をくぐった。さて……健斗はまた自分の上にある標識を見上げた。

「ノブの姉ちゃんとはどこで待ち合わせしてんの?」

「うん……ちょっと待って。」

佐奈との電話で決めたことは改札の南口から出たすぐ目の前の広場で待ち合わせという風に決めた。その肝心の南口は標識に矢印と一緒に記されている。

「……こっちだな。」

健斗はその標識に従うように再び歩き出した。ヒロは健斗の後ろを離れずに着いていった。

少し歩くと、南口から青空が見えた。確かに佐奈が言ってたとおり、目の前に何か得体のしれない像が立った場所に広場があった。この辺に佐奈がいるはずなのだが……そう思いながら健斗はキョロキョロと見渡した。車の音や排気ガスの匂いが健斗を少し不快にさせていた。

「すげー都会だなぁ……」

「うん……」

「ノブのお姉ちゃんは?」

「この辺にいると思うんだけどなぁ……」

そう言いながらキョロキョロと周りを見渡して佐奈の姿を探していた。するとだった。

「山中くん。」

後方から健斗の名前を呼ぶ声がして健斗はすぐに後ろを振り返った。すると少し離れた場所から佐奈がゆっくりと歩み寄ってくるのが見えた。それを確認すると健斗は安心するように表情を緩めた。

佐奈は徐々に健斗たちと距離を詰めていき、やがて健斗たちの前に立った。以前会ったときと同じように綺麗で美しい人だった。やけに大人びていて、笑顔が素敵な人だった。

「どうも。」

健斗が微笑んで挨拶すると佐奈も同じように笑ってくれた。

「わざわざありがとう。こんな遠くまで来てくれて……大変だったでしょ？」

「そうでもないです。ただ電車に乗ってただけですから。」

健斗がそう言うと佐奈はゆっくりと笑って、視線を健斗からヒロへと向けた。ヒロは佐奈の視線を受けて少し驚いたのか、ビクッと体を震わせた。

「えっと……あなたが真中ヒロくん……かな？」

「え、あ、はい。そうです。真中です。」

ヒロは照れるように笑って頭を下げた。健斗はその様子を少し可笑しそうに見ていた。完全に美人を相手にして戸惑うヒロだった。

佐奈はゆっくりと笑って軽く会釈をした。

「初めまして。信彦の姉の佐奈です。」

「あ、ど、どうも。」

ヒロはもう一度小さく頭を下げた。美人が好きなくせに、どうしてこんなに美人に対してよそよそしい態度になるのだろうか。健斗にはそれが不思議でたまらなかった。

「さて……じゃあ、行こうか。信彦たちも待ってるし……」

それを聞いて健斗は急に気が引き締まるような気持ちになった。胸が一つトクンと鳴った。

「もう……待ってるんですね。」

健斗がそう言うと、佐奈はゆっくりと頷いてみせた。

「えぇ。……ここから少し歩いたところにある公園で。案内するから、着いてきて。」

佐奈はそう言うと健斗たちの一歩先を進んで歩き始めた。健斗は小さく息を吸い込み、高鳴る緊張を抑えながら佐奈の後をついていった。

「びっくりしたぁ……」

ヒロが健斗と並んで歩いているとそう言ってきた。健斗はその言葉に反応するように、ヒロをチラッと見た。

「ノブのお姉ちゃん。めちゃくちゃ美人じゃん。俺、あいつにあんなお姉ちゃんがいるなんて知らなかったよ。」

「あぁ……俺もだな。」

「どうしてこんなに協力してくれるんだろうな?何か訳でもありそうだけど……」

健斗はその言葉を受けてギクッとした気持ちになった。確かにそれ

は健斗もずっと思っていたことで、気になっていた。健斗はふと昨日の晩のことを思い出していた。

「――という感じでいいかしら？」

電話の奥で佐奈がノブたちと会う時間や待ち合わせの時間などを言い、健斗はそれに対して頷きながら言った。

「はい、分かりました。それで大丈夫です。」

「そう？良かったぁ。」

「はい……あの、何かすみません。」

「え？」

健斗は決まり悪そうにそう呟くように言った。ゆっくりとベッドに腰掛け、苦笑いを浮かべながらさらに言った。

「俺のために色々としてもらって……何だか申し訳ないです。」

健斗がそう言うと佐奈は少しの間黙り込んでいた。すると微かに電話の奥からクスッと言うような笑い声が聞こえた。

「気にしないで。前にも言ったけど、これは私のためでもあるの。」

「……あの……それってどういう意味なんですか？」

以前そう聞いたときは大して何も思わなかったが、今考えてみると不自然な言い方だった。弟のためとかそういうのならわかる。しかし、“私”のためとは一体どういうことなのだろうか。

すると再び佐奈は黙り込んだ。今度の沈黙はどこか違和感があった。何かに戸惑っているような、そういった沈黙。やがて佐奈はふっと小さく笑った。

「……以前あなたのことを見たときね……」

それは恐らく、中学二年生の大会のことを言っているのだろう。彼女はその大会が非常に印象的だったと言っていた。

「以前あなたのことを見たときから私、あなたのことがちょっと気になってたのよね。」

「……え……えっ！？」

健斗は驚いたような声を上げてしまった。胸がドキドキしているのが分かる。なまめかしい笑いが健斗の耳の奥に響いた。

「ちょっと気になってたの。あなたにもう一度会いたいなぁってずっと思ってた。」

「あ、あ、あの……」

「フフフ♪もしかしたら私、あなたに恋しちゃってるのかもね。」

健斗の胸が最大限に高鳴った。まさか……そんなことがあるわけない。年上……しかも相手は大学生だ。そんな人が当時中学生だった自分に恋するわけない。違う……絶対に違う。健斗は最大限に頭が混乱状態になっていた。

するとそんな健斗の気持ちを察したのか、佐奈が笑い声を立てながら言ってきた。

「アハハ♪じょーだん♪本気にしないで？」

「え？あ……えっと……はい……」

「フフフ♪……自分でもよく分からないんだ。何故だか分からないけど、あなたたちのために何かしてあげたいの。私がそうしたいって。だから、あなたが気にすることでもなんでもないのよ。」

佐奈は笑いながらそう言った。健斗も強がるように笑ってみたが、きっと上手く笑えてなかっただろう。収まらない胸の高鳴りがそれを証明していた。

そんなことがあったのだから、健斗は妙に佐奈のことを意識してしまう自分がいた。佐奈はヒロと楽しそうに話をしている。ヒロも全く緊張感を感じていないようで、それよりもこんな美人と話せるこ

とを喜ばしく思っているみたいだ。鼻の下が伸びるというのは本当にあるみたいだ。

――あれは……冗談だったんだよな。

健斗は自分にそう言い聞かせた。いかんいかん……こんなことを考えている場合じゃない。これから健斗は最後にやり残したことをやりに行くのだ。こんな邪念を抱いている場合ではない。

――喝っ！！

「いってぇ！！」

健斗に蹴りを入れられてヒロは痛そうに臀部を押さえた。涙目で健斗を睨みつけるようにして見た。「いってぇなっ！何すんだよっ！」

「虫がついてたんだよ。」

「何で尻にっ？しかも何で蹴りで潰すんだよ。」

「おしりかじり虫だったんだ。仕方ねーだろ。」

「はぁっ？」

ヒロは恨めしそうに健斗を見ていたが、それ以上何も言わなかった。健斗はもう知らんぷりをしている。佐奈は少し驚いていたが、二人のやりとりを見て可笑しさを感じたのかクスクスと笑っていた。

しばらく歩くと住宅街を通っていた。少し離れた場所と言っても、大分歩いたような気がする。健斗は帰り道をしっかり記憶していた。やがて、佐奈の足が止まるとその目の前には広い公園があった。

いくつかの遊具に満ちていて、広い公園。健斗はぐっと力を込めて目を細めた。滑り台の近くに誰かが二人いる。その顔は健斗のよく知っている顔だった。

ドクンとまた一つ胸が高鳴った。健斗はヒロとを見合わせた。ヒロは先ほどのようなおちゃらけた雰囲気を一掃させて真剣な目をしていた。

そしてゆっくりとその二人に近づく。乾いた風が目に染みた。そこにいる二人も健斗たちが来たことに気づいたらしく、じっと健斗たちの方を見ている。

徐々に距離を詰めていくと、それはもう完全に健斗の知っている二人だった。健斗とヒロは緊張した雰囲気を感じながら、その二人の前で立ち止まった。

一人は滑り台の上から降りて、ゆっくりと健斗たちと向き合う。挑発的な視線は何も変わっていなかった。

「……久しぶり。ノブ、リュウタ。」

健斗がそう言うとノブとリュウタは微かに頷いた。何も言わない。ただ健斗とヒロをじっと見つめている。

乾いた風が冷たかった。しかし健斗は目を見開いて、二人の視線を真っ正面から受けようとした。

第9話　新たなる決意　P．58

「久しぶり……ノブ、リュウタ。」

健斗がそう言うと、ノブとリュウタは微かに頷いた。乾いた風が吹き抜ける。健斗は痛そうに目を少し細めた。ノブ――高橋信彦の姿がそこにあった。

中学のときはうんっと髪が長かったが、今はその髪もヒロと同じくらいの長さで、肌は日焼けで黒く染まり、背も中学のときから随分と伸びているようだった。そして大分筋肉がついている。体が大きく見えるのはそのせいだ。

だがそこには確かにノブの面影がある。やけに挑発的な視線で、健斗と度々意見の食い違いなどで衝突することもあったが……健斗は一度もノブを嫌ったことはなかった。

そしてもう一人……リュウタ――橋本龍太は髪型もほとんど変わってなかったが、こちらは大分背が伸びていた。中学のときから背の高い方だったが、高校に入ってから格段に大きくなっている。１８０センチはありそうだった。

二人とも制服姿だった。肩にはエナメルバッグをかけている。恐らくこの後部活なのだろう。

「……本当に久しぶりだな。中学卒業してからまだ半年も経ってないのに……もう随分長いことあってなかったような気がする……」

龍太が健斗たちにそう言ってきた。それを聞いて健斗は微かに口元に笑みを浮かべた。実質、あのことがあってから健斗はこの二人と会話をすることがなかったし、あまり姿も見かけることもなくなっていた。
だから変な話だが、感覚的に……少なくともこんな風に話すのは二年半振りだった。

「……姉ちゃん、ありがとうな。もう大学行けよ。」

ノブが健斗たちの隣で見ていた佐奈にそう言った。佐奈はノブにそう言われて、チラッと健斗のことを見るとやがて小さく笑ってみせた。

「そうね……じゃあ私はこれで……」

「あの……本当に色々とありがとうございました。」

健斗は佐奈に向かって頭を下げた。佐奈には本当に感謝しても仕切れない恩がある。佐奈は健斗のことを見ながら目を細めて微笑んだ。

「うん。またね、山中くん。あと真中くんも……それじゃあ。」

佐奈はそう言いながら踵を返して健斗たちの元から遠ざかっていった。健斗とヒロ、そしてノブと龍太はしばらくそれを見つめていた。

「……びっくりしたよ。」

「え？」

ノブが呟くようにそう言った。中学のときに比べると少し低くなっ

た声で健斗を見ながら言ってきた。

「姉ちゃんとお前が知り合いだったなんてさ。こっちに帰ってきたときに、急に姉ちゃんお前の話をしたから……」

「あぁ……俺も本当に最近知り合ったんだ。ほら、あの商店街を抜けたとこのファミレスで……覚えてる？」

「ファミレス……あぁ、あそこ？なるほどね。」

ノブは納得するように頷いた。ノブもあのファミレスに健斗といっしょに行ったことがある。遠征の帰りとか空腹を満たすために部員でよく食べに行った。

そして健斗は少し戸惑いを見せて苦笑いを浮かべながら言った。

「えっと……元気だった？二人とも。」

健斗がそう言うと、ノブと龍太は互いに顔を見合わせた。そして分からないと言うように肩をすくめた龍太が言ってきた。

「元気って言えば元気だけど……強いて言えば部活が忙しくて大変かな。」

「そっか……」

「そっちは？」

龍太にそう聞かれて今度は健斗とヒロが顔を見合わせた。お互い困ったように肩をすくめた。その質問に答えたのはヒロだった。

「まぁ……そこそこかなぁ。ちょっと最近忙しいって言えば忙しい……」

「そう……」

会話が途切れた。会話が一度途切れるとそこから取り戻すことが難しくなる。やはり健斗はそこに流れる気まずい雰囲気を感じていた。

健斗の脳裏に浮かぶのは、最後に神乃中サッカー部の部室を後にしたときに言われたノブの言葉だった。

――お前たち、絶対に許さないからなっ！！

「……あ～～っ！！」

突然ノブが苛立ちを抑えられないと言ったように、頭をガリガリと掻きながら突然大声をあげた。健斗とヒロ、そして龍太も突然のノブの行動に驚いて三人ともノブを見つめた。

ノブは大きく息を吸い込んでは吐いて、すると健斗とヒロをきっと睨みをきかした目つきで見てきた。その視線に健斗はビクッと体を震わせた。

「……やめだっ！やめっ！」

「え……」

健斗が呆然としているとノブが健斗とヒロのことをビシッと指さしてきた。

「俺、お前らに会ったら昔のこと、とりあえず色々文句言ってやろうと思ってたんだ。……でも気が変わったっ！！こんな気まずい雰囲気、俺には耐えられんっ！！」

「ノ、ノブ……」

「だからとりあえずっ！！昔のことは水に流すぞ。お前らも、俺らに変な気ぃ遣ってんじゃねーよっ。調子狂うだろっ！！」

健斗とヒロ、そして龍太は呆然としてノブのことを見つめた。そして健斗は可笑しさを感じてぷっと吹き出した。それに乗じるようにヒロも、さらには龍太も笑い出した。

可笑しくって仕方なかった。風貌は結構変わったのに、中身はまんま昔のまんまだった。健斗は次第に耐えきれなくなって腹を抱えて笑った。ノブや龍太に対する気まずさが一気に解消されたような気がした。

「そうだな。」

龍太が笑いながらそう言った。

「ノブの言うとおり、とりあえず昔のことは忘れようぜ。健斗とヒロも俺らに話があってわざわざ来てくれたんだもんな。……とりあ

えず、あっちで座って話すか。」

「いや。」

「へ？」

ノブは突然を身をかがめて肩にかけていたエナメルバッグを開けた。そして中から取り出したのは、紛れもなくサッカーボールだった。龍太はそれを見ると驚いたような顔を見せた。

「おまっ！それ部活のじゃんっ？」

「いいんだよ。今日返せばいいだろ？……ほら。」

ノブはそう言いながら、健斗に向かってそのボールをパスしてきた。健斗は戸惑いながらボールを受け取ると、もう一度ノブの方を見た。ノブ笑って、健斗のことを見ていた。

「久しぶりに1対1やろうぜ、健斗。」

「は？」

「いいだろ？やりながら話せばいいじゃん。その俺たちに話したいことってやつ。久しぶりに会ったんだから、俺がとうの昔にお前を抜いてることを証明してやるよ。」

健斗は戸惑っていると、ノブは制服のブレザーを脱いでカーディガン姿になった。そして滑り台から離れて、健斗のことを誘うような目で見る。

「ほら。早く来いよ。」

「……」

健斗はボールを蹴りながらノブの前に立った。数メートル、お互いに距離を取り合った。ノブは少し歩いて、線を足で引いた。そして徐に健斗のことを見て言ってきた。

「この線までいったらお前の勝ち。止めたら俺の勝ちな。」

「……分かった。」

健斗が了承すると、ノブはネクタイを緩め始めた。動きやすいようにするためだ。そしてまた、健斗と数メートルの距離を取る。

健斗は胸が高鳴った。まさかこんな展開になるとは予想していなかったからだ。昔はノブと1対1をよくやったのを健斗は覚えていた。しかし、健斗はノブに一度も負けたことがない。

そこまで言うということはよっぽどの自信があるのだろう……胸の中に何か熱いものを感じた。ドキドキ感が、ワクワク感へと姿を変えていた。

ヒロと龍太は少し離れたところで二人の様子を伺っていた。まさかこういう展開になるとは、ヒロも龍太も予想はしていなかった。

「なんでこうなるかな……」

龍太は呆れるように大きくため息を吐いた。ヒロはそんな龍太を見ながら、可笑しさを感じて吹き出して笑った。

「変わってねーな、ノブ。ああやっていつも健斗に1対1を申し込んでたよな。“今日こそ勝ってやるっ！”って。」

「一回も勝ったことないけどな。」

「でもすげー自信ありげだったじゃん。あいつ、今すごいの？」

ヒロの問いかけに龍太は少し黙り込んだ。

「……見てれば分かるよ。」

健斗はぐっと力を込めた。いつも1対1をやるときはそうしていた。松本とやったときもそう。目の前には相手しか見えなくなる。相手をどう抜こうか考えてみる。健斗は私服が動きにくいと感じたが、条件はあっちだって同じだ。

「……行くぞ。」

「来いっ！」

健斗はボールを蹴ってノブに向かっていった。久しぶりの感覚だった。以前松本と勝負したときと同じような気分……いや、そうではない。あのときはまだ迷いを感じながらやっていた。

でも今は違う。あのときとは違うんだ。

健斗はノブに向かっていくと、ノブもＤＦの体勢を取った。健斗の抜くコースを右に限定する。その感じはまさしく松本と同じだった。

しかしコースの限定なんて健斗には関係ない。健斗には相手にボールを取られないくらいのキープ力、そしてテクニックがある。

健斗は一気にノブを抜きにかかった。ところがだった。

ノブは健斗のボールに足を伸ばして微かに触れた。健斗は思わず驚いて、ボールをノブから遠ざけた。ノブはニヤリと笑いながら、ボールを遠ざける健斗にプレッシャーをかけに来た。

――こいつ……ＤＦが上手くなってる。

それもそのはずだ。ノブは今やスポーツ推薦で名門私立校でサッカー漬けの毎日を送っている。ノブのかけてくるプレッシャーは並み大抵のものではなかった。

健斗は思わずボールを遠ざけながら相手に背を向けてしまった。完全に守りの体勢に入った。

「健斗が背負ったっ！」

ヒロは驚いていた。健斗のドリブルを止めて、ああやって自分に背を向かせるやつなんてそうはいない。健斗のドリブルはいつも切れがよすぎて、足を出すことさえできないからだ。
少なくとも、ノブは松本と同等か、もしくはそれ以上の実力を持っているということを意味していた。

「……へぇ、でも健斗やっぱすげーな。簡単には取られないなぁ……」

本来なら、あのボールに足が触れられた時点でバランスを崩しボールを奪われるのだが、健斗は違った。それは本来備わっていたボールをキープする力に優れているからであった。

ノブを背負ったまま、健斗は動けずにいた。その間、ノブは足を伸ばしたりして健斗にプレッシャーをかけてくる。

「……へっ！やっぱお前も落ちたなぁ。」

ノブがそんなことを言ってきたので、健斗はむっと心の中で何かが疼いた。そして、ノブがさらにプレッシャーを入れようと力を加えた、まさにその瞬間だった。

健斗はその力を利用するように、するっと紐を解くような感覚でノブを抜きにかかった。

これぞ健斗が相手を背負った状態に、相手の力を利用し、相手を受

け流して抜きにかかるテクニックの一つだった。

“柔”のドリブルを始めた。

このまま加速を加えれば、あとはもうあの線を超えるだけだ。そう思って健斗は一気に力を込めた。

ところがだった。

ノブが体を当ててきた。あのテクニックではノブは怯まなかったらしい。大した反射神経だ。

が、健斗も当然それを読んでいた。ボールをピタッと止める。それにつられてノブの体も一瞬硬直するかのように止まった。その瞬間を見定めて、健斗は瞬間速度で加速を加えた。

「ぐっ！」

ノブの苦しげな声が聞こえた。

ストップ&スタートというテクニックだった。人間、瞬間的に体のスピードを緩めるとそれに反応することが難しい。これで決まると思った……ところがだった。

「おりゃぁっ！！」

ノブをほとんど抜きかけていたのだが、最後にノブがそれをさせまいと足を伸ばしてきた。その足がボールを捉えた。ボールは横に蹴り出された。

「あっ！」

健斗は体の動きを止めた。ボールは横に流れて、ヒロと龍太が立っているとこに転がっていった。

健斗は呼吸を荒くしながらその転がっていったボールを見つめた。止められてしまった……ということは……

「……ハァ……ハァ……ハァ……」

息遣いを荒くしながら、ノブの方を向いた。ノブも息を荒くしながらスライディングの形で座り込んでいた。そうか……最後はスライディングをされて止められたのか……

ノブはゆっくりと立ち上がって、額に溜まった汗を拭った。呼吸を荒くしながらゆっくりと健斗と向き直る。健斗は呼吸を落ち着かせるため、ゆっくりと目を閉じた。やがて呼吸が落ち着くとゆっくりと目を開けて、小さく笑った。

「……やられたよ。すげー上手くなったなぁ……ノブ……」

「……」

ノブは何も言わなかった。何も言わず呼吸を整えながら、健斗のことを黙って見つめていた。

するとそんな健斗たちの元に、ヒロと龍太が近寄ってきた。龍太はボールを片手に持ちながら小さく笑いながらノブに言った。

「ノブ、もういいだろ？」

「……」

「え……何が？」

健斗はきょとんとして龍太のことを見つめた。するとノブは悔しそうに「くそっ！」と言い捨てた。健斗は何のことか分からず、龍太のことを見つめた。

「こいつ、ずっと言ってたんだよ。まずお前に会ったら、1対1をやるって。自分の方が上だって見せつけるんだって。」

「あぁ……そっか。確かにな。ノブの方が一枚上手だったな。」

健斗はそう言いながらノブにゆっくりと笑いかけた。しかしノブは納得がいかないような顔をして健斗を黙って見つめていた。

「いいんだよ、健斗。気遣わなくっても……」

「え……」

龍太の言葉に健斗は思わず目を見張った。その視線の範囲にヒロも映って、ヒロも同じように健斗のことを見ていた。龍太は穏やかな顔でそう言った。健斗は胸が一つドクンと高鳴った。

「……お前、手ぇ抜いてただろ？」

龍太にそう言われて健斗は微かに戸惑った。

「別に……そんなこと……」

「隠すなよ。お前が本気でノブを抜きにかかるんだったら、最初から“柔”の方じゃなくって“剛”の方を使ってただろ？」

健斗はそれを言われて返答に困った。確かに、健斗は本来自慢の足の速さを使ったスピードで抜きにかかるドリブル……“剛”のドリブルが得意である。

健斗には二種類のドリブルを持っている。一つは、さっきのようにあらゆるテクニックを使い、相手を翻弄して抜きにかかるドリブル……それを健斗は“柔”のドリブルと呼んでいる。

そしてもう一つは、最後の松本との勝負のときに見せた、テクニックなんてほとんど使わないスピードだけで相手を抜いていくドリブル……それを健斗は“剛”のドリブルと呼んでいる。

でも“剛”の方はある程度の条件がないと使えない。感覚が以上に研ぎ澄まされている……そう、あの松本との勝負のときや、グラウンドの広さにもよる。

少なくとも、この公園くらいの広さでは“剛”は使えない。使ってしまえば、勢いが余り過ぎて怪我をしかねないからだ。

でも……理由はどうあれ、健斗は本当の意味で本領を発揮していない。つまりは、ノブに対して手加減をしたということになってしまう。これほどの屈辱はないだろう。

こっちは二年半サッカーから離れ、ノブの方はずっとサッカーをやりつづけ、今や名門私立校で高いレベルで練習をしている。

努力が天才を超えることはできなかった……ということになろうか。

健斗はそれを思うと、胸が痛んだ。

「そんなことねーって。俺は精一杯やったよ。確かに“剛”は使わなかったけど、でも“柔”で俺は――」

「もういいよ。」

健斗の言葉を制したのはノブだった。ノブは溜まった唾を地面に吐き捨て、空を仰いだ。

「どっちにしろ、俺はお前にほとんど抜かれかけた。足がボールに当たったのはたまたまだ。」

「……ノブ……」

「……あ～あっ！！お前にそろそろ勝てると思ってたんだけどなぁっ！！くそっ！！本当にお前は化け物だよ。」

ノブはそう言いながら、健斗に悔しそうに背を向けた。だがしかし、健斗は一瞬だけノブの表情を見た。ノブはどこか嬉しそうに笑っていた。

そのとき健斗は、佐奈が言っていた言葉を思い出した。

――あの子は今でも、あなたに憧れています。

……そういうことか。健斗は表情を緩めてノブを見た。

「……さて、じゃあそろそろ本題に入ろうか。二人とも……」

龍太がやけに真剣な表情になって健斗たちを見てくる。健斗はぐっと表情をまた強ばらせて龍太を見つめた。

そうだ。自分は二人に話があってここに来たんだ。健斗はヒロのことを見ると、ヒロはゆっくりと頷いてきた。

健斗はゆっくりと息を吸い込んだ。

「……あぁ……実は……」

健斗がそう口を開くと、公園の側に親子が通りかかった。親子は楽しげに歌を高らかに歌っているのを、健斗はなんとなく聞いていた。

第9話　新たなる決意　P．58（後書き）

久しぶりに健斗のサッカーをやる場面を描きましたが……伝わったでしょうか？

サッカーをあまり知らない人のために、今回出た“ストップ&スタート”というテクニックを説明いたします。

これは本文中にも書いてあった通り、ドリブルのテクニックの一つです。

名前通り、ドリブルをしているとき並んでいる相手に対して、ドリブルの緩急をつけることで相手を抜くというテクニックの一つです。

野球で言えば……チェンジアップのようなものです。緩急の差をつけて、相手の意表をつくのです。

“柔”のドリブルと“剛”のドリブルは自分が勝手に想像したものなので、サッカー用語にはそんなものありませんので御了承ください

第9話　新たなる決意　P．59

健斗は龍太とノブに今までの事情を全て説明した。二人は何も言わず、ただ黙って頷いていた。

神乃高サッカー部の廃部の危機のことや、のんちゃんから力を貸して欲しいと頼まれたこと。そしてそのために健斗たちが今までやってきたことも全て話した。

「そっか……佐久と琢磨にも会ってきたのか。」

龍太はヒロからその話を受けると、懐かしそうに小さく笑った。二人にとっても佐久と琢磨は半年くらい会っていない。

「二人はサッカーやめたんだな……」

「あぁ。今は違う部活に入ってる。でも二人とも、それなりに楽しいって言ってたよ。」

「ふ～ん……」

ヒロの言葉を聞いて、龍太はそう呟いた。もしかしたら、龍太からしたらサッカーを続けて欲しかったという気持ちがあるのかもしれない。

神乃中サッカー部ではろくに出来なかったサッカーを……今度は高校で思う存分やって欲しい。今の龍太とノブのように、サッカーを続けて欲しい。

その気持ちは健斗も同じだった。健斗も二人には、サッカーを続けて欲しかった。

「……で？二人が今日ここに来たのは、その佐久や琢磨と同じ理由？」

龍太がそう聞いてきて、健斗とヒロは瞬時目を合わせた。そしてその疑問に答えるように健斗が頷いて言った。

「……うん……まぁ、そういえばそうだけど……特に二人には色んなことを含めて謝りたかった。」

「……」

「別に今更昔のことを掘り返そうとは思ってないし……許してもらおうとも思ってない。ただ俺……あのときのことをそのままにしておきたくなくって……それで……」

「健斗らしいな。」

龍太は吹き出してそう笑った。

「そんな理由だけで、わざわざこんな遠い場所まで来たのか？」

「……うん。」

「バカだなぁ。俺らのことなんか気にしなくってもいいのに……昔のことは昔のことだろ？」

龍太はノブに同意を求めるように「なっ？」と言って笑った。ノブは少し不機嫌そうな顔を浮かべていたが、黙って小さく頷いた。

「やりたいんなら、やれよ。迷うことなんて何もないし……俺はぶっちゃけ健斗とヒロがまたサッカーをやってくれるのが嬉しいよ。」

「龍太……」

「それに、こうして会って話せたことで昔のわだかまりもなくなったしな。俺とノブがそっちに帰らなかったのって、お前らのことがちょっと気にかかってたからなんだぜ？」

「そっか……」

健斗は龍太の言葉を受けて、小さく笑った。龍太もノブも、健斗のことを笑って許してくれた……昔のわだかまりが解消されると共に、また一つ健斗の心の負担が解消された。大きな安堵感が、健斗の胸の内に宿りつつあった。

「……もう大丈夫なのかよ？」

「え？」

ノブが健斗を見ながらそう言ってきた。健斗は突破のことで思わず聞き返した。

「その、何つーの？心のトラウマってやつ。もう大丈夫なのか？」

ノブにそう聞かれて、健斗は言葉を詰まらせた。そうだ。健斗が今までサッカーが出来なかった、その一番の原因はまさにそれだった。

翔の死に対する恐怖が生まれ、健斗はサッカーが出来なくなっていた。そんな状態では、とてもサッカーを続けることなんて出来なかった。

だけど……

「……ちょっと、変な話してもいいかな……」

「うん？」

健斗はそう言いながら、ゆっくりと目を閉じた。目の前は真っ暗で何も見えなかった。

「……今まではこうやって目を閉じたら……すぐに翔の顔が浮かんだんだ。笑ってる翔や、泣いてる翔……俺の中に残っている翔が……もちろん、あの事故が起こったときのことも……」

他の三人は黙って健斗の話を聞いていた。健斗は自分の胸に問いかけるような、そんな気持ちでさらに話を続けた。

「いつもそれが辛かった。つらくて怖くて……どうすればいいのか分からなかった……俺はずっと、こうやって生きて行かなきゃいけないのか？ずっと怖い思いをしながら……それって何の意味があるんだろうって思ってたんだ。でも同時に、それが俺の翔に対する償いだって思った。罪悪感と、失望感をこの先ずっと抱えながら生きていく。それが……」

でも……そんな健斗を心の闇から救ってくれたのは、やはりあの言葉だった。

健斗はゆっくりと目を開けて、ゆっくりと笑った。

「そんなときさ、あるやつが言ってくれたんだよ。“もう迷わないでよ。苦しまないでよ”って……俺、そんなことを言われたの初めてで……嬉しかった。」

「……」

「それで、この間翔の両親に会いに行ったんだ。そのときに翔の仏壇の前で手を合わせた……そしたら、手を合わせ終わったら……俺の中で……翔がいなくなってた。」

そう。もう翔は健斗の中にいなかった。こうして目を閉じても、辛いことなんてまったく思い出さない。その代わりに思い出すことがあった。

麗奈の笑顔だった。

そして麗奈の泣き顔だった。

麗奈の……怒っている顔……

健斗の中で、今こうして一番先に思い浮かぶのは……麗奈の全てだった。麗奈との思い出だった。

「……だから俺はもう迷わないって決めた。俺は……強くならなきゃって決めたんだ。だから……」

「……そっか。」

ノブが初めて笑った。健斗のことを見ながら、穏やかな表情で健斗のことを見つめていたのだ。そしてそれは龍太も同じだった。龍太もノブと同じように慈愛の目で健斗のことを見つめていた。

「それなら大丈夫だな。……迷うことなんて、何もねぇよ。」

「……うん。サンキューな、二人とも。」

健斗は笑ってそう言うと、ノブと龍太は小さく笑い合った。そして呆れるようにため息を吐いて、ノブは健斗を見て言った。

「……ったく。長げぇ間心配かけやがってよ。本当に……勝手なやつだよな、お前は。」

そう言ってノブはニヤリと笑った。健斗もその微笑みに向けて、ニコッと微笑み返した。するとノブは健斗の胸にドンっと拳を当てた。

「ただ、次はもう迷うなよ?」

「え?」

「またびびって、サッカー辞めまーすなんて言うなってこと。男なんだからよ。一度くらい、自分で決めた覚悟を貫いてみろよ。それが……俺たちとの約束だ。」

すっとノブは健斗の前に拳を突き出した。健斗はそれを見て、目を細めて思いっ切り笑って見せた。

「……おうっ!」

健斗も拳を突き出して、ノブと拳を当てた。健斗にとって、この上ないほどの堅い約束だ。もう二度と迷わない。

健斗はそう胸に誓った。こうして出会えたことで、ノブや龍太たちとの、昔のわだかまりも消えた。佐久や琢磨とも、もう大丈夫だ。みんな、健斗とヒロの新たな一歩をこうして応援してくれる。

そして竜平さんのことも、翔のことも、早川のことも……全てをやり切った。もう健斗のやり残したことは何もない。あとやるべきことは、ただ一つだった。

これから健斗たちには大仕事が待っている。松本とも約束をしたのだ。それに対しても、健斗は健斗なりのある考えがあった。

――こっからだ。こっから全部また始まるんだ。

健斗は心の中でそう呟いた。自分に言い聞かせるようにして、何度も何度もそう言い聞かせた。

健斗の中で、“新たなる決意”がようやく固まったのだ。

第9話　新たなる決意　P．60

「じゃあ今日はこれで解散にします。明日までに各自それぞれのパートの部分を確認して、修正してきてください。特にクラリネットの人は少し遅れています。じゃあ、お疲れ様でしたー。」

全体練習を終えて、部長の解散の号令が出て、吹奏楽部の部員一同はみんなバラバラと散っていく。

麗奈はその中、いそいそと楽器をしまっていた。そして音楽室の時計に目をやった。お昼少し過ぎだ。良いタイミングに終わってくれたものだ。

そんなことを考えているとだった。

「麗奈ちゃーん。」

間延びした声で話しかけてきたのは、円と奈津紀だった。二人は既に帰る支度を済ましてあり、鞄をもって麗奈のところにやってきたのだ。すると奈津紀が微笑みながら言ってきた。

「これから暇？三人でお昼でも食べに行かない？」

「えっと……」

せっかくのお誘いだったが、麗奈はその誘いに乗るわけにはいかなかった。

「ゴメンね。私、ちょっと用事があるから……」

「え～、用事？用事って何の？」

「えっと……」

麗奈は返答に困るように戸惑った。こういうのって、一体どういう風に説明すればいいんだろう。

「これから……あの……サッカー部の練習試合を応援しに行くの。」

「サッカー部のっ？え、どうして？」

「どうしてって言われると……」

そこには色々と複雑な事情が絡んでくる。だから今ここで全てを説明することは難しかった。だが、その沈黙がいけなかった。奈津紀は戸惑う麗奈を見てニヤニヤと笑い始めた。

「あ、分かったぁ！サッカー部に気になる人がいるんでしょ？」

「えっ？そういうことじゃないよっ！ただ、ちょっと色々と事情があって……」

「嘘つきー。麗奈ちゃんにはもう山中がいるじゃーんっ。」

「ちょっとっ！何でそういうことになるのっ？もうっ、ナッチャンっ！」

すると、麗奈のことを面白半分でからかってくるナッチャンの隣で円が、何かを思い出したかのように「あっ！」という声をあげた。

「そういえば今日、すごく強いとこととやるんでしょ？」

「そうなのっ？」

麗奈はその相手のチームがどのくらい強いのかは知らない。ただ、負けたらサッカー部は廃部だということを聞かされていた。

――とにかく行かなきゃ！

「ゴメンッ！私もう行くねっ！」

麗奈はそう言いながら、鞄を持って走って音楽室を後にした。

「あ、待ってよぉっ！」

奈津紀が麗奈にそう言ったときはもう遅かった。麗奈は音楽室をすでに後にし、すごい速さで階段を駆け下りていった。残された円と奈津紀は唖然としていた。

「……どうする？」

円が奈津紀の顔を見上げながら言った。すると奈津紀は面白そうに小さく笑って見せた。

「面白そうだからついて行ってみようか？」

そう言って、奈津紀も走り出して麗奈の後を追いかけ始めた。突然のスタートダッシュに円は驚き反応出来なかった。

「あ、待ってっ！」

そう言って奈津紀の後を追いかけようとして走った。すると椅子に当たってしまい、円は思わずこけてしまった。

麗奈は息を切らしながら階段を駆け下りて、グラウンドへと向かっていた。昇降口で靴を履き替え、さらに走ってグラウンドの方へと向かう。

グラウンドには何人もの人が集まっていた。サッカーゴールが設置され、神乃高サッカー部と、もう反面のコートにはユニフォームの異なったチームが声を出しながら練習をしている。

麗奈は呼吸を落ち着かせるようにスタンドの方へとゆっくりと歩いて、そこから立ちながらグラウンドを見下ろした。そして神乃高サッカー部の方を目を凝らして見てみる。

麗奈の知っている人はほとんどいない。しかし、十何人の人がゴールに向かってシュート練習をしている。それよりも、麗奈は周りを見渡したりしていた。

「……健斗くんたち……まだ来てないのかな？」

グラウンドの雰囲気から、もうすぐ試合が始まりそうだった。しかし健斗とヒロの姿は見当たらない。もしかしてまだ、こっちに帰っ

てきてないのだろうか？

そんな風に不安に感じているとだった。

「麗奈ちゃんっ！」

後方から麗奈を呼ぶ声がした。麗奈はすかさず後ろを振り向いた。すると、遠くの方から結衣が走ってくるのが見えた。部活の格好をしたまま、テニスラケットを持って走ってくる。

「結衣ちゃんっ！」

結衣は麗奈の隣に着くと呼吸を落ち着かせようと、胸を手で抑えながら大きく深呼吸をした。そして、身をかがめながら麗奈のことを見上げた。

「試合、まだ始まってないよね？」

「うん。そうみたい。でももうすぐ始まりそう……」

「健斗くんとヒロくんは？」

「……まだいないみたい。」

結衣はそれを聞くと口を閉じた。そしてゆっくりと体を上げて、麗奈と同じようにグラウンドに目を凝らし始めた。

「結衣ちゃん、部活は？」

「うん。まだ途中なんだけど……こっちの方が気になって……」

「そっか……」

そんなことを話しているとだった。後方から誰かが走ってくる音がした。健斗たちだろうか？そう思い、期待を込めた目で麗奈と結衣は同時に後ろを振り向いた。

しかしそこにいたのは、健斗たちではなかった。何と、袴姿のマナだった。トレードマークのポニーテールを揺らし、走りにくそうにたどたどしく走ってくる。

「おーいっ！二人ともぉっ！」

「マナッ？」

「マナッ！」

マナは麗奈と結衣の元にたどり着くと、大きく肩で呼吸をしていた。

「ま、間に合ったぁ……」

「マナも部活中なの？」

「うん。でもこっちが気になって、抜け出してきたの。」

マナは呼吸を落ち着かせるように大きく深呼吸をした。そして麗奈を見上げると、不安そうな表情で聞いてきた。

「健斗とヒロは？来てるっ？」

「あ……ううん……まだみたい。もうすぐ始まるみたいなんだけど

……」

そうなのだ。本当に一向に健斗たちは姿を見せない。このままでは本当に試合に間に合わないかもしれない。

そういえば昨日の夜も、健斗は苦笑いを浮かべて、間に合うかどうか分からないと言っていた……それにもしかすると……上手くいかなかったのかもしれない。

色々な不安が麗奈の中にこみ上げていた。

「健斗とヒロ、今昔の友達に会いに行ってるんだよね？」

マナが麗奈にそう訊いてきた。どうやらマナも、その辺の事情を詳しく知ってるらしい。麗奈はその言葉に応えるようにゆっくりと頷いた。

「うん。私が起きたときにはもう……健斗くんはいなかったから……」

「そっか……」

「確かすごい遠いとこなんだよね。県外だって、健斗くん言ってたよ。」

結衣も心配そうにそう言った。結衣の言うとおり、ノブと龍太という人は県外の名門私立校に今通っているという。

そこでサッカー一筋に頑張ってるとか……もしかしたら、会えなかったのではないか？と麗奈はまたそう思った。

「大丈夫だよ。」

マナが力強い口調でそう言った。澄んだ目で、まるで自分に言い聞かせるようにして言ってくる。

「大丈夫。健斗とヒロは絶対来るよ。何だかんだ言って、松本事件のときもちゃんと来たんだからっ！」

「……そうだよね。」

マナの言葉に、麗奈は表情を緩めて小さく笑った。全ての不安がぬぐい去れたわけじゃないけど、幾分か気持ちがましになった。

今麗奈に出来ることは、二人を信じることだけなのだ。

「あれ？」

するとまた、麗奈たちの後方から声がした。麗奈たちはすぐに振り向くと、そこには奈津紀がいて、ゆっくりと麗奈たちのとこに近づいてきた。麗奈は少し驚いたような声をあげた。

「ナッチャンっ？来たの？」

「うん……面白そうと思ってついてきたんだけど……マナと結衣もいたんだね？」

奈津紀はそう言いながら、マナと結衣のことを見た。マナと結衣は顔を見合せて困ったように笑った。

「うん……こっちのことが気になってさぁ。」

「みんなして？そんなに気になることでもあるの？ただの練習試合でしょ？」

奈津紀の言葉に、結衣とマナは揃って麗奈の方を見た。二人の考えていることはなんとなく分かっていた。

奈津紀は事情を何も知らないのだ。だから奈津紀からしたら、ただの練習試合にどうしてこんなに集まるのかを不思議に思うらしい。結衣やマナなんて部活着のままだ。

「あのね、ナッチャン……今日の練習試合は、ただの練習試合じゃないの。」

「え……どういうこと？」

「あのね、今日の試合に負けたら……サッカー部は廃部になっちゃうの。」

マナがそう言うと、奈津紀は驚きの声を思わず呑み込んだ。

「嘘っ！本当に？え……なんで？」

「えっと……それには色々と事情があるんだけど……」

麗奈がそう言いかけると、麗奈の目に知ってる人の顔が飛び込んだ。少しぽっちゃりして、神乃高のユニフォームの背番号2番を背負っている人だった。

のんちゃんだ。のんちゃんは靴紐をしっかりと結んでいた。本当にもう試合が始まってしまうらしい。

そう考えていると、突然結衣がスタンドからグラウンドに続く階段の方へと駆けていった。突然のことだったので、麗奈もマナも奈津紀も驚いてしまった。

「あっ……結衣っ！」

麗奈が呼び止めたが結衣は止まらず、階段を下りていった。そして、一つ高い段の上からのんちゃんのことを見下ろした。

「野村くんっ！」

結衣が呼びかけると、のんちゃんはふと顔を上げて結衣の方を見た。のんちゃんは突然のことに驚いたように目を丸くした。

「早川さん？」

結衣はのんちゃんの目を真っ直ぐ見ていた。そして高鳴る鼓動を感じながら、ゆっくりと息を吐いた。

「野村くん……あの……頑張ってねっ！」

「え……？」

「負けないでっ！健斗くんたちなら絶対来る……だから、頑張ってっ！」

結衣からの激励の言葉を受けて、のんちゃんはきょとんと目を丸くしていた。だが、やがて事情を全て察したのかゆっくりと笑って見

せた。

「……ありがとう……出来るとこまで、やってみるよ。」

そう言うとのんちゃんは静かに結衣の近くから去っていった。そしてのんちゃんは神乃高のベンチの方へとゆっくりと歩いていった。

その意外な状況を麗奈たちは唖然として見ていた。普段の結衣らしくない行動だった。あんな風に興奮したように、感情を露わにするなんて……何かこの試合に、結衣なりにも特別な何かがあるのだろうか……麗奈はそんな風に感じていた。

「ねぇねぇ、あれって何？もしかして結衣ってば……そういう感じ？」

奈津紀が面白おかしそうにそう麗奈に言ってきた。どうやら奈津紀は今の場面を全然違った解釈で捉えたらしい。麗奈は呆れるようにため息を吐いた。

「もうっ……ナッチャンっ！」

「あはっ……じょ、冗談だよぉ～。」

すると結衣が麗奈たちの元に戻ってきた。それとほぼ同時に、ピーッというホイッスルが聞こえた。その音を聞いた瞬時、麗奈たちは身体を強ばらせた。

とうとう始まってしまった。それぞれの選手が、それぞれのポジションにつき始めた。相手の選手はみんな身体が大きく、その逆にこ

ちらの選手はみんな小さく見えた。本当にもう始まる寸前だ。
麗奈はもう一度周りを見渡した。健斗たちはまだ来ていない。麗奈は電話をかけようと思って、鞄の中からケータイを取り出そうとした。

そのときだった。

「……松本さんっ！」

結衣の驚いたような声とその名前に、麗奈はドキンッと嫌な心臓の高鳴りを覚えた。おそるおそる振り向いてみると、その高鳴りは一気に仰天へと変わった。

松本絢斗だった。相変わらずのイケメン振りで、さらついた髪を風に靡かせながら……松本絢斗が制服姿でゆっくりと麗奈たちのところに近寄ってきた。

「……よう。」

松本は結衣に穏やかに微笑んで挨拶をした。結衣も嬉しそうに笑った。そのやり取りに麗奈とマナは思わず目を疑った。

麗奈の頭の中には、あの忌々しい事件しか浮かんで来なかった。狂気の沙汰にいた松本に手を掴まれたときの恐怖を、麗奈は忘れることが出来なかった。

すると、松本がゆっくりと視線を麗奈に向けた。麗奈はビクッと体を震わせた。胸が痛いくらいに高鳴って、恐怖でいっぱいだった。

「……久しぶり……麗奈ちゃん。」

「え……あ……お、お久しぶりです……」

穏やかな口調に麗奈は戸惑ってしまった。しかしさらに驚いたことが続いた。

「あのときは、本当にごめんな？俺……君に酷いことをして……本当に申し訳ないって思ってる……」

そう言って松本は深々と頭を下げてきた。麗奈は突然のことに激しい動揺に駆られた。もちろんマナもだし、それを見ていた奈津紀も同じように驚いていた。

まるで人が変わったようだった。あのときの傲慢さが嘘のように消えている。一瞬、演技だろうかと思ったがそうではないらしい。それくらい、松本からの真摯さが伝わってきた。

「あ、あの……えっと……私、別に気にしてないので……その、顔上げてください。」

麗奈がそう言うと、松本はゆっくりと顔を上げてふっと微笑んだ。

「ありがとう。」

麗奈はその言葉にゆっくりと会釈をすることしか出来なかった。本当にまるで人が変わった。一体どうしてこんなに、穏やかな人になったのか……麗奈には不思議で不思議でたまらなかった。

でも、もう気にしていないというのは本当だった。あの事件は忌々しい記憶だったが、あの事件から得たものも色々とある。だから麗奈はそんなに気にしてはない。当然、松本に対する恐怖は残ってい

たけれども……

「あの……松本さん。」

結衣が松本に声をかけると、松本はすぐに結衣の方を見た。

「ん？」

「あの……相手の高校って強いんですか？」

結衣の質問には麗奈も同然だった。そういえば、円も言っていた。今日の相手は強い……と。でもそれがどのくらいの強さかは分からない。それが知りたかった。

松本はそう聞かれると顔をしかめてゆっくりと頷いた。

「……あぁ。強いな。俺らの代も、大会でここと当たって負けた。」

「そんな……」

麗奈は息を呑んだ。松本は県で三本の指に入るくらいの実力がある選手だって、健斗がそう褒め称えていたのを麗奈は思い出していた。

そんな松本のいるチームを、破った高校ということは……麗奈が想像しているよりもはるかに強いに違いなかった。

「ただ……あれは二軍だよ。」

「え？」

「あれは二軍だ。一軍じゃない。一軍は今頃自分たちの学校で練習してるんだろうな。わざわざ一軍がこんなとこまで来るわけがない。」

「じゃあ……」

二軍と聞いて麗奈は安心感が宿った。まだそこまで絶望的とは言えないのだろう。そう思った矢先だった。松本がさらに続けて言ってきた。

「ただ……二軍と言っても洗目の二軍だからな……少なくとも、うちよりはずっと強いと思う。」

松本がそう言った瞬間、ホイッスルが鳴った。グラウンドの中心で、ボールが動かされ始める。

ついに……試合が始まったのだ。

第9話　新たなる決意　P．61

ホイッスルが鳴って中心のボールが動かされ始めた。試合は相手ボールから始まった。

ついに試合が始まったのだ。

麗奈はギュッと体中に力を入れてその試合の行き先を見守った。他の人も同様だった。

まず、ボールは相手に渡る。ボールがグラウンドの中心から右サイドへと渡り、相手が徐々に攻撃をしかけ始めた。

「二軍なのに……そんなに強いんですか？」

結衣が呟くようにそう訊くと、松本は黙って小さく頷いた。どうしてわざわざそんな強いとこと練習試合をするのだろうか……と麗奈は疑問に思っていたが、それは学校側の策略なんだということがすぐに分かった。

そう思っているとだった。

今さっきまでセンターサークルにいたのに、いつの間にかそのさらに半分までボールが運ばれていた。

相手チームは軽やかなパスワークで繋いでくる。神乃高の人はそのパスワークに翻弄されてボールに触れずにいた。

するとあっという間に相手のチームはパスを回して、ゴールの前ま

で攻めて、ペナルティーエリア内に入った。そして……

相手選手の一人がシュートを放った。そのシュートは吸い込まれるようにゴールの方へと向かう。そしてキーパーはそれに反応出来ず、あっという間にゴールが決められてしまった。

相手のゴールが決まった瞬間、ホイッスルが鳴った。麗奈たちはそのことに悲嘆の声を上げた。試合開始、わずか五分。もう一点が決められてしまった。

相手選手はハイタッチなどをしておちゃらけていた。完全にその雰囲気から、こっちを見下している。

「もう入っちゃった……」

奈津紀が茫然とするようにそう呟いた。麗奈も同じような気持ちだった。そしてそれは、松本の言う通りだった。

いくら二軍とは言え、相手は明らかに格上だった。今のゴールまでのパスの流れ、ボールを奪ってから一分も経っていない。鮮やか過ぎて驚くほどだった。

そしてそれは同時に、ほぼ絶望を意味していた。今の一点は明らかに精神的に大きくこちらに影響しただろう。神乃高の選手は戸惑いを隠せないようだ。

「……ハァ……ハァ……」

「やっぱ強い……」

のんちゃんはピッチに立って、そう弱気になっているチームメイトを見た。今自分は何も出来なかった。それくらい相手の技術が圧倒的に上だった。

「やっぱ勝てねぇよ……もう一点決められたんだぜ……」

二年生の先輩が落胆するようにそう呟いた。のんちゃんはそれを聞いて胸が引きちぎられるような思いになった。

やはりうちのチームは最初から勝つことを諦めている。このまま廃部になるという運命を受け入れようとしている。

そんなの嫌だった。自分はこのまま、こんな形でサッカー生活を終わらしたくない。のんちゃんはそういきり立ち、ゴールに入っているボールを手に持った。

「まだですよっ！まだ、試合は始まったばかりですっ！一点取り返しましょうっ！」

のんちゃんはそうみんなを勇気づけるように言った。しかしみんなの顔色が変わることはなかった。戸惑いと落胆を両方抱えている。声も、覇気もない。のんちゃんは悔しい思いをこらえて、惨めな思いを振り切って、ボールをセンターサークルへと送った。

健斗たちが来るまで、一点でも抑えなければならない。健斗たちを、信じるのだ。

一方、相手チームは打って変わってご機嫌な様子だった。

「ナイッシュー！」

「当然っ！つーかびっくり。相手何にもしてこねぇっ！」

「してこないんじゃなくって、出来ないんだろ？」

そう言って嘲るように高らかに笑った。相手の戦意を喪失させるために、わざと大きな声で笑った。

「今日のノルマ、何点だっけ？」

「前後半合わせて……6点。」

「6点かぁ……」

ニヤリと笑って見せる。

「これじゃあもっと差がつきそうだな。」

「だな。おら、早くポジションに戻れよ。」

「おう。」

そしてホイッスルが鳴って、試合が開始された。再びボールは神乃高ボールだ。麗奈は祈るような気持ちで手を握って試合を見ていた。

今度こそ……っ！

しかし麗奈の祈りは虚しくも散った。すぐに相手にパスカットされて、相手にボールが渡る。今度は相手は右サイドから攻めてきた。相手の右サイドにいる選手がドリブルをしかけた。

とても足が早く、こっちの選手はまったく追いつけない。そして、右サイドのラインギリギリからセンターリングが上がった。ボールは宙に投げやられ、ゴール前へと向かった。

相手選手の何人かが、そのボールに合わせようと準備している。

お願いっ！止めてっ！

しかし、相手の選手が他の人よりも早くボールに触れた。相手の選手は競り合いながら頭でそのボールをゴールに叩きつけた。

見事、ボールはゴールネットを揺らした。その瞬間、麗奈たちはまた悲嘆の声をあげた。

すでに、二点決められてしまったのだ。

それから何十分かが経過した。そのあと、神乃高はなんとか粘って見せたが、結果は変わらなかった。すでに四得点を決められて、ホイッスルが鳴った。

前半戦が終了したらしい。

呼吸を荒くしながら、神乃高選手は自陣のベンチに戻っていった。みんな一人も言葉を発さず、暗い面持ちでベンチに腰掛ける。すでに酷く疲弊していた。

いや……疲弊しきっているのは肉体的というよりも、精神的なものの方が大きいに違いなかった。

麗奈たちもすでに言葉を失っていた。何と言えばいいのか、分からなくなるほどの圧倒的な試合だった。圧倒的にあちらの方の技術が上だ。

惨めだった。こんなことがあっていいのだろうか……

麗奈は彼らの表情を見ながらそう思った。酷く落胆し、絶望に満ちた虚ろな瞳。そしてのんちゃんも激しく肩で呼吸しながら、歯がゆそうな表情をしていた。

「……何か……悲しいね……」

マナがそう呟くように言った。その言葉を聞いて、麗奈ははっとしてマナを見つめた。マナは、悲しそうな表情を浮かべながらギュッ

と唇を噛み締めていた。

「……同じ高校生なのに、こんなにも大きく差があるなんて……スポーツって……残酷なんだね。」

その言葉は、絶望を代名詞するものだった。もう万が一でも、神乃高が勝利することはないと言っているようなものだった。

そしてそれは即ち、廃部という意味にもなる。

本当にこれでいいのだろうか。負けると分かっている試合をさせられ、頑張っている者が相手にも虐げられ、こんなに惨めな思いをしている。

今、試合をやっている彼らは一体どんな思いでグラウンドにいるのだろうか。

もう見てられない……我慢の限界だった。

麗奈は唇をギュッと噛み締めながら、その場を立ち去った。みんなは麗奈が急に走り出したから驚いたみたいだったが、何も言わなかった。

麗奈は息を切らしながら、校門の方に走っていった。走りながらケータイを握り締めて、ダイアルをかける。もちろん電話をかけた先は健斗だった。

しかし健斗は電話に出ない。そのことが麗奈を不安にさせ、さらに

は苛立たせた。

「……どうして出ないの……」

麗奈はゆっくりとスピードを緩めて立ち止まった。息が苦しくって、感情が抑えきれなくなってきた。何かが込み上げてきて、次第に麗奈の頬に涙が伝った。

「……早く来てよっ……お願いだからぁ……健斗くんっ……」

コール音が途絶えて、留守番サービスへと移り変わった。麗奈はそれをゆっくり切って、涙を拭おうとした。

「早く来てよっ……健斗くんっ……健斗くんっ！！」

そのときだった。

校門の方から声が聞こえた。

「やべぇっ！もう前半終わってんぞっ！」

「分かってんよ、そんなのっ！」

麗奈はその声を聞いて、バッと顔を上げた。すると、校門の方から麗奈が待ちに待った人物たちが自転車をめいいっぱい漕いでこちらに向かってきた。

健斗とヒロだった。汗を大量に掻いて、苦しそうな表情で飛ばしてくる。

その顔を見たとき、麗奈は嬉しさと同時に大きな喜びを感じた。

すると健斗たちは麗奈の存在に気づいたらしく、麗奈の前で自転車を乗り捨てた。そして鞄を持って、麗奈に駆け寄ってくる。そして健斗が呼吸を荒くしながら、真剣な表情で麗奈に言ってきた。

「ワリィッ！遅くなったっ！試合、どうなってるっ？」

健斗が慌てるようにそう言った。大量に汗を掻いて、こんなにも呼吸を荒くしているということはおそらく相当走ってきたのだろう。

でもそれでも、麗奈は込み上げてくる感情を抑えることが出来なかった。

「……遅いよっ！バカッ！！」

麗奈が怒鳴り声をあげると、健斗とヒロは驚いたように目を見張った。健斗は呼吸を落ち着かせながら、麗奈をじっと見つめた。

麗奈の頬に伝う涙はとめどなく流れ続けた。麗奈はこの言葉では表現出来ない感情にとらわれていた。

「……ヒロ。先行ってて。」

健斗がそう言うとヒロは小さく頷いただけで、走ってグラウンドの方へと向かっていった。

健斗と麗奈は向き合って、互いに言葉を発さずにいた。

「……ごめんな、遅くなって。」

「……本当だよっ……バカッ……」

「ごめんってば。俺たちだってすげー忙いだんだぜ？」

「……そんなの知らないっ……」

本当はこんなこと言うつもりはなかった。だが、あのような光景を見続けたからには……誰かにこの惨めな気持ちをぶつけたくって仕方がなかった。本当は嬉しいはずだったのに、悔しいっていう気持ちが強かった。

「みんな……あんなに頑張ってるのにっ……一生懸命やってるのに……どうして廃部にならなきゃいけないの？」

「……」

「あんなに惨めな思いをしてるのに……あんなに悔しい思いしてるのに……廃部にならなきゃいけないんなんて……そんなの……悲し過ぎるよっ……」

麗奈の気持ちが溢れ出した。彼らが可哀想でこれ以上見ていられなかった。

誰かになんとかして欲しい。頑張ってる彼らを、これ以上あんな目に合わせないで欲しい。麗奈はただそれだけを思っていた。

するとだった。

健斗が小さく笑って、麗奈の頭に手を乗せた。

「……ありがとうな……」

「……健斗くんっ……」

濡れた瞳で健斗を見つめる。健斗は笑っていた。嬉しそうに……麗奈のことを見ていた。

そして健斗はすっと麗奈の頭を撫でながら、麗奈の横を通り過ぎようとした。その際に麗奈に囁くように言ってきた。

「……後は任せとけ……」

胸がドキンッと高鳴った。

そういうと、健斗は麗奈から遠ざかってグラウンドに向かって走っていった。麗奈はすぐに振り返えって健斗の後ろ姿を見つめた。

――後は任せとけ……

やけに自信の籠もった口調で、健斗は確かにそう言った。

結衣は麗奈が去っていったその後ろ姿を見つめていた。麗奈がこの場を立ち去った、その気持ちは痛いほどよく分かった。

自分も同じだ。こんなに苦しい試合を見ていたくはなかった。ただ、惨めな思いになるだけだった。すでに勝敗はほとんど決まっているかのように思えた。

「……やっぱりダメだな。」

松本さんがそう呟くように言った。結衣はそれを聞いて、ゆっくりと顔をあげる。松本さんは苦しそうな表情を浮かべていた。歯がゆさを感じながら唇を噛み締め、握り拳を強く握っていた。

彼もまた悔しい気持ちをこらえているように見えた。

「……くそっ……」

「……松本さん……」

結衣が松本さんに何かを言おうとしたときだった。

「……あっ！！」

隣にいたマナが驚くような声をあげた。そしてマナは結衣の注意を引くように強く叩いてきた。結衣は少し驚いてマナの方を見た。

マナは興奮していた。歓喜の声をあげた。

「ゆ、結衣っ！！ヒロが来たっ！！」

「えっ！？」

結衣はすぐにマナの指差す方を見た。マナの言うとおり、階段の辺りにヒロが急ぐように駆け下りていくのが見えた。そしてその後に……

「……あっ！！」

結衣は確かに見た。ヒロが降りて行った、少し時間差が開いてから、健斗が階段を降りていくのを……

健斗は急いで階段を駆け降りて行った。そしてグラウンドに降りると、走って神乃高のベンチに駆け寄る。

「のんちゃんっ！！」

健斗とヒロが叫ぶようにして名前を呼んだ。のんちゃんはぐったりとしたようにベンチに腰掛けていた。そして虚ろな目をしたまま、健斗たちの方を向いてきた。

のんちゃんは健斗たちの姿を確認すると、その表情は希望が宿るよ

うに明るくなり始めた。思わず立ち上がり、大きな声で叫んだ。

「健斗っ！！ヒロっ！！」

のんちゃんの声に反応するように、先ほどまで絶望を抱いていた他の部員たちが驚くようにして健斗たちの方を見てきた。そして瞬時に、彼らの表情に希望が宿り始めた。

健斗たちの登場により、神乃高のベンチは騒然とした。

健斗とヒロは肩で呼吸をし、焦る気持ちを抑えながらゆっくりと歩き出した。そして、その神乃高ベンチへとゆっくりと歩み寄る。

そしてのんちゃんの前に立つと、呼吸を整えながらゆっくりと笑った。

「ごめん。遅くなって……」

のんちゃんは嬉しそうに笑いながら大きく首を横に振った。薄らと涙を浮かべている。その涙を拭いながら、本当に嬉しそうに笑った。

「きっと来てくれるって信じてたよっ……」

「……うん。」

「……おい、のんちゃん。」

健斗の名前の知らない二年生の人がのんちゃんに言ってきた。

「……こいつらが、助っ人か？」

その問いかけに、のんちゃんは笑いながらゆっくりと頷いた。

「はい。健斗とヒロです。」

「……力を……貸してくれるのか？お前らが……？」

彼らは、特に健斗の実力は充分に知っているはずだった。そしてそれは同時に健斗に対してある種のわだかまりみたいなものがあるに違いない。

健斗は苦笑いを浮かべながらゆっくりと頷いた。

「はい。」

「……いいのか？」

「はい。俺らも試合に、出させてもらってもいいですか？」

すると他の部員たちは、戸惑いながらある一人の部員を見た。それは温厚な表情をして、随分と背の高い人だった。その人はゆっくりと健斗たちに歩み寄ってきて、小さく笑った。

「……松本先輩から話は聞いてるよ。君たちが力になってくれるって……僕は二年で現部長を務めてる今泉（いまいずみ）だ。」

「……どうも。」

「君たちが来てくれたことは……非常に心強いよ。でも……」

今泉は頼りなく苦笑いを浮かべた。

「……正直相手との力の差は歴然だ。前半だけで……四点差……正直勝てる見込みは……」

「あります。」

健斗が力強くそう言った。すると今泉は顔を上げた。今泉だけではなく、他の部員たちも動揺しながら健斗を見た。健斗は座り込んでいる神乃高の部員たちを見渡して、にっこりと笑いながら言った。

「勝てる見込みはまだあります。試合はまだ終わってない……本当に負けたって決まるのは、自分たちが今ここで諦めたときです。」

「そんなこと……言われてもな……」

一人の部員が戸惑いながら呟くように言った。健斗はそれでも胸を張ってさらに続けて言った。

「まだ諦めるのは早いです。確かに相手は強いかもしれないけど……この試合に勝てるかどうか、俺たちだけじゃなく、みんなにもかかってます。」

「……」

「だからみんなに一つだけ聞きたいことがあるんです。」

健斗がそう言うと、今泉とのんちゃんを含めてここにいる、総勢14人の部員が顔を上げて健斗の方を見た。健斗は少し間を置いて、彼らの表情を伺った。

「……みんなはこの部を……残したいって思ってますか？」

「え……？」

「は……？」

「心の底から、廃部を阻止したいって思ってますか？のんちゃんのように……廃部にしたくないって思ってますか？」

健斗がそう訊くと、みんなは顔を見合わせながら戸惑っていた。だがやがて、みんなの顔つきが変わった。

「……そりゃそうだよ。学校側の都合で……廃部にさせられちゃ……な？」

「あぁ。このまま負けて惨めな思いなんてしたくない。そうだよな？」

「うん。何かこのままじゃ終われない……まだ俺、やり切ってないような気がする。」

みんなの活気が少しだけ戻ってきた。自分たちの本来の気持ちを取り戻したらしい。

このままじゃ終われない。

このまま惨めな思いをして終わりたくない。

彼らの中に残っている自尊心が彼らにそう言わせているのだ。健斗

はそれだけ聞けば充分だった。

「だったら俺らは、そのみんなの気持ちに力を貸します。」

「……山中……」

健斗はヒロを見た。ヒロも健斗を見て、ゆっくりと頷く。健斗もゆっくりと頷き返すと、大きく息を吸った。

「……今日から俺、山中健斗は……この神乃高サッカー部に入部しますっ！！」

「俺、真中ヒロもこの部に入部します。よろしくお願いします。」

健斗とヒロはみんなに向かって頭を深々と下げた。しばらくみんなは唖然としていたが、やがて一人の部員が嬉しそうに言ってきた。

「ほ、本当かよっ！？」

「お前らなら大歓迎だっ！！なっ？」

「うんっ！！よろしくなっ！！山中、真中。」

みんなの元気が完全に蘇ったみたいだ。健斗とヒロはゆっくりと顔を上げて、互いに見合った。そしてゆっくりと笑い合う。

今日から……健斗とヒロは……神乃高サッカー部の部員となったのだ。そしてもう一度、サッカーを始める。今日はその第一歩なのだ。

こんなに嬉しい日はない。

すると今泉は覚悟を決めたように大きく頷いた。

「……よしっ！分かった。部長として、二人の入部を正式に認めるっ！二人とも、これからよろしくな。」

今泉にそう言われて健斗とヒロは大きく笑って頷いた。

「はいっ！」

「はい。」

「よし。じゃあさっそくで悪いんだけど、試合に出てもらえるか？えっと……二人のポジションは？」

今泉にそう言われて、健斗とヒロは迷わずに即座に答えた。

「俺はFW（フォワード）です。」

「俺はGK（ゴールキーパー）でお願いします。」

「よし、分かった。平塚と長岡。この二人と代わってくれ。じゃあ二人は急いで準備をしてきてくれ。」

「はい。」

健斗とヒロは鞄を持って、準備に取りにかかろうとした。そのときだった。

「あ、健斗。」

のんちゃんは健斗だけ呼び止めると、すぐに反応して振り向いた。

「ん？」

「松本さんから預かってるものがあるんだ。えっと……はい、これ。」

「……えっ？」

のんちゃんから手渡されたのは神乃高の白いユニフォームだった。肩の部分に青のラインが入った、正式なユニフォーム。健斗はそれを受け取ってそれを広げてみる。

するとその背番号に健斗は目を見張った。それは紛れもなく、エースナンバーの証である１０番のユニフォームだった。以前、松本が背負っていた番号だった。そして健斗が中学のときに背負っていた番号でもある。

松本事件のとき、二人はこの背番号を背負いながら戦った。そして今、その番号が一つになろうとしている。

健斗はゆっくりとスタンドにいる松本の方を見た。松本と目が合うと、松本はゆっくりと頷いた。健斗もそれを見てゆっくりと頷き返す。

「健斗っ！何してんだよ。行くぞっ！」

「おう。」

健斗はとりあえず準備に取りかかりに行った。

そして、それから四、五分が経った。そろそろハーフタイムが終わり、試合が再開される。

ところで麗奈は走ってスタンドの方に戻ってきた。そろそろ試合が始まるのだから、ちゃんと最後まで自分が見届けなければならない。

そして健斗はどこだろうと思い、麗奈は必死に探した。

――いたっ！

その姿にドキッとした。

神乃高のユニフォームを着て、完全にサッカーをする格好に着替えていた。その背番号は、以前松本事件のときに着てたのと同じ……１０番だった。そして体を慣らすように体操をしていた。

そしてその横にはヒロがいた。黄色いキーパー服に着替えて、グローブをしっかりとはめているようだった。

この二人がいるだけで、心なしかものすごく安心感が宿った。

するとホイッスルが鳴った。後半が開始するらしい。麗奈は祈るような気持ちで健斗を見つめていた。するとだった。

「……ヒロッ！！」

マナがスタンドからギリギリの柵まで来て、ヒロに声をかけた。するとヒロは驚くように振り向いてマナを見た。ヒロとマナは少し見つめ合った。そしてマナは祈るような目でヒロを見つめる。

「……しっかりねっ！！」

「……おう。」

ヒロはそう笑ってグラウンドの方へと歩き出した。すると健斗もそれと同じようにグラウンドに向かっていく。

「……健斗くんっ！！」

麗奈の声に今度は健斗が振り向いた。じっと麗奈を見つめる。しばらく見つめ合ってから、麗奈は何か声をかけなきゃっと思って必死に言葉を探した。

「……無理……しないでねっ……」

消えるような声で口から出た言葉がそれだった。健斗には聞こえてないかもしれなかった。

だけど健斗は麗奈を見ながらゆっくりと微笑んだ。それから何も言わずに、グラウンドの方へと向いて麗奈から遠ざかっていった。

無理しないで……

麗奈はただそれだけを祈るように心の中で呟いた。

「……おっ♪間に合った間に合った。」

突然麗奈の知ってる声が聞こえた。麗奈は慌ててその声のする方へと顔を向けた。すると階段の方から麗奈に向かって、歩いてくる人物がいた。

「南先生っ！」

そう。南先生が笑いながら歩いてきたのだ。突然の登場に麗奈は驚いていた。だが、もっと驚いたのは……

「南先生っ？」

麗奈のいる三段上のスタンドから結衣がそう声をかけた。すると南先生は結衣の方へと視線を向けると、結衣の姿を確認して懐かしそうに笑った。

「あら～っ！早川さんじゃないっ？元気してたぁ？」

「はいっ！」

「南先生、いつからいらしてたんですか？」

麗奈が目の前の南先生に訊くと、南先生はゆっくりと笑って答えた。

「今来たのよー。ちょっと仕事から手が離せなくってねー？でも結構いいタイミングだったみたいね。ギャラリーも結構いるし……」

麗奈はそれを聞いて、すぐに周りを見渡した。すると南先生の言うとおり、スタンドの周りに人が少し増えていた。

するとだった。

「間に合ったかなっ？」

「これから始まるみたいだけど……」

二人の高校生の声がした。違う制服だったから目立っていた。でも明らかに高校生。そんな彼らが麗奈たちのいるスタンドに近づいてくる。するとそれに気づいた早川がまた驚くような声をあげた。

「前田くんっ！横内くんっ！」

前田と横内と呼ばれた高校生二人はすぐに結衣の方を見た。そして彼らも同様に驚いたような顔を浮かべた。

「あ……もしかして、早川さんっ？」

「うんっ！」

「うわっ……久しぶり。っていうか髪切ったでしょ？随分雰囲気変わったね？」

前田と呼ばれた人がそう笑いながら結衣に言うと、結衣は照れくさそうに笑って頷いた。

「うん。少しね……前田くんたちも応援しに来てくれたの？」

「うん。まぁね……ヒロから事情は聞いてたし……って、あれ？もしかして南ちゃん？」

今度は南先生の方に気がつくと、彼らはこちらの方に近づいてきた。南先生は彼らの顔を見て、また懐かしそうに笑った。

「あら。琢磨くんに佐久くんじゃない。二人とも元気そうねー？」

「南ちゃん何でここにいんだよ？」

「あら、何よ？あたしがここにいちゃいけないってわけ？」

「そうじゃないけどさぁ～……仕事とかねぇのかよ？」

やけに親しげに話す彼らの正体が麗奈にはようやく分かった。健斗とヒロの話していた、神乃中サッカー部の部員だった、琢磨と佐久という人なのだろう。彼らも事情が知っている上に応援に駆けつけてくれたのだ。

一気にギャラリーも増えたような気がした。そして麗奈はゆっくりとグラウンドの方に目を向けた。

「……おい、健斗。見てみろよ。」

健斗が体を慣らすように体操していると、ヒロが近寄ってきてそう言ってきた。健斗はヒロの方を見て不思議そうに言った。

「何を？」

「スタンドのとこ。何かめっちゃギャラリー増えてんだけど……」

「え？」

健斗は思わず驚いた声をあげながらスタンドの方を見た。確かにさっきよりギャラリーが徐々に増えている。部活の格好をした人や普通の制服の人などがいる結構増えている。どうしてだろうか……？

それにその中に知っている人もいた。間違いなかった。

スタンドの一番下の段に、南ちゃん、そして佐久と琢磨がいた。三人とも応援にかけつけてくれたのだ。健斗は照れくさそうに小さく笑った。

「……こりゃ負けられないな。」

「そうだな……しっかし手厳しいなぁ～？洗目相手に四点差だろ。いくら二軍とはいえ、お前的にどうなのよ？」

確かに厳しいと言えば厳しいのかもしれない。相手は二軍とはいえ、あの洗目高校だ。それなりの実力はあるのだろう。

だが健斗は鼻を鳴らしてふんっと言って笑った。

「……関係ねぇよ。四点取られてんなら、五点取り返す。ただそんだけだ。」

「……あっそう。」

「……あっ！そうだ、ヒロっ！これ。」

「うんっ？」

健斗はヒロにあるものを投げて渡した。ヒロは不思議そうにそれを受け取った。それはあのスポーツブレスレットだった。ヒロはそれを見ると驚くようにして健斗を見た。

「お前っ……これっ！」

「つけとけよ。俺らにとって、すげー大事なもんだからな。」

健斗がそう言うと、ヒロは少し戸惑っていたが、やがてふっと表情を緩めるとグローブを取ってそのブレスレットを腕につけた。

健斗はそれを確認すると笑って、同じようにブレスレットを腕につけた。久しぶりにつけたこのブレスレット……健斗とヒロ……そして翔との三人の絆の証……

「うわっ！やっべぇっ！俺すっげーやる気が上がってきた。」

ヒロは子供のようにはしゃぎながらそう言った。不思議と健斗も同じような気持ちだった。ドキドキ感というよりも、そうだ……ワクワク感の方が強い。

相手が強いだの、そんなの関係ない。むしろ強いとことやる方が燃えるじゃないか。健斗はニヤリと笑った。

そしてそろそろみんながポジションにつき始める。健斗はそれを見ながら、相手のポジション配置をじっと見つめた。頭の中を冷静に

し、観察する。

明らかに相手はこちらを下手だと見ているらしい。ニヤニヤと笑っている。

「……ふ～ん……」

健斗は太陽の位置を確認した。そしてキーパーの位置、そして相手のDFの最終ラインの位置……

「……ヒロ……」

健斗がボソッと声をかけると、ゴールの方に向かおうとしたヒロがすぐに振り向いた。

「あん？」

健斗はヒロの耳元に囁くように何かを呟いた。すると、ヒロは少し驚いた顔をして健斗と同じように太陽の位置、そして相手のキーパーとラインの位置を確認した。

するとヒロは面白そうにニヤリと笑った。

「……なるほどね。」

「行ける？」

「任せとけ。」

ヒロはそう言うと、ゴールの方へと走っていった。

健斗はふぅっと高鳴る鼓動を抑えるようにため息を吐いた。キックオフはこちらからのようだ。

健斗はセンターサークル内に入って、ホイッスルが鳴るのを待った。

あのときと同じだ。心臓が大きく高鳴っている。

ドックン……ドックン……ドックン……

するとホイッスルが鳴った。

後半戦が開始された。

第9話　新たなる決意　P．62（後書き）

ついに健斗とヒロが加わりました。こっからさらにスポーツの色が強くなっていきます。

要所要所でサッカーの用語等などの解説も加えていきます。

あと質問などもしっかり受け付けます。

それでは第9話、ラストに向けて……どうぞっ！！

第9話　新たなる決意　P．63（前書き）

用語説明（※サッカーについてある程度分かる人は読まなくても大丈夫です。）

キックオフ……試合が始まるときの合図みたいなもの

FW（フォワード）……攻撃を中心とするポジション

MF（ミッドフィルダー）……中心ら辺でプレーするポジション。主に攻守両方を担う。右サイドハーフと左サイドハーフと真ん中で構成される。

DF（ディフェンス）……守るポジション。右サイドバックと左サイドバックとセンターバックで構成される。

GK（ゴールキーパー）……ゴールを守る選手。手を使っていい。

ハーフライン……グラウンドの半分を示すライン

クリア……自陣からボールを出すこと。

ペナルティーエリア……ゴール前らへん。

センターサークル……ハーフライン上の大きな円。この円の中心で、キックオフがされる。

オフサイド……相手のDFラインより後ろでパスをもらうファール。

プレッシャー……相手からボールを奪おうと圧力をかけること。

センターリング……右か左のサイドからゴール前に送られるパス。
自分にとってはチャンス、相手にとってはピンチとなる。

インサイド……足の内側。

アウトサイド……足の外側

何か一つでも分からないものがあったら、どんどん質問してくださいっ！

第9話　新たなる決意　P．63

「……なぁっ。」

「ん？」

洗目高校の選手の一人が近くで靴紐を結び直してる仲間に声をかけた。彼は健斗とヒロのことを見ながら、二人を見るように促した。

「あの二人……メンバー変えて来たぞ。あんなやつらいたか？」

彼がそう言うと、もう一人のやつも二人を見た。しかし彼の方はあまり興味がなさげな表情ですぐに靴紐の方に視線を向けた。

「知るかよ。どうせ控えのやつとかだろ？」

「……いや……俺どこかであの二人見たような気がすんだよ。特に１０番の方……」

「考え過ぎだよ。それよりも早くポジションにつけよ。コーチからノルマがプラス2点つけられたんだからな。さっさと終わりにして帰ろうぜ。」

靴紐を結び終えた彼は面倒臭そうにそう言うと自分のポジションへと戻っていった。しかし、もう一人の彼は二人のこと……特に１０番の存在が気になって仕方がなかった。

「……気のせいか？」

ホイッスルが鳴った。ついに後半戦がスタートした。キックオフでボールは動かされ、まず健斗の足元に収まる。

すると相手選手のＦＷが健斗に突進してきた。だが健斗は慌てない。じっと相手の最終ラインだけを見つめていた。

――今だ！

健斗は半身を後ろに振り向かせると、ボールを蹴り出した。そのボールは、ＭＦ（ミッドフィルダー）でもなく、最終ラインのＤＦでもなく、何と一番後ろのゴールを守っているヒロの場所まで送られた。

するとヒロは転がってきたボールを見定め、そのボールをそのまま……

「いっっっけぇぇぇっっっ！！」

力強い蹴りでボールを蹴っ飛ばした。ボールはハーフラインを越えて、さらに相手の最終ラインを裕に越えた。

しかしそのボールは勢いがあり過ぎたのか、最終ラインを越えてゴールキーパーの辺りまで飛んでいった。突然のことに誰しもが動揺している。特に、洗目高校のやつらは何の意図があるのかさっぱりという顔をして、空を飛んでいるボールを見ていた。

「何これ？クリア？」

「おい、キーパー。そっち行ったぞ！」

最終ラインの要の選手がキーパーに声をかけた。遠くで構えているキーパーが了解するように手を挙げた。

「オーライ、オーライ。」

キーパーは飛んできたボールの着地点を見た。それは自陣のペナルティーエリア内だった。そのため、キーパーはそれをダイレクトにキャッチをしようと構えていた。

が……しかしだった。

「っ！！ちげーよっ！！戻れっ！」」

誰かがそう言ったときには、もう遅かった。

「……えっ！？」

キーパーは絶句した。何と、彼の目の前に選手が一人現れた。健斗がキーパーにくっつくようにボールの着地点で構えていたのだ。

突然の出来事に、キーパーは絶句した。

「……うっ！」

ボールが着地点に到達しようとしたとき、健斗はそのボールを空中でワンタッチした。するとゴールキーパーは眩しそうに目を思わず瞑った。健斗はソフトなタッチでボールは軌道がかわり、相手のゴ

ールキーパーの頭上を越えた。

健斗もそれに流れるようにゴールキーパーの横を抜く。そして、健斗の目の前にはもう誰もいなかった。

健斗はニヤリと笑いながらボールを蹴った。そのボールは、誰にも邪魔されることなくして、吸い込まれるようにしてゴールに収まった。

そしてホイッスルが鳴る。それは一点決まったという証でもある。

しばらく沈黙が続いた。

「……うっおおおおっ！！」

神乃高選手が歓喜の声を上げた。するとグラウンド内も、そしてスタンド側も騒然とした。後半が始まって一分も経たないうちに、何と神乃高が一点取ったのである。

健斗は笑いながら「うしっ！」と言ってガッツポーズすると、ゴールの中からボールを手に持ち走ってセンターサークルへと向かった。

洗目高校の選手はキーパーを含めて唖然としていた。あまりの出来事に頭がついていかなかった。だが、事実健斗は試合開始直後に一点を決めたのだ。

「ちょ、ちょっと待てっ！何？今のオフサイドじゃないの？」

「……オフサイドじゃねぇーよ……」

慌てふためく選手に、最初に状況に気がついたやつが苦々しい表情

を浮かべてそう呟いた。

「ボールが蹴られる前……あいつ、センターサークルらへんにいた……」

「はぁっ？」

「俺はずっと見てたんだ。ボールが蹴られた瞬間、あいつはセンターサークルから同時に走り出したんだ。オフサイドにはならない。しかもボールの着地点をあそこに落ちるようにしたんだ。」

「ちょ……ちょっと待てよ。センターサークルからペナルティーエリアまで何メートルあると思ってんの？人間の足の速さじゃありえないだろっ？」

「それが有り得たからこうなってんだろっ！！」

苛立だしげに彼はそう怒鳴った。すると慌てふためいてたやつはビクッとして口を閉ざした。

そして彼は舌打ちをすると健斗の方を見た。

「……あの二人……ただもんじゃねぇぞ……」

「やったぁぁっ！！」

「さすが健斗だっ！！もう一点決めるなんてっ！！」

のんちゃんやその他の部員たちが健斗に駆け寄って喜びを分かち合った。健斗は体を叩かれながら嬉しそうに笑った。

「ありえないゴールだったなぁっ？つーかよくオフサイドになんなかったな？」

健斗はそう言われるとゆっくりと頷いた。

「はい。計算してやったんで。」

「計算？」

「はい。よく見てください。」

健斗はそう言いながら、未だ呆然と立ち尽くしている相手の最終ラインを指差した。

「相手のラインが全体的に前に上がったんです。恐らく、ノルマとかがあって、全体的に攻撃してくるつもりだったんだと思います。でも、それが原因で……見て下さい。キーパーと最終ラインの間が間延びしてるでしょ？」

健斗の言うとおりだった。相手のゴールキーパーと最終ラインの間に大きなスペースが出来ている。

「だからヒロにそこに蹴り込んでくれるように頼んだんです。しかも太陽が高い位置にあるから、相手のゴールキーパーは見えにくくなる。それを狙ったんです。」

「……それを全部計算したの？あの一瞬で？」

今泉が驚いたように目を見開きながらそう訊いた。他の部員たちも同じような気持ちなのだろう。健斗はにっこりと笑った。

「はいっ。」

「……ハハ……こりゃすごいや……」

今泉は感嘆するように笑った。だが健斗は表情を強ばらせた。

「でも勝負はこれからっすよ。」

「え？」

「今のゴールが上手く行ったのは、相手がこっちを完全になめてたからっす。でも今ので相手も警戒してくると思います。」

「……そ、そっか。」

「はい。だから……こっからは全員で点を取りに行きましょう。守りに入るよりも、相手に攻撃させないくらいに攻めるんです。」

「でも……そんなことしたら守りが薄くなって、危なくないか？」

部員の一人がそう心配そうに言った。確かに、その不安は拭えないが……

「いや、健斗の言う通りだよ。」

のんちゃんが健斗を見ながらそう言った。のんちゃんは健斗の意図をちゃんと分かっているらしい。

「僕たちは負けたらダメなんだ。一点入れたはいいけど、まだ三点差……だからどんどん攻めないと……」

「のんちゃん……」

健斗はのんちゃんの言葉を聞いてゆっくりと笑った。

「そういうことっす。……それに、後ろはそんなに心配しなくても大丈夫っすよ。」

「えっ？」

「あいつがいるんで。」

健斗はにやけながらゴールの方を指差した。健斗が指差した方向は当然ヒロだった。みんなヒロのことを見てお互いに納得するように頷いた。

そして、みんなそれぞれ自分のポジションに戻って行こうとした。のんちゃんは右のサイドバックだから、のんちゃんもそこの位置に戻ろうとした。

「のんちゃん。」

のんちゃんが戻ろうとすると、健斗が呼び止めた。健斗はのんちゃんの堅くてがっしりした肩を叩いた。

「……引き分けとかじゃなくって、勝ちに行くぞ。」

「……え……」

「俺とヒロがいんだ。自信持って行こうぜ。なっ？」

のんちゃんは自分の気持ちを見透かされているような心地で健斗のことを見つめた。健斗はいつもそうなのだ。中学のときもこんな風に、のんちゃんにそうやって声をかけた。

それが何だか懐かしいような気もして、のんちゃんは嬉しく思いにっこりと微笑んだ。

「うんっ！」

のんちゃんはそう言うと、自分のポジションに戻っていった。健斗もその後ろ姿を見ながら小さく笑い、自分のポジションへと戻っていった。

スタンドは騒然としていた。始まった直後に、何と健斗が一点を返したのだ。麗奈はこのありえもしない事実に胸を驚かせた。同時にこの厳しい試合に対して、希望の灯が灯るようだった。

「すごいっ！！」

結衣が嬉しそうに後ろではしゃいでいる。結衣だけじゃない。麗奈の隣でマナも、そして佐久や琢磨と一同となって喜びはしゃいでいた。

「さっすが健斗だっ！！もう一点決めるなんてさっ！」

佐久が興奮するようにそう叫んだ。麗奈も同じ気持ちだ。健斗のサッカーの実力がすごいということは予め知っていたが、やはりこうして改めて見てみると本当にすごい。

しかもあの足の速さ……あの最後に見せた超スピードのドリブルを支えていたものがそれだった。健斗はとてつもなく足が速かったのだ。

麗奈は口元で笑みを作りながらゆっくりと頷いた。

これなら行けるっ！そう思った。

そして試合は再開された。ホイッスルが鳴ると、相手はボールを繋ぎながら徐々にこっちのエリアに進んでくる。なるほど、確かにこのパスワークはなかなかのものだった。

そして左サイドにボールが運ばれて、その左サイドのやつから中央

のやつにボールを渡そうとパスしたときだった。

そのボールを健斗がパスカットをして奪った。相手はボールを奪われると「しまったっ」というような声をあげた。だが健斗は容赦なく、ボールを運び出す。

相手のＭＦが健斗にプレッシャーをかけてきた。だが健斗はそれを物ともせず、鮮やかなテクニックで一人、二人を抜いた。まるで風のように突き抜けていく健斗を見て、抜かれた相手選手は唖然としていた。

「はさめっ！」

また誰かがそう言った。すると中央でドリブル突破を図っている健斗に対し、前から一人、後ろから一人と健斗にプレッシャーをかけてきた。目の前のやつは上手くコースを切って右に促そうとしている。

だが健斗はそんなものに動じなかった。健斗は冷静に周りを見て、そして自分の右サイドにいるサイドハーフ――名前はまだ知らないから、７番の仲間にボールをパスした。

７番は、ボールをもらうとそのボールを持ってドリブルをしかける。が、しかしそれに相手のセンターバックの一人がカバーに行きプレッシャーをかけようとした。

それに臆したのか、７番の選手は慌てて中央にボールを送った。中央には健斗がいた。健斗はそのボールを見た。しかし、そうはさせまいと相手のＤＦが詰め寄ってくる。

確かに早いプレッシャーだ。並みの選手ではない。だが、残念ながら健斗には通用しない。

ボールはやや、健斗の前に送られた。健斗の前にあるスペースにボールが送られていて、相手はそこでパスカットを図ろうとしている。だが、健斗はニヤリと笑いながら、自らそのボールを迎えに行く。

そしてワンタッチで自分の体と一緒に相手を抜き去った。相手はあまりの速さに振り返る余裕すらない。これも健斗の得意とするドリブルの一つ――ラン&ラン――だった。

ボールをただトラップするのではなく、自分の走るコースに向けてボールの軌道を変えるようにトラップをして、そのまま流れるように相手を抜く。すると相手はワンテンポ早い動きについてこれず、思わず立ち往生してしまうわけだ。もっともこれは、相手がスピードに乗って健斗を潰しにかかった場合にしか使えないが……今の状況は健斗にとって絶好の的だった。

すると健斗の前にシュートコースが開いた。健斗はそれをすかさず見逃さないで、シュートを思いっ切り放った。

相手のゴールキーパーは健斗が撃ってくるのを用意していたために、健斗の放ったシュートコース――ゴールの左の隅に向かって飛んだ。

「……なっ！」

彼はそのシュートを止められると確信したのだろう。だが、そのボールの軌道は彼が描いていたものとは違った。彼の手にボールが触れる瞬間、何とボールの軌道が下に変わったのである。ボールは彼の手の下を抜けて、そのままゴールネットを揺らした。

するとホイッスルが鳴り、再び大歓声が起こった。ゴールキーパーは唖然として転がっているボールを見つめた。そして驚くように、健斗を見た。

――ドライブ回転だ……

彼が知る限り、そういう類のシュートを、しかもあんなに正確に放てるものはいない。驚きで胸が高鳴った……

「ば、化けもんかよ……あいつ……」

「よっしゃぁっ！！」

神乃高のメンバーが喜びはしゃいでいる。健斗はその喜びを受け入れるように、みんなとハイタッチを交わす。

健斗はパスをくれた7番の人を見てにこっと笑う。

「ナイス……パスっす。えっと……」

「あ、守田（もりた）っす。同じ一年……」

「あ……守田……くん。一年……えっ！一年っ！」

健斗はその言葉を聞いて驚いた。彼の風貌からしたら、二年生だと思っていた。彼は恐縮そうに頭を下げた。

すると陽気に笑っている部員の一人が可笑しそうに笑った。

「こいつ、老け顔だから一年に見えないだろ？あ、ちなみに俺は山下薫。俺も同じ一年だから。よろしくっ！」

「あ、よろしく……」

そういや全員の名前を知らない……自己紹介とか、そんなことをやっている時間もなかった。まぁ……それは後でもいい。

「つーかマジやべぇぞっ！おいっ！これマジで勝てるかもっ？」

「山中がいれば逆転も無理じゃねぇってっ！」

健斗は肩で呼吸しながらにっと笑った。

「……ハァ……任せて……ハァ……下さいっ！」

「頼もしいなぁっ！！おいっ！！」

そう喜びを分かち合っている中、のんちゃんはそんな健斗の様子を見て違和感を感じていた。

「……あれ？」

のんちゃんはその違和感を確かめるように、学校に設置してある時

計を見た。後半が始まってから、１０分が経過している。そしてもう一度健斗を見る。

汗をかいて、呼吸が乱れているが、まだまだいけるぞっという顔をしている。

そしてのんちゃんはあらゆる要素を思い出しながらある予感を感じていた。

「……もしかして……」

「ハァハァハァ……くそっ！何だよあいつっ！あの１０番……」

「うちの一軍ですらあんなやついねぇよ……」

「……しっかりしろっ！まだ後半は始まったばかりだっ！まだうちがリードしてる。すぐに取り返すぞっ！」

そいつがそういうと、全員が声を出して返事をした。みんながポジションに戻っていく中、そいつはもう一度健斗を見た。

「……くそっ！絶対見たことあるぞ、あいつ。どこのどいつだったかな……」

試合が再開されて、再びボールは洗目高校だった。

「サイドで散らせっ！中央は通すなっ！」

相手側がそう指示を出す。懸命な判断だと健斗は思った。中央でプレーすれば、また健斗にパスカットされる恐れがある。そしたらさっきとまた同じ繰り返しだ。

だからサイドを使って攻める。そしたら、さすがの健斗もボールを取りに行けない。健斗までサイドで守りに加わったら、中心で攻撃の起点が作れなくなる。逆転するためには、健斗が守りに入っている時間はない。

――でも……

やはり相手の選手もしっかりした攻撃の形は持っているようだった。サイドで崩されて、今度は神乃高のピンチとなった。

右サイドからセンターリングのボールが上がった。相手の攻撃陣はそれなりに体が大きく、競り合いで勝てる見込みがない。

健斗はその様子を、センターサークルのやや後ろで見ていた。健斗の側には一人がっしりとマークがついている。

健斗はそんな中、ヒロを見つめた。そしてふと、この間の夜のことを思い出した。

「準備できたぞ。」

ある日の夜だった。健斗とヒロは神乃中のグラウンドに忍び込んでいた。灯りはあるが、やや暗く、ぼんやりと校舎が建っているのが薄気味悪かった。

「キーグロ（キーパーグローブの略）をつけるなんて久しぶりだよ。」

ヒロは笑いながらそう言った。健斗はサッカーボールを使ってリフティングをしながらヒロに言った。

「いいから早くゴールの前に立てよ。」

「へイへイ。」

健斗に促されるようにヒロはゴールの目の前に立った。健斗はそれを確認すると、ペナルティーエリアの外側にボールを置いた。

「うわっ！この光景、ちょー久しぶり。」

ヒロはうきうきしながらそう言った。

何故健斗たちがこんなことをしているのかと言えば、それはこのヒロのキーパー練習みたいなものだった。長い間、こうしてゴールキーパーの感覚を失っている。そのため、こいつが今どのくらい出来るのかを計るために、健斗たちはわざわざこのグラウンドにいるのだ。

ヒロの出来具合が、今度の試合を左右する。

「言っとくけど、本気でやるからな。」

「分かってんよ。」

ヒロは手をヒラヒラと振りながらそう言った。健斗はそう言われるとぐっと力を込める。

するとヒロの顔つきも変わった。パンっと手を叩くと、ぐっと力を込めて構える。

少しの間沈黙が流れた。冷たい風が吹いている。

すると健斗は助走をつけて、目の前のボールを蹴った。インパクトの感覚からして、最高のシュートだった。

内側に回転をかけて、ボールはバナナのようなカーブの軌道を描きながら、左サイドの隅っこに向かっていった。我ながら最高のフリーキックでのシュートだった。

これは入ったな……健斗はそう確信した。ところがだった。

ヒロはまるで予測していたかのように、そのボールの軌道に向かっ

て飛んだ。すると彼の手のひらがボールを弾いた。その事実に健斗は胸を驚かせて唖然とした。

ボールは転がってどこかに消えた。健斗は唖然としたまま、ヒロを見る。ヒロはゆっくりと立ち上がって大きく息を吐いた。

「ぷひゃぁぁっ～！アブねー、アブねー。」

「お前っ……今の止めたのかっ！」

「あん？何驚いてんだよ。」

ヒロはさも当たり前のような顔をしていた。グルグルと肩を回す。

「俺のセーブ率なめんなよ。」

「……」

確かに、この男は神乃中の時代、本当に優れたキーパーだった。あらゆる場面でスーパーセーブを見してくれたことから、こいつは“神乃中の守護神”と部活内で言われていたほどだ。

「でも確かに不思議だな……」

「え？」

ヒロは自分の手を見つめながら言った。

「……今、お前のシュートがスローに見えた。」

「は？」

「挙動から全部。全体的にゆっくりだった。」

そんなわけがない。健斗は少なからず、思いっ切り最高のシュートを放った。まったく手も抜いてない。だから驚いているのだ。

「と、とりあえずもう一回やってみようぜっ！」

健斗はそう言いながらボールを拾いに行った。

そして再びボールをセットした。またヒロはじっと健斗を見つめてかまえる。

――少し球の種類を変えるか……

健斗はそう考えながら、助走をつけてボールを蹴った。するとボールは今度は右サイドへと向かう。しかし今度のボールはカーブではない。

無回転である。そのためボールはぶれて、面白いほどに威力が強い。弾くだけでは止められない。これも間違いなく入ったと健斗は過信した……ところがだった。

ヒロはその球種を見定めて、ボールの軌道上に乗っかり両手を前に突き出した。するとものすごい音を出しながら、ボールは弾かれて頭上を越え、さらにゴールの上を越えていった。健斗はまた唖然と

した。

「……ッテェッ！！お前威力強すぎだっつーのっ！」

ヒロは痛そうに手のひらをパンパン叩いた。

間違いなく、ヒロはボールが見えている。

「ど、どうなってんの？マジで見えてるわけ？」

「そうみたいだな。アイテテテ……」

ヒロはまだ痛そうにしながらそう言った。健斗は信じられない気持ちを感じながらため息をついた。

「多分……ハンドの影響かも。」

「ハンド？」

ヒロは笑いながらそう言った。

「あぁ。ハンドはさ、ものすっげー至近距離からもっと小さいボールをものすげー速さで撃たれんだよ。」

確かにそれは知っている。健斗も以前、ハンド部の練習などを見たことがあったが……あの速さはすごい。

「でもサッカーなんて、まず挙動がハンドほど速くはないだろ？それに今は何メートルも距離が離れてるし、ボールの速さだってハンドほどしゃない。」

「ま、まぁ……そうだけどさ……何、それでゆっくりに見えるってこと？」

「そうみたい。」

ヒロはにっと笑ってそう言った。つまりヒロの話をまとめるとこういうことだ。

ヒロは以前からハンド部で練習を重ねてきた。そのため、体がハンドボールのスピード感に慣れてしまい、逆にサッカーになるとゆっくりに感じてしまうらしい。

理屈は分からなくもないが、妙に変な理由で健斗は呆れるように笑った。

「スポーツ漫画じゃあるまいし……何なんだよ、それ……」

「まぁな。人間の構造って不思議なもんやねー？」

大阪のおばちゃんみたいな言い方をするヒロに健斗は可笑しそうに笑った。

結局その結果、健斗は十本蹴ったが、その内の七本をヒロのやつに止められてしまった。

ゴール前では右サイドから上がったボールを取ろうと取られまいと言った攻防戦になっている。

しかしやはり相手の方が一枚上手だったらしい。相手選手が高くジャンプをした。

「おりゃっ！」

ヘディングでボールをゴールに向かって叩きつけた。決定的な瞬間だった。

が、しかしそれを、何とヒロが飛び込んで両手でキャッチした。ヒロは相手選手の挙動から何までじっくりと見つめ、まるでシュートがどの部分に打たれるかを予測したような動きを見せた。相手選手は自分の確信的なシュートを見事キャッチされて唖然としていた。

「……っふうっ！」

ヒロのこのスーパーセーブに対してまた歓声が起こった。確かに、あんなゴール前の場面で、ボールを弾くのはともかく、キャッチまでするなんてものすごいことだと思った。

しかしヒロはまったく怯まず、キャッチしたボールを蹴り上げた。

「健斗っ！」

蹴り出されたボールはほぼ正確に健斗の元へと送られる。柔らかい回転のかかった素晴らしいパントキックだ。

健斗はそれを受けようとしたが、相手選手が健斗がトラップしたところを狙おうとしていることに気づいた。

――だったら……

健斗はそのボールをトラップする……と思いきや、右足のインサイドでボール軽くワンタッチした。するとそのボールの軌道は見事に変わり、相手の頭上を超えた。

だが相手は気づいていない。健斗はそのまま走り抜けた。

「えっ？あれ？ボールは？」

「後ろだっ！バカッ！」

遠くで見ていた仲間に言われるまで気づかなかったが、もう遅い。健斗はすでにハーフラインを越えて相手陣地にボールを進めている。

「くそっ！止めろっ！」

健斗は周りを見たが、どうやらパスを送れる仲間はいない。というより、健斗のすかさずの反撃に誰もついてこれてないのだ。

だからフォローしてくれる仲間がいなく、大勢が健斗にプレッシャーをかけてくる。だが、それも無駄だ。

――行ってやるっ！

健斗はエンジンをかけるようにスピードを上げた。自慢のこの足の速さで、健斗はどんどん相手選手を抜いていく。

“柔”のドリブルから“剛”のドリブルへとスイッチを入れ替えたのだ。

四人くらいを抜いたところだった。

「ファールしてでもいいから止めろっ！」

誰かがそう言ったのと同時に相手選手の一人がスライディングをかましてくる。が、健斗はそれ飛んでよけた。

こうなったらもう誰も止められない。シュートコースが見えた。

「いっけぇぇぇっ！」

放ったシュートはそのまま空を突っ切った。超スピードを乗せたままのシュートだった。その速さは普通ではなく、相手のゴールキーパーは一歩も動けないままボールはゴールネットを揺らした。

三点目の追加を知らせるホイッスルが高らかに鳴り響く。

「よっしゃぁぁぁっ！！」

同時にみんなが歓声を上げた。健斗は呼吸を荒くしながら、膝を抱えた。

「ハァ、ハァ、ハァ……や、やりぃ……ハァ、ハァ……」

健斗は大きくガッツポーズをしながら、自分の陣地へと戻っていった。

相手選手はもはや言葉がなかった。懸命の“剛”のドリブルを見せられては、それも当然だろう。三点目なんて、キーパーは一歩も動くことが出来なかった。

「……思い出した。」

相手選手の一人が呟くようにそう言った。するとみんなが彼の方に注意を向けた。

「……あれ、“ホワイト・マジシャン”だ。」

「は？何て……？」

「……三年前、中学の地区大会でついた異名だよ。その年に優勝した神乃中で、とんでもねープレーを見してきやがったやつ。新聞にも名前が乗ってた……」

「マ、マジかよっ？」

そんなとんでもないやつが、何故この学校にいるのかが不思議だった。

「あんなやつがいるだなんて聞いてねぇぞ……くそっ！」

そいつは悔しそうにそう言い捨てた。洗目高校の選手はみんな言葉を失ったままだった。

「やべぇよ、山中っ！」

みんなが健斗をはやし立てる中、健斗は激しく呼吸をした。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ……と、当然っす……ハァ……ハァ……」

「お、おい？大丈夫かよ～？今バテてもらったら困るぞ～。」

「余裕っす……大丈夫……」

「健斗っ！」

健斗の元にヒロとのんちゃんが駆け寄ってきた。健斗はゆっくりと顔を上げて、その二人を見た。

ヒロとのんちゃんは心配そうな顔をして健斗を見る。するとヒロが機転を利かせ、みんなに言った。

「さぁっ！みんなっ！あと二点っ！こっからが正念場っす。早く自分のポジションに戻ってっ！」

ヒロがそう言うと、みんなは声を出して走って自分のポジションに戻っていった。だが、ヒロとのんちゃんだけは心配そうに、激しく呼吸を乱している健斗を見た。

「……バカだなお前。何で今のタイミングで“剛”を使うんだよ。」

「つ、つい……」

「大丈夫なの？」

のんちゃんが心配そうに聞いてきた。健斗は本当は今、息をするのも苦しくって、足が震えていた。

「よ、余裕だって……後二点だろ？俺が取ってきて……やるよ……」

「……健斗。」

健斗はそう言うと大きく息を吸い込んだ。そして相手に“そのこと”を悟られまいと気合いを入れ直して自分のポジションに戻っていった。

「……ヒロ……もしかして健斗……」

のんちゃんはさっきから抱いていた違和感を聞いてみた。するとヒロは苦笑いを浮かべてゆっくりと頷いた。

「……あぁ……そういうこと。」

「……まずいね……その上、“剛”を使ったし……」

「……健斗を信じるぞ。あいつが後、どこまでやれるか分からないけど……」

「分かった。」

ヒロとのんちゃんはそう会話を交わすと、自分のポジションに戻っ

ていった。

その会話はスタンド側でも行われていた。

「琢磨……健斗、もう“剛”を使ったよ……」

「……うん。」

「これってヤバいんじゃないの？試合はまだまだ時間が残ってるよ。」

「分かってるって……あいつ……飛ばし過ぎだよ。」

麗奈はその会話を聞いていた。ヤバいって……何が？

「ねぇ、ヤバいって何がヤバいの？」

麗奈の気持ちを代弁するようにマナが二人にそう聞いた。すると二人は、少し戸惑ってから何も言わなかった。

「……そういうことか。」

後ろで松本さんがそう呟いた。結衣も奈津紀も、みんな同時に松本さんの方を見た。松本さんは歯がゆそうな顔をして、時計を見た。

暗躍な空気が流れていた。良い方向に向かっているのに……この雰

囲気は何だろう？

麗奈はもう一度健斗を見つめた。遠くにいる健斗は、腰に手を当てて大量に汗をかき、まだ肩で呼吸している。少し、具合が悪そうに見える。

……どうしたの？

麗奈はそう心で聞いてみたが、当然返事は返ってこない。

試合が再び開始するホイッスルが鳴り響いた。

「ねぇ、どういうことなのっ？」

マナがもう一度訊いてみた。少し苛立たしげな様子を見せて、佐久や琢磨に詰め寄る。初対面とか、そんなことを気にしている場合ではない。

佐久と琢磨はまた顔を見合わせて困ったような顔をした。

「……見てれば分かるよ……」

ボールは洗目高校からだった。洗目高校はさっきと同じように、サイドからゴールに向かって攻めていった。健斗はその様子を、センターサークル付近で見ていた。

まだ呼吸が整わず、足が震えて力が入らない。

――くそっ……ヤバいなぁ……

健斗が心の中でそう呟いたときだった。

「“ホワイト・マジシャン”だろ？お前。」

相手選手の一人――センターバックで健斗にしっかりマークをついていたやつが健斗にそう話しかけてきた。

「ハァ……ハァ……え……？」

「三年前、神乃中にいたやつだろ？」

「……知ってんの？」

「知ってるも何も……俺はあの地区大会の決勝で負けたとこの出身だ。」

健斗は少し驚いた。まさかこんなとこで、あのときの話をされるとは思わなかったからだ。既に正体を知られてたか……

相手選手は沈黙を臆にせず、さらに続けて言ってきた。

「……まさかこんな高校で会うとはな……あの大会から、ずっといなかっただろ？」

「……まぁ……」

「どうしてだ？ユースに呼ばれて、部活を辞めたのか？」

本当ならそうなるはずだった。もちろん、神乃中サッカー部を辞めるつもりはなかったが、本来なら健斗はあのままＵ－１５に選ばれても可笑しくなかった。

「……そういうわけじゃないよ……」

「そっか。じゃあ何でこんな高校にいる？お前なら、立川とか行ってもエース張れただろ？」

「……色々とあってな……それを全部話す気はない。」

「……あっそう。」

それからそいつは話さなくなった。その代わり、そいつはジロジロと健斗を観察するように見てきた。健斗は気づかれないように呼吸を小さくし、足の震えを何とか止めようと努めた。

ピンチなのは健斗だけじゃなかった。相手はサイドから、中央にボールを集めだした。本来なら中央は健斗が守りに加わりたいが……今の状態では無理だった。

相手は軽やかなパスワークで繋いでいく。やがてペナルティーエリア内に入った。ヒロはじっと、そのボールを持っているやつを見て構えた。

「おらっ！」

そいつはシュートを放った。シュートは空中に浮かんで、右サイドを狙った。しかしヒロはそれにすぐさま反応し、しっかりとキャッチする。今のヒロは最大限の集中力を発揮している。

「くそっ！何てやつだ、あのキーパーっ！」

シュートを放ったやつが悔しそうに叫んだ。確かに、今のシュートも普通なら入ってもおかしくはない。だが、ヒロには通用しない。ただそれだけだ。

ヒロはキャッチしたボールを持ちながら、全員が上がるのを待った。健斗をじっと見ていたが、ヒロは健斗にボールを渡そうとはしなかった。

逆にそれが相手に違和感を与えた。ついさっきまで、健斗がボールを持つことで攻撃の起点となっていたはずなのに……何故ボールを渡そうとしない？

――どうなってる……？

健斗にマークをついてる相手選手はそう心の中で呟いた。ヒロは苦々しい表情を浮かべていた。

「……今泉さんっ！」

ヒロは近くにいた今泉にボールを渡した。今泉はボールを受け取って前を向いた。すると、今泉に向かって相手が素早いプレッシャーをかけてきた。しかし今泉は相手にボールを取られる前に、今度は右サイドにいるのんちゃんにボールをパスした。

のんちゃんはボールを受け取ると、すぐ様健斗を見た。しかししばらく見てから、のんちゃんもまた苦々しい表情を浮かべて、違うやつにボールをパスした。

「……また……」

相手選手は健斗をチラリと見た。健斗の呼吸が荒かった。

するとボールを受け取った、森田がドリブルを始めたが、すぐに相手の選手にプレッシャーをかけられて立ち往生した。このままではボールが奪われかねない。

「……山中っ！」

山下はボールをついに中央にいる健斗にパスをした。健斗はパスを受け取って、前を向こうと思ったが、やはりマークをつかれてて前を向けない。

しかし何とかターンをしようとして、健斗は後ろに一旦下げると前を向いて走り出した。

「山下っ！」

ＭＦの山下にボールを預け、走り出したところで声を出してボールを呼んだ。すかさず山下は健斗にスルーパスを送った。しかしすぐ傍には健斗にずっとマークをついているやつがいる。

健斗はそのボールを受け、一気にスピード勝負をしようと力を入れた。

ところがだった。

健斗の足が一瞬ガクッと折れた。息が苦しく、力が入らない。スピードが出せなかった。

「……くっ！」

しかし何とかしてスピードを上げようとした……しかしそれは遅く、マークについていたやつが健斗が持つボールに触れてクリアをする。ボールはラインを越えた。

何と健斗が初めて相手側の選手に止められてしまったのだ。その事実に相手選手たちも、または神乃高の仲間も少し驚いていた。

健斗は肩で呼吸を激しくしながら、震える足を叩いた。

「ハァ、ハァ、ハァ……くそっ！」

「……」

健斗を止めたやつはそんな健斗の様子を見ていた。それから、その疑惑を確かめるようにゆっくりと学校の時計を見た。後半が始まってから、２０分が経過している。残りはあと１５分以上あった。

――こいつ……もしかして……

「おいっ！ナイスディフェンスっ！よく止めたなぁっ。」

相手選手の仲間がそいつにそう声をかけた。するとそいつは健斗を見ながら、不適な笑みを見せた。

「……おい……分かったぞ。」

「ん？何が？」

声をかけてきたやつが不思議そうに尋ねると、健斗を止めたやつがニヤリと笑った。

「１０番の弱点だよ。」

「じゃ、弱点っ？」

そいつは素っ頓狂な声を上げた。まるで信じられなかった。こんな化けものみたいなやつに弱点があるなんて到底考えられなかったのだ。

だが健斗のことを見ながら、そいつは確信しているようにニヤリと笑った。

「あぁ……多分こいつ――」

「スタミナだよ。」

松本さんがそう言った。健斗が初めてボールを取られて、みんなが動揺していたところに突然それを口にした。

「スタミナ？」

結衣が聞き返すと、松本さんはゆっくりと頷いて歯がゆそうな表情を浮かべた。

「あぁ。山中は多分……スタミナが不足してるんだ。」

「ど、どういうことですか？」

麗奈が慌てて聞くと、その問いに答えたのは意外にも琢磨だった。

「……さっき見せた健斗のドリブル。“剛”のドリブルって言うんだけど……健斗はあのドリブルを使うには色々と条件があるんだ。」

きっと琢磨は先ほどのものすごいスピードのドリブル……松本事件のときに最後に見せたあのものすごいドリブルを言っているに違いなかった。

「……条件って？」

マナが聞くと、琢磨はゆっくりと頷いて答えた。

「一つはグラウンドの半分くらいから始めること。ある程度の距離と広さがないと勢いがあり過ぎて、事故になりかねない。二つ目は……ボールに慣れること。あのものすごく早いドリブルでボールを扱うのは、すごく難しくって……ある程度時間が経ってからしか使えない。」

「そ、そうだったんだ。」

「うん……それで一番大切な三つ目の条件があって……それは……」

「……それは？」

琢磨はぎりっと苦々しい表情を浮かべながら歯ぎしりをした。

「……ある程度の体力が残っている状態で使うこと。」

「えっ？」

「健斗の足の速さは、確かに超人並み。けど……その速さのせいで、当然体にはものすごい負担がかかる。だから……いつも健斗が“剛”を使った後、体力はほぼゼロになるんだ。本当なら、あれは捨て身の技みたいなもので、試合終盤にならないと使っちゃダメなんだ。」

「そ、それじゃあ……」

「……うん……多分、今健斗にはほとんど体力が残っていない。歩いてられないくらいね。」

「そ、そんなっ！」

確かに今思い返せば、松本事件のときもそうだった。あのものすごいドリブルを使ったのは、最後の勝負のときで、健斗はあのあと倒れ込んで体が動かすことが出来ないでいた。

麗奈を守るために、何とか立ち上がってはいたけど……本当はほとんど何も出来ない体だったんだ。それが、今の状況が証明している。

健斗は今、歩くことさえ難しい状態であのグラウンドに立っていることになる。

「……でも、それを使うざるを得なかった。」

「えっ？」

松本さんがボソッとそう言ったのを、麗奈たちは胸を驚かせた。使うざるを得なかった……って、一体どういうことだ？

「そうなんだろ？」

松本さんがそう聞くと、琢磨は大きく頷いた。

「そう。さっきも言ったとおり、“剛”のドリブルはある程度体力が残ってないと使えない。逆に言えば、ほとんど体力がなかったら使えないんだ。だから健斗は、今の場面でしか使うざるを得なかったんだ。」

「それってどういうこと？だって健斗くんは……」

「だからスタミナの問題なんだよ。」

松本さんが麗奈の言葉を遮りながらそう言った。麗奈たちはみんな松本さんの方を見た。

「山中はもう、二点目辺りから呼吸が激しかった。後半が始まってから、１０分くらいしか経っていないのに……おそらく、体力が不足してるからだ。」

「そうだったの？」

「あぁ。テクニックやそういうのは、辞めたからって言ってそう安々と落ちるもんじゃない。俺だって、現役を引退してから二カ月くらい経つけどまだ全然やれる。だけど……体力は全然別だ。あれば

かりは、毎日地道な練習を積み重ねてでしかつけることは出来ないし……逆に言えば、何もやってなければ極端に落ちる。」

「だから健斗はそれが分かってて、最初から全力で飛ばしてたんだ。自分のスタミナが切れる前に逆転するために……でも、さすがの健斗も四点の壁は高かった……だから一点でも多く取ろうと……自分のスタミナがゼロになる前にあのドリブルを使ったんだ。」

「そ、それじゃあ……」

麗奈が言葉を詰まらせると、琢磨はすっと目を閉じてゆっくりと頷いた。

「……多分、健斗が今攻撃の起点になるのは難しいと思う……だから、このままじゃ……」

「そんなっ！健斗くんっ……」

麗奈は祈るような目で健斗を見つめた。確かに、健斗は本当に苦しそうな表情を浮かべていた。

「……なるほど。」

相手の選手もそれに気がつき始めた。確かにまだ残り１５分以上も

あるのに、もうあんなにバテてるなんて変だ。それは間違いなく、スタミナが原因だ。つまり、健斗の弱点は意外にもスタミナ不足というところにあったのだ。

「今からみんなであいつにどんどんプレッシャーをかけるぞ。あいつさえ押さえておけば、攻撃の起点は作れない。」

「なるほど……分かった。」

「……あぁ、あとあのキーパーのことだけど……」

そいつがそう言うと、もう一人のやつが苦々しい表情を浮かべた。

「そうなんだよ。あいつもすげーんだよ。打ったシュートを全部止めて来やがる。」

「分かってる。でももしかして……」

「……え？」

試合はスローインから始まった。森田によってスローインが行われた。そのスローインは健斗に送られた。健斗はそれをトラップして、前を向こうとした。だが息が苦しく、体に力が入らない状態であるため、身体が思うように動かない。

すると、健斗はあっという間にプレッシャーをかけられた。

「……あっ！」

健斗が声をあげたのもつかの間。健斗はマークをつかれていたやつにボールを悉く奪われてしまった。

するとボールを奪ったそいつから洗目高校の攻撃が始まった。健斗が守りに加われないことが分かったのか、大胆にも中央で崩しにかかる。

あっという間にペナルティーエリア内に入られて、相手のＦＷにボールが渡った。シュートコースを防ごうとこっちの選手がプレッシャーをかけるが、そんなものを意ともせず抜き去っていく。

「そりゃっ！」

同じようにシュートを放ったが、球種が違った。今までは浮かんだシュートだが、今回のシュートは地面すれすれのグランダーのシュートだった。ヒロの動きが一瞬止まった。

「……くっ！！」

ヒロが苦しそうな表情を浮かべながら、そのグラウンダーのシュートに飛び込んだが反応が遅い。そのシュートは左サイドへと向かって、ヒロの手がわずかに届かない。このままでは入ってしまうっ……そう思った。

ところがだった。幸運にもボールはポストに当たって跳ね返った。ゴールには入ってない。跳ね返えったボールをのんちゃんがすかさ

ずクリアする。ボールはスローインとなった。

ヒロはゆっくりと立ち上がって溜まった唾を吐き捨てた。そしてシュートを放ったやつは確信するようにニヤリと笑った。

やはりそうだ。このキーパーにも、弱点があった。

――グラウンダーに弱いんだな。こいつ……

ヒロは感づかれたことに気づいて、苦々しい表情を浮かべた。弱点に気づかれた以上、相手はどんどんグラウンダーの　シュートを打ってくるだろう。こればかりは仕方ない。何故なら、ヒロは半年間ハンド部に所属していて、グラウンダーに対する処理機能が極端に低下してしまったからだ。ハンドにはグラウンダーのシュートなんてない。

実は健斗もそのことに気づいた。だからあの後の三本をそれで試してみたところ……三本とも入ったのだ。

「……こりゃやべーな……」

ヒロが本当にヤバいというように汗を一滴垂らし、苦笑いを浮かべながらそう言った。

それから洗目高校の猛攻が続いた。弱点が分かった以上、完全に洗目高校のペースだった。

健斗がボールを持てば人数をかけて時間をつぶし、隙をついてボールを奪う。健斗は全く攻撃の起点にはなりしなかった。

ヒロに対してはグラウンダーのシュートを放ち続けた。ヒロは必死になって、何とか触って止めたり、幸運に救われたり、とにかくピンチになる場面が立て続けになって起こった。

そんな状態が続いて１０分くらいが経過した。試合時間も残り少ない。だが状況は最悪だった。

健斗もヒロも完全に疲弊し切っていた。中々四点目が奪えず、無駄に体力を消耗しているだけ。ドロドロになりながら、苦しそうな表情を浮かべる。それは他の部員も同じだった。

「……行けるな。後一点取れば、相手も心が折れるはずだ……」

「おうっ。ちゃっちゃと決めるか？」

相手に余裕の色が見え始めた。このままでは肉体的にも、精神的にも不利になる。

だが対処のしようがなく、状況はさらに悪い方向に進んでいくしかなかった。

第9話　新たなる決意　P．65

「健斗っ！」

のんちゃんが完全に疲弊しきっている健斗の元に駆け寄ってきた。健斗は激しく呼吸を繰り返しながら、何とか顔を上げてのんちゃんを見た。のんちゃんもその事情に気づき、こうして心配をしてくれているのだった。

だが健斗の身に起こっている異変は、もうこのグラウンドに立っているほとんどのやつが気づいていることだろう。

「健斗。大丈夫？」

「ハァ……ハァ……ワリィ……大丈夫だから……ハァ……ハァ……」

どう見ても大丈夫ではない。体力の低下の上に、“剛”のドリブルを使っているのだ。“剛”を使った後の健斗の様子は、中学の時共に過ごしてきたのんちゃんが一番知っている。

身体には相当負荷がかかっているはずなのだ。本当はもう、ほとんど身体が動かない状態に違いない。

「……イッテ……くそっ！」

膝の痛みに顔を歪めた。その様子は痛々しいもので、とてもじゃないが見ていられなかった。

「健斗……無理しない方がいい。もう充分だよ……」

「ハァ……ハァ……ハァ……」

「もう充分だ。ここはもう……交代――」

「ダメだっ！」

健斗がのんちゃんの言葉を遮るように言った。のんちゃんはその勢いに呑まれて、思わず口を閉じた。

「ダメだっ……俺が……ここで下がったら……本当に勝つ可能性が無くなる……」

「……健斗。」

「それに……ハァ……約束したんだ……」

「えっ？」

健斗は大きく深呼吸をした。少しでも呼吸を楽にするために、大きくゆっくりと呼吸をする。このままでは過呼吸にもなりかねない。だからこうしてゆっくりと酸素を肺に送る必要があるのだ。健斗はそう思いながら、ゆっくりと目を閉じた。

「……ハァ……約束したんだ……ハァ……翔と……」

「健斗……」

「この試合、絶対勝つって……勝って……廃部を阻止するって……

だから、俺がここで諦めるわけにはいかないんだっ！」

健斗の強い決意にのんちゃんは胸を打たれた。そこまで健斗はこの部のことを考えてくれていたのだ。嬉しさのあまり、言葉が出なかった。

「……ごめん……」

のんちゃんは小さくボソッとそう言った。すると健斗はゆっくりと呼吸を繰り返しながらのんちゃんの方を見た。のんちゃんは歯がゆそうな表情を浮かべ、悔しそうに言った。

「ごめん……僕、役立たずで……健斗やヒロがこんなに頑張ってくれてるのに……」

「……のんちゃん……」

「僕、デブで足が短くって足も遅い……いいとこないから……何も出来ないのが悔しい……」

健斗はそんなのんちゃんを見て、しばらく黙り込んだ。するとすぐに微笑んで、のんちゃんのがっしりした肩を叩いた。

「何……あのときと同じこと言ってんだよ……？」

「え？」

「前も言ったろ……？俺は、のんちゃんのこと……役立たずって思ったこと……一度もねぇよ。」

その言葉にのんちゃんはふとあのときの記憶を思い出していた。確か以前にも、のんちゃんは健斗に同じようなことを言われた。健斗はにっと笑ってのんちゃんの肩を数回叩く。

「のんちゃんには、のんちゃんなりのいいとこがある。俺は……それを信じてる。」

「……」

「さぁっ……行くぞっ！後二点……死ぬ気で取りに行くっ！」

健斗はまるで自分にそう言い聞かせるように言うと、自分のポジションの位置に戻っていた。のんちゃんの胸の中で何かが燃えるような、そんな熱い気持ちが宿り始めていた。

佐久や琢磨、そして松本さんの言うとおり……試合の流れは完全に洗目高校だった。健斗がボールを持っても、人数をかけられて中々ゴールまでいけず、攻撃のときは低いシュートを放つようになり、ヒロは何度が肝を冷やす場面があった。

でもスタンドにいる人たちは何も出来ない。ただ祈るような目で見るしかないのだ。

――健斗くんっ……

麗奈はずっと健斗を信じていた。健斗ならこの苦しい状況でも、自力で克服してくれるはずだ。だって、あのときもそうだった。松本事件のときだって、もう誰もが駄目だって思ったとき……ものすごい奇跡を見してくれた。

だったら、今度だってっ……

「うわぁっ！すごい人だねぇっ！」

そう言いながら、麗奈たちの近くに来た人物がいた。麗奈たちはその声に反応するように見ると、それは円だった。

「円っ！何してたの？」

奈津紀が円にそう言うと、円は苦笑いを浮かべながら答えた。

「あ、うん……ちょっと転んじゃって、椅子とか色々倒しちゃったから……ねぇ、何かすごい人集まってるね？」

「え？」

麗奈はその言葉に驚きながら周りを見渡した。円の言うとおりだった。何故だか分からないけど、次から次へとざわめきながら、色んな人がこのスタンドに集まっていた。

部活の格好をした人や、制服の人……普通の私服の人だっている。一体どうして、こんなに大勢の人が集まったのだろう？

「あれ……山中くんだよね。」

円が健斗を指差しながらそう呟くように言った。どうやら円も驚いているようだった。奈津紀も最初は驚いていた。中学時代、あんなことがあった健斗が再びサッカーをやっていることが信じられないというような顔だった。

「すげーすげーやってるっ！」

「ねぇ、やってるよぉ？」

「本当だっ！頑張れーっ！」

それはともかく、いまだに人が増え始めている。どうしてこんなにたくさんの人が来るんだろうっ……

「すごい人だね……」

周りがざわざわしているので、聞き取りにくかったが結衣が呟くようにそう言った。すると円が振り返って頷きながら言った。

「うん。だって私も聞いたから来たの。サッカー部が、この練習試合に負けたら廃部だって……」

「えっ？誰から？」

「えっと……林くん。何か、林くんが学校中を回ってそう言ってるのを聞いたの。」

「林くんがっ？」

麗奈たちは驚くような声をあげて、もう一度周りを見渡した。じゃ

あ彼らはちゃんと事情を知った上で、ここに応援に来てくれたのだ。
こんなに大勢の人が……

「あっ！」

健斗はまたボールを取られてクリアされてしまった。ボールは前に送られ、今度は洗目高校の攻撃が始まった。すると、さっきから健斗にマークをつき続けているやつが少し呼吸を荒くして、また不敵な笑いを浮かべて言ってきた。

「スタミナ切れしてんだろ？“ホワイト・マジシャン”にも弱点があったんだな？」

「ハァ……ハァ……ハァ……」

「……何でお前ほどのやつがこんな部のために、そんなに頑張るんだ？」

「ハァ……関係ないだろ……」

「関係ない……か……」

「……俺も一つだけ質問がある。」

健斗がそう言うと、そいつはきょとんとして不思議そうな表情を浮

かべた。健斗は構わずそのまま続けた。

「……ハァ……あんた……二軍じゃないだろ？」

「……へぇ。よく分かったな。」

「そりゃ分かるよ。あんただけ技術がずば抜けてる……二軍のはずがない。」

「“ホワイト・マジシャン”に誉められるなんて嬉しいな。」

そいつは確かに他の選手より技術がずば抜けていた。ディフェンスも上手いし、他の選手に向ける指示も的確だ。まるで松本とやっているような感覚だった。もしかすると、松本も同等の選手なのかもしれない。

そいつはニヤリと笑いながらさらに続けて言った。

「うちは“負ける”癖がつかないように、二軍でも三軍の試合でも必ず一人一軍のやつが送られるんだ。今日はたまたま俺が選ばれた……」

「……あっそう……」

「選ばれたとき、面倒で仕方なかったけど……今は良かったって思ってる。お前に会えたしな……」

「……」

「でも悪いけど、今回はうちが勝つぞ。」

そいつは自信あり気にそう言った。健斗は呼吸を激しくしながら、ゆっくりとゴールの方を見た。

ゴールではまたもやピンチが続いていた。軽やかなパスワークでペナルティーエリア付近まで近づく。ボールを触ることすら許さない。

ヒロは全神経をボールに集中させた。グラウンダーだろうが何だろうが関係ない。もうこれ以上、失点するわけにはいかなかった。試合時間はもうあまりない。

シュートコースが空いた。相手の選手がシュートを放つ挙動をする。

――右か！左か！

ヒロは挙動を見定めた。これは右だっ！ヒロは先読みするように飛んだ。だが……何とヒロの読みは外れ、ボールはやや右よりだったが殆ど真ん中に向けて放たれた。

まずいっ！

このままでは今度こそ入ってしまうっ！

ヒロは必死に足を伸ばした。グラウンダーのシュートなんだから、足さえ届けばっ……しかし、すでにヒロの身体は右に傾いていた。わずかながらに届かない。

ボールがゴールラインを超えようとした。もうダメだっ……誰もがそう思った……

するとだった。

そのボールを誰かがクリアした。クリアされたボールはラインを超えてスローインへと変わる。ヒロも相手選手もそして仲間たちもみんな唖然として、クリアした選手を見た。

それはのんちゃんだった。のんちゃんがゴールラインを超える瞬間、スライディングをしてそれを阻止したのだ。

このファインプレーに大歓声が起こった。チームメイトがみんなのんちゃんに駆け寄る。

「のんちゃんっ！ナイスクリアっ！」

「あっぶねぇっ！よく止めたなぁっ！」

のんちゃんは身体を叩かれながら、真っ直ぐと転がっているボールを見て唖然としていた。するとヒロはゆっくりと重い身体を持ち上げながら、苦笑いを浮かべて言った。

「ハァ、ハァ、ハァ……わ、ワリィのんちゃん……た、助かった……」

ヒロがそう言うとのんちゃんはヒロに視線を向けた。

「……僕だって諦めるわけにはいかないんだっ……」

「えっ……？」

のんちゃんは強い口調でそう言った。そしてはっきりした意志を持ち、チームメイトを見渡した。

「健斗とヒロが、こんなに頑張ってくれてるんだっ！僕たちだって、まだ頑張れるっ！そうだろっ？みんなぁっ！」

「……のんちゃん……」

みんながのんちゃんの言葉を受けて、言葉を出せないでいるときだった。突然、スタンドの方から大きな声がした。

「おーいっ！健斗っ！ヒロぉっ！！」

その声に聞き覚えがあって、健斗とヒロは同時にスタンドの方を見た。すると試合に集中していたから全く気づかなかったが、スタンドにいつの間にかかなりの人数の観客がいることに気づいた。

健斗とヒロは胸を驚かせながら、その声のした方を見た。するとそこには野球部を率いて、部活の格好をした寛太が汗を流しながらそこに立っていた。

「寛太……？」

「……寛太。」

寛太はにやっと笑って健斗とヒロに向けてさらに大きな声で言った。

「学校中にいるやつらに声かけて連れてきたぞぉっ！！どうせなら、

ギャラリーがいた方が盛り上がんだろぉっ！？」

「……あいつ……」

寛太はそう言いながら、一呼吸置いてさらに続けた。

「こんな大勢の前で、もうへばる気かっ！？らしくねぇなぁっ！！まだいけんだろぉっ！！ぜっっってぇぇ勝てよぉっ！」

寛太の必死のエールが響くと、それに便乗するようにスタンドから大歓声か起こった。みんな、ちゃんと事情を知った上でここに集まってくれた人たちなのだ。

「頑張れーっ！！サッカー部っ！！」

「負けるなぁっ！！」

「意地でも勝てぇっ！！」

「頑張ってーっ！！」

健斗たちはその歓声を受けてしばらく唖然としていた。健斗はしばらくその大歓声を聞きながら、やがてニヤッとおかしそうに笑った。

「……バカじゃねぇの……あいつ……」

寛太の行動力には本当に恐れ入る。でも同時に健斗は大きく感謝をしていた。力がみなぎっていくような気がした。

そしてそれはヒロも同じだった。みんなが自分たちを支えてくれて

いる。見守られている……だから、自分たちはここにいるのだ。

相手が戸惑いながらスローインを入れて試合を開始する。すると相手はすぐにゴールを奪いに来た。

しかしだった……

「ぐっ！」

突然神乃高選手の動きが厳しくなった。さっきはなんともなかったプレッシャーも、今は重い。パスワークが上手く働かなかった。

みんな必死だ。思いは一つだった。

のんちゃんの言葉通り。健斗とヒロがこんなにも苦しみながら頑張っている。なのに、自分たちが頑張らないでどうする。まだやれるっ！！

ついに今泉が相手のボールをパスカットした。同時に歓声が起こる。今泉はすかさずボールをのんちゃんに繋いだ。のんちゃんは森田にボールを渡し、さらにそのボールは山下へと素早いパスワークで繋がれた。

すると山下が中央でボールを持ち、周りを見渡した。すると相手がプレッシャーをかけてきたので、取られる前に左サイドのスペースにボールを出した。

神乃高のチャンスが始まった。左サイドはがら空きでそこにすかさず神乃高の８番が走った。相手が追いつけないくらい、必死に走って見せる。

「くそっ！カバーに入れっ！油断するなっ！」

健斗にマークをついていたやつがそう指示を出す。健斗はそれを聞きながらグラウンドを見渡した。相手の選手の配置、自分の味方の位置……

すると左サイドにカバーが入り、そこで神乃高の攻撃が一瞬行き詰まった。このままではまたボールを取られて、相手の反撃が始まる。

だがこっからなら、多少遠いがシュートが撃てる。どうせ撃たれるくらいならっ！

「いっけぇっ！」

８番はシュートコースを見定めて、シュートを放った。意外にもそのシュートは強烈で、真っ直ぐゴールに突き進む。意外なところから打ってきたことに、相手ゴールキーパーも突然の対応に強いられた。

「くそっ！」

キャッチは出来ず、ボールを弾くしかなかった。相手のゴールキーパーはそう判断すると、迷わずシュートを跳ね返した。ボールはキーパーの前に転がり、それを仲間のＤＦがクリアしようとした……

「……何っ！」

相手が驚きの声を上げた。何と、彼よりも先にボールに触れようとしたやつがいた。それは、さっきまでほとんど動けないでいた健斗

だった。

健斗が予め、まるでボールがここに来るのを“予測”していたような動きでボールに詰め寄る。呼吸が一瞬間止まった。しかし健斗は思いっ切り力を込めて、ボールを蹴り上げた。

「あぁぁぁぁぁっ！！」

健斗は声にならない声をあげながら。ボールを蹴り上げた。すると、そのボールは今度こそゴールネットを揺らした。四点目がついに入り、それを証明するかのようにホイッスルが鳴った。

ついに同点に追いついた。スタンドもグラウンドも、大歓声が起こった。

第9話　新たなる決意　P．65（後書き）

さぁ、ついに神乃高が同点に追いつきましたっ！

しかし健斗も相当力を使い果たしてしまっている上に、試合時間も残りわずか……

逆転まであと一点なのに、決めることが出来るのか……？

そんな中、ある人物が“あのとき”のことを思い出します。

次話でサッカーの試合のクライマックスとなりますっ！

第9話　新たなる決意　P．66

大歓声を浴びながら、健斗は自陣へと戻っていった。神乃高が四点目を入れ、ついに同点に追いついたのだ。これほど盛り上がることはない。

「くそっ！まさかまだ動けたなんてっ！」

健斗にずっとマークをついてたやつが悔しそうにそう言い捨てた。確かに、彼の読みでは健斗はすでに走れるほどの体力なんて残っているはずがなかった。

なのに、健斗は力を振り絞って走った。そしてあろうことか、四点目をついに決めたのだ。

そいつは悔しそうにしながら、振り返って健斗を見た。すると健斗もゆっくりと振り返る。その目を見て、そいつはぞっと背筋が凍る気持ちになった。

目が……人の目ではなかった。まるで、それは獣の目をしている。鋭い眼光を光らして、もうほとんど動けないはずなのにものすごい威圧感を放っていた。

健斗はすっと前を向き、そのまま自陣へと歩いて戻っていった。健斗と視線を外したことで、そいつはどこかほっとしていた。

そして、それがまた悔しい気持ちを呼び起こした。歯軋りをすると、すぐにゴールの中に転がっているボールを片手に持った。

「すぐに取り返すぞっ！」

このままでは洗目高校の名が廃る。全員が一点を取りに気合いを入れ直した。最終決戦はここからだった。

「山中ぁっ！ナイッシューっ！お前マジですげーよっ！」

大歓声が鳴り止まない中、山下や森田、そして全員が健斗に抱きつこうと健斗に駆け寄ってきた。しかしそれを制したのは、まさかののんちゃんだった。のんちゃんは健斗とみんなの間に割って入った。

「な、何だよ、のんちゃん？」

「喜ぶのは分かるけど、もう時間がない。みんな、早くポジションに戻ってっ！」

「そうだ。」

のんちゃんがそう言うと、それに便乗するように今泉が言った。

「もう時間は五分もない。こっからさらに逆転するためにも、みんな早くポジションに戻れ。」

今泉の指示で全員が声を出しながら、自分のポジションに戻っていった。のんちゃんはほっとするようにため息をついて、健斗と向き

合った。

健斗は大きく深呼吸をした。そしてその目を見て、のんちゃんは少しぞっとした。まるで、獣のような鋭い目をしている。健斗が土壇場であり得ないくらいの集中力を発揮しているときの目だった。

今、健斗は集中力でどうにか身体をもたせている。だが逆に言えばこの集中力が切れた瞬間、健斗は今度こそ本当に動けなくなる。

きっとこの大歓声とサッカー部を守るという使命感が健斗の中にある動物的本能を蘇えさせたのだろう。

いけるっ！

のんちゃんはそう思いながら、自分のポジションに戻っていった。

スタンドでは大歓声が起こっていた。まさに奇跡のゴールに近かった。あの洗目高校からボールを取り返し、そのままカウンターで攻撃。しかも最後は健斗がゴールを決めてみせた。

とにかく、これで同点となった。麗奈は嬉しくって仕方がなかった。

「やったっ！ついに同点だよっ！！」

「うんっ！すごいね？健斗の動きがまた戻ったよっ！」

マナが嬉しそうにそう言った。確かにさっきまでもう、ほとんど動けてなかったのに、あのゴールはすごい。グラウンドを一気に駆け抜け、まるでキーパーがどこに弾くのかが分かっていたみたいだった。

「……そうか。“ランナーズ・ハイ”だな。」

松本さんが嬉しそうに笑いながらそう言った。麗奈たちはその言葉を聞いて何のことだか分からないというような顔を浮かべた。

「ランナーズ……ハイ？」

「アスリートの選手とかに見られる傾向よ。」

その問いかけに、南先生が久しぶりに口を開いて言った。麗奈やマナ、そして結衣と奈津紀と円はほとんど同時に南先生の方を見た。

「身体が限界以上に酷使したときに見られる傾向なの。脳内でアドレナリンが大量に分泌されて、疲れを感じなくなる状態になるの。よく、マラソン選手とかがそうなるわね。」

「じゃあっ！健斗くんは復活ってことですね？」

結衣がそう言うと、南先生はちょっと苦笑いを浮かべて答えた。

「どうかしらね？アドレナリンで疲れを感じないかもしれないけど……身体には間違いなく限界以上に疲労が蓄積してる。だから、ランナーズ・ハイの状態が長続きすることはないの。もって一、二分

ってとこかしら？」

「それじゃあ……」

麗奈の言葉の先を、南先生が頷きながら言った。

「そう。その時間が勝負よ。」

たった一、二分。だけどそれでゴールを決めなければ、洗目高校とは同点のまま。条件は次の試合に勝つことなのだから、結果的に廃部は免れない。

廃部を免れるには勝つしかないのだ。麗奈はこの大歓声の中、祈るような目で健斗を見た。

――頑張れっ！

すでにグラウンドでは激しい攻防が始まっていた。健斗やヒロだけではなく、他の神乃高の選手も必死で守ったり、攻撃したりしている。

しかし相手が一番重視しているのは、やはり健斗へのパスだった。健斗にパスが送られないように、最大限に注意を払いつつ徐々に押していく。

麗奈はずっと、祈るような気持ちで試合の行く先を見つめていた。

「……それにしても、山中は本当にすごいな。」

松本さんが感服するような口調でそう言った。麗奈はその言い方が

気になり、松本さんの方を見た。

「一点目のときもそうだった。あいつはほとんどボールを見なくても、ボールがどこに落ちるのかを分かってるみたいだった。今の四点目だって……そうか、そういうことだったのか。」

「何がですか？」

結衣が不思議そうに尋ねると、松本さんはゆっくりと頷きながら答えた。

「あいつがすごいところは、テクニックや足の速さなんかじゃないんだ。」

「え？」

「あいつの本当にすごいところ……それは、“予測”する力だ。」

予測する……力？麗奈たちはみんなそれがどういうことを意味しているのかがよく分からなかった。だが、松本さんはさらに続けた。

「相手がどういう風にプレスをかけてくるのか、それを“予測”して相手を抜く。どこにボールが来るか、相手がどう止めてくるか、それを見て“予測”してゴールを決める。俺とやったときもそうだった。自分で蹴って、跳ね返った場所を“予測”したんだ。だからあんなすごい動きが出来るんだな……」

麗奈は松本さんが何を言いたいのか、少し分かったような気がした。確かに、言われてみればそうなのかもしれない。

一点目だって、健斗はほとんどの人が気づかないくらい、ドンピシャにボールの落下地点にいた。前からそれを見るゴールキーパーなら、その落下地点を見ればすぐに分かるかもしれないが……健斗の場合はほとんど後ろ向きだった。

それなのにあんなにピッタリ落下地点を捉えたということは、本当ならばものすごいことだった。

そしてそれは松本事件の最後のゴールのときもそうだったし、今の四点目だって同じことが言える。

そして、相手を軽やかなテクニックで抜けるのも、相手が次にどのような動きをするのかが分かるからだ。だからあんなに容易く相手を抜くことが出来る。

健斗の本当にすごい……というより、真の力というのは、足の速さやテクニックじゃない。

全ては“予測”する力が源だったのだ。

「……違うよ。」

そんな中、佐久がそう呟くように否定した。麗奈やマナ、そして結衣や松本さんたちは揃って佐久の方を見る。

「健斗が本当にすごいのは、そこじゃないよ。もちろん、それもすごいんだけど……健斗はもっとすごい、他の人には持ってない力がある。」

「……それって何？」

麗奈が尋ねると、それを笑って答えたのは琢磨だった。

「……“人を惹きつける力”……」

「惹きつける……力？」

麗奈が復誦して尋ねると、琢磨は大きく頷いて答えた。

「そうだよ。健斗は、人を惹きつけるのがすごいんだ。敵味方関係なく、そこにいる選手たち、それを見る観客……他にもこのスタンドにいる人たち……みんなが健斗のプレーに惹かれて、興奮して、惹きつけられる。だからみんな必死になれるんだ。」

「……そっか……」

確かにその通りかもしれない。何故なら、あの松本事件のときだってそうだった。ほぼ全校生徒が、健斗のあの鮮やかなプレーに魅了されていた。あのときはあんまり意識していなかったが、麗奈もその内の一人となっていた。

そして今だってそうだ。いつの間にか、大勢の人がこの試合を見守っている。最初は全然人がいなかったのに、今はこんなに大勢の人が応援してくれているのだ。

そしてその中にいる選手たち。最初は殆ど諦めていた神乃高の人たちも、今は勝とうとして必死になっている。そしてその相手の洗目高校の人たち。最初は完全に見下していたが、今では一丸となって神乃高を負かそうと必死になっている。

みんながこうして試合に惹きつけられている。そしてそのきっかけとなったのは、間違いなく健斗だった。

それはどんなことよりも素晴らしいことじゃないだろうか……麗奈はそう感じていた。

「多分本人は意識なんてしてないんだろうけどね？あいつはただ、いつも一生懸命なんだ。あいつが一生懸命だから、他のみんなも自然と一生懸命になれる。そこが健斗の一番すごいところだって、僕らはそう思ってる。」

「それって……」

結衣が何かを言いかけてから、口を閉ざした。そして真っ直ぐ健斗を見つめた。健斗は必死になってボールを奪おうとするも、人数をかけられていて、なかなか思い通りにはいかない。

「……よしっ！神乃高頑張れーっ！！負けるなぁっ！！」

「健斗ぉっ！！頑張れぇーっ！！」

佐久や琢磨が周りの歓声に乗っかるように声を出し始めた。麗奈とマナはそれを聞いて互いに顔を見合わす。そしてゆっくりと笑った。

「ヒローっ！健斗ーっ！みんなぁーっ！！ファイトーッ！！」

「頑張れーっ！！後一点っ！！」

マナと麗奈が声を出し始めると、今度は後ろのスタンドで立っていた結衣と円と奈津紀が声を出し始めた。

頑張れっ！負けるなぁっ！

激しい攻防が続き、洗目高校のチャンスが訪れた。洗目高校が先ほどよりも早いパス回しでボールを回す。左サイドから中央、そして中央から右サイドへとボールが送られた。

するとその送られたボールを、相手選手が雄叫びを上げながらダイレクトシュートを放った。強烈なシュートは地面スレスレで真っ直ぐゴールの左サイドへと走る。

これは入ったか……誰もがそう思った。しかし、それを何とヒロが飛び込んでキャッチをしたのだ。あの苦手なグラウンダーのボールを見事キャッチして見せた。

ヒロのまたもやスーパーセーブに歓声が起こる。ヒロはすぐに立ち上がると、ボールをそのまま放り投げた。

「健斗ぉっ！！」

名前を呼びながら放たれたボールは、ついに健斗の元へと渡った。健斗がそれをトラップすると、歓声が起こると同時に相手選手の何人かが健斗に詰め寄る。

健斗はそれらを瞬時に判断し、最も最短で抜けるコースを“予測”

した。そして健斗はまるで風になったようにスピードで抜き、一気に三人抜きをした。

再び健斗のカウンターが始まった。本日、そして初めての二度目の“剛”のドリブルだった。健斗に追いつけるものはいない。そのはずだった。

「させるかぁっ！」

何と健斗の“剛”のドリブルの最中に身体をぶつけてきたのは、あの一軍の選手だった。やはり二度目の“剛”のドリブルは身体に相当負担がかかり、思ったよりもスピードが出せていなかった。

「……ぐっ！」

健斗のスピードが徐々に弱まる。するとこのタイミングで次第にランナーズ・ハイが途切れ、健斗に蓄積した疲労が襲いかかった。健斗は先ほどまで感じ得なかった息苦しさを一気に感じていた。

――構うもんかっ！

健斗は取られまいと必死になりながら、ボールをキープしながらゴールへとボールを運んでいく。恐らくこれが、ラストワンプレーだ。

ボールを取られるわけにはいかなかった。

しかし人数をかけられ、健斗は囲まれた。ペナルティーエリア内に入ったが、相手選手がシュートコースを塞いでいて、このままではシュートを打てない。

「終わりだぁっ！」

あの一軍のやつが足を延ばした。その瞬間、スローモーションになった気がした。相手の選手の足が健斗の持っていたボールに微かに触れた。クリアされる……

そう思った瞬間だった。健斗はニヤリと笑った。すると、触れたと思ったボールが消えた。

「なっ！」

ボールが突然消えたことに一軍のやつが驚きを見せた。そいつだけではなく、健斗を囲んでいた選手が全員ボールを見失っていた。一体どこにあるっ？

「後ろだぁっ！！」

それを見ていたゴールキーパーがそう叫んだ。その言葉がきっかけで全員が後ろを見る。すると、確かにそこにはボールがあった。何と健斗はそのままシュートを打つと思いきや、打つのではなく自分のやや右サイドの後ろ辺りにボールを送っていた。ヒールパスでボールを送っていたのだ。

そしてそこに走り込んでいたやつがいた。

「……のんちゃんっ！！」

味方選手が驚くようにそう叫んだ。相手も全く予想していなかった動きに対応が遅れていた。何と、右サイドのＤＦである。のんちゃんがこんなところまで上がっていたのだ。

そしてそれは明らかに意図的なパス。健斗が相手のＤＦを引きつけていて、のんちゃんが完全にフリーになっていたのだ。

のんちゃんはボールにめがけて必死で走りながら健斗の言葉を思い出した。

――のんちゃんにはのんちゃんなりのいいとこがある。俺は、それを信じてる。

あの言葉の真意はこれだったのだ。そしてのんちゃんは“あのとき”のことも思い出していた。健斗とのんちゃん、そしてヒロの中であの日の記憶が交差した――

「いってぇっ！」

「ハイ、また俺の勝ちぃ！」

健斗とノブが部活の後に必ず1対1をやるのが通例となっていた。ノブがいつも、健斗に今日こそは、今日こそはと言って勝負を挑むのだ。

しかしやはり今日も健斗の勝ちだった。健斗は気分良さげに倒れ込んでいるノブを見て笑っていた。

「懲りねーなぁ？ノブ。これで何戦何勝だよ？１００回くらいはやったんじゃない？」

「うるせーっ！！もう一回勝負しろっ！！」

「今日はおしまい。また明日な。」

健斗が軽くあしらうと、ノブの元から去っていった。ノブは健斗の後ろ姿を見ながら悔しそうに唸っていた。残念ながら、ノブでは健斗の足元に及ばないくらい二人の差には歴然とした差があった。

「お前も容赦ねぇーなぁ。」

ヒロと翔と龍太、そしてのんちゃんが健斗に近づきながら、翔がそう言った。健斗は頭でリフティングをしながら呟くように言った。

「当然じゃん。手なんか抜いたら逆に失礼だろ？」

健斗がそう言うと、四人は声を立てて笑った。ノブは佐久と琢磨に慰められているが、どうやら不機嫌ではあるらしい。

「しかしお前どんどん上手くなって行くよなぁ……先輩たちもお前には勝てないって嘆いてたぞ？」

龍太が苦笑いを浮かべながらそう言った。健斗は興味なさげに適当に返事をした。

「う〜ん……何かね？」

「じゃあ次は俺と勝負する？」

翔がニヤニヤしながらそう言った。すると健斗が顔をしかめてボールを手にとって言った。

「イヤだね。お前とやったら勝負つかねーもん。」

「まっ！そりゃそうだな。」

そう。このとき、神乃中では健斗と翔が二大エースを張っていた。健斗はＦＷとしてチームの攻撃力の要となり、翔はＤＦとしてゴールを守る。二人の間に実力の明確な差はなかった。だから二人が１対１をすると全く勝負が決まらないのである。それはただの体力の浪費に過ぎなかった。

「そういえばもうすぐ地区大会の一回戦だね？」

のんちゃんがみんなにそういうと、健斗はニヤッと笑って言った。

「おうっ！マジでちょー楽しみなんだけど。」

「そう？相手相当強いみたいだよ？」

「関空ねぇよ。つーか強ぇー方が燃えんじゃん。」

「そうそう。そっちの方がやってやんよって気になるよなぁ？」

健斗と翔は朗らかに笑いながらそう言った。二人のレベルになると

弱者とやるよりも、相手が強者であればあるほどいいと思うらしい。それは絶対的な自信の表れでもあった。そんな二人が頼もしく見える一方、のんちゃんは少し歯がゆい気持ちだった。

「……羨ましいなぁ……」

「え？」

のんちゃんが二人を見ながらそう笑って呟いた。

「二人が羨ましいよ。僕も二人みたいに、サッカーがすごく上手ければそう言えるんだろうけどなぁ……」

「……そ、そっかな？」

「うん。僕なんて、全然役に立たないし……試合ではいつも足を引っ張ってるし……だから試合がいつも怖いんだよね……」

のんちゃんのネガティブ発言に、みんなが少し言葉を詰まらせた。のんちゃんの気持ちは分かるが、健斗と翔のレベルを比べても何とも言えないのだ。この二人はたまたま、レベルが格段に違いすぎるのだ。

でも確かにのんちゃんは試合中よくミスをするのもまた事実だった。別に足手まといとかそんなことを思ったことはないけど、試合中のんちゃんのミスを怒ってしまうこともあることから、今ここで慰めるように言ってものんちゃんにとっては空言にしか聞こえないだろう。

これはのんちゃんの気持ちの持ちようなのだ。

しかしだった。その中一人だけ違うやつがいた。

「何言ってんだよ。」

健斗が呆れるようにしてのんちゃんを見た。

「俺、のんちゃんのこと役立たずだなんて思ったこと、一度もねぇぞ？」

健斗は一切のお世辞を交えず、心の底からそう言ったつもりだった。

だけどのんちゃんはそれをお世辞と捉えてしまったのか、否定するように笑った。

「そんなことないよ……僕なんて足が短くて、デブで……いいとこなんか――」

「あるよ。」

健斗がのんちゃんの言葉を遮るようにして言った。するとのんちゃんが驚くようにして健斗を見た。健斗の目はお世辞でも何でもなく、本気でそう言っているようだった。

「……よしっ！おい、ヒロっ！」

「あん？」

「ちょっとお前、ゴールの前に立て。キーグロもちゃんとつけてな。」

健斗がそう言うとヒロは顔をしかめて不満そうに言った。

「えーっ？せっかく手洗ったのにー？」

「つべこべ言うなよ。ほら、早く。」

健斗に促されると、ヒロはぶつくさ文句を言いながら仕方なさそうにゴールの方に向かっていった。健斗が何を企んでいるのか、のんちゃんはおろか、翔や龍太もよく分かっていないようだった。

ヒロが面倒くさそうにゴールの前に立った。すると健斗は、ペナルティーエリアより少し離れたところにボールを置いた。

「よしっ！のんちゃん。」

健斗が振り向いてのんちゃんを見た。のんちゃんはビクッとして健斗を見た。健斗は笑って、のんちゃんに言った。

「このボール蹴ってみ？もちろん、ゴールを決めるつもりでな？」

「え……」

健斗の突然の要求に、のんちゃんは少し驚いたようだった。のんちゃんは右のサイドバックだから、あまりそういうゴールを決めるとかいう感覚はなかった。

だから何故それをのんちゃんに求めるのか、健斗の意図がよく分からなかった。のんちゃんのいいところを証明するつもりのはずだろうが、それがこれとどう繋がるのかが分からない。

「でも……僕……」

「いいから、やってみ？」

健斗はのんちゃんの肩をポンッと叩いてそう言った。のんちゃんはゆっくりと健斗を見上げる。

「ただし……のんちゃん。」

「え？」

「“思いっ切り”撃てよ？」

その“思いっ切り”という言葉に何かが引っかかっていた。だがのんちゃんは強く頷いた。健斗はそれを見ると、にやっと笑った。

「おーい、ヒロっ！今からのんちゃんがシュートを撃つからなぁっ？本気でとれよぉっ！」

ゴールの前に立っているヒロが大きく手をあげてひらひらと振った。

健斗はそれを見るとにやっとまた笑って、のんちゃんから離れて、翔や龍太の元へ行った。

「おい、健斗。どういうつもり？」

龍太がそう聞くと、健斗は二人の間に立って面白そうににやっと笑った。

「見てりゃ分かるよ。」

するとしばらく風が流れて、それが沈黙へと移り変わった。のんちゃんがぐっと力を込める。ここにいる二人は、あまりのんちゃんがシュートを撃つとこを見ない。だから、何が起こるのかが分からず二人は少し戸惑っているようだった。

するとのんちゃんが助走をつけて、シュートを撃つ体勢に入った。そしてまさに撃つ瞬間、のんちゃんは健斗に言われた通り“思いっ切り”力を込めた。雄叫びを上げながら、のんちゃんはボールを蹴り上げた。

するとボールを蹴った瞬間、まるでダンプカーが正面衝突をしたようなものすごい音を発した。するとボールはものすごい速さでゴールへと走っていく。

「うわっ！」

「うっ！」

そのとてつもない威力と音に驚き、翔と龍太は思わず目を閉じた。のんちゃんから風が吹いているようだった。

ボールは真っ直ぐゴールへと突き進む。決して良いコースではないけど、ものすごい勢いにヒロは戸惑っていた。

「ぐっ！！」

ヒロはキャッチは無理だと判断し、ボールを弾こうと右手を延ばした。しかしだった。そのボールは何とヒロの手を逆に弾き飛ばし、

ボールはものすごい回転がかかりながらゴールネットを揺らした。
すると反作用の作用でボールがこっちに戻ってきた。

ヒロは倒れ込んで、痛そうに唸っていた。

「……イ……ッテェェッッ！！折れたぁっ！！ぜってー折れたぁっ！！イテェーッッ！！」

まず折れてることはないから、健斗はそれを無視した。隣の二人は目の前に見せつけられたとてつもないシュートに言葉を失っていた。

もちろん、それを放ったのんちゃん自身もこのことに驚いていた。
今でもヒロが痛そうにゴール前で転がっている。

健斗はニヤッと笑った。

「思った通りだ。」

「ちょ、ちょっとっ！今のものすごい音、何っ？」

反対のコートから佐久と琢磨とノブが今のものすごい音に驚き走ってやってきた。

「お、おい……これって。」

「あぁ、そうだよ。」

健斗は笑いながら頷いてのんちゃんに近づいた。そしてのんちゃんの足を指差した。

「のんちゃんは、ものすごいキック力を持ってるんだよ。誰にも負けないくらいのキック力だ。」

そう。今のシュートも、のんちゃんしか持ち得ないキック力から生まれたものなのだ。

「のんちゃんの足、太くて短いけど……それは筋肉がすごくついてるからなんだ。それに、のんちゃんは全体的に身体に筋肉が良い具合についている。」

「なるほどな……」

翔が納得するように頷いた。

「つまりその全身の筋肉をバネにして、ものすごいキック力を備えてるってことか。」

「そういうこと。」

「僕が……」

のんちゃんは未だに自分の持っている凄まじい力を信じられないというような顔をしていた。

「あれが何よりの証拠だよ。」

と言って、未だに転がり続けているヒロを指差していった。確かに、キーパーの手を弾くくらいの強烈なシュートは常人では出せるものではない。

ヒロを見ながら、みんなおかしそうに笑った。

「結構のんちゃんさ、パスミスするじゃん？でもあれ、のんちゃんのキック力が強すぎて、上手く制御出来てないだけなんだよ。」

「じゃあ逆にこのキック力がコントロール出来るようになれば……」

翔の言葉の続きに、健斗は頷きながら続けて言った。

「そう。のんちゃんのこのキック力をコントロール出来るようになれば、足手まといどころか、ものすごい戦力になる。」

「健斗……」

健斗の力強い言葉に、のんちゃんは嬉しそうに笑った。これは本当にお世辞でも何でもなかった。健斗はのんちゃんの中に秘められていた可能性に気づいていたからこそ、はっきりとあのようなことが言えたのだ。

「確かにな。のんちゃんのキック力はものすげー戦力になるよ。」

龍太が頷きながらそう言った。

「ミドルシュートなんかもそうじゃん？例えば、健斗がボールを持って相手を引きつける。そこで健斗が後ろにパスして、そこにのんちゃんが走り込んでミドルシュート。……これってかなり強いよ？」

「そうだな……それは攻撃のパターンとしてありだ。むしろ、うちの攻撃力が飛躍的に上がるはずだ。」

翔が龍太の戦略に同意するように頷いた。翔だけじゃなく、そこにいた誰もがその攻撃パターンに納得する。未だにのんちゃんは唖然としていた。そんなのんちゃんを見て、健斗は笑いながら肩を叩いた。

「だからさ、のんちゃん。自分は役立たずだからとかそんなこと言うなよ。実際違うんだし……」

「健斗……」

「のんちゃんにはのんちゃんなりのいいとこがあるんだ。俺は、それを信じてる。」

健斗はそう言いながら、おかしそうに笑った。

「まっ！それでも練習は必要だけどな？でもそれはのんちゃんの努力次第だよ。俺も付き合うからさ、今言った攻撃パターン、練習してみようぜっ？」

健斗の言葉によって、先ほどまで抱いていたネガティブなイメージが消えていくようだった。のんちゃんはそれが嬉しくって、涙が出そうになった。こんな自分でも役に立てるどころか、チームの力の一つになれるんだということを初めて知れた。

「……うんっ！」

のんちゃんは力強く笑って頷いた。

健斗はいつもそうだった。

のんちゃんが落ち込んでいたり、自信を無くしているときもそうやってしっかりした根拠を持って自分を励ましてくれるのだ。

適当なことは言わない。だからこそ、健斗にそう言われると心の底から安心出来た。

今日だって同じだ。本当は勝てるかどうか分からなかった。そういう疑心を持っていた。

一番やる気がある自分が、そういう疑心を持っていた。

だけど健斗はそんなのんちゃんの気持ちにいつも気づいている。そして自信を取り戻させる言葉をかけてくれた。

そんな健斗が……神乃中サッカー部を辞めたとき……一番ショックだったのはのんちゃんだった。いつものんちゃんは健斗に憧れていた。サッカーにおいても、人間においても、健斗は常にのんちゃんの中での目標となっていたのだ。

でも今はまたこうして同じグラウンドに立ち、健斗といっしょにサッカーをやっている。そして、こうしてあのとき見つけた攻撃パターンとなっていた。

こんな土壇場で、健斗は最後の最後までのんちゃんのことを信じていた。

そしてのんちゃんは健斗に託された、正真正銘、最後のチャンスを迎えている。これを決めるか決めないかで全てが決まる。

のんちゃんは精一杯力を込めた。そしてダイレクトでシュートを放つ。その撃つ瞬間、全てがスローモーションになった。心臓の鼓動がうるさいほどに鳴った。

今まで色んなことがあった。翔のこと、そして神乃中サッカー部のこと……

でもそれはついに今日、そしてこの瞬間に全てが終わる。今までのことを振り払う気持ちを込めて、健斗ものんちゃんもヒロもその最後のシュートに全身全霊の気持ちを込めた。

――のんちゃんにはのんちゃんなりのいいとこがある。俺は、それを信じてる。

「「「「イッッッッケェェェッッッ！！」」」」

健斗とヒロとのんちゃんが同時に叫び、のんちゃんによってシュートが放たれた。

まるでダンプカーが正面衝突したようなものすごい音、そして空を切るような風の音がグラウンド上に鳴り響いた。グラウンドを疾走するボールは、ものすごい威力を保ったまま、相手ゴールネットに突き刺さった。

相手のゴールキーパーは文字通り一歩も動けなかった。それどころか、全員がゴールネットに突き刺さったボールを見つめていた。

そして少し間が置かれてから、ホイッスルが高らかに鳴った。その後、すぐに試合終了をつげるホイッスルも鳴り響いた。

「「「「「やっったぁぁぁっっ！！」」」」」

グラウンドとスタンドから大歓声が起こった。ついに試合が終わり、しかも最後の最後で神乃高が逆転した。まさに奇跡の瞬間だった。

同時にのんちゃんの目から溢れんばかりの涙が流れた。目の前が涙でぼやける。のんちゃんの胸の中には、言葉では言い表し難い深い感動を覚えていた。

神乃高のメンバーが大喜びしながら、のんちゃんに駆け寄った。

「のんちゃんっ！！すげーよっ！！」

「すげーよ、のんちゃんっ！！」

「勝った……勝ったぞぉぉっ！！」

みんなが嬉しそうに泣きながら肩を抱き合った。のんちゃんは少し呆然としたまま、ゴールを見つめていた。

スタンド側も大歓声で包まれていた。あまりの劇的な試合、そしてそこから生じた感激に麗奈は溢れんばかりの涙を流して言葉を出せずにいた。

マナも結衣も同じように感動をしているのか、涙を流している。素晴らしい試合だった。

「やったっ！！やったよぉっ！！」

麗奈は嬉しさのあまりそう叫んだ。本当に嬉しかった。健斗の過去の全てを知っていたからこそ、このような結果となったことが本当に嬉しかった。しばらく大歓声は鳴り止むことはなかった。麗奈は涙を拭いながら、真っ直ぐ遠くの健斗を見つめていた。

「……のんちゃんっ！」

「のんちゃんっ！」

健斗とヒロの声がした。健斗はヒロに支えられて、何とか立っていると言った様子だった。健斗は本当に限界を超えていたのだ。でも二人ともゆっくりと笑って、のんちゃんに近づいてきた。

二人ともボロボロだった。それはどんなにこの試合で身体を張ってくれたのかを表していた。

「……やったな。のんちゃんっ！」

「……ヒロ……」

「信じてたよっ……最後に絶対、のんちゃんが走り込んでくれるって！」

健斗は呼吸を激しくしていたが、そう確かに笑っていった。

言葉はそれ以上いらなかった。三人の間には、それを超えた強い絆があったのだ。

「……うんっ！」

のんちゃんは嬉しそうに笑いながら、健斗とヒロと拳を交わした。

晴れやかな青空だった。その青空を通して、暖かい日差しが彼らを包み込んでいる。胸が朗らかな気持ちで溢れていった。

試合を終えて、互いに礼を交わした。あの健斗のことを知っていたやつは、悔しそうにしていたが、どこか嬉しそうにして健斗に言った。

「……“ホワイト・マジシャン”……いや……名前を教えてくれ。」

礼のあと、そいつが健斗に近づいてきてそう聞いてきた。健斗はヒロに支えられながらゆっくりと振り返った。

「……山中、健斗……」

「……山中……今回もやられたけど……次こそ容赦しない。今度はうちの一軍で、お前を負かすからな。」

そう言ってそいつはニヤッと笑うと、自分のベンチの方へ帰っていった。結局健斗はそいつの名前を知ることはなかったけど、もしかするとまた近い内に会うのかもしれない。

「……誰？お前の知り合い？」

「……さぁな。」

健斗はおかしそうに笑ってそう言った。

スタンドは未だに歓声が鳴り止まなかった。麗奈はようやく涙を拭い、ほっと息をついた。

「やったねっ！健斗とヒロっ……全部をしっかりやり終えたんだね？」

マナが麗奈に向けてにこっと微笑みながら言ってきた。麗奈もそれを見て嬉しそうに微笑み、大きく頷いた。

「うんっ！」

麗奈はそう大きく言った。するとだった。

麗奈の目にある人物が映った。このスタンドで大勢の観客に混じってこの試合を見物していた。どこかで見たことのある人だった。短く爽やかな髪型に、大人びた雰囲気を漂わす顔つき……麗奈はそれを見て、思い出すかのように「あっ！」と声をあげた。

もしかすると……あの人……

しかしその人はふっと笑うと、観客に紛れて姿を消した。だからもう確かめようがなかった。でも、麗奈の記憶が正しければさっきの人は……

「あっ！健斗たちが戻ってきたよっ！」

マナの言葉を聞き、麗奈はすぐに反応してそちらを見る。すると健斗がヒロやのんちゃんに支えられて、歓声に包まれながらこちらに向かってくるのが見えた。

「健斗くんっ！」

麗奈が名前を呼ぶと、健斗は苦笑いを浮かべながら麗奈を見た。ヒロとのんちゃんは麗奈たちの近くまで来ると、健斗をゆっくりとスタンドに座らせた。

麗奈はかがんで健斗を見つめた。

「健斗くんっ……」

「よう……俺、やってやったぜ？」

子供のように健斗が笑ってそう言った。そんな仕草が可笑しく、そして愛おしく思って、麗奈は目を細めて笑った。

「……うんっ……お疲れ様……」

「……おう……イテッ……くそっ……うごけねー……」

健斗が痛そうに表情を強ばらせながら、ぐったりとして身をかがめた。すると結衣や奈津紀、円、そして松本さんたちが上の方から降りてきた。そして遠くからは寛太も走ってくるのが見えた。みんな、健斗に近寄ってきた。

「山中くんっ！大丈夫？」

「健斗くんっ！」

心配そうに結衣と円が尋ねてきた。健斗は苦笑いを浮かべながらゆ

っくりと頷いた。

「あ……うん……ちょっと無理しちゃったかも……」

「ったく……体力がなくなってるなんて……情けねーなぁ……」

そう言いながら、ヒロとのんちゃんもぐったりとして健斗の横に座り込んだ。三人とも相当身体を酷使したに違いない。

「……こりゃ明日は筋肉痛だな……」

「あぁ……」

そう言って健斗たちは笑い合った。本当に身体の隅々までが痛かった。健斗に至っては“剛”のドリブルを二回も使ったのだから、肉体的疲労が半端なかった。

「……あ、そうだっ！南先生っ！」

結衣が名案とばかりに南先生を呼んだ。南先生は名前を呼ばれると、ニヤッと笑った。

「まっかせてぇ～♪実はねー、こうなるだろうと思って身体の疲労を取り除く薬を注射タイプにしてもってきたのよ～？」

「「「え゛……」」」

三人の動きが固まった。すると南先生が鞄から三本の注射を取り出した。中には怪しい緑色をした液体が入っている。

「……それって……南ちゃんが調合したやつ……？」

ヒロが恐る恐る聞くと、南先生は当然と言わんばかりに自慢気に言った。

「当たり前でしょ？」

「ちょっ……ちょっと待てっ！ふざけんなっ！あんた、まだそんなこと続けてたのかっ？」

健斗が焦りながらそう言った。南ちゃんが健斗の腕を掴みながら頷いてそう言った。

「そうよ～？今度ばかりは成功したのよねぇ～。」

「嘘つけっ！あんたいつもそうやって……おいっ！やめろっ！ちょ……」

「大丈夫よぉ～？実験体になったつもりで打てばいいじゃない。」

「ふざけんなっ！犯罪だぞ、それっ！大体あんた医師免許持ってないくせにっ！！」

「あら、博士号なら持ってるわよ？」

「関係ねぇよっ！俺があんたの薬品でどんなに酷い目にあったか……お、おいっ！ヒロッ！見てないで助けろっ！」

健斗は身体が動かせないために、南ちゃんのなすがままになっていた。すると、ヒロとのんちゃんは健斗と違ってまだ立てるため、まるで逃げるように立ち上がった。

「……のんちゃん……おれらは部室に戻ろうぜ？」

「……うん……」

「ちょっ！おいっ！どこに行くんだよっ！待ってってぇっ！」

「行くわよ～？」

南先生により、健斗に注射が刺された。その瞬間、緑色の液体が健斗の中に注がれていく。健斗は恐怖の雄叫びを上げた。

それを麗奈たちは可笑しそうに腹を抱えながら笑って見ていた。

第9話　新たなる決意　P．66（後書き）

だぁっ！！ついに終わりました。サッカー編っ！！

いかがだったでしょうか？分からないところとかがあったらどんどんお聞きください。

さて、ついに第9話も残りわずかとなっております。こうして振り返ってみると感無量です。

ついにグッラブ！がこれまでとまた違った世界に方向が動き始めるのですから。

さて、後書きはこれくらいにして、ここまで読んでくださってありがとうございました。

残りわずかですが、ぜひお付き合い願います。

第9話　新たなる決意　P．67

「……ウ……イテテテテ……」

試合が終わってから大分時間が経った。何とか歩けるようになった健斗は、部室のシャワー室を使い汗を流し、何とか着替えをすまして、こうして家路についていた。

色々と支度に手間取り、帰ろうとする頃にはすでに夕暮れ時になっていた。そしてその間、麗奈は健斗のことを待っていてくれてたため、麗奈と二人きりで帰ることになった。

本当はヒロもいっしょに帰る予定だったが、ヒロにはちょっとした事情が残っていた。そのため、帰りは別行動だった。早川は部活の途中だったし、佐藤も同じ理由だ。

佐久や琢磨とは家の方向は違うからいっしょには帰れないけど、ちゃんと少し話をしてから別れた。二人とも、健斗が麗奈といっしょに暮らしているということに対して、とても驚いていた。

どうやら二人は妙な誤解をしてしまったらしい。あの女性に全く興味を示さない健斗が、あろうことかこんな美少女といっしょに暮らしているっ！

失礼な話である。確かに中学のとき、健斗はそういう色を見せていなかったが……ちゃんと女性には興味があった。だって、そのときは早川に対し健斗は恋心を抱いていたのだ。

ところで帰る、とまではいいが、問題はどうやってかだった。健斗の身体は本当に限界を超えていて、何とか南ちゃんの薬品の効果（本当に効果があったのかどうかは怪しいが、少なくとも大分楽にはなった。）によって何とか歩けるようにはなったが、それでも動く度に身体中に激痛が走った。

そのため帰りは久々にバスを使うことにした。自転車はとりあえず明日まで学校に置いておけばいいし、バスを使わないと日が暮れてしまう。

そして健斗と麗奈は家近くのバス停で降りた。そしてそこから十分くらい歩けばもう家だ。そのぐらいなら何とか根性で歩けるはず。

「今日はお疲れ様♪」

麗奈が微笑みながらそう言ってきた。麗奈は健斗の身体を気遣ってか、健斗の重い荷物を持ってくれていた。その代わり、健斗は麗奈の軽い荷物の方を持っていた。

麗奈にそう言われて健斗は小さく笑って頷いた。

「あぁ。あ、応援してくれてありがとうな。」

「ううん。でも本当にすごかったね？私、サッカーってあんなにドキドキするものなんだなぁって改めて思ったよ。」

「当たり前だろ？俺を誰だと思ってんだよ。」

「“ホワイト・マジシャン”だもんね。」

麗奈がクスクスと笑いながらそう言った。健斗はそれを聞いて面白くなさそうな表情を浮かべた。「それ、止めてくんない？気に入ってないんだよ。」

「え～？何でぇ？格好いいじゃん。」

「どこがだよ。遊戯王っかっ！って感じだよっ……アイテテテ……」

駄目だ。もう大声を出すだけで身体中が軋む痛みを覚える。

「大丈夫？」

「う～ん……ちょっと無理したかも……」

本当にその通りだ。“剛”のドリブルは一試合に一度しか使えないのに、今日は二度も使ってしまったのだ。身体に相当な疲労が蓄積しているに違いなかった。

「でも、南先生の薬品のおかげで大分楽になったんでしょ？」

「ぜってー関係ねぇよ。あのやろー……打つなって言っても打ってきやがったし……副作用なんか起きたらどうすんだよ……」

「前はどうなったの？」

麗奈にそう聞かれて、健斗はそのときの恐怖の思い出を思い出しながら苦笑い浮かべた。

「前は、中一のときかな……俺が部活中に熱出しちゃってさ。保健

室に行ったんだよ。そこで、南ちゃんが“これを飲めば熱なんて一発よっ！”って言ってさ、わけの分からない薬を出してきたんだ。」

「そ、それを飲んだの？直接？」

麗奈に聞かれて、健斗は苦笑いを浮かべたままゆっくりと頷いた。

「うん……飲んだ瞬間、俺気絶したんだ。確かに熱は下がったけど……丸1日失神して大変な騒ぎになった……」

「……そ、そうなんだ……」

「だから俺はあのときから、もう二度と南ちゃんの薬には手を出さないって決めたのに……あのやろー……」

「アハハ……大変だったんだね。」

麗奈は苦笑いを浮かべてそう言った。なるほど、だからあのとき健斗はトラウマを思い返していたのだ。そしてその事情を知っていたのんちゃんとヒロは被害を避けるために、部室へ逃げていったのだろう。

まぁでも何にせよ、これで健斗はようやく新しい一歩を踏み出すことが出来たのだ。それ以上に嬉しいことなどなかった。

「健斗くんはこれからサッカーを続けるんだね。」

麗奈にそう言われて、健斗はゆっくりと笑ってそう言った。

「……あぁ……」

「……何だか嬉しいなぁ。健斗くんがようやく前に進めたような気がして……」

「……そうだな。今回のことで、俺は今までのことを全部振り払うことが出来たような気がする。」

健斗はそう言いながら、腕にしてあった、あのブレスレットに手を触れた。それを大切に撫でるようにして見つめていた。

そのブレスレットは健斗の大切な大切な絆の証だった。健斗の心の支えになって、健斗の心の糧となっている大切なブレスレットなのだ。

すると健斗はそのブレスレットを見つめながら、ゆっくりと笑いながら言った。

「でもまた、こっから全部が始まんだなって思うんだ。俺は今、ようやくスタート地点に立てたんだなって。だから……これからなんだ。」

その横顔を見て、麗奈は胸をドキンッと高鳴らせた。健斗の中に新たなる決意が宿っているようだった。その横顔はいつもとは少し雰囲気の違った表情だった。まるで麗奈の知らない健斗を見ているようだった。

胸の高鳴りが収まらない。

「そ、そうだね……」

麗奈は慌てて健斗から目を逸らしてそう言った。何だか健斗のことを今見ることが出来なかった。

麗奈は今日の健斗を思い出していた。

――……後は任せろ……

その言葉通り、健斗はやってくれた。健斗の大活躍によって、神乃高サッカー部は救われたのだ。何だか本当に、胸にぽかんと穴が空くような気持ちだった。それくらい感服していた。

「……今日の健斗くん……」

「うん？」

「……すごく格好よかったよ……」

麗奈がそう言うと、健斗がかぁっと顔を赤らめたのが分かった。麗奈も多分顔が赤いだろう。

ヤバい……多分麗奈は今までよりもずっと、健斗のことが好きになってしまったみたいだ。

「……な、何言ってんだよ。変なこと言うなよな……」

健斗が恥ずかしさを隠すように笑いながらそう言った。麗奈も小さく笑って、健斗から顔を逸らす。何だか甘酸っぱい雰囲気が漂っていた。

……いつもの二人らしくない。

何か話題を変える必要がある。でも、そう考えてみても話題なんて見つかりっこない。今麗奈の胸の中は最大限に高鳴っている。

健斗も同じ気持ちなのかなぁ……と麗奈は少し想像してみたりした。今回のことを通じて、麗奈はさらに健斗の心の奥に大分近づけたような気がしていたからだ。

そんなことを考えていた。するとだった。麗奈はふとあのときのことを思い出した。

それは試合が終了して、麗奈がスタンドにいる観客の方を見たときのことだった。麗奈の記憶の中に何かが引っかかる、見覚えのある人が観客に混じっていた。

「……あっ！」

麗奈は全てを思い出すような声をあげた。慌てて健斗を見ると、健斗はまだ少し顔を赤くしたまま麗奈を不思議そうに見つめていた。

「ねぇ、健斗くん。ほら、あの人……何だっけ？」

麗奈がそう言うと健斗は分からないと言ったように首を傾げた。

「……あの人？」

「うん。ほら、この間雑誌で見た人――」

「……雑誌……綾瀬はるか？」

「違うよっ！その雑誌じゃなくって、ほらぁっ！あのサッカーのこ

ととか書いてある雑誌に乗ってた人だよ。健斗くんの先輩って言ってた人っ！」

「あ、小山さんか？」

「そうっ！小山さんっ！」

麗奈が慌ててそう言うと、健斗はそれでも分からないと言ったような表情を浮かべたままだった。

「小山さんがどうかしたのか？」

「その小山さんがいたのっ！」

「は？」

健斗がきょとんとした顔をした。

「いたって……どこに？」

健斗が茫然とした状態で聞くと、麗奈は躍起になって説明をした。

試合終了直後に、麗奈の視界にある人物が写った。その人物はどこかで見たことがあった気がして、すぐに思い出したのだ。

雑誌で見せてもらった、健斗の先輩だと言っていた人だ。

だけど……健斗はその話を聞くと、呆れるように笑ってため息をついた。

「何言ってんだよ。いるわけないだろ？小山さんは今頃遠征とかで海外にいるんだぜ？」

「嘘じゃないよっ！本当に見たんだもんっ！」

「見間違いだよ。それにあの人、もう一年以上こっちに戻ってきてねぇんだぜ？たまたま似てる人だったんだよ。」

「違うってばっ！本当に本当にいたんだもんっ！」

「ハイハイ。いたんだな？分かった分かった。」

健斗はもう麗奈をまともに相手にするつもりがないらしい。麗奈の話を軽くあしらうようになった。でも、健斗にそう言われると自分も本当だったかどうかが怪しくなってくる。

何せ距離が遠かったし、麗奈はその人自身に会ったことがない。健斗の言っているように、ただの見間違いだったのかもしれない。

でも……あのどこか普通の人とは違う雰囲気が気になっていた。

それから少し時間が経って、ようやく家にたどり着いた。健斗は家を見ると、ほっと大きくため息を吐いた。ようやく身体を休めることが出来ると思ったのだろう。麗奈はそんな健斗を見ながらクスクスっと笑った。

そして引き戸を空けて家の中に入った。

「ただいまー。」

「ただいま。」

玄関に立つと居間の方から笑い声が聞こえた。一人は母さんの笑い声だった。この五月蝿い甲高い声は間違いなくそうだ。

健斗はふと、玄関に置いてある靴の数に気がついた。玄関には健斗の革靴とランニングシューズ、父さんのサンダルとビジネスシューズ、そして麗奈のブーツが置いてある。

だが妙なことに、その中に見慣れない靴があった。

「……誰か来てるみたいだね？」

麗奈もそのことに気づいたらしく、健斗を見上げてそう言ってきた。健斗は黙ったまま頷いた。

「誰だろうな？」

こんな時間に訪問してくる人なんてそうはいない。健斗と麗奈は少し気になり、家に上がり、居間の方へと向かった。

「あの明ちゃんがね～？こんなに立派になっちゃってぇっ！」

「いや～、俺なんてまだまだだっすよ。世界には本当に化けもんみたいなやつがいっぱいいますから。」

「でも明信もその内の一人じゃないか。この間テレビで特集されてたの見たぞ?」

「おじさん見たんですか?うわっ!恥ずかしいなぁ。」

明ちゃん……明信……

まさか……

健斗と麗奈はゆっくりと居間を覗いた。その瞬間、健斗は呼吸が本当に止まった。麗奈も同じような気持ちで茫然としている。

居間には父さん、母さんがいた。卓袱台を囲んで座っている。だがそんなことはどうでもいい。その中に混じっている人物を見て、健斗は大きく驚いていたのだ。

健斗たちの気配に気づいたらしく、その人物はゆっくりと振り返った。もう間違いなかった。

その人物は健斗の顔を見ると、あたかも当然のような振る舞いで、にこっと笑った。

「よっ!帰ってきたか。お邪魔してるぞ。」

「こ、小山さんっ?」

健斗は家中に響くほどの驚くような声をあげた。なんと、そこには小山明信が卓袱台を囲んで座っていた。

第9話　新たなる決意　P．68

「小山さんっ？」

健斗がそう驚きながら名前を呼んだ。麗奈もその名前を聞いて、驚いた顔を見せた。そこにいる人は、やはりあのとき……麗奈の視界の中に写った人だった。そして、雑誌に乗っている写真と同じ人。

この人が、今Ｕ－１８で活躍していて、テレビや雑誌でもよく特集されている、世間でスーパー高校生と評されている小山明信（こやまあきのぶ）なのだ。

すると健斗はすぐに家の辺りを見渡し始めた。家の隅や、家の外などを確認している。

「……何やってんの？お前……」

「いや、マスコミとかそういうの……まさかいるんじゃないかって思って……」

「はぁ？」

小山さんは呆れるような表情を浮かべた。

「アホか。んなもんいるわけないだろ。つーか今俺、帰省中だし。帰省の間はマスコミなしってことにしてんの。」

「あ、そうなんすか……よかった……」

健斗はそう言いながら、小山さんの隣に座った。麗奈はどうしたらいいか、おろおろとしていた。すると小山さんが健斗から麗奈の方に視線を向けてきた。そして思ったよりも人懐っこい笑顔で麗奈に言ってきた。

「あ、話は聞いてるよ。君が麗奈ちゃん……だろ？」

突然話しかけられて、麗奈はビクッと身体を震わせた。雑誌とかに乗っている人に話しかけられて、胸がドキドキした。

「あ、はい……初めまして。」

「初めまして。俺は小山っていうんだ。、このバカとは小学校のときからの付き合い。」

「バカは余計っすよ。」

健斗が不満そうにそう言うと小山さんはおかしそうに笑った。

「麗奈ちゃんも大変だろ？こんなアンポンタンみたいなやつと暮らすなんてさぁ？」

「あ～……そうですねぇ……些細なことですぐ怒るんです。」

「だろ？昔っから気が短いんだよなぁ、こいつは。」

「そうみたいですね。」

麗奈は可笑しさがこみ上げてきてクスクスっと笑った。どうやらイメージ的にはもっとこう……有名人みたいな近寄り難いイメージが

あったのが、むしろ全然その逆だった。すごく気さくで話しやすい人だった。

すぐに二人の気が合い、健斗はそのことに対して不満そうにため息を吐いた。それはそうだろう。気が合うきっかけになった共通の話題は、健斗のただの悪口なのだから。

「あ、私、鞄置いてくるね？」

麗奈が健斗にそう言うと、麗奈が持っている重い鞄を見てすぐに立ち上がろうとした。

「あ、いいよ。俺が持っていくからさ。」

「ううん、大丈夫。健斗くんはゆっくりしてて。鞄、健斗くんの部屋に置いておくね。」

そう言って麗奈は鞄を重たそうに抱えながら、居間から出て行き、そして二階へと続く階段へと上っていった。

小山さんはそれを見ながら、ゆっくり笑った。

「良い子じゃん、あの子。しかもすげー可愛いなぁ。」

「そうっすか？」

「あぁ。つーかあんな可愛い子といっしょに暮らしてるなんて、ちょっと驚いたぞ。ラブコメかっつーの。」

その表現が可笑しくって健斗は声を立てて笑った。確かに、あんな

に可愛い子が突然一つ屋根の下に住むことになったのだ。

考えて見れば、普通そんなことありえない。まるで漫画とか、小山さんの言うとおりラブコメみたいな設定だと思う。

今更ながらそれを思い、健斗は可笑しさを感じた。

「で、どこまでやったの？」

「は？」

健斗が拍子が抜けたように返事をした。小山さんはずいっと健斗に近づき、ニヤニヤと笑いながら健斗に言ってきた。

「A、B……Cか？いや、お前にまだCは無理だろうなぁ……よくてBってとこか……」

小山さんの言っている意味が分かって、健斗は呆れるようにため息を吐いた。するとその直後、父さんが吹き出して大笑いをした。それにつられるように、小山さんも大笑いする。

健斗は呆れて物が言えなかった。一年半振りに会ったのにも関わらず、中身は全く変わっていない。こうやってくだらないことが大好きな人なのだ。

「くだらないこと言いに来たんなら今すぐ帰ってください。出口はあちらです。」

「冗談だって♪マジになんなよ。お前がまだ童貞なくらい知っるよ。」

「あんた、マジで追い出すぞっ？」

またくだらないことを言ったので、健斗はギロッと睨むようにして小山を見た。しかし小山さんは意ともせず、健斗をからかうように笑ってくる。

健斗は不愉快さを全面に出していた。

「明ちゃん、ご飯食べて行くでしょ？」

母さんがキッチンの方から顔を顔を出してきて小山さんにそう聞いてきた。小山さんは少し考えてから、ゆっくりと笑った。

「じゃあご馳走になっちゃおうかな。」

「うちは全然オッケーよ。じゃあ今日は鍋にしようかしら。あなたぁ。」

「はい？」

母さんに呼ばれて、父さんがかしこまったような返事をした。最近すっかり母さんの尻にしかれてるから、父さんは変な癖がついてしまったみたいだ。

健斗はそれを思うと可笑しくなってぷっと笑った。

「ちょっとお豆腐切らしちゃってるみたいなの。商店街まで買ってきてちょーだい。」

「え～？俺がぁ？おい、健斗。お前が行って来いよ。」

「俺身体がガッタガタで動けねーから無理。」

「まったく……仕方ないな。」

父さんはよっこらせと言いながら重いを腰を上げて、テレビの横に置いてある財布と車のキーを手に取ると、ゆっくりと居間を後にした。

居間の中には健斗と小山さんの二人きりになった。母さんはキッチンの方で料理を作っている。健斗は電気ポットの中に入っているお茶を湯のみに入れながら言った。

「それにしても久しぶりっすね。」

「あぁ……そうだなぁ。一年半振りくらいか？」

「前の帰省がそうだったでしょ。いつ帰ってきたんすか？」

確かに、健斗が最後に小山さんと会ったのが一年半前だった。そのときも小山さんはこうして健斗の家を尋ねてきた。そしてそのとき、小山さんからＵ－１８の合宿の話を聞いた。

あの一年半前の雑誌に書いてあることを、いち早く健斗に報告してきたのである。

普段は今のようにおちゃらけてる人だが、サッカーのことになるとこの人の右に出る人はいないくらいだ。まさに“天才”という二文字が相応しいのは、この小山明信である。

本人はまったくそのような素振りは見せないが、本来ならこの家でくつろいでること自体がすごいことだ。今や小山さんはどこに言ってもマスコミが付きまとうほど有名になっているし、この間なんてサッカー関連のテレビ番組に出演していた。

まぁ、健斗もこうして稀に帰ってくるのに慣れてはいた。以前も、健斗がバイトから帰ってきたときにこうしてさも当たり前のように健斗の家にいたのである。

小山さんは湯のみに入ったお茶を呑みながら言った。

「ん、昨日の昼過ぎくらい。」

「何だぁ。じゃあ昨日に来てくれればよかったのに。」

「バーカ。昨日お前ん家に行ったよ。だけど、留守だったろ?」

「あ……」

そうだった。昨日は山中家全員が外出をしていたのだ。昨日の夕暮れ時まで、健斗は翔の両親に会いに行っていたのだ。

「そっか。今回は何から帰ってきたんすか?」

「スペインの海外遠征。一週間前くらいにあっちのユースとのエキビションがあったんだ。」

「すげー……で?」

「もちろん勝ったよ。２－１だったけどな。一点決めたのは俺な。でも、さすが本場は強いわ。」

それでも勝ったのだ。健斗はそのことに胸を驚かせていた。スペインと言ったら、サッカー大国として知られる。

ワールドカップでは今年優勝を飾ったし、クラブチームでは名門バルセロナとかがある。そんなスペインのチームとやり、しかも一点を決めて帰ってくるなんて……やっぱりこの人には適わない……と健斗は改めて思っていた。

今はこうしてくつろいでいると、本当に普通の人だが……サッカーになるとまるで別人に変わる。この人がＵ－１８に選ばれてから、健斗は毎回テレビで試合を見ているが……いつもこの人は大活躍をしている。

まだ１７歳なのに……本当の化け物なのだ。

「ところでヒロは？あいつとも話がしたいんだけど。」

小山さんがそう言うと、健斗は「あぁ……」と呟くように言って、ポケットから携帯を取り出した。

ヒロは今、おそらく“他の用事”があるのだろうが……一応連絡だけ入れておく必要があるだろう。

――小山さんが帰ってきたぞ。

その文面だけを書き、ヒロにメールを送った。

「またサッカー始めたんだな。」

小山さんがそう言って、健斗はピクッと眉を動かして小山さんを見た。小山さんは暖かいお茶を呑みながらこちらを見てニヤリと笑っていた。

「今日試合やってたろ。」

小山さんの不敵な笑みに、健斗は苦笑いを浮かべた。どうやら麗奈の言う通りだったらしい。

「……見てたんすね。」

「後半の途中からな。洗目の二軍に勝つなんて、神乃高も結構やるなぁ。特にあの最後に点を決めた子……」

「のんちゃんすか？」

「名前は知らないけど……あれは良いキック力を持ってるな。ムラはあるけど……でもあんなすごいキック力、ユースでもそうはいねーよ。」

小山さんにそう言われると、健斗はまるで自分のことのように嬉しかった。あののんちゃんのキック力は、確かに全国レベルでもユースでも中々いない逸材の一つだと健斗は思っていた。

「その点、お前は全然ダメだったな。」

小山さんにそう言われて、健斗は言葉を詰まらせて苦笑いを浮かべた。あの健斗の情けない姿を、あろうことかこの人に全て見られて

いたのだ。

「後半の途中、完全にへばってたろ？あんなやつら相手に何度も止められてたし……ったく、お前ともあろうやつが落ちたもんだな。」

「し、仕方ないじゃないっすか。そりゃずっとやってなかったら体力も落ちますよ。」

「いーや、ドリブルの切れも全然なかった。まーだ、中二のときの方がよかったな。」

小山さんの厳しい評価に健斗は苦笑いを浮かべるしかなかった。確かに小山さんの言うとおり、全盛期である中二のときの方が全然動けたというのも事実だった。

この人には誤魔化しは効かない。やはり、あれから二年半もサッカーから離れていれば多少テクニックの方も落ちてしまっていたらしい。

「まっ、俺は“ホワイト・マジシャン”がいつ復活するのかが楽しみだな。」

「よく言うよ……その名前がついたの、小山さんのせいっすからね。ああやってマスコミつれてきたから……」

そう、“ホワイト・マジシャン”という名前がついたのは……今から三年前の春の地区大会のときだった。

あのときたまたまＵ－１５の合宿場が近く、大会の現地で小山さんに会ったのだ。

そして小山さんが、Ｕ－１５の代表監督に健斗のプレーを見て欲しいと頼み込んだらしい。すでにあのときから注目されていた小山さんがそんな風に言うなんて、と言うように一気に話題性を呼んだ。

そしてＵ－１５の合宿の取材に来ていたマスコミ陣が代表監督と小山さんと同じようにそのときの試合を見て、感銘を受け、あのような名前をつけられてしまったのである。健斗にとっては不本意な話だったが、あのあと記者たちが学校まで健斗に押しかけてきて一時騒然となった。

その全ての発端は間違いなく、この目の前にいるこの人だった。

しかし小山さんは何の悪びれもなく笑って言った。

「何だよ。別によかったろ？俺のおかげでお前は世間に注目されたんだぜ？」

そう言うと、小山さんはぷっと笑いながら言った。

「……“ホワイト・マジシャン”……ぷっ……」

「はっ倒すぞっ！あんたっ！」

バカにするような言い方をして来たので、健斗が威嚇するようにそう言った。小山さんは軽く笑いながら「冗談だよ♪」と言ってきた。

健斗は怒りを鎮め、深くため息を吐いて暖かいお茶をすするように飲み始めた。

「……あの地区大会を見たときは本物だって思ったよ。」

「え？」

小山さんは昔を懐かしむように、遠い過去の出来事を見つめるような表情を浮かべて穏やかな口調で言ってきた。

「お前、翔、ヒロ……この三人がいれば、高校サッカーもすごく面白くなるだろうってそう思った。」

「……」

「翔が死んだのは、本当に残念だったなぁ……面白いもんが一つなくなっちまったからな。」

「……そうっすね。」

健斗も小さく笑って同意するように頷いた。確かに、小山さんの言うとおりだった。

もし翔がこの世にいるのなら、自分はどうするのだろう。

おそらく、今描いている現実とは大きく異なっているだろうと健斗は思った。

多分、あのままずっとサッカーを続けていたら、健斗はＵ－１５の強化合宿に参加し、そこでさらに力をつける。

そして高校も、多分サッカーをあのまま続けていたら……きっと神乃高にはいかなかったと思う。

「……なぁ、お前さ。」

「はい？」

「一応確認だけどさ……うち、来る気ないよな？」

小山さんにそう言われて、健斗は少し戸惑いながら言った。

「何すか、それ。スカウトのつもり？」

「茶化すなよ。お前のレベルなら、立川でもすぐレギュラー取れるだろ。」

「過大評価しすぎっすよ。」

「どうなんだ？」

小山さんに真剣な目で言われて、健斗は少し言葉を詰まらせた。

確かに本来ならそうなるはずだった。神乃高じゃなくって、立川高校に行き、健斗と翔、そしてヒロと共に小山さんと高校サッカーをやっていたかもしれない。

今の事情がとことん変わっていたかもしれない。

でも……

「嬉しいお誘いっすけど……遠慮しておきます。」

健斗は小さく微笑みながらそう言った。すると小山さんは「やっぱ

りか」と言ったように、同じく小さく笑みを浮かべた。

「まっ、分かってたけどな。」

「すみません……」

「謝るなよ。どうせうち、公立だから。編入制とかないんだ。」

「あっ、そうなんすか？」

「まぁ、スポーツ枠で特別編入枠はあるけどなぁ……それをお前に進めようと思ってたんだけど……まっ、そういうことなら仕方ねぇな。」

小山さんはそう言って可笑しそうに笑った。健斗はそんな小山さんを見ながら、湯のみのお茶をゆっくりと呑んだ。

「……俺、後悔はしてないっすよ。」

「ん？」

「あのときサッカーを辞めたこと。そのせいで随分と遠回りはしてるけど……俺は今の生活も悪くないって思ってるから。」

そう、結局遠回りの形になっただけだ。

それに、神乃高に行って健斗は何一つ後悔をしたことがない。もし健斗が神乃高に行ってなければ、今のような生活にはならなかった。

麗奈とも……出会ってなかったかもしれないのだ。それが一番大き

かった。

麗奈との出会いが、こうして生きてきて、健斗の一番かけがえのない出来事となっていたのだ。

「……まぁ、それならそれでいいんだけど……つーかしてたらぶん殴りもんだからな。あのときだってお前、俺のせっかくの誘いを断りやがったんだから。」

「もういいじゃないっすか、その話。つーかまだ根に持ってるんすか？」

「別に持ってはないけどさ、せっかくさ俺がさ……チャンスをやったのにさ……それに俺はまたお前らとさ、サッカーやりたかったのにさ……なのにさ……」

小山さんがグチグチと健斗に呟くように言ってきた。健斗はそれを見て可笑しそうに声を立てて笑った。

本当にこの人はいつまで立っても中身は変わらない。子供っぽいところやおちゃらけたところも、なのにどこか尊敬の念を抱かせてくる。それがこの人の本当のすごいところなんだろうな、と健斗は一人気に呟いた。

するとだった。再び廊下の方から麗奈がひょこっと顔を出してきた。いつの間にか家着に着替えている。

「私も会話に混ぜてもらってもいいですかぁ？」

麗奈がそういうと、小山さんは一転して明るい表情へと変わった。

「おぉっ！もちろんっ！ちょうど男同士の会話で華がねぇーなぁって思ってたんだよ。」

小山さんがそういうと、麗奈は笑顔になって健斗の隣にゆっくり座った。健斗はそんな小山さんを見ながらゆっくりとため息をついた。

前言撤回……これがなければいいんだけどなぁ……

世間では爽やかだとか、そういうイメージがあるがそれは全くの逆だ。むしろこの人は、無類の女好きである。その中身は今でも変わっていない。

この女好きは、ヒロにも影響しているなもまた事実だった。

「あのっ！一つお願いがあるんですけど……いいですか？」

麗奈が少し興奮した様子で小山さんに言った。小山さんは電気ポットからお茶を注ぎながら首を傾げた。

「うん？」

「あの、サインもらってもいいですか？」

「へ？」

健斗はそれを聞いて思わず喉を詰まらせた。麗奈は少し興奮気味で小山さんに白紙の色紙とサインペンを差し出してきた。突然のことに小山さんは唖然としていた。

健斗はせき込みながら、怒るように言った。

「アホッ！お前また何をわけ分かんないこと言い出してんだっ？」

「えっ？だって、小山さん有名人なんでしょ？」

「それはそうだけど……あのなぁ～……」

健斗が呆れるようにため息を吐いた。もはや言葉も見つからなかった。確かに小山さんは有名人だが、麗奈の考えているような類のものではない。

どうやらこいつは有名人と芸能人の区別がついていないらしい。

すると唖然としていた小山さんが突然吹き出して、次第に腹を抱え込んで笑い始めた。

「アッハッハッハ♪は、話には聞いてたけど、本当に面白い子なんだなぁ♪」

「バカなだけっすよ。」

「ちょっとそれってどういう意味っ？」

「言葉通りの意味。」

「アッハッハッハ♪よしっ！分かった。いいよ。

小山さんはそういうと、麗奈から色紙とサインペンを受け取った。

そして手慣れた手つきで色紙にサインを書いた。

「はい。」

「わぁっ♪ありがとうございます。」

その色紙にはちゃんとしたサインが書かれていた。健斗はそのことに驚いて小山さんの方を見る。

「いつの間にサイン書けるようになったんすか？」

「ん？あ、あぁ……何かさ、結構練習場とかにもファンの子とかが来てさ。サインとかよくねだられるんだ、俺。」

健斗は驚いて言葉が出なかった。確かに、小山さんはＵ－１８に選ばれてからものすごく知名度が高まった。わずか１６歳でＵ－１８の合宿に参加したのだ。それは本当にものすごいことだった。

そして知名度が高まるということは同時に、自ずとファンの子も現れる。しかもしょっちゅう雑誌やテレビ番組の取材を受けていれば尚更だ。

健斗は感服すると同時に呆れた心地で二人のやり取りを見ていた。

するとだった。

外の方からどたばたする音が聞こえた。

「健斗ーっ！！」

ヒロの声だった。とても慌ただしい口調で玄関の方から聞こえた。

健斗と小山さんと麗奈はそれを聞いて、可笑しそうにクスッと笑った。

「開いてるぞっ！」

健斗がそういうと玄関の開く音がした。すると慌ただしい様子でヒロが居間の方に顔を出してきた。小山さんと目が合うと、ヒロは嬉しそうににっこりと笑った。

「小山さんっ！」

「よっ！ヒロ。久しぶりだなぁ。」

「本当っすねっ！いつ帰ってきたんすか？」

「昨日の昼頃。」

「マジっすかっ？うわぁ～……あっ！ちょっ……サインもらってもいいっすか？」

ヒロが興奮気味に鞄の中からペンとノートを取り出そうとした。それを聞いて、小山さんと麗奈はぷっと吹き出して、次第に大笑いをした。健斗は呆れ返っていて、頭を抱えた。

「お前なぁ……何でお前までサインをもらおうとすんだよっ？」

「え？いや、だって小山さん、もう完全に有名人じゃん。」

「だからってお前……」

「そういやさっき、お前のおばさんとおじさんからもサインねだられたぞ。」

「はぁっ？」

小山さんが笑いながらそう言って指を指した。その指差す方向には確かに、同じような色紙が立てられていた。

健斗はもはや言葉が出ず、唖然としていた。

「お前にもサインやろうか？」

「いらねぇよっ！」

小山さんがからかうようにそういうと、健斗はむきになってつい声を強めてそう言った。

その反応もまた面白さを引き出したらしく、小山さんと麗奈、そしてヒロも大笑いをしていた。

しばらくの間、こうした笑い声が家中に響き渡っていた。

第9話　新たなる決意　P．69

晩御飯を堪能しながら、健斗、麗奈、小山さん……あとついでというこでヒロも加わって長い間色々な話をした。

そして時間も気づかない内に大分経ったようで、時刻が夜の１０時を回ったときだった。小山さんが、明日は朝早い内に東京の方に帰らなければならないから……という理由でお暇することになった。

健斗は麗奈、そしてヒロとともに小山さんを見送っていた。外は肌寒くって、星が綺麗だった。

「じゃあまたな。今日は楽しかったよ。」

小山さんが別れ際に健斗たちにそう言った。健斗はゆっくりと笑って照れくさそうに言った。

「また、帰ってきてくださいよ?待ってますんで。」

「あぁ、時間が空いたときにまた……な。麗奈ちゃんも元気でな?」

小山さんがそういうと麗奈はにっこりと微笑んでゆっくりと頷いた。

「はいっ！サインありがとうございました。」

小山さんはそれを聞くと可笑しそうに吹き出して笑った。

「あぁ。じゃあ、またいつかな。」

そういうと小山さんはゆっくりと闇の中を歩いていった。健斗たちはその後ろ姿が見えなくなるまで見送ろうとした。するとだった。突然小山さんが振り返った。

「健斗、ヒロ。」

名前を呼ばれて健斗とヒロは表情を強ばらせた。すると小山さんはにっと笑って健斗たちに言ってきた。

「さっさと力をつけてこい。そんで……来年までにアンダーに来い。そこでまたいっしょに、サッカーやろうぜ。」

健斗とヒロはそれを聞いて、可笑しそうに笑った。言ってることはとても厳しい条件だったが、でも何でか嬉しかった。

「はい。待っててくださいよ。」

「すぐに追いつきますんで。」

健斗とヒロが自信たっぷりに答えると、小山さんは再びにぃっと笑った。そしてまた前を向き直すと、ゆっくりと歩きだした。徐々に姿が見えなくなった。そして健斗とヒロはふぅっと小さくため息をついた。

「来年か……」

「こりゃめちゃくちゃ厳しいなぁ。」

そう言って健斗とヒロは笑い合った。本当に厳しい条件だったが、

それ以上にやってやるぞっ！という意識の方が強かった。

その気持ちは以前と同じようなものだ。胸の中にこみ上げる、どことなく熱い感覚。健斗はそれが嬉しくってたまらなかった。

「じゃあー……俺も帰るわ。つーか今日俺体ガッタガタ……」

「あ……あ、そうだな。」

健斗も今更のように体中に感じる疲労感を思い出した。今日は本当に無茶をしたはずなのに……小山さんのおかげすっかりそんなことを忘れていた。だが再び思い出した疲労感により、健斗は早く家に帰って休みたいという気持ちが起こった。

「あ、お前、仲直りはしたの？」

健斗が麗奈といっしょに家の中に入ろうとしたときにヒロにそう聞いた。するとヒロはゆっくりと振り返って、恥ずかしそうにニヤリと笑っていた。

「野暮なこと訊くなよ……」

「……そうだな。また明日な。」

「おう。」

ヒロとそう会話を交わすと、ヒロはゆっくりとした足取りで自分の家の方へ帰っていった。健斗はその様子を見て、可笑しそうにクスッと笑った。

「仲直りって……」

麗奈が健斗の隣でそう訊いてきた。健斗は小さく頷いた。

「あぁ。今日あいつ、試合終わってから佐藤のこと待ってたんだ。その先は言わなくても分かるだろ？」

「……そうだね♪」

健斗と麗奈は互いに笑い合って家の中に入った。靴を脱いで二階へと続く階段を上っていった。今日は本当に疲れたから……早く休みたい。

「……何か健斗くんってすごいよね？」

「ん？」

麗奈が健斗を見上げながらそう言ってきた。健斗はそんなことを言う麗奈を見て、不思議そうに首を傾げて見せた。

「何かさぁ、人との繋がりが深いっていうか……色んな人と色んな繋がりがあるんだね。」

「え？いや、そうかな？」

「そうだよ。今日みたいにさ、小山さんやヒロくんと、まるで兄弟みたいな関係じゃない？」

「あの二人は特別だよ。ヒロと翔、そんで小山さんは小学校のときから家同士の繋がりがあるし……まぁ、確かに兄弟みたいな感覚で

育ってきたのはあるな。」

「でしょ？何だか羨ましいなぁ。」

健斗はそんなことを言う麗奈を見て、ぷっと吹き出して笑った。変なことを言うやつだな、と健斗は思った。

「何言ってんだよ。お前だって同じだろ？」

「え？」

「お前だって、家とそういう関係があるから、今この家にいるんだろ？」

「あ……そっか。」

「そうだよ。何、肝心なこと忘れてんだよ。」

「うん……何だかね……私、自分がどの家庭に属してるのかよく分からなくなるんだよね……」

健斗は部屋に入りながら、そんな風に言う麗奈を見た。麗奈も健斗の部屋に入って少し困ったように笑っていた。

「どういう意味？」

健斗が尋ねると、麗奈はちょっと困ったように笑い、小さく頷いた。

「うん……何か、私はこの家族でもあるけど、でも大森家っていう家族の一人でもあるじゃない？だから、どっちが本当の私なんだろ

うって……たまに分からなくなるんだよね。」

麗奈はたまに、自分が誰なのか分からなくなることがある。自分はこうして当たり前のように山中家の家族の一員として暮らしているが……自分には本当の家族がＮＹにいる。

しかも、麗奈のお父さんがもう一度……麗奈といっしょに暮らしたいと言っているのだ。それはそれでいいのかもしれないが……もしそうなったら、一体自分はどうなるんだろう……と麗奈は少し考えていた。

今は当たり前のように山中家の家族の一員として暮らしている。それは紛れもない事実だし、実際麗奈もこの家族は家族以上の強い繋がりを感じている。

でもまた達也と暮らすことになれば、そういう麗奈はいなくなる。山中家の一員として暮らしてきた麗奈はいなくなるのだ。

家族なのは確かだ。でも……そんな風にコロッと変わってしまう。そうなったら自分は一体、誰なのか分からなくなる。“大森麗奈”であるのは間違いない。

ただ、アイデンティティの喪失と同じような感覚をどうしても覚えてしまうのだった。

「……あ、ごめん。変な話しちゃって……気にしないで。ちょっとふと思っただけ。」

麗奈がそう言って笑っても、健斗は表情一つ変えようとしなかった。ただじっと麗奈を見つめるだけ。

何だか空気が重かった。せっかく今さっきまで楽しい時間を過ごせていたのに、麗奈の余計な一言で全てを台無しにしてしまうような気がした。

止めよう、こんな話。今はまだ……こんな話をするべきではない。

「じゃあ～……私、もう寝るね？おやすみぃ。」

麗奈が笑顔を作りながらそう言って、健斗の部屋を後にしようとした。これ以上何か言うと、健斗をただ困らせてしまうだけだ。だから止めておこう。麗奈はそう思った。

けど、その瞬間健斗が麗奈の腕を引いた。麗奈は驚いて健斗を見ると、健斗は悲しそうな表情を浮かべていた。

「……健斗くん？」

「……お前はお前だよ。」

「え……？」

健斗はそう言うと、ゆっくりと麗奈を抱きとめてきた。突然のことに麗奈はどうすればいいのか分からなかった。健斗の暖かい温もりと鼓動が伝わってきた。麗奈の体温も上昇すると共に、鼓動が早くなるのを感じた。

「お前はお前だよ。“大森”麗奈でもなければ、“山中”麗奈でもない。お前は、“麗奈”っていう一人の人間なんだ。」

「健斗くん……」

「だから……そんな悲しいこと言うなよ。自分が誰だか分からなくなるなんてさ……もう、言うな……」

健斗はそう言うと麗奈を強く抱きしめてきた。その温もりが暖かくって、麗奈はゆっくりと目を閉じた。暖かい……健斗がここにいるという感覚を覚えた。

そして健斗はゆっくりと麗奈を離した。麗奈は多分、自分は顔が赤いだろうということを意識しながら健斗のことを見れないでいた。まさか、健斗に抱きしめられるとは思っていなかったのである。

「それにお前……それって本当はすげー幸せなことなんだぞ？」

「え？」

健斗はニコッと笑った。麗奈はゆっくりと顔を上げて、健斗のことを見つめた。

「だってお前、それって二つの家族を持ってるってことになるじゃん。そう考えると、それってすげー幸せなことだって思わない？」

確かに、そう言われればそうなるかもしれない。でも、それはあくまでもポジティブ思考に考えればの話だ。現実は違う。

いつか達也と暮らすようになれば、これまで築き上げてきた時間なんてものはいずれは消えていく。それはもう、麗奈の分かっていたことだった。何度も引っ越しを繰り返してきた、麗奈だからこそ分かることなのだ。

健斗はそんな麗奈の浮かない顔に気づいて、ゆっくりと麗奈の頭を撫でてくる。手のひらを通じて、健斗の優しさが伝わった。

「お前にだって、俺と同じように……色んな人と色んな繋がりがあるだろ？」

「……うん……」

「少なくとも……俺とお前の中には……家族以上の繋がりがある。違うか？」

麗奈は驚くようにして健斗を見上げた。健斗がそんな風に言ってくるのは珍しかった。健斗はいつも、自分と麗奈とは家族だ。とかそういうことは言ってくる。ただ……“家族以上”なんて言い方はしてこなかった。

健斗はゆっくりと笑うと、健斗の部屋に置いてあった鞄を探り始めた。やがて、立ち上がると手に何かを持っていた。麗奈はそれが何なのかを見つめた。

「だから……お前にこれをやるよ。」

「え……」

健斗がそう言って麗奈の手を握りながら渡してきたのは……あのブレスレットだった。他の二つは健斗とヒロがつけていた。だからこれは最後の……健斗の大切な親友である、翔の分のブレスレットだった。

健斗とヒロと翔。この三人の絆の強さを示す、大切なブレスレットのはずだった。そんなブレスレットを、あろうことか麗奈にあげると言っている。麗奈はあまりの驚きに目を見張らせた。

「……どうして？」

麗奈が聞くと、健斗は照れくさそうに顔を背けた。

「……何ていうか……お前に持っておいて欲しいから……」

「……私に？」

「うん……」

健斗は照れくさそうにポリポリと頬を書いた。そして本当に呟くような小さな声で麗奈に言ってきた。

「……今回俺が頑張れたのはさ……全部……お前がいてくれたからなんだよ……」

「え……？」

「お前が……俺に言ってくれただろ？“もう苦しまないで欲しい”って……」

確かにそう言った。あの言葉は何よりも麗奈が一番強く思っている思いだった。本当に正直な気持ちが、もうこれ以上健斗に苦しんだり、悲しんだりして欲しくなかったのだ。

健斗は顔を赤らめて、麗奈をわざと見ないようにして言った。

「……お前のあの言葉で……ずっと悩んでた思いがようやく固まったんだ。お前がいてくれたから俺……ずっと頑張れてこれたんだよ……」

「健斗くん……」

「だから……それをお前に持ってて欲しい……いらないんなら……俺が持っておくけどさ……」

嬉しかった。健斗がそこまで麗奈のことを考えていてくれたなんて。今回の件は、自分は健斗に対して何もしてやれないとばかり思っていた。

今回の件は健斗自身の問題だし、それに口を挟んだりしてはいけない。それに自分に出来ることは本当にごくわずかだった。もっと健斗を支えてあげたかった。そう思っていたのだ。

だけど……健斗はずっと麗奈は充分やってくれていると言ってくれていた。そんなの嘘だと、健斗が気を遣ってそう言っているだけだと思っていた。でも本当にそうだったのだ。麗奈の知らないところで、麗奈は健斗のことを支えていたのだ。このブレスレットが、何よりも大切な証だった。

そして同時に、麗奈が健斗にとって“家族以上”の存在であることを何よりも示していた。それが本当に嬉しかった。

麗奈はそのブレスレットを大切に握った。

「……嬉しい……ありがとう。健斗くん……」

「……おう。」

「本当に嬉しい……私……」

「も、もう分かったよ。そんなに言われると照れるだろ。」

健斗が恥ずかしそうにそう言ったので、麗奈は愛おしさを感じると共に可笑しさも感じてクスッと笑った。

「……うんっ！」

「……よし。じゃあ……もう俺も寝るから……さすがに……ちょっと……クタクタだわ、俺……」

健斗はふらっと体を揺らしながらベッドにバタンと倒れた。麗奈はまた可笑しそうに笑うと、ブレスレットを握ったまま健斗の部屋を後にしようとする。

「じゃあ、おやすみぃ。」

「……ん……おやすみ……」

麗奈はそう言うとゆっくりと健斗の部屋のドアを閉めた。そしてもらったブレスレットを見ながら、自分の部屋に入った。ブラックとレッドの合わさった格好いいブレスレットだ。

麗奈は会ったことのない、櫻井翔から受け継いだようなそんな感覚を覚えた。それくらい大切なブレスレットなのだ。

健斗と何よりも強く結ばれている証……

麗奈は嬉しくって、そのブレスレットを大切に握りしめた。

心が晴れやかになった。

第9話　新たなる決意　P．70（前書き）

第9話のラストですっ！

ここまで読んでくださったみなさん、本当にありがとうございましたぁっ！

それでは、第9話の最終話をどうぞ！

第9話　新たなる決意　P．70

次の日になると、学校は昨日の試合の話題で持ち切りだった。健斗のものすごいプレーやヒロのスーパーセーブを見て、興奮が未だに冷めてない人たちが一斉に健斗とヒロの元に押しよってきた。

松本事件のときも中々だったが、今回の数はその比ではない。どうしてこうなってしまったのだろうか……

「お前のせいだよっ！」

「イテッ！」

ようやく落ち着いてきた頃だった。健斗は後ろの席に座っている寛太の坊主頭を叩いた。寛太は叩かれた頭を撫でながら、ニヤリと笑いを見せてきた。

「何だよー。その方が盛り上がったから良かっただろ？」

「良くねーよ。こんなに事を大きくしやがって……」

「でも、それを喜んでるやつもいるぜ？」

寛太は廊下の方を指差しながらそう言った。健斗は指差された方向を見ると、そこには……

「真中くんって、本当はすごい人だったんだね～？」

「何本も止めてたでしょ？かっこよかったなぁ～♪」

「いや～！まっ、俺ぐらいのレベルになればあんくらい誰でも出来るよ～！」

「え～っ！すごぉ～いっ！」

説明しなくても誰だか分かるだろうが、いつもの調子でヒロが他の女子たちにチヤホヤされていた。情けないことに、ヒロは嬉しそうに鼻の下を伸ばしていた。健斗はその様子を見て呆れるようにため息をついた。

あいつはこういう状況が大好きなのだ。小山さんから影響を受けた女好きが見事に表全面に浮き彫りにしている。

まったく……情けないったらありゃしない。

健斗がそう思っていると、ヒロはその褒め称えていた女子と別れると気分良さげに教室の方に入ってきた。そしてニヤニヤして、鼻歌を交えながら健斗たちの元へ近づいてきた。

「いや～？参ったなぁ～？もう朝からこんな感じ♪俺モテすぎちゃって困っちゃうっ！」

「そりゃようござんした……」

「いや実際、今年は行けんぜっ！バレンタインッ！一体何個貰えんのかなぁ～……ヒロく～ん、真中く～ん、ヒロく～んってさぁっ。プッ……フフフ……フハハハハハハッ――」

「調子に乗るなっ！！」

高笑いしているヒロの脳天に、背後から空手チョップが下った。ヒロは「ぎゃっ！」と悲鳴を上げて痛そうに頭を抱え込んだ。背後から正義の鉄槌を食らわしたのは、何と佐藤だった。

呆れた様子でヒロのことを見下す。ヒロはすぐに顔を上げて、痛そうに頭を抑えながら佐藤のことを睨みつけた。

「――ッテェなっ！何すんだよっ！」

「あ～んたがそうやって調子こいてるのがいけないんでしょっ？」

「いいだろっ！別にっ！女子にチヤホヤされて何が悪いっ？」

何とも清々しいほどの開き直りだ。確かに、男子の本音を言えば実際はそうだろう。

「もっと健斗みたいに、毅然とした態度でいなさいって言ってんの。このエロメガネオタクッ！」

「オタクは余計だっつーのっ！大体てめぇには関係ねぇーだろ、怪力メスゴリラ魔神っ！」

エロも否定しろよな……健斗が心の中でそう呟いた。しかし、その前に佐藤の中で何かが切れたらしい。確かに呼び名が何だか増えているようだった。佐藤はニヤリと凄みを見せた顔でヒロを見る。佐藤の視線に捕まったヒロはもう逃げられない。

「……ほほぉ～……随分とまぁ言ってくれるじゃない？」

「あ……ウ、ウソウソ……冗談だってば……」

ヒロが愛想を良くしようとして笑顔を見せるが、もう佐藤を止めることは出来なかった。拳を握り、バキバキという嫌な音が響く。背後に赤いオーラが見えるのは気のせいだろうか……

「長い間何もしてなかったから……あたしの恐ろしさを忘れてるみたいね……？」

「いや、違っ……け、健斗……助けて……」

ヒロが泣きそうな目で健斗を見てくるが、健斗はわざと知らんぷりをしてやった。

「俺が昨日助けを求めたら、お前逃げただろ？」

「そ、そんな……ちょ……マジ勘弁して……ま、まだあちこち体がいてぇんだって……」

「へぇ～……体中が痛いんだぁ～？だったらあたしが治してあ・げ・る……わよっ！オラァッ！」

「ぐわぁぁっっ！！」

またいつものが始まった。佐藤の見事なほどに決まったプロレス技に、ヒロも見事なほどはまっている。この光景が少し懐かしいような風に思えた。

昨日仲直りはしたらしい。いや、その前に佐藤がヒロに向けて応援

の言葉をわざわざかけてきた。案外この二人……麗奈や早川の言うとおり、お似合いなのかもしれないな……健斗はそんなことを思って、目の前の光景を見ながらクスッと笑った。

少ししてからヒロがようやく佐藤のプロレス技から抜けた。ヒロは痛そうに体中を触りながら、近くの席に座り込んだ。げっそりとやつれている。久しぶりにやられたのだから、相当強くやられたのだろう。

「し、死ぬ……俺……死んじゃう……」

「これに懲りて、もう調子に乗らないことだな。」

健斗が笑いながら言うとヒロは大きくため息を吐いた。

「……あ、お前聞いた？」

「何を？」

「もちろん、サッカー部の廃部がなくなったって話。」

それを聞いて健斗は可笑しそうに笑った。当然そのはずだった。そのために健斗はあんなに頑張って、何とか洗目に勝つことが出来たのだから。

「そりゃそうだろ。だって勝ったんだから。」

「いや、それがちょっと違うんだよな。」

「……どういう意味？」

健斗が真面目な表情を浮かばせてヒロに聞いた。ヒロも健斗の表情を見ると、つられるように真剣な表情へと変わる。寛太はまったく緊張感がないらしく、カタンカタンと椅子を揺らして健斗たちの側で話を聞いていた。

「確かに廃部を免れるのには、昨日の試合に勝つことが条件だったんだけど……でも昨日は免れても、また次の試合に負ければ、その時点で即廃部決定っていう方針だったらしいんだ。」

「何だよ、それっ！」

そんなこと初耳だった。健斗はてっきり、昨日の試合に勝てばそれでもう完全に廃部がなくなるとばかり思っていたのだが、どうやら違ったらしい。

「じゃあ廃部を免れるには、ずっと勝ち続けなきゃなんねぇってこと？」

「さすがにずっとではないとは思うけどさ。まぁ、大会である程度の成績を残せるまで……だろうな。」

「何だよ……それ。」

健斗は腹が立って仕方がなかった。確かに、一度問題を起こしたとは言え、それだけでそんなにサッカー部を潰したいのだろうか……確かにコストなどのことも関わるだろうが、何とかやりくりすれば大丈夫なのではないだろうか。

学校側の卑劣な陰謀に健斗は腹立たしい気持ちでいっぱいだった。

そんな卑劣な行為でサッカー部をつぶすわけにはいかない。今や健斗とヒロが部に入っているのだから、だったら真っ向勝負で立ち向かってやる。

健斗は大きくため息を吐いた。

「いいよ。要は負けなきゃいいんだろ？だったらどこだって相手してやるよっ！」

「いや、だから……うん。話は最後まで聞けって。」

「え？」

健斗がいきり立っていると、ヒロが困ったような顔をして健斗を見ていた。

「だから、それがなくなったの。」

「……廃部にするっていう方針自体が？」

「そう。」

「え……えっ？な、何で？」

健斗がヒロに大きく詰め寄った。ヒロはうざったそうにしながら健斗を牽制するように距離を取ろうとした。

「ちょっ……近いって。」

「なぁっ！何でなくなったんだよっ？」

「昨日の観客の影響だよっ！」

「はっ？」

ヒロがそう言ったので、健斗は思わず聞き返してしまった。唖然として動きを止めた健斗を一気に引き離して、ヒロは小さくため息をついてから続けて言った。

「昨日、ものすごい観客がいただろ？」

「あ……うん。こいつのせいでな。」

と言って寛太を指差した。するとヒロはゆっくりと頷いた。

「そう。あの観客の影響で学校側に色々と電話がかかってきたんだよ。地域の住民からな。」

「何て？」

「“昨日の試合は本当にすごかった。”みたいな体じゃないの？詳しくは知らないけど……とにかく、サッカー部を廃部にする件はなしの方向でっていう風な電話がたくさん来たらしいんだ。」

「そ、そうなんだ。」

「あぁ。あと、昨日の試合を見た生徒会長も校長に掛け合ってくれ

たんだって。昨日の試合のように、こんなに頑張ってる彼らからサッカー部を奪うようなことをするなってな。」

さらにヒロはニヤリと笑って続けて言った。

「それだけじゃない。あの試合のあと、洗目高校の監督がうちに電話をかけてきたんだって。“次はうちの一軍がお相手させていただきます。”みたいな感じでさ。」

健斗はそれを聞くと、ふと昨日のあの一軍のやつのことを思い出した。名前は知らないけど、最後に健斗に同じようなことを言っていた。もしかすると……あいつがそういう風に言って計らってくれたのかもしれない。

「さすがにそこまで言われたら、学校側も対処を考え直さなきゃなくなるだろ?で、今日の午前に緊急理事会が開かれたらしくて、そこで正式に神乃高サッカー部の廃部の件は完全に取りやめってことになったらしい。」

「じゃあつまりそれって……」

健斗がそう呟くと、ヒロがニヤリと笑って頷いた。そして健斗の言葉の続きを埋めるように言ってきた。

「そう。何だか分からないけど、こいつが人を集めてくれたことが良い方向へと進んだってわけだよ。」

ヒロが寛太を指差しながらそう言った。寛太は突然指を差されて何のことだか分からないと言ったような表情を浮かべていた。健斗は胸を驚かされた気持ちで寛太に言った。

「お前、それを狙ってあんなに人を集めたの？」

まさか……と思いながらも健斗は一応そう聞いてみた。しかし寛太は分からないと言ったように大きく首を傾げて見せた。

「何が？俺はただ、ギャラリーがいっぱいいた方が盛り上がるだろうなぁって思って……」

「そ、そうか。そうだよな……」

健斗はハハッと引きつった笑いを浮かべてそう言った。寛太がそんな風な戦略を練れるわけがなかった。寛太のお調子者のところが偶然にも良い方向へと進んだだけなのだ。

「何だかなぁ～……こいつのおかげでサッカー部は救われたのかぁ～……」

「えっ？何々？俺って何？実は救世主なの？」

「調子乗んな、バカッ」

「痛いっ！」

健斗は寛太の坊主頭を叩いて大きくため息を吐いた。でも確かに寛太のおかげでもある。健斗が完全に力が尽き果てていたときに、寛太があんな風に応援してくれてなかったら……もしかしたら勝ってなかったかもしれない。

寛太の行動が健斗に大きく影響していたのもまた事実だった。だか

ら健斗はそのところは寛太に感謝していたのだ。

「……それだけじゃないけどさ。」

「え？」

ヒロが呟くようにそう言った。健斗はポカンとしてヒロを見る。

「前にも言わなかった？お前には、そういう人を惹きつける力があんだよ。」

「え……」

「お前に関わった人がみんな、お前のために何かをしてやりたいって思うようになる。不思議だけどな……人を惹きつけるんだよ。お前は。」

そのことを健斗は確かに前にも言われたことがあった。中学生のとき、神乃中サッカー部の人から、健斗のプレーを見ていると何だか自分も頑張りたいって思うようになる。だから頑張れるって……

自分にそんな力があるなんて考えたこともなかった。麗奈も昨日、色んな人と色んな繋がりがある。それが羨ましいと言われた。でも……健斗にとってはそれが当たり前だと思っていたのだ。

でも本当は違う。それは本当はすごく幸せなことなのだ。

だから健斗がくじけそうになったときも、負けそうになったときも、いつも周りのみんなが健斗を支えてくれていた。麗奈もヒロも、そして寛太や早川、佐藤……竜平さんもそうだ。

みんなが一つになって健斗を支えてくれている。だからこそ今日まで健斗は、今の健斗でいられたのだ。

今日の健斗があるのは、決して自分だけの力ではない。たくさんの人によって今日の健斗がいる。

今回のことを通じて、健斗はそれが一番よく分かった。だから……すごく嬉しかった。自ら独りになろうとしたときもあったけど……自分は本当に幸せな人間なんだな。それが実感出来た。

健斗はそんなことを考え、ふっと笑った。

「……と・こ・ろ・でぇっ？健ちゃん、今日が何の日だか覚えてる？」

「へっ？」

突然ヒロがトーンを高くしてケラケラと笑いながら言ってきた。するとヒロと寛太は顔を見合わせて、ニヤニヤと笑ってきた。

「次の時間割りは何かな♪」

「次？次は確か……英語？」

英語……

英語……

健斗ははっとした。英語と言えばまさか……

「あぁっ！！」

健斗は大声を思わず上げてしまった。顔が徐々に青ざめていく。するとヒロと寛太がニヤニヤと笑いながら、まるで健斗を見下してくるように言ってきた。

「そう。今日は待ちに待った“テスト返し”の時間だよ♪健ちゃん、もしかして忘れてたのかなぁ？」

気持ち悪い言い方で健斗にヒロがそう言ってきた。その通りだった。ここんところ、意識はすっかりサッカーの方に持っていかれていたから……そのこと自体をすっかり忘れていたのだ。

負けた方は剃髪……それが健斗とヒロの間に決めた罰ゲームだった。

ヒロと寛太は笑いながらハイタッチをする。

「健ちゃん、どの髪型にするか決めたぁ？もちろん僕は……ほらぁ。しっかり用意してあるからね？」

「僕も……ごらん。君が逃げないようにロープまで用意したんだから。」

ヒロと寛太がそう言いながら健斗に見せつけてきたのは、バリカンと服にかからないようにするやつ、そして……縄が一本だった。これはマジで逃げようがなかった。

「……お～、俺……保健室……」

「んんっ？もう遅いよぉ♪ほらぁ、先生が教室に入ってきたよぉ？」

「ひいっ！！」

寛太の言うとおり、教室の中に先生が入ってきた。みんなそれぞれ自分の席につき始める。しかし健斗はすぐに立ち上がって、先生の元に駆け寄った。

「せ、先生っ！」

「ん～？おーっ、山中ぁ。お前昨日は大活躍したそうじゃないかぁ。え～？お前サッカーすげー上手いんだなぁ？」

「そ、そんなことよりもっ！今日……テスト返し……」

「テスト返し？あぁ～！するよ？するする。先生な、もうお前らの解答を一つ一つ愛を込めて丸つけしたからなぁ。採点ミスなんて絶対有り得ないくらいだぞ。」

「そ、そんなぁっ！！」

愕然としている健斗の肩がポンポンと叩かれた。振り返ると、そこにはヒロがいた。慈愛に満ちた笑顔で健斗に言ってきた。

「座ろーよ。山中くん♪先生が困ってるじゃないか？」

「て……てめぇっ……」

「おう。そうだ。早く席つけつけー。テスト返しすんぞー。」

先生にそう言われて、健斗はがっくりと肩を落とした。自分の席に戻る最中、クラスのやつらが健斗に向けてクスクスと笑ってくる。みんなこのあとの結果がどうなるのか知っているからだ。

「よぉし。じゃあテスト返すぞ～？相田～！」

ついにマジで本当にテスト返しが始まった。健斗はその間顔を上げることが出来ないでいた。後ろでは寛太がニヤニヤしながら、ロープを構えている。みんなテストを返されて教室中はざわざわとしていた。

出来ない人、出来た人……みんなそれぞれなのだろう。もちろん健斗だって、出来た人の分類に入ったはずだが……それだけでは意味がない。

健斗は今の内に自分の大切な髪を触っていた。この自慢の髪型も、数分後にはおさらばなのだ。

「次～……真中ぁっ！」

「はぁ～～いっ♪」

元気な返事でヒロがテストを貰いに行く。そしてテストを貰い、自分の点数を確認した瞬間、ヒロは高らかに笑い声をあげた。するとクラスの男子たちがヒロの点数を見に行った。

「ヒロ、何点？」

「うわっ！やっぱお前すげーなぁ。」

「当然だよっ！ウワッハッハッハッハ♪」

そう言いながらヒロが健斗の席に近づいてきた。

「ワッハッハッハッハ♪いや～！参ったなぁ、山中くん。ごらん、僕の点数を。９８点ですよ。」

「きゅ……９８点……」

確かにヒロの解答用紙には９８という数字が刻まれている。完全にダメだ……

「ワッハッハッハッハ♪いや、本当は満点を取ったつもりだったんだがぁ……惜しいなぁ。ここでスペルミスをしてしまったみたいだね。でもまぁ……これで僕の勝利は確定した……かな？」

「も、もういいよ……それ以上言うな。心折れる……」

「おや、そうかい？ワッハッハッハッハ♪」

健斗は頭を抱え込んだまま消えるような声でそう言った。その間、ヒロは高らかに自分のテストを愛らしそうに撫でている。

するとだった。

「次は～……おっ！山中だなぁっ！」

健斗はビクッと体を震わせた。その瞬間、クラス中から笑いが起こった。取りに行きたくはなかったが、取りに行かないわけにはいかない。

健斗はふらつく足取りでクラスの人たちに叩かれながらテストを受け取りに行った。

「今回はよく頑張ったなぁ？」

「……どうも……」

頑張ったってヒロの点数を超えているわけではない。健斗はぶっきら棒に返事をしてテストを受け取った。その瞬間、ヒロと寛太がバリカンと服に髪がかからないやつとロープを持って健斗の元にやってきた。

「さて、では見せてごらん？君の点数を？」

ヒロにそう言われて、健斗は深くため息を吐いて折りたたまれたテストを広げた。そして自分の点数を見て、落ち込むようにため息を吐いた。

「……はぁ……９９点か……」

「そうかぁっ！９９点かぁっ！いやぁ～っ、でも惜しかったなぁ？９９点って……んっ？」

「んっ？」

「あっ……」

健斗はすかさず自分の点数をもう一度見た。右下に刻まれている点数は、どっからどうみても９９点だった。９４とか９６とかではな

い。紛れもなく、誰でもはっきりと分かる時で９９点と書いてある。

ヒロの点数は９８点……ということは……

「そ、そんなバカなっ！！」

ヒロは信じられないと言った顔で健斗のテストを奪い取った。滝のような汗を掻いて、健斗のテストと自分のテストを見比べる。どうやら採点ミスなどを探しているらしい。

「……ない……ない……ないっ……ないっっ……ないぃぃっっ！！」

ヒロが頭を抱えながらそう言った。するとすかさず健斗のテストを先生のところに持っていく。

「ちょっ！先生っ！これ何かの間違いでしょっ？」

「ん～？いや、採点ミスはないはずだぞ。全部愛を込めて丸つけしたからなぁ。」

「そ、そんな……はっ！」

ヒロは後ろに漂う殺気を感じた。おそるおそる後ろを振り返えると、そこには悪魔のような笑いを浮かべた健斗と寛太がいた。しばらくクラス中で静寂が続いた。

「……寛ちゃん？ＧＯ♪」

健斗の合図と共に寛太がすかさずヒロの体をロープで縛って逃げられないようにし、さらにその上から髪の毛が服にかからないように

するやつを被せた。そして健斗はすかさずヒロの手からバリカンを奪い取ってスイッチをつける。

あのブーーッという長いエンジン音がヒロにとっては恐怖の音に聞こえたことだろう。ヒロはあまりの恐怖に顔が引きつっていた。

クラス中がヒロを見ていた。

「ちょっ……ちょっと待て……お前ら……なっ？話せば分かる……だろ？」

「これから緊急オペを開始します。患部は患者の毛髪です。先生っ！お願いします。」

「オォッケイ～……」

健斗はスイッチの入ったバリカンを悪魔のような笑顔でヒロの頭に近づけた。

「ヒ、ヒロくん……負けたんだ……」

結衣が少し遠く離れた場所でその様子を窺っていた。結衣は麗奈の席の近くにいて、麗奈は興味なさそうな顔を浮かべていた。

「……あ、麗奈ちゃん、何点だった？」

「うん。」

麗奈は自分の点数を今見るらしく、自分の点数を確認した。するとその刻まれた点数を見て、麗奈は嬉しそうに笑った。

「あ、やったぁ♪見て？１００点っ！」

「えっ！うわ、本当だぁ。すごいね？」

「エヘヘ♪」

「本当に待って！ねぇっ！話せば分かるでしょっ！」

ヒロが泣きながら懇願してくる。しかし寛太はそれを見て健斗に向けて真剣な表情で言ってきた。

「先生っ！血圧が上がっています。早く処置しなくてはっ！」

「うむ……では始めるとするか……」

徐々にバリカンをヒロに近づける。ヒロはそのバリカンを見ながら、恐怖の顔を浮かべていた。

「……あ……あ……あぁ……」

その瞬間、ヒロの髪にバリカンが入った。ぞりっという気持ちのいい音がした。

「あ〝あぁぁぁぁぁ〜〜っ！！」

ヒロの悲痛な叫び声とクラス全体の笑い声、そして健斗と寛太の悪魔のような笑い声がしばらく教室中に響いていた。

第9話　新たなる決意　P．７０（後書き）

はいっ！

ということで第9話はこれにて終了させていただきます。

いや～……長かった……本当に作者は頑張った。でもそれ以上に読者のみなさんの方がここまで頑張って読んでくれたと思います。

この第9話、実は作者が一番心を込め、なおかつ丁寧に書きたいと思った話でした。

この話を分岐点に、健斗の生活も本当の意味で大きく変わるのです。

最初はどういう風に進めていこうかなぁって考えました。何よりもサッカーのこと、健斗が辞めた背景には色々な事情が纏まりついていたこと……それを少しずつ健斗とヒロは解決していく……これだっ！て思いました。

そして同時にその中で麗奈との通じ合い、健斗の気持ちの変化を織り交ぜようと考えました。きっと結衣派の人は残念って思ったかもしれませんが……やはり作者は健斗と麗奈で幸せになって欲しいと願ったのです。

さらに今回のことで、健斗はあることに気づきました。それは作中でも言っていた……“人を惹きつける力”

これは別に特別なことではありません。むしろその逆で、これは誰

にでも持ちうる、言わば共通した力であり……人間にしか持ち得ない不思議な力だと作者は思います。

つまり、「人は色んな人に支えられてるんだぞ」ということです。

例えばこの間センター試験というのがありました。懐かしいですね……作者も去年受けたのですが……

きっと受験生のみなさんの中には成功した人や、残念ながら失敗してしまった人もいるんではないでしょうか？

でも成功した人は考えて？そこまでの学力に到達したのは自分の力というのは確かにあるかもしれないけど、色んなことを教えてくれたのは先生とかではないですか？そしてセンター試験を受けられたのも、あなたの両親が高い金額を払ってくれたからじゃないですか？

失敗してしまった人も、あなたの周りの人が支えてくれてるんだから、まだ頑張れるよね？

作者が今回の話で通じて言いたかったのはそういうところです。それをみんなに感じ取ってもらえたら……と思います。

最後のオチはもう自分の実体験そのものです。

あのときは本当に僅差で勝ったんで、本当に嬉しかったです。健斗も同じ気持ちなんだろうなぁ……ヒロは可哀相だけど……

では続いては第１０話に入らせていただきます。

第１０話は……文化祭の話を書こうと思ってます。

それではそのときまでみなさんさようならぁっ！

中川健司

第１０話　文化祭　前編（前書き）

お待たせいたしました！ついに第１０話の始まりです。舞台は何と……文化祭っ！

第１０話のあらすじ

サッカー部の廃部も無事なくなり、穏やかな日々に戻りつつあった。
そして、学校行事の要である文化祭の時期になろうとしていた。
その一方、健斗は自分の本当の気持ちを受け入れつつも、なかなか素直になれないでいた。麗奈のことは好きだけど・・・それをどう伝えればいいのだろう。
そしてそんなある日、健斗はヒロの策略でなんと文化祭委員に任命されてしまう。しかもその相手はなんと・・・早川・・・？
甘酸っぱい気持ちを感じながらも、早川といっしょに文化祭を作り上げていく。
そんな中、麗奈は葛藤に悩んでいた。健斗と結衣が幸せになるために、自分のできることはなんだろう？
そしてある日を境に、麗奈は健斗に対して、ある決意を決めてしまう。それは、健斗への思いを断ち切るというものであった……

＊文化祭編は、前編と後編で分けたいと思います。ごらんください！

第10話　文化祭　前編

「ギャハハハハハハッ！！」

「アッハッハッハッハッハ♪」

「アヒャヒャヒャヒャヒャッ！！」

「アハハハハハハハ♪」

「……」

クラス中で笑い声が響いていた。誰もが笑いを抑えきれず、笑っている。

その中でも特に笑っていたのが、山中健斗（やまなかけんと）だった。そして健斗の隣では、林寛太（はやしかんた）が笑い転げている。

「アヒャヒャヒャヒャヒャ！！や、ヤバいッ……死ぬっ！！笑い死ぬっ……アヒャヒャヒャヒャヒャ！！」

「う、うるせーっ！！笑うんじゃねぇっ！！」

笑いの対象とされていたのは、真中比呂（まなかひろ）だった。ヒロは顔を真っ赤にして、目の前で笑い転げている健斗と寛太に向かって怒鳴りつけた。

何をそんなに笑っているのかというと……そう。健斗が今日の朝、学校に来てヒロの姿を見たときがきっかけだった。

ヒロは何と、剃髪を試みたのである。約束通り、寛太と同じで三ミリの坊主頭になっていた。ヒロとは長い付き合いだが、ヒロの坊主頭なんて見たことなかったし、今までとのギャップが大き過ぎて健斗は笑いがこらえることが出来ないというのが今の状況である。

そもそも、何故ヒロが坊主頭にならなければならなかったのか……そこにはちょっとした事情がある。

今日より一週間前、英語の二学期の中間テストがあった。そこで健斗とヒロは、ついノリで勝負をしたのである。

点数の負けた方が寛太の頭をリスペクト――すなわち、坊主にするという内容だ。その結果、見事健斗はヒロに勝利し、ヒロは坊主頭決定となったのである。

本来なら勝者である健斗が敗者であるヒロの頭を剃るはずだった。だからテストを返され結果が決まった瞬間、健斗は即座にヒロの頭を剃ろうとしたのだが……

ヒロは必死に主張してきた。絶対に床屋にいってちゃんと剃ってきてもらうから、頼むから今剃るのは止めてくれ……と。

健斗だってそこまで鬼ではない。確かにど素人の健斗が剃るより、プロの人に任せた方が出来映えがいいと踏んだのである。

そこで健斗はヒロに条件をつけて身を引いた。三日以内に剃ってこなかったら、今度こそ自らの手でお前の頭を剃ってやると。そしてそれから三日後にヒロは約束通り、頭を丸めてきたのである。

命令したのは健斗だ。しかし申し訳ないが、死ぬほど似合ってなかった。

それにしても、本当に……ただの野球部にしか見えない。

「アッハッハッハ♪いやーっ！もう、本当最高っ！お腹いっぱいっす、先輩っ！」

「うるせーっ！つーか何でてめぇまで笑ってんだよっ！」

ヒロが怒鳴りつけるように床で笑い転げている寛太にそう言った。

寛太は涙を拭きながらようやく立ち上がった。

「アハハ……いや、アハ……マジ、ちょっ……プククク♪に、似合ってないっ……」

「ね、ねぇっ？やっぱり？そうだよね？似合ってないよね？あ～っ！！もうっ！！」

ヒロは苛立だしげに自分の頭を撫でる。その様子を見て、健斗はさらに耐えきれなくなって大笑いを繰り返した。

するとだった。

「おはよー♪」

「おはよう。」

健斗たちが笑っていると、教室の中に入ってきたのは佐藤愛美（さとうまなみ）と早川結衣（はやかわゆい）だった。二人とも、健斗やヒロの親友と呼べるほど深い仲が

あった。

特に早川はつい最近まで、健斗の意中の人だったはずなのだが……いつの間にかそれも変わっていた。

「さ、佐藤っ！早川っ！ちょっ……こっち来てみっ！」

隠れようとするヒロを寛太が抑えつけて、健斗はすぐに二人を呼んだ。佐藤と早川は鞄を自分の机に置くと首を傾げて健斗たちに近づいてきた。

「何？どうしたの？」

「……これっ……プククックッ……」

「え……？あ……」

「あ……」

二人とも、ヒロの姿を見て仰天していた。ヒロは涙目になっていて、二人と目を合わす。少しの間、三人の間で沈黙が流れた。

「……プッ……プククックッ……アッハッハッハッハッハッハッ！！」

「アッハッハッハ♪アッハッハッハ♪」

佐藤と早川は次第に耐えきれなくなって、ヒロの目の前で大笑いをした。佐藤は腹を抱えて大笑いして、早川も普段ここまで笑わないぞっ！っていうくらいに笑っていた。

二人に笑われて、ヒロは愕然としていた。

「アッハッハッハ♪何やってんのっ？あんた？ほ、本当に坊主にしたんだぁっ？」

「うるせーっ！！仕方ねぇーだろぉっ！！」

「アッハッハッハ♪朝から何見せてくれてんのよっ？しかもぜんっぜん似合ってないし。」

「ちょっ、ちょっとマナ。そんなこと言ったら……アハハハ♪か、可哀相だよぉっ♪」

「早川……笑いながら言われても嬉しくねぇぞ……」

「あ……ご、ごめん。でも……アッハッハッハ♪」

笑いが止まらないらしい二人はそのまま数分笑い続けた。健斗と寛太もようやく収まってきたはずなのに、それにつられてまた笑い始めてしまった。

「ダメだっ！ヤバい……おい、ぶーちゃんっ！」

「ほいっ？」

健斗が名前を呼ぶと、体が大きくて……あまり大きな声では言えないがデブっちょの男が健斗たちに近づいてきた。こいつが相撲部に所属していて、このクラスで坊主頭であるぶーちゃんだ。このクラスで坊主頭なのは寛太とぶーちゃん、そしてヒロだけだった。

「ちょっ……ぶーちゃんはここに並んで……寛太っ！お前はこっち。でお前が真ん中で……プッ……アッハッハッハ♪」

「アッハッハッハ♪アッハッハッハ♪」

「アハハハハハハ♪アハハハハハハ♪」

「だ、団子三兄弟だっ！！団子三兄弟と命名しようっ！！アヒャヒャヒャヒャヒャ♪」

健斗の配置により、見事な頭が丸い三兄弟が揃った。なかなか見られない光景に、クラスのみんながケータイのカメラを使って写真を撮る。健斗はもう、腹筋が痛くなるくらい笑っていた。

「ね、ねぇっ！もうやめよっ？俺……この先どうすればいいの？一生笑われ続けなきゃいけないの？」

「あぁ。そうだよ。だってお前、あんだけ豪語しといて俺に負けたんだから。お前は一生この先、こういう感じで行くからな。」

「しょ、しょんなぁっ！！」

ヒロががっくりと肩をすくめた。まぁ、一生ということはないだろうが、しばらくこのネタでヒロのことをいじれるのは確定的だった。

「あ、そういえば麗奈ちゃんは？」

早川が健斗にそう聞いてきた。健斗は笑いながら、「あぁ。」と小さく呟いて頷いた。

「今日は朝、別々だったよ。なんか朝練があんだって。だから音楽室とかにいんじゃない？」

「それじゃ麗奈ちゃんはもうしばらく来ないってことだなっ！」

ヒロはガッツポーズをしてそう言った。

「だったら今の内に帽子被っておかなきゃ――」

「おはよー♪」

ヒロがそう言っている途中に、その声が響いた。噂をすれば影とはこのことだ。ちょうど教室に入ってきたのは、大森麗奈（おおもりれいな）だった。

麗奈はご機嫌そうに自分の席に鞄を置いた。そして、何やら健斗の席周辺に人が集まっていることに気づいて、不思議そうに近づいてきた。

「どうしたの？みんな。何をそんなに集まってる――」

麗奈はヒロの姿を見て、言葉を止めた。しばらく唖然として、ヒロと目が合う。ヒロは麗奈と目が合った瞬間、大量の涙が目から零れ落ちた。

「ヒ、ヒロくん？」

「うぅ……」

「……プッ……アッハッハッハ♪アハハハハハハハ♪アッハッハッハ♪ど、どうしたの？な、何で？……あっ！そっかっ！アッハッハ

ッハ♪」

「だろ？最高だろっ？アッハッハッハ♪」

事情を即座に理解した麗奈が大笑いしはじめると、やはり周りもつられて笑ってしまう。再び教室中で笑いの渦が巻き起こった。ヒロはもう半分死んだ顔になっていた。

「アッハッハッハ♪でもヒロくん、結構似合ってるよ？」

「ほ、本当っ？」

麗奈がそんなこと言うので、ヒロの表情に活気が戻った。麗奈は笑いながら大きく頷いて見せる。

「お前どこがだよ。全然似合ってねぇだろ？」

健斗が笑いながらヒロを指差す。するとヒロの顔はまた暗い表情に戻った。しかしそれに反論するのは意外にも麗奈だった。

「え～？そんなことないよ。男らしくて格好いいと思うけどなぁ？」

「麗奈ちゃん……麗奈ちゃんだけは俺の味方だよーっ！」

「きゃっ！」

ヒロは感激のあまり麗奈に抱きつこうと飛びかかった。だが、それを阻止したのはすぐさま反応を見せた健斗と佐藤だった。健斗がヒロの顔を手で抑えつけ、佐藤がその上から叩きつける。見事なコンビネーションプレーでヒロは床に付した。

「「調子に乗るなっ！」」

健斗と佐藤が声をはもらせた。その光景が何とも面白く、再び笑いの渦が巻き起こった。その笑いの渦の中心に立っているのは、間違いなくヒロであった。

第１０話　文化祭　前編（後書き）

はい。作者はここんとこは誤魔化しませんよぉ（笑）

これからはヒロは坊主頭としてのイメージをとってもらえたらと思います。

ところで、現在第２回人気投票を実施中です。

本当にお願いしますっ！まだ投票をしていない方、お願いします！

あなたの好きなキャラを作者に教えてっ！

作者はあなたの清き……３票を心から待っています。毎日ドキドキしながら待っていますっ！

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．２

「はぁ～……あ～あ、俺の自慢の髪がぁ……」

「大して長さ変わんないだろ？」

ようやく笑いが納まり、一時間目を終えた休み時間に、ヒロは手鏡を見ながらそうため息をついていた。

元々ヒロは髪は短い方だったから、長さからしたらそこまで変わるものではないと思った。もちろん、感覚的にはだけど……でもヒロは自分の坊主頭を見ながら憂鬱そうに深くため息を吐いていた。

「めちゃくちゃ変わったよ。俺じゃないみたいだ……」

「まぁなぁ……それはある。」

「第一未だに信じられないしっ……お前に負けたなんてさ。出来なかったんじゃなかったの？」

「いや……まぁ……」

ヒロにそう言われて、健斗は困ったように曖昧に返事をした。確かに、ヒロの言うとおりだった。

正確に言えば、出来なかったという感覚すらなかった。出来栄えが自分でもよく分からなかったのだ。あの日、佐奈さんを見送りに行くために朝早く起きたものの、そのあとテスト中に激しい眠気に襲われた。

そのため、自分がどのように記入したのか全く覚えてなかった。だから完全にヒロに負けたと思い込んでいたのだ。

しかし、何と奇跡的に健斗は自己最高記録を叩き出した。無意識のうちに引き出された英語の力は我ながら感服の値に相当する。あの、模試の結果は紛れでも何でもなかったのだ。

「健斗っ！ヒロッ！」

そんなことを話しているところに、近寄ってきたのは佐藤だった。佐藤は手に教科書や何やらを持っていた。

「次音楽だから、移動しよっ！」

「え？あ、そうだっけ？」

「そうだよっ！早く早く♪……プッ……」

「お前はいつまで笑ってんだよっ！」

ヒロが怒鳴りつけると佐藤は耐えきれなくなったのか、再び声を上げて笑い始めた。どうやら佐藤にとってはツボだったらしい。その気持ちは充分よく分かる。

健斗は軽く笑いながら机の中に入っている教科書類や何やらを手に持った。

「ほら、早く行こうぜ。」

健斗がそう促すとヒロは不機嫌そうにブスッとしながら、同じように教科書類を手に持った。そして三人は教室を出て、この学校の音楽室に向かうため階段を上っていった。

実技という教科は、三つある。音楽、美術、そして書道だ。これらは選択制になっており、この学校に入学する際にあらかじめ決めておく。

この実技教科は二年の後期まであるから、結構慎重に選ばなくてはならない。

とは言っても、健斗は即座に音楽を選択した。理由は至って単純で、一言で言えば他の教科が駄目だからである。あまり絵とかは得意じゃないし、書道なんて持っての他だ。あれは小学生のときに墨を零して大変な目に合ったことがある。もう二度とやるつもりはない。

そうなったら残ったのは音楽だった。音楽は健斗からしたらむしろ得意でもある。それに、もしかしたら三つの中で一番楽なのではないだろうか、とも思っていた。

音楽がいっしょなのは健斗、ヒロ、佐藤だった。麗奈と早川は美術の方である。吹奏楽をやってるんだから、音楽にすれば良かったのに……と健斗は麗奈に言ったことがあった。しかし麗奈はそれを受けて……

『ん～……まっ、美術も面白そうだから。別にいいやぁ♪』

何という風にいつもの調子で言ってきた。何ていうか……本当に能天気のネコ型娘である。そこがあいつの良いとこでもあるし、ある意味悪いところでもある。

「それにしても、本当に笑えるわよねー。どうせならいっそのこと、出家でもすれば？」

階段を上りながら佐藤がからかうようにそう言った。出家という言葉に可笑しさを感じて、健斗は思わずプッと吹き出してしまった。するとヒロは「ふんっ！」と不機嫌そうな表情を浮かべて言った。

「何とでも言えっ！俺は今日からこういう感じで行くからな。」

「ずっと坊主ってこと？」

「ちげーよっ！もちろん頑張って伸ばすけど、しばらくはこういう感じで過ごしていくってことだよっ！」

「あっそう。」

「まぁ、坊主なんてそんなに珍しいものじゃないし。すぐに見慣れるもんだもんな。俺、何かもう慣れてきたもん。」

「十年近くも一緒にいるくせに、それもそれでちょっと寂しいわよね。」

確かにそう言われるとそうかもしれない、と思い健斗は苦笑いを浮かべた。でも健斗はこういう環境の変化にはすぐに順応する方だ。麗奈のときもそうだったし、容量がいいともとれる。

無関心……本当はこれかもしれないが……

「何だっていいっ！どうせなら坊主キャラとして定着してやるよっ

！」

「急に開き直ったわね……」

「麗奈が言ったからだろ……」

「あ♪バレた？」

ヒロがニヤリと笑ってそう言った。佐藤は納得するように頷くと呆れるように大きくため息をついた。健斗も全く同じ気持ちだった。

「だってさぁ？男らしいって言うんだぜ？それに似合ってるって言ってくれたしぃ～♪麗奈ちゃんがそう言ってくれるんなら、坊主も悪くないかなぁって思えるわけよ♪」

「あいつは他のやつと感性がズレてんだよ。正直マジで似合ってないし。」

「うんうん。それは同感。」

「何でそういうこと言うかなぁっ？」

「いや……だって事実だし。」

健斗が苦笑いを浮かべながらそう言うと、ヒロは憂鬱そうに大きくため息を吐いた。

「はぁっ……何とかして髪を伸ばす方法はないかなぁ……」

「あっ。あたし知ってるよ？」

「お前のはアテにならんからいい。」

「はぁっ？せっかく人が良いこと教えてあげようと思ったのにっ！」

「だったら言って見ろよ。」

ヒロがそう言うと、佐藤は得意そうな顔を浮かべてその良いことやらを口にした。

「ひじきやワカメとか食べると髪の毛が伸びるのよ。」

「はぁっ？何だよそれ。何ゆえに？」

「それは知らないけど……カルシウムやミネラル豊富なものを食べると脱け毛予防になるって聞いたことあるし。」

「あ、それなら俺も知ってる。」

「ウソォッ？」

ヒロが驚いたような顔を見せた。確かに健斗もどこかでそのような話を聞いたことがあった。ひじきやワカメはミネラルやカルシウムが豊富だから毛根が強くなったり、一気に増えるとか何とか……

「本当だよ。いや、本当かどうかは分かんないけど……でも俺もそれ聞いたことある。」

「でしょっ？ほらぁっ！」

「マジか……よっしゃあっ！そうと分かればさっそく明日からひじきとワカメを食いまくってやるぜっ！」

「良かったな。勝手に頑張れよ。」

そんなことを話していると、健斗たちは音楽室の前まで来ていた。音楽室に入ると、いつものようにたくさんの生徒が集まっていた。

実はこの実技の時間、そしてあと体育の時間だけ他のクラス――すなわち、ＢクラスとＣクラスと合同でやるのだ。そのため普段あまり見ないやつとかがこの教室に集まっている。

「おっ！山中ぁっ！」

健斗たちが音楽室の中に入ると、ある生徒が健斗たちに声をかけてきた。健斗はすぐにそれに気がついて、声のする方を見る。すると、二人の生徒が健斗たちに近づいてくるのが分かった。

一人は、山下久哉（やましたひさや）。ルックスが結構いい方で、背は健斗と同じくらい。サッカー部の部員である。同じ一年だった。何となく全体的にチャライ雰囲気があったが、根は良いやつらしい。

もう一人は守田剛（もりたごう）。名前の通り、厳ついやつだ。背も高く、というより全体的に何だかでかい。いつも無表情で笑っているのか、怒っているのか区別がつかないし、何よりほとんど無口なやつだ。初めて会ったときは年上だと思ったが、同じ一年らしい。こいつもサッカー部の部員だった。

二人とも高校に入って初めて知った顔、というよりあの日の試合がきっかけで知り合った。今では普通に話せるようになっている。

「山下と剛じゃん。お前ら音楽だったのか？」

「……うっす。」

「あ、ヒッデー。今頃気づいたのかよ。俺はお前らのこと前から知ってたぞって……あの、あなた誰？」

山下が唖然とした様子でヒロを見る。ヒロはむっとした表情になった。

「俺だよっ！」

「俺って……ちょっ……真中さんっすか？え～……何やってんの？お前……ど、どういう了見で？」

山下がヒロを引いた目で見ながらそう言ったので、側にいた健斗と佐藤が耐えきれなくなってプッと吹き出して笑った。再び笑われたことや、こういう反応を受けてヒロは苛立だしげに言った。

「うるせーっ！成り行きでこうなったんだよっ！」

「どんな成り行きだよ……ま、まぁ、いいや。でもお前、全然似合ってねぇぞ？」

山下にそう言われて、ヒロは落胆するような顔を浮かべた。その一連の流れに耐えきれなくなり、健斗と佐藤は再び笑い出した。ヒロは側でガックリと肩を落としている。

「いやさぁ、それにしてもこの間の試合はマジすごかったよなぁ？うちのクラス――あ、Ｂだけどさ、もうその話題で持ち切り。なっ？剛。」

「……うっす……」

「ふ～ん……」

「俺なんかもう女子からの人気が半端なくってさ、マジ参っちゃうわ～？」

「そりゃ良かったな。」

健斗はまるで他人事のような感じで呟いた。率直に言えば健斗はそういう類のものにあまり興味を示さない方だった。

でも山下の言うとおり、ここ最近の話題はそればかりだった。それほどすごい試合になったというのは事実ある。考えて見れば、前半であれだけ差をつけられたのにも関わらずそこから一気に逆転して見せたのだ。

もちろん、逆転勝ちしたのは健斗とヒロの力が大きく関わってるかもしれないけど、でもそれが全部ではない。あのとき全体的に神乃高の力が一段上がった。負けたくない、諦めたくない。人の思いというのは時に限界以上の力を発揮する。

健斗が興味なさげに言うと、山下が健斗を小突いてきた。

「何、他人事みたいに言ってんだよ。言っておくけど、お前が一番

すごいんだからな？」

「……は？」

「いや、だから、女子からの人気。うちのクラスで今お前のことが結構話題になってる。隠れファンとかもいるんじゃね？」

「あ、それ確かにそうかもね？」

佐藤が便乗して健斗にそう言ってきた。

「昨日とかも友達にね、“山中くんって彼女とかいるの？”とか色々聞かれたもん♪やるね～？」

「し、知るかよ……そんなもん……」

「ねぇっ？俺は？俺のことは？」

ヒロがその話を聞きながら焦るように佐藤に聞いた。佐藤はそれを受けて首を傾げて、わざとらしい言い方で答えた。

「あんたは～……特に何もなかったかなぁ？」

「そ、そんなっ！」

ヒロがショックを受けたような表情を浮かべて、またガックリと肩を落とした。何だか哀れに見えたが、同情すると調子に乗るから今はほっておこう。

「まっ！あたしはちゃんと“健斗はやめておいた方がいいよ。”っ

て答えたけどね？」

「……何で？」

健斗が不思議そうに聞くと佐藤がニヤリと笑って言ってきた。

「あんたにはもう、“誰かさん”がいるでしょ？」

「え……あ……」

佐藤のその言葉を受けて、健斗は一気に顔を赤く染めた。その誰かさんというのは間違いなく……

「あ、お前っていえばあれか？あの～……A組の大森。あれとお前付き合ってんのか？」

「バッ……ちげーよっ！」

健斗は顔を真っ赤に染めて反論した。確かにそう見えるかもしれないが、事実はそうである。健斗と麗奈の間に、付き合っているというそういう間柄はなかった。

「え～？だってお前ら毎朝いっしょに来るし、ほぼ毎日いっしょに帰ってるだろ？しかも二ケツでさ。付き合ってんじゃないの？」

「それは……その……」

久しぶりにそういう言われ方をしてしまい、健斗は上手く反論することが出来なかった。いや、そもそも反論する必要はないのかもしれない。

以前は本当に違うから、こういう話になると真っ向から否定をした。
でも今は事情が違う。

健斗は本当に……麗奈のことが……

「あんなに可愛い子といられるなんていいよなぁ～？今年の“ミス”は俺的に大森に決定だな。ほぼ間違いなく。本当に、羨ましいよなぁ。」

「……」

「……否定しないんだぁ……？」

佐藤が囁くように健斗に言ってきた。それを受けて健斗はばっと振り返る。また健斗の顔が熱くなるのを感じた。佐藤は可笑しそうにクスクスッと笑っていた。

「お、俺は……あいつとは何でもねぇよっ！」

ついムキになってそう言ってしまう。やっぱりこういう感じは苦手だなぁ、と健斗が思っていると授業が始まるチャイムが鳴った。

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．２（後書き）

人気投票を受付中です！

みなさんからの投票をお待ちしています！

ドシドシご応募ください！

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．３

「あっれー？変だなぁー？上手くかけないー」

麗奈は目の前のキャンパスを眺めながら、ぼやくようにそう言った。
一時間目は実技科目の芸術の時間で、麗奈は美術を選択していた。
夏休みが明けてから、自画像をキャンパスに描いていくというのをやっている。自分で撮った自分の写真を元に描いていくのだが、これが中々難しい。

「結衣ちゃん、どう？上手く描けてる？」

麗奈は自分のものと見比べるために、結衣に話しかける。麗奈と結衣は他の三人と違って、美術を選択したのだ。結衣は困ったように笑った。

「うーん……正直上手く行ってないなぁ。」

「えー？でも、私のよりは全然いいじゃん。ほら、見てよ。」

そういって、麗奈は自分の書き途中の絵を結衣に見せる。結衣はそれを見て、１、２秒見ると苦笑いを浮かべた。

「これは……確かに……ひどいね。」

「むぅ～……私ってこんなに目、釣り上ってるかな？」

「麗奈ちゃんの目はもっとまん丸だよ。子猫みたいに。」

「じゃあ、目を直せばいいのかな？」

「うーん……そういう問題じゃないと思うけど……」

麗奈の絵について、二人で談義をしているところ、その目の前で黙々と絵を描き続ける円をみて麗奈は言った。

「円ちゃんのはどんな感じ？」

「え？あたしのは……こんな感じだけど。」

そういって円は自分の絵を麗奈と結衣に見せてきた。その絵を見て、麗奈と結衣は揃って驚きの声を上げた。

「何これっ！？」

「うまぁっ！写真みたい！」

「え、そうかな？」

麗奈と結衣の反応に対し、円はきょとんとして首を傾げた。明らかにこちらとあちらでの温度が違った。

円の絵は見事な出来栄えだった。もちろん、まだ未完なのだろうが、その絵はまるで写真をそのまま張り付けたかのようなものだった。影の色や、瞳の中の光具合も、全てリアルに描いている。

「えっ？すごい、すごい！何でこんなのかけるの？私のなんか、こんなんだよ？ほら。」

この絵を見たあとに麗奈の絵を見返してみると、それは愚の骨頂の傑作品以外何物でもなかった。健斗がいたなら……「何だ、これは。地底人か？」なんて言われて馬鹿にされるだろう。麗奈は一生懸命描いたというのに、あのデリカシーなしなら必ず言うだろう。

「うーん……ちょっと貸して。」

円がそう言ったので、麗奈は何も言わず素直に自分の絵を円に渡した。

「ここをこうして……目ももっと丸くして……それで、影も濃くして……ほら、どう？」

円はささっと麗奈の絵を直していった。見せられた絵は、先ほどに比べると劇的に良くなっていて、麗奈と結衣は感嘆の声を上げた。

「すごーい！これ、私になったよ！」

「確かにこれはすごいね……」

「何で何で？円ちゃん、何でこんなに絵が上手なの？」

麗奈がはしゃぎながら聞くと、円は少し照れるようにはにかんで笑った。

「あたし、中学のとき美術部だったの。」

「え？円ちゃん、吹奏楽部じゃなかったの？」

「正確に言えば、掛け持ちかな？神乃中の美術部はすごい緩かったの。だから、吹奏楽部に本腰を入れて、絵は趣味で描いてただけ。」

その説明を受けて麗奈が納得していると、結衣が思い出すような言い方で言った。

「そういえば、円ちゃん、結構絵の方でも表彰されてたよね？」

「うそ！本当に？」

確かにこのくらいクオリティーが高ければ、表彰されても可笑しくないだろう。麗奈が驚きで興奮していると、それを宥めるように言った。

「あ、あんなの大したことなかったんだよ？ちょっと審査員の人の目にひっかかっただけで、別に金賞とかじゃなかったし。」

「でも表彰されるのはすごいよ！いいなー、そういう特技って憧れるなぁー♪」

麗奈が羨望の眼差しを円に向けると、円は照れてるのか頬をほんのすこし赤らめた。

すると、結衣の方から「ボキッ！」と乾いた音が鳴った。

「あ……鉛筆折れちゃった……私、ちょっと削ってくるね。」

結衣はそう言うと、鉛筆を持って教室の前の方へと向かっていった。自動鉛筆削り機が教壇の横にある。麗奈と結衣、そして円の三人はいつも揃って後ろの方でグループ化してる。だから鉛筆が折れたら、

わざわざ教室の前の方まで行かなくてはならない。

「高校では美術部に入らなかったの？」

麗奈が自分の作業を進めながらそう言った。すると、円の手が一瞬止まった。

「ここにも美術部あるでしょ？別に吹奏楽部と掛け持ちでやれないことはなさそうだけど……」

「えっと……それはね……」

円は何となく言いにくそうな様子だった。麗奈は単純に、何の意図ももたずに聞いただけに、円が返答に困惑するのは予想外だった。

「こ、高校では……その……吹奏楽部一筋でやりたかったの。何か……中途半端で嫌でしょ？掛け持ちなんて。」

「……ふーん……」

他にも何か理由がある。円の表情や仕草から分かる。でも、それをわざわざはぐらかすということは、何か言いたくない理由でもあるのだろう。だから麗奈はそれ以上何も言わないことにした。

「……そういえばさ、この間の試合、すごかったね。」

円がつぶやくようにそう言った。麗奈はそれを聞いて、作業する手を止める。

「あー、うん。ねー？本当に、よく勝てたよね

。」

この間の試合というのは、もちろん、サッカー部のことである。あれは麗奈がこの学校に来てから、最大級といってもいいくらいの事件だった。松本事件なんて、比にならない。

健斗がもう一度サッカーをやる。そう聞いたとき、麗奈はとっても嬉しかった。健斗がそう決意したということはすなわち、翔の死を本当の意味で乗り越えることができたということ。

でも同時にとても不安だった。麗奈にとって、健斗がまた苦しい思いをするのは見たくはなかった。それは、健斗が可哀想だったから……それもあるかもしれないが、麗奈にはそれ以上の気持ちがあった。そのことはまだ誰も知ることがない。

とにかく、健斗は見事試練を乗り越えることができた。本当にすごいことだと、麗奈だから分かる。

今じゃ、すっかりサッカー少年に戻っている健斗。毎日本当に頑張っているらしい。そして何より、健斗は以前よりよく笑うようになった。それは、つまり……純粋な心……健斗が中2以来失ってしまった純粋な心を取り戻したということなのだ。

「うち、びっくりしちゃったよ。みんなより遅れてきたから、最初は何事かと思って。」

「うん。私もあんなに大事になるとは思わなかった。」

しかし、あれだけ大事になったことが逆に良い方向に傾いたのだ。

「でもそれより……一番驚いたのは、山中くんがまたサッカーを始めたってこと。」

「え？」

円がそう言ったのを聞いて、麗奈はまた絵を書く作業を止めた。

「山中くん、もう絶対にサッカーはやらないと思ってた。それだけに、あのときは驚いたなー。」

「そっか。円ちゃんは全部知ってるんだよね？」

円と健斗は小学校からずっと一緒だって聞いた。ということは、円は健斗が昔はサッカー少年だったということを知ってるし、そんな健斗の身に何が起きたのかも全部知ってるということである。その分、驚きも大きかったことであろう。

「全部というか……なんとなくは分かるよ。うちらにとってもね、やっぱり衝撃的だったの。」

「健斗くんってそんなにすごいサッカー好きだったんだね。みんなに心配させるくらい。」

麗奈がそう言うと、円は首を横に振った。

「そうじゃなくって、その……翔くんのこと。」

「あ……」

麗奈は声を出せず、円を見つめた。円は笑みを浮かべていたが、そ

れはどことなく悲しいものだった。

「本当に急だった。いつもと変わらない日常だったはずなのに、それが一気に崩れていくような……そんな感じだった。」

円は翔の死報を聞いたのは、その晩の連絡網を通じてのことだった。突然のクラスメイトの死に、円は酷く頭を打ち付けられたような気になった。

「すごくショックだった。うん……身近な、自分と同い年の子が死ぬなんて、考えたこともなかったから……」

「……円ちゃんは、翔くんと仲良かったんだね。」

麗奈がそう言うと、円は少し笑みを浮かべた。

「仲がよかったというか……やっぱり小学校もいっしょだったし……でも、うん、仲は良かったかな。」

「へぇー……」

「でもそれ以上に、一番仲良しだったのが、山中くんだったの。」

その仲良し振りは他の人の目から見ても、目に余るほどだった。それに、健斗と翔、そしてヒロの三人はクラスでも常に中心にいる存在だった。

「だから、すごく心配だった。山中くん、相当精神的に来てるって。でもまさか、サッカー部を止めたって聞いたときは、あの山中くんが!?って、ちょっと事件になったよ。しばらくサッカー部の人た

ちともめてたし……」

そのことは、健斗から直接聞いた。サッカー部を止めるとき、ノブという人と殴りあいにまで発展したと聞いたから。

「うちらの中でも、翔くんのことはタブーって感じになってた。うちらにとっても、悲しい出来事だったし、何より山中くんたちのためにって。暗黙の了解的に、いつの間にかなってたんだ。」

「……そうだったんだ。」

確かに今まで円やナッチャンからこの話を聞いたことはなかった。それどころか、いつもいっしょにいるはずの結衣からも聞いたことがない。結衣は翔のことが好きだった。だから、翔のことをもう思い出したくないという気持ちから話そうとはしなかったんだろう。だが、それは結衣だけではなく、翔の友人みんながなんとなくそれに触れたくはなかったのだ。それほどもまでに、翔の事故死はほかのみんなにとってもショッキングな出来事だったに違いない。

その気持ちは十分にわかる。人の死に直面することの恐ろしさを、麗奈はもう十分というほど知っている。

「でも、山中くんが昔のように戻ってきたのは、やっぱり麗奈ちゃんがこの町に来てからだと思うの。」

急に円にそんなことを言われ、麗奈は照れるように笑った。それはヒロにも、そして結衣にも言われたことだった。自覚はなかったが、円にまで言われるとは思わなかった。

「山中くんは、きっと……麗奈ちゃんにすごく感謝してると思うよ。

」

「……そうかな……」

確かに、あの日の夜……健斗にお礼を言われた。麗奈のおかげでようやく決意が固まったって。

そして、健斗はこれを渡してくれた。翔が使っていたという、スポーツブレスレットである。健斗のとは色違いのやつだ。白に緑色のラインが入っていて、麗奈のサイズにもピッタリである。麗奈はこれをいつもつけるようになっていた。健斗に持っていてほしいと言われたからだ。

麗奈はそれに触れながら、健斗のことをなんとなく考えていた。

あの日の出来事から、健斗と麗奈の関係は大きく変わったのだろうか。健斗は麗奈のことを、家族以上のつながりがあると言ってくれた。それはどういう意味なのか。深い意味はないのかもしれないが、それは麗奈がずっと望み続けてきたことのはず。しかし……健斗は、結衣のことが……

「……羨ましいな……」

円がぼそっとそう言った。しかし、その言葉は麗奈には届かなかった。

「え？何か言った？」

「……ううん、何でもない。」

円は笑顔で首を横に振って、自分の絵の作業に取り掛かった。麗奈は円を見ながら、ふっと笑って、同じように自分の絵の作業に取り掛かるのだった。

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．４

「カーーローミオベーーンッ！クリーーリーアルメーーンッ！」

「だぁっ！うるせぇっ！」

健斗が苛立って隣で歌っているヒロに向かってそう怒鳴りつけた。今は音楽の時間で、課題の練習中だ。何か、どっかのドイツか何かの歌らしい。それが来週に実技テストをするからということで、今必死に練習中だった。

なのに、この隣にいるやつはやかましくて仕方がない。

「ヒロ、音程ズレ過ぎっ！あんた歌もちゃんと歌えないのっ？」

佐藤が抗議の意図を持ってヒロにそう言った。するとヒロはむっとして佐藤に言い返した。

「うるさいっ！俺は俺なりに必死にやってんだよっ！」

「周りに迷惑かけんなよな。お前ちょっと向こう行ってやれ。」

健斗が指差すとヒロは大きくため息を吐いた。

「そうやってみんなして俺のことをバカにすんだ……うぅ……ちくしょーっ！もう孤独の世界に陥ってやるっ！」

ヒロはそう言うと拗ねるようにしてどこかへと消えてしまった。そんな様子を、山下が見ていて苦笑いを浮かべながら健斗たちに言っ

てきた。

「い、いいのか？あれ……」

「ん？あぁ……いいんだよ。今日あいつずっとうるさいんだ。やっと静かになったって感じ。」

「あっ……そう？」

「それより、どこまでやったっけ？」

佐藤が楽譜を広げながらそう聞いてくる。健斗は佐藤の楽譜を見ながら、指を使って指し示した。

「ここだな。この部分から……～～♪～～♪～～♪～～……か……」

「え？今の何？」

健斗が鼻歌を交えて音程を取ったので佐藤が驚いたような表情を浮かべた。健斗はきょとんとした表情でそれに答えた。

「え？いや、だからこの部分だって。」

「そうじゃなくって。健斗、楽譜読めるの？」

「え？あ、まぁ、ある程度なら……」

「マジで？スッゴーい。そういえば健斗って、結構歌上手いもんね？どっかの誰かさんと違って。」

そう言われて、健斗は照れくさそうに鼻の辺りをポリポリと掻いた。

「そ、そっかな？」

「そうだよ。ねぇ、今度みんなでカラオケ行こうよ？あたし健斗の歌聞きたいしぃ。」

「いや、歌ならこいつの方がやべぇぜ？」

山下がそう口を挟んできた。健斗と佐藤は驚いたようにしてそれを見ると、山下は剛のことを指差しながらそう言った。

「こいつの歌唱力はマジで神。」

「本当かよ？」

「本当だって。剛、やってみろよ。」

「……うっす……」

山下に促されて剛はすぅっと大きく息を吸い込んだ。そして、ピタッと呼吸を止める。しばらく沈黙が流れて、健斗と佐藤、そして山下は揃って剛のことを見る。するとだった。

「カァ～～ロォミオベェ～～ンン♪♪クリィ～～リィアァ～～ルメェェ～～ン～～～♪♪」

健斗と佐藤は驚いて目を見張り、その神がかった歌唱力に圧倒された。健斗たちだけじゃない。この教室にいる誰もが剛の方に視線を向けた。

剛は寡黙なやつだが、こんなに透き通った歌声を持ってるなんて想像もつかなかった。

あろうことか、まだ触れていないパート部分まで剛は歌い切った。歌が終わると、健斗と佐藤はしばらく呆然として何も言うことが出来なかった。

すると教室中にいる人が感服しながら剛に拍手を送った。健斗と佐藤も思わず惜しみない拍手を送る。

「すげぇ……」

「オペラ歌手みたい……」

「だろ？こいつの歌唱力は半端ねぇんだ。」

何故か山下のやつが得意気にそう言ってきた。健斗と佐藤は苦笑いを浮かべて小さく同意するように頷いた。

「こいつ、しかもピアノも弾けるんだよ。」

「ウッソッ？」

「マジッ？」

「マジだって。おい、剛。やってみろよ。」

「……うっす……」

剛は突然楽譜を持って、ピアノの前に立つと、その楽譜をピアノの上に置いた。そしてすっと、その大きな手を添えた。またしばらく沈黙が流れた。健斗と佐藤はゴクッと唾を飲み込んでその様子を見ていた。

すると、剛がとても綺麗な音色で今やっている課題の曲を弾き始めた。そのピアノの音色すら美しいもので、健斗と佐藤は再び言葉を失った。その様子を見ながら、山下がまた得意気に二人に言ってきた。

「なっ？」

「……あ、あぁ……」

「……キャラに合ってない……」

そして音楽の時間が終わり、健斗と佐藤、山下と剛。そしてついでにヒロの五人で教室へと向かっていた。途中で山下と剛と別れて、健斗たち三人はＡ組へと足を運んだ。

「しっかし驚いたなぁ……あの風格で意外な特技を持ってるんだなぁ……」

「人は見かけで判断出来ないってことね？」

「何の話？」

「いや……何でもないよ。」

そんなことを話しながらA組の教室に入って行った。まだ全員がこの教室に戻ってきてるわけではないが、ある程度の人は戻ってきている。

健斗は早川の姿を確認した。ということは、麗奈もいっしょのはずだ。ところが、予想に反して麗奈の姿はどこにも見えなかった。

「あれ？結衣、一人？」

佐藤が結衣に近づいて、そう聞いた。すると結衣はゆっくりと振り返って小さく頷いた。

「うん。そうだよ？」

「麗奈ちゃんは？」

「麗奈ちゃんなら、円ちゃんといっしょに購買に行ったんじゃないかな？」

「そうなの……ふ～ん……あ、ねぇっ！聞いてよ。B組の守田くんっているでしょ？あの人がさぁ～――」

どうやらガールズトークに入るみたいだったので、健斗はため息をついて自分の席に戻ることにした。次の時間は、確か生物だったような気がする。生物の教科書はロッカーにあるから、ロッカーの方

へ行かなくては……そう思って、健斗は教室を出ようとしたときだった。

「だぁれだっ？」

突然目の前が真っ暗になった。健斗はすぐさまそれを振り解き、代わりに肘で腹の辺りに一発入れる。そいつは「うっ」と声を上げて、すぐさまぱっと手を放した。

「寛太……俺の可憐な瞳に触れるとは良い度胸してんじゃねぇか？」

「な、何だよー。冗談だろ？どこ行くの？」

寛太がそう聞いてきたので、健斗は歩みも止めずにそっけなく言った。

「ロッカー。」

「あ、俺も行く。次生物だよな？教科書そっちにおきっぱだ。」

と言って、健斗と同じような理由で健斗の後ろについて行った。

「なぁなぁ、そういえばもうすぐ文化祭じゃん？」

「え……あ、そうだっけ？」

そういえばそんな話を聞いた。でもまだ一カ月も先の話のことだ。あまり実感は湧いてなかった。

「そうだよ。忘れんなよなぁ。なっ？うちのクラス何やると思う？」

「さぁ？何かやりたいことでもあんの？」

健斗が興味なさげに聞くと、寛太は大きく頷きながら言ってきた。

「そりゃ色々とさ。例えばメイド喫茶とかもいいじゃん？あと……アニマル喫茶とか、萌え萌え喫茶とか？」

「全部そっちけいかよ。うちのクラスの女子にやらすんだろ？そういう格好。絶対嫌がるぞ？」

「大丈夫だって。うちのクラス結構ノリいいじゃん？絶対受けがいいと思うんだよなぁ～？」

「そっかなぁ？」

そんなことを話しながら健斗はあることに気がついた。廊下にいる生徒たちが、健斗のことを見てヒソヒソと何か話をしている。それどころか、何だか笑われているようにも感じた。

ふとそんなことを思いながら、健斗はさっき山下から聞いた話を思い出した。

ここ最近、自分のことが噂になっているらしい。もしかして、こうして見られているのも……それと影響しているのだろうか。

そんなこと考えながらロッカーから教科書を取り出し、また教室に戻ろうとした。やっぱりその際も、周りの生徒たちが健斗のことを見てくる。やけに視線が熱い……

「……何か嫌だなぁ……」

「何が？」

寛太が可笑しそうに笑いながら健斗にそう言ってきた。健斗と寛太が教室に入ると、すぐさまヒロが健斗たちのことを見てきた。するとヒロはポカーンと口を開けて唖然としていた。

そしてすぐさま、プッと吹き出して笑ってきやがった。

「何それ、お前……ギャグ？」

「は？何が……」

「自分の顔、見てみろよ。」

「顔？」

健斗はガラスに映る自分の顔を確認した。その瞬間愕然とした。

「な、何じゃこれはっ？」

何と健斗の両目辺りが真っ黒に染まっていた。健斗はそれを慌てて拭うと、手に付着した黒い部分の匂いを嗅いだ。墨の匂いだ。

と、なるとこういうことをしてくるのは一人しかいない。

「寛太……てめぇの仕業かっ！」

健斗が振り返ると寛太はもうそこにはいなかった。寛太はまるで予

測していたかのように一足先に健斗の元から逃げ出していた。

周りの人が健斗を見てきたのはこれが理由だったのか……

「てめぇ……待ちやがれっ！」

制裁を加えるために健斗は走って逃げ出していく寛太を追いかけ始めた。健斗の足の速さなら、十数秒もしない内に捕まえることができるはずだった。

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．５

そんなこんなで、今日も一日という時間が過ぎた。

帰りのＨＲも大したことはなく、健斗は自分の荷物をエナメルバッグの中に入れていた。放課後、いつもだったら麗奈の部活が終わるまで待つというのが日常だったが、今ではもう違う。これから健斗は部活に行く。ようやく、健斗は前に踏み出した。ついにサッカー部に入部したのである。

最初はなじめるかどうかが心配だったが、それは余計な心配だった。思ったよりも、サッカー部の人たちは健斗をすぐに受け入れてくれた。松本事件の時は、健斗の印象もよくはなかったのだが、この間の試合でその辺のいざこざはすっかり消えていた。むしろ、サッカー部は健斗に大いに感謝しているくらいだった。

「健斗ー！部活行こうぜ！」

ヒロが鞄を持ちながら、健斗の席に歩み寄ってきた。この感じも、健斗にとっては久しぶりの感覚だった。昔もこんな風に、ヒロが健斗のところに来て、そのあと二人で翔を呼びかけて、部活に行くのが常だったような気がする。健斗は鞄を背負って、ヒロと共に教室を出ようと思ったときだった。

「いやー、二人とも張り切ってますねー？」

と言ってきたのは、佐藤だった。佐藤も同じように鞄を持って、健斗とヒロのもとにやってきたのだ。

「なんか、新鮮ね。二人がこれから“部活行こうぜ！”なんて言ってるのを見ると。」

「何言ってんだよ。もうあれから結構時間経ってるだろ。」

「う～ん……それでもなんか新鮮。えへへ♪」

佐藤はなんだかうれしそうに笑顔で笑った。きっと、佐藤も嬉しく思っているのだろう。佐藤も健斗やヒロのことを最後の最後まで心配してくれていた。だから、その分こういう結果になったことが、佐藤もうれしくてたまらないのだ。

「あと、あんたのその頭も新鮮♪」

「てめぇ！まだ言うか！」

「きゃあ！」

途端にヒロと佐藤が追っかけっこを始めた。どうやら、ヒロの頭をこう……いじると、ヒロの逆鱗に触れるようだ。健斗は苦笑いを浮かべて、その様子を見ていた。と、そのとき、健斗の視界に麗奈の姿が映った。麗奈はスクールバッグに教科書などを入れて帰る支度をしていた。そういっても、麗奈もこれから吹奏楽部の部活動のはずだ。健斗はヒロと佐藤が追いかけっこが終わるのを待つついでに、麗奈に近づいた。

「麗奈。」

健斗が声をかけると、麗奈はすぐに振り向いた。そして、ぱぁっと

その笑顔を健斗にふるまう。

「あ、健斗くん。これから部活でしょ？」

「まぁな。お前もだろ？」

「うん！あのね、あのね、もうすぐ文化祭でしょ？だから、最近練習で忙しくなってきたの。」

「その割にはうれしそうだな。」

「えへへ♪だって楽しみなんだもん♪」

「ふーん……そりゃご苦労なこった。」

すると麗奈は鞄を背負うと、再び健斗と向き直った。

「それで……なんか用だった？」

「用っていうか……、帰りのことだよ。帰り。お前は部活、いつも通りの時間に終わるの？」

「う～ん……うん！そうだと思う。」

ということは、六時半から七時の間には終わるのだろう。最終下校は、七時半……サッカー部も練習を切り上げるのは今の季節だと六時半だから……

「じゃあ、普通に七時くらいに会えばいっか。」

「うん！校門らへんで待ってるね。じゃ、私行くねー！」

「はいはい。」

麗奈は手を振りながら健斗のもとから離れていった。健斗も手をふりかえしたながら、去っていくその後ろ姿を見つめていた。

何だか、すごく楽しそうな顔をして向かっていったな。そんなに演奏が楽しみなのだろうか？

「……ぅあ……ぁう……ぁ……」

そんなことを考えていると、健斗の元に顔面がぼこぼこになったヒロが健斗の元に戻ってきた。どうやら返り討ちにされたようだ。まぁ、分かっていたことだが……

「ぁう……ぁうあぅあ……」

完全に口が3の口になってる状態でヒロは何かを伝えようと口を動かしている。健斗脳内特別翻訳機で翻訳にかけると……「あいつ……容赦ない……」うん。確かにヒロを見る限り、容赦ない。

「仲のいい証拠だろ。そろそろ行くぞ。」

「ぁう……」

ヒロは頷きつつ、フラフラした足取りで健斗についてくる。健斗はそれを見て呆れつつも、急いでグラウンドへと向かった。

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．６

・・・人の多い廊下と階段を通り抜けて、健斗とヒロは昇降口で靴を履き替えていた。ローファーに履き替えると、昇降口を出て、少し歩いたところに自転車を停めてある駐輪所がある。そこの狭い横道を通ると、いくつかの扉がある建物がある。

ここが部室棟だ。サッカーの部室は真ん中目の辺りにある。健斗とヒロは「サッカー部」と書いてある部室の前に立つ。

部室の扉の周りは落書きだらけだ。そして、その内部はもっとひどい。スパイクやユニフォームが散らかっているし、狭いし、汗臭い匂いが鼻につく。さらに、ドアの裏の部分やロッカーには……Ｒ１５指定のポスター……さらに、あるロッカーの中にはＲ１８指定の雑誌や漫画がある。

とても女の子が入れるような環境ではなく、ザ・男子というような部屋である。

部室内部に入ると、そこには既に知った顔が何人か集まっていた。山下、剛、そしてのんちゃんだ。みんなサッカー部の一年である。

「うぃーす。山中、ヒロ。」

山下が気だるそうな挨拶をしてくる。健斗とヒロは「うぃっす。」と軽く返事をしながら、長椅子に自分の鞄を置いた。すると、のんちゃんがあんぐりと口を開けてヒロのことを見つめていた。

「は、話には聞いてたけど……本当に坊主にしたんだね……ヒロ…

…」

「なッ？最高だろ、こいつ。」

山下は面白そうに笑いながら、のんちゃんの肩に手を回した。健斗はそれを聞いてプッと可笑しそうに笑ったが、その反対にヒロはぶすっとして不機嫌そうに答えた。

「笑いたきゃ笑えよ。俺はこれからこういう感じで行くからな。」

「うん……正直、笑えないかな。驚きすぎて……」

のんちゃんもヒロとは中学のころからの仲だ。ヒロはこれまで坊主なんてしたことなかったから、その容姿の変貌ぶりに戸惑っているに違いない。その気持ちは健斗にも十分わかるのだが、健斗はそれよりも笑いの方が勝ってしまった。とはいえ、こうして一日いっしょにいるだけで案外今のヒロの状況に慣れてしまった部分がある。

「う～……マジでこの姿を先輩たちにさらすのがネックだわ……」

「まぁ、似合ってないしな。」

「余計なお世話だ！」

山下の言葉にヒロがかみついた。健斗はその後ろでうんうんとうなずいていた。

「あ、もう先輩たち、グラウンドに集まってるから急いだ方がいいよ。」

「おう。」

「……。」

のんちゃんにそう言われつつ、健斗たちは制服を脱いですぐにサッカー着に着替え始めた。

この部室内にいる五人が神乃高サッカー部の一年生だ。サッカー部は、この一年と二年生八人、合計十三人で成り立っている。三年生の人数は十数人とかで人数が多かったらしいのだが、すでに引退している。それでも時々、健斗の顔の知らない人が練習に来るときがある。多分それが、引退してしまった三年生なのだろう。

正直、まだ二年生の人を全員覚えきれているかといえば結構危うかったりする。部長兼キャプテンである今泉陽介（いまいずみようすけ）さんのことは、当然分かるもの、他の先輩の名前と顔はさすがにまだ一致しない。

一年は当然覚えている。というより、健斗とヒロ、のんちゃんの三人は中学がいっしょだから当然だし、山下と剛に関してはあの日からよく話すようになったから、あっという間だ。神乃中のとき、サッカー部といえば健斗たち含むあの七人だったから、こうしてみると結構新鮮な気持ちだったりする。これからは、新しいこの五人で神乃高サッカー部を支えていかなきゃならない。

健斗たちはサッカー着に着替えて部室を後にした。最後に出たヒロが鍵を閉めて、これでオッケーだ。五人は歩きながらグラウンドに向かっていた。

「今日すごかったろ？こいつの声。」

山下が歩きながら健斗に言ってきた。それは今日の音楽の授業、課題の曲を剛がものすごい歌声で歌ってくれたこと。その風貌とのギャップに、健斗と佐藤は驚きを隠せなかった。

「すごかったというか……もう別の次元って感じだったよ……」

「そりゃそうだろ。だって、こいつの親父、元オペラ歌手なんだぜ？」

「マジでッ！？」

「えっ！そうなの？」

「え？何？何の話？」

一名、話の蚊帳の外にいるが、健斗とのんちゃんは目を丸くして剛のことを見た。のんちゃんは山下と剛とはすでに半年の付き合いだから剛の歌声のことは知っていた。だが、彼の父親が元オペラ歌手だという情報は知らなかったらしい。あの歌声はそういう経緯があったのか……確かに納得できる。

「すごいんだな、剛って。」

「……恥ずかしっス……」

普段感情をあまり見せない剛も、さすがに照れているのか、無表情のまま顔を少し赤くした。健斗と山下とのんちゃんはおかしさを感じて笑ったが、ヒロは何の話をしているのかわからなそうな顔をしていた。

「……なぁ！何の話をしてるんだよー！」

健斗たちがグラウンドにつくと、すでに二年生の先輩たちが集まっていた。健斗たちは急いで階段を降りてグラウンドに向かっていく。すると、スタンドに何人かの人だかりができていた。健斗たちが駆け降りると、その人だかりが「おぉっ！」と歓声をあげた。手にはカメラやメモ帳らしきものを持っている。そして、その少し離れたところには女の子の集団もいる。こちらはうちの生徒だ。

「なんだろう……あの人だかり……」

のんちゃんが走りながら健斗にささやいてくる。健斗もよくわからないといったように首をかしげて見せた。五人は二年生の先輩たちが集まっているところに着いた。

「遅いぞ、五人とも。」

今泉さんが五人の姿を見て、少しドスの利いた声でそう言った。健斗たちは「すみません。」と一言謝る。

「……しかし、あれだな。なんだか……やりにくいよな。」

今泉さんが腕を組みながら苦笑いを浮かべる。よく見ると、ほかの先輩たちもなんだか緊張しているみたいだ。すると、健斗の耳元に山下がささやいてきた。

「結構話題になってんだよ。二軍とはいえ、あの洗目を負かした無名校……ってことで。」

「……あぁ……」

なるほど。ということは、あの女の子たちの集団はともかく、あのカメラを持っている人たちは地元の記者の集団か。

健斗がそんなことを考えていると、今泉さんからちょうど説明があった。どうやら山下の言うとおり、あの練習試合がどうやら回りに回って隣町の新聞社に通じたらしい。それを興味を持った新聞社の編集長から、今日一日だけ取材と練習風景を見学させてくれないかと学校側に話があったらしい。それを学校側は学校の宣伝とか何たらと利益があると考え、校長の口から今泉さんに伝えられた。今泉さんは渋々それを了解したという。ということで、今日新聞記者の集団が練習風景を見学しているということだ。

「――というわけだ。少しやりにくいかもしれないけど、みんな我慢してくれ。」

「「「……」」」

みんなの顔は明らかに緊張の顔が浮かんでいる。これからの練習風景によって、神乃高サッカー部の評価が決まるのだ。だが、その割には髪型を気にしているものなどもいる。ヒロに至っては、その坊主頭をなでながら「こ、この頭が……写真に撮れてしまうのか……そんな……」なんて言って、切羽詰まった顔をしている。今の状態で平気な顔をしているのは、さすが部長の今泉さん、健斗、そしてなぜか山下だった。（剛は無表情のため感情が読み取れない。）

健斗はこういう状況を一度経験しているから慣れている。中2の春の地区大会、あのくそ忌わしい――いや、崇高なる大先輩小山さんのおかげで、地元の新聞社に取り上げられたことがある。あの最低最悪の――いえ、最高最良の通り名とともに。

まぁ、なんにしたって、このままの空気はなんかいやだな。

「じゃあ、練習に入る前に何か連絡事項があるやつは――」

「はい！」

「ん？なんだ、山中？」

健斗は手を挙げて、連絡事項があるようにふるまう。が、本当は何も連絡事項なんてない。ただ、伝えたいのは――

「えっとー、みんな見ればわかると思うんですが……ヒロのやつが、坊主頭になりました！」

「ひょえっ！？」

突然話を振られたヒロは驚きの声を上げた。すると、二年生が一斉にヒロのことを見るために後ろを振り返った。

「「「……」」」

「……」

「……プッ――」

「「「うわっはっはっはっはっはっはっは！！」」」

二年生全員、ヒロのことを凝視してから途端に笑い始めた。中にはおなかを抱えて苦しそうにもがいているものすらいる。あの今泉さ

んですら笑いを我慢できず、後ろを振り返って体を震わせながら笑っている。健斗たち一年生も、もう慣れたはずなのに二年生のあまりの笑いっぷりに耐え切れず思わずつられ笑いをしてしまった。

「うわー！すげー！なんだこれー？」

「なんで急に？」

「それにしても、全然似合ってないなー？おいー？」

二年生に頭をなでられたり、ヒロはやられ放題だった。一方そのヒロは完全に放心状態になっており、目が点になっている。ちょっと憐れだが……すまん、ヒロ。これも部活のためだと思え。健斗は笑いながらヒロにそうつぶやいた。

そのとき、ヒロの目から一筋の涙が伝うのを健斗は見逃さなかった。

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．７

「よーし！今日は練習これで終わり！各自、クールダウン、ストレッチ等を済ませて一回集まってから解散！」

「「「おっし！」」」

掛け声が上がると、今泉さんの指示通り、クールダウンを始める。健斗もゆっくりと息を整えながら、クールダウンを始めていた。今日の練習はいつも通りのはずなのだが、やはりみんなどこかスタンドにいる記者たちが気になっていたらしい。もう記者の団体は姿を消しているから、ようやく緊張から解放され、みんなクールダウンをしながらくつろいでいる。

健斗も肩で息を整えながら、クールダウンをして、ストレッチを始めた。するとそんな健斗のもとに山下が近づいてきた。

「いやー、今日もハードだったなー！」

健斗の肩をバシバシとたたきながら、山下は陽気な口調で健斗に言ってくる。山下が健斗の隣に座ってストレッチを始めると、健斗は少しため息を吐きながら言った。

「とか言いながら結構元気だな。」

「いや、マジで疲れてるって。さっきまで死にそうだったんだから、俺。」

とか言いながら、山下は相当元気だ。

山下のポジションは右サイドハーフだ。そのため、山下は結構足が速いし、この前の試合でも思ったのだが、こいつは相当体力がある。それは今までの練習から見ても山下が一番よく走っている。健斗よりも、ほかの二年生よりもだ。足の速さだけ言えば、健斗の方が速いのだが、長距離で見れば山下の方が上である。

「山下って、中学のときもサッカー部だった？」

「うんにゃ。」

さらりと健斗が聞いたのを、山下がさらりと答える。健斗はその返答が意外で目を丸くした。

「サッカー部じゃなかったの？」

「おう。俺、中学ん時は陸上部だった。」

「陸上部？種目は？」

「長距離。知らなかった？」

「いや、知らなかったけど……どうりで。」

「ん？何のこと？」

体力がある方だとは思っていたが、そういう理由なら納得できた。中学のときは陸上部で、今はサッカー部。まったく違うスポーツだが、陸上部だったというのがプラスになっているということか。当

然、技術的な面ではまだまだ未完成な部分がある。だが、高校から初めて今の状態というのはかなりいい出来かもしれない。山下はひょっとすると、口だけのやつじゃなく、運動神経とかいいのかもしれない。それに健斗からしたら、山下のことがちょっぴり羨ましかった。

「そっかー。すげーなー、お前。」

「何がよ?」

「いや、中学は陸上で今はサッカーだろ?しかもお前、それで体力あんじゃん?俺なんか、体力全然ないからさ。どうしたら体力つけられるのかな?」

そう、今の健斗の唯一の弱点。それは体力だった。この間の試合でも、その弱点は浮き彫りになってしまった。数年間の間サッカーから身を離していたから、体力が極端に落ちていたのだ。しかも、もともと健斗は体力が少ない方だった。それはどんなに練習しても、ほかの人間よりもすぐに体力切れになってしまう。だから、よく走れる山下が羨ましかった。

「いやー?走り込みとか毎日やるとか……」

「そんなもん、とっくにやってるよ。入部してからさ。そうじゃなくって、こう……もっと爆発的に体力がつく方法とか――」

「そんなもんねえよ。」

山下は飽きれるような言い方で健斗にそうきっぱりといった。

「体力ってのは長い時間かけないとつかねえもんなの。自分の限界を引き延ばすんだからな。ＲＰＧとはわけが違うんだよ。」

「やっぱそうなのかな……」

「それにいいじゃん。体力なんかなくたって、お前化け物並みの上手さなんだから。」

「中学の時も、俺が一番最初に体力切れになっちゃうんだよ。特に、“剛”のドリブルを使うと本当に体が動かなくなっちゃうんだ。」

「“剛”のドリブルって……あぁ、あの試合終盤に見せたものすごいドリブルのことか。」

山下は立ち上がって腰を伸ばして大きく息を吐いた。

「まぁ、気長に地道にやっていけばいいじゃん。まだ二年半もあるんだからさ。」

「うん……」

クールダウンとストレッチを終えて、今泉さんの言う通り一度集まったあと解散をした。このあとは自主練するのもよしなのだが、あ

いにく今日は長めの練習だったためにもうほとんど時間が残されていない。

今日は大人しく帰ることを選んだ。

「死にたい、死にたい、死にたい、死にたい……」

まるで呪いの言葉を吐き捨てるように、ヒロはロッカーに頭を押し付けながら泣きじゃくっていた。どうやら、先程のことが応えたらしい。

「なぁ、いい加減元気だせよ。そろそろ帰るぞー。」

ヒロがこんな状態だから、二年生は全員帰ってしまい、残されたのは健斗たち一年生だけだった。健斗たちはヒロが元気を取り戻すのをずっと待っているのだった。

「もう最終下校時間になるよ。帰ろうよ、ヒロ。」

「うぅ……」

のんちゃんに支えられながら、ヒロはゆっくりと歩き出した。それを見計らって、健斗たちも部室をあとにした。

自転車置き場から自転車を取り出して校門の方へと向かう。まだ部活などで校舎に残っていた生徒たちが次々へと校門をくぐり帰路へとついている。健斗は自転車を押しながら、校門の方を目を凝らしてみた。七時に麗奈と待ち合わせしているのだが……まだ麗奈はいなかった。時計を見ると、時間は七時を過ぎている。まだ来ていないだけだろうか？それとも先に帰ったのか？

そんなことを考えていると、ポケットの中のケータイが鳴った。健斗はすぐにポケットから取り出して、ケータイを見ると……それは麗奈からのメールだった。

件名：ごめん！
本文：今日、円ちゃんとナッチャンにご飯誘われちゃった！だから先に帰ってて！あと、今日夕ご飯はいりません。

ということは、商店街の向こう側にある唯一のファミレスにいるということだろうか。まぁ、それはそれでいいのだが……

「あいつ、どうやって帰るんだろう。」

件名：Ｒｅ：ごめん！
本文：それはいいけど……どうやって帰ってくんの？

健斗がメールをして二、三分もしないうちにメールが返ってくる。あいつは結構メールの返信が速い。

件名：Ｒｅ．Ｒｅ：ごめん！
本文：それは大丈夫！円ちゃんが途中まで乗せてくれるから。

北村の正確な家の所在地は知らないが、小学校も中学校もいっしょだったからそんなに健斗の家から離れているわけではないだろう。それなら安心である。

件名：Ｒｅ．Ｒｅ．Ｒｅ：ごめん！
本文：オッケー！あんまり遅くなるなよ。

件名：Ｒｅ．Ｒｅ．Ｒｅ．Ｒｅ：ごめん！
本文：了解！

麗奈とのメールのやり取りを終えて、健斗はケータイを閉じると一息つく。

「おーい！山中ー！何してんだよー！」

すでにほかの四人は校門の向こう側に行ってしまっていた。校門の向こう側にいる山下が手を振りながら健斗に声をかけてくる。

「今行くー！」

健斗はケータイをポケットに再び入れて、自転車にまたがるとちょっと急ぎ目で校門の方へと向かった。

山下と剛は方向が違うから、すぐに別れた。のんちゃんは途中までいっしょなのだが、分かれ道で異なるためその途中で別れた。帰り

道に残ったのは健斗とヒロだった。薄暗いを道を自転車のライトを頼りに、健斗とヒロはゆっくりと自転車をこいで帰っていた。

「しかし、まさか新聞記者が取材に来てるとは思わなかったな。」

「あれって取材って言えるのか？ただ練習を見に来たってだけじゃね？」

健斗がそういうと、ヒロは少し考えてから言った。

「まぁ……そうだよな。でも、しばらくあんな感じが続くのかな。」

「さぁ。つーか、洗目の二軍を倒しただけで取材なんか来るか？」

「一応県内のトップクラスだし。今年は全国レベルだって話だぜ？その洗目がうちを目の敵にしてるくらいだから、やっぱそれなりに業績が残ったんじゃね？あの練習試合。」

「うーん……なんだかなー……」

健斗にはどうも腑に落ちない部分もあったが、とりあえずそれで納得することにした。確かに、立川、洗目は公立にして県内のトップクラスでもあり、どちらも全国レベルに妥当するといえる。やはり二軍といえども、無名校が負かしたということは、ダークホース現る！みたいな感じで話題性があると判断したのかもしれない。

しかし、こちらにはこちらの都合がある。今日はとりあえずヒロの剃髪のおかげで場が少しは和やかになったが、しばらくあの状態が続くとなるとこちら側にとって非常にやりにくい。できれば早めに熱が冷めてほしいものである。

健斗の家が見えてきたところで、自転車から降りる。ヒロはその隣の家なので、健斗の方を見て「んじゃ、明日な。」というとそのまま自分の家に帰って行った。健斗もそれを見届けると、庭の方へと自転車を置きに行こうとした。するとだった。

「ちょっと、いいかな。」

「……え？」

突然どこからともなく現れた一人の男性。健斗は突然のことに驚きを隠せなかった。闇の中から現れたその男性はにぃっと薄気味悪い笑みを浮かべると、ゆっくりと健斗の方へと歩み寄ってきた。

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．８

面識のない男性が健斗にゆっくりと近づいてくる。健斗は警戒心を見せながら、彼が近づいてくると一歩後ずさりをした。そんな健斗の反応を見て、男は少し驚いた顔を見せた。が、健斗の心境にすぐに気づいたらしくもう一度笑顔になった。

「あぁ、僕は怪しいもんじゃないんだ。えっと……確か名刺がこの辺に……」

男は自分の上着の内ポケットを弄り始める。すると彼の右手に一枚の紙。それを健斗に手渡そうとしてきた。健斗は警戒心を解くことなく、それを受け取った。そして家の明かりを頼りにその紙を見つめた。それは確かに名刺だった。

「僕は戸河内正毅（とがうちまさたけ）。新聞記者をやってるものだけど。」

「記者さん……ですか。」

それにしてはそれらしくなかった。今日の記者団のように、メモ張やカメラも何も持ってない。出で立ちも、ジーパンに黒いシャツの上に薄いＹシャツを着ているだけ。本当に新聞記者なのだろうか、と疑いさえする。

「えっと……新聞記者さんが、うちに何の用ですか？」

「あぁ、正確にはスポーツ記者だけどね。」

「スポーツ記者？じゃあ……」

「ご察しの通り、君に用があって来たんだ。」

健斗はそれを聞いて名刺をゆっくりとポケットの中にいれた。そして、戸ヶ内という男の顔をじっと見つめる。

「俺に……何の用ですか？」

「約三年前。」

彼は健斗の言葉のあとにほとんど間髪入れず、そう口に出した。

「約三年前、地元中学の春の地区大会に、とんでもない選手がいたのを知っているかい？」

「……」

「その選手は白いユニフォームを纏い、まるで魔法を使っているみたくボールを鮮やかに、自由自在に操って、地区大会の決勝戦で強豪校から3点を奪いっとった。まぁ、それだけならまだいいのだが、あの小山明信が一目置いている選手だということも話題性を呼んだ。そして、最近の情報によれば、小山明信がその選手に接触したとか……」

彼は一歩ずつ健斗に近づいてくる。やがて健斗の目の前に立ち、そして見下ろすように見てきた。

「“白魔術師”……それが当時の呼び名だ。そして、その本名は――」

「山中健斗……」

健斗は自ら白状するようにそう言った。すると、戸ヶ内とやらはにやりと笑みを浮かべた。

「そう、山中健斗。君のことだ。」

「……」

「三年前、一時期サッカー界を騒がせた子がまさかあんな高校にいたとは……ちょっと驚きだね。それに、三年前を最後に君のことがちっとも話が挙がらなかったのも不自然だ。いったいどこで何をしていたのか……僕はそれが知りたくってね。お伺いしたんだけど……」

健斗は何も言わなかった。目の前にいるこの男がひどく醜悪に見えてしまう。人の過去を興味本位だけで掘り探ろうとする、醜悪のかたまりだと思ってしまう。

「あの洗目の二軍を負かしたのも、君の力のおかげなんだろう？じゃなきゃ、あんな高校が、洗目の三軍にだって勝てやしない。他社の連中はまだそれに気づいていなくてね、出し抜くためのチャンスなんだが……」

「……」

彼は健斗をしばらくじっと見つめると、少し笑みを浮かべて小さくため息を吐いた。

「……今日は出直した方がよさそうだね。いきなり尋ねるのも、迷

惑な話かな。」

戸河内という男はそういうと、健斗に背を向け、ゆっくりとその場を立ち去ろうとした。

すると、途端に足を止めて再び健斗の方に向きなおした。

「また後日伺うとするよ。そのときは、色々話を聞かせてもらえるといいけど……」

彼はそう言い残し、今度こそ健斗の前から立ち去っていった。健斗はその姿が見えなくなると、ほっと息を吐いた。

そしてポケットに入れた名刺を取り出して、それを見つめる。スポーツ記者か……いつかはバレるとは思っていた。

『新聞記者が？お前んとこに？』

電話越しにヒロがそう言ってきた。健斗は濡れた髪をタオルで拭き取りながら、頷いて言った。

「あぁ。さっき家の前で話しかけられたんだ。戸河内正毅っていう人。」

『戸河内……あ、俺知ってるぞ、その人。ライターだけじゃなくって、コメンターとしても結構有名だよ。あちゃー！その人に目をつけられちゃったかー。』

健斗は全然知らなかったが、戸河内正毅の書く記事は雑誌でもよく採用されるらしい。つまり、彼の記事は多くの人に読まれ親しまれているということだ。

『コメンターだからかもしんないけど、結構辛口なんだ。適当に話すと、何書かれるか分からないぜ？』

「今日はほとんど何も話してないけど……けど、また来るって言ってた。」

『家にってこと？』

「さぁ、どうだろう……でも、そういう感じ。」

ヒロはしばらく考えるように押し黙った。

『ひょっとしたら、学校の帰りとかに待ち伏せされるかもな。もしくは、練習を見に来たりとか……』

「マジ？くわぁ～……もう最悪だよ。」

健斗は頭を抱えながら、タオルを投げ捨てベッドに腰掛ける。すると電話越しにヒロが可笑しそうに笑った。

『御愁傷様。でも、まぁ……予想はしてたことじゃん。』

「まぁ……そうだけど……」

そう。話のとおり、健斗はこうなることを一応予想はしていた。

三年前の春の地区大会、小山さんが一目置く次世代のスーパー中学生。それが”白魔術師”なのだ。

しかし、そんな選手がサッカー界から姿を消した。一時期サッカー界を揺るがせておきながら、この二年半の間名前が挙がることはなかった。やがて、”白魔術師”の名前は少しずつ人々の記憶から消えていた。

しかし、その選手が再び高校サッカーに姿を現したとなれば、これほど大きな話題性を呼ぶ話はないだろう。空白の二年半の謎は如何に?というように、見世物になってしまうだろうとあの試合をやる前から分かっていた。

ただ、誤算だったのが……

『嗅ぎ付けるのが思ったよりも早かったな。』

「……あぁ。」

そう、誤算だったのが健斗のことがバレるのが早かったということだった。大きな大会に出もしなければ、しばらくはその素性を探られるようなことはないだろうと思っていた。だが、それは甘い計算だった。

この間の練習試合。県内で私立校にも引けをとらず、おそらく三本指に入るだろうと思われる洗目高校。その高校が二軍とはいえ、無

名校に負けたという。その話に興味を持った連中が回り回って、今の状態を作り上げてしまったのだ。

『数日前の新聞を探してみたんだ。そしたら、あったよ。小さな記事だけど……この間の試合のことが書かれてた。」

その記事の内容とは……『想いが生んだ。弱小無名校の大きな奇跡』という名の内容らしい。前半四点から折り返した奇跡の逆転劇とか……なんとか……たかが、練習試合が公になってしまったのは向こうの監督のおかげである。向こうの監督が記者団にコメントまで残している。「次はうちの1軍で全身全霊を込めて勝ちにいく。」と。

その洗目がライバル視する高校とは一体どんな学校なのか?と、なれば記者たちは取材など試みるだろう。やがて、あの練習試合のことが公になり、今日のように取材に来る記者が現れるのだ。

と、なればその内の誰かが健斗のことに気づいても可笑しくはなかった。そして、それが今日健斗に接触を求めてきた戸河内ということだ。

『まぁ、しばらくは話題になってるだろうな。熱が冷めるまで待つしかないし……それまではお前も、その戸河内ってやつに色々付きまとわれると思うぜ?』

それが問題だった。健斗は電話を握りながら、唇を噛み締める。今日も戸河内が言っていた、知りたいこととは……一時期サッカー界を揺るがせておきながら、二年半もの間まったく話に挙がらない。その二年半の謎を迫られるだろう。

そして自動的に、それは翔のことについて言及されるということだ。

それが健斗には大きな問題だった。他人に興味本位で探られるのも嫌だし、その記事を多くの人に読まれ、悲劇のヒーロー扱いされるのも嫌だった。もしそんな記事を読めば、翔のお母さんやお父さんは一体どう思うだろうか。自分の子供の死をネタにされて喜ぶ親がどこにいるだろうか。それに、もしかすると常識を弁えない悪質な新聞記者が面白がって翔の両親に接触を試みるかもしれない。それだけはなんとか防がなくってはならない。

面倒なことになった。

しかし、そう考えると小山さんはすごいなと思う。中学生のときから常にマスコミに注目されつづけ、淡々と日常を過ごしているのだから。まぁ、あの性格だから彼は何も考えてないのだろうが……それでもちょっとすごい。

『まぁさ、気楽にやれよ。別に敏腕刑事の取り調べってわけじゃねーんだし。翔のことは上手く隠していくしかないって。』

「それもそうだな。ワリィな、夜中に電話して。」

『別にいいって。んじゃ、また明日なー。』

「おう。おやすみ。」

そういってヒロとの電話を終えた。健斗は携帯を机の上に置いて、時計を見る。時刻は九時半を過ぎていた。

そのとき、健斗のドアがノックされた。コンコンと二回。そしてすぐそのあとに声がした。

「健斗くーん。いるー？」

「いるよー。」

健斗が答えると、ドアが開いた。ドアの向こうから、制服姿のままの麗奈が入ってきた。

「なんだ、お前。今帰ってきたの？」

「うん。話し込んでたら、すっかり遅くなっちゃった。ねぇ、今誰と話してたの？」

麗奈にそう聞かれて、健斗は少し考えた。

「……ヒロだよ。あいつ、今日はお前のせいで散々だった！って怒りやがってさ。」

「む～……健斗くんからかいすぎだよ。ヒロくん、可哀想だったよ？」

「ちゃんと謝ったよ。で、何？」

「あ、お母さんが呼んでるよ。ゴンタをお風呂に入れてあげてって。ゴンタったら、また庭の穴掘り返しちゃったみたい。」

「またかよ！仕方ねぇなぁー……ったく。」

健斗はそういいながら下に降りていった。そろそろゴンタの穴を掘り返す癖、直さなくてはならない。

問題が山積みだな……と思いながら、健斗は軽くため息を吐いた。

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．９

「もうすぐだね！」

「「……なにが？」」

健斗とヒロは箸を止めて揃って尋ねる。すると、目の前でウキウキしている麗奈が喜ばしくない顔をした。

「なにが？って、決まってるじゃん。文化祭だよ！文化祭！」

「「あぁ……」」

そういえばすっかり忘れていた。気がつけば学校は文化祭シーズンだった。この学校がやけにいそいそとしているわけだ。

「そっかー。麗奈ちゃんは神乃高の文化祭、初めてなんだよね。」

早川が笑みを浮かべながら、そう麗奈に言った。すると、麗奈は頷きながらちょっと不思議そうに尋ねてきた。

「うん……結衣は初めてじゃないの？」

「私はほら、地元がここだから。小学生のころから毎年何度か来てるの。健斗くんとヒロくんもね。」

「そーゆーことー。」

健斗が素っ気ない返事をすると、麗奈は面白くなさそうな顔をして

健斗を見つめた。

「私も神乃高の文化祭は初めてだよ。」

「本当に？」

隣でお弁当をパクパク食べながら佐藤がそういうと、麗奈は嬉しそうにはしゃいだ。佐藤は中学までこっちの人間じゃなかったから、当然といえば当然か。

「神乃高の生徒になってからは初めてだから、私も実は結構楽しみなの。」

と、早川も笑ってウキウキと喜んでいた。仲間が増えたことが嬉しいのか、麗奈のウキウキ度はさらに増した。

「だよね！だよね！もう健斗くんなんて仲間に入れてあーげない。べーっだ！」

「麗奈ちゃん！俺は麗奈ちゃんの味方だよ、もちろん！」

そんなやり取りがされながら、健斗は興味なさそうに箸を加えたままため息を吐いた。

我が神乃高の文化祭は１０月の後半にある、ビッグイベントの一つである。少し変わってるかもしれないが、神乃高は毎年でイベントが異なる学校だった。

つまり、一年毎に体育祭、文化祭かで変わる。体育祭の年ならば、五月辺りにそれが行われるが、今年はたまたま文化祭の年にあたる。

つまり健斗たちの代は文化祭が二回あり、体育祭は一度しかないということだ。スポーツ系の方が得意な健斗は、出来れば体育祭が二回ある方の代になって欲しいと願っていたが……こればかりは仕方がない。

文化祭は結構色々と本格的に行われる。健斗も小さい時から、神乃高の文化祭に度々足を運んだことがあるから分かるが、なかなかスケールが大きいものだった。さすがに七夕祭りよりは劣るが、それでも充分すごいものだった。

生徒が自ら働き、種類様々な出店を出しているし、その他にも軽音楽部やダンス部の活動なども面白いものがある。

他にも各部活でそれぞれ特色ある出し物もやっている。例えば野球部はストライクアウトをやるし、サッカー部はキックターゲットを毎年行っている。

これは余談だが、健斗はこの文化祭に足を運んだときにキックターゲットはやらないことにしている。というのは、小学校五年生のとき、健斗はいつもターゲットを全て倒してしまうために、さすがに顔を覚えられてしまった。

そのため、健斗専用の特設キックターゲットを設けられてしまったことがあった。何と、普通なら的は九個から十個のはずなのに、その特設ターゲットはその倍の数。しかも蹴り玉はたったのミスは五回まで……

そんなの無理だっ！と思い、健斗はそれからキックターゲットというものを辞めてしまった。

まぁ余談は置いておいて、そんなものがある。

「うちのクラスは何をやるのかな？」

お弁当を口に運びながら麗奈が不意に聞いた。その問いかけに、早川が少し考えるような表情を見せる。

「ん～……それよりもまず、委員を決めないとね。」

「委員？あれ、まだ決めてなかったっけ？」

「あ、麗奈ちゃんは遅れて入学してきたもんね。四月に学校代表の文化祭委員は決まったんだけど、クラスの文化祭委員はまだ決まってないの。」

「学校のとクラスのでわざわざ分けてるの？」

「うーん、やっぱり学校全体の役員は当日まで色々大変だと思うし。それにほら、今年は体育祭がないでしょ？その分を文化祭に回して効率よく進むようにするためじゃないかな？」

実際早川の言う通りだった。先程も説明したとおり、うちの学校は年毎に文化祭と体育祭で分けている。今年は体育祭がない分、文化祭に力を入れることができるため、学校のとクラスので委員を分ければ仕事も効率よく運ぶというわけである。

「委員は今日決めるみたいだよ？委員長が言ってた。」

「へぇ～、委員会かぁ……私、やってみようかなぁ？」

麗奈がそういうと、早川は可笑しそうにプッと笑った。

「麗奈ちゃんは、ほら、吹奏楽部の方を頑張らなきゃ。あるんでしょ？演奏会。」

「あ、うん！今ね、それに向けてすごい頑張ってるの！前夜祭と後夜祭を含めて、六曲もやるからもう大変だよ～♪」

「それにしては楽しそうだね。」

「えへへ。練習がすごく楽しいの。本番も楽しみだなー♪」

「じゃあ、本番は絶対に見に行かないとね。楽しみにしてるよ？」

「うん！楽しみにしててね！私、頑張るから！」

麗奈が意気込みを言うと、みんな可笑しそうに笑った。健斗は弁当を摘まみながらそんな麗奈をじっと見つめていた。

すると、麗奈と健斗の目が一瞬合う。健斗は慌てて麗奈から目をそらした。

そして、ＨＲの時間がやってきた。健斗はぼけーっとして目の前の教壇を見ていた。教壇にはすでに学級委員長が立っていてＨＲの司会を務めていた。

「知ってる人もいると思いますが、季節は文化祭シーズンとなりました。今日はそのための委員を二名決めようと思います。」

「委員……ねぇ」

絶対にやらないことを前提に健斗はボソッと呟いた。みんながざわめき始める。文化祭委員なんて健斗はやったことがない。中学のとき体育祭委員なら一度やったことがあるが、本来健斗はそういうアグレッシヴな委員会を好まなかった。

「誰か立候補する人はいませんか？」

学級委員長がそう言うが、誰も手を上げる人なんていなかった。そりゃそうだ。こういうのって、自らやろうとする人はあまりいないだろう。みんなは「お前やれよ。」とか「嫌だよ。お前やれよ。」とか言い合っている。

健斗はため息を吐いた。早く終わらないかなぁっと思ってその光景を見つめる。するとだった。少し離れた席から、ヒロがじっと見ているのが気がついた。健斗とヒロが一瞬だけ目が合う。するとヒロはニヤリと笑って、親指を立ててきた。

――な、何だ？

「じゃあ、立候補じゃ決まりそうにないので……推薦にしたいと思います。誰かこの人がいいと思うって人いますか？」

「はいっ！」

学級委員長がそう言った瞬間、ヒロが元気良く手を上げた。クラスのみんながヒロを見た。

「真中くん？」

「俺は、山中くんがやったらいいと思いますっ！」

「はぁっ？」

ヒロのその提案に健斗が慌てて反応した。その名前を聞くと、みんながざわざわと騒ぎ始めて健斗の方を見てくる。するとヒロはニヤニヤと笑いながらさらに続けて言ってきた。

「理由は、山中くんは決断力もあり、統率力もあります。また、中途半端なことを嫌うので、彼なら最後まで責任を持って仕事をこなすと幼なじみである僕が保証します。」

「おいっ！ヒロッ！お前っ――」

「それに山中くんは僕にテストで勝つくらい頭もいいので、適切だと思いまーす♪」

ヒロがそう言い終えると、クラス中のみんながざわざわと騒ぎ始めた。健斗は思わず息を呑んだ。この空気……まずいっ！

「おぉ、いいんじゃね？山中なら上手くやってくれんべ？」

「この間もサッカー上手だったもんねー？ただものじゃないって感じぃ？」

「山中くんならすっごいの考えてくれそーだよねぇ？」

「ちょ、ちょっと待てっ！俺はやるなんて一言も言ってねーぞっ！つーか絶対やんねーぞっ！」

健斗は必死になってそう反論したが、誰も健斗の意見なんて少しも耳を傾けてはいなかった。すると、指揮するのが上手な委員長が手をパンパンと叩いて注意を引かせる。

「はい。じゃあ、多数決とりまーす。山中くんで良いと思う人は手を上げてください。」

委員長がそう言うと全員の人が手を上げた。満場一致で健斗が委員の一人になるということで決定してしまった。健斗はこの出来事にポカンと呆然としていた。

「はいっ！じゃあ満場一致ってことで、一人は山中くんに決定っていうことで。」

「だ、だからちょっと待てって！俺はヤだぞっ！絶対ヤだぞっ！大体――」

「つべこべ言うなっ！」

委員長が健斗を睨みつけながら、チョークを投げ飛ばしてきた。チョークは健斗の頬掠め、後ろに座っていた寛太に直撃した。

「痛いっ！」

寛太は思わずおでこを押さえた。健斗の額に嫌な汗が滲んだ。全員

がシーンと黙り込んだ。委員長はニヤリと笑いながら、コンコンと黒板を叩く。そこにははっきりと“山中健斗”と書いてあった。

「山中くん？やってくれるよ……ね？」

「ハ、ハイ……」

実は言うと委員長――黒澤茜（くろさわあかね――は、小学生のときから空手をやっていて、すでに黒帯を取得しているほどの有段者だった。あの佐藤よりも恐ろしい女でカリスマ性も優れている。今逆らったら、マジで殺される……健斗は受け入れるしか術がなかった。

健斗が頷くと黒澤はにっこりと微笑んだ。

「じゃあ、はい。山中くんに決定っていうことで、みんな、拍手～♪」

委員長の合図でみんなが次第に健斗に拍手を送ってくる。健斗はそんな光景をただ呆然と眺めていた。

すると突然、ポケットに入れてあったケータイのバイブが鳴り健斗はそれを取り出して見た。宛先は……ヒロだった。

件名：ブッフー（＾３＾）ゞ

今日はてめぇに散々こけにされたからな。まっ、頑張りたまえよ？しょーねん♪（≧≦◇≧≦）

その文面を見ると健斗はすぐにきっ！とヒロを睨みつけた。ヒロはニヤニヤと笑いながら健斗に手を振ってくる。

その調子こいた面に腹が立ち健斗は悔しさをこらえながら歯を食いしばった。

するとだった。委員長が自分に注意を引かせるために、また同じように手をパンパンと叩いてきた。

「はい。じゃあ委員をもう一人決めたいと思います。って言っても、どうせ決まらないだろうから、実は平等になるようにあらかじめ全員分のあみだくじを作っておきました。これを使って決めたいと思いまーす♪」

「だったら最初からそれを使えよっ！」

健斗が立ち上がってそれを指差して抗議した。最初からそれを使っておけば健斗が委員になることもなかったかもしれない。

しかし健斗が抗議した瞬間、再び健斗の頬をチョークが掠めた。先程と全く同じで、寛太の頭にそれが直撃する。

「何でッ！」

「山中くん？まだ……何か？」

「な、何でもないっす……」

健斗は大人しく座ることにした。これ以上何か言うと、今度こそ本当にやられるかもしれない……

委員長は鼻歌を歌いながら、そのあみだくじを黒板に広げてマグネットで止めた。よく出来ている……

「じゃあ名前順で名前書きに来てくださーい。」

委員長がそういうと、みんながざわめきながらそのあみだくじに名前を書きに行く。健斗はその様子をため息を吐いて眺めていた。これから面倒臭いことを色々と任されてしまうのか……しかも今決めようとしているのは、その一緒にやるやつだ。

――頼むからまともなやつになってくれよ……

麗奈とか寛太とか、そういういわゆる面倒臭いやつと一緒になってしまえば倍の苦労になってしまうかもしれない……

「お前も災難だね。」

名前を書き終わった寛太がこっちに戻ってきてそう言った。おでこが薄ら赤くなっている。健斗は大きくため息をつきながら言った。

「本当だよ……アノヤロー……後で叩き潰してやる。」

と呟きながらヒロを睨みつけた。ヒロは頭のいいやつだから、あれは戦略的だった。

ああいうのは大抵、誰かが推薦されれば面倒臭いのを避けようとし

てみんな便乗してくる。となると、もうそれを断ることが空気的に不可能になる。そうなったらもうなすがままにされるのがオチだ。

あいつはそれを見計らって、わざとあんな言い方をしたのだ。本当にずる賢いやつだ。

そんなこんなで、全員が名前を書き終わった。委員長がその結果を素早い動作で確認していく。

「……はいっ！もう一人の委員が決定しました。」

十分もかからないで、委員長がそういうとみんなが再びざわめき始めた。一体誰になるんだろう……と健斗も興味津々だった。

「発表します。もう一人の委員は……」

委員長の発表をみんな待つように、沈黙が流れた。一体誰が委員に決まったのだろう？

「もう一人の委員は……えっと～……早川さんですね。早川さんですっ！」

「えっ？」

「え！」

その名前を出されて健斗、そしてもちろん本人である早川も思わず驚きの声を上げた。まさか……早川になるなんて誰が予想していた

のだろう。健斗にとって最も意外な人物が当選してしまった。

「早川かぁ～？早川ならいいんじゃね？」

「しっかり者同士でちゃんとやってくれんべ～？」

みんながざわめきながらそういう。確かに、早川ならむしろ適任かもしれない。健斗は心の中でほっと安心もしていた……が、同時に複雑な気持ちも起こる。

「じゃあ、早川さんやってもらえますか？」

委員長が微笑みながら早川にそう言う。早川は少し戸惑っていた。

「は……はい……私で、いいんなら……」

「じゃあはいっ！これで委員が山中くんと早川さんで決まりました。みんな、拍手っ！」

委員長の合図で再び拍手が起こる。すると早川が振り返って健斗のことを見てきた。健斗と早川が目を合わすと、早川はにっこりと可愛らしい笑顔を見せてきた。

すると口の先で声を出さずに言ってくる。

――よろしくね。

それを読み取って健斗はゆっくりと笑いながら、小さく頷いた。

第10話　文化祭　前編　P.10

「痛い、痛い、痛い！ちょ、離せよ！おい！」

健斗は無理やりヒロの腕を引っ張って階段をかけ上がっていた。ヒロの抗議の声なんて聞かないでどんどん突き進む。

屋上のドアを開くと一気に風が吹き上げた。健斗はそんなことも気にせず、ヒロを屋上に連れてくると、ヒロを柵の前に押してやる。

「イテッ！なんだよ？怒ってんの？」

健斗はヒロの問いかけに答えず、息を荒くしていた。ヒロはそんな健斗を見ながら戸惑いを隠しきれず、どうすればいいのかおろおろとしていた。やがて、大部落ち着いたところで健斗がヒロの肩をがしっとつかんできた。

「……どうしてくれんだよ……」

「……はい？」

「はい？じゃねえよ！お、おま、おま、お前のせいで、とんでもないことになっちまったじゃねえかよ！」

フラストレーションが一気に爆発したかの如く、健斗は思いっきり叫んだ。ヒロは耳をぐっとふさいでそれに何とか耐える。

「と、とんでもないことって？別にいいじゃねえかよ。たかが委員

会だろ？ちゃちゃっとこなせば――」

「そこじゃねえよ！問題は！そこじゃねえんだよ！！」

「じゃあ、何が問題なんだよ？」

ヒロにそういわれて、健斗は急に口を閉じた。と、思うと突然後ろを振り返った。ヒロはそんな健斗の顔を覗き込もうとして、健斗の正面に回った。見ると、健斗は顔を赤くしていた。

「……どうしたの？」

「……だから、その……つまり……だな……」

「……？」

「……は、……かわ……と……」

「は？何？聞こえない。」

「だからぁ！……早川と……いっしょになっちまったじゃねえかよ。」

健斗のつぶやきを聞いて、ヒロはしばらくの間きょとんとしていた。さぁーっと風が吹き抜ける音が響いた。健斗はバツが悪そうに下をうつむいていた。すると、ヒロが手を顎に添えて「ははーん」と何かわかったような言いぐさをしてきた。

「なるほど。あ、なるほど。そういうことね。」

「……」

「つまり、あれだ？つい最近まで好きだった女の子と、二人っきりの委員会になっちまって、どうすればいいのかわからない……助けてー！って、わけか？」

「わかってんなら、みなまでいうなよ！」

ヒロは笑いながらあきれるようにため息をついて、柵がある方へと歩いて行った。そして柵によりかかると、苦笑いを浮かべて言った。

「別に大したことじゃなくね？お前の好きな奴は、早川じゃないんだろ？」

「それは……そうなんだけど……」

そのとおり。健斗の好きな人は、今はもう違う。健斗の本当に好きな人は、一番近くて、どこか遠く感じる存在。しかし、だからこそ……それが問題だったりする。

「それに、早川は知らないんだろ？お前が早川のこと好きだったってこと。」

ヒロのその問いに健斗は一瞬ギクッとした。そして、その反応に戸惑っていると、ヒロが驚きながら健斗に言ってきた。

「え？知ってんの！？」

「いや……知っているというか……」

「告ったの!?いつ?」

「こ、告ってねーよ。ただ……それに近いことは……したかも。」

健斗は確かに、早川のことがつい最近まで好きだった。それは揺るがない事実だ。だからこそ、色々頑張った。

松本事件のときも、早川が馬鹿にされた怒りから健斗は頑張ったところもあるし、あの日の晩健斗は告白紛いなことをした。

夏休みに入ったときには、早川と二人きりで市内でデートしたし、その日の帰り……あろうことか、早川のことを抱き締めてしまった上に勢いでそのまま告白をしようとした。またしても失敗したけど……

なのにだ。健斗はこの間、早川との帰り道……自分は麗奈のことが好きだと告白してしまった。あれだけ散々やっておきながら、違う女の子が好きだと言ってしまった。もしかしたら、あれは早川に対してとても失礼なことをしてしまったのではないか、と健斗は日にちが経つにつれ思い始めていたのだ。

「簡単に言えば……散々思わせ振りなことをして振り回しておいて、実は違う女が好きだったと……まぁ、それだけ聞けばお前はどうしようもねぇ、とんだクソ野郎だな。」

ヒロにはっきり言われて、健斗は本当に胸に何か尖ったものが突き刺さった思いになった。そんなダメージを受けている健斗を見て、ヒロは可笑しそうに笑った。

「いや、でも早川だぜ?あの早川が、お前に対してそんな風に思う

かな？」

「だからこそだよ。早川は優しいから、口にはしないけど……心のどこかで俺のこと軽蔑してんじゃないかなって思う。」

「そうかなー？考え過ぎじゃね？あのー、あれだよ。罪悪感的なもんに苛まれてるだけだよ。お前。」

「本当にそう思う？」

「まぁ、少なくとも俺はな。だって今までずっと見てきたわけだぜ？お前と麗奈ちゃんのこと。だから、仮に早川がお前の気持ちに気づいてたとしても、納得はしてるんじゃない？」

ヒロは自分でそういうと、まるで嘲笑うかのように健斗にいった。

「……つーか、俺は早川はずっとお前ら二人は両想いだと思ってると思うげどな。」

「は？何で？」

「いや、見てれば分かるだろ。この間も話したけど、年頃の男女が一つ屋根の下。行きも帰りもいつもいっしょで、事情を知らないやつから見ればただのイチャイチャカップルにしか見えないって。そんなやつをいちいち気にしたりすると思うか？」

「……まぁ、そうかも……そう、なるのかな……うん……」

「自分では自覚はなくっても、他人から見たら全然違う見方ってのはこの世界にはいっぱいあんの。まぁ、つまりだな。お前には最初

から麗奈ちゃんしか選択肢はなかったってわけだ。」

「そ、そんな言い方はないだろ。俺だって……早川のことは……本気だったし……」

でも、ヒロの言うことは何も間違っていない。好きな女の子がいて、ほかの子を好きになるということはよくあることだし普通のことかもしれないけど……健斗の場合は、そのどちらにも手をかけようとしていたと捉えられても仕方のないことである。実際そういう風になっていたのだから。そう考えると、健斗は耐え難く憂鬱な気分になった。自分の知らないところで知らない自分が作り上げられている気がして、変な気分だ。自分は全くそういうつもりはないのに。

そんな健斗を見ながら、ヒロはふーっとため息を吐いた。自分でも言い過ぎたと思ったのか、決まりが悪そうな顔をしている。

「とにかく、お前の問題は……自分の中の早川に対する気まずさを解消したいってわけだな？」

「まぁ、早い話で言えばそういうこと。二人っきりになったりしたら、何話していいかわかんなくなるよ。」

「……そんなん簡単じゃねえか。ちゃんと伝えればいいんだよ。」

ヒロにそういわれて、健斗はきょとんとした表情でヒロを見つめた。

「伝えるって？」

「だから、普通に。ちゃんと早川のことが好きだったってことを言

えばいいんじゃない？まぁ、変な話にはなっちゃうけどさ。誠意を伝えれば、仮に早川にお前が思うように思われていても、わかってもらえるんじゃない？」

「早川に告白しろってことかよ？」

「ちげーよ。お前は早川のこと、中二のころから好きだった。これは事実だろ？まぎれもない事実。それを、伝えればいいんだよ。」

「好きってことを伝えるんじゃなくって、好きだったってことを伝えろってこと？なんか……めちゃくちゃ変な話じゃない？それ。」

「わかってるよ。めちゃくちゃ変な話。でも、そういう何つーかな……誠意？純粋さ？そういうものを早川にわかってもらうんだよ。誑かしたり、思わせぶりだったんじゃない。あの時は、本当に早川のことが好きだった。それをわかってもらうんだよ。」

ヒロの言うことがようやくわかってきたような気がした。それでも、へんてこな話であるのには変わりはないし、早川からしたら急に何のことを言っているのかわからなくなるかもしれない。だって、これは健斗自身のやるせない思いの問題なのだ。

「早川……引かないかな？勘違いしたり……しないかな。」

「さぁ？そこはお前でうまくやれよ。でも……この間だって、似たようなことしたじゃん。自分が納得するまで、気が済まないんだろ？お前は。」

ヒロにそういわれて、健斗はしばらく黙りこんだ。やがて素直にうなずき返して見せた。そうだ。これは自分自身の問題だ。自分は今、

間違いなく麗奈のことが好きだ。その思いは揺るがない。だから、そのためには早川に対する想いと決別する必要がある。だから、ちゃんと早川にわかってもらおう。自己満に過ぎないが、健斗には必要なことなのだ。

「よし。この機会に……俺、やってみるわ。」

健斗は自分自身に誓いを立てるかのようにぐっと握り拳を握った。ところが、この決意が後に問題の引き金になることをこのとき健斗もヒロも予想なんてしていなかった。

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．１０（後書き）

ようやく、新展開になってきました。ここまで、お話がスムーズに進んでいます。

かなり方向性が替わってしまっているため、皆さんの反応が心配です……

もし、よろしければどんどん感想や評価をお願いしまーす！

あ、もう一つ！ここで告知するのも変な話ですが、近いうちに番外編を載せます。

番外編はグッラブ！2の方に載せるつもりです。投稿した日には活動報告の方で、発表いたしますので、ぜひ読者の方はチェックをお願いしまーす！

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．１１

先程の時間を使って、文化祭の委員会を決めた。委員会は半ば無理やり決められてしまった健斗と、くじで見事当選した結衣だった。麗奈、結衣、マナのいつもの三人はそのことについて話していた。

「あー、まさか当たっちゃうなんて思わなかったな。」

結衣が困ったように笑ってそう言った。確かに健斗を覗いて約３０人の中から当選してしまうなんて、結構引きが良い。

「本当よねー。結衣、今株が上がってんじゃない？宝くじ買えば、一等は無理でも二等か三等は当たりそうじゃない？」

「嫌だよ、宝くじなんて。賭け事にお金出すなんて、おじさんっぽくない？」

まぁ、確かにそういうイメージはあるかもしれない。麗奈は健斗のお父さんのことを思い浮かべていた。健斗のお父さんは、パチンコとか大好きだ。たまにびっくりする額を使って、お母さんに叱られている様子を度々見る。

商店街にある、この街唯一のパチンコ店は健斗のお父さんだけではなく、多くの大人たちから支持を得ている。商店街に買い物に行くとき、たまに八百屋のおじさんや魚屋のおじさんがパチンコの話をしてくれる。麗奈にはその楽しさや良さが分からないが、あの表情で話すということは相当面白いのだろう。

パチンコのことを話すおじさんや健斗のお父さんの顔は、まるで子

供たちが好きなＲＰＧの攻略法を話して自慢するそれと似ている。

「そんなことないよ。若い人でも宝くじを買ったり、パチンコにはまる人だっているじゃない。うちのおじさんもギャンブル好きだし。」

「へー？マナのおじさんって若い人なんだ。いくつ？」

「え？今年で４１だけど？」

「……」

「マナ……そこでおじさんの話を持ってくるのは、変じゃない？」

「え？どうして？」

改めて知ったのだが、マナって意外なところで結構天然が入っている。人のことが言える立場ではないが、そのとき麗奈は強くそう感じた。

「そ、それにしても、もう一人の人が健斗くんで良かったよ。」

「でも、健斗で大丈夫かな？あいつ、そういうのすごい苦手そうじゃない？」

マナがそう言うと、結衣は少し考えるような仕草を見せた。

「んー……どうなんだろう？麗奈ちゃんはどう思う？」

「え、私？なんで？」

突然話を麗奈に振られて戸惑っていると、結衣が笑いながら言ってきた。

「だって、麗奈ちゃんが健斗くんのこと一番分かってるじゃない？」

「今更否定しても遅いぞ～？うっしししし♪」

マナに茶化されながら、麗奈は恥ずかしそうにはにかんだ。いつの間にか二人の間では、そういう立ち位置になっていたなんて……

「……どうなんだろう？私、健斗くんの小学生や中学生の頃とか全然知らないから。」

自分で言って、ふとそう改めて感じた。麗奈は確かに今の健斗に一番近しい存在の一人になったかもしれない。でも、昔の健斗を思ったよりも知らないのではないだろうか。

健斗のお母さんやお父さん、あとは結衣や円、そして南先生から少しずつ聞いたことはある。でも、健斗自身からどういう風に学校生活を送ってきたのか（もちろん、翔の交通事故が起こる以前の話を前提に）麗奈は思ったよりも知らない。

「健斗くん、中学のときは体育祭委員やってたな。確か。」

「体育祭？神乃中には毎年体育祭があったの？」

「うん、あるよ。毎年5月にね。結構盛り上がるんだよ。あー、でも健斗くんは委員会嫌々って感じだったね。健斗くんとヒロくん、そして……翔くんの三人でジャンケンしたの。その結果、ヒロくん

の一人勝ち。翔くんがビリで文化祭委員、健斗くんが体育祭委員って感じで決まったんだった。」

懐かしい思い出を思い出しながら、結衣は楽しげにそう話した。麗奈はそれを見て温かい気持ちになりながら、ふっと笑った。

「じゃあ、健斗は基本的委員会をやるような人間じゃないってことか。」

「うん。少なくとも私はそういうイメージがあるな。小学生のときはどうかは知らないけど。」

「そんなんで大丈夫なの?健斗くん、足引っ張ったりしそうー。」

麗奈が冗談半分に笑ってそう言った。すると、結衣がそれに反論するように言ってきた。

「そんなことないよ。健斗くんは、すごく頑張り屋さんだってこと、麗奈ちゃんも知ってるでしょ?一度任された仕事はきちんとやり遂げるんだよ。体育祭委員だって、何だかんだで進行頑張ってたもん。だから、足を引っ張っるなんて絶対ないよ。」

結衣が結構早口で反論してきたので、麗奈は不意を突かれたような気持ちになり、きょとんとした。そんな麗奈に気づかず、結衣は嬉しそうに頬を赤らめて言った。

「健斗くんと作る文化祭、すごく楽しみだなー。フフフ♪」

そんな風に言って笑う結衣を見て、マナも嬉しそうに笑った。

麗奈も表面上は笑っていたけど、内心は複雑な気持ちだった。確かに、健斗が本当に頑張り屋さんだってことは誰よりも知っているつもりだった。そして、結衣の言う通り中途半端なことは嫌う。だから、与えられた仕事は一生懸命やるし、そんな健斗に麗奈は惹かれてしまう部分がある。

”人を惹きつける力”……それが健斗の元来備わっている、不思議な力。それは健斗が一生懸命だから、周りの人間も自ずと惹かれていく。

それを一番知っているのは、一番近くで見ていた麗奈のはずだった。それを考えると、先程の言動は浅はかだったな、と自分を戒めたい気持ちになった。

麗奈はふぅっと小さくため息を吐いて、楽しげにマナと会話をする結衣を見つめた。結衣は本当にすごい。全てを包み込む、聖母のような女の子だ。同じ女の子の麗奈ですら、結衣といっしょにいると心地よさを感じる。

きっと、今ごろ健斗はとっても喜んでいるんだろう。大好きな人と同じ委員会になれたってことは、今までよりもずっと多く二人の時間がとれる。今までよりも良い仲になるように進展しようとするだろう。

自分はそれに対して一体何をすればいいんだろう。健斗に対して、何をしてあげることが……二人にとって一番いいんだろう。そんなことはわかってる。でも、それを拒んでいる己がどこかにいるからだ。

それは単純な理由。麗奈の中に住み着く純粋な女の子の部分が、そ

れを嫌がっているのだ。麗奈はそんなことを思うと、軽く自嘲気味になった。

純粋な女の子の部分……か……そんなもの、自分にはもうとっくにないだろうと思っていた。それでも、汚れなき自分を大切にしたがっているのか。それとも……

「麗奈ちゃん？」

「え？」

結衣に突然話しかけられて、麗奈は思わず変な声を出してしまった。結衣を見ると、結衣は不安げな表情を浮かべていた。

「大丈夫？何かすごくぼーっとしてたから。さっきは言い過ぎちゃったね。ごめんね？」

「え、あ、あぁ……ううん！ち、違うの。ちょっと考えごとをしてただけ。全然、そんなんじゃないから。」

「本当に？怒ってない？」

「怒ってないよ～♪本当にちょっと考えごとをしてただけ。私こそごめんね？変な雰囲気出しちゃって。」

いつものように、麗奈は明るいトーンで話すと結衣は安心したかのように、いつもの可愛らしい笑顔を見せてくれた。それから、三人の話題は全く別のものへと移り変わっていった。

今日はいつもより早めに部活が終わった。麗奈は楽器と鞄を片手に昇降口で靴を履き替えていた。革靴に履き替えて、スタスタと薄暗い道を歩き始める。

恐らく、まだ健斗は練習中だろう。このまま待つのも暇だし、健斗の練習を見てみようかなと思った。ということで、麗奈はグラウンドの方に行くことにした。

グラウンドの階段を降りていくと、やがて比較的広いグラウンドが露になった。ふと気がつくと、横のスタンドに何人かの人が集っている。一体何の集まりだろう。明らかに学校内の人たちではなかった。

「あ〜！ちょっと、君！」

そのうちの一人の男性に声をかけられた。やけに髭が濃くてサングラスをかけ、口には煙草をくわえている。麗奈は一瞬驚き、その隙にその男は一気に距離を詰めてきた。

「君、ここの生徒だよねー？ちょっと、話を聞かせてくれないかなー？」

「話……ですか？一体何の？」

まさか、刑事かな?と思ったが、それは違ったらしい。刑事ならこんなに群れを作らないし、まず警察手帳を見せてくるのが義務だ。それに職質系統ならば任意同行のため、拒否だって可能だ。

だが、その男性はそういうのではない。単純に話を聞きたいという表情を浮かべている。

「いや、知ってるかな?この間の洗目との練習試合。いやー、あれには我々も結構驚いていてね、まさかこんな無名校が二軍や練習試合とはいえあの洗目を負かす実力があるとは到底思えなくてね。それに、残念ながら我々がその事実を知ったのは後日のことだから。いやー、何か面白い匂いが香っていてね。もしよかったら、その日の感想とかお聞かせいただけないかなー?」

「か、感想ですか?えっとー……」

麗奈は返答に困っていた。麗奈自身、そこまでサッカーに詳しいわけじゃないし、あのときは夢中だったから、何が何だかんだはっきり覚えていない。ただひたすら勝利を祈ってただけだ。

「何でもいいんだよ?例えば、どの人がすごかったーとか。このプレーがすごかったーとか。なんか、あるでしょ?」

「えっと、私……」

本当に困っていた。そのときだった。

「はいはい!うちのマネージャーに、手を出さないでくれますかー?」

突然後ろから肩を掴まれた。同時に土と汗の匂いがした。後ろを振り向くと、そこには寛太が麗奈の一段上に立っていた。

「この子はうちのマネージャーなんすよー。あの日野球部は遠征に行ってたもんすから、この子は試合を見てない。何も知らないし、何も話せない。お分かり？」

寛太の咄嗟の詭弁にその男性は唖然としていた。それは麗奈も同じ気持ちだった。

「よし！マネージャー行こうかー？ちゃっちゃとユニフォーム運んでくださいねー？マジ、ホント。」

そういいながら、寛太は麗奈を押すようにいっしょに階段をゆっくりと降りていった。全部の階段を降りて、グラウンドに降りると寛太はにぃっと抜けた歯を見せて笑った。麗奈もその笑顔を見て、安心するように笑った。

「ありがとう、寛ちゃん。助かったよー♪」

「なんのなんの！これしき！」

「でも、びっくりしたよー。何？あの人たち。」

麗奈が上を見上げて、その何人かの人を見つめた。すると寛太もそれを見つめて嫌そうな顔を浮かべた。

「隣町の新聞記者たちだよ。この間の試合のことで、色々取材に来てるんだ。ここ最近ね。」

「そうだったんだ……」

「健斗から何も聞いてない？」

寛太の問いかけに麗奈は黙って首を横に振った。それを見て、寛太はあきれるようにため息を吐いた。

「全くあいつは。」

「私に話すまでもなかったんじゃない？一々大げさにするようなことじゃないもん。」

「それでもこうなることを予想して、一応話しておくべきだと思うけどな、俺は。」

健斗の雑さに少し憤りを感じているようだ。麗奈も、出来れば話してくれても良かったなと次第に思い始めていた。

「あ、健斗呼びに来たんだろ。俺、呼んできてやるよ。」

「あ、いいよ。まだ練習中でしょ？」

「だいじょーぶ。今、サッカー部も野球部も自主練の時間だから。ちょっと、待っててな。」

そういうと、寛太はひゅーっとサッカー部の方へと走っていった。寛太の走っていった方向を見ると、そこには確かに健斗がいた。健斗は何やらグラウンドの横を何度も往復しているようだった。それから、寛太が健斗のところへ行くとほんのちょっと会話をしたあと、

二人そろって麗奈の方を見た。麗奈は小さく手を振った。すると、健斗は麗奈の方へゆっくり走ってきた。

「はぁ……はぁ……ごめん！もう部活終わったの？」

健斗が麗奈の前に立って息を切らしながらそう言った。

「うん。ちょっと早めに終わったの。はい、これ。」

健斗は大部汗を流していたので、鞄に入れてあったタオルを健斗に渡した。健斗はそれを素直に受け取って、「サンキュー」と軽く言うとそれで流した汗を拭った。

「俺、今自主練の途中なんだ。つっても、あと１０分くらいで終わるんだけど……」

「いいよ。ここで待ってる。」

「そっか。ワリィな。本当にあと１０分で終わるから。」

そういうと、健斗はまた元のグラウンドの位置へと戻っていった。それと入れ替わるかのように、寛太が再び麗奈の元にやってきた。

「頑張ってんだろ？あいつ。もう、かれこれ１０往復はしてんじゃないかな。」

「１０往復！？」

それは驚きだった。グラウンドの横とはいえ、推定１００メートルくらいはあると思われる。１００メートルを１０往復だから、合計

すると2キロ近く全力でダッシュしていることになる。とんでもない根性だ。

「すっかり元通りになったなー。あいつも。」

「やっぱり、そうなの？」

「んあぁ。小学生のころも、中学生のころも、あんな風にグラウンドを駆け回ってたよ。馬鹿みたいにさ。野球やってる俺ですら、サッカー付き合わされてさ。もう散々だったよ。」

そんな風に言うけど、寛太はどこか嬉しそうに笑っていた。それを見て、麗奈も嬉しそうに小さく微笑む。

「大森がこの町に来てからだな。」

「え？」

麗奈が聞き返すと、寛太はにやりと笑った。

「大森がこの町に来て、健斗の家に住み着くようになってから、あいつ段々変わっていった。大森が来る前のあいつは、完全に駄目だったんだぜ？すごい暗くて、生きていること自体がつまんなそうな面してた。」

それはヒロからも言われたことがある。麗奈が健斗を変えたって。それは、健斗の心に空いた大きな穴を埋めてくれているからだって。でも、そんなこと、麗奈にはよくわからなかった。ただ、誰よりも一番近くで健斗といっしょにいたい。本当にそれが一番の気持ちだ。

「健斗も実はめちゃくちゃ感謝してんだ。あんまり口にはしないけど。そういうやつだからなー。」

寛太の言いぐさに麗奈は可笑しそうにクスッと笑った。本当に、無愛想で意地っ張りで、口下手なのだ。でも……

「感謝してるのは、私の方だよ。」

麗奈がそういうと、寛太は健斗から麗奈に視線を向けた。

「ここに来るまで私……本当は心がずたずただったの。大袈裟かもしれないけど、本当はすごく怖かった。色んなこと。こっちでちゃんとやっていけるのかな、とか。そんなこと考えてたの。」

「……」

「でも、そんな私にね？健斗くんは、”家族”の温かさで癒しをくれたの。私に一番必要だったものを、健斗くんはいつの間にか私にくれていたんだ。健斗くんだけじゃない。結衣も、マナも、ヒロくん、そしてもちろん、寛ちゃんや円やナッチャン。みんなが、私に優しくしてくれたから……だから、本当に感謝してるのは……私なんだよ？」

「俺……あんまり知らないけど、少しは健斗から聞いてる。大森がどうしてこの町にわざわざ来たのか。父ちゃんの、仕事の都合とか。」

「……」

「あと、小っちゃい頃に母ちゃんを亡くしたことも。」

「……うん。」

寛太は後ろ頭をボリボリと掻いた。

「……俺も、なんだ。」

「え？」

寛太は少し苦笑いを浮かべて、恥ずかしげにつぶやいて言った。

「俺もさ、小っちゃいころに、父ちゃん亡くしてんだ。交通事故で……」

「そ、そうだったの？」

「うん。あんまり覚えてないんだけどな。うんと小っちゃいころだったから。ただ、俺、その……父ちゃんって、どんな感じなのかも忘れてるけど、なんつーかな。やっぱ、物足りねーよな。やっぱ。親は二人いねーと。」

「……寛ちゃん。」

寛太を見上げると、寛太は恥ずかしそうに笑っていた。

「だから、その……なんとなく分かるよ。いや、分かってる気になってるだけかもしんねーけどさ、大森の……なんつーか、寂しさっつーか……うん。ごめん。やっぱ、俺、こういう話苦手だわ。」

麗奈はそんな寛太を見ながらふっと笑った。寛太の精一杯の優しさ

が胸に溢れてくる。それだけで充分だった。

「……ありがとう、寛ちゃん♪」

「……おう。」

麗奈と寛太は二人そろって笑いあった。遠くに見える夕日が完全に地平線に沈んでいく瞬間、麗奈はなんとなく寂しい気にもなった。

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．１１（後書き）

ちょっとほのぼのとした感じになっちゃいましたね笑うん、でも、これがグッラブ！の良さなんだ！

寛太の父不在は最初から決めてあった設定でした。ちなみに今回のお話しでは出なかったですが、彼には五つ下の弟がいます。彼は常に明るいでしょ？それって、父不在から来ているんです。父がいない分、自分が家族の明るみを保とうと健気に頑張っているところから来ているんです。

実際にも母子家庭っていっぱいいると思います。その中の長男の立場、非常に複雑だと思うんです。色んな欲求を我慢しながら、常に家族の柱でいなければならない。非常に辛い立場だと思います。

父子家庭にしろ、母子家庭にしろ、残された家族だけで生活をやりくりしていくことはきっと僕なんかが考えているよりも遥かに大変なことなんだと思います。僕なんか、三人兄弟の中間だし、親もちゃんといるから、実際は何不自由なく暮らしてきたなと思います。そんな僕が、母子家庭や父子家庭のことを語っていいのかな？とさえ、思います。

ただ、その中で塞ぎ混んでしまう子―それが麗奈です。そして、その中で常に明るくいようとする子―それが寛太。そんな二人が互いの心境を話し合ったとき、お互いどんな風に影響するのかな？と考えます。

麗奈に、良い影響が与えられてたらいいな♪

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．１２（前書き）

よっしゃあ！

一気に２話分を掲載しました！

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．１２

健斗の自主練が終わる頃には、時刻は7時を回っていた。校門の前で先に待たせている麗奈の元に健斗は急いで自転車を漕いでいった。

校門の前では、麗奈が門によりかかるようにして待っていた。健斗はその姿を見ると、より一層スピードを上げた。

「ワリィ！めっちゃ待たせたな。」

健斗がそういうと、麗奈は首を横に振った。

「ううん。そんなに待ってないよ。健斗くんの練習してるとこ見てて楽しかったし。……あれ、ヒロくんは？」

「あ、あいつなら先帰った。何か、用事があるんだって。」

何かは知らないが、先に帰ったというのは本当だ。健斗の自主練に付き合った後、ものすごいスピードで帰っていった。

「ふーん……じゃあ、帰ろっか？」

そういうと、麗奈はぴょんっと飛び乗るように健斗の自転車の後ろに乗った。もう、すっかり慣れてやがる。それは当然のことで、麗奈がこの町にやってきてから半年近く、健斗はこうして麗奈を後ろに乗せているのだから。

「健斗くん、すごい頑張ってたね？」

「そう？いつもあんなもんだよ。あ、タオルありがとうな。」

「めっちゃ走ってたじゃん。さすがサッカー部♪」

「吹奏学部だってたまに走ってるだろ？」

吹奏学部だって、あの大きな管楽器を吹くためにはものすごい肺活量がいる。それを鍛えるために、ちょくちょく校舎周りを走っていることを、健斗は知っていた。

「あれは大したことないよー。みんな結構話しながらとかだもん。」

「ふーん。まっ、俺の唯一の欠点が体力だからな。それを補ってこそ、俺は最強になるのさ！」

「ほほ～、言いますねー？」

少し豪語し過ぎたかもしれないが、体力が欠点というのは本当のことだ。その欠点を補うだけの、練習をしているだけ。

でも、本当はまだまだ全体的にベストとは程遠い状態だった。身体の鈍りというのをやはり感じるし、練習のゲーム中時々足が縺れることがある。

他のみんなは気づいてないが、小山さんには思いっきりそれがバレている。

「健斗くん、体力がないって自分でも分かるの？」

「当然。この前の試合でも思わなかった？」

「まぁ、確かに辛そうだったけど……」

「サッカーって結構持久戦のところがあるんだよ。相手も辛い中、自分がどれだけ頑張れるかによって変わってくる場面が結構ある。この間は本当に無茶したからさ。」

「ふーん……確か、”剛”のドリブルだっけ？あれを使うと、一気に体力がなくなっちゃうって。」

「あぁ、うん。誰かから聞いた？元々、俺はドリブルってあんな感じでスピードで抜くのが得意なんだ。でも……これ、前に南ちゃんに言われたんだけど、身体と能力の不一致。」

「身体と能力の不一致？」

それは三年前の、中2の春のことだ。健斗、ヒロ、そして翔の三人で保健室に遊びに行っていた。健斗は予々南ちゃんに、自分の試合中の疲れやすさについて相談していた。そして、その日三人分のお茶を出されたときに南ちゃんが言った。

「山中くんの疲れやすさの原因は、身体と能力の不一致から来てるんだと思うな。」

「身体と……何だって？」

翔が熱いお茶を啜るように飲みながら聞き返した。

「身体と能力の不一致。まぁ簡単にいえば、山中くんの身体はその能力に見合ったようには出来てないってこと。」

「あ～！そーゆーこと。」

南ちゃんの話を理解したのはヒロだけ。健斗と翔の二人は顔を見合わせて、首を傾げてみせた。

「全然分からないんだけど……」

健斗がそういうと、ヒロと南ちゃんは顔を見合わせて呆れるようにため息を吐いた。まるで頭の悪い二人を小バカにしているみたいだ。

「山中くんの５０メートル走は何秒だったかしら？」

「俺？確か……5秒前半。」

「そう！それよ。その普通じゃ考えられないタイム。他の子の平均タイムは7秒後半なのに、山中くんはその2．5秒も早い。じゃあ、今度は身長と体重は？言ってみなさい。」

「えっと……身長が１５２センチで、体重が４８キロ……」

「あ、お前今盛ったな？そんなに身長ないくせに。」

翔に茶化されるような言い方をされて、健斗はむっと少し怒りを覚えた。

「失礼だな！この前測ったらあったもん！」

「うっそだぁ～！俺より一回り小さいくせに？」

「そんなにかわんねーだろ！嘘じゃねーよ！」

「はいはい。そんなことどうだっていいから。それより、それをどう思う？」

南ちゃんにそう言われて、健斗はまだ分からないと言ったような顔をした。それを見て、南ちゃんはさらに説明を加えた。

「山中くんの身長も体重も、他の子と大差ない。まぁ、むしろちょっと小柄の方と言ってもいい。それなのに、走力は他の子より約２倍近くある。つまりね？」

南ちゃんはコツコツと靴音をたてながら、健斗に近づいてきた。そして、しゃがみこんで健斗の足から肩までギュッギュッと握ってきた。

「山中くんの身体は自分の能力に釣り合ってないのよ。ダッシュは足だけじゃなく、全身の筋肉を使うの。だから、人並み外れた能力に人並みの身体がついてこれず、すぐに悲鳴をあげちゃうってわけ。お分かりかしら？」

南ちゃんの言うことがようやく分かった気がした。確かに、試合後や５０メートル走のあとでも何故か全身に強い疲労感、そして激しい筋肉痛が伴う。

それに慣れているから、あまり気にしたことないが、あれはかなり

しんどい。

「まぁ、早い話。健斗の身体が貧弱ってのが原因ってことか。」

翔の言い方にはちょっとむかっとするが、言ってることは間違ってはいなかった。

「俺、どうすればそれ直せるのかな?」

健斗が聞くと、南ちゃんは立ち上がってにやっと笑うと、いきなり健斗の頭を鷲掴みしてきた。

「よく食べて、よく動き、よく寝ること!あと、早寝早起きも重要ね!」

「え?それだけ?他にはなんかないの?」

「ないわよ〜。むしろ、それが最短の道のりよ。」

「ってなことがあったなぁ。」

「へぇ〜。」

帰り道の途中にあったコンビニで健斗と麗奈はアイスを購入して、二人で自転車を押しながら歩いていた。そう、健斗の体力の原因はそれだということがわかっていた。だから、今日みたいに走り込みをやることで全身の筋肉をつけながら、体力も強化しているというわけである。ほかにもいろいろあるだろうが、まず基礎的なところから鍛えていこうと健斗は思ったのだ。

「あの走り込みの中にも色々考えてたんだね。」

「まぁな。」

「う～ん……でも今見たら健斗くん、そんなに小柄ってわけでもなさそうだけどね。」

「そりゃ、あれから三年は経ってるわけだし、俺だって成長期というものがあったんだよ。」

「ふーん。男の子ってすごいね？中学2年生のとき１５２センチでしょ？私もそのときそのくらいで、今と変わらず。でも、今じゃ健斗くんのこと私見上げてるもん。」

「だろ？男の子のポテンシャルをなめんなよ。」

「何よ、それ。」

麗奈が可笑しそうに笑ったので、健斗もつられて笑った。そして、健斗は手に持っていたアイスを一気に食べ尽くした。

「よし。そろそろ再出発するか。後ろ、乗れるか？」

「まだ食べてるけど……うん、多分大丈夫。」

麗奈はそういうと、健斗の自転車の後ろにぴょんっと飛び乗った。
それを見てから、健斗は再び自転車をこぎ始めた。

しばらく走ると安定してきて、麗奈は何の気もせずアイスを食べ続けていた。

「私って、二人乗りのスペシャリストだよね？」

「……どこが？」

「こうやって、いかにして自分が乗りやすいポジションにつく辺り。」

「そっちかよ！あのなぁ、何度も言うけど、そっちのスペシャリストになるんじゃなくって、漕ぐ方のスペシャリストになりなさい。お父さんからのご通達です。」

「そんなの聞いてないもーん。別にいいじゃない？健斗くんだってそっちの方がいいでしょ？」

「何が？」

健斗は後ろを振り向いて聞くと、麗奈が口元に笑みを浮かべて健斗のことを上目遣いで見つめた。

「こんな風に……二人っきりになれるでしょ？」

「……！！」

健斗はその表情とその言葉にやられてしまったかのように、顔が一気に熱くなるのを感じた。思わず、自転車の運転がままならなくなるくらいに。

すると、数秒後に麗奈が健斗の顔を見ながら、可笑しそうに笑ってきた。

「アッハッハッハ♪なーんてね。健斗くん、顔真っ赤になったー！」

「なっ！なってねーし！別になってねーし！俺！」

とは言ってみるものの、正直赤くなっているという自覚はあった。分かっている。これは、麗奈がいつものようにそういうのに弱い健斗に対するからかいの行為だっていうこと。だから、健斗もこれまでにそこまで強く反応をしたことがない。

しかし、今のは反応せざるを得ない。理由なんてたかが知れてる。好きな女の子から、そんな風に言われてしまっては……もう、どうしようもないじゃないか。

だから、健斗は反応が隠せなかった。冗談で言ってるにしろ、健斗にとっては本気で捉えかけてしまう言葉なのだ。

「私と二人きりの時間を過ごしても、健斗くんにはどうでもいいことだもんねー。」

「え？」

麗奈に突然そういわれて、健斗は意味が分からないというような顔をした。

「だって、結衣ちゃんといっしょにいる時間の方が健斗くんには大事でしょ？」

「え……あ……」

そうだ。麗奈は知らない。健斗の気持ちは、今や早川には向いていないということを。麗奈は今でも、健斗は早川のことが好きだと思い込んでいるのだ。だから、このようなことを言ってくるのだ。

「結衣ちゃん、喜んでたよー。健斗くんといっしょの委員会になれて……」

麗奈の話すトーンが少しずつ下がっているのに、健斗は気づいていた。しかし、それをどのように返せばいいのか分からず「そっか。」と言って、素っ気なく返事をした。

「……お似合いかもね。」

「え？」

「健斗くんと結衣ちゃん。お似合いの二人だと思うよ。」

「……何言ってんだよ？」

こんなこと、麗奈は一度も言ったことがなかった。それに、

麗奈……お前は、俺のこと……好きだって……

それなのに、どうしてそんな風に言うのかが分からなかった。分からなかったから、健斗は黙っていることしか出来なかった。

「ごめん……何言ってるんだろう……自分でも分からなくなってきちゃった。」

「……何かあったの？」

「ううん。別に……ただ、自分自身の問題。」

「自分自身？」

「そう。健斗くんが自分自身と向き合ったみたいに、今度は私の番かなーって……最近ね？時々そう思うときがあるの。」

「……それって、この間言ってたことと関係あるとか？」

「この間のこと？」

麗奈が顔を上げて健斗に聞いてきた。健斗は後ろを振り向かず、しばらく考え込んだ。忘れたとは言わせないし、忘れることは出来ない。

「ほら、この間言ってた。中学のとき、嫌なことがあったってこと。」

健斗がそういうと、麗奈はまた口を閉ざした。しばらくの間、風によって稲の穂の擦り合う音と、健斗がひたすらこぎ続ける自転車の

音が流れた。

すると、麗奈が下を俯いたまま、クスッと笑った。どんな表情をしているのかは、定かではない。

「私ね、好きだよ。健斗くんのこと。」

「え!?」

突然告白をされて、健斗は大きな声をあげてしまった。

「特にここ最近、もっと好きになってきてる。すっごく……健斗くんのことが好き。私は……ね?」

「あ、あ……うわっ!」

あまりにも唐突な言葉の羅列により、健斗は動揺してバランスを崩してしまう。すると、麗奈がぴょんっと後ろから降りた。そして、手に持ってたアイスを一気に食べ尽くす。

健斗は突然の行動に理解出来ず、後ろを向いて麗奈のことを見た。

「もー、危ないなぁー。」

「だ、だってお前が急に変なこと言うから……」

「変なことじゃないよ。本当のことだもん。」

「だ、だとしたら、何で今それを言うんだよ。」

健斗が顔を真っ赤にしてそういうと、麗奈はクスッと小さく笑って健斗に再び近づいてきた。

「健斗くんは優しい人だから、私のことを突っぱねるのが可哀想だって思ってたんだよね？だから、健斗くんはいつだって私の側にいてくれた。他に好きな女の子がいても、私のことをずっと気にかけてくれてたんだよね。」

「それは……」

健斗は何も言い返せなかった。麗奈の言い方では、まるで麗奈の境遇に同情してるから……と言っている。でも、そんなことあるはずない。麗奈が可哀想だからなんて、思ってない。なのに……

「私ね、それでもいいと思ってた。健斗くんが結衣ちゃんのことを好きでも、私の傍にいてくれるなら、それでもいいって。だから、このブレスレットをもらったときはうれしかった。健斗くんの傍にいていいんだって、思えたから。」

そういって、麗奈はブレスレットの部分をぎゅっと握った。本当に大切そうに握った。麗奈の言ったとおりだった。健斗は、そのつもりで麗奈にブレスレットを渡した。そばにいてほしいから。自分の一番近くにいてほしいから。それも、言葉にすることが難しい。だから、その意味でブレスレットを……麗奈に渡したのだ。

「でもね……これからのことを考えると、それじゃ、駄目なのかなって……」

「……これからのことって？」

「健斗くんと結衣ちゃんが恋人同士になること。」

「……はっ!?」

突然の麗奈の言葉に、健斗はまたもや驚きの声を上げてしまう。

「な、なな、何言ってんだよ。そんなことあるわけないだろ?第一、早川が俺なんかのこと――」

「あるよ。健斗くんは鈍感だから、気づいてないかもしれないけど。結衣ちゃんはね、今、健斗くんにすごく惹かれてるよ。」

「え?」

健斗には信じられないことだった。そして、それを聞いたときありえるわけがないとも思っていた。麗奈は知っているはずだ。早川は、今でも翔のことが好きなのだ。しかし、健斗はその言葉を聞いたとき……あの日の早川の言葉を思い出していた。

『もう今は違うの。健斗くんは私の中で……翔くんと同じくらい大切な人……すごく大切な人なの。だから……』

でも、あれは友達の意味だといっていた。だから大した意味じゃない。友達として……そう、友達として。

「だからね、それを踏まえて……もう一度、健斗くんの気持ちを知りたい。これが……私の今の気持ち。」

「……俺の……気持ち?」

麗奈はまっすぐ健斗の瞳を見つめた。健斗もそれを見つめる。お互いしばらく何も話さない。

健斗の気持ちを、麗奈は聞きたがっている。それは、つまり……健斗が麗奈のことをどう思っているかということを聞きたがっているということだ。健斗の中で、はっきりした答えは決まっている。それは間違いない。なのに、どうして躊躇しているんだろう。

その原因は、健斗の迷いにあった。このまま麗奈に自分の気持ちを伝える。麗奈も健斗のことを好きだと言ってくれている。健斗も麗奈のことが好きだ。つまり、両想いだということが確定する。もうほとんど確定しているようなものだ。しかし、今健斗がその気持ちを伝えたことで……明日からどうなるのだろう。麗奈と恋人同士になるのだろうか。

健斗にはその自信がなかった。今、ここで麗奈に気持ちを伝えて、明日から二人は恋人同士。そんな簡単な間柄ではないはずだ。そんなものではない。今までずっと“家族”だった。その絆が壊れるのかもしれないのだ。そんな、簡単なものではない。

そしてもう一つ。早川のことだ。健斗はつい最近まで、本当に早川のことが好きだった。それを、そのままにはできない。早川に伝えると決めたばかりだ。それをしないまま、麗奈に告白しても自分の中の迷いが途切れることはない。だから……

だから健斗は何も言わなかった。麗奈の視線が痛くって、下をうつむいた。自分の心臓の鼓動だけが聞こえた。麗奈が今、どんな表情をしているのか、健斗にはわからなかった。

やがて、時がたつと……麗奈はさらに健斗に近づいてきた。と、思

ったら突然自転車の後ろにゆっくりと乗る。健斗が麗奈を見ると、麗奈はさびしそうな表情で笑っていた。

「うん……分かった。健斗くんの気持ち。」

「……え？」

自分の気持ち？麗奈はいったいどのように解釈したのだろうか。まだ何も伝えてないのに、麗奈は本当に健斗の気持ちをわかったのだろうか？聞きたかったのに、それすら言葉が出なかった。

「変な話してごめんね。そろそろ、行こうか？」

「麗奈……」

「ほら、早く！もうずいぶん時間がたっちゃったよ。」

麗奈は顔を上げず、表情を見せようとしなかった。健斗も言われたとおりに、再び自転車をこぎ始める。すると、そのとき初めて風が全く吹いていないことに気が付いた。

いつもの帰り道をいつもの二人で帰っている。なのに、健斗は後ろに本当に麗奈が乗っているのか……もしかしたら乗っていないんじゃないか……そう思えてならなかった。

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．１２（後書き）

はい。

というわけで、とってもシリアスな雰囲気になってきました。読者のみなさまは、この健斗と麗奈のやりとりをどのように感じたでしょうか？

麗奈はどうして急にこのような話をし始めたのか、それは……やはり、過去のことと絡んでいるのかもしれないですね。そして、もう一つは結衣の存在が大きいのかもしれません。

さて、健斗の気持ちをどのような解釈してしまったのか？そして、これから健斗はどうするのか？

次回、文化祭　前編のラストでございます。続いては、第１１話文化祭　後半を御送りいたします。

楽しみにしててくださいねー！

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．１３（前書き）

第１０話　文化祭　前編のラストです！

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．１３

次の日の朝、健斗はばっと起き上ってカーテンを開けた。朝日が目に染みてまぶしい。

昨日はよく眠ることができなかった。机の上においてある鏡で自分の顔を見てみると、ひどく疲れた顔をしている。しかし、時刻は朝の七時。そろそろ起きて、朝の支度をしなくてはならない。今日はゴンタの散歩に付き合っている時間はないようだ。

すると、ケータイに一通のメールが届いていることに気が付いた。どうやら昨日の夜にメールが届いていた。送り主は、なんと早川だった。その名前を見ると、少し胸が痛んだが、それは早川に対して失礼だ。健斗はケータイを開いてメールの内容を確認した。

件名：夜遅くにごめんね。
本文：こんばんは。夜遅くにごめんね。文化祭委員会、同じになれてよかった！私、中学のときにやってたからわからないことがあったら何でも聞いてね。頑張って、良い文化祭を作っていこうね。とりあえず、近いうちにクラスの出し物を決めましょう！

ほら。早川は本当にいいやつだ。こんな風にメールをくれると、憂鬱だった委員会も楽しく思えてしまう。そんな早川に、なんだかもやもやした感情を抱くのはよくない。絶対によくない。いつもどお

り、普段通り、接しよう。

件名：おはよう！
本文：昨日結構早く寝ちゃって、メール返せなくてごめん！俺も同じ人が早川でマジよかったよ。やるからには、全力でやろうぜ。わざわざありがとう！

ちょっと本文が少ないかな、と思ったが、朝だしこのくらいがいいだろうと思って早川にメールを送信した。ふぅっとため息を吐くと、自分の部屋を出て、一階へと降りていく。一階の居間にはすでに父さんと母さんが起きていた。父さんはタバコを吸いながら、新聞紙を広げて、テーブルの上には一杯のコーヒー。母さんはいつも通り、キッチンで朝ご飯を作っていた。健斗はそれを見てから、洗面所の方へと向かった。

廊下を曲がる角のところ。ばったり麗奈と出くわした。麗奈は健斗の顔を見て驚いた顔をしていたが、健斗も結構驚いてしまった。

「おはよう。びっくりしたー。今起きたの？」

「あ、えっと、まぁ、うん、そう。」

なんだかぎこちない返事になってしまう。やはり昨日のことが引っかかっていた。しかし、当の麗奈は全くそんな色が見えない。本当

に普段通りで健斗に笑顔を見せてきた。しかも、すでに制服に着替えていて髪もちゃんと整っていた。

「もう朝ご飯できてるってさ。早く顔を洗ってこないと、私が健斗くんの分食べちゃうからねー。」

そういって麗奈は健斗の横を通り過ぎて、居間の方へと向かっていった。健斗はその後ろ姿を見つめながら思わず「麗奈。」と声をかけた。すると、麗奈は立ち止まって健斗の方を再び見た。

「何？」

「あ、あの……あのさ、その……なんつーか……昨日のことなんだけど。」

このぎこちない感じはなんだろう。麗奈相手に、どうも緊張しているみたいだった。健斗は息を大きく吸い込んだ。

「俺は、その……だから、つまり……えっと……」

「……あー！そうだ！」

「え？」

突然麗奈が大声をあげたので、健斗はびっくりして顔を上げた。すると麗奈はしかめ面をして、ずかずかと健斗の方に歩み寄ってきた。

「健斗くん！この間、私のシャンプーまた勝手に使ったでしょー？」

「あ、えっと……ちょうど切れてたから。」

「だからって勝手に使わないでって何回も言ってるでしょ！？高かったんだからねー？次、勝手に使ったら……罰金５０００円！」

「う、わ、わかったよ。結構リアルな値段だから、ぜってぇつかわねぇ。」

「ならよろしい。ほら、早く顔を洗ってきなよ。」

そう言って、麗奈はくるりと踵を返して居間の方へすっと消えていった。健斗はぽかんと口を開けて、まるで風のように消えていた麗奈の跡を見つめていた。そして、大きくため息を吐いて自分を戒めるようにゴツンと壁に額をぶつけた。

「……なんでいえないんだ……俺……」

そして、顔を洗って、いったん自分の部屋に戻って寝癖や何やらを整えた。それから、制服に着替えて、朝ご飯を食べるために一階へとまた降りて行こうとした。階段を降りて、居間の方へと向かう。

居間に入ると、そこには先ほど見た光景と同じで、父さんが座って新聞を読んでいて、母さんはキッチンにいる。そこに麗奈の姿が見えなかった。

「おう、おはよう。」

父さんが健斗に気が付いて声をかけてきた。健斗は「おはよう。」と一言言うと、父さんの向かいにゆっくりと座った。すると、ほぼそれと同時に母さんが次々と朝ご飯のメニューを出してくる。今日の朝ご飯は納豆、味噌汁、卵焼き、サラダだった。健斗は箸を手に取り、納豆に醤油を入れてかき混ぜ始めた。

「麗奈は？」

「ん？麗奈ちゃんなら先に学校に行ったぞ？」

「え？なんで？」

「今日は早めに行かないといけないって言ってたけど。聞いてないのか？」

父さんにそういわれて、健斗はゆっくりと首を横に振った。学校に早めに行かないといけないなんて、一言も聞いていない。今日は、麗奈は日直だっただろうか。正直、その線は薄いと思われる。健斗には麗奈が先に学校に行ってしまう理由や用事なんて見当もつかなかった。

「……なんだ、また喧嘩でもしたのか？」

父さんがやれやれとあきれるような言い方で言ってきた。健斗はそれにむっとした表情で答える。

「別にしてねぇよ。俺だって知らねぇもん。先に行った理由なんて。

」

そういいながら、徐々に不機嫌になっていく自分がいる。止めよう。朝からこんな気分じゃ一日が持たない。別にたまにはいいじゃないか。麗奈には何か理由があって、たまたま今日は先に学校に行かなくてはならない日だったのだ。

それならなんで健斗には何も言わなかったのだろう。健斗に言う時間がなかったのだ。そうなのだ。昨日は健斗は帰ってから結構早く就寝についた（ほとんど眠れなかったけど）。だから、今日の朝も健斗の方が遅くに起きてきたら、そのことを伝える暇がなかったのだ。

自分でそう解決する。これ以上このモヤモヤを持っていると、気持ち悪くて吐いてしまいそうだ。健斗はそう思い、そのモヤモヤを流し込むため納豆ごはんを一気に口の中に運んだ。

それから、学校にいつも通りの時間についた。朝のＨＲを告げるチャイムが鳴る五分前だ。麗奈もいつもならこの時間に健斗といっしょに教室に入る。

だが今朝は違った。健斗が一人で教室に入ると、すでに麗奈は教室

で楽しそうに佐藤や早川とおしゃべりをしていた。健斗が教室に入ってきたことも気づいていないみたい、いや、むしろ全く無視をしているようにも見える。健斗はそんな麗奈を見ながら、不満げに自分の席に着いた。

「なんだよ、あいつ……俺のことは無視かよ……」

一人気にそうつぶやいていた。すると、健斗が自分の席に座るのと同時に、いつもの調子でいつもの感じでヒロが健斗の席にやってきた。

「いやー、少年。昨日は災難でしたなー。委員会の仕事、今日からですけど頑張ってね？うへへへへへ。」

そんな風に悪趣味に笑うヒロをギロッとにらみつけた。その視線にヒロはびくっと体を震わせる。どうやら健斗の不機嫌さを身を通して感じたらしい。

「……さぁて……そろそろ朝のＨＲが始まるか、な……」

踵を返して自分の席に戻っていこうとする、そのヒロのクリクリの坊主頭をわしづかみにした。

「ヒロ。ちょっと、来い。」

「へ……な、なんで？」

「いいから来い。今すぐ来い。」

「ちょっ！朝のＨＲどうすんだよ！」

「んなもん知るか！」

「あれ？これ……前にもあったような……逆の立場で……ってあ～れ～！」

「はぁ？お前はまたよく分からないことになってんのね。」

「よく分からないのはこっちの台詞だよ。俺だってどうすればいいのか分からないんだから。」

健斗とヒロは朝のＨＲをさぼって、自動販売機で飲み物を買っていた。ヒロは面倒くさそうな顔をして、お金を入れて、ボタンを押した。すると、がっこんと音を出して缶コーヒーを手に取り、ふたを開けてぐいっと飲み始める。

「つーか、それって結構やばいんじゃないの？お前の気持ちがわかったって……麗奈ちゃん、お前が早川のことを好きだって勘違いしているままってことにしか思えないんだけど。」

「やっぱりそうだよな？うわぁ～……」

健斗はヒロに昨日の晩のことから、今朝のことまで全部話した。昨日麗奈が突然言ってきたこと、そしてそれから一夜明けた麗奈の今朝の行動。すべてを聞いたヒロは……

「明らかに、昨日の晩のことと麗奈ちゃんの今朝の行動は関係してるだろ。」

「やっぱそうなのかな。だとしたら、どういうつもりなんだろう？」

「さぁ？お前に愛想尽かしたんじゃないの？」

「それって……つまり……」

「つまり、嫌われた？ってこと。」

その言葉が重くのしかかってきた。やっぱり、そんな感じはした。麗奈は表には出してないけど、裏ではかなり怒っているのかもしれない。健斗はそう思うとひどく気落ちした。どうすればいいのか、さらにわからなくなってしまったからだ。すると、そんな健斗を見ながらヒロはおかしそうに笑った。

「冗談だって。本気にするなよ。今朝は普通に話したんだろ？」

「まぁ……話したけど……でも、なんかさ……」

「簡単な話だよ。麗奈ちゃんは、お前が早川のことを好きなんだって思ってる。ただそれだけの話じゃん。ちゃんと麗奈ちゃんに気持ちを伝えれば、すべては丸く収まる。アーユーオッケー？」

「ノーオッケー。簡単に言うなよ。気持ちを伝えればって……だって、それが難しいんだから。」

昨日も考えた通り。麗奈に告白して、明日からは恋人同士なんて風にはきっとなれない。健斗と麗奈は、そんな間柄ではないのだ。だから、麗奈に告白をしろって言われても……それは、難しいのだ。

「まぁ、早川相手に二年半近く片思いしてきたわけだろ。そんなやつが、しかも麗奈ちゃん相手に告白しろってのも無理な話か。」

それもある。実際、早川相手にだって二年半という長い時間、ずっと自分の気持ちを言えないままだったのだから。告白なんてしたことないし……ましてやそれが麗奈なのだから、あのときできるはずもなかった。一番近くにいるはずなのに、一番遠くにいる気がする。そんな風に思ってしまう。

ヒロは落ち込んでいる健斗を横目で見ながら、ふぅっとため息を吐いた。そして手に持っていた缶コーヒーを一気に飲み干して、ごみ箱の中へ投げる。

「でもさ、難しくても、恥ずかしくっても……やっぱり昨日の時点で、麗奈ちゃんにちゃんと思いをぶつけるべきだったと俺は思う。」

「え？」

突然ヒロが真剣そのもののトーンで話してきたので、健斗は顔をあげてヒロを見つめた。そのとおり、ヒロは真剣そのものの顔をしていた。

「麗奈ちゃん、本当にお前のことが好きなんだよ。だからそれをも

う一度わかってほしかったんじゃない？きっと、そういうきっかけが昨日か一昨日かに何かあったんだろうけど……わかってほしかったうえで、お前の気持ちももう一度知りたかった。要は、気持ちの再確認ってやつだよ。」

「……うん。」

「でも、お前は何も言わなかった。だから、麗奈ちゃんはお前はやっぱり早川のことを好きなんだって……思ったままになっちゃったんだと思う。」

「黙っちゃったから……麗奈は勘違いしたままってことか。」

確かに、昨日健斗は麗奈のすべての言葉に対して一言も返せなかった。ただ麗奈の言葉を黙って聞いていただけ。それを麗奈は、健斗は麗奈の気持ちを受け入れることはできないという風に捉えてしまったのだろう。

「まぁ、お前の気持ちもわかるよ。でも、それ以上に昨日の麗奈ちゃんの覚悟の方を優先してやれよ。」

「……うん……そうだな。」

ヒロの言うとおりだ。昨日、麗奈の気持ちに健斗はちゃんと向き合って答えるべきだったのかもしれない。たとえ、明日からは“家族”としての関係は消えて恋人ともいえない、なんとも微妙な関係になってしまったとしても、それは時間がきっとなんとかしてくれるはずだ。何も考えず、麗奈の気持ちにこたえてやるべきだったのだ。むしろ、告白経験のない健斗にとっては願ってもない大チャンスだった。健斗は自らそれをつぶしてしまったのだ。

ヒロは健斗を見てにやっと笑った。

「うっし。じゃあ今から言いに行くか。」

「うん……ん？え！？」

ヒロの突然の提案に健斗はまさに度肝を抜かれる気持ちになった。

「ちょ、ちょっと待て！今から！？」

「そうだよ？善は急げっていうじゃん。お前も早めに麗奈ちゃんとのわだかまりをときたいだろ？」

「そうだけど、いや、でもちょっと待て！まだ心の準備っていうか……それに、早川の件もまだ済んでないわけだし。」

健斗がそういうとヒロはピタッと足を止めて、健斗の方を振り向いた。急にヒロがそんなことをしたので、健斗も思わず立ち止まってしまった。

「……そうそう。もう一つ言っておきたいことがあった。」

「え……な、何？」

「これからは、何でも麗奈ちゃんを一番に考えろ。」

「は？」

ヒロの言っていることがよく意味が分からなかった。

「昨日もまだ早川のことを解決してないからって、麗奈ちゃんの気持ちに応えられなかったんだろ？それって、麗奈ちゃんよりも早川のことを優先してるってことになる。」

「……そういうつもりじゃない。」

「わかってるよ。でも、お前はそういうつもりじゃなくっても、麗奈ちゃんにとってはどうだ？自分は後回しにされてるって気になるだろ？お前はどっかそういうところが多いんだ。無駄な正義感、自分の価値観はたまには犠牲にしなくちゃな。」

「……わかった。」

「うっし。じゃあ、行くぞ。」

ヒロはそういうと再び歩き出した。健斗はそんな後ろ姿を見つめながら、まるで後を追うように再び歩き出した。

教室に戻るとすでに朝のＨＲは終わっていた。当然わかっていたことだったから、健斗とヒロは何もなかったかのようにすっと教室の中に入っていった。するとそれに真っ先に気が付いたのは、佐藤だった。

「ちょっとあんたたち！いったい何してたのよ？」

「いやー、なんだか急にコーヒーが飲みたくなってさ。買いに行ってた。」

「はぁ？」

ヒロがそんな適当な嘘……とは言えない微妙な言い訳をすると、佐藤はあきれたような顔をした。するとヒロはわざとらしく教室中をきょろきょろと見渡し始めた。

「あっるれぇぇぇ？おっかしぃ～なぁ？」

「何よそれ……コナンくんの物真似かなんか？」

「違うわ！そうじゃなくって、麗奈ちゃんはどこ行った？」

健斗は一瞬びくっとしてしまった。いかん……麗奈の名前を聞くだけで心臓が飛び上がりそうになってしまう。嫌な汗がだらだらと落ちていくのを感じる。これから、告白をするのだ。人生初の告白だ。こんな朝早くから、いきなり……こんなことなら台詞かなんかを用意しておくべきだった。けど、台詞なんて用意したところでいざとなったら絶対に跳んでしまう。ろれつが回らなくなり、絶対に噛んでしまうだろう。

早川の時だってそうだった……

「麗奈ちゃん？麗奈ちゃんに何か用なの？」

「あぁ……まぁ、俺より健斗がっつぅーか……」

「ふーん……麗奈ちゃんなら保健室に行ったよ？」

「「へ？」」

意外な展開キター！！と健斗は心の中で叫んだ。どうやらヒロも同じことを思ったらしい。目が点になっている。そんな二人に意を介さず、佐藤はさらに続けて言った。

「なんか朝から調子悪いみたい。体調が悪いから一時間目は休むって。」

「……」

「……」

健斗とヒロはお互いにしばらく見合った。それから二人ほとんど同時に大きくため息を吐いた。健斗の心境としては、安心したような残念なような何とも言えない複雑な気持ちだった。そんな二人の表情を見ながら、佐藤は不思議そうに首をかしげた。

「ん～……熱はないみたいだけど……疲れが出てるのかもね？昨日

はよく寝れた？」

「いえ、正直あんまり……」

保健室の先生に愛想笑いを浮かべて見せた。先生は麗奈から受け取った体温計を見ながら、少し考えて、ゆっくりとうなずいた。

「まぁ、体調が悪いっていう生徒の言葉を尊重しましょう。ベッド空いてるから適当に使っててていいわよ。」

「ありがとうございます。」

麗奈は先生から了承を得たので、ベッドの上に腰かけた。すると先生は机の上の書類をまとめながら、それを腕に抱えた。

「先生、これから職員室に行かなきゃならないんだけど……一人で大丈夫よね？」

「あ、はい。大丈夫です。ありがとうございます。」

「いいえ。それじゃ、ゆっくり休んで行ってね。」

先生はそういうと、書類と手提げのかばんを持って保健室を後にした。麗奈はそれを見てから、上履きを脱いでベッドの中にもぐりこんだ。誰もいない保健室は静かだった。程よく聞いた空調の音がかすかに聞こえるくらいだった。

体調が悪いというのは嘘だった。昨日はあまりよく眠れなかったし、授業に出る気にはなれなかったので……こうして保健室で一人になりたかった。一人になって、思いにふけたかった。

「……やっぱり……だめ……だよね。」

麗奈は独り言をつぶやいた。昨日の健斗の気持ちを再確認すれば、もう終わりにするはずだった。だけど、どうしても残ってしまう。それは麗奈にはどうすることもできない。自分ではどうすることができないのであれば、時間がどうにかしてくれる……

結衣は間違いなく、健斗に惹かれ始めている。いや、もうとっくに好きになっているのかもしれない。そんな結衣が麗奈は大好きだ。大切な友達で、そう……とっても大切な……

結衣は中学のとき、一度大切な人を失った。あまり話してはくれないけど、健斗からの話によれば結衣は相当ショックを受けていたって……でも気丈な結衣は自分よりも、健斗のことを励まそうとした。そして、そんな結衣に健斗は恋心を抱いたのだ。

最初から入る隙間なんてなかった。ううん。入ってはいけなかった。健斗も結衣のことが好き。結衣も健斗のことが好き。それが二人にとって一番良いことで、自分はそのためにどうしてあげるべきか考えた。答えは決まっていた。

健斗への思いはあきらめる。そして、二人が幸せになるように応援する。これが、自分が二人に対してしてあげるべきことなのだ。

つらいのはわかっている。でも、結衣も健斗も今の自分の境遇よりもずっとつらい思いをしてきた。これ以上健斗を頼りにしていてはだめ。これから二人は……恋人同士になって、幸せになるんだから。

それでも、健斗への思いを断ち切れない自分がいた。だから、麗奈

は昨夜健斗に聞いたのだ。自分への気持ちを確かめたかった。もしかすると……という思いがあったのだ。ヒロも南先生も自分は健斗にとってかけがえのない存在だと言ってくれた。そして、健斗も麗奈いてくれたら俺は頑張ることができたと言ってくれた。そして、このブレスレットをくれた。

嬉しかった。泣きそうなくらいにうれしかった。

でも、麗奈の希望はやっぱり叶わない。健斗は麗奈の気持ちに対して何も答えてくれなかった。それはつまり……やっぱり……結衣への思いがあるからなのだと麗奈は思った。それがわかった。

結衣自身にも幸せになってほしい。健斗なら結衣を幸せにできる。その逆もある。健斗にも幸せになってほしい。結衣なら健斗を幸せにできる。

これから委員会の仕事が増える。そうなれば、自然と二人の時間が増えるはず。時間が二人を結び付けてくれるはずだ。

麗奈はそんなことを考えながら、窓の外を見つめた。気持ちいいくらいの晴れた空なのに……なぜか悲しい雨が降っているみたいだ。しとしとと、雨が降っている。どこで？

わかっているんだ……

麗奈は腕にしてあるブレスレットを見つめた。それをしばらく見つめた。翔から受け継ぎ、健斗からもらった大切なブレスレット。それを麗奈はゆっくりとはずして、横の棚の上に置いた。

もう、これ以上健斗の傍にいるのことはできない。健斗の自転車の

後ろに乗るのも、これからは結衣。自分じゃない。

そう最後に言い聞かせて、天井を見つめた。そして、徐々に眠気が襲ってきて麗奈はそのままかすかな眠りについた。

第１０話　文化祭　前編　Ｐ．１３（後書き）

はい！

というわけで、文化祭　前編はこれにて終了とさせていただきます。

なんと、麗奈は健斗への思いを諦めてしまうと宣言してました。いったいなんで！？

作者から補足させていただきますと、やっぱり麗奈はどこか自己犠牲が強いタイプなんです。自分にとって辛いことを、自分の中で押し通して我慢しようとしてしまう。それは、第7話辺りでみなさんもお分かりだと思います。

原因としては、やはり健斗と麗奈の気持ちのスレ違いです。お互い好きなんだけど、それを特に健斗の方が上手くいえない。そうなることで、気持ちのズレが起こってしまったわけですね。

でも、これって本当に辛いことです。当人になんないと分かりません。僕もすごく好きな子がいたのですが、お互いの距離が近すぎて「好き」って気持ちを堪える日々を送ってました。それは本当に辛かったです。

健斗と麗奈は一番近いようで一番遠い存在であるというわけですね。

もうひとつの原因は、やはり結衣でしょう。結衣は健斗に対して思いが芽生え始めている。これは、今まで読んできた読者のみなさまが一番よく分かっていると思います。

それに対して、麗奈は悩みました。大切な友達がようやく新しい恋を始めようとしている。それに対して自分は何をしてあげるべきなのか……

そして、そこで自己犠牲の性格が表れます。自分が思いを我慢して、結衣に幸せになって欲しいと麗奈は考えたのです。

一度決意したとはいえ……本当に好きであるからこそ、なかなか絶ちきることができなく、葛藤しているわけですね。

さて、次回は第11話　文化祭　後編を御送りしたいと思います。更新日程はいつ頃か未定です。

ちょくちょくチェックしてください！

それでは、次のお話でお会いしましょう。

中川健司

第１１話　文化祭　後編（前書き）

第１１話のあらすじ

文化祭シーズンが本格的になってきた。そんな中、健斗のクラスでは着々と文化祭の準備が進められていた。

しかし、健斗はなんとなく麗奈に避けられていることに気付く。理由はなんとなくわかっているものの、どういえばいいのかわからず……ある日、健斗と麗奈は互いの気持ちをぶつけあってしまい、久々に大ゲンカに。文化祭が近づいている中、二人の仲はさらに険悪なものになってしまった。

そして、ある日のこと……教室で早川と二人きりになった健斗は自分の思いを打ち明ける。しかし、その場面を思わず聞いてしまう。小さな気持ちのすれ違いが徐々に大きなものとなっていく。二人の仲はもう元通りにはならないのかもしれない。健斗は次第にそう思い始めていた。

しかし、ヒロや早川や佐藤に諭される。このままでいいのか。麗奈との日々を思い出す。楽しかった時も、つらかった時も常に傍にいてくれた麗奈。やはり、麗奈がいなければ自分の日常はこんなにもつまらなくなるものなんだと健斗は改めて気づかされる。

そして文化祭当日、健斗は麗奈のもとへ駆け出して行った。

第11話　文化祭　後編

いよいよ文化祭前二週間といったところだった。
本格的に文化祭ムードが学校中に蔓延し始めていた。そんな中、まず率先して決めなければいけないことがクラスの出し物だった。ということで今、ホームルームの時間を使ってクラスの出しものを決めている。進行は委員会に選出された健斗と早川が黒板の前に立って話を進めていた。

「え〜、二週間後にいよいよ文化祭が始まるわけですが、うちのクラスでも何かしら出しものをやらなければなりません。何か、良い意見はありますか？」

「はいっ！はいはいはぁ〜い！」

真っ先に手を挙げたのは、ヒロだった。健斗はヒロを一瞥すると、他にも手を挙げている人がいないかどうかを確認した。しかし、ヒロ以外で手を挙げているものはいない。

健斗は酷く憂鬱な気分になった。ヒロにはできるだけ意見を言わせたくない。何故なら、何かとんでもない意見を出してくる予感がするからだ。

「えーっと……他に誰か――」

「ちょっと！健斗くん、こっちこっち！僕が手を挙げてるよ？ほらほら！」

自分が手を挙げていることを執拗にアピールしてくる。みんながそ

れに可笑しさを感じて、クスクスと笑っている。健斗は早川と見合って、ゆっくりと息をついた。早川も仕方ないよというような顔をしている。健斗は深くため息を吐いた。

「じゃあ……はい……真中くん。」

「ひゃほーいっ！」

「いいから意見いいなさいよっ！バカッ！」

発言の機会を与えられて喜ぶヒロに佐藤が釘を差した。クラスに笑いが起こると、コホンと咳払いをしてヒロが仕切り直すように言った。

「やっぱり文化祭と言えばあれじゃない？ほら、女の子がかっわいいコスプレをして“お帰りなさいませ、ご主人様♪”っていうやつ。そうっ！その名は“メイドーー」

「却下。つーか死ね。」

「えぇっ！」

ヒロが言い終わらない内に、佐藤がヒロに毒舌を浴びせた。そのあとから、クラスの女子がヒロに野次を飛ばし始めた。

「な、何だよっ！メイド喫茶のどこに不満があんだよ！」

「大ありよっ！このエロメガネザル！何であたしたちがそんな恥ずかしい格好をしなきゃなんないのよっ！」

「別に大したことじゃねーだろ！つーかお前は別に着なくていいっつーの。気持ち悪いから。」

「カッチーン。はい、あんた死刑決定。そこに直れ。」

「ひぃっ！」

「はいはいはい。お前ら、そこまで。話が先に進まないから。」

健斗がそう言うと、佐藤とヒロは肩をすくめて座った。健斗は二人を一瞥した後、メイド喫茶のことを考えた。これはあくまで健斗の意見だが、メイド喫茶……悪くない。でも、こうして女子の反応を見るあたり……女子がこんなに反対しているわけだから、無理に推し進めるわけにはいかないだろう。

「じゃあ他に何か意見はありますか？」

健斗がそう進行を進めようとするも、反応はいまいちだった。気持ちはわかる。突然案を出せ、と言われるほど出にくいものだ。健斗は困ったようにため息をついた。すると、そんな健斗に早川が一歩近づいて耳打ちして言ってきた。

「このままじゃ切りがないから、あれ……使おっか？」

「……そうだな。」

健斗と早川はお互いうなずき合った。そして健斗はクラスのみんなに向かって、大きな声を出して言った。

「じゃあ、はいっ！ちょっと聞いて！」

健斗がそう言うと、みんなが健斗の方を見てきた。健斗はクラス全員を一瞥してから言った。

「じゃあ、出しものはくじ引きで決めたいと思います。」

健斗がそう言うと、クラス中が動揺の色を見せ始める。くじ引きで決めるとは一体どういうことだ?と言ったところだろう。そんな疑問の声を受けつつ、健斗は早川の方を見た。

「早川。」

「うん。用意してあるよ。」

早川はそう言うと健斗に一枚ずつに分けられた用紙の束を見せつけた。早川はそれを左端の列から順に配っていく。全員に行き渡るのを確認すると、健斗はまた声を上げて言った。

「今からその配った用紙に、出しものでやりたいものを書いてもらいます。そんでそれを十分後に集めて、その中から適当に選んだもので決定っていうのでどうですか?」

健斗がそう言うと、クラスのみんながざわざわと話をし始める。この方法は健斗が色々な時間のロスをなくすために考案した。この方法なら手っ取り早く、決めることが出来るはずだった。

「ちょっと待って!」

それに対して立ち上がったのは、委員長こと黒澤茜だった。

「それじゃ、実現不可能なものが選ばれたらどうするの？絶対男子とか変なやつ書きそうだけど……」

黒澤の言葉に男子群がブーイングの声を上げた。すると黒澤は「黙れ、愚民ども」と目で語るかのように、ブーイングの声を上げる彼らをギロリとにらみつけた。空手の黒帯を所持している黒澤の威圧に、男子群はすぐにおとなしくなった。

「あ、あの……だからそのためにいくつかルールを作ってるから……用紙に書いてあるだろう？」

確かに健斗の言う通り、用紙には女の子らしい文字で2、3、ルールが書いてある。まとめると、「ふざけて書いたものは却下」という内容だ。これは早川が書いた文字だ。黒澤はそれを見ると、納得するように座った。

健斗は妙な緊張感が解かれほっと息をついた。

「じゃあ十分後に回収するんで、自由に書いてください。」

それから十分が経過し、早川がそれぞれの席に回りみんなから用紙を回収した。用紙は回収箱の中にまとめ、それを早川が健斗に渡してくる。

「はい。」

「おう……って、俺が選んじゃっていいの？」

「うん。みんなもきっとそう思ってるよ。」

健斗はそう言われるとクラスのみんなを見渡した。

「じゃあ……行きまーす。」

健斗はそう言うと回収箱を振って、その中に手を入れた。手を入れて、その中の一枚を取って引っ張り出した。クラスのみんながそれを固唾を飲んで見守った。健斗は折りたたまれた、その一枚をじっと見つめる。

「……じゃあ……開けます……」

健斗はその選んだ一枚を開いて、その中身を見る。その内容を見た瞬間、健斗は驚嘆した気持ちになった。

「あ……えっ……これって……」

「おいっ！一人で悶えてないで早く教えろよっ！」

ヒロが身を乗り出すようにして健斗にそう言ってきた。

「あ……あぁ。えっと、それじゃ発表します。今年の出しものは……」

健斗が溜めるような言い方をする。クラス中がそれをまた固唾を飲んで見守った。

「今年の出しものは……ミュ、ミュージカルですっ！」

「「「ミュージカル！？」」」

クラス中の全員がその内容に驚嘆した。健斗も同じ気持ちだ。健斗的には無難に、たこ焼きだの焼きそばだの……そういう系を想像していた。だが選ばれたのは、まず食店じゃないし、尚且つ内容も中々濃い「ミュージカル」だった。

「ん～……っと、ミュージカルかぁ……ちなみにこれを書いた人は？」

健斗がそう言うとざわついていたクラスがさらにざわつく。するとその中、一人の子が手を挙げた。

「……あの～……」

「え……あっ、お前……」

何と手を挙げたのは健斗のよく知る人物だった。思いもよらず、そのミュージカルの案を出したのは他でもなく麗奈だった。麗奈は苦笑いを浮かべて、申し訳なさそうに手を挙げている。

「一応、私が書いたんだけど……」

「お前かよ。よりに寄ってミュージカルってお前……」

クラスのみんなが一斉に麗奈を見つめる。麗奈は照れくさそうに笑っていた。

「あはは……ぱっと思いついたのを書いたから……」

麗奈の言葉にみんなが言葉を発さず、場が静まり返った。この場の雰囲気に麗奈は何だか悪いことをした気持ちになったのか、慌てた素振りを見せる。

「あ、でもただの意見だから。無理なら却下でいいよ。みんなも面倒臭いって思うだろうし……」

「いや、結構いいんじゃない？」

麗奈の言葉を遮るようにそう言ったのは寛大だった。寛大は椅子によりかかり、素っ頓狂な口調で続けた。

「ミュージカルならやれないこともないし、他のクラスとも違って個性的だしさ。それに面白そうじゃん？」

「まぁ、確かに寛太の言うことも一理あるな。意外とやってみたら面白いかもな。」

ヒロも同調するようにそう言った。すると健斗の近くにいた早川もうなずきながら言った。

「私も麗奈ちゃんや寛太くんに賛成。ミュージカルって何か素敵だし、私もやってみたいな。」

その言葉がきっかけでクラスのみんなに賛成の色が見え始めた。健斗はその風景を見て、ふぅっと息をついた。

「じゃあ、うちの出しものはミュージカルで決定でいいですかぁ？」

健斗の言葉に、みんなが賛成の意表を示す拍手をした。クラス中が拍手に見まわれる。健斗はその様子を見ながら、ふと麗奈を見た。麗奈は周りを見渡しながらうれしそうな顔をしているような、驚いているようなそんな顔をしていた。まさか自分の意見が罷り通るなんて思いもしなかったのだろう。そんな麗奈を見ながら、健斗は小さく口元で笑った。

第１１話　文化祭　後編　Ｐ．２（前書き）

更新遅れてごめんなさい！

一気に二話分の長さになっております！

第11話　文化祭　後編　P.2

文化祭の出し物についての話し合いが終わったあと、クラスはかなり盛り上がっていた。理由は、クラスの出し物が円滑に話が進んだことと内容が奇抜であることに少し興奮を覚えているようだった。確かに、ミュージカルなんてどこのクラスもやらないだろう。健斗自身も楽しみではあった。

それを巻き起こした張本人は多くの人に囲まれていた。麗奈はうれしそうに笑いながら、みんなと楽しそうに会話をしている。健斗はそれを教壇に上半身を預けながらぼ〜っと眺めていた。

「ミュージカルなんて本当に奇抜だよな。」

そんな健斗のもとにヒロが来てそう言った。

「あぁ……ホントだよなー……」

なんとなく気の抜けた返事を返すと、ヒロはじっと健斗を見つめた。

「でもミュージカルって具体的にどんなことするんだっけ？」

「んー……歌って踊ってってイメージがあるけど。ディズニーランドちっくみたいな？」

「行ったことあんの？」

「いや、ないけど。」

あの有名なディズニーランドはあんな都会にあるわけだから、健斗みたいな田舎者とは無縁なところだ。とは言え、テレビなど見てればＣＭくらい流れているから、どんな感じなものなのかくらい知っている。

「やるとしたら、やっぱ何かしらパクるのか？」

「んー……どうなんだろう。お前はどう思う？」

「まぁ、やるとしたらオリジナルの方がやりがいはあるだろうけどさ。でもそしたら、台本とか手掛けるのが大変になるだろうな。」

「やっぱりそうだよなー。そこんとこは、早川と話し合ってみようかなー。なー……」

「……ところで……例の件はどうなったわけ？」

何の前触れもなく、ヒロがそう聞いてきた。健斗はそれを聞いて分かりやすい反応を見せた。動揺のあまり、教壇ごとばたーんと倒れてしまった。その大きな音に、教室中にいた全員が健斗のことを見てきた。

その隣で、ヒロが苦笑いを浮かべながら言ってきた。

「何やってんの？お前……」

「い、イテテテ……」

健斗は教壇を立て直しながら、強打したおでこを撫でた。そんな健斗を見ながら、ヒロは軽くため息をついた。そして、こそっと耳打

ちをするように言ってきた。

「まだ麗奈ちゃんの件、済んでないわけ？」

「……」

健斗は口を閉じながらゆっくりと頷いた。それを見たヒロは顔をしかめる。

「まだ解決してないの？」

「仕方ないだろ。あれ以来、タイミングが掴めなかったんだから。」

あの日から一週間は経っていた。健斗は麗奈に対して思いを告げられぬままだった。

あの日以来、やっぱり麗奈はどこか変だった。まず、変わったことが幾つかあった。朝は健斗よりも早く起きて、早く家を出ていっていた。ここ一週間、麗奈は健斗の自転車の後ろに乗ることはなかった。

理由を訊けば、「文化祭が近いから、吹奏楽部の朝練をしている。」のだという。そして、帰りも練習で遅くなるから先に帰っても構わないと麗奈に言われた。

健斗は一応麗奈の言う通りにしていたが、内心は複雑だった。学校から家まで麗奈は歩いて帰っているから、最近遅い時間に帰ってくる。そのため、家でも会話が少なくなっていた。

なんとなく、麗奈との距離が急激に遠くなったのを感じていた。そ

れでも、別に無視されてるとかそんなんじゃない。もしかしたら、一方的に健斗の方が気まずさを感じているだけなのかもしれない。

健斗はそんなこと考えながら、何も知らないで笑っている麗奈を見た。麗奈は健斗のことなどまったく気にすることなく、本当に楽しそうに笑っていた。

「それじゃ、ミュージカルのことなんだけど……きっと衣装代とか場所とか色々決めなきゃいけないと思うんだ。」

「うん。」

「まぁ、何よりも先に決めなきゃいけないのは、やっぱお話なんだけど……健斗くんはどう思う?」

「うん……」

そんな健斗の反応を見て、早川は不思議そうな表情を浮かべた。

「健斗くん?」

「ん……え!?あ、ごめん。聞いてなかった。何の話だっけ?」

今、健斗と早川は放課後残って今日決まったミュージカルについての話し合いをしているところだった。しかし、健斗は思いの外ぼー

っとしていたみたいで、早川の話をほとんど聞いてなかったのだ。

「どうかした？何だか、元気ないけど……」

「え、いや、そ、そんなことないよ。ちょっと考えごとっつーか……」

「考えごと？」

「えっと……その……ほらさ、ミ、ミュージカルなんてちゃんと出来んのかなーって。ちょっと不安だなー。って……そう思ってたんだよ。」

本当は全然違うことを考えていたのだが、それを正直そのまま早川に話すことなんて出来なかった。それを聞いた早川は可笑しそうにクスッと笑った。

「まぁ、そうだね。さすが麗奈ちゃんって感じだよね。」

「う、うん。」

「でもほら、去年辺りでも演劇をやってたところってあるから、ミュージカルも基本的な部分は一緒だと思うよ？」

早川の言うことは正しかった。ミュージカルはジャンルでは演劇と一緒だ。後は歌と躍りを付け加えれば、きっとそれらしくなるだろう。

「歌と躍り……か。それを考えるのがすごく大変そうだよな。」

「うん。いざとなったら、何かのお話を参考にすればいいと思う。」

そう言って、早川は手元の用紙にカリカリと何かを付け加えるみたいに書いていった。恐らく学校側に提出するものだろう。それを見ながら健斗は口元に笑みを浮かべた。

「すごいな、早川。」

「ん？」

「何か、しっかりしてるなーって。俺なんか何すればいいのか全然分からないのに。」

「アハハ♪経験値の差だよ。私はほら、中学のとき文化祭実行委員やってたから。」

「そうだよな。翔といっしょにな。」

健斗がそういうと、早川はにこっと笑った。そしてまた何かを書いていく。健斗はそれを見ながら、早川は最近よく笑うようになったと思っていた。もちろん、元々笑顔が魅力的な女の子だが、昔なら翔のことを話題に出したら思い詰めた表情をすることが多かった。

でも今はそんなことない。むしろ、翔の話になれば今のように笑顔を見せてくれる。まるで嬉しかった思い出を思い出して話す女の子のように。きっと、何か早川の中で何かが変わったのだ。

『健斗くんは鈍感だから気づいてないかもしれないけど。結衣ちゃんはね、今健斗くんにすごく惹かれてる。』

麗奈の言葉が突然フラッシュバックした。そして、健斗の胸がドキッと高鳴る。そんなことあるわけない。そんなこと……健斗は顔を少し赤くして、早川から顔を逸らした。そして、窓の外から校庭を見つめる。グラウンドにはサッカー部と野球部が練習をしている。サッカー部は今ミニゲームをしている。あ、山下が転んだ。

「それにしても、健斗くん……本当に変わったね？」

「え？」

早川に突然そんなことを言われてしまい、健斗は何のことかよく分からないと言うような顔をした。すると、早川は作業の手を止めて健斗を見ながらにこっと笑った。

「今みたいにクラスのことを心配したりするなんて。」

「そ、そりゃだって、まぁ一応、クラスの実行委員なわけだし……」

「それも大きな変化だと思うよ？前の健斗くんなら、絶対にやらなかったでしょ？」

早川にそう言われて、健斗は照れくさそうに鼻を掻いた。早川には見透かされていたらしい。

確かに健斗は半強制的（というより、ほとんど強制に近い）に委員に任命されてしまった。だが、本気で断ろうとすれば断れたはずだった。少なくとも前の健斗なら。

だが、それをしなかったのは健斗自身、やってみたいという気持ちがどこかにあったからだ。任命された以上、出来るだけ頑張ってみ

ようという気持ちがあったのだ。

それに……もっと大きな理由があった。

頼られることに喜びを感じていた。任命されたとき、クラスの反応は健斗のことを認めていた。頼りにされていた。前の健斗は一人疎外感を感じていた。もちろん、健斗自身がそういう雰囲気を醸し出していたし、誰かと話したいとか思ってなかった。健斗の方から周りを遠ざけていた。それが二年半も続いていた。

しかし、ここ最近は確実に変わっている。

「元神乃中の人たちもね、健斗くんの変化に気づいてるよ。特に、松本さんとのことがあってから健斗くんの話題、結構出るんだよ。」

「あ、そうなんだ。何か……照れ臭いな。」

健斗はそう言いながら、本当に照れ臭そうに小さく笑った。

「うん♪あとテニスコートから、グラウンドをよく見るよ。健斗くん、毎日すごく頑張ってるよね。」

「そうかな?」

「うん。何か、サッカーをやってるときの健斗くんってすごく小さな子供みたい♪」

「えぇ!?」

そんなことを言われてしまい、健斗は少しショックを受けた。早川

はそんな健斗を見て、可笑しそうにクスクスっと笑った。

「良い意味でだよ？すごく楽しそうだから、そんな風に見えただけ。」

「あ、あぁ……あはは。」

健斗が笑うと、早川も微笑むように笑った。そして早川はうーんっと背中を伸ばすと、窓の外からグラウンドを眺めた。

「最近思うんだ。私、健斗くんのこと知ってるつもりで、本当はあんまり知らないのかなって。」

「そ、そんなことないよ。」

「ううん。きっと何にも知らなかったんだと思う。今、健斗くんのことを本当に分かってる人は……麗奈ちゃんと、ヒロくんくらいじゃないかな？」

それを言われて、健斗は口を閉ざした。本当の自分を知っている。確かにそうかもしれない。ヒロは幼い頃からずっと一緒だった。だから、あいつは時々怖いくらい図星をついてくる。

そして麗奈には、自分の弱いところなど見せてきた。そんな麗奈は健斗の一番の理解者であるはずだ。

そんなことを考えながら、健斗はまた早川を見た。すると、早川はちょっと恥ずかしそうに笑った。

「だからね、もっと……知りたいなぁって思ってたの。」

「え……何を？」

「健斗くんのこと。」

「えっ？」

胸がドキンッと高鳴った。一気に体温が上昇するのを感じた。そんな健斗の反応を見た早川も顔を赤くした。

「あ、その、へ、変な意味じゃないよ？純粋な気持ち……そう、ただの興味本意で……」

「う、うん。分かってる。」

健斗が笑ってそういうと、早川は息を落ち着かせるように胸に手を当てて大きく深呼吸した。健斗もそんなことを言われてしまうと、やはり違う意味で考えてしまう。

「そう……ただの興味本意……特に、変な意味は……あ、あのね？その……何が言いたいのかっていうと……」

早川は顔を真っ赤にして健斗を見つめた。その潤んだ瞳で見つめられてしまうと、ドキドキが抑えられるわけがなかった。そして、早川は意を決したようにぐっと目を瞑りながら……

「嬉しいの！」

「へ？」

早川の言葉に健斗はきょとんとした。早川の口から出た言葉は、健斗にとって意外なものだった。早川はその言葉を言ったあと、本当に恥ずかしそうに顔を真っ赤にしたままだった。

「健斗くんと、おんなじ委員会になれて……嬉しかったの。その、この機会に健斗くんともっと仲良くなれたらっていうか……もっと知ることが出来るから……」

「早川……」

「あ、も、もももちろん、と、ととと友達としてだよ？そんな全然変な意味じゃなくって……私、だから……その……」

健斗はあわてふためく早川を見ながらしばらく呆然としていた。それは、言われた言葉にもあったが、それよりももっと別なところに健斗は驚いていたのだ。健斗は早川を見ながら、ぷっと吹き出した。次第に笑いが吹き出してきて、健斗は声を立てて笑った。

「アハハハハハ♪」

「え、な、何か可笑しかったかな？」

「ご、ごめん。アハハ♪何でもないんだ。」

健斗は可笑しそうに笑いながら不安そうに見てくる早川を見つめた。

健斗の中で早川結衣っていう存在は、健斗の憧れの存在だった。そう、中学のころからずっと。中学のころから成績は優秀、スポーツも得意で、容姿も目が眩しくなるほど可愛い。そんな早川と憧れの気持ちを抱きつつも、まったく話すことが出来ない頃もあったっけ。

健斗は今になってそのときの感情を思い出していた。

そんな今では、こうして早川と向かい合っている。高校に入ってからは、こんな風に早川と向かい合って話す機会もふえて、早川とこんな風に交流する機会が多くなった。そして、健斗は少しずつ早川結衣という女の子を知っていった。

やっぱり健斗にとって早川は眩しくなる存在だった。普通の女の子とは違う何かを感じていたのだ。しかし、今目の前にいる早川は驚くほど普通の女の子だった。普通で、そこらにいる子となんら変わらない普通の女の子だ。健斗は改めてそう感じたのだ。

早川が今言ったように、健斗の方こそ早川のことを知っているようで、本当はまだ何も知らないのかもしれない。と、健斗はそう思った。

「俺も嬉しいよ。」

「え？」

健斗はふうっと息を落ち着かせて、早川を見つめた。

「俺もさ、早川と同じ委員会になって、こんな風に話してさ……前だったら、多分そんなこと一生ないだろうって思ってたくらい。だから、今すごい楽しいよ。」

「そ、そんなことないよ……」

「ううん。俺にとってはそうなんだ。だから、俺も早川と同じ委員

会になって、これから一緒に文化祭を作っていくんだって思うと、もうすっっげぇー嬉しい。だから、これからよろしくな？」

健斗が笑ってそう言ったのを、早川はしばらくの間ぼーっと見つめていた。すると、早川は眩しいくらいの笑顔で健斗に笑いかけた。本当に嬉しそうな顔で健斗に向かって笑っている。それを見ると、健斗もこう嬉しさを感じてしまう。

穏やかな雰囲気が二人の間に流れていた。

「あ、えっと……あのね、ところで、出し物のことなんだけど……」

早川は照れ臭さを感じたのか、頬を赤らめながら目の前の用紙を見ながらそう話題を変えてきた。しかし、健斗は今、ふと思っていた。

この場面、健斗と早川の二人以外この教室にはいない。もしかしたら、今この場面が早川にあのことをちゃんと言うビッグチャンスかもしれない。あのことというのは、早川にある想いを告げること。それをしなければ、健斗は前に進めない気がしたのだ。

しかし、今言ってもいいのだろうか？突然のことで早川、絶対驚くだろう。

いや、何をくよくよしてるのだ？自分で決めたことだ。ならやるしかないだろう！健斗は意を決したように大きく呼吸をした。

よし！

「あ、あのさ、はやか、ぶっ！」

そのときだった。健斗のこめかみの辺りにとてつもない強烈な打撃の感覚を覚えたのは。それは、勢いよく回転しながら外から飛んできた白い小さな球体。それがなんと奇跡的な確立で健斗のこめかみにクリーンヒットしたのだ。健斗は思わぬ展開に、そのまま衝撃を食らいながらドテーンッと横に倒れてしまった。

朦朧としていく中、健斗を呼ぶ声が1つ。あぁ、きっと早川が健斗の名前を必死で呼んでいるんだろう。

起きてちゃんと返事を……返事を……

そのまま健斗の意識は沈んでいって、目の前が真っ暗になった。

第11話　文化祭　後編　P.3

微かに光が見えるのと同時に、何か声が聞こえた。どうやら人の話し声のようだ。それと、なんだかとってもふかふかして気持ちよかった。

「……あ！目が覚めた？」

アルト音の声で、健斗ははっと正気を取り戻した。がばっと上半身を起こした瞬間、頭に痛みを感じた。

「いっつ……」

「大丈夫？健斗くん。」

そう言われた健斗は頭の痛みを感じつつも、声のした方を見た。すると、健斗のすぐ隣で早川が安心してほっとため息をついていた。そして、その早川の隣には寛太が部活着のユニフォーム姿で立っていた。

「早川……寛太……ここは……」

「大丈夫だよ。ここは保健室だから。」

「保健室？あれ？俺、一体どうなったんだっけ？」

何か突然強い衝撃を受けたところまでは覚えている。そう、ちょうど今痛むこめかみの辺りにだ。健斗が混乱している様子を見た寛太が苦笑いを浮かべながら言ってきた。

「い、いや、あのさー、まさかこんなことになるとは思わなくって……」

「こんなこと？」

「寛太くんの打ったボールが偶然に教室に入って、健斗くんに当たっちゃったみたいなの。」

「え……」

早川は健斗の身に起こったことを順序を追って説明してくれた。寛太がバッティングの練習の際につい力が入りすぎてしまい、なんと校舎に向けて特大ホームランを打ってしまった。そのボールが何の偶然か、窓の開いていた健斗たちのいた教室に入って、そして健斗にクリーンヒットしたというわけである。

確かに意識を失う寸前に、白い物体が目に入った。あれは、野球ボールだったというわけだ。

「いやー！あんなホームラン、試合中でも打ったことねーよ！アハハハハ！」

「アハハハハ！じゃねーよ！下手したら俺、死んでたぞ！」

笑う寛太の頭を鷲掴みにして怒鳴りつけた。それを側でみてた早川が健斗を宥めるように言った。

「ま、まぁまぁ。林くんもわざとじゃなかったし、許してあげよう？」

「そーだよー。俺だってまさかこんなことになるとは思わなかったんだよー。」

情けない声を上げる寛太を見ながら健斗は「くっ」と声を上げて、小さくため息を吐いたあと寛太を解放した。

「早川に免じて、許してやる……」

「ひゃほーい！」

すぐ調子に乗る寛太にいらっと来たが、いちいち怒ってたんじゃきりがないし、色々と不健康だ。健斗はゆっくりため息をついて、保健室の時計を見ると、何と時刻は七時五分前だった。

「うわ！俺、一時間以上も気失ってたのか。」

「うん。完全に伸びきってたからね。だから保健室に連れてきたの。」

「そっか。ごめんな、迷惑かけて。もう大丈夫だから、帰ろうぜ。」

そう言って健斗が保健室のベッドから降りて立ち上がろうとしたときだった。突然、保健室のドアがガラガラッ！と音を立てて開いた。外から入ってきたのは、何と麗奈だった。

「あ。」

麗奈と目が合ったと思うと、やつはそのままつかつかと健斗に近づいてきた。久し振りにまともに顔を見た気がした。

「あれ……なんでお前、ここに……」

「……何でって、健斗くんが目の前で倒れたから。」

「目の前？」

健斗がよく分からないという顔をしていると、その間に早川が来てすぐに説明してくれた。

「健斗くんにボールが当たったときね、ほぼ同時に麗奈ちゃんが教室に入ってきたの。取り敢えず現状を把握して、私が保健室の先生を呼びに行ってる間、麗奈ちゃんに付き添ってもらってたの。」

「え、じゃあ……」

確かに、意識が朦朧としてる中健斗を必死で呼び掛ける声が聞こえてた。早川だと思っていたのだが、あれは麗奈だったのか。

「あ、そうなんだ。」

「まったく……本当に人騒がせなんだから。」

麗奈のその言い方にかちんと来た。

「俺だって好きでこうなったわけじゃねーよ。」

「……」

何だか妙にツンケンしている。

「このツンデレが……」

「はぁ！？」

ぼそっと言ったつもりだったが聞こえていたらしい。ということで喧嘩になる前に、そばにいた早川と寛太が二人の間に割って入ってきた。

「ま、まぁまぁ！二人とも落ち着いて。」

「もう最終下校時間になるから、帰ろ？私、先生に行ってくるから。」

早川はそう言うと、走って保健室から出ていった。それを見たあと、健斗はゆっくりベッドに腰掛けてもう一度麗奈を見た。麗奈は健斗のことなんか見ないで、そっぽを向いていた。

その様子がなんとなく気に食わなかった。でも、突っかかろうとも思わなかった。

第11話　文化祭　後編　P.4

健斗、麗奈、早川、寛太。この四人で帰るのは結構珍しかった。今まで早川も寛太も、部活が終わる時間も違うから、こんな風に揃うことなんてあまりなかった。

天気が悪そうだ。暗いが、月も見えないし雲も厚い。

早川と麗奈は健斗と寛太の一歩手前に行って楽しそうに話していた。すると並んで歩いていた健斗に寛太が囁くように言ってきた。

「大森と喧嘩してんの？」

「な、何だよ。急に。」

「さっき仲悪そうだった。」

「……」

別に喧嘩しているつもりはなかった。ただ麗奈が妙にツンケンしてるから、うっかり……

「知らねぇよ。最近、不機嫌なんだよ。あいつ。」

「なんで？」

「だから知らねぇって。いつものことだよ。気分屋だからな。」

「ふーん……」

「……何だよ。」

寛太がじと目で見てきたからそういうと、「別に。」と言ってはぐらかされた。実際、麗奈は気分屋だしすごいマイペースだから、そんな麗奈に振り回されるのも慣れていた。だが、ここ最近の麗奈は何だか変だった。

でも今目の前で愉しげに話している麗奈はいつもの麗奈だった。たまたま今日不機嫌なのかもしれない。

「雨、降りそうだ。」

「……あぁ。」

途中分かれ道に差し掛かるところで、別々になるのは分かっていた。早川と寛太が同じ方向で健斗と麗奈が同じ方向（当然だが）だ。

「じゃあ二人とも、また明日ねー。」

「またなー！」

早川と寛太が笑って手を振って、暗い夜道の中に溶け込んでいった。健斗と麗奈はそれを見送ってから、互いに顔を合わせる。

「……じゃあ、行くか。」

「……うん。」

なんとなくぎこちなかった。いつも通りの帰り道のはずなのに、全然違ったものに見えた。

「後ろ乗れよ。」

「……いい。歩くから。」

「はぁ？なんで。」

「なんとなく。歩きたいから。」

「なんとなくって……っておい！ちょっと待てよ。」

麗奈は健斗のことなんか意も介さず、スタスタと歩き始めた。健斗をそれを自転車を押しながら小走りに後を追う。明らかに態度が変だった。さっきのやり取りで怒ってしまったのか、それとも……

「……最近、変だぞ。お前。」

「いつものことでしょ。」

「そうだけど……いや、そうじゃなくって！久し振りにまともな会話をしたと思ったら、やけに冷たいじゃねぇか。」

「別に冷たくした覚えはないもん。」

「今だってそうじゃん。」

「だから歩きたいからって行ったじゃん。」

「なんで急に？」

「それは……女の子には色々あるの！」

「はぁ？」

麗奈はそんな風に吐き捨てると、さらに先を歩いていこうとした。
そんな麗奈を見ながら健斗はうんざりしたようにため息を吐いた。

「ったく……何なんだよ、一体。」

「……何よ。」

「ツンケンしちゃってさ。可愛くねぇやつ。一体何が不満なんだよ。」

「別に何も不満なことなんてないもん。」

「嘘つけ。明らかに俺への態度可笑しいだろ。早川と話しているときとは大違いだぞ。」

健斗がそういうと、麗奈はピタッと足を止めた。それに準じるように、健斗も足を止めた。

「……健斗くんだって、いつも結衣ちゃんと私とじゃ態度違うじゃん。」

「はぁ？俺のどこが？」

「結衣ちゃんと話すときの健斗くんは、いつも楽しそうで優しいでしょ。」

「そんなこと！」

と、そこで否定してしまっては早川と話すのは楽しくないということになる。実際はすごく楽しいに決まってる。今日だって……すごく楽しかった。

健斗はふぅっとため息を吐いて、嘲け笑うように言った。

「確かにな。早川は上品で優しいし大人しいし、女の子っぽいからな。お前とはそこんとこが全然違うよなー。」

皮肉を言ってやるつもりだったのだ。

いい加減、この態度に多少なりとも腹がたっていたのかもしれない。だから皮肉を言ってやろうと思ったのだ。大人げなかったかもしれないが、つい言葉が先だったのだ。

その言葉を聞いた瞬間、麗奈は健斗の方を振り返って叫んだ。

「どうせ私は！！」

麗奈の怒声が辺りに木霊した。健斗は思わずその場に固まる。さーっと乾いた風の音がその後に聞こえた。麗奈はかなり怒っているということが分かった。怒りの表情を全面に出していて、拳を握ってわなわなと震えている。そしてしばらく下を俯いた。

「……もういい……もう知らない……」

そう言って冷静さを取り戻した麗奈は冷めきった言葉を健斗に突きつけた。そして再び歩き出そうとした。健斗ははっと我に返った。ここで話を終わらせてはならないと直感的に思った。

「お、おい！待てよ！意味わかんねぇよ！」

しかし麗奈はまったく振り返ろうとしなかった。健斗は自転車を捨てて、走って麗奈の後を追いかけた。そして、麗奈の腕を掴む。すると麗奈はものすごい力で健斗の腕を払おうとした。

「放してっ！」

ものすごい力だが、やはり女子が男子の力に勝てるはずがなかった。

「話を聞けよ！一体俺が何をしたんだよ！？何がそんなに不満なんだ！？」

「だから何も不満なんてないってば！何度言ったら分かるの！？」

「いいや、分からないね！それとも今のお前は普通だって言うのかよ！？」

「そうよ！普通。普通なの！これが私なの！健斗くんは知らないかもしれないけど、これが私なの！」

そんなの嘘だ。健斗の知る麗奈はこんなやつじゃない。いつも能天気に笑顔を振る舞い、マイペースな猫型娘だ。だからこそ、ずっと違和感を感じてるわけだし、明らかに麗奈が健斗に対して怒りを感

じていると分かるのだ。

「そんなの嘘だ！こんなのが普通なわけがねぇ！いつものお前はもっとーー」

「放してってば！！」

強引に手を振りほどかれた。健斗は思わずよろめく。麗奈は大きく肩で呼吸をしている。健斗も体力を消費していたみたいで、息を荒くしていた。

しばらく静寂が続いた。するとだった。鼻の頭に冷たい感覚を突然感じた。そう思った瞬間、ポツポツと雨が降り始めた。叙情にそれは激しさを増し、サーっと長い雨が降った。

冷たい雨が身に染みた。

「いつもの私って……何？健斗くんが私の何を知ってるの。」

麗奈は完全に冷えきった口調で、健斗に向かって言ってきた。

「健斗くんは私のこと、何も知らない。だって、最後に会ったのは十年前。その間に私がどんな風に過ごしてきたのか、どんな子だったのか知らない。小学生の私、中学生の私を健斗くんは知ってる？知らないよね！健斗くんが知ってるのは、今の私だけ。」

「……」

「私もそう！健斗くんのことなんか何も知らない。健斗くんが小学生のとき、中学生のときどんな人だったのかなんて知らない。私は、

本当の健斗くんがどんな人なのか……知らないの。」

麗奈は大きく深呼吸して息を落ち着かせた。そして、健斗のことを強い目つきで見つめた。

「さっき言ったよね？何がそんなに不満なのかって……あるよ。一つだけある。」

「……何だよ。」

健斗がそう聞き返すと、麗奈は強く胸をドンッと叩いて心臓部分を示した。

「私は、そんな何も知らない健斗くんが、私のことを分かったような口で言ってくるのがむかつくの！私の心の中を、気持ちを、そうやって勝手に決めつけるのが嫌なの！なんで、それを分かってくれないの！？私のことなんてどうせ誰も、分かってくれない！！お父さんだって、お母さんだって、誰も分かるはずがない！だって、私だって……私だって自分が何なのか、分からないんだから！！」

麗奈の叫び声が辺りに響いた。サーっと長い雨が麗奈の怒りを徐徐に冷ましていくように、麗奈は次第に落ち着きを取り戻していった。

麗奈の言葉は叫びだった。分かってくれない。でも、分かってほしいっていう気持ちを健斗には感じられた。

でも分からなかった。何を分かってほしいのかが。分からなかった。

そして、それは胸に強い衝撃を受けた。今までの時間が全て崩れさっていくように思えた。

「……じゃあ……どうすりゃいいんだよ。ほっておけばいいのか？」

健斗がそう聞くと、麗奈ははっと我に返るような表情を見せ、悔しそうに歯を食いしばった。

「……そ、そう。そうよ。私のことなんてほっておけばいいの。健斗くんにはもっと、やるべきことが他にある。だから、私のことなんかほっておいて！」

「……それが、お前の望みなのか？俺のことなんか、どうだっていいんだな。」「そうだよ。健斗くんのことなんかどうだっていい。だから私にもう、構わないでよ！」

麗奈の言葉を聞き、静かに目を閉じる。そしてしばらくそうしてから、ゆっくりとため息を吐いた。

「分かった。お前の言う通りにする。」

「え……」

健斗はゆっくりと振り向き、さっき麗奈を追いかけるために捨てて倒れてる自転車を起こした。そしてゆっくりと麗奈の方向に向かっていく。

そして麗奈の横をすれ違うときに、健斗がボソッと呟くように言った。

「……じゃあな。〝大森〟」

「……っ……」

健斗は自転車にまたがってゆっくりとこぎ始めた。麗奈のことを置いて、構わず、そのまま帰り道を一人でこいでいった。

麗奈は一人、下を俯いたままだった。冷たい雨が身に染みた。きっと顔に流れている滴も雨に混じって消えていくんだろう。

雨が全て洗い流してしまうように……

第１１話　文化祭　後編　Ｐ．４（後書き）

第11話　文化祭　後編　P.5

夕飯時、健斗の前にはハンバーグがメインの夕飯が並べられていた。その隣にはいつもより早く家に帰ってきた父さんが、そしてそのさらに隣には母さんの夕飯が並べられている。健斗の左隣にも同じように夕飯が並べられているが、そこは空席だ。

廊下から母さんが入ってきた。なんとなく顔をしかめていた。

「あれ？麗奈ちゃんはどうした？」

父さんがそう聞くと、母さんが困ったような顔をして言った。

「それが、何だか調子が悪いから今日は寝るって。」

「何だ風邪か？まぁ、ちょうど季節の移り変わりだもんな。」

「そうね。今日びしょ濡れで帰ってきたみたいなの。そのせいかもね。」

「そりゃいかん。健斗は今日、麗奈ちゃんと帰りは別々だったのか？」

父さんに突然聞かれて、健斗は箸をぴたっと止めた。そしてしばらくしてから、「さぁ。」と一言答えた。

その答え方が悪かったのだろう。父さんと母さんは同時に健斗のことを見つめて、それから互いに顔を合わせ大きくため息を吐いた。どうやら全てを察したらしい。

「なんだ、また喧嘩したのか。」

「厭きないわねー、あんたたちも。」

二人にそう言われて、健斗は黙り混んだ。あれは喧嘩……だったらまだいい。でも、今回二人の間に起きたことは、そんな言葉で済まされるようなことじゃないように思えた。

夕飯を済ませたあと、健斗はなんとなくそのまま縁側に来ていた。縁側にはタオルケットを敷いて眠っているゴンタがいた。雨の日、そしてこの季節になると寒くなってしまうので可哀想だからゴンタを暖かい家の中に入れてやるのだ。

健斗が来たことに気づいたゴンタは目を覚まして健斗を見上げた。健斗はそんなゴンタの隣に座ると、ゴンタの頭を軽く撫でてやった。するとゴンタは健斗に甘えるように、頭を健斗の太股の上に乗せて再び眠りについた。

健斗はそんなゴンタの身体を優しく撫でながら、しとしとと降る雨を見つめていた。

大分遠い距離になってしまった。一番近い距離にいたはずの存在が、今では一番遠く感じる。どうして麗奈はあんなことを言ったのだろう。健斗には分からなかった。

怒りとは違った感情だった。これは怒りではなく、哀しみだった。

健斗にとって、麗奈の言った言葉はそれくらいショックな言葉だった。これまでの築いてきた関係を、すべて否定してしまう言葉だった。だから怒りではなく、哀しいのだ。

五月の中旬、初めて麗奈がこの家にやって来た日も、学校に来て二人の間に起こったキス事件を経て二人の間の距離が縮まったことも、自転車の練習をしたことも、いつもの帰り道をくだらない話や馬鹿な話に笑いながら歩いたことも、すべて麗奈にとっては何でもないことだったのだろうか。

じゃあ何故、麗奈はわざわざあんなことを言った？一週間前、麗奈と二人で帰った日、麗奈は突然吹っ切れたように健斗に対して想いを告げてきた。今、考えればあれも変なことだった。もちろん、麗奈は突拍子もないことをいつもしてくるやつだが、なんと言うか身に纏う雰囲気が違ったのだ。

何か強い決意を目に秘めた。そんな感じだった。

やっぱり、ヒロが言ったとおり、麗奈はあのときのことを気にしているのかもしれない。というより、怒ってる？でも、ただそれだけではない。もっと違う何かが麗奈をああさせてーー

健斗は疲れたようにふぅっとため息を吐いた。もういい。考えれば考えるほどど坪にはまっていく。何も考えなくていい。考えたくないのだ。

そんな健斗の様子を、母さんは角に隠れて伺っていた。健斗の様子を見てから、ため息を吐いた。そして、手には今日食べた夕飯をお膳に乗せていた。ちゃんと暖めてある。母さんは見上げるように、二階を見つめた。そしてゆっくりと階段を上っていき、健斗の部屋のもうひとつ奥の部屋の前で立ち止まる。

母さんはそのドアに向かってコンコンコンと軽く三回ノックした。

「麗奈ちゃん。起きてる？」

呼び掛けてみたが、返事はなかった。母さんはふぅっと小さくため息をついた。

「入るわよ？いいわね。」

そう言って、母さんはゆっくりとドアを開けた。部屋は真っ暗だった。だが、ベッドにはこちらに背を向けながら横たわっている麗奈の姿が確認できた。母さんが入ってきても、麗奈はまったく動こうとしなかった。

「麗奈ちゃん。お腹すいてるんでしょ？お夕飯、持ってきたわよ。」

しかし麗奈はまったく返事をしない。背を向けたまま、起き上がろうとしなかった。

「健斗との間に、何があったのかは知らないけど。あの子も酷く落ち込んでるわ。だから、ね？」

母さんがそういうと、ようやく麗奈は反応を見せた。ゆっくりと上半身を起こしてこちらに表情を見せた。その顔は泣いた後がくっきりと映っていた。鼻は赤く、目元は濡れてる。髪もボサボサだ。きっとシャワーを浴びたあと、乾かすこともしなかったのだろう。

まだクスン、クスンと余韻が残っているらしかった。とてもじゃないが、ご飯を食べる気力はないらしい。

「ご飯は食べる？」

「……食べたく……ない……」

ということらしい。無理強いすることでもないので、母さんは仕方なく夕飯をそっとどけた。そしてゆっくりと笑って、麗奈の頭を撫でてやった。麗奈はまるで小さな子供のように、それを黙って受け入れた。

「まぁ、年頃の男の子と女の子がいっしょに暮らしてるんだもの。お互い我慢出来ない想いだってあるわよね。だからお母さんは、二人が喧嘩するのはいいことだと思うわ。」

「……」

「でもね、これだけは覚えていて欲しいの。喧嘩出来るくらい麗奈ちゃんに真っ直ぐぶつかることの出来るのは、きっとあの子だけ。その逆に、健斗に真っ直ぐぶつかっていけるのも麗奈ちゃんだけなのよ？」

母さんの言葉を麗奈は真っ直ぐ受け止めたのだろうけど、麗奈は頷くことはしなかった。もちろん、麗奈も頭の中では分かっているの

かもしれない。それでも、意地がそれを押し退けて心にない言葉を出してしまうときだってある。

母さんはそんな麗奈を見ながらゆっくりと笑って、もう一度麗奈の頭を撫でてやった。

「今日はもう休みなさい。また明日元気になって、仲直りはそれからね？」

母さんはそれだけいうと、ゆっくりと立ち上がって部屋を後にしようとした。そのときだった。

「あ、お、お母さん。」

麗奈に呼ばれ、母さんはゆっくりと振り返った。

「あの、その……お母さんは……知ってますよね？」

「何を？」

「……私が、中学生のときに……」

母さんはそれを聞いて、ドクンッと胸が高鳴った。つまり、そうだ。麗奈が聞いてきたのは、つまりー”あのこと”を知っているかどうか。

「……もちろん、知ってるわよ？」

「……そう……ですか……」

「……健斗にはまだ、話してないのね？」

母さんの問いかけに麗奈は静かに頷いた。それを受けて、母さんはまた笑った。

「話すかどうかは麗奈ちゃんが決めればいい。別にわざわざ話すことでもないしね？」

「……はい。」

「うん。じゃあ、行くわね。」

「あ、お母さん。」

再び麗奈に呼ばれて、母さんはもう一度振り返った。すると、今度の麗奈の表情は笑っていた。満面の笑顔とはいわないが、口元に笑みを浮かべて笑っていた。

「……ありがとう、お母さん。」

その言葉とその表情で母さんの胸に爽やかな風が流れた。

ーーあぁ、本当にこの子は私の娘なんだわ。

母さんはにこっと微笑み返した。そして、ゆっくりと麗奈の部屋を後にした。

第11話　文化祭　後編　P.6

次の日からの朝は、何もかもが変わってしまったような気がしていた。恐らく、健斗だけ。こんなにも変わったように見えるのに、教室内はいつもと変わっていない。

矛盾した話だが、健斗はそう表現せざるを得なかった。その日の古文の授業中、健斗はずっと窓を眺めていた。本当にいつもと変わらない風景なのに、健斗にはすべてが変わってしまったように見える。

言葉で表しては矛盾が広がるこの気持ち。それは苛々にも似た気持ちだったが、胸が切なくなるような傷みでもあった。しかしそのやり場のない痛みを誰にぶつけることもなく、健斗はこうして窓の外を眺めることしかできなかった。

「ーーまなか。山中！」

自分の名前が呼ばれた気がした。それは気のせいではなく、確かに呼ばれたのだ。古文担当の先生が健斗のことを睨み付けるように見ていた。そして教室内にいるほとんどの人間が健斗に視線を向けていた。

「授業中にずっと窓の外を眺めて何をしてる？ちゃんと授業に集中しなさい。」

「……」

健斗は何も答えずに、ぷいっと顔を反らした。不機嫌そのものだというのを全面に表していた。その態度が堪に触ったのか、先生はし

かめ面をしていたのだが、これ以上一人に構っていると授業が先に進まないと考えたのだろう。それ以上健斗に追及してこなかった。

だが、この健斗の態度により、クラスは緊張したムードが何となく流れていた。健斗の態度にクラス中が少し動揺していた。

その中、麗奈はチラッと健斗を見た。しかし健斗は全くこっちを見ることはない。分かっていた。そして、それでいいのだ。

授業が終わり、昼休みを告げるチャイムが鳴る。すると、それとほぼ同時にヒロが健斗の席に近寄ってきた。

「どうしたのお前？さっき完全に先生に喧嘩売ってただろ。」

「……別に売ってねぇよ。」

「何キレてんの？らしくねぇ。」

「うっさい。俺にかまうな。」

健斗がそういうとヒロはぴくっと眉をひそめた。何かを感じ取ったようにヒロがじっと健斗のことを見つめる。健斗は特にそんなこと気にするようなしぐさを見せなかった。

「まだなんか用？」

「いや、別にねぇけど。」

「だったら、悪いけど一人にしてくれ。今誰とも話す気分じゃねぇし、一人がいいんだ。」

「……」

「おーい！健斗、ヒロー！」

そんな二人に向かって呼び声が一つ。元気で溌剌としたその声は、間違いなく佐藤のものだった。佐藤が少し離れた席、というのは麗奈の席だ。麗奈の席で早川と佐藤が机を寄せ合っている。

「久しぶりに五人でお昼食べよう？」

「……」

健斗はそういわれても何も言わずに立ち上がった。そして麗奈の席の方へと向かうわけでもなく、そのまま一人教室の外に出て行った。佐藤と早川は唖然としていた。ヒロはその後ろ姿を見ながら、チラッと麗奈の方を見た。麗奈は下をうつむいていた。それだけで、ヒロはその優秀な頭を回転させて状況が把握できた。

「……何あれ……無視ってひどくない？あたし、健斗に何かしたぁ？」

憤りを感じている佐藤を早川が「まぁまぁ」と言いながらなだめて

いる。ヒロはやれやれとあきれるようにため息を吐いた。そして麗奈はずっと下をうつむいたまま、何も言おうとしなかった。

健斗は教室を出た後、どこともなくふらふらと廊下を歩いていた。廊下にも人はたくさんいて、健斗はなるべくそれを避けながら移動していた。もっと人のいない、静かな場所。一人になれる場所に行きたかった。

そうなると、やっぱりたどりつくのはここだった。この屋上ならだれも来ない。少し肌寒い風が吹くようになった今の季節に、誰が好き好んでこの場所に来るだろう。健斗は屋上の扉を閉めたのち、柵によりかかるようにして風景を見つめた。いつもと変わらない風景だ。真下にはグラウンドが見える。そして、その先にはいくつかの建物。家や、コンビニ、そしてそのさらに先には田んぼが並び立っている。健斗の右手には駅があり、そのさらに奥には商店街がある。何十年も姿を変えぬこの町が、健斗にはすべてが変わってしまったような気になってしまう。

この感覚、前もどこかで感じたことがあった。どこでだったかは思い出せない。しかし、今のようにすべてがつまらなく、無機質で……くだらないと感じる。心の中に大きな穴が空いた、そんな感覚だった。

やめよう。こんなところでくだらない感傷に浸っていること自体が

そもそも間違えている。何も考えたくない。考えてしまっては、今がつらい。健斗は長い溜息を吐き出した。

そのときだった。屋上の扉が開いた音がした。健斗はその音に気づき、ぱっと後ろを振り返る。そこにいたのは……

「よっ！」

「……お前かよ。」

そう。そこにいたのはヒロだった。健斗はなんとなくがっかりした気持ちでヒロを見つめた。すると、ヒロはまるで健斗の言葉を拾うかのように、健斗に近づきながら言ってきた。

「誰を期待してたんだよ。」

「べ、別に誰も期待してねぇよ。」

「あそ？」

「何の用？」

「別に用なんてないけど？」

「だったら一人にしてくれって言っただろ。何ついてきてんだよ。暇な奴。」

健斗がそう悪態をつくと、ヒロは健斗の前に立ち止まった。まっすぐ健斗を見つめてくる。健斗はその視線を受け入れて、ヒロの瞳を見つめ返した。

「……なんだよ。」

「そんなに気にしてるなら、さっさと仲直りすればいいじゃん。」

「なっ！」

突然核心をつかれたような言い方だった。健斗はまだなにも言っていないのに、ヒロはすべてを知っているかのように健斗に話してくる。

「お前も、麗奈ちゃんも懲りないね。そんなに機嫌悪くするなら喧嘩なんかしなけりゃいいのに。この前それをお前が俺に言わなかったっけ？」

「な、何のことだか、さっぱり。」

「わかってるくせに。俺には全部お見通しなんだよ。何年いっしょにいると思ってやがる。」

健斗はそんなことをヒロに言われて、だまりこんだ。それにしても何も言っていないのに、まさかそこまで見破るとは思ってなかった。でも、健斗はあえて何も言いたくなかった。ヒロに言ったところでどうこうなる問題ではないし、言いたくもなかったのだ。そして、麗奈のことなんかこれっぽっちも気にしていないということを示したかった。

「お前には関係ない。それにもう、れい……大森のことなんか、どうだっていい。あんなやつ、俺には関係ない。」

そういって、すっとヒロの横を通り過ぎた。そしてそのままヒロの前から姿を消そうとしたのだ。しかし、そのときだった。ヒロが「健斗。」と一声かけてきた。健斗はそれに反応して、ゆっくりと後ろを振り返った。

「あ？」

健斗が後ろを振り返った時には、もう遅かった。目の前に、固く握りしめられた拳があった。それは健斗の頬を正確に捉えていた。鈍い音が屋上で響き、健斗はその強い衝撃を受けてそのまま後ろにひっくり返った。いつの間にか自分は地べたに倒れこんでいた。それを自覚すると、徐々に頬にしびれるような痛みと口の中に広がる血の味を感じた。

「……って……」

「……」

「……何、すんだよ。」

にじむ血を拭いながら、健斗は頭の中が冷静な状態でヒロをにらみつけた。ヒロは無表情で健斗のことを見下していた。

「目覚ましナックル。少しは効いた？」

「喧嘩売ってんの？いくらお前でも、キレるぞ。」

「だったらかかってこいよ。それとも口だけか？」

ヒロの挑発口調に冷静さを一気に失った。頭の中が一気に熱くなっ

た。頭だけじゃない、鼓動も早くなり胸の中には言葉では言い表せられない、熱い感覚が一気に押しあがっていた。健斗はゆっくりと立ち上がる。そしてヒロをにらみつけ、一気にヒロへと目がけて突進していく。ヒロは避けることもしないで、健斗の突進を食らった。そして、お互い地べたに倒れこむ。健斗はすかさず立ち上がって、ヒロの上にまたがりヒロの顔面に目がけて思いっきり力を入れて殴りつけた。鈍い音が響く。もう一発入れた。ヒロの眼鏡は吹っ飛んでいた。ヒロの頬に殴られた跡がくっきりと残り、血が流れる。

もう一発殴ってやろうと拳を振りかぶったとき、腹にとてつもない衝撃を食らった。どうやらヒロに蹴りを入れらたらしい。健斗はそのまま後ろに倒れこんだ。するとヒロは何事もなさそうに、ゆっくりと立ち上がった。健斗は苦しそうに呼吸をしながら立ち上がった、そこにヒロがよろよろっと近づいてきて、健斗の顔面に目がけて拳を一発入れてきた。健斗はそれをもろに受ける。倒れはしなかったが、それがさらにヒロの攻撃を受けることとなった。健斗にパンチを入れた後、もう一発殴られ、さらに蹴りを食らわされた。倒れこむように後ろにのけ反ったが、健斗は倒れずに踏みとどまった。

「このやろぉっ!!」

怒声が屋上に響き、健斗は思いっきりヒロにパンチを放った。ヒロはそれを食らい、後ろにのけ反る。倒れると思った。

ところがヒロは倒れなかった。一瞬時が止まったように思えた。ヒロは動きを止めて、そして口から鼻から流れる血をぬぐった。ヒロの表情は驚くほどに無表情だった。刹那にターミネーターて出てくるアーノルド・シュワルツネッガーを思い出した。

健斗は肩で大きく呼吸をしながら、ズキンズキンと痛む拳を擦った。

よくみると、手の皮が剥けて、真っ赤だ。骨が軋むような痺れる痛み、きっとヒロも同じ痛みを抱えているはずだった。

しかし、ヒロはスタスタとゆっくり健斗に近づいてきた。そして、ヒロは固く拳を握りしめ、健斗に渾身の一発ともいえるパンチを食らわせてきた。健斗は予想外の出来事に、どうすることもできずそのまま柵の方に倒れこんだ。ヒロの最後の一発が重く、健斗は熱い痛みを感じながらそのまま座り込んでいた。

そんな健斗の様子を見ながら、ヒロは激しく呼吸をしていた。そしてすっと拳を引っ込めた。

「……満足したか？」

「……っ！」

「そのやり場のない気持ちを俺にぶつけて、ちったぁ気が紛れたのか？」

ヒロにそう言われた健斗は何も言い返すことが出来なかった。ヒロの言う通りだった。この行き場のない思いを吐き出したかった。ヒロはそれに気づいていた。

何も言ってないけど、ヒロはほとんどに感づいているのかもしれない。いや、感づいているのだ。

「何があったのかぐらい、ちゃんと話せよ。」

「……話したくない。」

「ふーん……で、また同じことを繰り返すつもりなんだ？お前。」

ヒロにそう言われて、健斗は初めて顔をあげた。ヒロは真剣な眼差しで健斗を見下ろしていた。

「ようやく全部取り戻したばっかなのに、そうやってお前はまた同じことを繰り返して、また全部無くそうとする。」

「……」

「まぁ、お前が関係ないとか言うんなら、俺は無関係なんだろうな。ただ、散々お前に振り回された俺からのお礼だよ。これは。」

そういって、ヒロはくるりと健斗に背を向けた。そして、落ちている眼鏡を広い顔にかけると、スタスタと扉の方に向かっていった。

するとだった。突然扉が開いた。中から入ってきたのは、佐藤と早川だった。二人はヒロと、そして座り込んでいる健斗の姿を見て驚きの声をあげた。

「ちょ、ちょっと二人とも！何してんの？」

傷だらけのヒロと健斗の顔を交互に見ながら、佐藤が叫ぶように言った。ヒロはそんな佐藤と早川に意も介さず、二人の間を黙って歩いて校舎の中へと消えていった。

状況が全く掴めないでいる、佐藤はヒロの後ろ姿を見ながらオロオロとしていた。しかし、早川は真っ先に傷だらけで座り込んでいる健斗の元へ駆けつけた。

「健斗くん！大丈夫？」

早川が話しかけても、健斗は何も言わなかった。早川はスカートのポケットからハンカチを取り出して、付着している血を拭おうとした。それを健斗は抗うことなく、受け入れていた。

ハンカチが傷口に擦れる度、針を刺すような痛みを感じた。

「……喧嘩したの？ヒロくんと。」

「……」

「どうして……こんな……」

早川はそのあと言葉を紡いだ。何も言わずに健斗のことを見つめていた。健斗は俯いたまま、白いコンクリートをじっと見ていた。そこに何かが映っているわけではなかった。

ヒロに言われた言葉が頭の中で反芻していた。

第11話　文化祭　後編　P．6（後書き）

少々、暴力シーンを加えてしまいました。不快に思われた方へ、申し訳ありませんでした。

なんか、こんな風にヒロと健斗が殴りあいをする描写をしたのは初めてかもしれません。自分で書きながら、何だか怖くなりました。

第11話　文化祭　後編　P.7

早川と佐藤の二人に、保健室に連れて行かれようとしたのだが、健斗はそれを拒否した。理由は、保健室に行くことで先生に殴りあいの喧嘩したことを知られて、騒ぎになるのを避けたかったからである。

健斗の言い分を聞いて、佐藤と早川は納得してくれたが、早く冷やさないともっと腫れてしまう。そう言われて、今健斗はグラウンドの水飲み場にいた。佐藤が保健室に行って氷を取ってくるとのことで、その場には健斗と早川の二人だけだった。

「傷、痛む？」

早川に貸してもらったハンカチを冷たい水で濡らして、健斗は押しあてながら小さく笑って頷いた。

「でも大丈夫。これくらい、なんともない。」

「そう……」

早川はそう言うと目を伏せて黙りこんでしまった。健斗もしばらく黙りこんだ。涼しすぎる秋風がさーっと流れるように吹いたとき、健斗が先に口を開いた。

「……どうして、二人とも屋上に来たの？」

健斗がそう聞くと、早川は健斗のことを心配そうに見つめながら言った。

「だって……健斗くんもヒロくんも、そして麗奈ちゃんも。三人とも様子が変だったから。」

「え？」

健斗が聞き返すと、早川は下をうつむきながら続けて言った。

「健斗くんが教室を出ていったあと、麗奈ちゃんも”練習があるのを忘れてた。”って言って、どっか行っちゃったの。いつの間にかヒロくんもいなくなってて、それで屋上にいると思ったら……」

健斗とヒロが傷だらけでそこにいたというわけだ。でも早川はあまり追求してこなかった。おそらく、聞いていいのか分からないのだろう。

「……さっきさ……」

「え？」

「さっき、ヒロに言われたんだ。”また同じことを繰り返すのか？”って……」

健斗にはその意味が分からなかった。でも、ヒロが言ったその言葉に不思議と引っ掛かっていた。早川はそれを聞いてしばらく考えるように黙りこんだ。

「……多分、今日のことを言ったんだと思う。」

「……今日のこと？」

「うん。今日の健斗くん……さっきまでの健斗くんはその……戻ってたような気がした。翔くんが亡くなった後の健斗くんに。」

翔が死んだあとの自分。健斗はそれを聞いて即座にそれを思い出した。あの頃の自分は、誰も寄せ付けたくなかった。近づきたくもなかったし、近づかれるのも嫌だった。周りが空虚に思えて、色の抜けた世界の中で過ごしているようだった。

待てよ？

健斗は自分自身に問いかけた。その感じは今の気持ちと似ている。いや、似ているだけじゃなく本当にそうなのだ。今抱いている心の穴は、あのときと同じだ。

そこで初めて健斗は、ヒロの言った言葉の意味に気がついた。あのときと同じ過ちを、健斗は繰り返そうとしていた。だからヒロはわざと健斗を挑発したのだ。

「……」

「……健斗くん？」

早川に話しかけられて健斗はふと我に戻るように早川を見つめた。

「あぁ、うん。ごめん。もう大丈夫。」

そういって健斗は笑うと、早川はなんとなく安心したのかふっと笑みを溢した。

久しぶりにヒロと殴りあいをしたな、と健斗はそんなことを考えて

いた。小さいときは卒中だったが、中学に上がってからはそんなこともなくなっていた。お互い大人になっていけば行くほど、そんなこともなくなっていくのだ。

今思えばすごく不思議だった。ずっといっしょにいたから、見た目とかそんなに変わったのかといえばよく分からない。ただ、ヒロとの殴り合いがこんなにも懐かしく感じるなんて我ながら可笑しな感覚だった。

健斗はそう思うとまた笑いが込み上げてきて、くくっと可笑しそうに笑った。

「よしっ！」

「え？」

健斗が突然立ち上がると、早川は驚いて健斗を見上げた。

「ちょっとヒロのところまで行ってくる。」

「え！ちょ、え……だって二人ともまだ……」

「いいんだ。なんか無性にあいつをもう一発殴りたくなった。」

健斗はそういうとスタスタと歩き始めた。それを見て早川はオロオロと動揺していた。するとちょうど良いタイミングで佐藤が手に氷の入った袋を持って帰ってきた。健斗がスタスタと歩いていくのを見て、そして動揺している早川を見て佐藤も不思議そうな顔を浮かべた。

「ちょ、健斗どこ行くわけ？」

「な、なんか無性にヒロくんを殴たくなったって……」

「えー！なんで？嘘！早く止めないと！」

すっかり健斗に振り回されている佐藤と早川はとりあえず健斗のことを追いかけるために走っていった。

教室に戻ると、クラスは少し騒然としていた。しかし健斗が入ったとたん、それがピタリと止まった。みんな健斗の顔を見て凝視した。騒然としていた理由は間違いなく自分の席にどんっと座っているヒロにあるみたいだ。

ヒロの近くには寛太がいた。寛太は健斗の顔を見ると驚いたのか目を丸くして、健斗とヒロを交互にみた。そんな寛太を気にせず、健斗はスタスタと歩き、ヒロの席の前に立った。

ヒロの顔も健斗と同じくらい酷かった。ヒロは無表情のまま、健斗を見上げるように見つめた。

「……何だよ、その面。ダッセー。」

「お前も人のこと言えねっつの。俺より酷いぞ。それ。」

お互いにそういって、しばらく見つめ合うともう駄目だった。健斗とヒロは互いに笑いが込み上げられなくなった小学生みたいに盛大に吹き出して笑った。

その異様な様子にクラスのみんなは理解が出来ないでいるみたいだった。そして健斗から遅れて入ってきた佐藤と早川も、楽しそうに笑っている健斗とヒロを見て唖然とした。

「な、何これ……どうなってるわけ？」

「……さぁ……」

佐藤と早川は全く状況が掴めず混乱しているのに、それに全く気づかず子供みたいに笑っている健斗とヒロはまるで、小学生のそれのようだった。

第11話　文化祭　後編　P．8（前書き）

めちゃめちゃ更新遅れてすみませんでした！メッセージまで、もらいました。励ましの言葉、ありがとうございます。これからも、頑張ります！

「まったくもう！無茶ばっかりするんだから！」

佐藤がヒロの傷の手当てをしながら怒った口調でそう言った。ヒロは傷が染みたらしく、「イテッ」と呟いた。健斗の傷の手当ては早川にしてもらっていた。

結局あのあと、二人の強い押しでほとんど無理矢理保健室に連れてこられたわけなのだが、幸いを期して先生はお昼休憩中ということで保健室にいなかった。ということで、先生に許可をもらい二人に傷の手当てをしてもらっているというわけだ。

「ほんっとに、二人ともバカなんだから！このバァカッ！！」

「わ、悪かったって。そんなに怒るなよ。」

「うるさい！バカバカバカ！こっちの気も知らないで、勝手に仲直りしちゃって！」

佐藤の怒りはしばらく治まらないようなので、健斗とヒロは仕方ないと言ったように互いに見合ってため息を吐いた。

「あ、えっと、早川もごめんな。何かすごく迷惑かけちゃって……」

健斗は申し訳なさそうに早川に頭を下げた。すると、早川は優しげな笑みを浮かべて首を横に振った。

「私はいいの。それよりも二人が仲直りして本当によかった。」

「うん。本当にごめん……そんであと、えっと……ありがとう。」

「え？何が？」

早川は何に対してお礼を言われているのか分からないといったようだった。もちろん早川に傷の手当てをしてもらっていることにもお礼を言いたかったのだが、それよりも……

早川がさっきああやって健斗の話し相手を聞いて、そしてあんな風に言ってくれなきゃ分からなかったかもしれない。

また同じ過ちを繰り返すところだった。誰かれ構わず拒絶をして、一人で悪い方向に進んでいくところだった。

あの頃とはもう違う。今は周りの言葉に耳を傾けることができる。あのとき出来なかったのとは違って。

それを言いたかったのだが、どうも照れ臭かった。

「えっと……そのー……このハンカチ。血がついちゃったし、絶対洗って返すよ。」

「え？あ、いいよ。気にしないもん。」

「いや、俺がそうしたいから。洗って返す。」

健斗がそう言い張ると早川は微笑みながら頷いてくれた。

「あーハイハイ。イチャイチャしちゃって。この浮気性！」

佐藤にそう言われて健斗は顔を赤くした。

「なっ！別にしてねーよ！つーか浮気とかなんだし！」

「浮気性ったら浮気性！！」

そんな理不尽な……

「なんだよ佐藤。俺たちだってイチャイチャしてんじゃーん。ほらイチャイチャーー」

「あんたは調子に乗るな！！」

なんとすかさず佐藤はヒロにアッパーカットを食らわせた。とても気持ちのよい音が響く。

「イッテェェェっ！！てめぇ！怪我人になんてことを！！」

「あぁん！？」

「なんてことをーーしてるんですか？すみません……調子に乗りました。」

「おぉ……ヒロがすぐに食い下がった。」

どうやら今の佐藤には冗談も通じないらしい。しかし、これでは治療しているのか怪我させているのか分からない。

「で、一体どうしたわけ？今日の健斗さっきまでずっと変だったし。

それに麗奈ちゃんも……何だか様子が変だったし。」

「あ、もしかして……麗奈ちゃんと喧嘩したとか？

早川の言葉に健斗は図星を突かれたような思いになった。

「……まぁ、平たく言えば……そうなんだけど……」

「やっぱりね。そんなことだろうと思った。本当に、何回喧嘩すれば気が済むのよ？」

佐藤が言うように、この三人にとって健斗と麗奈の喧嘩を幾度と見てきたため、そんなことは日常の一部のように捉えていた。だから、佐藤もこんな反応をするんだろうと健斗は分かっていた。

しかし、健斗が困ったように真剣な表情で俯いているのを見た早川はじっとそれを見つめてから言った。

「マナ、最後まで話を聞いてみよう？なんだか、今回はいつもとは違うみたいだし。」

早川の言葉を聞いて、さっきまで呆れ顔でいた佐藤の表情も強ばってくる。その方が健斗的にもありがたかった。

「話を、聞かせてもらえる？」

早川が気をつかった言い方で、健斗に慎重に尋ねてきた。健斗が顔を上げると、早川は優しい微笑みで健斗を見つめていた。

それを見ると健斗の心の中に不思議な安堵感が沸いてきた。話した

い。次第にそう思ってきた。それは、今まで感じることない気持ち。

友達に頼りたい。そう、そういう素直な気持ちだった。

第11話　文化祭　後編　P.9

練習というのは、当然嘘だ。あの場から逃れるためについた、麗奈の口から溢れた出任せに過ぎなかった。

二人には悪いことをしたという自覚はあったが、それでも麗奈は一人になりたかった。健斗のあんな表情を見ると、胸が痛くなった。

一人になれる場所、屋上は恐らく健斗が向かっただろうから、麗奈は音楽室に向かった。ここなら、誰も来ない。少なくとも昼休みの間は。

麗奈は音楽室の窓から見える景色を眺めていた。健斗と口を聞かなくなって数日。募る思いはやがて消える。そう思っていたのに、それはむしろ逆でいっこうに消えない。

でも、これでよかったんだって自分に言い聞かせるしかない。俗に言えば正当化。自分は正しい。健斗はもう、麗奈のことを嫌いになったはず。自分のことなんか気にしないで、そう……これからは結衣といっしょに。

健斗に向かって、随分酷いことを言ってしまった。あんなことまで言うつもりはなかったのだが、感情が高ぶってしまったのだ。それは言い訳に過ぎないのかもしれないけど……

ごめんね。

ほっといてなんて嘘だよ。関わるななんて嘘だよ。でも……健斗は自分のことを知らないのは本当。健斗のいう「いつもの麗奈」とい

うのは、本当の自分なんかじゃない。だから、それが少し許せなかった。でも、知らないのは仕方ない。言ってもないし、それは自分でも分からないのだ。本当の自分なんて……

今の自分に、嘘をついているつもりはない。繕っているつもりはないけど……それが自分に言い聞かせているようで自分が嫌になってしまうのだ。あの頃の自分が本当の自分なのか、それとも今の自分が本当の自分なのか。自分が知らないのに、そんなの言えるわけない。言えるわけ……

麗奈は窓から離れてピアノに触れた。トンと押すとピアノの音が音楽室に響いた。昔の家で、夏奈がまだ生きていた頃、幼いころの自分にたくさんピアノを教えてもらった。それは今でも残ってるよ。

物語や歌の台詞に出てくるような「過去が息づく」とはこのことなのだろうか?だとしたら、良い過去だけ残ってくれたら。今、息づいている過去は「亡霊」。過去の亡霊と呼ぶのがふさわしい。

私は何を言っているんだろう。軽く自嘲気味で心のなかで呟く。ピアノで夏奈に教えてもらったメロディーを弾きながら、それを麗奈は聞きながら静かに目を閉じた

健斗は三人に麗奈との間に起こった出来事を話した。三人とも、今

までとは違う何かを感じ取ったのだろうか、真剣な表情で健斗の話を黙って聞いてくれた。

「私たちと別れた後に、そんなことがあったんだね……」

考えてみれば、あの日は早川と寛太ともいっしょに帰っていたのだ。そして、二人と別れたあとあんなことになってしまった。

「私と話していたときは、いつもとそんなに変わらなかったけど……」

そういえば、あのときは早川と寛太もいっしょに帰ってたんだということを健斗は今更ぬがら思い出した。早川と話しているときの麗奈が普通の麗奈だったことは知っている。健斗の知っているいつもの麗奈だ。

健斗はそれを聞くとやはり原因は自分にあるんだということを再確認した。

麗奈は間違いなく自分に怒っている。多分それの理由は……

「麗奈がそんときに言ったんだよ。俺は、麗奈のことなんか何も知らないって。だから自分の気持ちを分かったように決めつけるなって。」

健斗の言葉をひとつひとつ聞くために、三人は黙りこんだ。

「別にさ……そんなつもりはないんだ。俺は……でも麗奈は……」

「一つ思ったんだけどさ。」

健斗がいいかけてたときに佐藤が口を挟んできた。健斗は顔を上げて佐藤を見た。すると佐藤は真剣な顔をして健斗を、いや三人を見ていた。

「友達のすべて、何もかも知ってないと駄目なのかな?」

「え?」

「ほら、人にはさ言いたくないこととか、知られたくない過去のこととかきっとあるでしょ?それを全部知った上でないと人に何か言わないといけないのかな?」

「それは……」

「そんなんだったら。私だって麗奈ちゃんのことなんかほとんど知らない。結衣のことだって。ヒロのことだって……でもね、私は麗奈ちゃん含むこの五人が”仲間”だって言える。」

仲間……健斗の胸に重く響いた。

「あたしはこの五人が本当の仲間って思ってる。今のみんなが大好きだし、今のままでいいって思ってる。大事なのは過去じゃなくって、今……じゃないのかな?」

佐藤の言葉は正しいと思った。生きていけば、誰にも失敗があるし、それを糧とすればいいだけの話だ。わざわざ人に言うことでもない。それを知らなければならない理由がどこにあるのだろう。

佐藤が言うと、ヒロが口元で笑って見せた。

「お前の割には良いこと言ったな。」

ヒロがそう言うと、早川も笑って頷いた。健斗も笑って頷いた。そうだ。佐藤のいう通り、昔のことなんかどうだっていい。健斗にだって、知られたくないことなんて山ほどある。自分が嫌で嫌でたまらなくなったことだってある。

でも、それはもう昔のことであって今ではもうちがう。健斗もこの四人が最も信頼のおける中で、それは仲間と呼べる。辛いときや苦しいとき、いつだって助けてくれた。支えてくれたこの四人が、今の四人が大好きだ。

「うん。ありがとう。」

健斗が小さく笑ってそう言ったそのときだった。昼休みが終わるチャイムが鳴った。それを聞いた早川が慌て出す。

「大変！次の授業が始まっちゃう！早く行かなきゃ！」

「えー？別にいいんじゃない？次の授業って退屈じゃーん。」

「そういう理由でサボろうとしないの！早く行こっ！」

「はーい……」

早川が急ぐ中、佐藤は渋々と嫌そうにしながら早川の後に保健室から出ていこうとする。もちろん健斗とヒロも同じように教室に戻るために保健室をあとにしようと立ち上がった。

しかし、その前にヒロが振り返って健斗を見た。

「佐藤の言うとおりだからな、健斗。」

「え、あ、うん。」

「なら、それを麗奈ちゃんに伝えるんだ。」

「え、麗奈に？」

「俺がお前の話を聞いて思ったことは、やっぱ麗奈ちゃんの言ってた”あのこと”だと思うんだ。」

「あのこと……」

ヒロの言いたいことが分かった。あのこととは……麗奈が言っていた中学のときの嫌な経験。

「麗奈ちゃんは多分、そのことを今でもずっと引きずってんだ。何があったのかは知らないけど、麗奈ちゃんにとっては相当なことなんだとおもう。でも、それに捕らわれてる麗奈ちゃんの目をお前が覚ますんだよ。つーか、お前以外に覚ますことができるやつなんていないと思う。」

「……うん。」

健斗とヒロがそう話していると、保健室のドアが開いて外から早川の顔が出てきた。

「二人とも。早く行こう？」

「あ、オッケー。行くぞ。」

「……おう。」

とりあえず、次の授業に出るために健斗たちは保健室をあとにした。

第１１話　文化祭　後編　Ｐ．１０

我が１年Ａ組の今年の出し物がミュージカルに決まっていること。５時間目を使って、文化祭に関わることを議題にして今日も話し合いが進められていた。麗奈のこともあるけれど、健斗はみんなから任された委員会だ。ちゃんと仕事をしないといけない。

「ということで、ミュージカルの台本が出来ました。これから各自に配るので、みんな目を通してください。」

早川がそういうとテキパキと要領よく各列に配っていく。台本を渡された者はすかさずページをめくり、その内容に目を通していく。

「はい。これ、健斗くんの分。」

早川が笑って健斗に台本を手渡してきた。

「あぁ。サンキュー。」

健斗もそれを受け取ってすかさず内容を確認しようとしたが、まずその表紙とタイトルに目を奪われた。和服を着た綺麗な女性と、和服を着たイケメン男が背を向けて互いが気になっているそぶりを見せている絵。絵のクオリティは中々のもの……もちろん、二次元的な意味でだ。健斗はそれを見ると、ゆっくりとその内容を見た。

時代は江戸時代の町、それはそれは美しいと評判だった娘がいた。
ある日、娘が買い物にでかけているとある男とぶつかってしまう。
その男は、城下町をおさめる若き殿だった。すると若き殿はその娘に一目ぼれし、求婚する。しかし、娘には想いを寄せる幼馴染がいて・・・

な、何だか見たことあるぞ？こういうの……

健斗は心の中でそう思った。というか、ミュージカルなのに時代は江戸？日本が舞台なのだろうか……

これは……どうなんだろうか。

う～～～ん……

「……あ、あの！」

その中、一人の女の子が立ち上がった。彼女の名前は、日村安子（ひむらやすこ）。三編みで眼鏡で、鼻の辺りにそばかすがある。A組の唯一の演劇部で、この台本を書き下ろした張本人だ。

日村は立ち上がって、申し訳なさそうにおろおろとしている。

「あ、あの……ごめんなさい、私……こういうの書いたことなくって……その、ミュージカルって普通は洋風だけど、あえてオリジナルっぽく和風にしたいなって……で、やっぱ恋愛物がいいのかなっ

て思って……あ、あああ明日までに書き直してきます！」

顔を真っ赤にしてそう言った。何だか見てて可哀想である。せっかく頑張って書いてきてくれたのに、これではあんまりだ。確かに、正直言うと健斗は気乗りしない。こういうのは苦手だ。でも、せっかく考えてきてくれた努力を無駄にはしたくない。

なんとかせねば……

健斗がそういきり立ったときだった。

「え？私は好きだよ。このお話し。」

「へ？」

健斗があっけにとられたその先に、そういってきたのは佐藤だった。顔を真っ赤にして立ちすくんでいる日村を見ながらそういった。健斗は突然の言葉にただただ驚いた。

「素敵じゃない？これ。ラブロマンスって感じだし♪時代背景が江戸時代っていうのもいいわよねー。」

「お前が言うと、全部うそに聞こえるぞ……」

ヒロがぼそっと言ったのを、佐藤が聞き逃すはずがなかった。瞬時にヒロの方を見て、獣のような表情でヒロをにらみつけた。ヒロはその視線を感じ取って、顔を台本で隠した。

「うん。私も好き。なんかキュンってくるっていうかー」

「私も！」

「女の子可愛い！」

どうやら女の子からはかなり好評のようだ。隣にいる早川だって、目を輝かせて内容を読み込んでいる。健斗はもう一度内容を読み込んだ。これがそんなにいいのだろうか……女の子の感性というのはよくわからない。一方男子の方は、健斗と同じような顔をしていた。つまり、別に反対というわけではないのだが、なんだかやりにくそうな感じの表情をしていた。

「で……配役はどうすんのー？」

クラスの男子が健斗たちに向かって言ってきた。もちろん、今日はそれを決めるために台本をみんなに配ったのだ。

「えっと、とりあえず主役を決めたいと思うんですけど……」

「主役って、このヒロインの女の子のこと？」

「うん。そっから殿様の役、幼馴染の役。んで、エクセトラとかも。あと、裏方も決めないと。」

「ということで、まずはこのヒロインの女の子から決めたいんですけど……立候補、もしくは推薦はありますか？」

早川が台本を持ちながら、みんなに問いかけた。しかし、さすがに立候補をする人はいない。というか、いたらその人はすごい度胸だと思う。健斗はそんな中、ある女子を見るのだが……

「え、ヒロインの女の子は麗奈ちゃんか早川じゃないの？」

一人のクラスの男子がそういった。健斗はそれを聞いて、麗奈の方を見た。麗奈は自分の名前が出てことに驚いているようで、目を丸くしていた。そして隣にいる早川も同じような表情をしている。二人とも、まさか自分が指名されるとは思っていなかったらしい。健斗も、妥当な役としてはこの二人だろうと思っていた。ほかの女子には申し訳ないけど……

「そうだよ！ヒロインは、大森さんだろ？なんたって発案者なんだから。」

「ふえ？」

「いやー？和服だったら早川の方が似合うだろ。絶対早川だよ！」

「あ、あの……」

「いや、大森だ！」

「早川だろ！」

「お前どうせ裏方に回るから関係ねーだろ！？」

「麗奈ちゃんがヒロインやるなら、俺は絶対幼馴染役やるし！」

「お前じゃ無理無理。釣り合わないし、せっかくのミュージカルが台無しになる。」

「なんだと！？」

「なんだよ！！」

ただヒロイン役を決めるだけだったはずなのに、なんでこんなにヒートアップしているのだろう。完全にヒロイン役において、（男子内で）麗奈派と早川派で別れて口論になり始めた。その中、女子たちは退屈そうな顔をしてたりあきれた顔をしている。麗奈もそうだが、隣の早川もどうすればいいのかおろおろしている。こんなときは、委員会である自分がこの場を納めなければならない。

「ちょっとお前ら、いい加減に――」

「いい加減にしろ！お前らぁぁぁぁ！！」

教室内に突然ものすごい怒声が響いた。その迫力に押され、男子どもはピタリと口論をやめその怒声のした方を見た。健斗も突然の出来事に驚いて、そっちを見た。怒声を発したのは、やはりあの男だ。今までおとなしくしていると思ったら、なんなんだ突然。

「麗奈ちゃんがいいだの、早川がいいだの。子供か、お前ら！見ろ、二人が困っているだろ！」

「なんだよヒロ！お前はどっちなんだよ？」

「つーか、ハゲのくせにでしゃばるなよ。」

「まぁ、待て。そしてハゲは関係ない。いいか、お前ら。俺の話を聞け。健斗、この場はこの俺に納めさせろ。」

「お、おう。」

普段と違う雰囲気をただ寄せたヒロは絶対的な自信を持って、この場を納めて見せると言った。なら、それに託してみるのも悪くない。健斗はそう思って、ヒロにここは任せることにした。すると、ヒロはゆっくりと興奮がまだ収まっていない男子を一瞥した。

「麗奈ちゃん派、早川派それぞれ思うことがあるだろう。まずは、早川派のやつら！麗奈ちゃんを見ろ！見るんだ！いいか、あのすばらしく洗練されたパーフェクトスタイル。そして、キュート過ぎるフェェェェイス。あんなどこをとっても素晴らしいの一言に尽きる子の着物姿を想像してみろ？二秒でだ！どうだ、見えてきたか？あの長くて美しい栗色の髪を束ね、うなじを見せつけるチラリズム。どこにどう問題があるのか言ってみろぉぉぉ！」

「う……そ、それは……」

「そして麗奈ちゃん派のやつら！早川を見ろ！見るんだ！いいか、まずお前らに言いたいのは発案者かどうかなんて関係ない！美しさに優先されるものは美しさだけなのだ！そんなちんけなことで左右されているお前らは、虫以下だ！恥をしれ、この愚か者ぉぉ！！そしてお前らも、同じように早川の着物姿を想像しろ！同じく、二秒でだ。……どうだ、見えてきたか？あのショートヘアーの美しい黒髪が映える着物姿はどうだ？そして、テニス部による運動で日々洗練された脚線美が、昔の女の人の足を見せることに対する羞恥心を考慮したデザインの和服によって隠されていることは少々残念だが……しかし、それだからこそ見えるまたもやチラリズムに近い足元を見ろ。あの美しい足と質素な草履のタッグマッチはもはや神の領域に達している。いうなれば、和服は彼女のために生み出されたといっても過言ではない！違うかぁぁ！？」

「う……た、確かに……」

な、なんなんだこの固有結界は……だが、そのヒロが生み出す固有結界によってクラス中の男子が圧倒されているのは本当だ。というか、ヒロのやつ場を納めるってこういうことを言うためだったのか？何か違うような……

すると、早川派に分かれていた男子も、麗奈派に分かれていた男子の熱気も徐々に冷めていき、苦しそうにがっくり肩を落とし始めた。

「う、ううう……分かっているんだ。どちらかを選ぶことなんてできるわけがない……」

「お、おれたちはいったいどうすればいいんだぁぁ～！！」

「わかるぞ、お前らの苦悩。お前らの言うとおり、どちらかを選ぶことなんてできるわけがない。こんな究極の選択を迫るあの鬼のような委員がすべて悪いのだ。」

「お、俺が悪いのかよ？」

「そんなお前たちに、俺がもう一つの選択肢を与えよう。」

「そ、それはなんなんだ？」

クラス中がヒロの方向を見る。ヒロは慈愛に満ちた目でクラスのみんなを見渡す。

「麗奈ちゃん、早川……二人が、ヒロインになればいいだけの話さ。」

「お、おお……おお！！」

「つまり、麗奈ちゃんも早川もどっちもヒロインをやり、幼馴染との三角関係を描く。そうなれば、どちらかを選ぶことなんてしなくていい。そう、簡単なことだったんだ！！」

ヒロの思いがけぬ提案に、クラス中の男子が歓声をあげた。

「そうだ！簡単なことだ！二人がヒロインやればいいんだ！」

「俺たちは間違っていた。俺たちのような人間が、選択をする時点でおこがましい行いだったんだ！」

「ヒロ！お前は天才だ！ハゲでも天才だ！」

「はっはっはっはっは！そうだろう、そうだろう。もっとほめたたえるがよい。はっはっはっはっは♪」

クラスの男子からもてはやされているヒロは陶酔しきった顔で、笑っていた。だが、ずっと我慢し続けていた健斗の堪忍袋の緒がとうとう限界に来た。

「ち・が・う……だろーがぁぁぁ！！」

「ぶはぁ！？」

そろそろ我慢の限界が来た健斗が黒板消しをヒロにむけて思いっきり投げつけた。見事黒板消しはヒロの額を直撃した。高笑いしているヒロは不意を突かれ、その場にどたんと倒れた。

「それじゃぁ、台本の内容が変わるだろ！ヒロインは一人だ！二人なんて、俺が絶対にゆるさーん！！」

「じゃ、じゃあどうやって決めるんだよ。俺たちにはもうどちらかを選ぶことなんて……できないよ。」

みんなにそう迫られて、健斗は言葉が出ずに黙り込んだ。確かに、ここまでくればもうどちらかを選ぶことなんてできないだろう。投票を行うのが無難だろうが、おそらく半々に分かれてらちが明かないし、負けた方がなんだか可哀想だ。健斗がどうすればいいのか考えているところだった。

「あ、あのね、健斗くん。」

健斗のちょっと後ろから早川が口を開いた。早川は困ったように笑っていた。

「みんなの気持ちはすごくうれしいんだけど……私たち委員は仕事がいっぱいあるから、裏方にしか回れないの。」

「え、そうなの？」

「うん。だから、ヒロイン役は麗奈ちゃんがいいと思うの。麗奈ちゃんも、いいよね？」

「え？わ、私？私はその……そういうの自信ないよ……」

「大丈夫。麗奈ちゃんならきっとできる。ね、みんなもそれでいいよね？」

早川がみんなに問いかけると、みんなは全く不満なさそうな顔をしてうなずいた。これは満開一致ってやつだ。

「じゃあ、ヒロイン役は麗奈ちゃんってことで。みんな、拍手～！」

早川の声で、みんなが大きな拍手をした。クラス中、麗奈に向けられた拍手が飛び交っていた。麗奈はかなり困ったような顔をしていたが、とても断れるような空気ではないことを察知し、渋々ヒロイン役を引き受けることにした。健斗はそれを見ながら、心のどこかでほっとしていた。何にほっとしているんだろう？無事にヒロイン役が決まったこと？

違う。俺は、麗奈に……ヒロイン役をやってほしいと思っていたんだ。

そんな風に思いながら、困ったように笑っている麗奈を見つめていた。

第１１話　文化祭　後編　Ｐ．１０（後書き）

しばらくシリアスな感じが続いたので、ここでちょっと穏やかな場面を描きました。それにしても、ヒロの固有結界のセリフを考えるのが大変でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0129j/

グッラブ! 3

2012年1月13日02時54分発行